

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第350集

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

今井三騎堂遺跡

今井見切塚遺跡

—縄文時代編—

第1分冊(本文編)

2005

群馬県企業局

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第350集

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

今井三騎堂遺跡 今井見切塚遺跡

—縄文時代編—

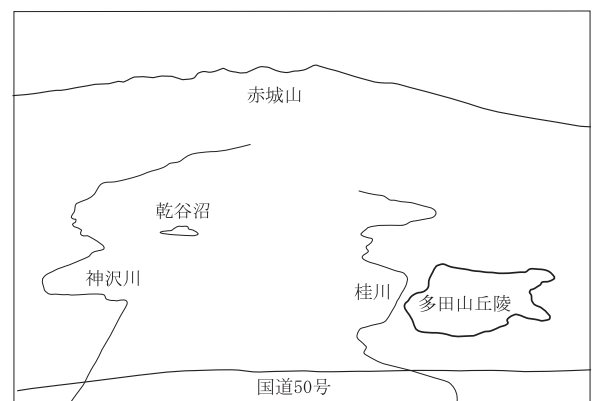
第1分冊(本文編)

2005

群 馬 県 企 業 局
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

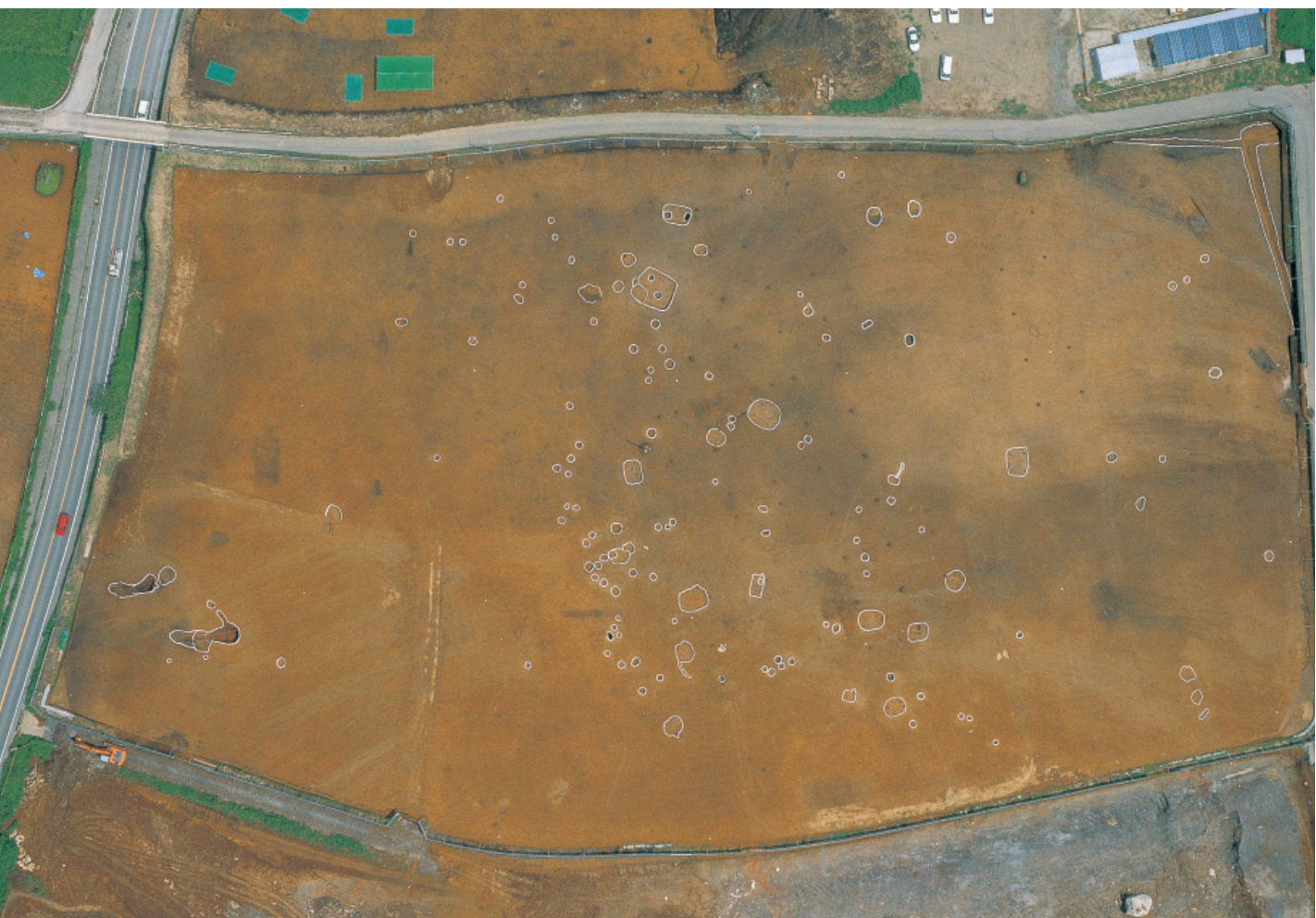


赤城山南麓と多田山丘陵





多田山丘陵と周辺の景観



今井見切塚遺跡 1 区の遺構分布



今井見切塚遺跡 92 号土坑



今井見切塚遺跡 95 号土坑



M92 坑 -1



M95 坑 -1



M92 坑 -1 展開写真



M95 坑 -1 展開写真

序

多田山遺跡群に属する今井三騎道遺跡・今井見切塚遺跡は、群馬県企業局による「多田山丘陵開発事業」に先立って当事業団により発掘調査されました。調査は平成9年度から13年度にかけて実施され、旧石器時代から江戸時代に至る遺跡が累々と重なり、おびただしい量の遺構・遺物が発見されました。その結果、当遺跡が歴史上極めて重要なものであることが明らかになりました。

本報告書ではそのうちの縄文時代に関わる資料を対象としたものです。その中核部分をなしているのは、縄文時代草創期後半と前期の時期です。前者では撚糸文が特徴的な土器群を伴う竪穴住居群、後者ではその前半期に属する花積下層式土器を伴う竪穴住居群が極めて注目される資料です。当地域では当該時期のまとまった集落資料の存在がこれまでほとんど知られていなかったからです。本遺跡の調査と報告書の刊行により、当地域の縄文時代の特性を解明していく上で欠かすことのできない重要資料になっていくものと確信しております。

発掘調査から報告書作成に至るまで、群馬県企業局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、赤堀町教育委員会、並びに地元関係者の方々には、多大な御指導、御協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝申し上げるとともに、発掘調査・整理に携わった担当者・作業員・整理補助員等の方々の労をねぎらい序とします。

平成17年3月25日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

1. 本書は多田山住宅団地造成事業に伴う今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であり、縄文時代の遺構・遺物について扱っている。

2. 各遺跡の所在地は下記の通りである。

今井三騎堂遺跡 群馬県前橋市東大室町 2,895 番地・他、佐波郡赤堀町今井 651 番地・他

今井見切塚遺跡 群馬県前橋市東大室町 1,660 番地・他、佐波郡赤堀町今井 363 番地・他

3. 事業主体 群馬県企業局、群馬県土木部

4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 発掘調査事業の体制及び期間は下記の通りである。

期 間 平成 9 年 9 月 24 日～平成 14 年 3 月 31 日

調査担当 石坂 茂、斉藤和之、井上哲男、坂口 一、大西雅広、関口博幸、松島久仁治、須田正久、深沢敦仁、諏訪 晶、津島秀章、田村 博、佐藤理重、田中 雄、小保方香里、土谷慎二、原 眞

6. 整理事業に関しては、遺物の接合・復元・実測・分類・図版作成などの諸作業について、群馬・埼玉両県教育委員会が取り交わした「埋蔵文化財保護の協力に関する協定書」に基づき、(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託した。また、これ以外の本書作成に関わる編集・執筆などの諸作業については、当事業団が実施した。これら事業の体制及び期間は下記の通りである。

(1) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団への委託事業

事業名称 「平成 14 年度埋蔵文化財資料整理業務委託」

期 間 平成 14 年 4 月 1 日～平成 15 年 3 月 31 日、

整理担当 金子直行、上野真由美

(2) 当事業団

期 間 平成 15 年 4 月 1 日～平成 16 年 11 月 30 日、

整理担当 石坂 茂

事務局 <平成 15 年度> 小野宇三郎、住谷永市、神保侑史、萩原利通、右島和夫、植原恒夫、相京健史、高橋房雄、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、阿久沢玄洋、田中賢一、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂

<平成 16 年度> 小野宇三郎、住谷永市、神保侑史、矢崎俊夫、右島和夫、丸岡道雄、相京健史、高橋房雄、竹内 宏、須田朋子、吉田有光、阿久沢玄洋、栗原幸代、佐藤聖行、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂

7. 本書の作成に関わる作業分担は下記の通りである。

編 集 石坂 茂

本文執筆 石坂 茂

レイアウト 五十嵐由美子、横坂英実、馬場信子、池田和子

遺構写真 上記調査担当者

図版作成 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遺物の分類 埼玉県埋蔵文化財調査事業団（金子直行、上野真由美、大屋道則）
と写真撮影

8. 石器石材、炭化材、火山灰などの分析・同定については、以下の個人や会社に依頼した。

石器の石材同定 飯島静男（群馬県地質研究会）

黒曜石の産地同定 株式会社 第四紀地質研究所

炭化材・種実同定 株式会社 パレオ・ラボ
とC 14年代測定

火山灰同定 株式会社 古環境研究所

9. 当遺跡の記録保存資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財センターに保管されている。

10. 本書の作成にあたり、下記の諸氏・団体より御助言・ご協力を戴いた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称は省略させて戴いた。五十音順。）

川道 亨、大工原 豊、松村永子、赤堀町教育委員会

凡 例

1. 挿図および付図の方位記号は国家座標上（旧座標第9系）の北を基準としている。尚、今井三騎堂・見切塚遺跡における磁北および真北との偏差は以下の通りである。

磁北との偏差 西編 7度0分




真北との偏差 東編 0度22分13秒

2. 両遺跡の調査範囲全域に4 m×4 mのグリッド網を設定し、各グリッドの呼称は南西隅の交点を当てた。尚、基点となる今井見切塚遺跡南西のAA-01グリッドの座標値は、旧座標ではX = 41.82 km、Y = -56.38 km、新座標ではX = 42.175 km、Y = -56.772 kmである。




3. 本文中における各竪穴住居と掘立柱建物の方位については、長軸線の方位を採用した。

4. 遺構および遺物実測図中の縮尺は、各図中に表示してある。遺物の場合、表示された縮尺と異なるものについては、遺物番号の後尾に（）でその縮尺を表示した。また、遺構断面図の基準線標高値については、各図内にL = ○○. ○○mと表示した。土器断面実測図中の▲は接合痕を、●は繊維含有を表す。

5. 各遺構の平・断面図中のスクリントーンは、以下の内容を表示している。

 叩き床状の硬化面  炉・焼土痕  樹木根・小動物の攪乱

6. 遺物図中に使用したスクリントーンは、以下の内容を表示している。

 磨り面・摩耗面  石材の節理面  方向性のある使用痕

7. 竪穴住居内から出土した遺物のうち、その住居には伴出し得ない明確に時期の異なるものについては、遺物包含層や遺構外からの出土遺物として一括した。

8. 土器および石器の諸属性に関わる分類基準については、別巻の遺物観察一覧の冒頭に記載してある。

目 次

序

例 言

凡 例

抄 録

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査の経緯と経過 1
2. 遺跡の位置と地形 1
3. 遺跡の基本土層 3
4. 周辺の遺跡 4
5. 調査の方法 9

II 今井三騎堂遺跡の調査

1. 遺跡の概要 11
2. 竪穴住居 11
3. 土 坑 184
4. 陥 穴 252
5. 集石土坑 260
6. 屋外埋設土器 262
7. 倒木痕 263
8. 包含層の出土遺物 273
 - (1) 出土状況 273
 - (2) 出土土器の内容 284
 - (3) 出土石器の内容 318

III 今井見切塚遺跡の調査

1. 遺跡の内容 348
2. 竪穴住居 348
3. 掘立柱建物 477
4. 土 坑 486
5. 陥 穴 552
6. 集石土坑 556
7. 屋外埋設土器 558
8. 倒木痕 559

9. 包含層の出土遺物 565
 - (1) 出土状況 565
 - (2) 出土土器の内容 565
 - (3) 出土石器の内容 578
10. A地点の遺構と遺物 664
 - (1) 竪穴住居 664
 - (2) 土 坑 684
 - (3) 包含層の出土遺物 688

IV 科学的分析

1. 今井見切塚・三騎堂遺跡出土黒曜石の化学分析 691
2. 今井見切塚遺跡から出土した炭化種実 702
3. 今井三騎堂・見切塚遺跡の炭化材樹種同定 704
4. 炭化材と炭化子葉の放射性炭素年代測定 707

V 成果と問題点

1. 集落とその変遷 709
2. 出土遺物について 737

付 図

- 1-1 今井見切塚遺跡の遺構分布
- 1-2 今井三騎堂遺跡の遺構分布
- 2-1 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡の遺構分布 (草創期後半・早期)
- 2-2 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡の遺構分布 (前期・中期)

挿図目次

【今井三騎堂遺跡】

第1図	遺跡の位置……………	2	第42図	20号住居出土遺物……………	61	第85図	46号住居……………	120
第2図	各地点の柱状土層……………	3	第43図	21号住居と出土遺物……………	62	第86図	46号住居出土遺物……………	121
第3図	周辺の遺跡分布……………	5	第44図	22号住居と出土遺物……………	64	第87図	47号住居……………	123
第4図	時期別の遺跡分布……………	6	第45図	23号住居と出土遺物……………	66	第88図	47号住居出土遺物……………	124
第5図	範囲と調査区……………	10	第46図	24号住居と出土遺物……………	67	第89図	48号住居(1)……………	125
第6図	今井三騎堂遺跡の竪穴住居の 分布……………	12	第47図	25号住居と出土遺物……………	68	第90図	48号住居(2)……………	126
第7図	1号住居と出土遺物……………	14	第48図	26号住居と出土遺物……………	70	第91図	48号住居出土遺物……………	127
第8図	2号住居と出土遺物……………	16	第49図	27号住居と出土遺物……………	71	第92図	49号住居と出土遺物……………	129
第9図	3号住居と出土遺物……………	18	第50図	28号住居と出土遺物……………	72	第93図	50号住居(1)……………	131
第10図	4号住居と出土遺物……………	19	第51図	29号住居……………	73	第94図	50号住居(2)……………	132
第11図	5号住居と出土遺物……………	21	第52図	29号住居出土遺物……………	74	第95図	51号住居……………	133
第12図	6号住居と出土遺物……………	23	第53図	30号住居と出土遺物……………	76	第96図	51号住居出土遺物……………	134
第13図	7号住居……………	24	第54図	31号住居と出土遺物……………	78	第97図	52号住居(1)……………	136
第14図	7号住居出土遺物……………	25	第55図	32号住居と出土遺物……………	79	第98図	52号住居(2)……………	137
第15図	8号住居と出土遺物……………	27	第56図	33号住居と出土遺物……………	81	第99図	52号住居出土遺物(1)……………	138
第16図	9号住居……………	28	第57図	33号住居出土遺物……………	82	第100図	52号住居出土遺物(2)……………	139
第17図	9号住居出土遺物……………	29	第58図	34号住居と出土遺物……………	84	第101図	52号住居出土遺物(3)……………	140
第18図	10号住居……………	31	第59図	35号住居……………	86	第102図	53号住居(1)……………	142
第19図	10号住居出土遺物(1)……………	32	第60図	35号住居出土遺物(1)……………	87	第103図	53号住居出土遺物(1)……………	143
第20図	10号住居出土遺物(2)……………	33	第61図	35号住居出土遺物(2)……………	88	第104図	53号住居出土遺物(2)……………	144
第21図	11号住居……………	35	第62図	36号住居……………	90	第105図	53号住居(2)……………	145
第22図	11号住居出土遺物……………	36	第63図	37号住居……………	92	第106図	54号住居と出土遺物……………	147
第23図	12号住居……………	37	第64図	36・37号住居出土遺物(1)……………	93	第107図	55号住居と出土遺物……………	148
第24図	12号住居出土遺物(1)……………	38	第65図	36・37号住居出土遺物(2)……………	94	第108図	56号住居……………	150
第25図	12号住居出土遺物(2)……………	39	第66図	38号住居……………	96	第109図	56号住居出土遺物(1)……………	151
第26図	13号住居と出土遺物……………	41	第67図	38号住居出土遺物……………	97	第110図	56号住居出土遺物(2)……………	152
第27図	14号住居……………	43	第68図	39号住居と出土遺物……………	99	第111図	57号住居……………	153
第28図	14号住居出土遺物……………	44	第69図	40号住居……………	100	第112図	57号住居出土遺物(1)……………	154
第29図	15号住居……………	46	第70図	40号住居出土遺物……………	101	第113図	57号住居出土遺物(2)……………	155
第30図	15号住居出土遺物(1)……………	47	第71図	41号住居……………	103	第114図	58号住居(1)……………	158
第31図	15号住居出土遺物(2)……………	48	第72図	41号住居出土遺物(1)……………	104	第115図	58号住居(2)……………	159
第32図	15号住居出土遺物(3)……………	49	第73図	41号住居出土遺物(2)……………	105	第116図	58号住居出土遺物(1)……………	160
第33図	16号住居……………	51	第74図	42号住居……………	106	第117図	58号住居出土遺物(2)……………	161
第34図	16号住居出土遺物(1)……………	52	第75図	42号住居出土遺物……………	107	第118図	58号住居出土遺物(3)……………	162
第35図	16号住居出土遺物(2)……………	53	第76図	43号住居……………	109	第119図	58号住居出土遺物(4)……………	163
第36図	17号住居……………	54	第77図	43号住居出土遺物(1)……………	110	第120図	59号住居(1)……………	164
第37図	17号住居出土遺物(1)……………	55	第78図	43号住居出土遺物(2)……………	111	第121図	59号住居(2)……………	165
第38図	17号住居出土遺物(2)……………	56	第79図	44号住居(1)……………	113	第122図	59号住居出土遺物(1)……………	167
第39図	18号住居と出土遺物……………	57	第80図	44号住居(2)……………	114	第123図	59号住居出土遺物(2)……………	168
第40図	19号住居と出土遺物……………	58	第81図	44号住居出土遺物(1)……………	115	第124図	59号住居出土遺物(3)……………	169
第41図	20号住居……………	60	第82図	44号住居出土遺物(2)……………	116	第125図	60号住居と出土遺物……………	170
			第83図	45号住居……………	117	第126図	61号住居(1)……………	173
			第84図	45号住居出土遺物……………	118	第127図	61号住居(2)……………	174

第128図	61号住居出土遺物……………	175	土坑……………	229	第201図	4区・5区の倒木痕……………	268	
第129図	62号住居……………	176	第166図	117号土坑～131号土坑…	230	第202図	5区の倒木痕……………	269
第130図	62号住居出土遺物……………	177	第167図	132号土坑～147号土坑…	231	第203図	5区の倒木痕……………	270
第131図	63号住居……………	179	第168図	148号土坑～163号土坑…	232	第204図	5区・6区の倒木痕……………	271
第132図	63号住居出土遺物……………	180	第169図	164号土坑～179号土坑…	233	第205図	6区の倒木痕……………	272
第133図	64号住居と出土遺物……………	182	第170図	180号土坑～195号土坑…	234	第206図	包含層の遺物出土状況…	273
第134図	65号住居……………	183	第171図	196号土坑～208号土坑・210号		第207図	包含層出土土器のグリッド別	
第135図	今井三騎堂遺跡の土坑の分布	185	土坑・211号土坑……………	235	分布(1)……………	275		
第136図	1号土坑～5号土坑・9号土坑	200	第172図	209号土坑・212号土坑～223号		第208図	包含層出土土器のグリッド別	
第137図	土坑出土遺物(1)……………	201	土坑・225号土坑……………	236	分布(2)……………	276		
第138図	土坑出土遺物(2)……………	202	第173図	226号土坑～236号土坑…	237	第209図	包含層出土土器のグリッド別	
第139図	土坑出土遺物(3)……………	203	第174図	237号土坑～248号土坑…	238	分布(3)……………	277	
第140図	6号土坑～8号土坑・10号土坑	204	第175図	249号土坑～263号土坑・265号		第210図	包含層出土土器のグリッド別	
第141図	18号土坑～28号土坑・272号	205	土坑……………	239	分布(4)……………	278		
第142図	土坑出土遺物(4)……………	206	第176図	264号土坑・266号土坑～271		第211図	包含層出土土器のグリッド別	
第143図	土坑出土遺物(5)……………	207	号土坑・273号～276号土坑……………	240	分布(5)……………	279		
第144図	29号土坑～38号土坑・45号土坑	208	第177図	277号土坑～290号土坑…	241	第212図	包含層出土土器のグリッド別	
第145図	土坑出土遺物(6)……………	209	第178図	291号土坑～304号土坑…	242	分布(1)……………	280	
第146図	土坑出土遺物(7)……………	210	第179図	305号土坑～316号土坑・318号		第213図	包含層出土土器のグリッド別	
第147図	土坑出土遺物(8)……………	211	土坑～320号土坑……………	243	分布(2)……………	281		
第148図	土坑出土遺物(9)……………	212	第180図	317号土坑・321号土坑～331号		第214図	包含層出土土器のグリッド別	
第149図	39号土坑～44号土坑・46号土坑	213	土坑……………	244	分布(3)……………	282		
第150図	土坑出土遺物(10)……………	214	第181図	332号土坑～346号土坑…	245	第215図	包含層出土土器のグリッド別	
第151図	50号土坑～60号土坑…	215	第182図	347号土坑～360号土坑…	246	分布(4)……………	283	
第152図	土坑出土遺物(11)……………	216	第183図	361号土坑～380号土坑…	247	第216図	2～4区包含層出土の土器(1)	
第153図	土坑出土遺物(12)……………	217	第184図	381号土坑～393号土坑…	248	……………	291	
第154図	土坑出土遺物(13)……………	218	第185図	394号土坑・396号土坑～408号		第217図	2～4区包含層出土の土器(2)	
第155図	61号土坑～71号土坑・425号	219	土坑……………	249	……………	292		
第156図	土坑出土遺物(14)……………	220	第186図	409号土坑～423号土坑…	250	第218図	2～4区包含層出土の土器(3)	
第157図	土坑出土遺物(15)……………	221	第187図	424号土坑・426号土坑～437号		……………	293	
第158図	72号土坑～79号土坑…	222	土坑……………	251	第219図	2～4区包含層出土の土器(4)		
第159図	土坑出土遺物(16)……………	223	第188図	438号土坑～445号土坑…	252	……………	294	
第160図	土坑出土遺物(17)……………	224	第189図	今井三騎堂遺跡の陥穴の分布		第220図	2～4区包含層出土の土器(5)	
第161図	80号土坑～90号土坑・395号	225	……………	254	……………	295		
第162図	土坑出土遺物(18)……………	226	第190図	1号陥穴～5号陥穴……………	255	第221図	2～4区包含層出土の土器(6)	
第163図	土坑出土遺物(19)……………	227	第191図	6号陥穴～9号陥穴……………	256	……………	296	
第164図	91号土坑～100号土坑・102号	228	第192図	10号陥穴～13号陥穴…	257	第222図	2～4区包含層出土の土器(7)	
第165図	101号土坑・105号土坑～116号	229	第193図	14号陥穴～17号陥穴…	258	……………	297	
			第194図	18号陥穴・19号陥穴…	259	第223図	2～4区包含層出土の土器(8)	
			第195図	1号集石～3号集石・1号遺物		……………	298	
			集中……………	260	第224図	2～4区包含層出土の土器(9)		
			第196図	集石土坑出土遺物……………	261	……………	299	
			第197図	1号屋外炉～4号屋外炉…	262	第225図	2～4区包含層出土の土器(10)	
			第198図	今井三騎堂遺跡の倒木痕の分		……………	300	
			布……………	264	第226図	2～4区包含層出土の土器(11)		
			第199図	1区・3区倒木痕……………	266	……………	301	
			第200図	3区・4区倒木痕……………	267	第227図	2～4区包含層出土の土器(12)	

.....	302	335	第283図	11号住居	377
第228図	2～4区包含層出土の土器(13)	第251図	2区～4区包含層出土の石器(7)	第284図	11号住居出土遺物	378
.....	303	336	第285図	11号住居	379
第229図	2～4区包含層出土の土器(14)	第252図	2区～4区包含層出土の石器(8)	第286図	12号住居と出土遺物	381
.....	304	337	第287図	12号住居出土遺物	382
第230図	2～4区包含層出土の土器(15)	第253図	2区～4区包含層出土の石器(9)	第288図	13号住居	383
.....	305	338	第289図	13号住居出土遺物	384
第231図	2～4区包含層出土の土器(16)	第254図	2区～4区包含層出土の石器(10)	第290図	14号住居と出土遺物	385
.....	306	339	第291図	15号住居と出土遺物	387
第232図	2～4区包含層出土の土器(17)	第255図	2区～4区包含層出土の石器(11)	第292図	16号住居	389
.....	307	340	第293図	16号住居出土遺物(1)	390
第233図	2～4区包含層出土の土器(18)	第256図	5区・6区包含層出土の石器(1)	第294図	16号住居出土遺物(2)	391
.....	308	341	第295図	16号住居出土遺物(3)	392
第234図	2～4区包含層出土の土器(19)	第257図	5区・6区包含層出土の石器(2)	第296図	17号住居と出土遺物	394
.....	309	342	第297図	18号住居と出土遺物	395
第235図	5～6区包含層出土の土器(1)	第258図	5区・6区包含層出土の石器(3)	第298図	19号住居(1)	397
.....	310	343	第299図	19号住居(2)	398
第236図	5～6区包含層出土の土器(2)	第259図	5区・6区包含層出土の石器(4)	第300図	19号住居出土遺物(1)	399
.....	311	344	第301図	19号住居出土遺物(2)	400
第237図	5～6区包含層出土の土器(3)	第260図	5区・6区包含層出土の石器(5)	第302図	20号住居(1)	401
.....	312	345	第303図	20号住居(2)	402
第238図	5～6区包含層出土の土器(4)	第261図	5区・6区包含層出土の石器(6)	第304図	20号住居(3)	403
.....	313	346	第305図	20号住居出土遺物(1)	404
第239図	5～6区包含層出土の土器(5)	第262図	5区・6区包含層出土の石器(7)	第306図	20号住居出土遺物(2)	405
.....	314	347	第307図	20号住居出土遺物(3)	406
第240図	5～6区包含層出土の土器(6)	【今井見切塚遺跡】		第308図	20号住居出土遺物(4)	407
.....	315	第263図	今井見切塚遺跡の竪穴住居の	第309図	20号住居出土遺物(5)	408
第241図	5～6区包含層出土の土器(7)	分布		第310図	20号住居出土遺物(6)	409
.....	316	第264図	1号住居	第311図	20号住居出土遺物(7)	410
第242図	5～6区包含層出土の土器(8)	第265図	1号住居出土遺物	第312図	20号住居出土遺物(8)	411
.....	317	第266図	2号住居と出土遺物	第313図	21号住居(1)	412
第243図	石核の長・幅・重量の相関図	第267図	3号住居	第314図	21号住居(2)	414
.....	328	第268図	3号住居出土遺物	第315図	21号住居出土遺物(1)	415
第244図	剥片の長・幅・重量の相関図	第269図	4号住居と出土遺物	第316図	21号住居出土遺物(2)	416
.....	329	第270図	4号住居出土遺物	第317図	22号住居	417
第245図	2区～4区包含層出土の石器(1)	第271図	5号住居	第318図	22号住居出土遺物	418
.....	330	第272図	5号住居出土遺物	第319図	23号住居	419
第246図	2区～4区包含層出土の石器(2)	第273図	6号住居と出土遺物	第320図	23号住居出土遺物	420
.....	331	第274図	6号住居出土遺物	第321図	24号住居と出土遺物	422
第247図	2区～4区包含層出土の石器(3)	第275図	5・6号住居出土遺物	第322図	24号住居出土遺物	423
.....	332	第276図	7号住居と出土遺物	第323図	25号住居(1)	425
第248図	2区～4区包含層出土の石器(4)	第277図	8号住居	第324図	25号住居(2)	426
.....	333	第278図	8号住居出土遺物	第325図	25号住居出土遺物(1)	427
第249図	2区～4区包含層出土の石器(5)	第279図	9号住居	第326図	25号住居出土遺物(2)	428
.....	334	第280図	9号住居出土遺物	第327図	26号住居	429
第250図	2区～4区包含層出土の石器(6)	第281図	10号住居	第328図	26号住居出土遺物	430
.....		第282図	10号住居出土遺物	第329図	27号住居	431

第330図	27号住居出土遺物	432	群	485	土坑～160号土坑	544		
第331図	28号住居	434	第375図	今井見切塚遺跡の土坑の分布	487	第419図	161号土坑～173号土	545
第332図	28号住居出土遺物(1)	435				第420図	174号土坑～187号土	546
第333図	28号住居出土遺物(2)	436	第376図	1号土坑～10号土坑	502	第421図	188号土坑～201号土	547
第334図	29号住居(1)	438	第377図	土坑出土遺物(1)	503	第422図	202号土坑～220号土	548
第335図	29号住居(2)	439	第378図	土坑出土遺物(2)	504	第423図	221号土坑～223号土坑・225号	
第336図	29号住居出土遺物(1)	440	第379図	土坑出土遺物(3)	505		土坑～236号土坑	549
第337図	29号住居出土遺物(2)	441	第380図	土坑出土遺物(4)	506	第424図	237号土坑～252号土坑	550
第338図	30号住居と出土遺物	442	第381図	11号土坑～20号土坑	507	第425図	253号土坑～259号土坑	551
第339図	31号住居と出土遺物	443	第382図	土坑出土遺物(5)	508	第426図	今井見切塚遺跡の陥穴の分布	
第340図	32号住居と出土遺物	445	第383図	土坑出土遺物(6)	509			553
第341図	33号住居(1)	447	第384図	土坑出土遺物(7)	510	第427図	1号陥穴～5号陥穴	554
第342図	33号住居(2)	448	第385図	21号土坑～32号土坑	511	第428図	6号陥穴～8号陥穴	555
第343図	33号住居(3)	450	第386図	土坑出土遺物(8)	512	第429図	1号集石土坑～7号集石土坑	
第344図	33号住居(4)	451	第387図	土坑出土遺物(9)	513			556
第345図	33号住居出土遺物(1)	452	第388図	土坑出土遺物(10)	514	第430図	集石土坑出土遺物	557
第346図	33号住居出土遺物(2)	453	第389図	33号土坑～42号土坑	515	第431図	1号～3号埋設土器	558
第347図	33号住居出土遺物(3)	454	第390図	土坑出土遺物(11)	516	第432図	今井見切塚遺跡の倒木痕の分布	
第348図	33号住居出土遺物(4)	455	第391図	土坑出土遺物(12)	517			560
第349図	33号住居出土遺物(5)	456	第392図	土坑出土遺物(13)	518	第433図	1号～18号倒木痕	562
第350図	33号住居出土遺物(6)	457	第393図	43号土坑～51号土坑	519	第434図	19号～36号倒木痕	563
第351図	34号住居と出土遺物	458	第394図	土坑出土遺物(14)	520	第435図	37号～51号・61号～69号倒木痕	
第352図	34号住居出土遺物	459	第395図	土坑出土遺物(15)	521			564
第353図	35号住居	460	第396図	52号土坑～64号土坑	522	第436図	70号～74号倒木痕	565
第354図	35号住居出土遺物(1)	461	第397図	土坑出土遺物(16)	523	第437図	包含層出土土器のグリッド別分布(1)	
第355図	35号住居出土遺物(2)	462	第398図	土坑出土遺物(17)	524			568
第356図	36号住居(1)	464	第399図	65号土坑～77号土坑	525	第438図	包含層出土土器のグリッド別分布(2)	
第357図	36号住居(2)	465	第400図	土坑出土遺物(18)	526			569
第358図	36号住居出土遺物(1)	466	第401図	土坑出土遺物(19)	527	第439図	包含層出土土器のグリッド別分布(3)	
第359図	36号住居出土遺物(2)	467	第402図	78号土坑～89号土坑	528			570
第360図	37号住居	468	第403図	土坑出土遺物(20)	529	第440図	包含層出土土器のグリッド別分布(4)	
第361図	37号住居出土遺物	469	第404図	土坑出土遺物(21)	530			571
第362図	38号住居(1)	471	第405図	土坑出土遺物(22)	531	第441図	包含層出土土器のグリッド別分布(5)	
第363図	38号住居(2)	472	第406図	土坑出土遺物(23)	532			572
第364図	38号住居出土遺物(1)	473	第407図	90号土坑～98号土坑	533	第442図	包含層出土土器のグリッド別分布(1)	
第365図	38号住居出土遺物(2)	474	第408図	土坑出土遺物(24)	534			573
第366図	39号住居	475	第409図	土坑出土遺物(25)	535	第443図	包含層出土土器のグリッド別分布(2)	
第367図	40号住居	476	第410図	土坑出土遺物(26)	536			574
第368図	40号住居出土遺物	477	第411図	土坑出土遺物(27)	537	第444図	包含層出土土器のグリッド別分布(3)	
第369図	掘立柱建物と柱穴群の分布	478	第412図	土坑出土遺物(28)	538			575
			第413図	99号土坑～112号土坑	539	第445図	包含層出土土器のグリッド別分布(4)	
第370図	5区1号掘立	480	第414図	土坑出土遺物(29)	540			576
第371図	5区2号掘立・3号掘立	482	第415図	113号土坑～125号土坑・224号土坑	541	第446図	包含層出土土器のグリッド別分布(5)	
第372図	5区4号掘立・5号掘立	483						577
第373図	5区6号掘立・7号掘立・8号掘立	484	第416図	土坑出土遺物(30)	542	第447図	1区包含層の出土の土器(1)	
			第417図	126号土坑～143号土坑	543			586
第374図	掘立柱建物の出土遺物と柱穴		第418図	144号土坑～152号土坑・154号		第448図	1区包含層の出土の土器(2)	

.....	587	第472図	5区包含層出土の土器(12)	648
第449図	1区包含層出土の土器(3)	611	第496図	5区包含層出土の石器(5)
.....	588	第473図	5区包含層出土の土器(13)	648
第450図	1区包含層出土の土器(4)	612	第497図	5区包含層出土の石器(6)
.....	589	第474図	5区包含層出土の土器(14)	649
第451図	1区包含層出土の土器(5)	613	第498図	5区包含層出土の石器(7)
.....	590	第475図	5区包含層出土の土器(15)	650
第452図	1区包含層出土の土器(6)	614	第499図	5区包含層出土の石器(8)
.....	591	第476図	5区包含層出土の土器(16)	651
第453図	1区包含層出土の土器(7)	615	第500図	5区包含層出土の石器(9)
.....	592	第477図	5区包含層出土の土器(17)	652
第454図	1区包含層出土の土器(8)	616	第501図	5区包含層出土の石器(10)
.....	593	第478図	5区包含層出土の土器(18)	653
第455図	1区包含層出土の土器(9)	617	第502図	5区包含層出土の石器(11)
.....	594	第479図	5区包含層出土の土器(19)	654
第456図	1区包含層出土の土器(10)	618	第503図	5区包含層出土の石器(12)
.....	595	第480図	石核の長・幅・重量の相関図	655
第457図	1区包含層出土の土器(11)	632	第504図	5区包含層出土の石器(13)
.....	596	第481図	剥片の長・幅・重量の相関図	656
第458図	1区包含層出土の土器(12)	633	第505図	5区包含層出土の石器(14)
.....	597	第482図	1区包含層出土の石器(1)	657
第459図	1区包含層出土の土器(13)	634	第506図	5区包含層出土の石器(15)
.....	598	第483図	1区包含層出土の石器(2)	658
第460図	1区包含層出土の土器(14)	635	第507図	5区包含層出土の石器(16)
.....	599	第484図	1区包含層出土の石器(3)	659
第461図	5区包含層出土の土器(1)	636	第508図	5区包含層出土の石器(17)
.....	600	第485図	1区包含層出土の石器(4)	660
第462図	5区包含層出土の土器(2)	637	第509図	5区包含層出土の石器(18)
.....	601	第486図	1区包含層出土の石器(5)	661
第463図	5区包含層出土の土器(3)	638	第510図	5区包含層出土の石器(19)
.....	602	第487図	1区包含層出土の石器(6)	662
第464図	5区包含層出土の土器(4)	639	第511図	5区包含層出土の石器(20)
.....	603	第488図	1区包含層出土の石器(7)	663
第465図	5区包含層出土の土器(5)	640	第512図	A1号住居.....
.....	604	第489図	1区包含層出土の石器(8)	665
第466図	5区包含層出土の土器(6)	641	第513図	A1号住居出土遺物(1)
.....	605	第490図	1区包含層出土の石器(9)	666
第467図	5区包含層出土の土器(7)	642	第514図	A1号住居出土遺物(2)
.....	606	第491図	1区包含層出土の石器(10)	667
第468図	5区包含層出土の土器(8)	643	第515図	A1号住居出土遺物(3)
.....	607	第492図	5区包含層出土の石器(1)	668
第469図	5区包含層出土の土器(9)	644	第516図	A2号住居.....
.....	608	第493図	5区包含層出土の石器(2)	670
第470図	5区包含層出土の土器(10)	645	第517図	A2号住居出土遺物(1)
.....	609	第494図	5区包含層出土の石器(3)	671
第471図	5区包含層出土の土器(11)	646	第518図	A2号住居出土遺物(2)
.....	610	第495図	5区包含層出土の石器(4)	672
				第519図	A2号住居出土遺物(3)
				673

第520図	A2号住居出土遺物(4)	674
第521図	A3号住居	676
第522図	A3号住居出土遺物(1)	677
第523図	A3号住居出土遺物(2)	678
第524図	A3号住居出土遺物(3)	679
第525図	A4号住居	680
第526図	A4号住居出土遺物	681
第527図	A5号住居	682
第528図	A5号住居出土遺物	683
第529図	A1号土坑～A11号土坑	685
第530図	A地点土坑出土遺物(1)	686
第531図	A地点土坑出土遺物(2)	687
第532図	A地点包含層出土遺物(1)	689
第533図	A地点包含層出土遺物(2)	690
第534図	各期竪穴住居の形態と構造(1)	711
第535図	各期竪穴住居の形態と構造(2)	713
第536図	各時期竪穴住居の面積・長軸 長の相関図	717
第537図	各期竪穴住居の形態と構造(3)	718
第538図	井草・夏島式期の集落	719
第539図	稲荷台式期の集落	721
第540図	早期条痕文期の集落	723
第541図	花積下層式期の集落	724
第542図	黒浜・諸磯 a 式期の集落	726
第543図	諸磯 b 式期の集落	729
第544図	諸磯 c 式期の集落	732
第545図	中・後期の遺構	735
第546図	時期別の住居出土石器の組成	738
第547図	時期別の黒曜石原産地の動向	740
第548図	群馬県内の前期遺跡出土炭化 材のC14年代	743

表目次

【今井三騎堂遺跡】

第1表	周辺の遺跡一覧	7
第2表	土坑の規模一覧	195
第3表	陥穴の規模一覧	253
第4表	集石土坑の規模一覧	260
第5表	屋外炉の規模一覧	262
第6表	倒木痕の規模一覧	265
第13表	竪穴住居規模一覧	710

【今井見切塚遺跡】

第7表	土坑の規模一覧	498
第8表	A地点土坑の規模一覧	501
第9表	陥穴の規模一覧	552
第9表	集石土坑の規模一覧	557
第10表	屋外埋設土器の規模一覧	558
第11表	倒木痕の規模一覧	561
第12表	竪穴住居規模一覧	709

報告書抄録

書名ふりがな	いまいさんきどういせき・いまいみきりづかいせき
書名	今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡
副書名	多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第3集
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第350集
編著者名	石坂 茂
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	西暦2006年3月25日
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2

所収遺跡名	所在	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡				
今井三騎堂遺跡	前橋市東大室町	10210	00516	36° 22' 54"	19980401～ 19991031	131,750㎡	住宅団地 造成
	佐波郡赤堀町今井	10461		139° 12' 30"			
今井見切塚遺跡	前橋市東大室町	10210	00501	36° 22' 40"	19970924～ 20020331	148,500㎡	住宅団地 造成
	佐波郡赤堀町今井	10461		139° 12' 25"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今井三騎堂遺跡	住居 土坑	縄文時代	竪穴住居・掘立柱建物・貯蔵穴・墓坑・陥穴・集石土坑	土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・削器・磨り石・台石・装身具	
今井見切塚遺跡	住居 土坑 掘立柱	縄文時代	竪穴住居・掘立柱建物・貯蔵穴・墓坑・陥穴・集石土坑	土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・削器・磨り石・台石・装身具・炭化種子	

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査の経緯と経過

多田山丘陵における今回の埋蔵文化財調査は、群馬県企業局による住宅団地造成工事と、それに関連した北関東自動車道建設に伴う土砂採取工事の計画を契機としたものである。群馬県教育委員会が、平成9年2月に工事対象地内の324,000㎡に対して試掘調査を実施し、280,250㎡の範囲から旧石器・縄文・古墳・奈良・平安の各時代の遺構を確認した。この結果を受けて、当事業団が群馬県企業局と埋蔵文化財調査に係わる委託契約を締結し、平成9年9月24日から平成14年3月31日までの約4年半にわたって、調査を実施した。

遺跡の命名にあたっては、多田山丘陵が前橋市と赤堀町との行政区境となっていることから、両教育委員会・県教委区委員会・当事業団との4者で協議を持った。結論としては、前橋市と赤堀町の教育委員会が共通の名称を付すことで合意し、既に周知の遺跡として登録していた赤堀町教育委員会による名称を使用することになった。多田山丘陵の中間地点を東西に横断する県道前橋今井線を境にして、北半部の131,750㎡を「今井三騎堂遺跡」、南半部の148,500㎡を「今井見切塚遺跡」と呼称することにした。また、両遺跡ともに広大な面積に及ぶことから、第5図のように現況の畑地割りを基本にして便宜的な調査区を設定し、今井三騎堂遺跡は1～6区に、今井見切塚遺跡は1～7区にそれぞれ分割した。

発掘調査は、古墳時代以降・縄文時代・旧石器時代の3つの文化層を対象とした困難なものであったが、道路公団による土砂採取工事工程との関係から、平成9年度は今井見切塚遺跡2・3区、平成10年度は今井見切塚遺跡1区、今井三騎堂遺跡1～4区、11年度は今井見切塚遺跡1・4区、今井三騎堂遺跡2～4区、12年度は今井見切塚遺跡6・7区、今井三騎堂遺跡5・6区、13・14年度は今井見切塚遺跡5区の調査を行い、両遺跡の全調査を終了した。

2. 遺跡の位置と地形

今井三騎堂遺跡と今井見切塚遺跡は、前橋市東端と佐波郡赤堀町西端の行政区境にまたがって存在し、国道50号線から北方約700mのところに位置している。

群馬県の中東部に位置する赤城山は、黒檜山(1,828m)を最高峰とし、那須火山帯の南端に位置する複合成層火山である。北西麓は比較的大規模な輻射谷が発達した丘陵地形を呈するが、南麓では浅い輻射谷と緩やかな原形面からなる広大な裾野地形を呈している。また、南麓では標高500m地帯で山地から丘陵性台地への地形変換点が見られ、200mよりも下位の地域は低台地化している。この低台地域では、山腹より流出する荒砥川・神沢川・桂川などの大小河川や、山麓端部からの湧水によって開析が進み、複雑に入り組んだ小規模な沖積地が形成されている。この南麓の基盤層は、火山泥流堆積物によって形成されており、標高200m以下を中心とする地域では、20～30万年前に生じた火山性の山体崩壊に伴う岩屑なだれ(梨木泥流)による大小の流山が多数分布している。多田山丘陵もこうした流山の一つであり、南北長1,600m、東西幅600m、最大標高159.1mを測る。丘陵頂部はなだらかな緩斜面が広がっているが、中位～下位部にかけての斜面は東側で勾配13～16%とやや緩やかであるものの、西側では20～25%とかなりの急勾配となっている。また、周辺の低地との比高差は40～50mを有し、当該域の中では小学校校歌の中にも登場する程の際立った丘陵である。この丘陵の西麓側には桂川が近接して南流し、東側には約1km離れて大間々扇状地と赤城山麓を隔てる粕川が南流している。

今井三騎堂遺跡と今井見切塚遺跡は、多田山丘陵の頂部から東斜面部を中心に立地し、当丘陵の中央部を東西に横断する県道前橋今井線を境にして、その北側が今井三騎堂遺跡、南側が今井見切塚遺跡となるが、地形的には両遺跡は一体であり、区分できない。

I 発掘調査と遺跡の概要



第1図 遺跡の位置 (国土地理院発行「大胡」2万5千分1を使用)

3. 遺跡の基本土層

赤城山南麓の末端の低台地部では、通常の場合、表土（耕作土）の下位には黒ボク土の堆積が希薄であり、漸移的に黄褐色のソフトローム層へと変化する場合が多い。多田山丘陵においてもほぼ同様であるが、表土とローム層との間に層厚約 15～25 cm の淡色黒ボク土的な土の堆積が認められ、縄文時代前期を中心とした遺物の包含層となっている。

今井三騎堂遺跡と今井見切塚遺跡の基本土層を第 2 図に示したが、両遺跡共に大差はなくほぼ類似した土層堆積を示している。ここでは、表土層（I 層）からローム層（VI 層）上面までの間の堆積土層について詳述し、ローム層以下の土層内容については、別巻の「旧石器時代編」を参照していただきたい。尚、各基本柱状土層の作図地点については、第 5 図に示してある。

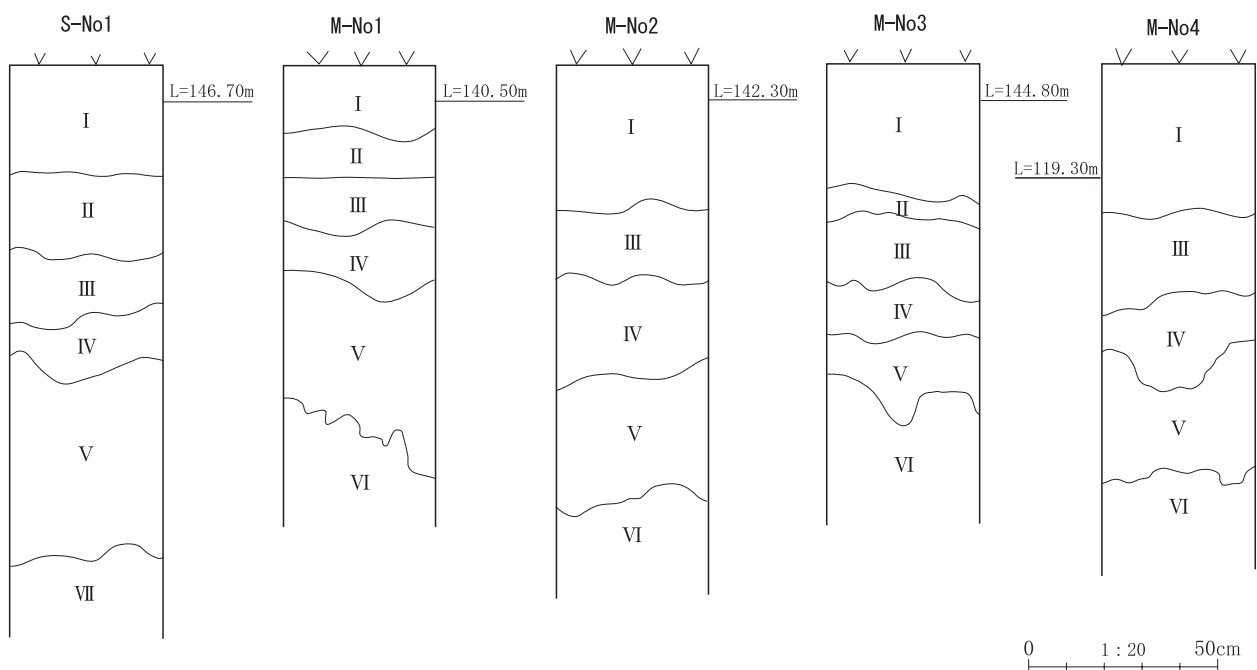
I 層：黒褐色土（10YR2/2）。層厚 15～35 cm。現在の畑耕作土あるいは表土で、1783 年（天明 3）の浅間 A 軽石（As-A）を多量に含む。

II 層：黒褐色土（10YR3/2）。層厚 5～25 cm。1108 年（天仁元年）の浅間 B 軽石（As-B）を多量に含み、部分的に同軽石の純堆積層の残存も認められる。

III 層：黒色土（10YR2/1）。4 世紀初頭の浅間 C 軽石（As-C）や 6 世紀中葉の榛名山ニッ岳軽石（Fr-FP）を少量含む黒ボク的な土。層厚 15～25 cm で、締まりは弱い粘性を持つ。

IV 層：III 層に類似した黒色土を主体に、淡色黒ボク的な褐色土（10YR4/4）が斑状に 20～30% 前後混入。層厚 15～25 cm で、4500 年前の浅間 D 軽石（As-D）に類似した軽石粒を少量含む。締まり・粘性ともに中程度。

V 層：VI 層のローム土への漸移層で、層厚 20～30 cm。III 層に類似した黒色土とロームのブロック・粒子が 1：1 で混入。締まりは強く、粘性に乏しい。



第 2 図 各地点の柱状土層

4 周辺の遺跡

今井三騎堂遺跡と今井見切塚遺跡が立地する赤城山南麓には、多数の縄文時代遺跡が存在している。ここでは、発掘調査によりその内容が明らかとなっている周辺遺跡について取り上げ、大別時期を単位にして集落の立地やその動向を中心に概観してみたい。

草創期前半 当期では、今井三騎堂・見切塚（1・2）の他に、小島田八日市（25）や荒砥北三木堂（26）が存在するのみであり、遺跡数としてもきわめて希薄な状況にある。また、これらの遺跡では、竪穴住居の存在は確認されておらず、集落の立地動向を把握することは困難である。ただし、小島田八日市では、土坑9基が検出されており、調査区域外に竪穴住居の存在する可能性が高い。近年、当期の竪穴住居が前橋市徳丸仲田（大木 2001）や笠懸町西鹿田中島（萩谷 2004）などで検出されており、立地的には小河川に面した低台地・微高地上に占地する傾向が窺える。先の小島田八日市も、河川（旧利根川）に面した微高地上に立地しており、同様の占地状況を示している。こうした立地傾向については、後期旧石器時代終末のあり方も類似するものであり、基本的に前段階の動向を継承していると考えられる。この背景には、既に指摘されているように、河川漁労との関係が想定される。

草創期後半 前半段階に比べて大きく異なるのは、一時期に2棟以上の竪穴住居で構成される集落が形成されることと、遺跡数の著しい増加傾向である。集落としては、今井三騎堂・今井見切塚をはじめ波志江中屋敷（18）や浅見（77）などが存在している。また、竪穴住居は未検出であるものの土坑が確認された遺跡として、三和工業団地（12）・書上下吉祥寺（13）・下鶴ヶ谷（29）・上大屋（47）・上大屋下組（48）などがある。遺物の散布地としては、第3図のエリア内で14遺跡が存在し、未調査の散布地を含めれば、数十遺跡の存在が想定される。これらの遺跡の大半は稲荷台式期を中心としており、当該期に顕著な文化的高揚が看取される。立地的には、前半期のような河川沿いの微高地を継続的に踏襲する遺跡も認められるが、丘陵部への

進出も顕在化し、生活・行動領域の拡大傾向が明瞭となる。しかし、総体的に集落遺跡が僅少であることから見て、一地点における定住性の度合いはさほど高くはなく、集落遺跡を中心にして複数遺跡を回帰・遊動するような状況が想定される。

早期 前段階と同様に、エリア内で23遺跡の分布を確認することができるが、集落は今井三騎堂・見切塚の他に北通（97）が存在するに過ぎず、また土坑の検出例も二之宮千足（21）、下鶴ヶ谷（29）、柳久保（30）、鼻毛石赤坂Ⅰ（74）の4遺跡にとどまる。これらの遺跡は、時期的に茅山上層式期以降を主体としており、当期以前は遺構の形成が皆無に近い状況にある。こうした点は、前段階の稲荷台式期以降に著しい文化的衰退があり、その後の早期終末段階でようやく回復基調に入ったことを示している。立地的には、全体の約65%が前段階の占地を踏襲しており、類似した様相を保持している。尚、宮城村苗ヶ島大畑では、約100基の陥穴が検出されており、赤城山南麓の広大な丘陵部での活発な罾猟の存在を窺うことができる。

前期 赤城山南麓においては、遺跡分布のピークを迎える段階であり、エリア内だけでも76遺跡を数える。また、内容的には集落が54遺跡、土坑等が9遺跡に認められ、約8割以上が集落遺跡と想定される。しかし、その大半は一時期2棟前後の小規模かつ継続期間の短いもので占められている。こうした状況からは、文化的な高揚とともに家族を単位にした分散的な居住、および複数地点をかなりの頻度で移動するような生活形態が想定される。しかし、その一方で、当遺跡のように5棟前後で構成される長期・継続的な集落も僅かに存在しており、いわば拠点的な集落形成の萌芽も認められる。時期的には、黒浜式～諸磯c式期を中心とするが、堀越中道（79）や横沢新屋敷（85）では二ツ木式期に、長田D（69）では黒浜式期に活発な集落形成が認められ、後半段階への先駆的様相を呈している。立地的には、前段階の地点と重複しつつも、より高標高の400～500m地点の丘陵部へと占地を拡大している点が特徴的である。



第3図 周辺の遺跡分布 (国土地理院発行「前橋」5万分1を使用)

I 発掘調査と遺跡の概要



〔草創期・早期〕



〔前期〕



〔中期〕



〔後期・晩期〕

第4図 時期別の遺跡分布

第1表 周辺の遺構一覧

番号	遺跡名	市町村名	時 期							備 考
			草創期 前半	草創期 後半	早期	前期	中期	後期	晩期	
1	今井三騎堂	赤堀町	△	●	●	●	●	△	△	本報告の遺跡
2	今井見切塚	赤堀町	△	●	●	●	●	○	△	本報告の遺跡
3	多田山東	赤堀町				●				住居7(諸b-2, 諸c-5), 土坑11
4	柳田	赤堀町				●		●		住居10(諸b・堀2), 土坑38
5	田向	赤堀町					●			住居10(加E4)
6	下触牛伏	赤堀町				●				住居3(諸c-3), 土坑18
7	波志江六反田	伊勢崎市	△				△			遺物(稲荷台, 勝坂, 加E3)
8	波志江天神山	伊勢崎市				○				土坑(花積, 諸b)
9	五目牛南組	赤堀町				●	○	○		住居4(花積-4), 土坑26
10	五目牛清水田	赤堀町				●	△	△	△	住居6(花積-6), 土坑15(花積-14, 関山-1)
11	光仙房	伊勢崎市						△	△	遺物(堀2, 加B2, 安3a)
12	三和工業団地	伊勢崎市		△		●		△		住居3(諸a-1, 諸b-1, 諸c-1), 土坑10, 遺物(井草, 堀1・2)
13	書上下吉祥寺	伊勢崎市		△	△	●	△			住居3(諸c-3), 土坑1, 遺物(井草, 稲荷台, 押型文, 加E3)
14	書上本山	伊勢崎市		△	△	△	△	△		遺物(燃糸文, 条痕文, 諸b・c, 加E2・E3, 加B1・B2)
15	荒砥前原	前橋市					●			住居10(加E2-1, 加E3-8, 加E4-1), 土坑2
16	波志江中野面	伊勢崎市					●	○		住居10(加E-10), 土坑9(加E-7, 称-1, 堀-1)
17	波志江西屋敷	伊勢崎市				△	△	△		遺物(諸b, 勝坂, 阿, 加E, 加B, 称, 堀)
18	波志江中屋敷	伊勢崎市		●	△		△	△		住居2(夏島-2), 遺物(井草, 稲荷台, 押型文, 加E3~称名II)
19	荒砥二之堰	前橋市				●	●	●		住居32(諸b-8, 加E3-16, E4-2, 称I-1, 称II-3, 堀1-2), 土坑47
20	飯土井二本松	前橋市		△	△		△			遺物(★押型文, 条痕文, 沈線文, 加E)
21	二之宮千足	前橋市			○	○				土坑13(条痕文, 諸b・c, 十三菩提)
22	今井道上・道下	前橋市				△	△	△		遺物(花積, 黒, 諸a・c, 加E3・4, 称I・II, 堀1)
23	荒砥上ノ坊	前橋市				●				住居3(諸b-3)
24	今井白山	前橋市					●			住居1(加E3), 土坑2
25	小島田八日市	前橋市	○							土坑9(草創期前半隆起線文)
26	荒砥北三木堂	前橋市		△	△	●				住居7(諸a-4, 諸c-1, 不明-2), 土坑22, 遺物(井, 夏, 稲, 押, 田戸)
27	荒砥北原	前橋市				●	●			住居6(黒-1, 加E3-2, 加E4-3), 土坑4, 遺物(諸b・c)
28	鶴谷	前橋市				△				遺物(花積)
29	下鶴ヶ谷	前橋市		○	○	●	△	△		住居12(花積-6, 諸a-6), 土坑97(夏, 稲, 条痕, 他), 遺物(井草, 東山, 田戸, 加E3, 加B)
30	柳久保	前橋市			○	○	○			土坑8(押型文, 花積, 諸b, 黒, 加E)
31	荒砥宮田	前橋市		△		●	△	△		住居1(諸a), 土坑1, 遺物(夏島, 加E3, 堀2)
32	諏訪	前橋市						△		遺物(加B2)
33	中鶴谷	前橋市				○	○			土坑3(黒, 加E3)
34	頭無	前橋市						○		土坑1(加B2)
35	富田下大日I	前橋市				●	●			住居5(花積-4, 阿II-1)
36	富田下大日II	前橋市				●				住居4(諸a-2, 諸b-2)
37	富田下大日IV	前橋市				●				住居4(諸c-1, 前期後半-3)
38	稲荷前	前橋市				△		△		遺物(諸b・c, 加B2)
39	大畑	大胡町				△	△			遺物(諸b, 加E)
40	稲荷窪A地点	大胡町					●			住居3(加E1-2, 大木8a-1), 土坑1
41	山神	大胡町				●	●			住居14(有尾-3, 黒-1, 勝坂3-7, 加E1-3), 土坑37
42	小林	大胡町					●			住居6(加E1-6), 土坑27
43	西小路	大胡町					●			住居13(加E-13)
44	上ノ山	大胡町			△	△	●	△		住居55(加E2-10, 加E3-42, 加E4-3), 土坑58, 遺物(押型文, 条痕文, 黒浜, 諸a・b, 阿玉台II, 堀2)
45	稲荷窪B地点	大胡町				●	●			住居3(黒-1, 諸bc-1, 加E2-1)
46	天神風呂	大胡町				●				住居2(諸b-1, 諸bc-1)
47	上大屋・樋越地区	大胡町		△	△	●	△	△		住居12(諸b-4, 諸bc-3, 諸c-5), 土坑30, 遺物(井草, 夏島, 押型文, 条痕文, 五領ヶ台, 阿玉台I, 加B)
48	上大屋下組	大胡町		○	○			○		土坑4(押型文, 黒, 堀2)
49	上横俵	前橋市				●	△	△		住居2(諸a-2)
50	大道	前橋市						●	●	住居22(称-2, 堀-4, 加B-7, 安行-4, 不明-5), 土坑356
51	熊の穴	前橋市		△	△	●	△	△		住居10(諸a-2, 諸b-8), 土坑45, 遺物(井, 夏, 条痕, 加E3, 堀2, 加B)
52	大久保	前橋市					△			遺物(加E)

I 発掘調査と遺跡の概要

番号	遺跡名	市町村名	時 期							備 考
			草創期 前半	草創期 後半	早期	前期	中期	後期	晩期	
53	大室小学校校庭	前橋市				●				住居1(諸b)
54	荒砥上諏訪	前橋市				●				住居1(諸b)
55	内堀	前橋市				●	●			住居2(花積-1, 加E3-1)
56	深津・稲荷山	粕川村				●				住居1(諸a)
57	堤頭	粕川村				●				住居1(諸a-1)
58	峯岸山	新里村		△	△	△	△	△		遺物(捺糸, 押型, 条痕, 花積, 諸a~c, 堀, 加E)
59	武井	新里村				●	●			住居2(加E3-1, 諸b-1)
60	城	新里村				△				遺物(諸a~c)
61	月田8	粕川村				●				住居6(黒-2, 諸ab-3, 諸b-1), 土坑1(諸b)
62	近戸I	粕川村				●				住居2(諸a-1, 諸b-1)
63	近戸II	粕川村				●				住居5(黒-1, 諸b-2, 諸c-2)
64	月田3・4	粕川村				●				住居8(黒-5, 諸b-3)
65	月田7	粕川村				●	○			住居11(黒-3, 諸a-5, 諸b-2, 諸c-1), 土坑(称名寺)
66	月田9	粕川村				●				住居2(黒-1, 諸a-1)
67	月田10	粕川村				○				土坑2(花積-1, 諸a-1)
68	ヌカリ	粕川村				●				住居7(黒-4, 諸a-2, 諸b-1)
69	長田D	粕川村				●				住居35(黒-23, 諸a-3, 諸b-8, 諸c-1), 土坑1(黒)
70	長田C	粕川村				●				住居7(諸b-6, 諸c-1), 土坑2(黒-1, 諸b-1)
71	長田B	粕川村				●				住居9(黒-2, 諸a-6, 諸b-1)
72	長田A	粕川村				●				住居4(黒-2, 諸b-2)
73	室沢, 安通, 洞	粕川村					○	●	○	住居1(称I), 土坑1(加E4), 配石(称~堀1, 加B3, 安行1~3, 千綱)
74	鼻毛石赤坂I	宮城村			○?					土坑3, 陥穴3
75	鼻毛石鎌田	宮城村			△		●			住居1(加E1), 土坑, 遺物(条痕, 加E2~4, 堀1~加B2)
76	鼻毛石中山	宮城村					●			住居4(勝1~3-1, 阿I b~III-1, 焼町-1, 大木7~8a-1), 土坑119
77	浅見	大胡町		△	△	●		○		住居1(諸a), 土坑7(黒, 諸a~c, 堀2), 遺物(井, 夏, 押, 田)
78	堀越乙閑替戸	大胡町				△	△			遺物(諸b, 諸c, 阿)
79	堀越中道	大胡町				●	●			住居18(二ツ木-17, 加E3-1), 土坑25
80	茂木二本松	大胡町				●	△			住居1(関山I), 遺物(加E3)
81	柴崎	大胡町				○	○			土坑3(花積, 諸b, 加E1・E3)
82	横沢向山	大胡町				●				住居4(有尾-3, 諸a-1), 土坑5
83	堀越丁二本松	大胡町				●				住居10(諸a-2, 諸b-2, 諸c-3, 黒-2, 加E3-1), 土坑20
84	横沢向田	大胡町				●				住居1(諸a), 土坑5
85	横沢新屋敷	大胡町		△	△	●	△	△		住居26(二ツ木-21, 花積-3, 関山-1, 諸c-1), 土坑39, 遺物(井草, 押型文, 五領ヶ台, 阿玉台, 加E3, 加B2)
86	横沢芳山	大胡町		△						遺物(稲荷台)
87	横沢大塚	大胡町				○				土坑3(諸b-1, 諸c-1, 不明-1)
88	堀越芝山	大胡町				●				住居3(二ツ木-3), 土坑3
89	堀越並木(A・C地点)	大胡町				○	●	●		住居8(加E2-1, 加E3-2, 加E4-2, 称-1, 不明-2), 土坑7
90	甲諏訪	大胡町					●			住居7(加E1-1, 加E2-5, 勝坂3-1)
91	堀越西一丁田	大胡町						●		住居2(堀1-1, 堀2-1), 土坑1
92	乙西尾引	大胡町		△						遺物(押型文)
93	西天神	大胡町				●				住居1(黒)
94	市之関前田	宮城村				△	●	△		住居24(加E3~E4-24)
95	柏倉大沢	宮城村				●				住居3(有尾-1, 黒-2), 土坑72
96	萱野	前橋市					●			住居2(加E3-2)
97	北通	赤堀町			●	●				住居4(茅山上層-1, 諸a-1, 諸b-1, 不明-1), 土坑2
98	市之関	宮城村				●				住居1(関山I)
99	荒砥上川久保	前橋市			△		△	△		遺物(条痕, 加E1~E4, 称名寺)
	苗ヶ島大畑	宮城村			●					住居1(茅山上層), 土坑・陥穴189(田戸, 鶴ヶ島台, 茅山)
	熊野・藤尾沢	新里村				●	●			住居23(諸a-1, 勝坂・加E1~E3-22), 土坑, 遺物(田戸, 条痕, 花積~諸b, 阿玉台)

凡例 ●住居 ○土坑 △土器

5. 調査の方法

中期 エリア内では53遺跡が存在し、前期に次いで多数の立地が認められるが、内容的には集落が25遺跡、土坑検出例が6遺跡であり、前期に比べて約1/2程度にとどまる。各集落の内容は、一時期2～3棟で継続期間も短く前期と大差ないが、荒砥二之堰(19)・上ノ山(44)や新里村熊野・藤尾沢遺跡のような中規模で居住期間の長い集落が点在し、やや異なった様相を見せる。しかし、丘陵部の当エリア内では、中期段階での形成が顕著な数百棟の竪穴住居で構成される大規模な環状集落は存在せず、赤堀町曲沢遺跡・伊勢崎市三和工業団地遺跡などのように、低位な台地・微高地上に立地する傾向が明確である。いわば当域は、これら拠点集落と有機的関係を持つ中・小規模集落の占地帯を構成している。時期的には、後半の加曽利E2～E3式期を主体としており、落ち込みの激しい前半期とは対照的である。

後期 エリア内では34遺跡を数えるが、集落遺跡は柳田(4)、荒砥二之堰(19)、大道(50)、安通・洞(73)、堀越並木(89)、堀越西一丁田(91)の6遺跡で、土坑検出例も6遺跡にとどまる。また、各集落は2～3棟の小規模かつ継続期間の短いものが大半を占め、集中的居住地の環状集落形成も認められないことから、分散的な居住形態に変化したことが窺える。時期的には前半期のものが主体を占めるが、大道では後半期の配石墓群が存在している。こうした遺跡は、前半期から継続的に営まれており、新たな地域的拠点として形成されたものと考えられる。

晩期 エリア内では僅かに8遺跡が存在するのみであり、明確な集落は後期段階から継続的な大道(50)に限定され、土坑検出例も安通・洞(73)の1遺跡にとどまる。このように、当域では後期後半以降、遺跡数と共に集落立地の減少が顕著であるが、こうした傾向は県内各域の動向とも軌を一にしており、文化的な衰退を窺うことができる。立地的には、丘陵部から台地部への移行が看取され、大道のように後期から継続する集落が、地域拠点としての機能を担っていると思定される。

本調査に先行して平成9年2月に実施された県教育委員会による試掘調査において、今井三騎堂遺跡4～6区、今井見切塚遺跡1・5区を中心に、縄文時代の遺構と遺物包含層の存在が確認されていた。同年9月以降の本調査の着手にあたっては、この試掘データを踏まえて、前述の調査区では表土(I層)から遺物包含層(IV層)上位面までの約35～80cmの土層を掘削重機を用いて除去し、以下の遺物包含層を人力により調査・掘削した後で、ローム層のVI層上面にて遺構の所在確認を行うこととした。この遺物包含層は、層厚40～60cmを有しており、かつ今井三騎堂遺跡では約2万㎡、今井見切塚遺跡では約4万㎡という広大な面積に及ぶことから、その調査はかなり困難なものであったが、各時期の遺構との関連性を把握するために、各遺物の出土位置をグリッドを単位として記録することにした。

また、両遺跡の全域を同時並行的に調査して、集落景観の写真記録保存を目指したが、ローム層中の旧石器時代遺物の存在や道路公団による土砂採取工事工程との関係もあり、1～2万㎡を単位にして縄文時代の遺構・包含層調査や旧石器時代の試掘・本調査を行い、終了後にその都度明け渡すこととなった。各調査区の調査順位は、前出の「2. 調査経過」で既述した通りである。

尚、今井三騎堂遺跡と今井見切塚遺跡の両遺跡を含めて、4m×4mのグリッド網を設定した。南北方向に算用数字を、東西方向にアルファベットを付し、各グリッドの呼称はその南西隅交点を当てているが、それらの位置関係を把握するために国家座標上にプロットした。また、それら遺跡の測量に当たっては、遺構原図や版下作成を省力・効率化するという観点から、電子平板によりデータのデジタル化を行った。

II 今井三騎堂遺跡の調査



第5図 範囲と調査区

II 今井三騎堂遺跡の調査

1. 遺跡の概要

調査対象域の全面積は、131,750 m²という広大なものであったが、西側斜面の1区 (32,000 m²) や丘陵頂部の2区 (15,000 m²) での遺構分布や遺物包含層は、皆無に近い状況であり、その多くは東側斜面の3区 (17,700 m²)・4区 (26,000 m²)・5区 (16,300 m²)・6区 (24,750 m²) に集中していた。また、2区の南側13,500 m²は、産業廃棄物処理場として利用されていたためにローム層の下位まで掘削されており、遺構の有無を確認することはできなかったが、その東側の6区の状況から見て、やはり希薄であったことが想定される。また、3・5区では古墳時代の墳墓との重複により、部分的に破壊されている遺構も認められるが、元来の散漫な遺構分布状況もあり、その数は少ない。

検出された遺構は、竪穴住居65棟（草創期後半25・前期36・中期中葉1・時期不明3）、土坑445基（草創期後半19・前期64・中期6・時期不明356）の他に、時期の特定できない陥穴19基、集石土坑3基、屋外炉4基などがある。竪穴住居の分布状況から判断して、草創期後半と前期後半の2時期を中心に集落が形成されており、時期不明の各遺構はこの両期のいずれかに帰属するものと考えられる。この両期の集落は、ほぼ同一の複数地点に重複立地しているが、その集落形態は環状ではなく散在的である。

2. 竪穴住居

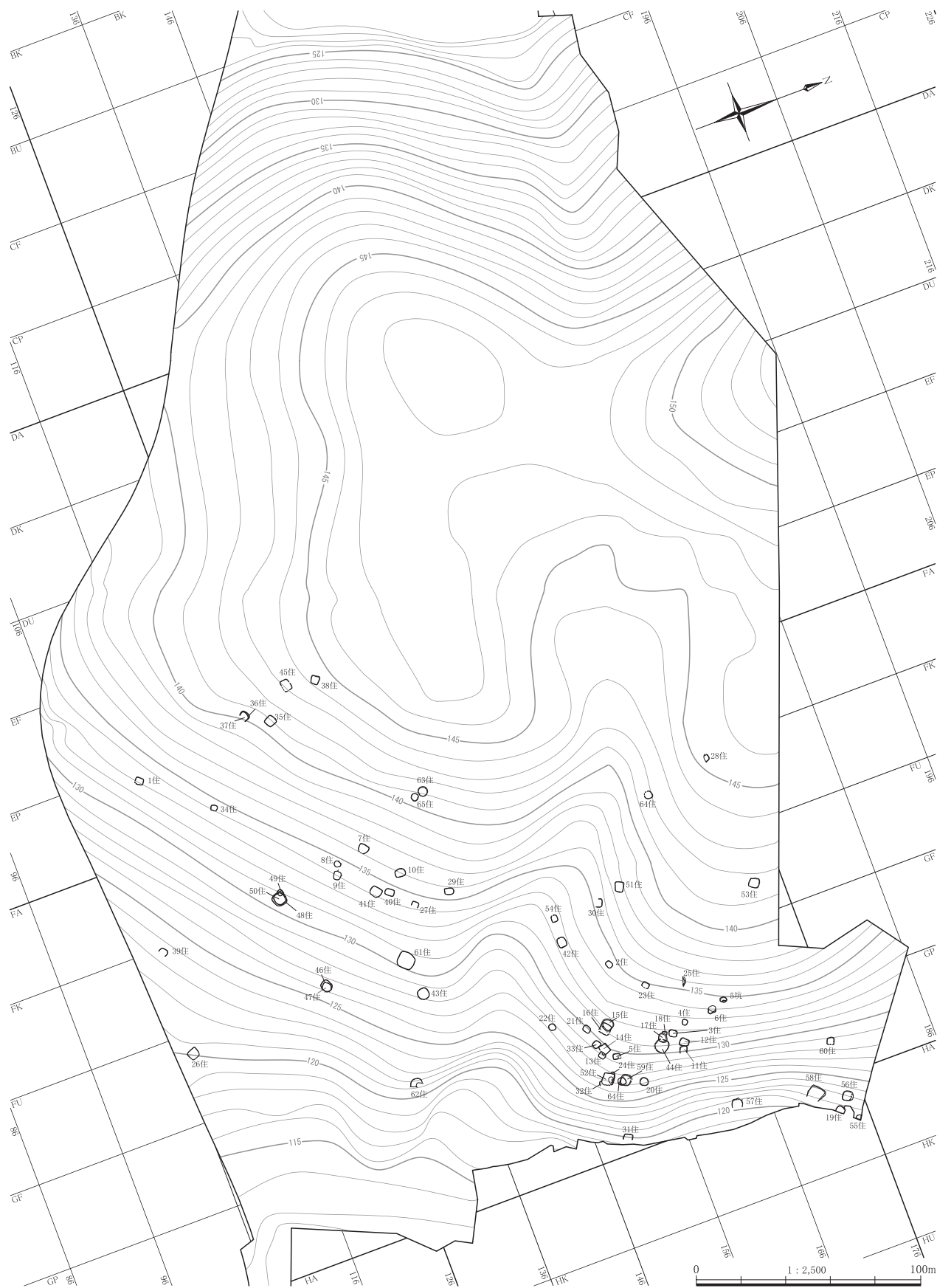
65棟の竪穴住居が検出されているが、その時期別の内訳は草創期後半：井草Ⅰ式期1棟・夏島式期7棟・稲荷台式期17棟、前期：黒浜式期1棟・諸磯a式期15棟・同b式期9棟・同c式期12棟、中期：中葉1棟、時期不明3棟である。

草創期後半の竪穴住居は、長方形の掘り込みを基本形態としているものの、柱穴の配列は規則性に乏し

いだけでなく、その痕跡を確認することが困難な住居も多い。炉については7棟で確認されているが、稲荷台式期を中心した時期にほぼ限定されている。また、規模の面では長辺3～4m×短辺2～3m、深さ20cm前後と小規模なものが多く、脆弱な床面の状況などから、居住期間や使用頻度の低調さが窺える。出土土器は、その大半が小破片かつ少量であり、完形に復元できるものは存在しないが、稲荷台式と山形押型文との伴出事例が1棟（24号住居）で認められる点は注意を要する。出土土器は、不定形な削器やスタンプ形石器・磨り石類を主体にして、少量の石鏃・石錐・三角錐形石器などが組成し、打製石斧の存在は皆無に近い状況である。

前期の竪穴住居については、黒浜式期に良好な事例が無く詳細不明であるが、諸磯a～c式期では平面形態が長方形→隅丸正方形へと変遷し、4本主柱を基本にしつつ、床面積に応じて9・10・12本などのバラエティが認められる。炉は地床炉→土器埋設炉へと変遷し、長辺が7～8mを超える大形住居では土器埋設炉の他に2～3カ所の地床炉が併存するケースもある。住居の規模は、長辺4～5m×短辺3～4m、深さ30～40cmの小形あるいは中形のものが主体的であるが、諸磯b式末～同c式期では極めて少数ながら一辺が7～8mを超える隅丸正形状の大形住居が出現し、特徴的なあり方を示している。また、各住居の床面には、踏み固めによる硬化面が顕著に認められ、かなり長期間の居住や使用頻度の高さを物語っている。出土土器は、炉の埋設土器を除いて完形品に乏しく、破片が大半を占めている。また、少量ながら浮島・興津式系や大木式系、北白川下層式系などの土器片の伴出も認められる。出土土器は、不定形の削器や磨り石類を主体に石鏃・石匙・石錐・打製石斧・磨製石斧・石皿・砥石・多孔石などが組成する。

II 今井三騎堂遺跡の調査



第6図 今井三騎堂遺跡の竪穴住居の分布

中期中葉の竪穴住居は僅かに1棟のみであり、少なくとも草創期後半や前期のような集落を構成しないと想定される。また、他の遺跡においても当該期の集落は、その規模と共に立地数も極めて低調であり、爆発的とも言える中期後半の集落動向とは大きな落差が存在している。住居の平面形は円形を呈し、4本主柱で地床炉を持つ。出土遺物は僅少であり、土器片や石鏃などが散見される程度である。

尚、草創期後半と前期を中心とする竪穴住居からは、量的な多寡のばらつきはあるものの、黒曜石の原石・石核や剥片を出土するケースが多見される。ここでは、時期別における黒曜石の流通システム解明へ向けた資料集積を目的として、X線回折試験による産地同定を実施し、その分析結果を691頁の「IV 科学的分析」に掲載した。また、17・23・44号住居の炉埋没土からは、炭化材小片が検出されているが、その樹種同定結果についても上記項目に掲載しており、黒曜石の産地同定と併せて参照頂きたい。

以下、各竪穴住居の内容について、その詳細を述べるが、埋没土層については時期毎に多くの共通性が認められることから、その記載内容を次のように極力統一している。尚、これに当てはまらない場合や中期の竪穴住居に関しては、個々にその土層内容を記載してある。

●草創期後半の竪穴住居の標準埋没土層

a層:黒褐色土(10YR2/2)を主体に暗褐色土(10YR3/4)が10～20%混入。微量の炭化物粒を含む。締まり弱く、粘性を持つ黒ボク的な土。

b層:暗褐色土(10YR3/4)を主体に黒褐色土(10YR2/2)が10%混入。粘性に乏しく、かなり締まりのある土。

c層:暗褐色土(10YR3/4)とロームブロックとがほぼ1:1で混入。締まり弱く、やや粘性を持つ。

d層:ロームブロックを主体に暗褐色土(10YR3/4)が10～20%混入。締まり弱く、やや粘性を持つ。

●前期の竪穴住居の標準埋没土層

1層. 黒色土(10YR2/1)を主体に黒褐色土(10YR2/3)が10～20%混入。少量の炭化物粒を含む。

2層. 黒褐色土(10YR2/3)を主体に黒色土(10YR2/1)が各20%前後混入。少量の炭化物粒を含む。

3層. ローム土を主体に黒褐色土(10YR2/3)が20～30%混入。微量の炭化物粒を含む。

4層. ローム土を主体に黒褐色土(10YR2/3)が10%混入。微量の炭化物粒を含む。

5層. 床面の掘方埋填土であり、ローム土を主体に黒褐色土(10YR2/3)が5%前後混入。

※ダッシュ付きの土層は、僅かな色調の違いにより分層されることを示す。

● 1号住居

位置 EQ-112 写真 PL4

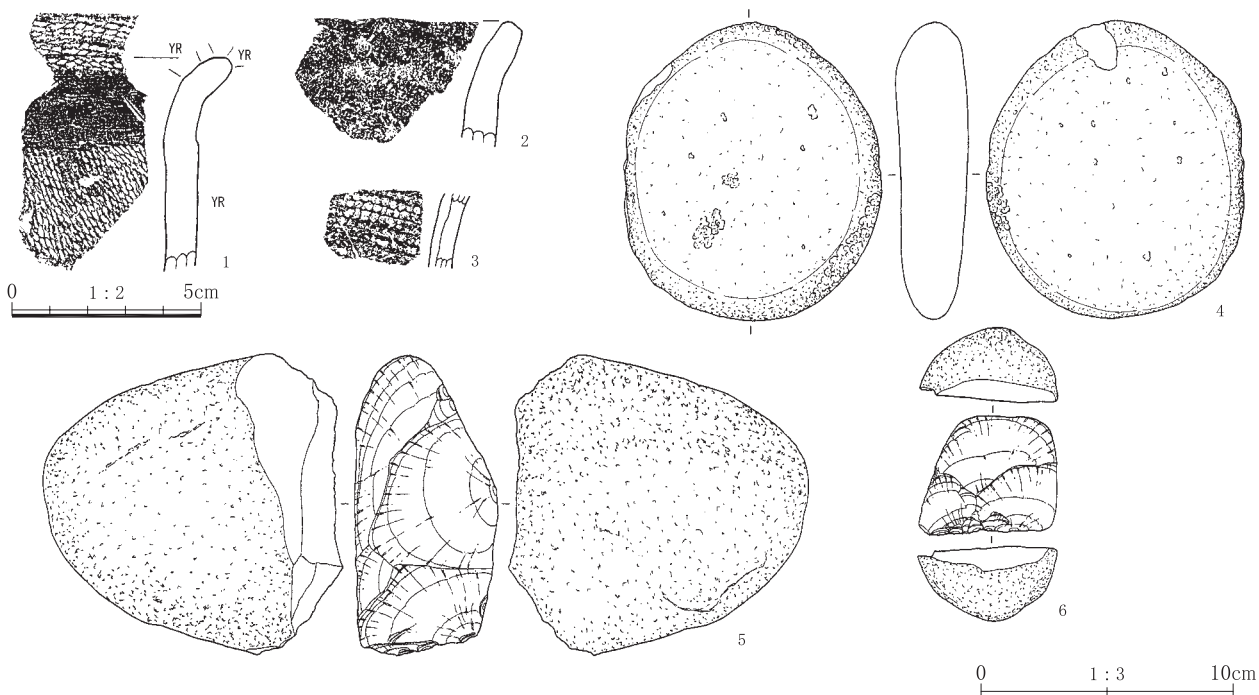
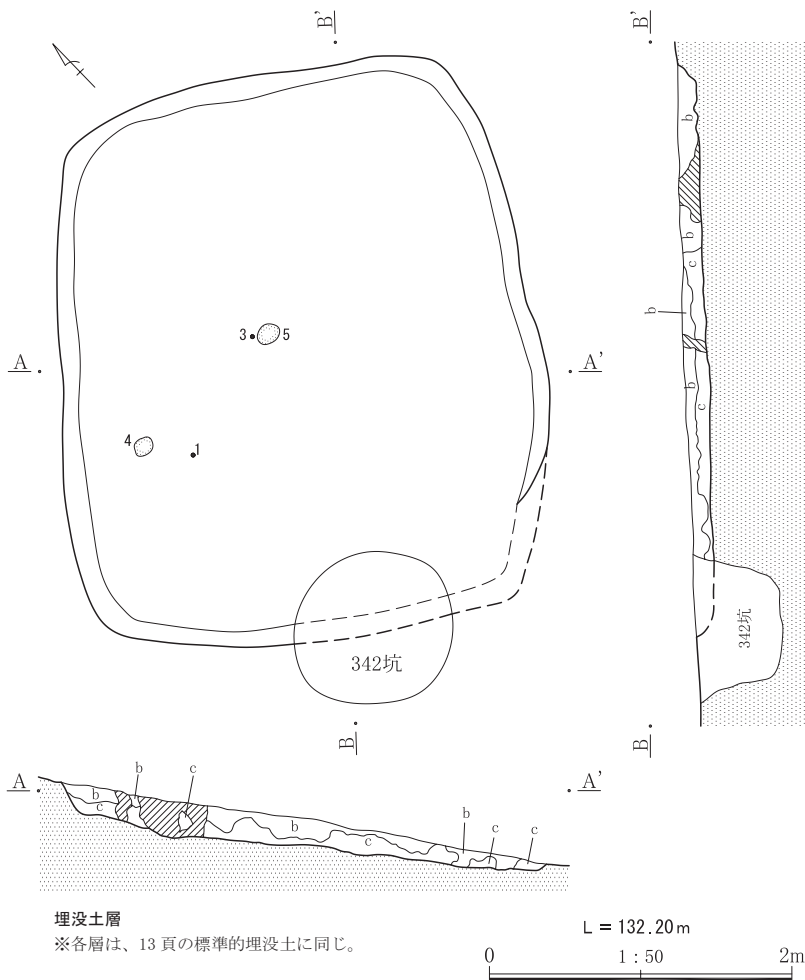
面積 9.42m² 方位 N38度E

重複 平安時代に比定される342号土坑により南側壁面を切られている。

形状 斜面地の等高線方向である南北方向に長軸を持つ長方形で、長辺3.78m×短辺3.20m、深さ2～21cmの規模。四辺の壁面は約65度の緩い角度で掘り込まれ、東辺を除いてほぼ直線的な走向を示す。

炉 被熱により赤化・焼土化した箇所は検出されず、少なくとも屋内での顕著な焚火行為が存在しなかったと判断される。

柱穴 精査にかかわらず未検出であったが、同期の9・10号住居などの柱穴も径・深度ともに小規模で黒色土の埋没が乏しい不明瞭なものであり、当住居でも深度の浅い柱穴が存在した可能性を否定できない。



第7図 1号住居と出土遺物

床面 勾配10度の斜面地のローム層（VI層）を最大21cm掘り込んで床面を構築する。床面は平坦ではなく、自然地形と同様に約35cmの比高差で西側方向へ緩傾斜している。また、敲き床状の堅緻な面はなく、掘り込み深度の浅いことを含めて全体的に脆弱であり、利用期間の短さを窺わせる。

埋没土 竪穴の深度が浅いために、埋没土の堆積も不良であるが、b層の暗褐色土を主体に斜面上位方向からの自然堆積の状況を示す。

遺物 僅かに7点の遺物（土器3、石器4）が、床面から浮いて埋没土のa層を中心に出土している。土器は破片のみであり、撚糸文1点（1）、縄文1点（3）、無文1点（2）などがある。石器は磨り石類1点（4）、石核2点（5・6）、剥片1点のみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が井草Ⅱ式を主体としており、当該期の所産と考えられる。

（観察表：10・27頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【1号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	井草Ⅱ	総計
合計	3	3

縄文原体別点数

井草Ⅱ式			
分類	2a	9b	18
合計	1	1	1

分類別点数 井草Ⅱ式

分類	2	3	4
合計	1	1	1

胎土別点数

胎土	型式	
	井草Ⅱ	
A	2	
B	1	

（石器）

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	磨石類	剥片	石核	
合計	1	1	2	4

分類別点数 磨石類

分類	2類
形態	ac
合計	1

石材別の点数と重量

磨石類		剥片		石核	
コート°	19	コート°	1	コート°	1
点数	1	点数	1	点数	1
重量	519	重量	未計測	重量	82.3
					908

（観察表：10・27頁）

●2号住居

位置 GE-154

写真 PL4・5

面積 6.65 m²

方位 N 67度E

形状 斜面地の等高線方向である東西方向に長軸を持つ隅丸長形状で、長辺3.15m×短辺2.57m、深さ4～30cmの規模。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺ともにほぼ直線的に走向している。

柱穴 深度の深い明瞭な掘り込みを持つ柱穴は検出されていないが、深度の浅い柱穴が存在した可能性を否定できない。

床面 勾配約8度の斜面地のローム層（VI層）を最大30cm掘り込んで床面を構築する。床面は平坦ではなく、自然地形と同様に約29cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に脆弱な床面状況を呈している。

埋没土 中央部の最上位に黒ボク的なa層が堆積し、全体的には斜面上位方向からのレンズ状の自然堆積状況を示す。

遺物 僅かに36点の遺物（土器16、石器19）が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、全て埋没土上位のa・c層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は破片のみであるが、夏島式の緻密な撚糸文4点（3・4・6）・絡条体条痕文1点（1）・縄文2点（5・7）など7点、稲荷台式のやや粗雑な撚糸文1点（2）・無文2点（8・9）など9点がある。石器は削器2点（10・11）、磨り石類3点（12～14）、剥片14点のみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器の数量が拮抗していることから確定できないが、炉や柱穴などの屋内施設の希薄さを考慮すれば、夏島式期の可能性が高い。

その他 炉と周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

【2号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	総計
合計	7	9	16

縄文原形別点数

型式	2a	2b	9b	19b
合計	1	1	3	1

分類別点数

夏島式			
分類	2b	3	不明
合計	1	5	1

稲荷台式

分類	3	4	不明
合計	1	2	6

稲荷台式

分類	9b	18
合計	1	2

胎土別点数

胎土	型式		
	夏島	稲荷台	
A	6	3	

(石器)

器種別点数

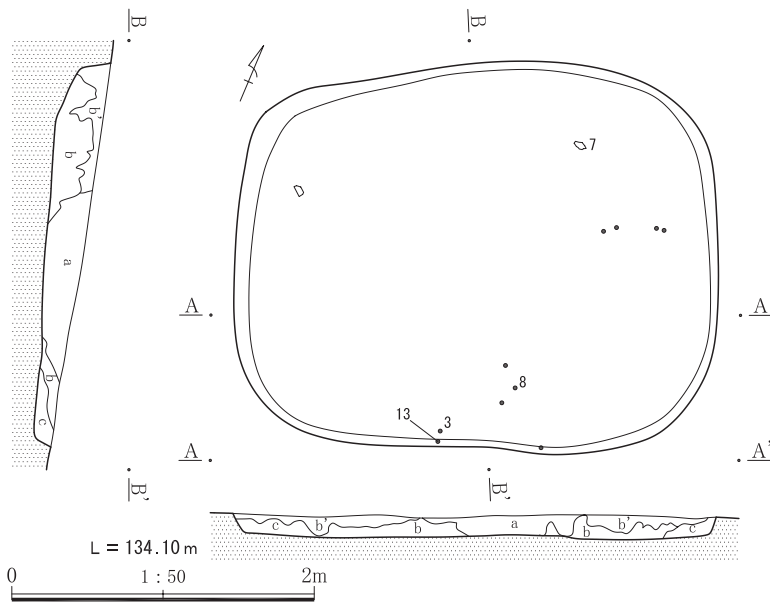
系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	削器類	磨石類	剥片	
合計	2	3	14	19

分類別点数

搔器・削器		磨石類	
分類	1類	分類	3類 5類
合計	2	形態	a 不明
		合計	2 1

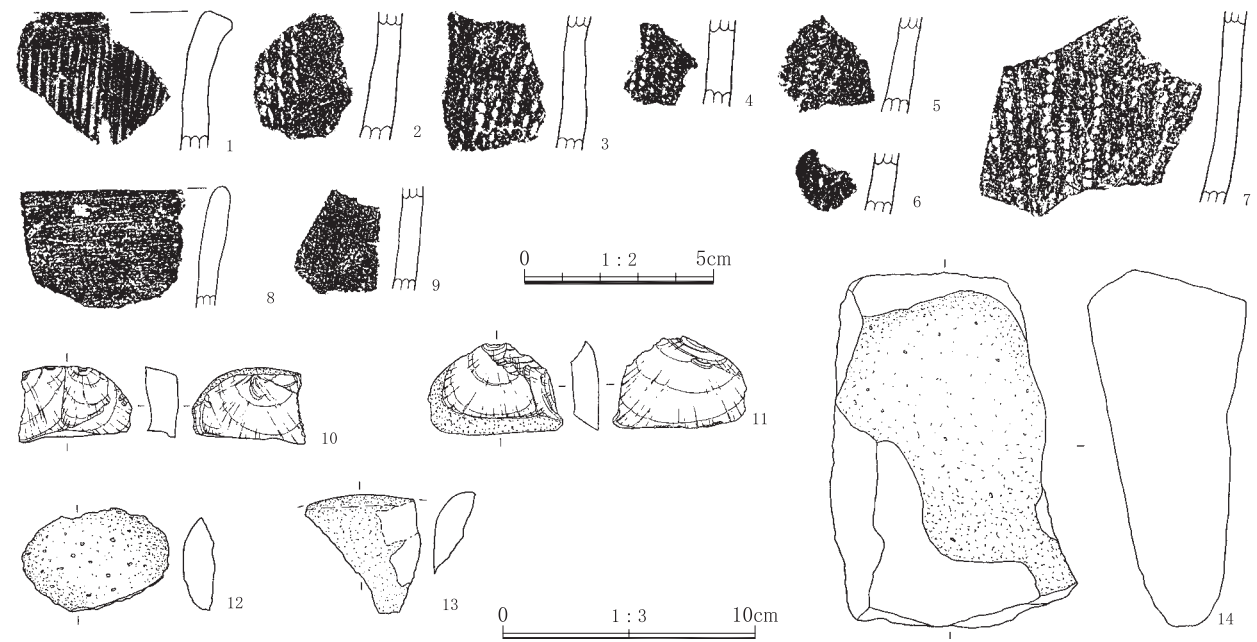
石材別の点数と重量

搔器・削器		磨石類		剥片	
コード	1	コード	4	コード	1 9
点数	2	点数	3	点数	13 1
重量	50.6	重量	1151	重量	未計測 未計測



埋没土層

※各層は、13頁の標準的埋没土に同じ。



第8図 2号住居と出土遺物

● 3号住居

位置 GN-158

写真 PL 5

面積 8.80 m²

方位 N 34 度 E

形状 斜面地の等高線方向に並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 3.80 m×短辺 3.05 m、深さ 2～34 cmの規模。東辺を除く他の壁面は約 40～60 度の緩やかな角度で掘り込まれ、やや湾曲した走向となる。斜面下位の東辺の立ち上がりは確認できないが、図示した形状・規模に近似すると想定される。

柱穴 深度の深い明瞭な掘り込みを持つ柱穴は検出されていないが、深度の浅い柱穴が存在した可能性を否定できない。

床面 勾配約 11 度の斜面地のローム層（VI層）を最大 34 cm掘り込んで床面を構築する。床面は若干の凹凸を有し、自然地形と同様に約 36 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。1・2号住居と同様に踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈している。

埋没土 最上位にロームブロックを主体とする c 層がレンズ状に堆積するが、自然埋没状況を示すと考えられる。

遺物 僅かに 20 点の遺物（土器 9、石器 11）が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、全て埋没土上位の a 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は破片のみであり、夏島式の捺糸文 6 点（1～3・5～7）・絡条体条痕文 1 点（4）の他に、稲荷台式 1 点と型式不明 1 点がある。石器は石鏃 1 点（8）、石皿 1 点（9）、剥片 9 点のみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が夏島式を主体としており、当該期の所産と考えられる。

(観察表：10・27 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【3号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	時期不明	総計
合計	7	1	1	9

分類別点数

夏島式

分類	2c	3
合計	2	5

縄文原体別点数

夏島式

分類	9b	19b
合計	6	1

胎土別点数

胎土	型式	
	夏島	
A	6	
D	1	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	石鏃	石皿	剥片	
合計	1	1	9	11

分類別点数

石鏃

分類	9類
合計	1

石皿

分類	5類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コード	2
点数	1
重量	0.5

石皿

コード	4
点数	1
重量	4000

剥片

コード	1	2
点数	8	1
重量	未計測	未計測

● 4号住居

位置 GN-160

写真 PL 6

面積 4.55 m²

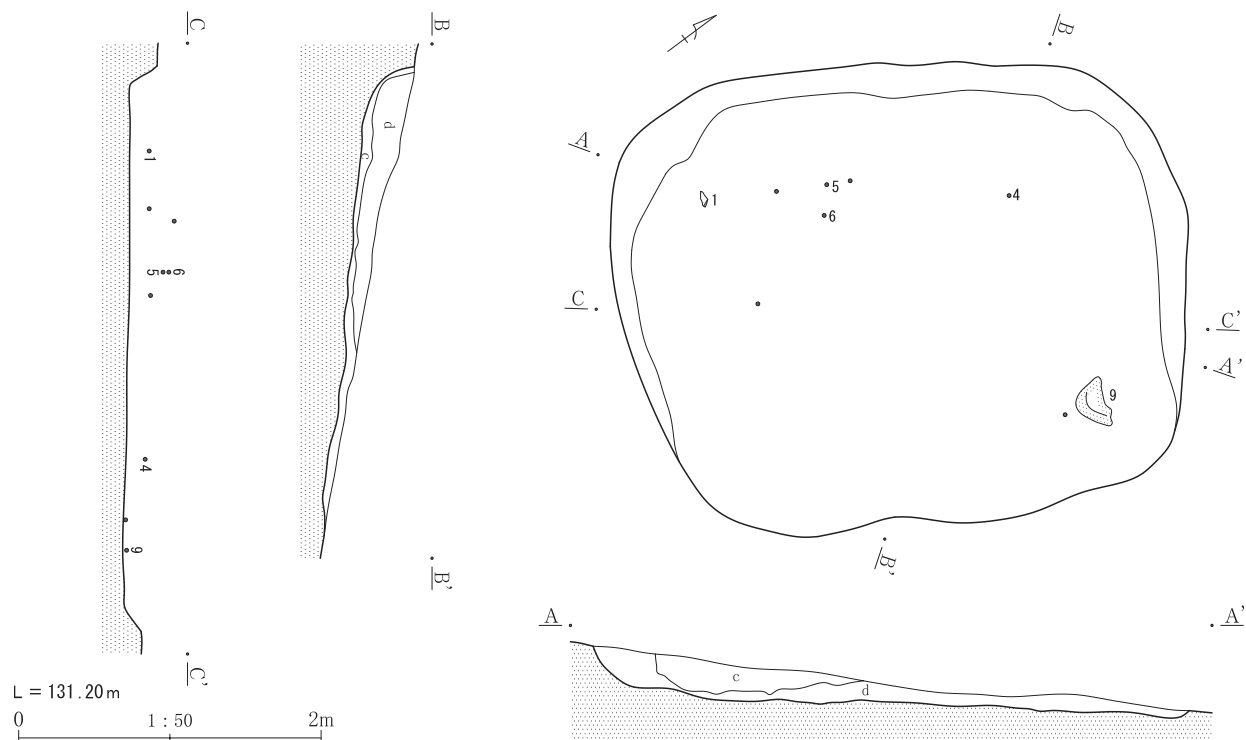
方位 N 59 度 W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ隅丸台形状で、長辺 2.61 m×短辺 2.37 m、深さ 3～17 cmの規模。四辺の壁面は約 70～80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、若干湾曲しつつ走向している。掘り込み深度も浅く、小規模である。

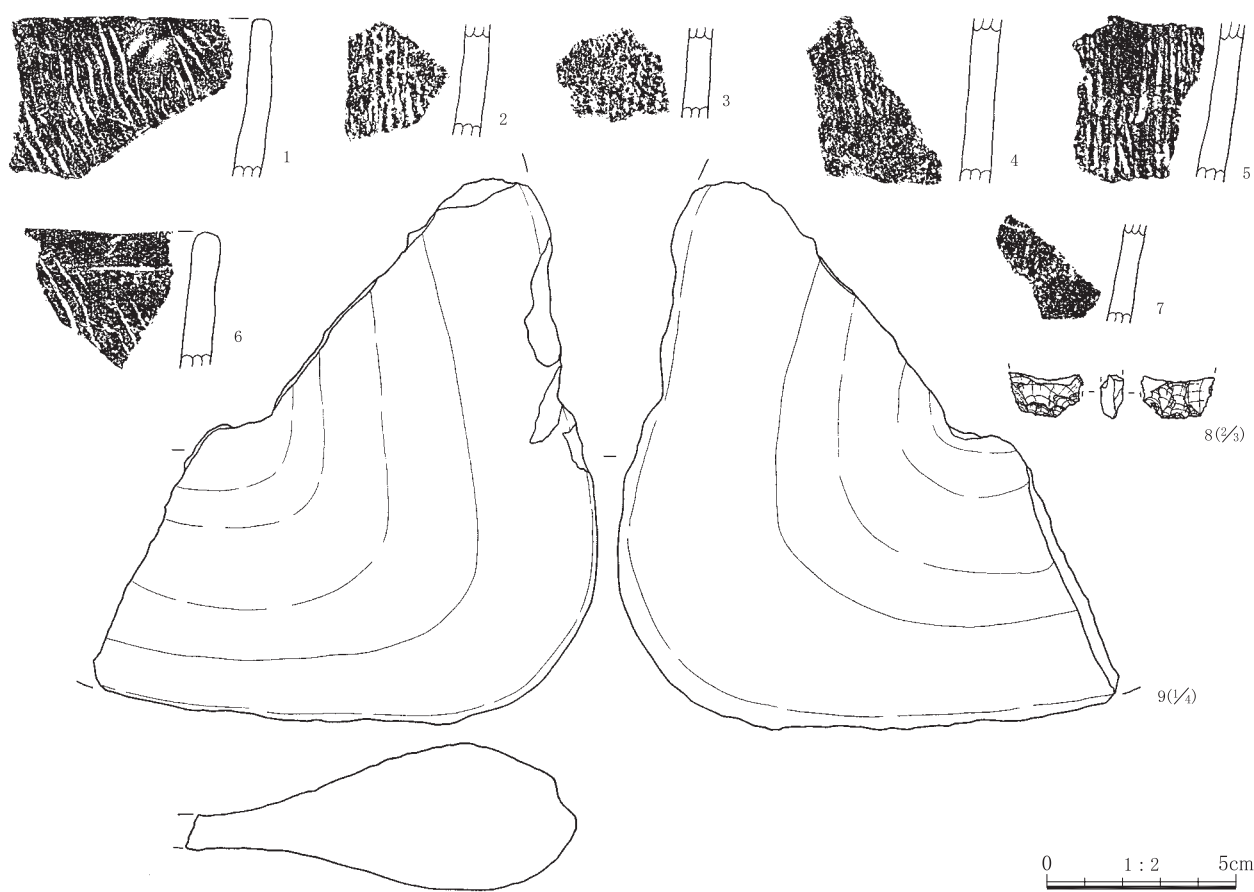
柱穴 深度の深い明瞭な掘り込みを持つ柱穴は 1 本のみであり、他に深度の浅い柱穴が存在した可能性もあるが、検出できなかった。P1 の規模は、直径 20 cm×深さ 32 cmの規模。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層（VI層）を最大 17 cm掘り込んで床面を構築する。床面は若干の凹凸を持ち、自然地形と同様に約 38 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

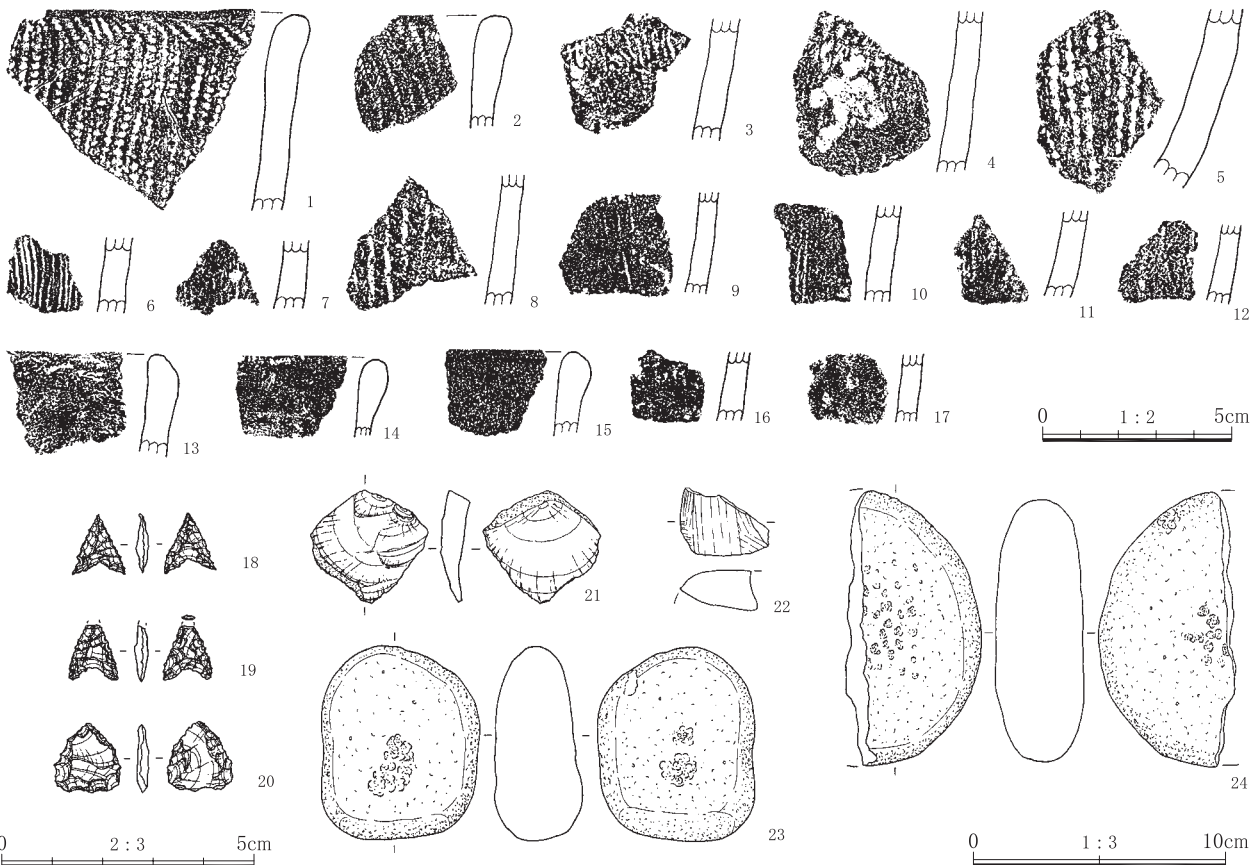
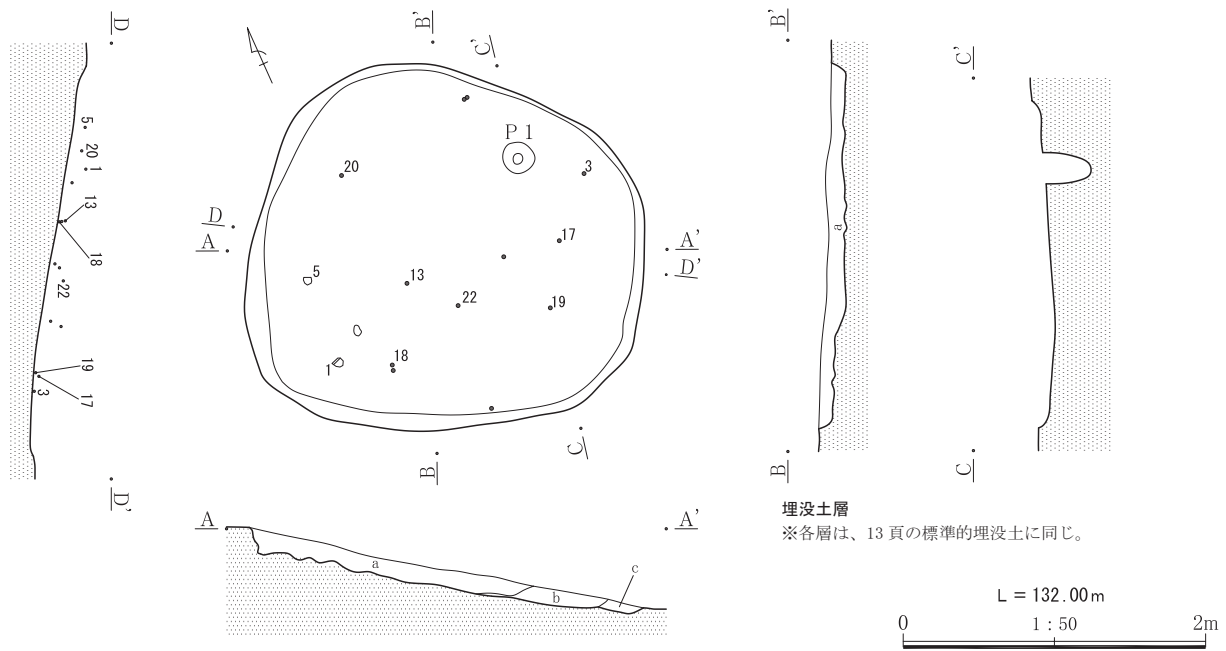
II 今井三騎堂遺跡の調査



埋没土層
※各層は、13頁の標準的埋没土に同じ。



第9図 3号住居と出土遺物



第10図 4号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

埋没土 黒褐色土の a 層を中心にレンズ状堆積しており、斜面上位方向からの自然埋没状況を示すと想定される。

遺物 総数 64 点の遺物（土器 31、石器 33）が存在するが、床面に密着したものは少なく（13・17～19）、大半が埋没土上位の a 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は破片のみであり、夏島式の縄文施文 5 点（1・2・4・5・11）、撚糸文 1 点（6）・絡条体条痕文 2 点（3・7）・無文 1 点（13）など 12 点と、稲荷台式の撚糸文 3 点（8・9・12）・絡条体条痕文 1 点（10）・無文 4 点（14～17）など 14 点の他に、諸磯 b 式 2 点、型式不明 3 点などがある。石器は石鏃 3 点（18～21）、削器 2 点（21）磨製石斧 1 点（22）、磨り石類 3 点（23・24）、剥片 24 点などが認められる。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器の数量が拮抗していることから確定できないが、2号住居と同様に炉や柱穴などの屋内施設の希薄さを考慮すれば、夏島式期の可能性が高い。

（観察表：10・27 頁）

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【4号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	諸磯b	時期不明	総計
合計	12	14	2	3	31

分類別点数

夏島式

分類	2a	2b	3	4	不明
合計	1	1	6	1	3

稲荷台式

分類	3	4	不明
合計	4	4	6

諸磯b式

分類	3類
合計	2

縄文原体別点数

夏島式

分類	2b	9b	18	19b
合計	5	1	1	2

稲荷台式

分類	9b	18	19b
合計	3	4	1

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台
A		5	7
D		4	1

（石器）

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他	総計	
器種	石鏃	削器類	磨石類	磨製石斧	剥片	
合計	3	2	3	1	24	33

分類別点数

石鏃

分類	1類	4類
合計	1	2

搔器・削器

分類	2類
合計	2

磨石類

分類	2類	4類	5類
形態	ac	ac	a
合計	1	1	1

磨製石斧

分類	4類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コード	2
点数	3
重量	1.1

搔器・削器

コード	1
点数	2 (1)
重量	(18.1)

磨石類

コード	4
点数	3 (2)
重量	(446)

磨製石斧

コード	10
点数	1
重量	18.5

剥片

コード	1	2
点数	22	2
重量	未計測	未計測

（ ）内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

● 5号住居

位置 GO-151

写真 PL 6・7

面積 6.80 m²

方位 N 8 度 E

重複 北壁から中央部にかけて 323・325 号土坑と重複するが、各土坑により切られている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 3.43 m × 短辺 2.54 m、深さ 2～17 cm の規模。四辺の壁面は約 50～80 度の角度で掘り込まれ、ほぼ直線的に走向しているが、掘り込み深度は極めて浅い。

柱穴 ある程度の深度と明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、南西隅に 2 本存在するのみである。他に深度の浅い柱穴が存在した可能性もあるが、検出できなかった。各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：20×16 cm、P2：19×20 cm の規模。

床面 勾配約 11 度の斜面地のローム層（VI 層）を最大 17 cm 掘り込んで床面を構築する。床面の凹凸は少ないが、自然地形と同様に約 15 cm の比高差で東側から西側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

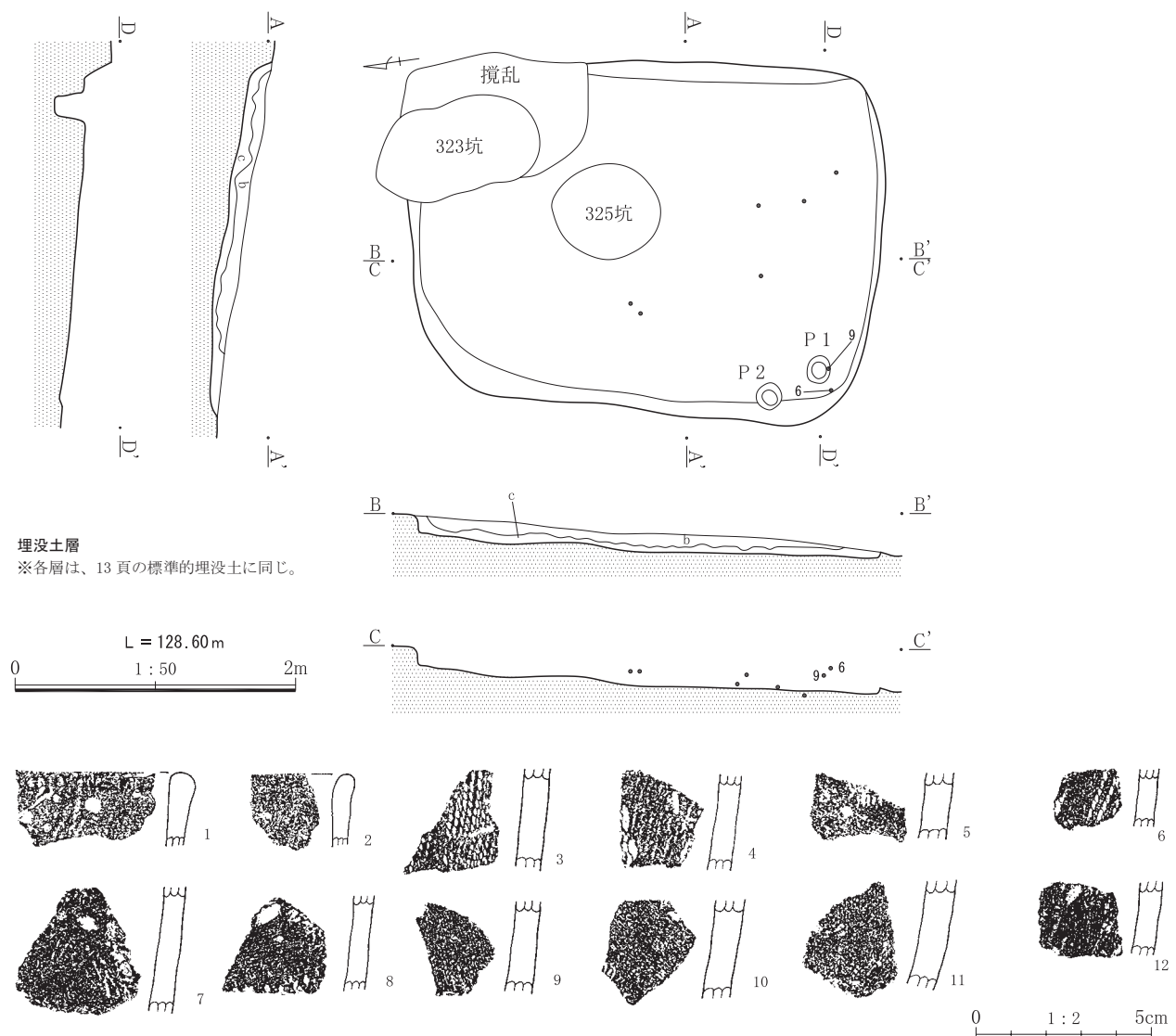
埋没土 薄層ながらも b・c 層がレンズ状堆積しており、自然埋没状況を示すと想定される。

遺物 僅かに 39 点の遺物（土器 12、石器 27）が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、全て埋没土上位の a 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は破片のみであり、夏島式の縄文 2 点（1・4）・撚糸文 1 点（3）・無文 1 点（2）など 5 点と、稲荷台式の撚糸文（6）・無文 7 点（5・7～12）など 13 点の他に、型式不明 3 点がある。尚、5・10 の破片は同一個体である。石器は製品が皆無であり、剥片が 17 点存在するに過ぎない。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器の数量が拮抗していることから確定できないが、2・4号住居と同様に炉や柱穴などの屋内施設の希薄さを考慮すれば、夏島式期の可能性が高い。

（観察表：10 頁）

その他 炉と周溝は検出されなかった。



第 11 図 5号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【5号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	時期不明	総計
合計	5	13	3	21

分類別点数

夏島式				稲荷台式			
分類	2a	3	4	不明	分類	3	不明
合計	1	2	1	1	合計	8	5

縄文原体別点数

夏島式				稲荷台式		
分類	2b	9b	18	分類	9b	7
合計	2	1	1	合計	1	18

胎土別点数

胎土	型式		
	夏島	稲荷台	
A	4	8	

(石器)

器種別点数

系列	その他		総計
器種	剥片	自然石	
合計	17	1	18

石材別の点数と重量

剥片		
コード	点数	重量
1	9	
16	1	
未計測	未計測	未計測

● 6号住居

位置 GN-163

写真 PL7

面積 約6.2㎡

方位 N4度E

重複 北壁から西壁にかけて、27号倒木痕により切られている。

形状 倒木痕との重複により、判然としない点もあるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形状で、長辺3.5m×短辺約2.5m、深さ4～23cmの規模。残存する壁面は約60度の緩い角度で掘り込まれ、内外に湾曲した走向を見せる。

炉 倒木痕によって床面の過半を壊されていることもあり、炉の存在を示す赤化・焼土化した箇所は検出されなかった。

柱穴 明瞭な掘り方と深度を持つ柱穴は、存在しない可能性が高い。

床面 斜面地のローム層(VI層)を最大23cm掘り込んで床面を構築する。残存する床面の凹凸は少ないが、自然地形と同様に東側から西側方向へ緩傾斜し、踏み固めによる堅緻な面は認められない。

埋没土 倒木痕の影響により、堆積状況の詳細は不明である。

遺物 僅少なながら総数31点の遺物(土器7、石器24)土器は破片のみであり、夏島式の捺糸文1点(1)・縄文2点(2・4)と、稲荷台式の無文3点(3・6・7)・絡条体条痕文1点(5)などがある。石器は削器2点(8・9)、剥片18点、礫塊4点のみで、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器の数量が拮抗していることから確定できないが、内容的には夏島式期の可能性が高い。

(観察表:10・27頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【6号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	総計
合計	3	4	7

分類別点数

夏島式			稲荷台式		
分類	2b	3	分類	3	4
合計	2	1	合計	1	3

縄文原体別点数

夏島式			稲荷台式		
分類	2b	9b	分類	18	19b
合計	2	1	合計	3	1

胎土別点数

胎土	型式	
	夏島	稲荷台
A	1	3

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		その他		総計
	搔器・削器	剥片	礫塊		
合計	2	18	4	24	

分類別点数

搔器・削器		
分類	1類	2類
合計	1	1

石材別の点数と重量

搔器・削器			礫塊		
コード	点数	重量	コード	点数	重量
1	2	53.2	4	9	
3	1		3	1	
未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

剥片

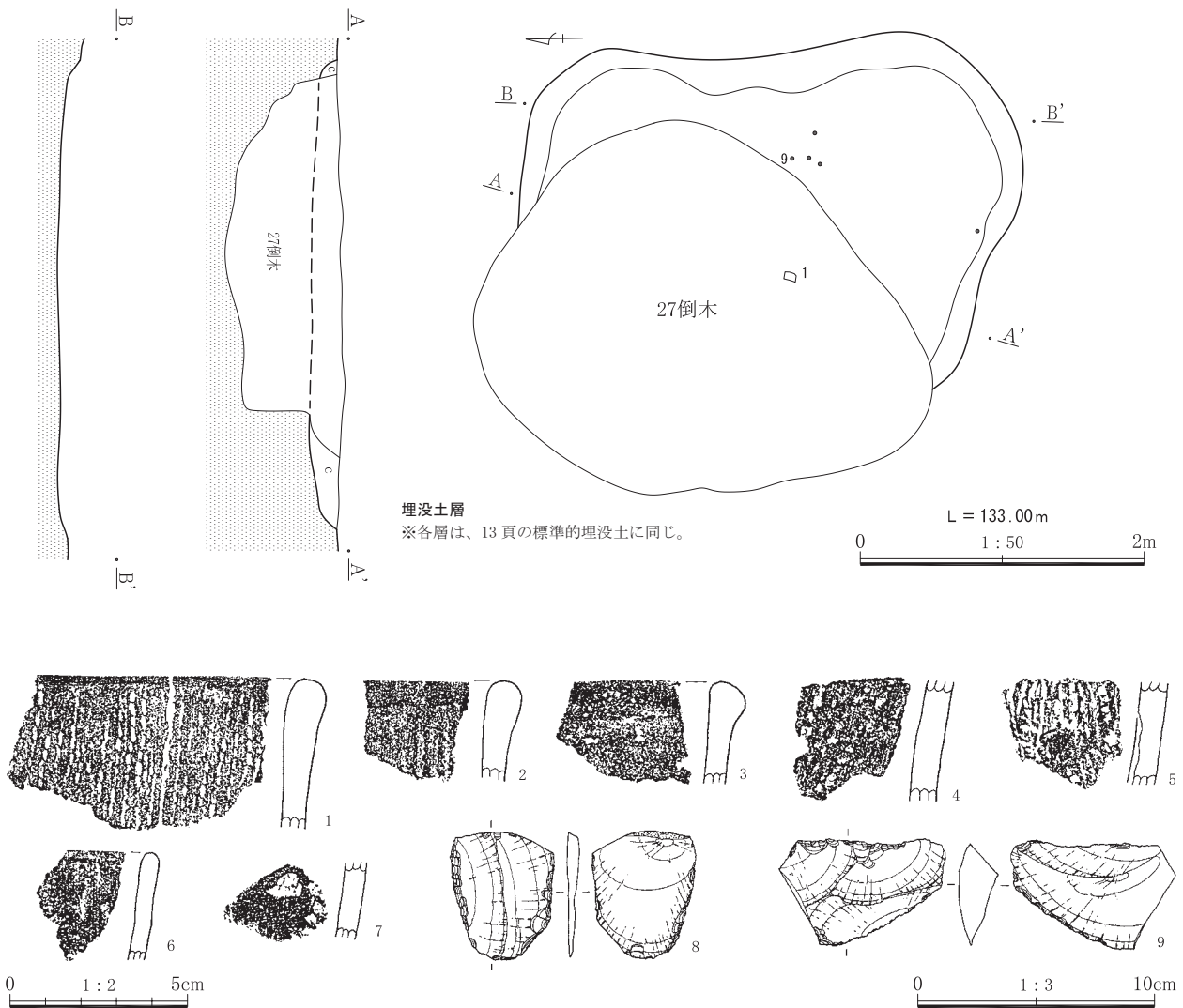
コード	1	2	不明
点数	15	1	2
重量	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	3	4

被熱礫の石材別点数

コード	
4	1



第12図 6号住居と出土遺物

● 7号住居

位置 FH-133

写真 PL 8・9

面積 14.60 m²

方位 N 53度E

重複 北東隅で377号土坑と重複するが、当住居との新旧関係は不明である。

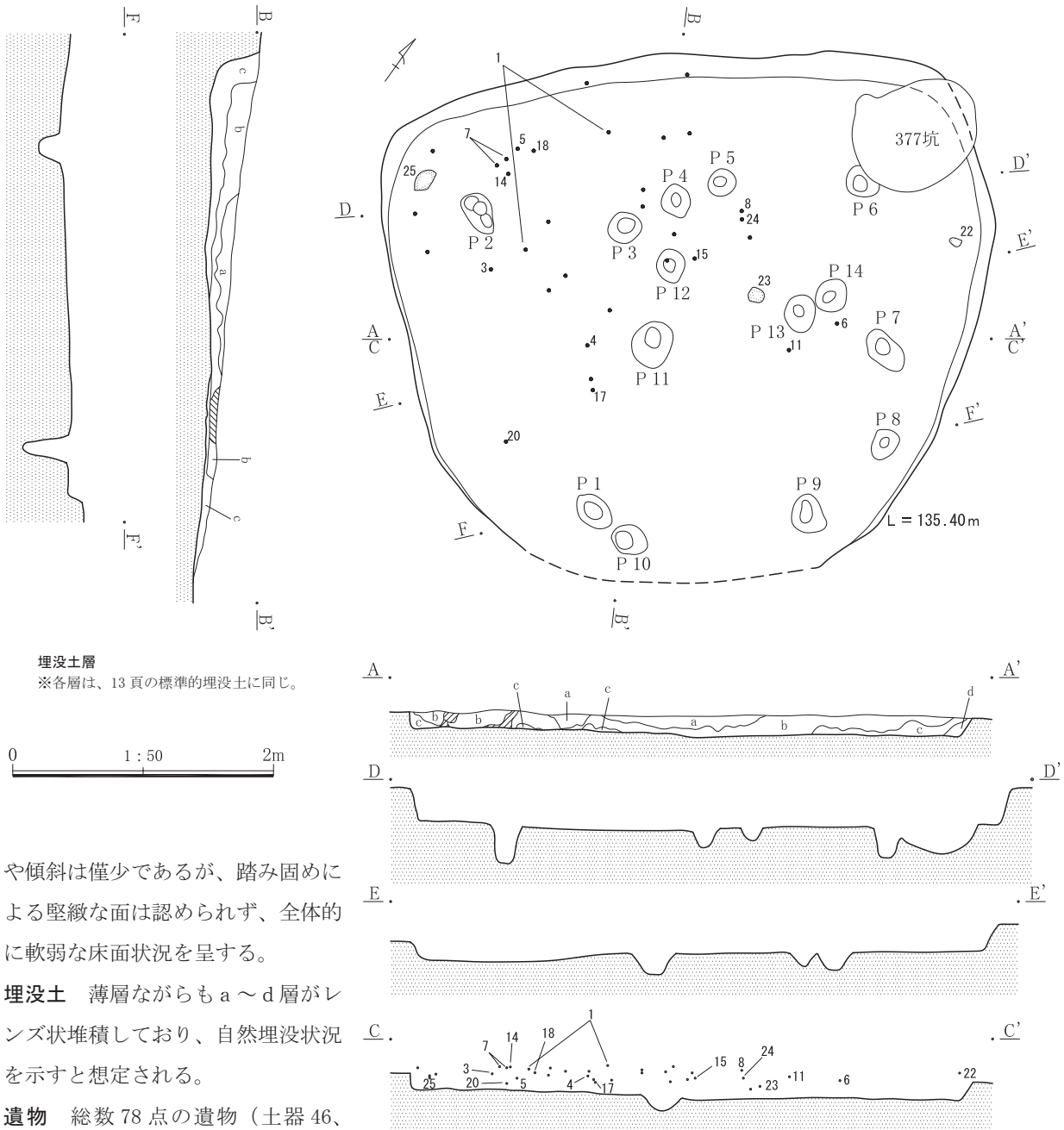
形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺4.60m×短辺4.07m、深さ26～28cmの規模。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、若干湾曲しながら走向している。

柱穴 柱穴と想定される明瞭な掘り方と深度を有するものは、合計14本が確認されている。各柱穴の配列に明確な規則性を認めることはできないが、P2～P6

のグループとP8～P10・P1のグループが相互に対向する状況も看取される。基本的に、住居の長軸に並行して2単位の柱穴列が配置される構造と考えられる。また、P2・P6・P8～P10・P13などはその深度が25cmを超えており、主柱的な機能も窺える。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:33×15cm、P2:34×25cm、P3:27×20cm、P4:26×14cm、P5:22×16cm、P6:27×23cm、P7:39×22cm、P8:24×35cm、P9:30×28cm、P10:30×26cm、P11:35×15cm、P12:26×17cm、P13:29×28cm、P14:26×24cmの規模。

床面 勾配約7度の斜面地のローム層(VI層)をほぼ水平に28cm掘り込んで床面を構築する。床面の凹凸

II 今井三騎堂遺跡の調査



や傾斜は僅少であるが、踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 薄層ながらもa～d層がレンズ状堆積しており、自然埋没状況を示すと想定される。

遺物 総数78点の遺物（土器46、石器32）が存在するが、床面に密着したものは少なく（3・6・10・

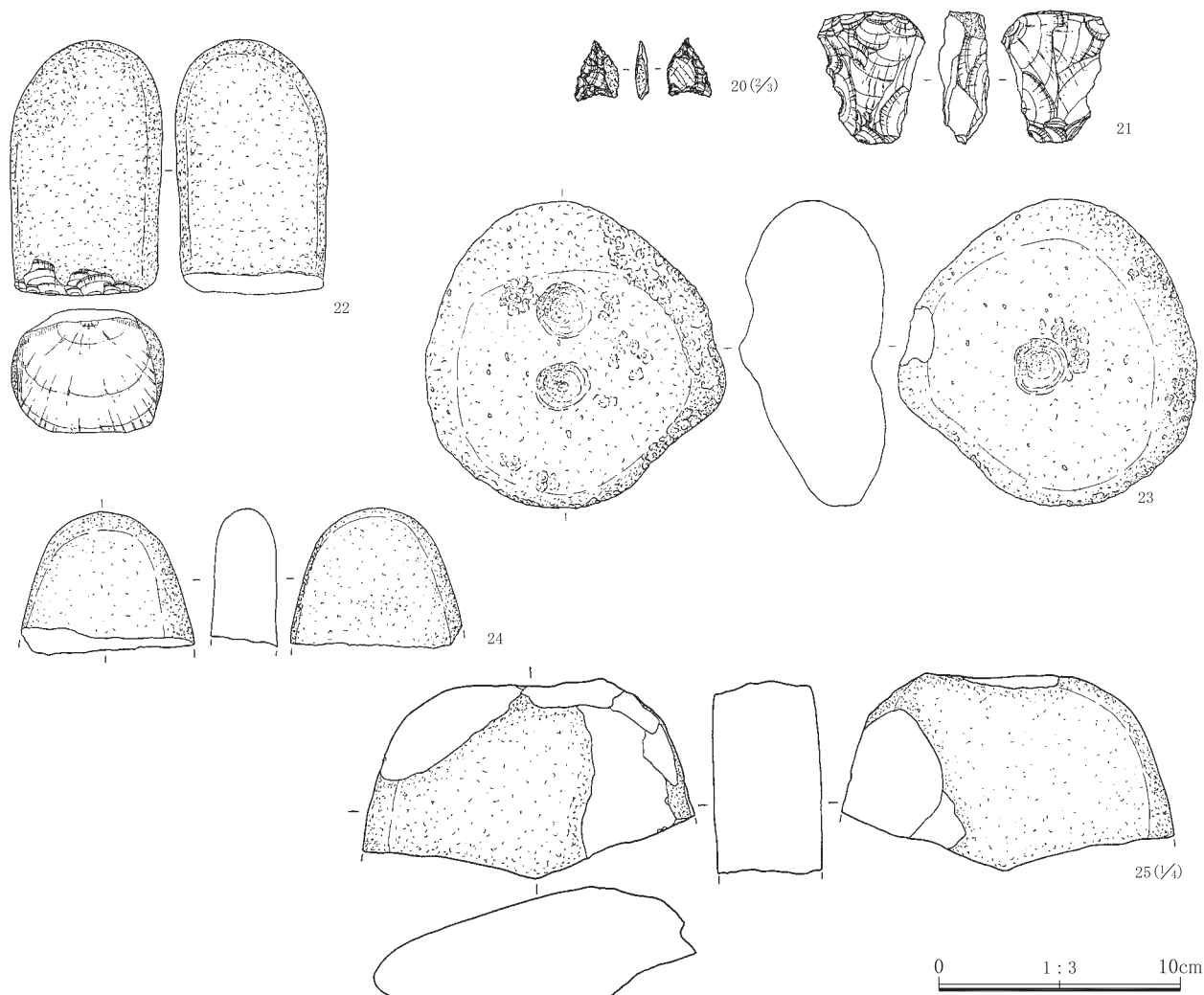
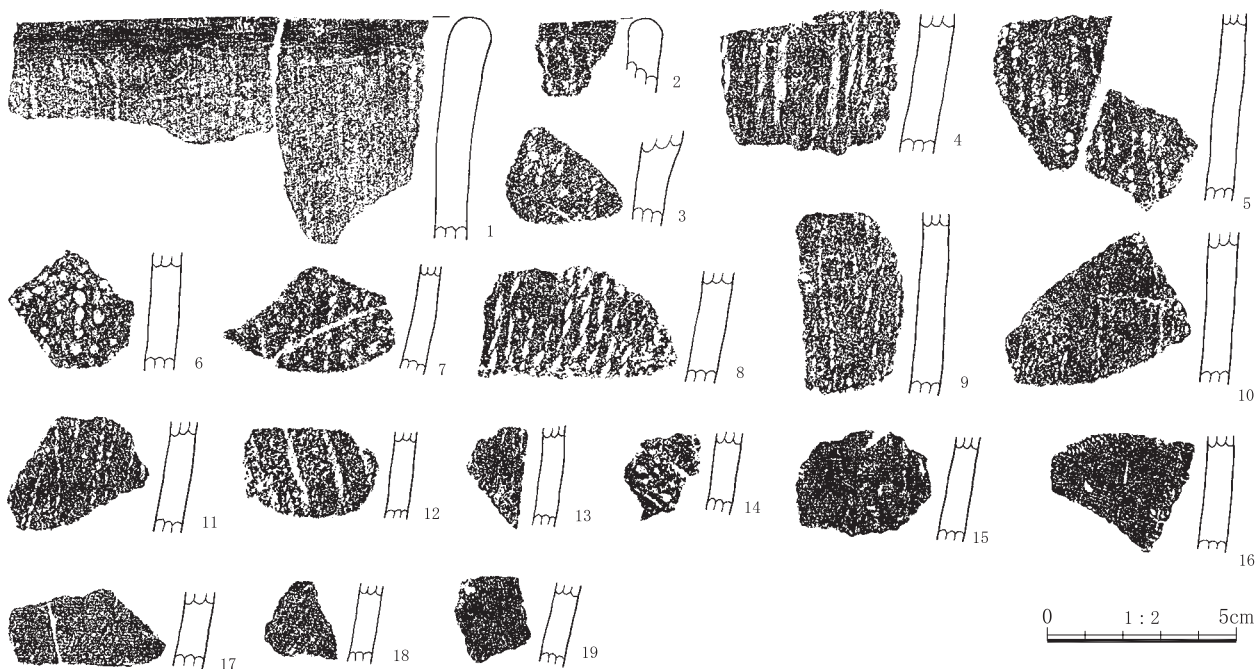
17・19・20・23・25）、その大半が埋没土上位のa・b層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は破片のみであり、夏島式の縄文20点（1～3・5～7）、稻荷台式の縄文5点（4・11～14）・撚糸文4点（8～10・17）・無文4点（15・16・18・19）・不明1点など計14点の他に、花積下層式2点、諸磯a式3点、同b式1点、同c式3点、型式不明3点がある。尚、9～11・16・17は同一個体である。石器

は石鏃2点（20）、石核1点（21）、スタンプ形石器1点（22）、磨り石類2点（23・24）、石皿1点（25）、剥片23点、礫塊2点などが認められる。

当住居の時期に関しては、夏島式土器の数量や内容が他を凌駕していることから、当該期の所産と想定される。（観察表：10・27頁）

その他 炉と周溝は検出されなかった。

第13図 7号住居



第14图 7号住居出土遗物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【7号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	花積下層	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	20	14	2	3	1	3	3	46

分類別点数

夏島式			稲荷台式			花積下層式	
分類	2b	3	不明	分類	3	4	不明
合計	2	4	14	合計	9	4	1
				分類	2類		
				合計	2		

諸磯a式		諸磯b式		諸磯c式		胎土別点数	
分類	2類	分類	2類	分類	2類	型式	胎土
合計	3	合計	1	合計	3	胎土	花積
						A	—
						C	25
						I	1
							—

縄文原体別点数

夏島式		稲荷台式					
分類	2b	分類	1a	2b	9a	9b	18
合計	8	合計	1	4	3	1	4

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列				その他			総計	
器種	石鏃	削器類	スタンプ形	磨石類	石皿	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	2	1	1	2	1	23	1	1	1	33

分類別点数

石鏃		削器・削器		磨石類		石皿		スタンプ形石器	
分類	2類	9類	分類	1類	分類	2類	4類	分類	2類
合計	1	1	合計	1	形態	ac	abc	合計	1
						合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		削器・削器		スタンプ形石器		磨石類		石皿	
コード	2	コード	1	コード	4	コード	4	コード	4
点数	2 (1)	点数	1	点数	1	点数	2	点数	1
重量	(0.3)	重量	40.3	重量	540	重量	1001	重量	1641

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

剥片			石核		礫塊		礫塊の被熱状況			
コード	1	2	33	コード	1	コード	4	分類	2	総計
点数	20	2	1	点数	1	点数	1	合計	1	1
重量	未計測	未計測	未計測	重量	48.0	重量	未計測			

● 8号住居

位置 F I -129

写真 P L 9

面積 5.52 m²

方位 N 25度 E

重複 南半部で9号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ不整形形状で、長辺 3.07 m × 短辺 2.73 m、深さ 9 ~ 43 cm の規模。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、若干湾曲している。

柱穴 柱穴と想定される明瞭な掘り方・深度を有するものは、3本が確認されている。その配列は北側の長辺にほぼ平行しており、各柱穴の芯心間の距離は P1 ~ P2 : 1.13 m、P2 ~ P3 : 1.30 m である。これに対

向する南側の柱穴列は不明瞭だが、掘り込みの浅いものが存在した可能性もある。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1 : 20 × 13 cm、P2 : 18 × 11 cm、P3 : 19 × 9 cm の規模。

床面 勾配約 8 度の斜面地のローム層 (VI 層) をほぼ水平に 28 cm 掘り込んで床面を構築する。床面は若干の凹凸を有し、自然地形と同様に約 34 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱である。

埋没土 a・b 層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅少なながら総数 14 点の遺物 (土器 7、石器 7) が存在するが、その全てが埋没土上位の a 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は破片のみであり、夏島式の縄文施文 6 点 (1 ~ 5) の他に、型式不明 1 点がある。石器はスタンプ形石器 1 点 (6)、剥片 5 点、礫塊 1 点のみで、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が夏島式を主体にすることから、当該期の所産と考えられる。(観察表 : 10・27 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【8号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	時期不明	総計
合計	6	1	7

分類別点数

夏島式		不明
分類	3	不明
合計	5	1

縄文原体別点数

夏島式	
分類	2b
合計	5

胎土別点数

型式		夏島
胎土	B	5

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	スタンプ形	剥片	礫塊	
合計	1	6	1	8

分類別点数

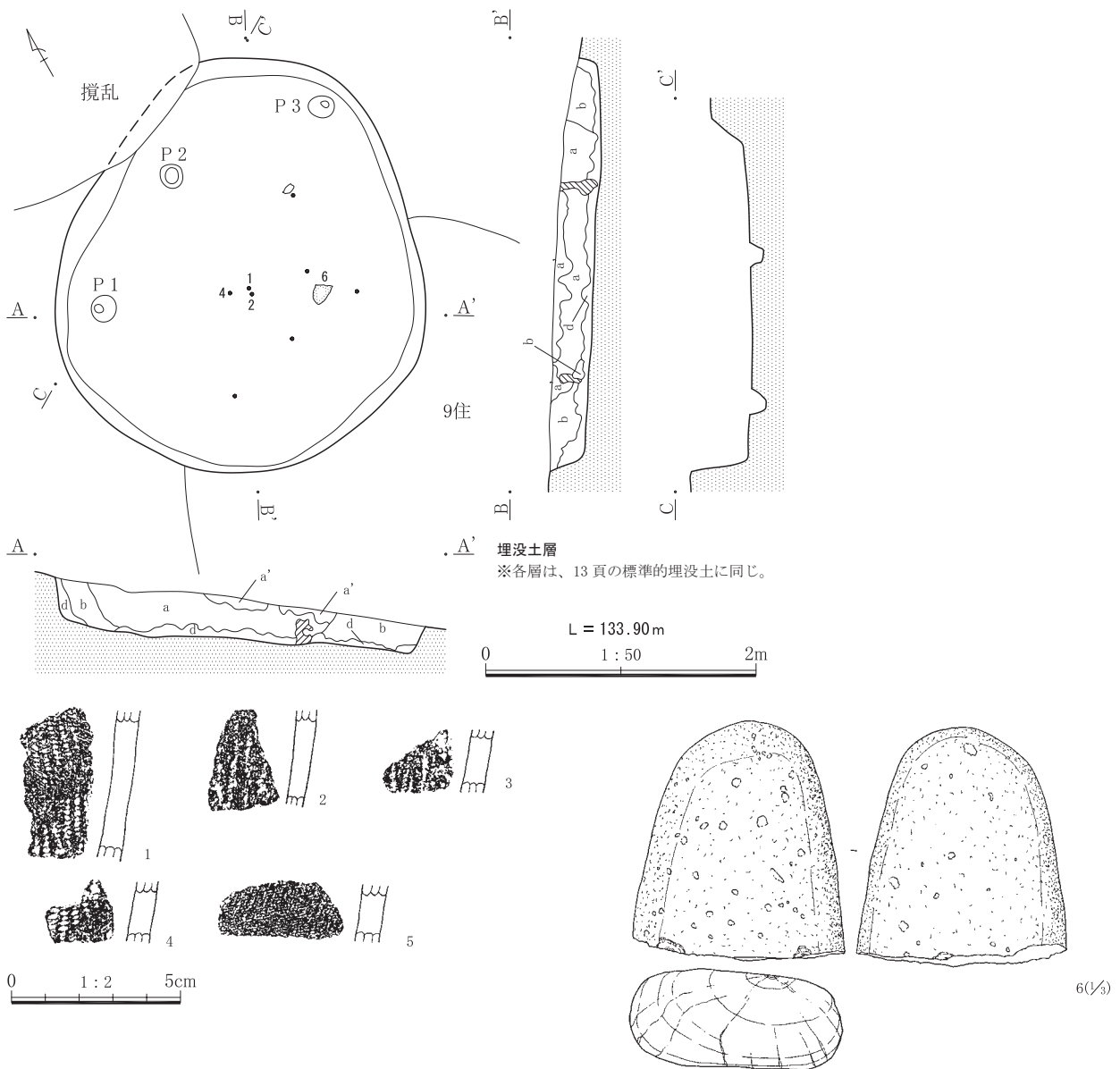
スタンプ形石器	
分類	1類
合計	1

石材別の点数と重量

スタンプ形石器		剥片		礫塊	
コード	4	コード	1	コード	4
点数	1	点数	6	点数	1
重量	643	重量	未計測	重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類		総計
分類	2	
合計	1	1



第15図 8号住居と出土遺物

● 9号住居

位置 F I -129

写真 P L 10・11

面積 9.92 m²

方位 N 56度W

重複 北西隅で8号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 3.72 m × 短辺 2.98 m、深さ 9 ~ 22 cm の規模。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、ほぼ直線的に走向している。

柱穴 合計 13 本の柱穴が確認されている。各柱穴の配置はやや雑然としているが、P3 ~ P5 と P6・P13・P8・P1 の 2 列配置を基本とする可能性が高い。主な柱穴の芯心間の距離は P1 ~ P2 : 1.9 m、P2 ~ P3 : 0.55 m、P3 ~ P4 : 1.5 m、P4 ~ P5 : 1.4 m、P5 ~ P6 : 0.9 m、P6 ~ P7 : 1.3 m、P7 ~ P8 : 1.6 m、P8 ~ P1 : 0.8 m の規模。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 24 × 25 cm、P2 : 27 × 29 cm、P3 : 24 × 23 cm、P4 : 23 × 28 cm、P5 : 26 × 37 cm、P6 : 22 × 28 cm、P7 : 33 × 23 cm、P8 : 28 × 25 cm、P9 : 35 × 28 cm、

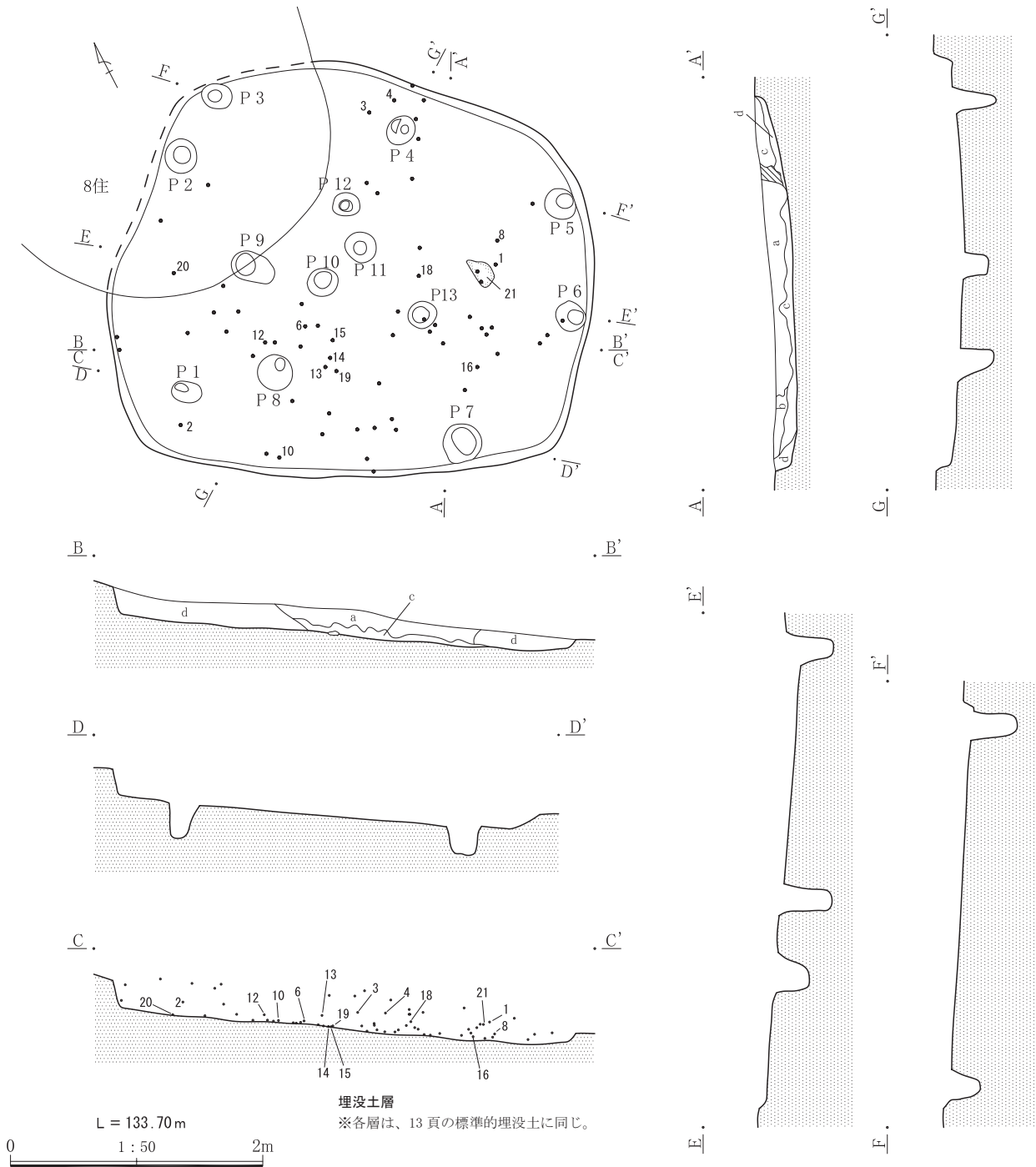
II 今井三騎堂遺跡の調査

P10 : 25 × 37 cm、P11 : 25 × 28 cm、P12 : 22 × 25 cm、
P13 : 22 × 23 cmである。

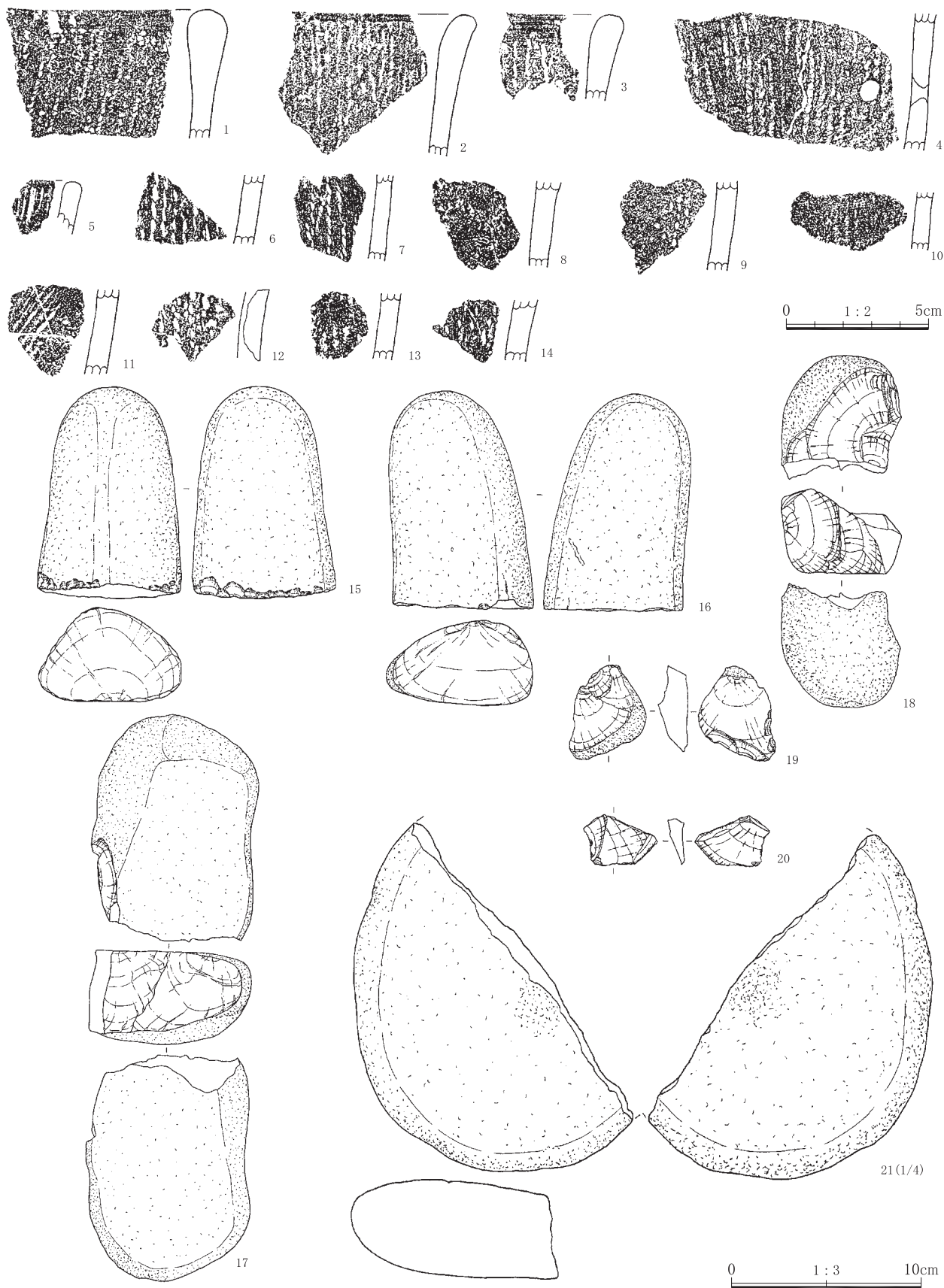
床面 勾配約7度の斜面地のローム層(VI層)を最大28 cm掘り込んで床面を構築する。床面の凹凸は少ないが、自然地形と同様に約45 cmの比高差で西側から東側方向へかなり急傾斜している。踏み固めによる堅緻な面はなく、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ10～20 cmのa層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数108点の遺物(土器32、石器76)が存在するが、床面に密着したものは少なく(8・10・14・15・19・20)、その大半は埋没土上位のa・b層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は破片のみであり、夏島式の縄文6点(1・2・4・9・



第16図 9号住居



第17图 9号住居出土遗物

II 今井三騎堂遺跡の調査

10・13)・絡糸条痕文1点(5)と、稲荷台式の擦糸文6点(3・6・7・11・12・14)・無文1点(8)・不明15点など計22点の他に、型式不明3点がある。石器は削器2点(19・20)、スタンプ形石器2点(15・16)、石皿1点(21)、石核2点(17・18)、剥片63点、礫塊4点などが認められる。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器が内容的に拮抗していることから確定することができないが、数量的には稲荷台式期の可能性が高い。

(観察表:10・11・27頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【9号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	時期不明	総計
合計	7	22	3	32

分類別点数

夏島式				稲荷台式				
分類	2b	2c	3	分類	1a	3	4	不明
合計	2	1	4	合計	1	5	1	15

縄文原体別点数

夏島式			稲荷台式			胎土別点数			
分類	2b	19b	9a	9b	18	胎土	型式	夏島	稲荷台
合計	6	1	1	5	1	A		4	4
						B		1	—
						D		2	3

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列			その他			総計
器種	削器類	スタンプ形	磨石類	石皿	剥片	石核	礫塊	
合計	2	2	2	1	64	2	4	77

分類別点数

搔器・削器			スタンプ形石器		磨石類		石皿	
分類	2類	3類	分類	1類	分類	5類	分類	2類
合計	1	1	合計	2	形態	a	合計	1
					合計	2		

石材別の点数と重量

搔器・削器			スタンプ形石器			石皿		
コード			コード			コード		
点数	1	6	点数	3	4	点数		4
重量	31.1	8.1	重量	563	541	重量		3400
磨石類			礫塊			剥片		
コード	4	33	コード	4		コード	1	2
点数	1	1	点数	4		点数	61	3
重量	未計測	未計測	重量	未計測		重量	未計測	未計測
石核			礫塊の被熱状況			被熱礫の石材別点数		
コード	1	19	分類	1	総計	コード		4
点数	1	1	合計	4	4	点数		4
重量	201	729						

● 10号住居

位置 FL -136

写真 PL 12・13

面積 13.12 m²

方位 N 5度E

重複 北西隅で時期不明の439号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

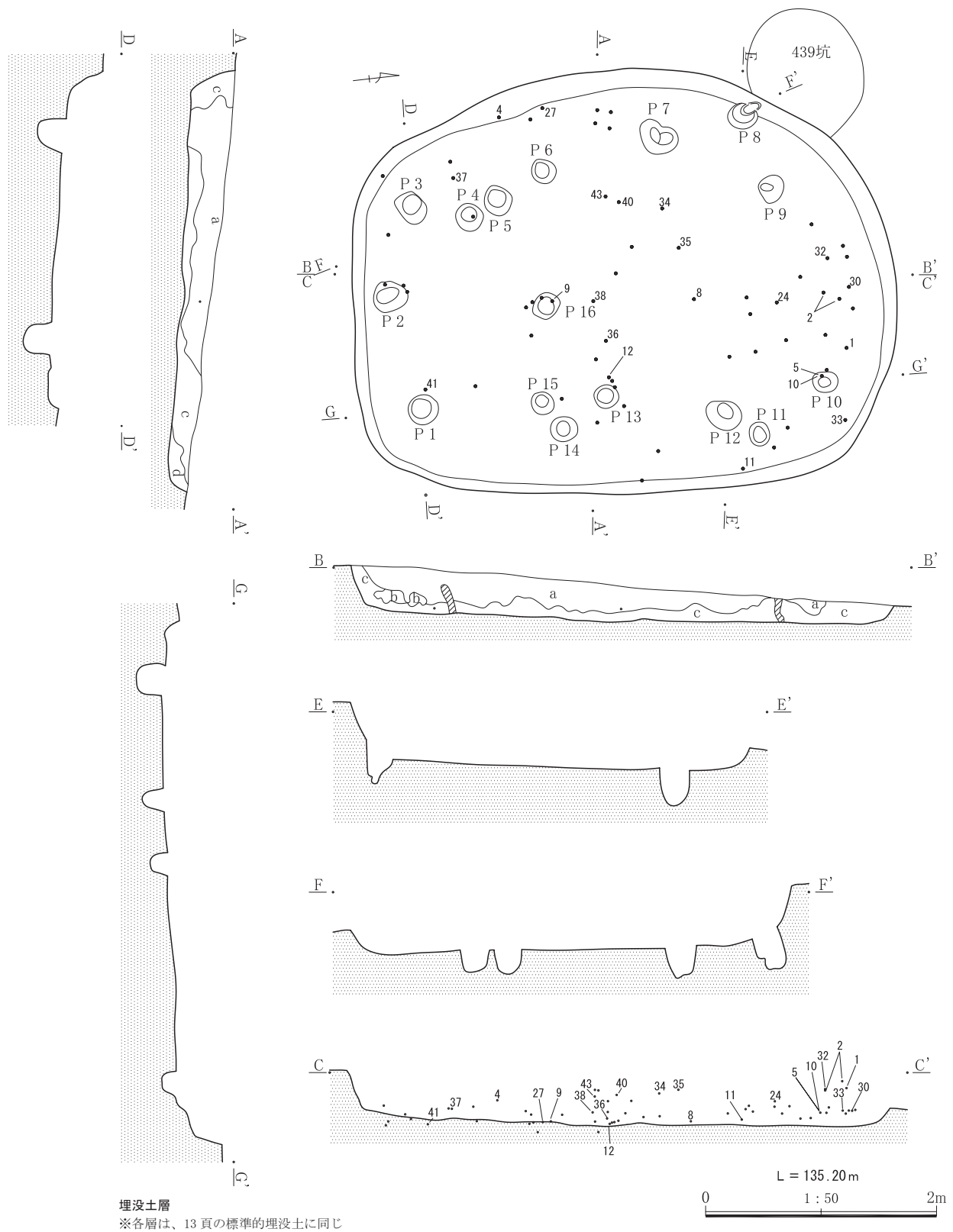
形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長形状で、長辺4.68m×短辺3.67m、深さ10～43cmの規模。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、南・東辺はほぼ直線的に走向するが、西・北辺は湾曲している。

柱穴 合計16本の柱穴が確認され、各柱穴は周壁の40～60cm内側を巡る状況を呈するが、基本的には長軸に平行するP3～P8とP10～P15・P1の2列配置の構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離はP1～P2:1.0m、P2～P3:0.8m、P3～P6:1.2m、P6～P7:1.0m、P7～P8:0.8m、P8～P9:0.8m、P9～P10:1.75m、P10～P12:0.9m、P12～P14:1.4m、P14～P1:1.3mの規模。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:26×22cm、P2:30×29cm、P3:30×21cm、P4:25×21cm、P5:27×23cm、P6:21×17cm、P7:35×26cm、P8:25×20cm、P9:25×25cm、P10:23×12cm、P11:21×15cm、P12:30×29cm、P13:21×14cm、P14:24×18cm、P15:19×19cm、P16:24×22cmの規模。

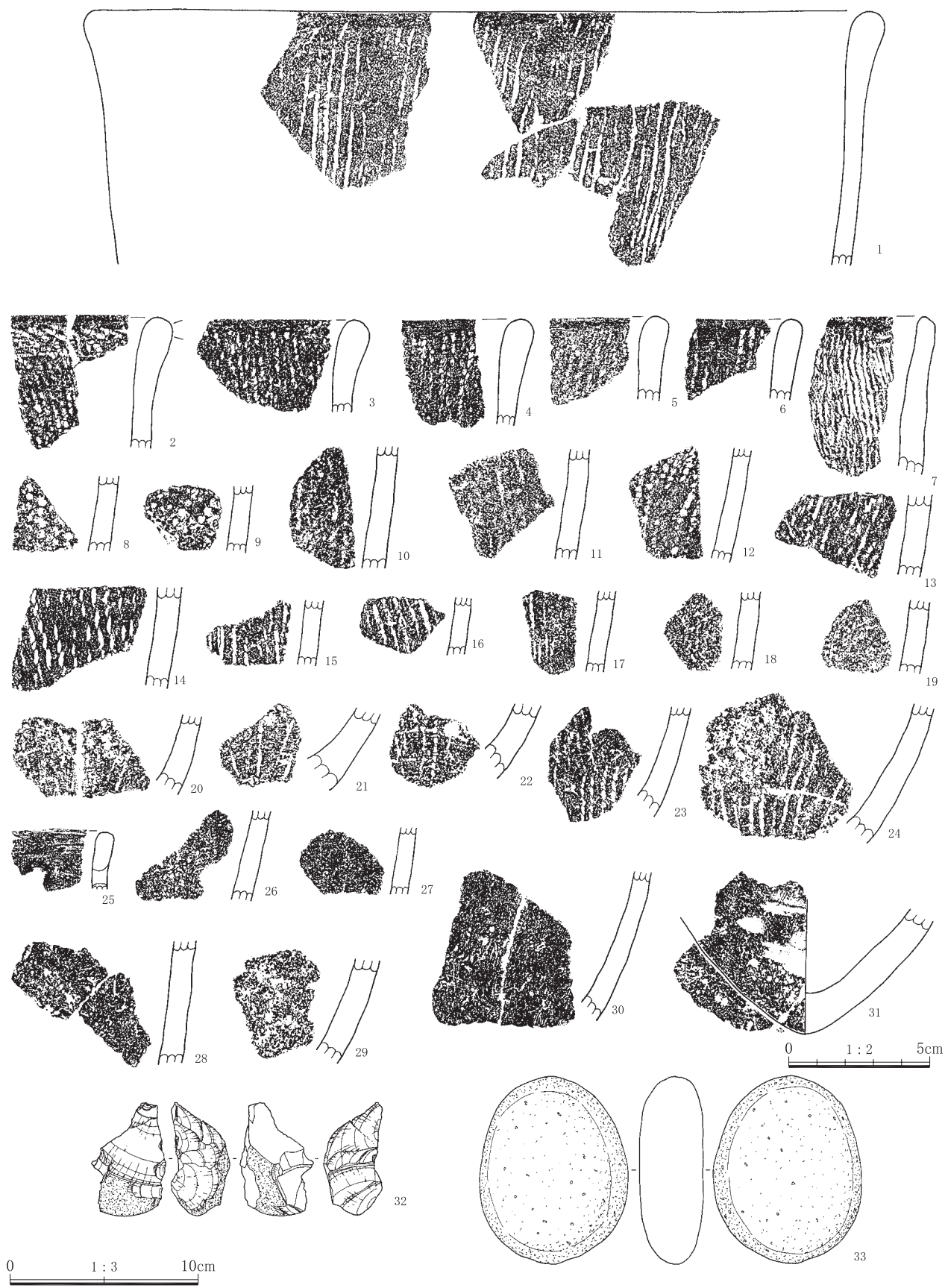
床面 勾配約7度の斜面地のローム層(VI層)を最大43cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約18cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ20～30cmのa層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

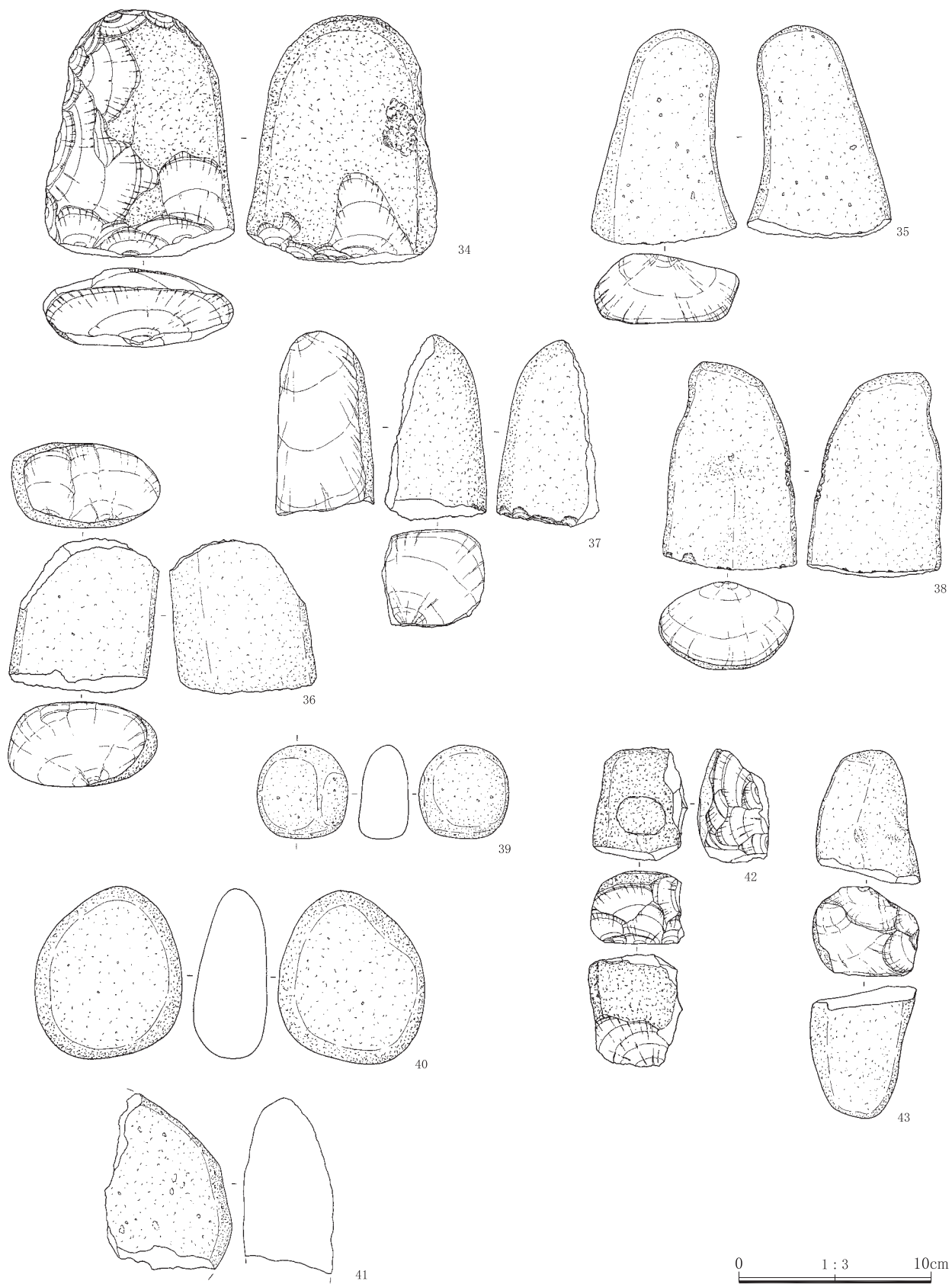
遺物 総数154点のかなり多量の遺物(土器60、石器94)が出土しているが、床面に密着したものは少なく(8・27・41)、その大半は埋没土上位のa層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、夏島式の縄文13点(2～6・8～11・13・18・19)・擦糸文1点(7)・無文3点(26・28・31)と、



第18図 10号住居



第19図 10号住居出土遺物(1)



第 20 图 10 号住居出土遺物 (2)

II 今井三騎堂遺跡の調査

稲荷台式の捺糸文 9 点 (1・14～17・20～24)・縄文 1 点 (12)・無文 3 点 (25・29・30)・不明 20 点などの他に、早期条痕文 1 点、花積下層式 2 点、型式不明 7 点がある。尚、1・15 と 20～24 の破片は、各々同一個体である。石器はスタンプ形石器 5 点 (34～38) を主体として、磨り石類 6 点 (33・39～41)、石核 4 点 (32・42・43)、剥片 68 点、礫塊 11 点などが認められる。また、剥片類の中に黒曜石 1 点が存在するが、X線回折試験による産地同定では、和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器が内容的に拮抗していることから確定することができないが、数量的には稲荷台式期の可能性が高い。

(観察表: 11・27 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【10号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	条痕	花積下層	時期不明	総計
合計	17	33	1	2	7	60

分類別点数

夏島式

分類	1b	2a	3	4
合計	1	6	7	3

稲荷台式

分類	1a	3	4	不明
合計	1	10	4	18

花積下層式

分類	2類
合計	2

縄文原形別点数

夏島式

分類	2b	9b	18
合計	13	1	3

稲荷台式

分類	2b	9a	9b	18
合計	1	1	9	4

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台
A		11	6
B		5	4
D		1	5

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他				総計	
器種	スタンプ形	磨石類	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	5	6	69	4	2	9	95

分類別点数

スタンプ形石器

分類	1類	3類
合計	4	1

磨石類

分類	1類	2類	5類
形態	a	a	ac
合計	1	4	1

石材別の点数と重量

スタンプ形石器

コード	4	15	19
点数	1	1	3
重量	421	491	1429

磨石類

コード	4	19
点数	5 (3)	1
重量	(971)	90.4

剥片

コード	1	2	12
点数	67	1	1
重量	未計測	未計測	未計測

石核

コード	1	5
点数	3 (2)	1
重量	(336)	59.8

礫塊

コード	4
点数	9
重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	8	1	9

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	8

● 11号住居

位置 GQ-158

写真 PL 11

面積 不明

方位 N 24 度 E

重複 西側で稲荷台式期の 12 号住居により切られている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形形状と推定される。斜面下位の東辺は判然としないが長辺 3.18 m × 短辺約 2.9 m、深さ 1～51 cm の規模。四辺の壁面は約 60～80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺ともにやや蛇行している。

柱穴 ある程度の深度と明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、検出できなかったが、他に深度の浅い柱穴が存在した可能性もある。

床面 勾配約 15 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 51 cm 掘り込んで床面を構築する。かなりの凹凸面を有し、自然地形と同様に約 20 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。
埋没土 厚さ 20～40 cm の b・c 層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 56 点の遺物 (土器 21、石器 35) が出土しているが、床面に密着したものは 1 点 (19) のみであり、その大半は埋没土上位の a・b 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、夏島

式の縄文2点(6・12)・条痕文6点(1～4・7・9)と、稲荷台式の捺糸文4点(5・8・10・11)・構成不明9点などがある。石器は削器6点(12～16)を主体として、スタンプ形石器2点(17・18)、磨り石器2点(19・20)、剥片25点などが認められる。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器が内容的に拮抗していることから確定することができないが、数量的には稲荷台式期の可能性が高い。

(観察表:11・27頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【11号住居出土遺物の分類一覧】

(石器)

器種別点数

型式	夏島	稲荷台	総計
合計	8	14	22

縄文原形別点数

分類	2b	19b
合計	2	6

稲荷台式

分類	9b	19b
合計	4	1

分類別点数

夏島式			
分類	2b	2c	3
合計	1	1	6

胎土別点数

胎土	型式	
	夏島	稲荷台
A	4	3
B	4	1
D	-	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計	
器種	削器類	スタンプ形	磨石類		剥片
合計	6	2	2	25	35

分類別点数

搔器・削器		スタンプ形石器		磨石類	
分類	1類	2類	分類	1類	3類
合計	1	5	合計	1	1
			分類	2類	
			形態	a	ab
			合計	1	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		
コート	1	2
点数	4(3)	2(1)
重量	(67.9)	(12.7)

スタンプ形石器

コート	4	20
点数	1	1
重量	648	552

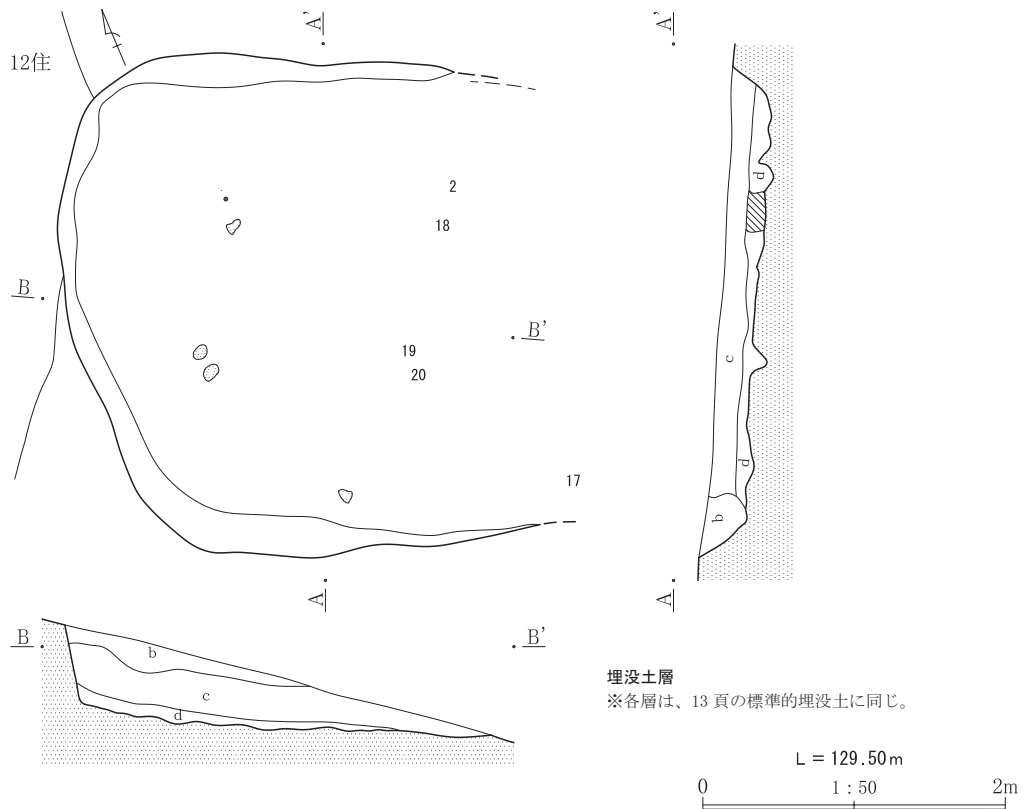
磨石類

コート	4	19
点数	1	1
重量	680	424

剥片

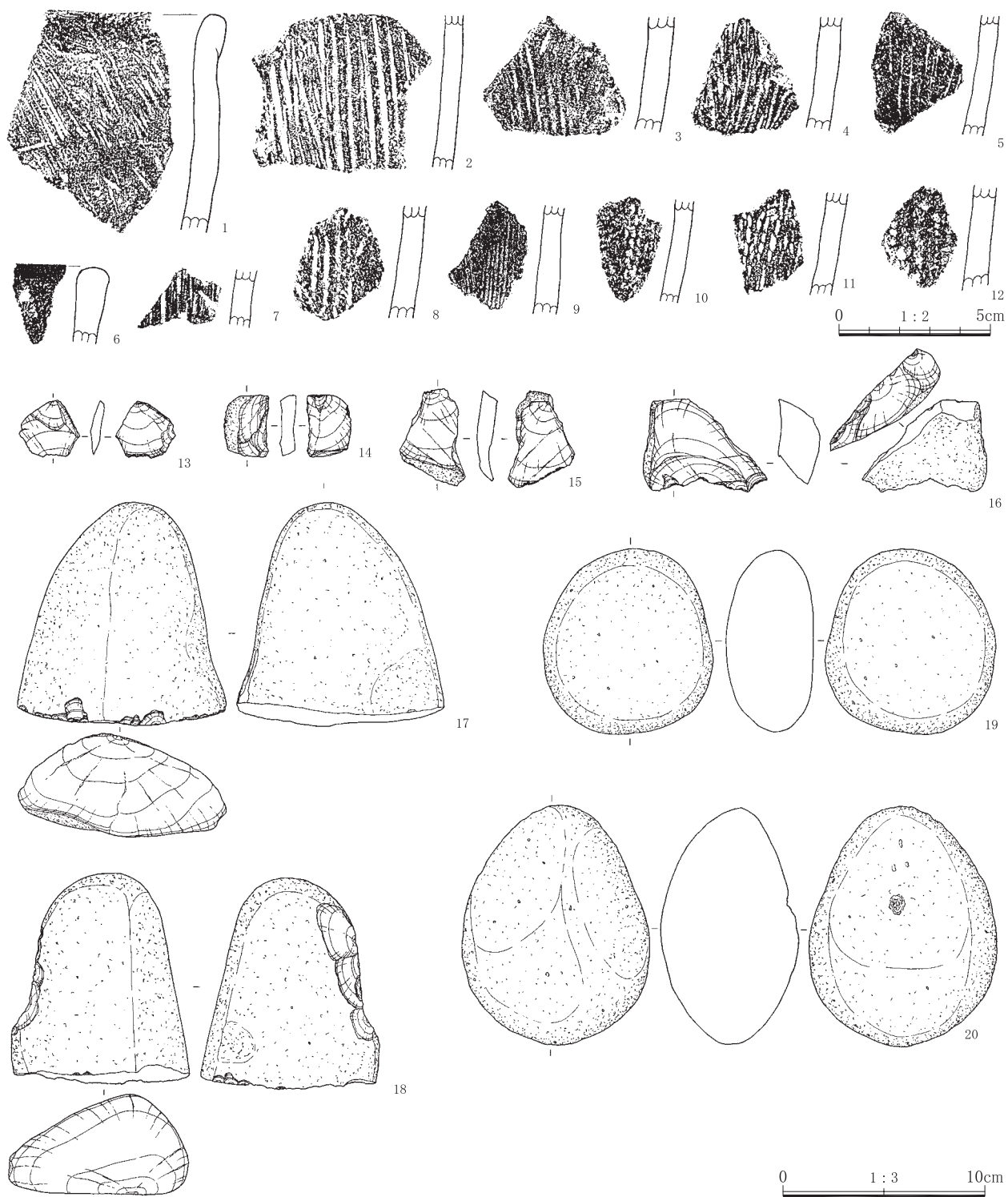
コート	1	2	9
点数	23	1	1
重量	未計測	未計測	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量



第21図 11号住居

II 今井三騎堂遺跡の調査



第 22 図 11 号住居出土遺物

● 12号住居

位置 GP-159

写真 PL 13

面積 10.77 m²

方位 N 42 度 E

重複 東側で稲荷台式期の 11 号住居の一部を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸台形状で、長辺 4.22 m × 短辺 3.59 m × 2.86 m、深さ 16 ~ 66 cm の規模。四辺の壁面は約 60 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺ともにやや蛇行している。

柱穴 明瞭な柱穴状の掘り込みは検出できなかったが、深度の浅い柱穴が存在した可能性もある。

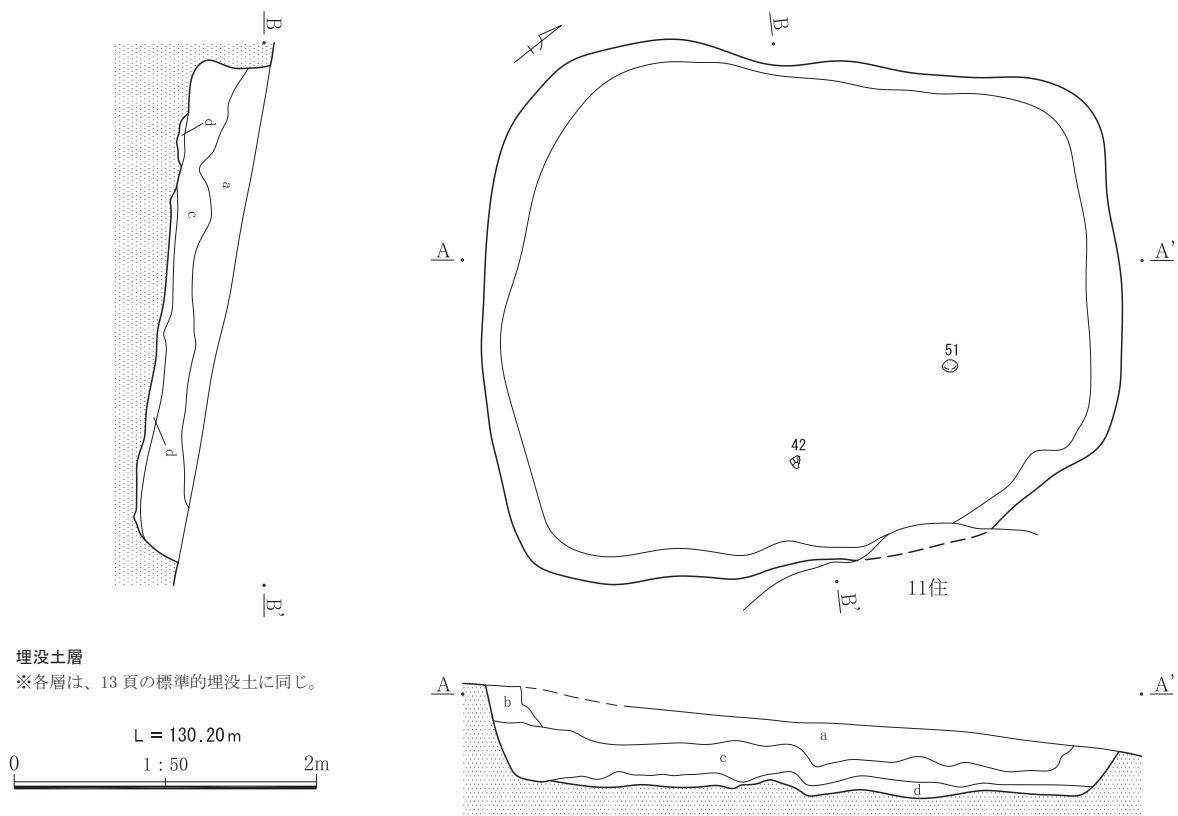
床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 66 cm と深く掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を有し、自然地形と同様に約 40 cm の比高差で西側から東側方向へかなり急傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ 30 ~ 40 cm の a・c 層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

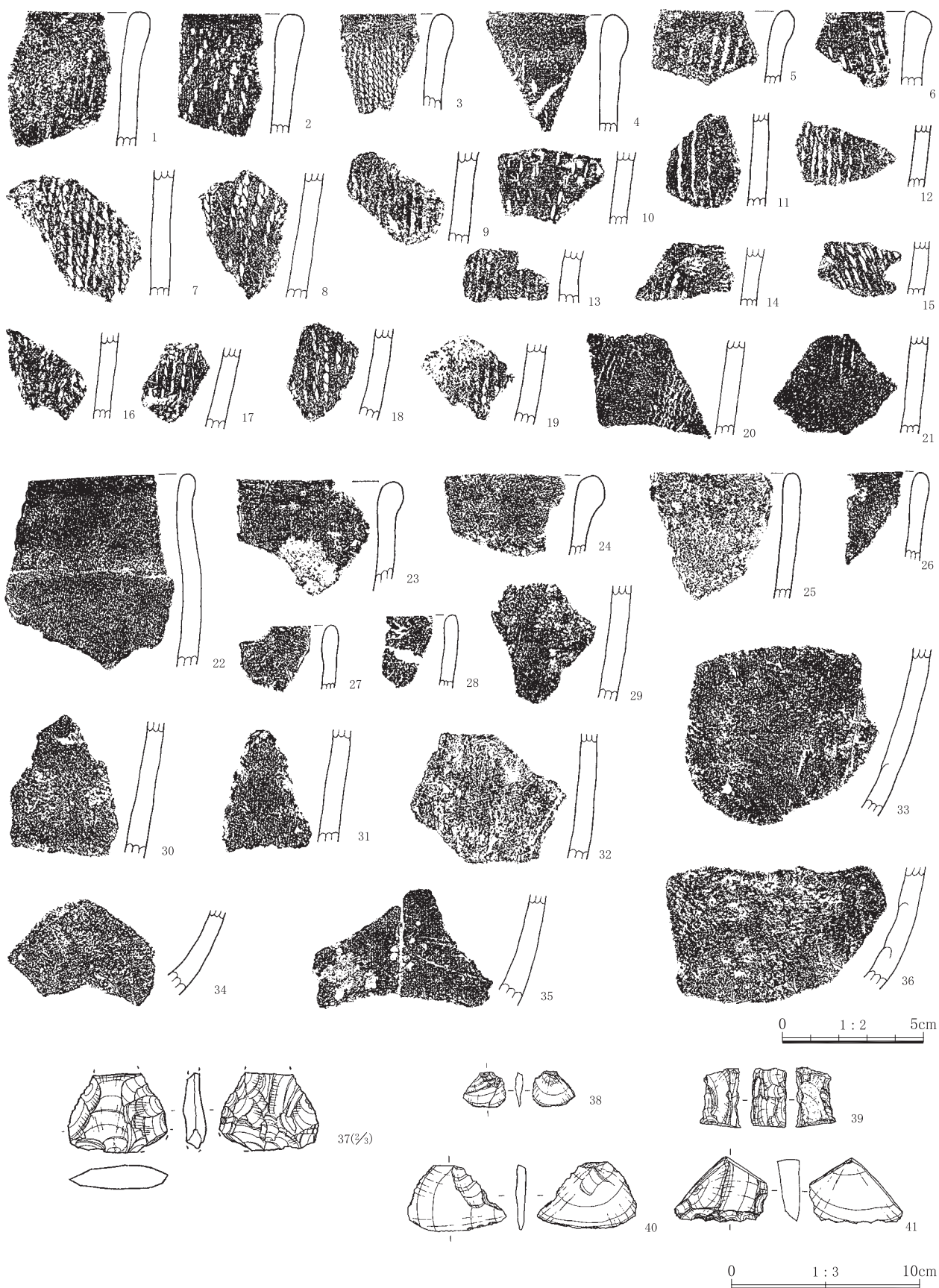
遺物 総数 215 点の多量の遺物 (土器 106、石器 109) が出土しているが、床面に密着したものは皆無であり、その全てが埋没土上位の a・c 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、稲荷台式の捺糸文 21 点 (1 ~ 21)・無文 15 点 (22 ~ 36)・構成不明 47 点などの他に、型式不明 23 点がある。石器には、石匙 1 点 (37)、削器 9 点 (38・40 ~ 43)、スタンプ形石器 2 点 (47・48)、磨り石類 5 点 (49 ~ 52)、石核 4 点 (44 ~ 46)、剥片 87 点、礫塊 1 点などが認められる。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式によって占められていることから、当該期の所産と考えられる。(観察表: 11・27 頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。



第 23 図 12 号住居



第 24 図 12 号住居出土遺物 (1)



第 25 图 12 号住居出土遗物 (2)

II 今井三騎堂遺跡の調査

【12号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	時期不明	総計
合計	83	23	106

分類別点数

稲荷台式

分類	1a	2a	3	4	不明
合計	4	2	15	15	47

縄文原体別点数

稲荷台式

分類	9a	9b	18
合計	1	20	15

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		28
B		5
D		3

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他				総計	
器種	石匙	削器類	スタンプ形	磨石類	剥片	石核		礫塊
合計	1	9	2	5	87	4	1	109

分類別点数

石匙

分類	1類
合計	1

搔器・削器

分類	1類	2類	3類
合計	5	3	1

スタンプ形石器

分類	5類	6類
合計	1	1

磨石類

分類	1類		2類		5類
形態	a	a	abc	ac	a
合計	1	1	1	1	1

石材別の点数と重量

石匙

コード	2
点数	1
重量	3.5

搔器・削器

コード	1	2
点数	7(4)	2(1)
重量	(168)	(1.4)

スタンプ形石器

コード	10	20
点数	1	1
重量	536	663

磨石類

コード	1	4	18	19
点数	1	2	1	1
重量	未計測	400	186	648

石核

コード	1	2
点数	3	1
重量	708	13.9

剥片

コード	1	2	7	9
点数	74	3	1	9
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	1
点数	1
重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

m、深さ2～17cmの規模。四辺の壁面は約50～60度の緩い角度で掘り込まれ、各辺ともにほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な柱穴状の掘り込みは検出できなかったが、深度の浅い柱穴が存在した可能性もある。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI層)を最大17cmと極めて浅く掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少なく平坦であるが、自然地形と同様に約30cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱である。

埋没土 薄層ながらa層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数61点の遺物(土器34、石器27)が存在するが、床面に密着したものは少なく(4・6・12～14)、その大半が埋没土上位のa層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は破片のみであり、夏島式の縄文2点(5・6)・撚糸文5点(2・7・9・11)・絡条体条痕文1点(1)・無文1点(14)と、稲荷台式の撚糸文2点(8・12)・無文7点(15～21)・構成不明9点などの他に、稲荷原式1点(13)、諸磯a式2点(3・4)、型式不明4点がある。石器は削器2点(22)、磨石類1点、剥片24点のみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、剥片類の中に存在する黒曜石1点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 11・12・27頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

● 13号住居

位置 GN-150

写真 PL 13・14

面積 6.67 m²

方位 N 55度E

重複 北西隅で14号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長形状で、長辺3.05m×短辺2.63

【13号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	稲荷原	諸磯a	時期不明	総計
合計	9	18	1	2	4	34

分類別点数

夏島式

分類	2c	3	4
合計	2	6	1

稲荷原式

分類	1
合計	1

稲荷台式

分類	3	4	不明
合計	2	7	9

諸磯a式

分類	4a
合計	2

縄文原形別点数

夏島式

分類	2b	9b	18	19b
合計	2	5	1	1

稲荷原式

分類	9b
合計	1

稲荷台式

分類	9a	9b	18
合計	1	1	7

諸磯a式

分類	2b
合計	2

胎土別点数

各種土器の胎土別点数

胎土	夏島	稲荷台	稲荷原	諸磯a
A	7	8	—	2
B	1	1	—	—
D	1	—	1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	削器類	磨石類	剥片	
合計	2	1	24	27

石材別の点数と重量

搔器・削器

コト	1	2
点数	1	1
重量	34.1	未計測

剥片

コト	1	2	12
点数	16	7	1
重量	未計測	未計測	未計測

磨石類

コト	9
点数	1
重量	未計測

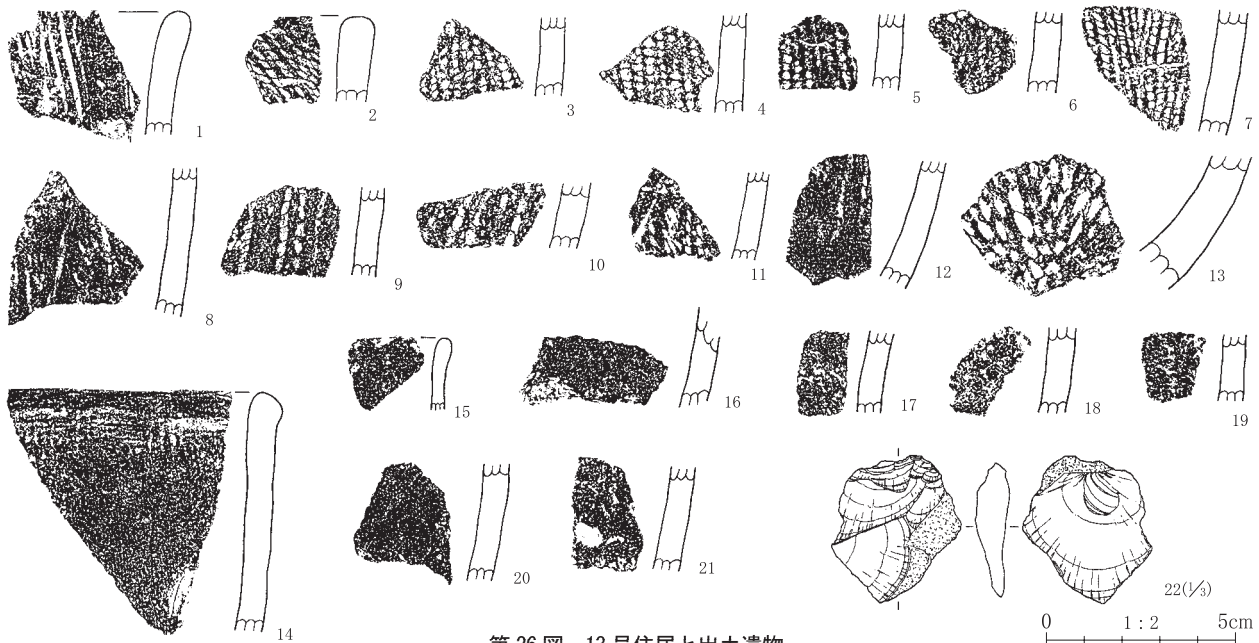
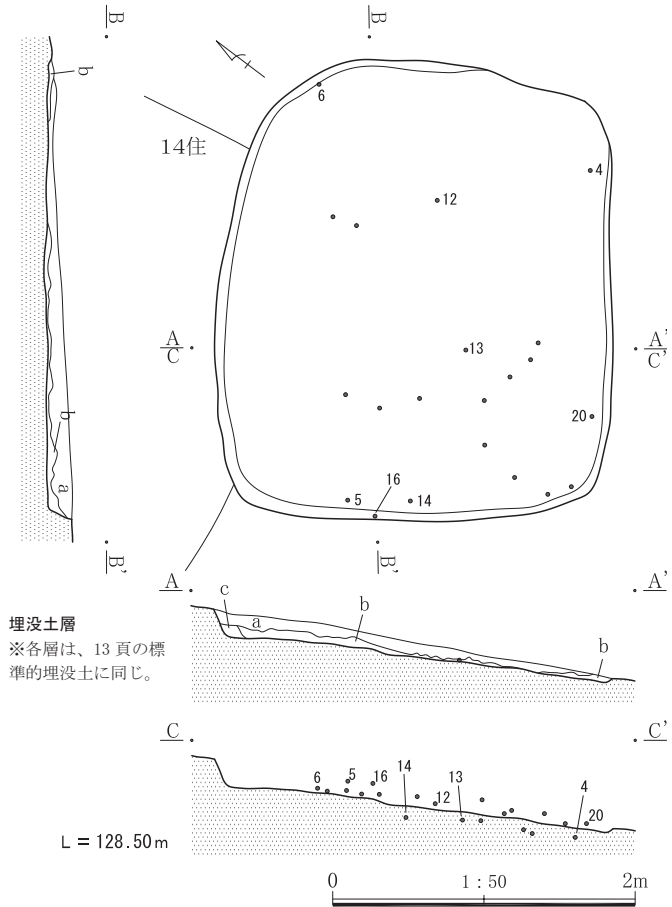
分類別点数

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	1	1

磨石類

分類	5類
形態	a
合計	1



第26図 13号住居と出土遺物

● 14号住居

位置 GM-150

写真 PL 14

面積 15.00 m²

方位 N 75 度 E

重複 南東隅で13号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ正方形に近似した形状で、長辺 4.45 m × 短辺 4.07 m、深さ 2 ~ 32 cm の規模。四辺の壁面は約 50 ~ 70 度の緩い角度で掘り込まれ、各辺ともにほぼ直線的に走行している。

炉 床面のほぼ中央部に炉 1 基が確認された。楕円形状の掘り込み炉であり、長径 70 × 短径 56 × 深さ 13 cm の規模を有する。内部には焼土の堆積が認められ、かなりの使用状況を窺わせる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、3 本が確認されたのみである。各柱穴の配列は、住居の平面形とシンメトリー的な様相も窺えるが、1 本欠落することから確定的ではない。各柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P2 : 1.8 m、P1 ~ P3 : 2.4 m の規模。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 33 × 16 cm、P2 : 29 × 17 cm、P3 : 34 × 8 cm の規模。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 32 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 47 cm の比高差で西側から東側方向へかなり急傾斜している。敲き床状程ではないが、若干の踏み固めによる堅緻な面が炉の周辺に認められる。

埋没土 厚さ 10 ~ 15 cm の b 層を中心にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 178 点の遺物 (土器 77、石器 101) が出土しているが、床面に密着したものは少なく (5・6・8・18・29・33・40)、その大半は埋没土上位の a・b 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、夏島式の縄文 1 点 (18)・撚糸文 3 点 (2・3・5)・無文 3 点 (20・22・23)・構成不明 2 点と、稲荷台式の撚糸文 12 点 (6 ~ 14・16)・無文 3 点 (19・21・24)・構成不明 16 点の他に、山形押型文 2 点 (25・26)、田戸下層式 4 点 (27 ~ 29)、諸磯 a 式 11 点 (15)、

【14号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	押型	沈線	諸磯a	時期不明	総計
合計	9	31	2	4	11	20	77

分類別点数

夏島式					稲荷台式					
分類	2c	3	4	不明	分類	1a	1	3	4	不明
合計	1	3	3	2	合計	1	1	10	3	16

沈線文系		諸磯a式			押型文系			
分類	1	不明	分類	2	4a	4	種別	1
合計	3	1	合計	2	1	8	合計	2

縄文原形別点数

夏島式			稲荷台式			諸磯a式			
分類	2b	9b	18	分類	9a	9b	18	分類	2b
合計	1	3	3	合計	1	11	3	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台	押型	沈線	諸磯a	時期不詳
A		7	12	2	3	1	1
B		-	2	-	-	-	-
D		-	1	-	-	-	-

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		複合技術系列
器種	石鏃	石錐	打斧	削器類	磨石類	磨製石斧	
合計	1	1	1	6	3	1	

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
84	1	3	101

分類別点数

石鏃		石錐		搔器・削器	
分類	1類	分類	1類	分類	1類 2類
合計	1	合計	1	合計	3 3

打製石斧		磨石類			磨製石斧	
分類	1類	分類	2類 3類 4類	分類	2類	
合計	1	形態	a a abc	合計	1	
		合計	1 1 1			

石材別の点数と重量

石鏃		石錐		搔器・削器			
コード	2	コード	2	コード	1	6	7
点数	1	点数	1	点数	4	1	1
重量	0.5	重量	1.3	重量	84.5	未計測	68.7

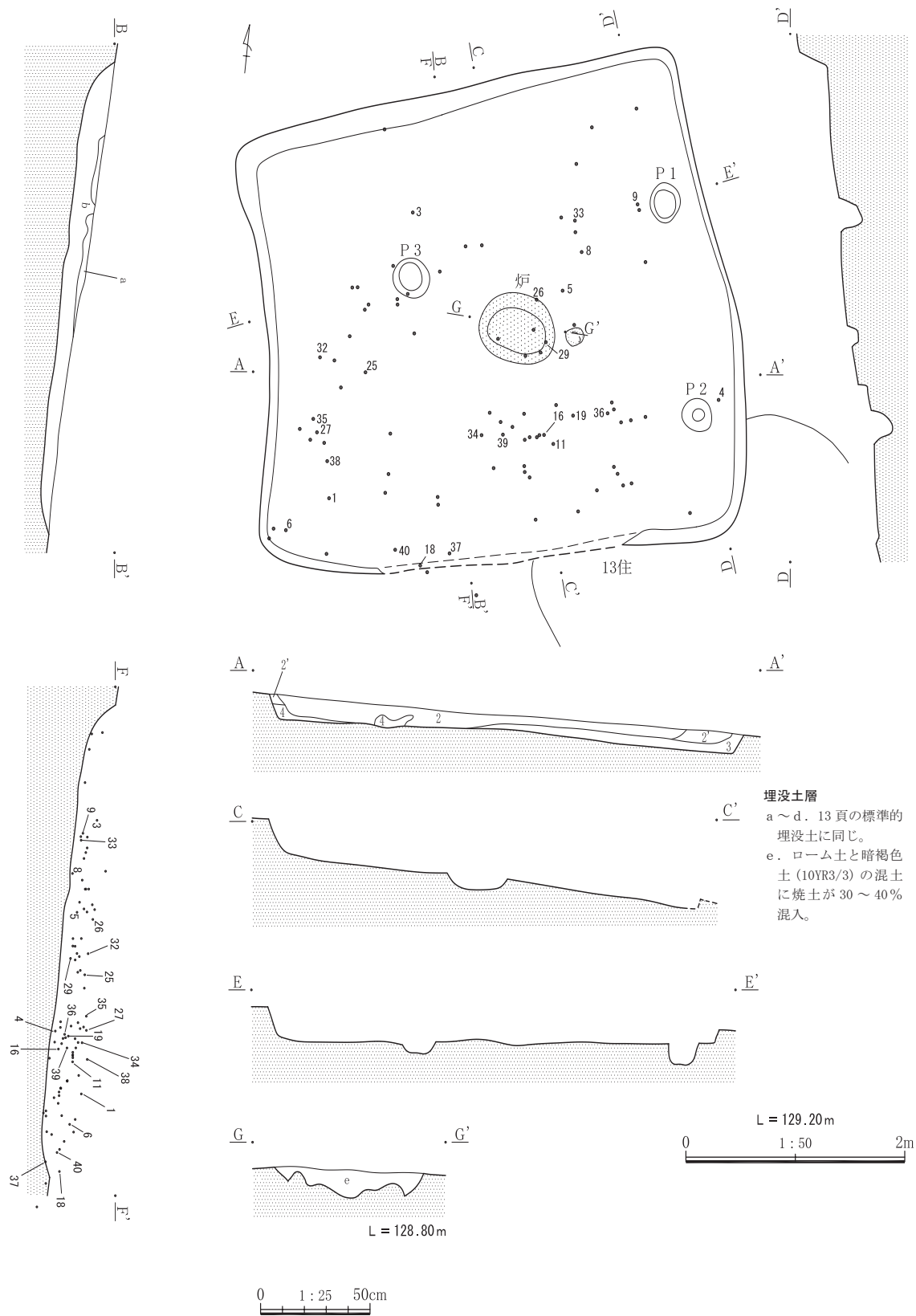
打製石斧		磨石類		磨製石斧		礫塊	
コード	16	コード	4	コード	1	コード	4
点数	1	点数	3 (2)	点数	1	点数	3
重量	255	重量	(626)	重量	66.3	重量	未計測

剥片				
コード	1	2	9	12
点数	57	15	11	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

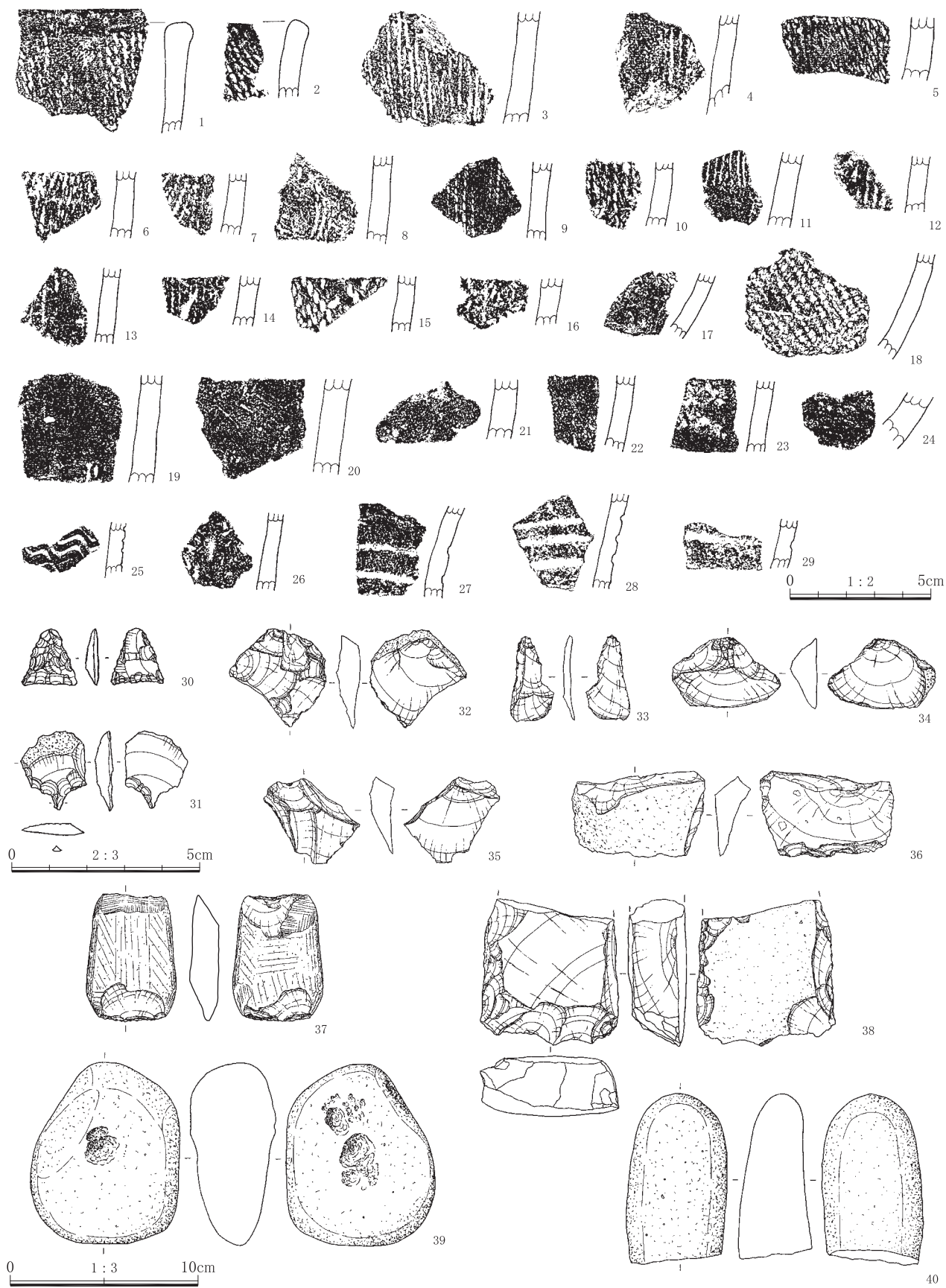
礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	3	3

() 内は総点数の中で計測したものの点数及び重量



第27図 14号住居



第28図 14号住居出土遺物

型式不明 20 点 (17) などがある。尚、27～29 は同一個体。石器には、石鏃 1 点 (30)、石錐 1 点 (31)、削器 6 点 (32～36)、打製石斧 1 点 (38)、磨製石斧 1 点 (37)、磨り石類 3 点 (39・40)、剥片、礫塊などが認められる。また、剥片類の中に存在する黒曜石 1 点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、各型式が混在しているために確定できない。ただし、住居の形態や柱穴配置などを重視すれば、諸磯 a 式期の可能性もある。37 の磨製石斧も、諸磯 a 式の所産であろう。

(観察表：12・27 頁)

その他 周溝は検出されなかった。

● 15 号住居

位置 GK-151

写真 PL 15

面積 16.12 m²

方位 N 67 度 E

重複 南側で 16 号住居と、北側で 303 号土坑と重複するが、各遺構との先後関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ不整形正方形で、長辺 5.35 m × 短辺 5.26 m、深さ 20～67 cm の規模。四辺の壁面は約 60～80 度のやや急角度で掘り込まれ、各辺ともに曲線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り方と深度を持つ柱穴は確認されなかったが、掘り込みの浅いものについては床面の凹凸との区別が困難であり、その有無については断定できない。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 67 cm 掘り込んで床面を構築する。平坦かつ凹凸面の少ない床面であるが、自然地形と同様に約 44 cm の比高差で北側から南側方向へかなり急傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱である。

埋没土 厚さ 30～50 cm の a・b 層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 777 点の多量の遺物 (土器 425、石器 348)

【15号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

分類別点数
夏島式

型式	夏島	稲荷台	時期不明	土製品	総計
合計	10	411	2	2	425

分類	2b	3
合計	2	8

土製品

稲荷台式

分類	1類	分類	1a	1b	2a	3	4	不明
合計	2	合計	1	1	2	12	32	363

縄文原体別点数

夏島式

稲荷台式

分類	2a	9b	19b	分類	9a	9b	18
合計	3	6	1	合計	1	15	32

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台	土製品
A		9	41	1
B		—	1	—
D		1	6	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列		
器種	削器類	三角錐形	スタンプ形	磨石類	敲石
合計	21	1	3	16	2

その他					総計
剥片	石核	自然石	礫塊		
283	5	2	15		348

分類別点数

搔器・削器

スタンプ形石器

敲石

分類	1類	2類	分類	1類	5類	分類	3類	
合計	5	16	合計	2	1	形態	ac	c
						合計	1	1

三角錐形石器 磨石類

分類	4	分類	2類		3類	4類		5類		
合計	1	形態	a	abc	ac	ac	a	abc	ac	a
		合計	2	2	2	1	2	1	1	5

石材別の点数と重量

搔器・削器

三角錐形石器

スタンプ形石器

コード	1	2	コード	1	コード	15	19
点数	18 (3)	3 (2)	点数	1	点数	2	1
重量	(152)	(8.5)	重量	321	重量	961	364

磨石類

敲石

コード	4	9	コード	1	4
点数	15 (8)	1	点数	1	1
重量	(3186)	未計測	重量	未計測	未計測

剥片

コード	1	2	3	7	9	12	19
点数	230	27	3	2	17	3	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

石核

礫塊

コード	1	コード	3	4
点数	5 (3)	点数	1	14
重量	(392)	重量	未計測	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

被熱礫の石材別点数

分類	1	2	総計
合計	3	12	15

コード	4
点数	3

II 今井三騎堂遺跡の調査

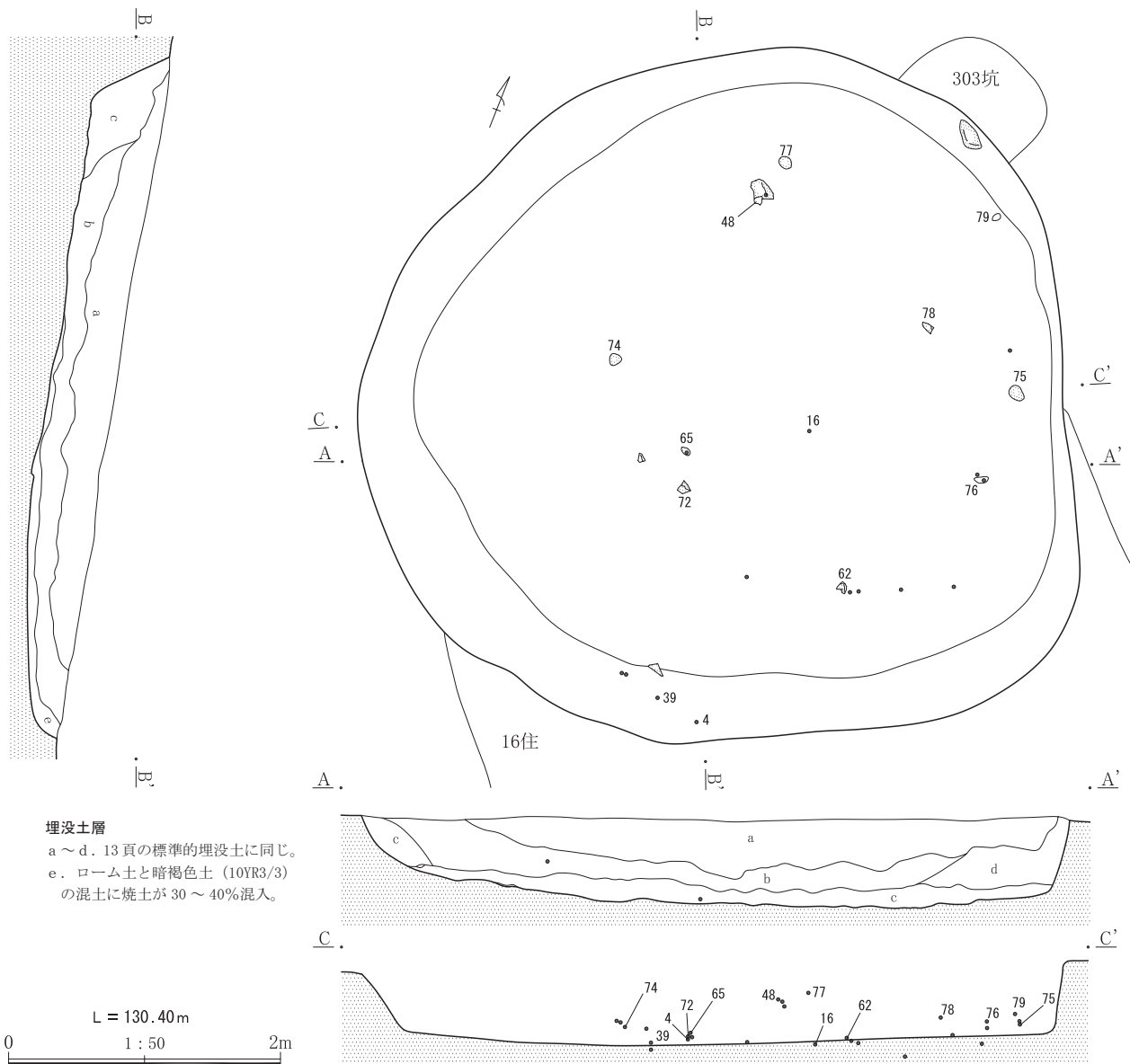
が出土しているが、床面に密着したものは少なく（16・39・74・79）、その大半は埋没土上位の a・b 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、夏島式の縄文 3 点（23～25）・撚糸文 6 点（2・4・7・10・11・18）・絡条体条痕文 1 点（26）と、稻荷台式の撚糸文 16 点（3・5・8・9・12・14・15・17・19～22）・無文 32 点（27～59）・構成不明 363 点などの他に、型式不明 2 点、土製円盤 2 点（59）がある。石器には、削器 21 点（60～64）、三角錐形石器 1 点（72）、スタンプ形石器 3 点（66～68）、磨り石類 16 点（73～79）、敲き石 2 点、石核 5 点（69～

71）、剥片 283 点、礫塊 17 点などが組成する。また、剥片類の中に存在する黒曜石 3 点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系 2（星ヶ塔）2 点、和田峠系 1（東餅屋・西餅屋）1 点という結果を得ている。

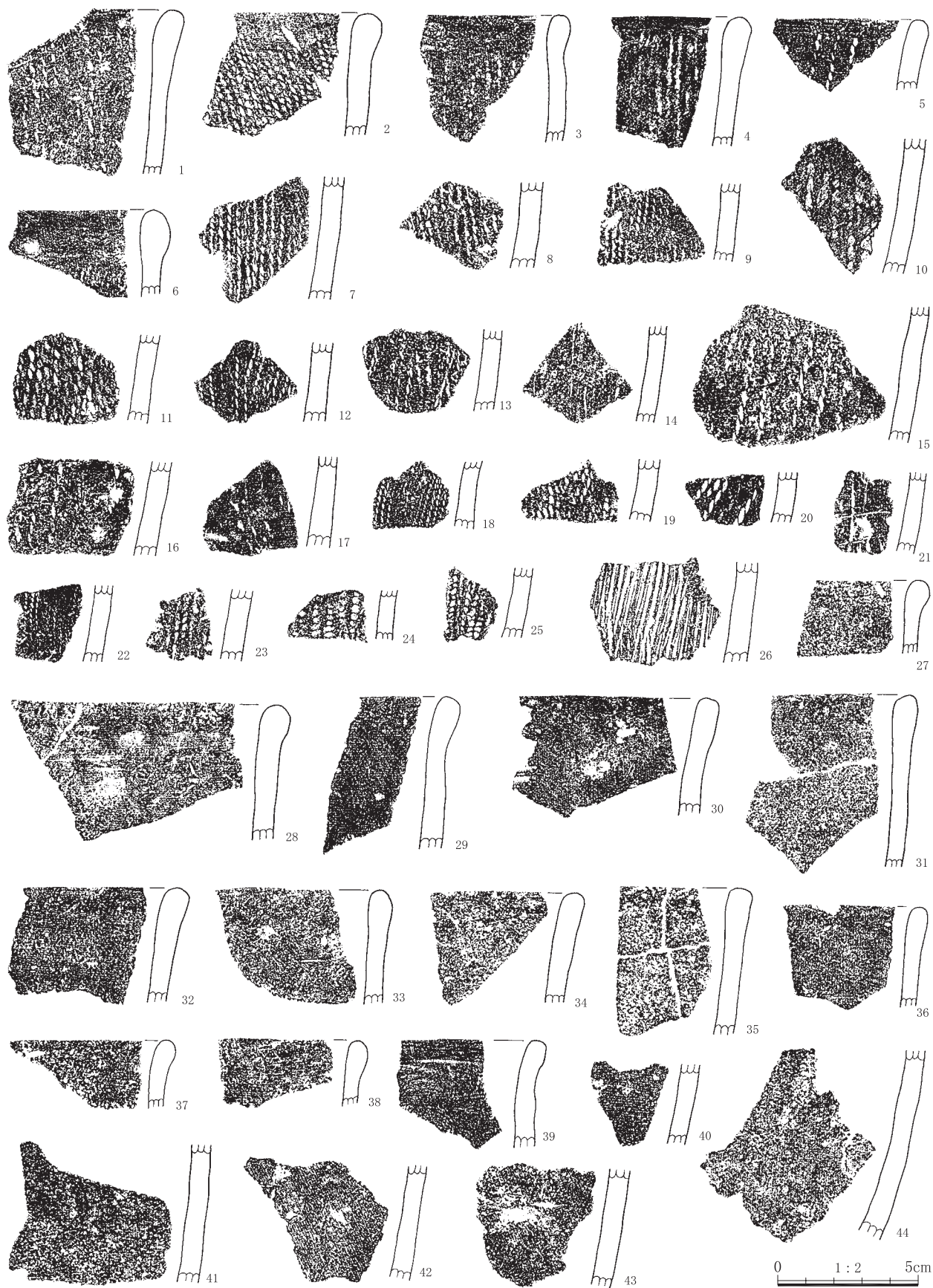
当住居の時期に関しては、出土土器が稻荷台式を主体としていることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：12・13・27・28 頁）

その他 炉と周溝は検出されなかった。

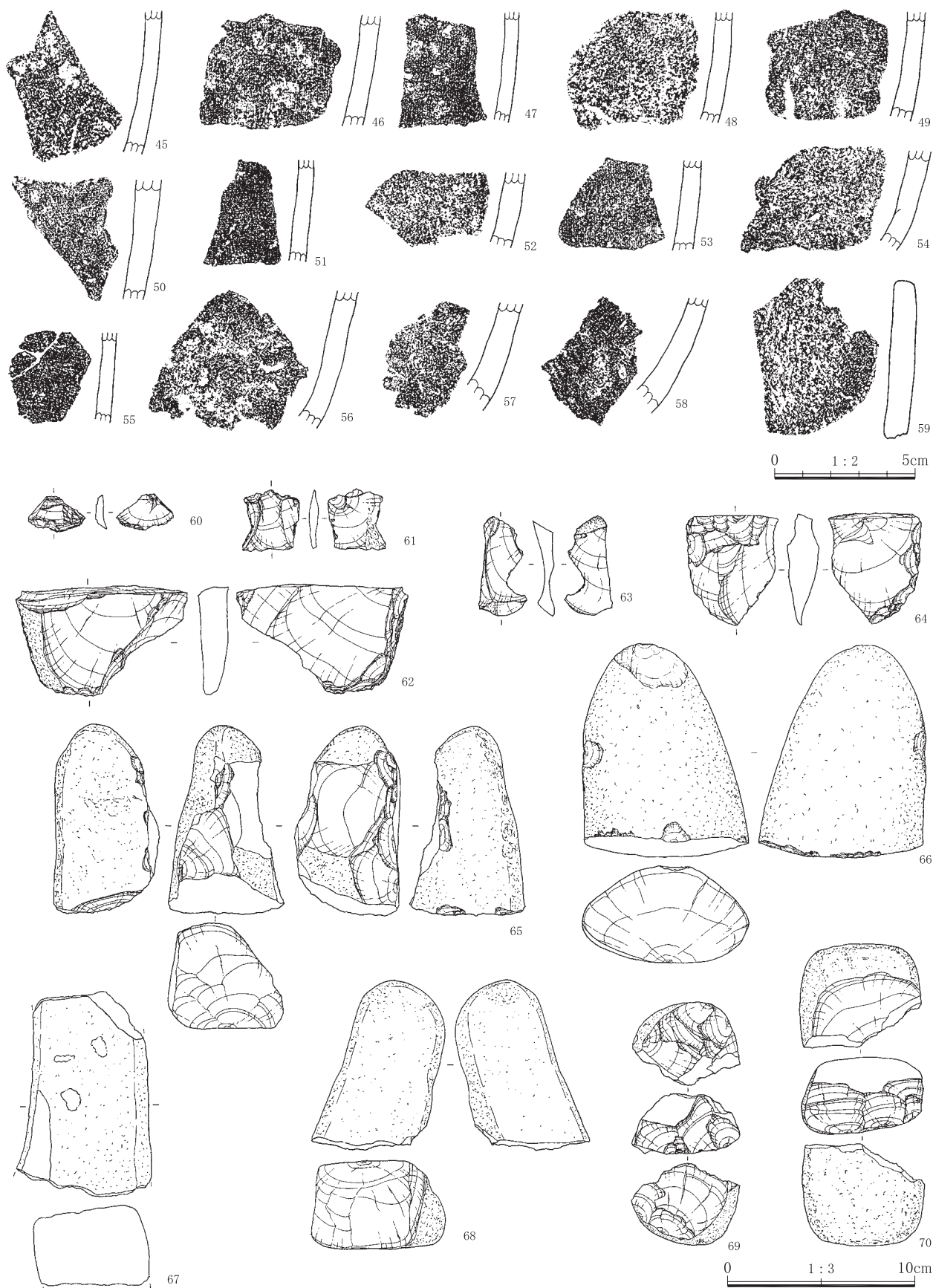


第 29 図 15 号住居

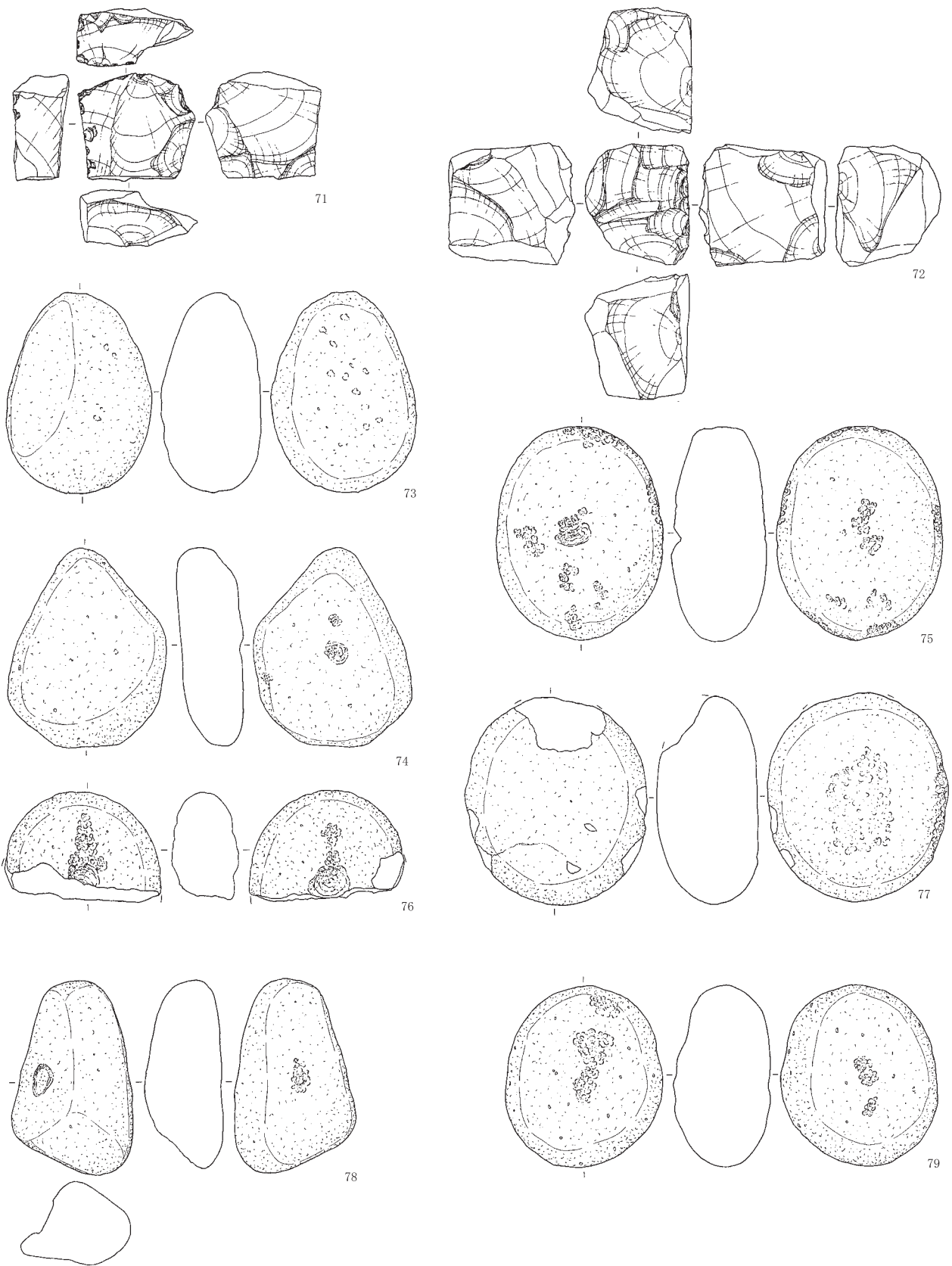


第 30 图 15 号住居出土遗物 (1)

II 今井三騎堂遺跡の調査



第31図 15号住居出土遺物(2)



第 32 図 15号住居出土遺物 (3)

● 16号住居

位置 GK -151 写真 PL 16・17

面積 20.85 m² 方位 N 52 度 E

重複 北側で15号住居と、南西隅と南東隅で11・321号土坑と重複するが、先後関係は不明である。A・Bセクションでは、当住居が15号住居によって切られるかのような状況を示すが、15号住居の調査終了後に当住居を検出したために、埋没土層での実際の切り合い関係は確認できない。ただし、出土土器からは、当住居が15号住居に後出すると判断される。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形で、長辺4.35m×短辺4.25m、深さ2～59cmの規模。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺ともほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部から若干北壁寄りに、1基が確認された。円形状の地床炉であり、直径40cmの範囲に被熱による赤化・焼土化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、13本が確認されている。各柱穴の配列には規則性を認めたいが、住居長軸の東西方向を意識していることが窺える。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:1.0m、P2～P3:1.0m、P3～P4:0.95m、P4～P5:0.85m、P8～P11:1.0m、P9～P13:1.2mの規模。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:20×16cm、P2:20×18cm、P3:20×12cm、P4:16×11cm、P5:16×8cm、P6:28×5cm、P7:12×8cm、P8:19×17cm、P9:21×20cm、P10:16×9cm、P11:17×16cm、P12:22×31cm、P13:16×14cmの規模。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI層)を最大59cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少なく、自然地形と同様に約20cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。敲き床ほどではないが、炉の周辺に若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 15号住居との重複により判然としない点もあるが、厚さ30cm前後のb層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示すと推定さ

【16号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	黒浜	諸磯a	時期不明	総計
合計	2	90	1	4	26	123

分類別点数

夏島式			稲荷台式				
分類	2b	3	分類	1a	3	4	不明
合計	1	1	合計	8	7	17	58

黒浜式		諸磯a式	
分類	3類	分類	2類 4類
合計	1	合計	2 2

縄文原体別点数

夏島式			稲荷台式			
分類	9b	19b	分類	9b	18	19b
合計	1	1	合計	14	17	1

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台
A		2	28
B		—	3
D		—	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列			その他				総計	
器種	石鏃	削器類	スタンプ形	磨石類	石皿	剥片	石核	自然石		礫塊
合計	1	7	2	2	1	95	3	7	10	128

分類別点数

石鏃		搔器・削器				
分類	2類	分類	1類	2類	3類	不明
合計	1	合計	2	3	1	1

スタンプ形石器			磨石類		石皿	
分類	1類	8類	分類	2ac類	分類	2類
合計	1	1	合計	2	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器			スタンプ形石器			
コード	2	コード	1	2	28	コード	1	4
点数	1	点数	2	4	1	点数	1	1
重量	0.3	重量	48.4	未計測	43.1	重量	未計測	424

磨石類		石皿		剥片				
コード	4	コード	4	コード	1	2	9	33
点数	2	点数	1	点数	85	5	4	1
重量	1039	重量	6700	重量	未計測	未計測	未計測	未計測

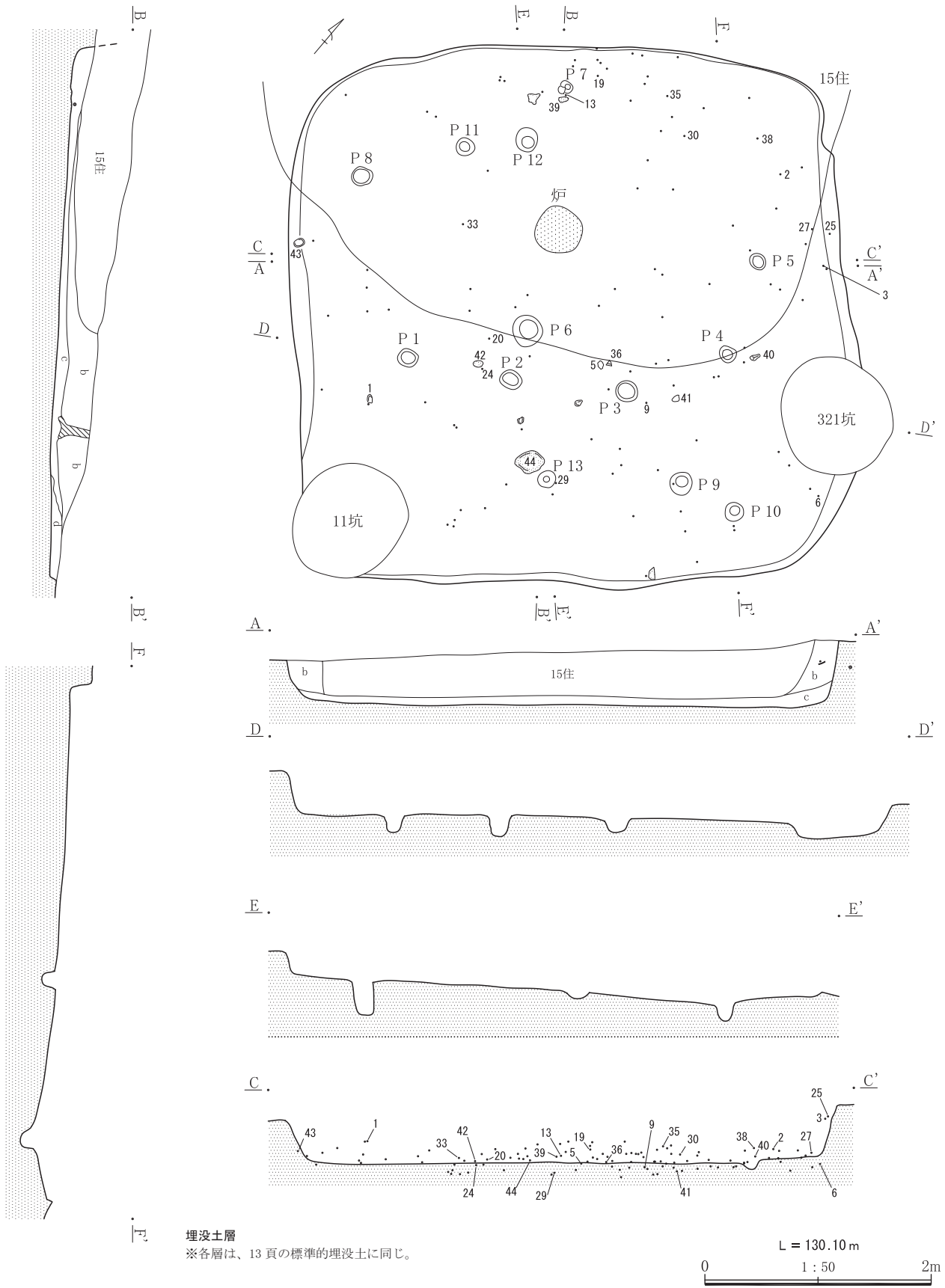
石核			礫塊			
コード	1	5	コード	1	4	不明
点数	1	2	点数	1	8	1
重量	未計測	517	重量	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

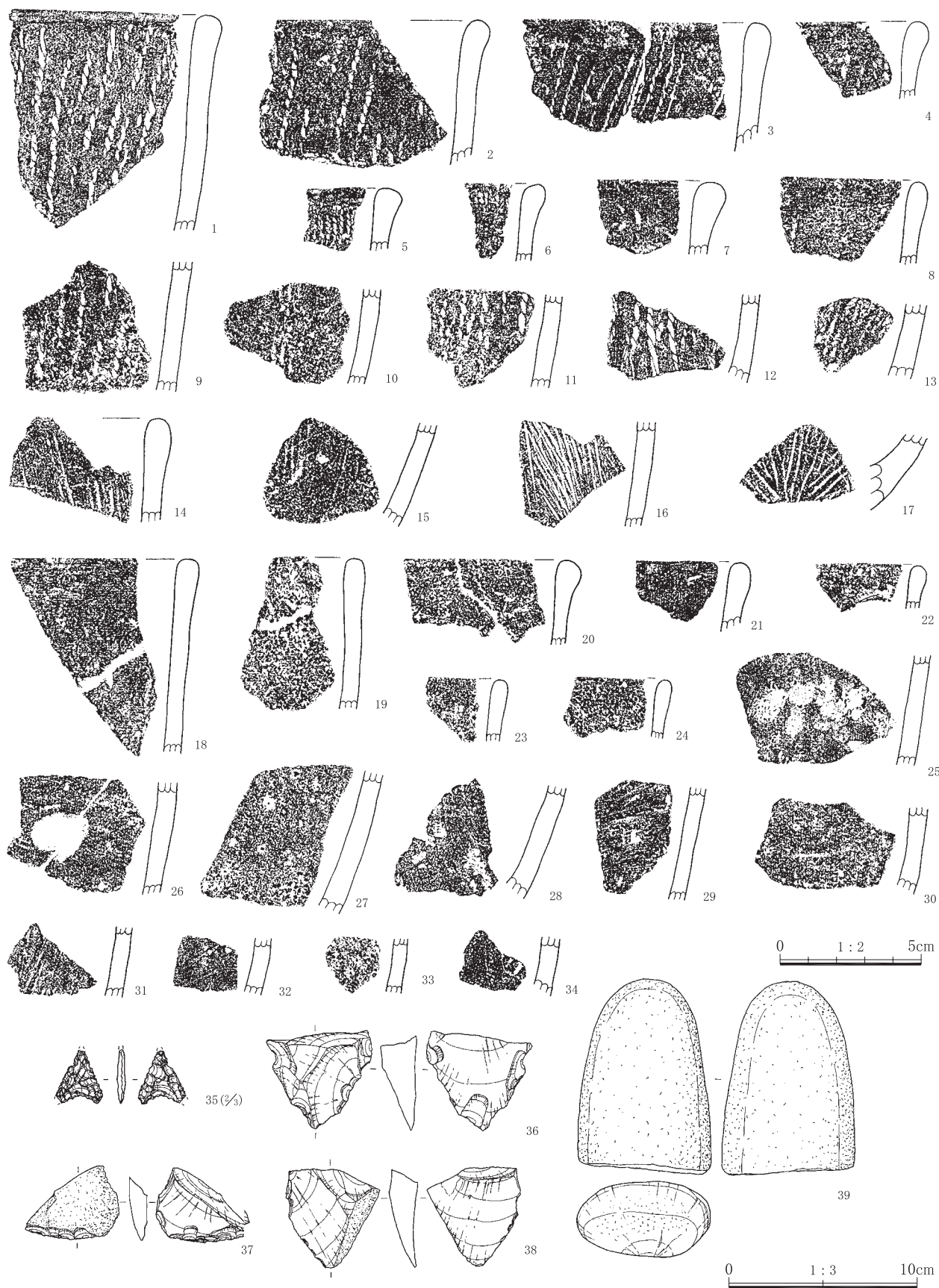
分類	1	2	総計
合計	1	9	10

被熱礫の石材別点数

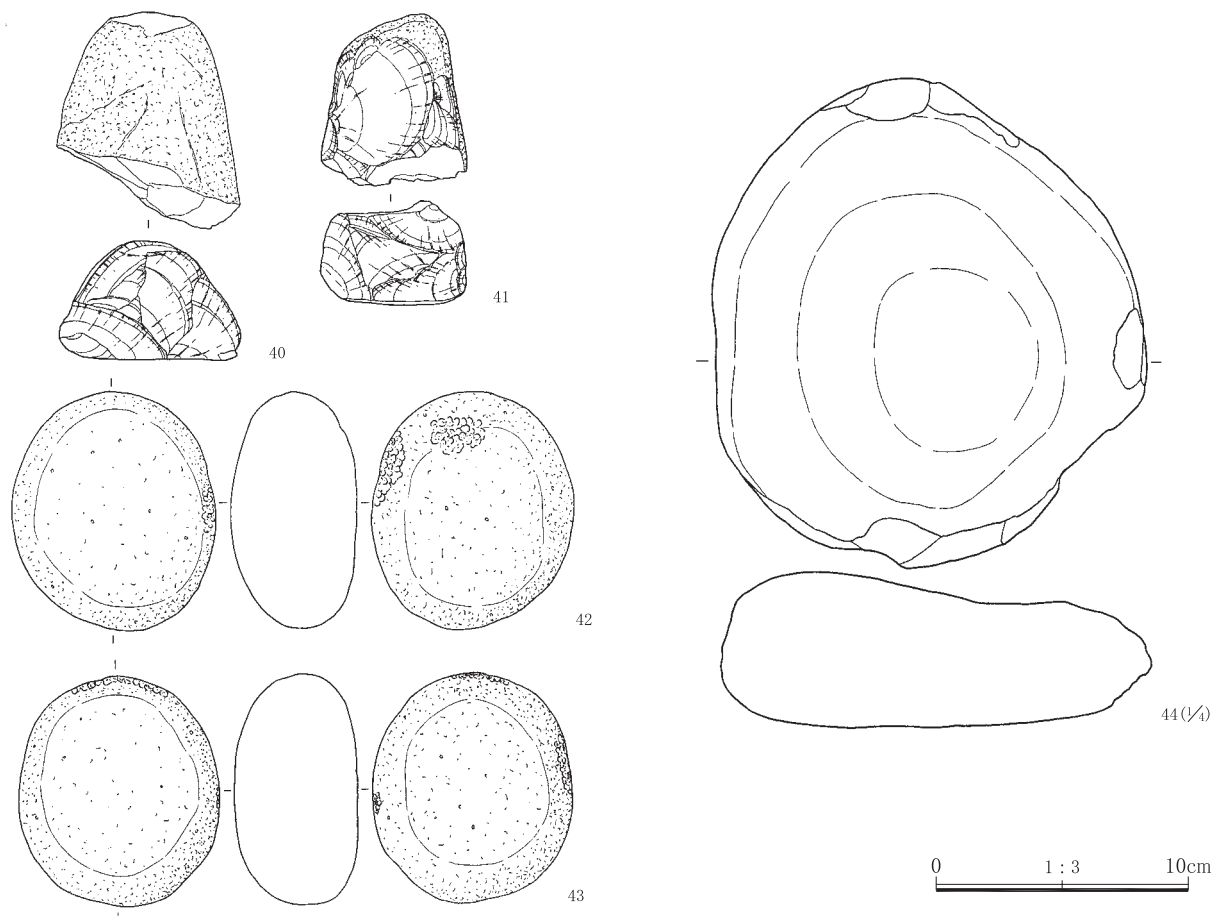
コード	1
点数	1



第33図 16号住居



第34図 16号住居出土遺物(1)



第35図 16号住居出土遺物(2)

れる。

遺物 総数 251 点の多量の遺物（土器 123、石器 128）が存在するが、17 点が床面に密着出土し（2・5・9・13・19・24・27・29・30・33・36・38・39・41・44）、その他は埋没土上位の b 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、夏島式の撚糸文 1 点（5）・絡条体条痕文 1 点（16）と、稻荷台式の撚糸文 14 点（1～4・6～13・15・17）・絡条体条痕文 1 点（14）・無文 17 点（18～34）・構成不明 58 点などの他に、黒浜式 1 点、諸磯 a 式 4 点、型式不明 26 点がある。尚、1・12 と 31・32・34 は、各々同一個体である。石器では、石鏃 1 点（35）、削器 7 点（36～38）、スタンプ形石器 2 点（39）、磨り石類 2 点（42・43）、石皿 1 点（44）、石核 3 点（40・41）、剥片 95 点、礫塊 17 点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が稻荷台式を主

体としていることから、当該期の所産と考えられる。

（観察表：13・28 頁）

その他 周溝は検出されなかった。

● 17 号住居

位置 GO-157

写真 PL 17・18

面積 約 9 m²

方位 N 83 度 W

重複 東側を 44 号住居と 310 号土坑により切られているが、西側に重複する 18 号住居との新旧関係は不明。

形状 44 号住居との重複により判然としない点もあるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ不整な隅丸長形状で、長辺約 4.2 m × 短辺約 3.8 m、深さ 36～85 cm の規模を持つと推定される。四辺の壁面は約 50～70 度の緩い角度で掘

II 今井三騎堂遺跡の調査

り込まれ、各辺はかなり湾曲して走向する。

炉 床面のほぼ中央部に1基が確認された。円形状の地床炉であり、直径約30cmの範囲に被熱による赤化・焼土化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は確認されなかった。

床面 勾配約9度の斜面地のローム層(VI層)を最大85cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約20cm前後の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。敲き床ほどではないが、炉の周辺に若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ約60cmのa～c層がレンズ状堆積しており、自然埋没状況を示している。

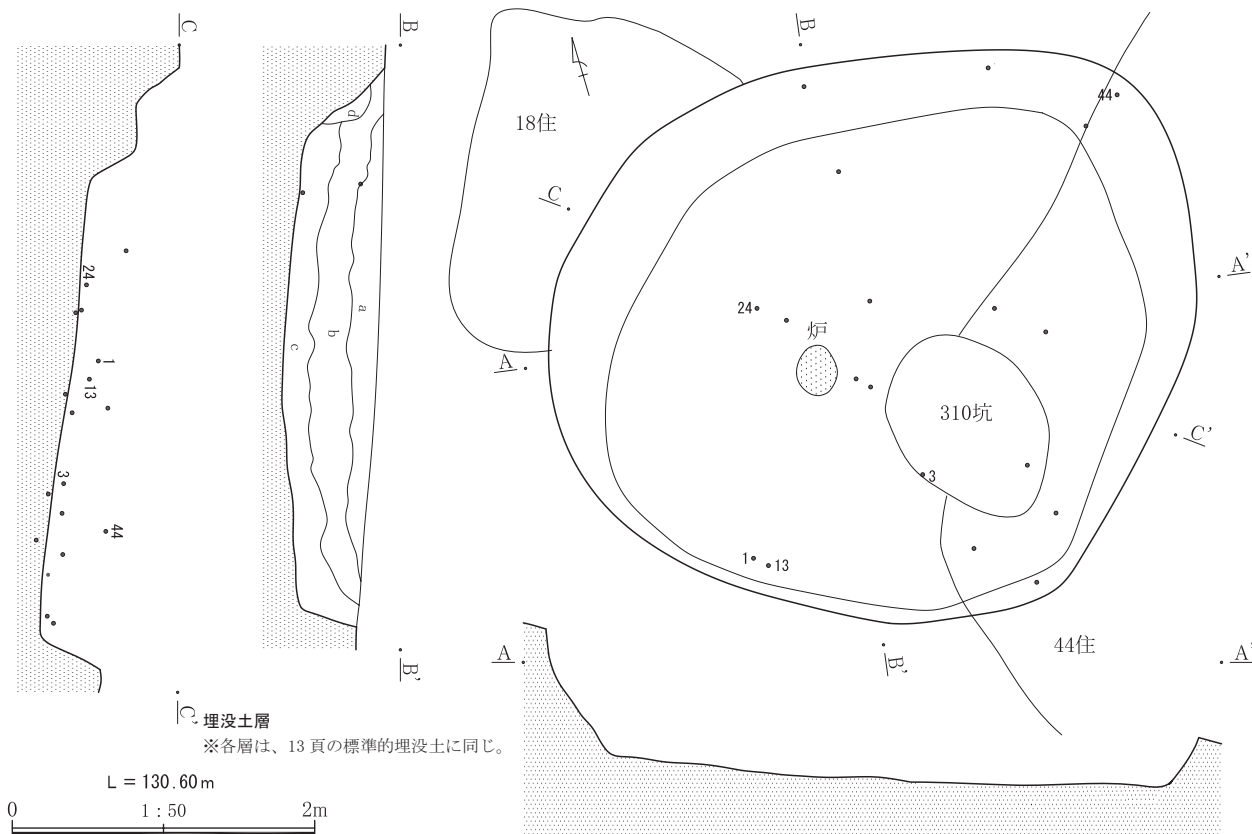
遺物 総数259点の多量の遺物(土器130、石器129)が存在するが、床面に密着したものは僅少で(13・24)、その大半は埋没土上位のa・b層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は破片のみであり、夏島式の捺糸文3点(2～4)・無文1点(21)、稻荷台

式の捺糸文8点(1・5～8・10～12)・絡条体条痕文1点(9)・無文15点(16～20・22～31)、稻荷原式の捺糸文3点(13～15)などの他に、黒浜式1点、諸磯a式1点、同b式1点、同c式7点、型式不明11点がある。尚、25・29・31は同一個体である。石器には、石鏃3点(32・33)、削器10点(33～38・40・41)、磨製石斧の未製品1点(39)、三角錐形石器1点(44)、スタンプ形石器1点(43)、磨り石類3点(42・45)、剥片109点、礫塊1点などが組成する。また、黒曜石製の石鏃1点と剥片5点について、X線回折試験による産地同定を行い、全て和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。また、これらの遺物の他に、埋没土中よりケヤキの炭化材小片が出土しているが、先の黒曜石分析も含め、それらの詳細は691頁の「IV科学的分析」を参照されたい。

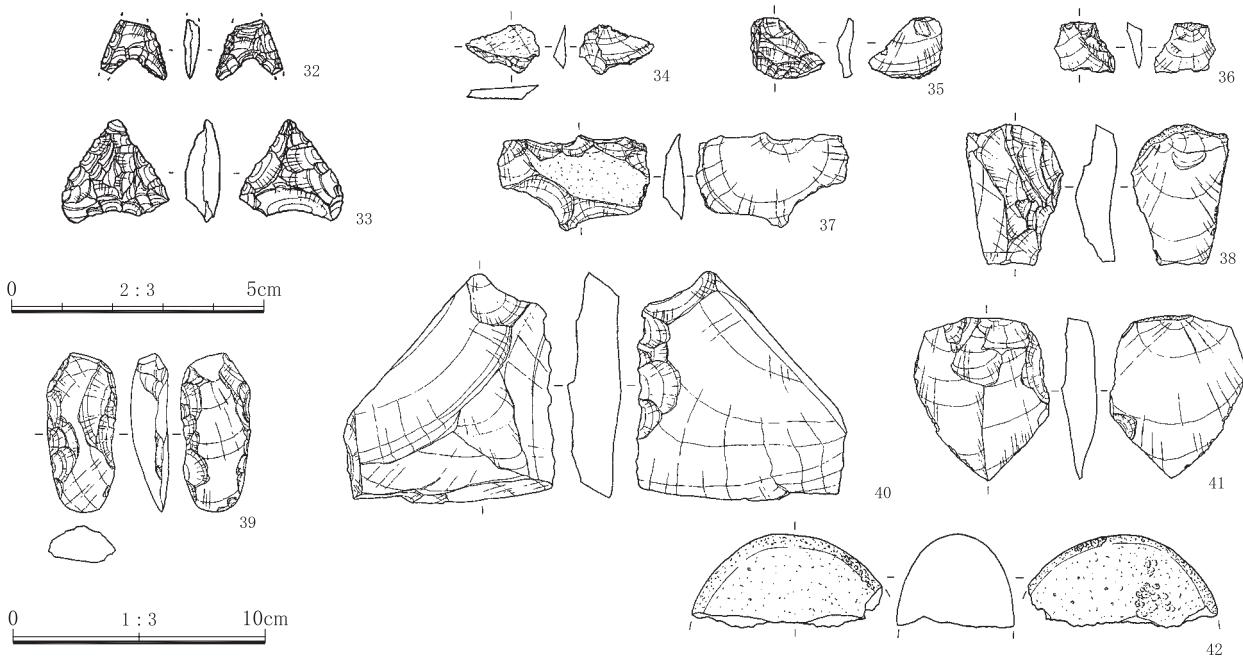
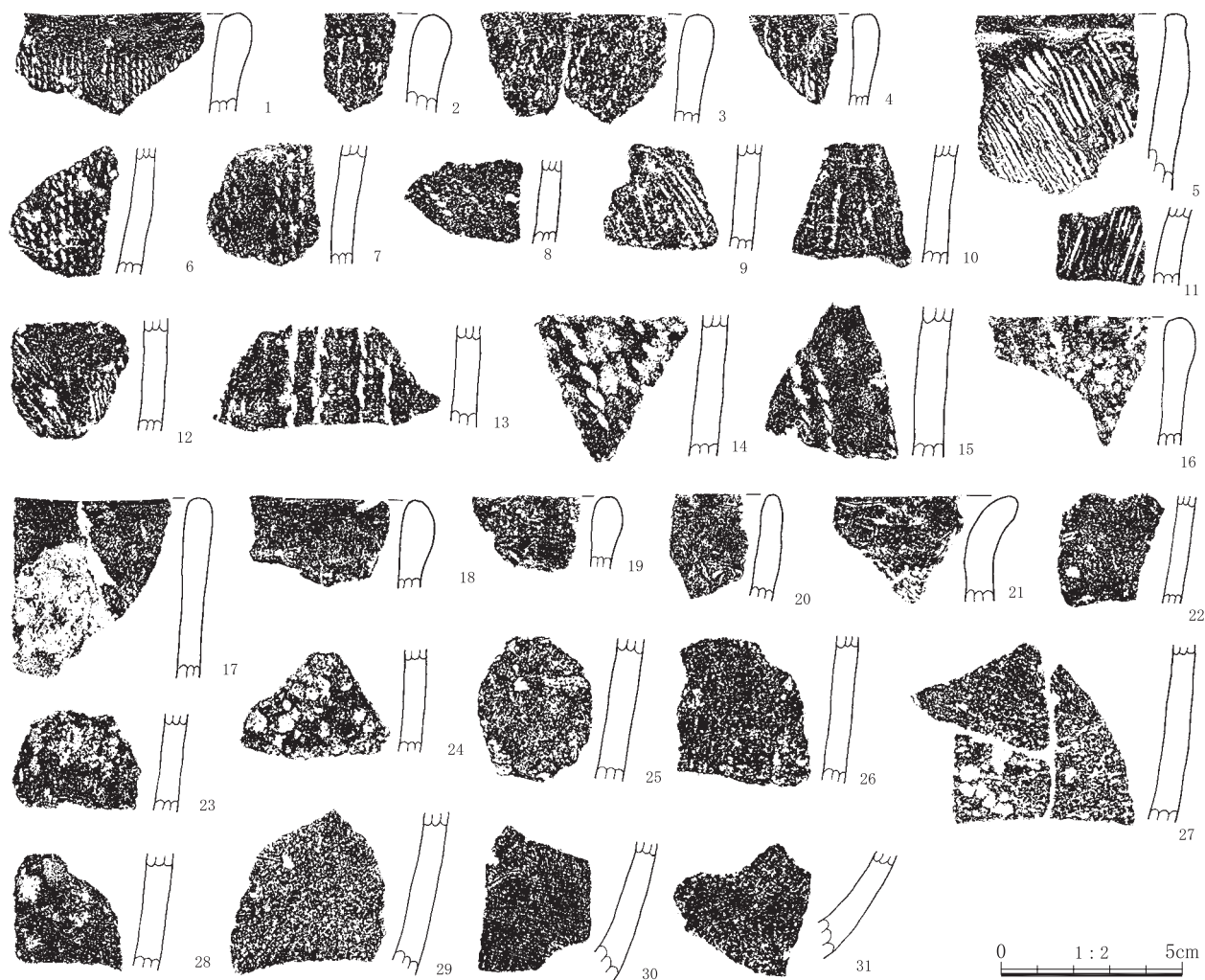
当住居の時期に関しては、出土土器が稻荷台式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:13・28頁)

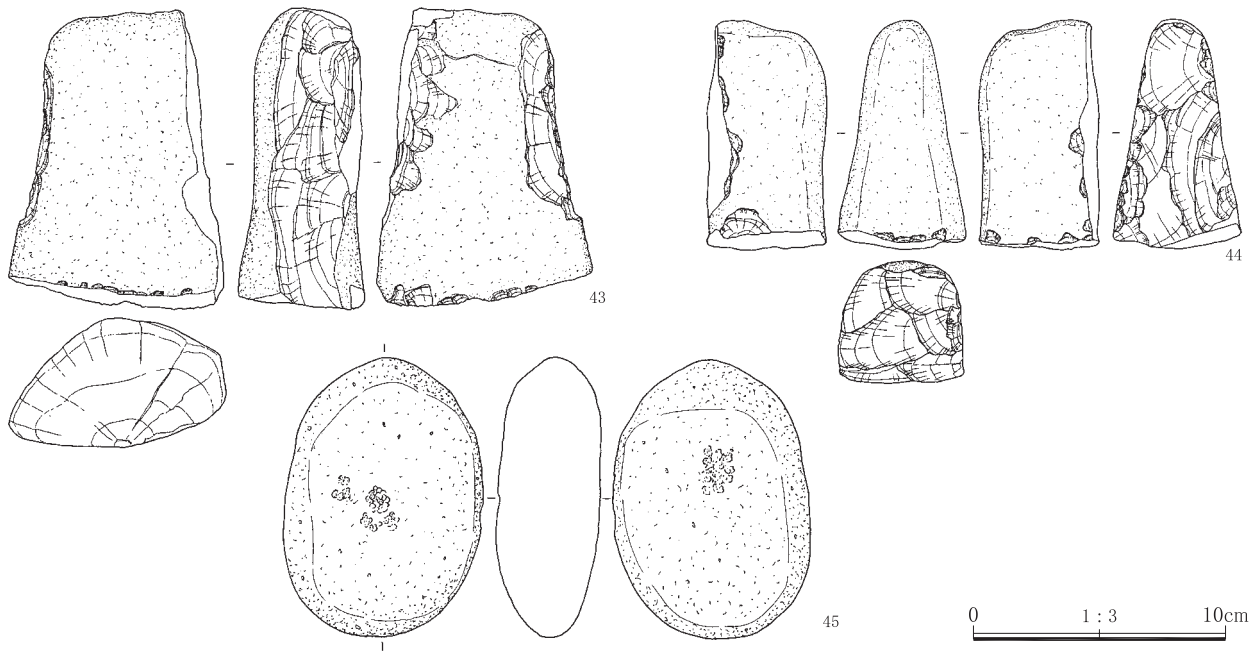
その他 周溝は検出されなかった。



第36図 17号住居



第 37 图 17 号住居出土遺物 (1)



第38図 17号住居出土遺物(2)

【17号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	稲荷原	黒浜	諸磯a	諸磯b
合計	5	101	3	1	1	1

諸磯c	時期不明	総計
7	11	130

分類別点数

夏島式		
分類	2b	4 不明
合計	3	1 1

稲荷原式

分類	1
合計	3

稲荷台式

分類	1a	2a	3	4	不明
合計	1	1	7	15	77

黒浜式

分類	3類
合計	1

諸磯a式

分類	4類
合計	1

諸磯b式

分類	3類
合計	1

諸磯c式

分類	3類	4類
合計	6	1

縄文原形別点数

夏島式

分類	9b	18
合計	3	1

稲荷台式

分類	9b	18	19b
合計	8	15	1

稲荷原式

分類	9b
合計	3

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台	稲荷原
A		3	18	1
B		1	3	1
D		-	3	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	三角錐形	スタンプ形	磨石類	磨製石斧	剥片	礫塊		
合計	3	10	1	1	3	1	109	1	129	

分類別点数

石鏃	挿器・削器			三角錐形石器	
分類	2類	3類	10類	分類	1類 2類
合計	1	1	1	合計	3 7
				分類	7類
				合計	1

スタンプ形石器

分類	5類
合計	1

磨石類

分類	2類	5類
形態	ac	a
合計	2	1

磨製石斧

分類	3類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃	挿器・削器		三角錐形石器	
コード	2	12	コード	1 2
点数	2	1	点数	6 (3) 4
重量	2.1	未計測	重量	(238) 37.1
			コード	1
			点数	1
			重量	282

スタンプ形石器

コード	15
点数	1
重量	655

磨石類

コード	4
点数	3 (2)
重量	(563)

磨製石斧

コード	1
点数	1
重量	31.4

礫塊

コード	4
点数	1
重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

剥片

コード	1	2	3	4	9	12	33
点数	81	13	1	1	6	5	2
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

18号住居

位置 GN-158

写真 PL 18

面積 不明

方位 N 65 度W

重複 東半部を17号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 17号住居と重複するために明確ではないが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形で、短辺2.2m、深さ32cmの規模。四辺の壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、残存する西辺はほぼ直線的に走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、1本が検出されただけである。柱穴の規模(径×深さ)は、P1:28×22cmの規模。

床面 勾配約12度の斜面地のローム層(VI層)を最大32cm掘り込んで床面を構築する。残存する部分の床面はほぼ平坦で凹凸面も少ないが、踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況呈する。

埋没土 厚さ20cm前後のb層を主体にレンズ状堆積が確認でき、自然埋没状況を示すと推定される。

遺物 僅少なながら総数25点の遺物(土器10、石器15)が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、全て埋没土上位のb層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、稲荷台式の捺糸文1点(1)・無文1点(2)・構成不明6点の他に、諸磯c式1点、型式不明1点などがある。石器はスタンプ形石器1点(3)、剥片13点、礫塊1点が組成するが、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式を主体とすることから、当該期の所産と考えられる。

(観察表:13・18頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

【18号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯c	時期不明	総計
合計	8	1	1	10

縄文原体別点数

稲荷台式	
分類	9b 18
合計	1 1

分類別点数

稲荷台式			
分類	3	4	不明
合計	1	1	6

諸磯c式

分類	3類
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		1
D		1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	スタンプ形	剥片	礫塊	
合計	1	13	1	15

分類別点数

分類	2類
合計	1

石材別の点数

と重量

スタンプ形石器

コート	点数	重量
	15	
	1	635

剥片

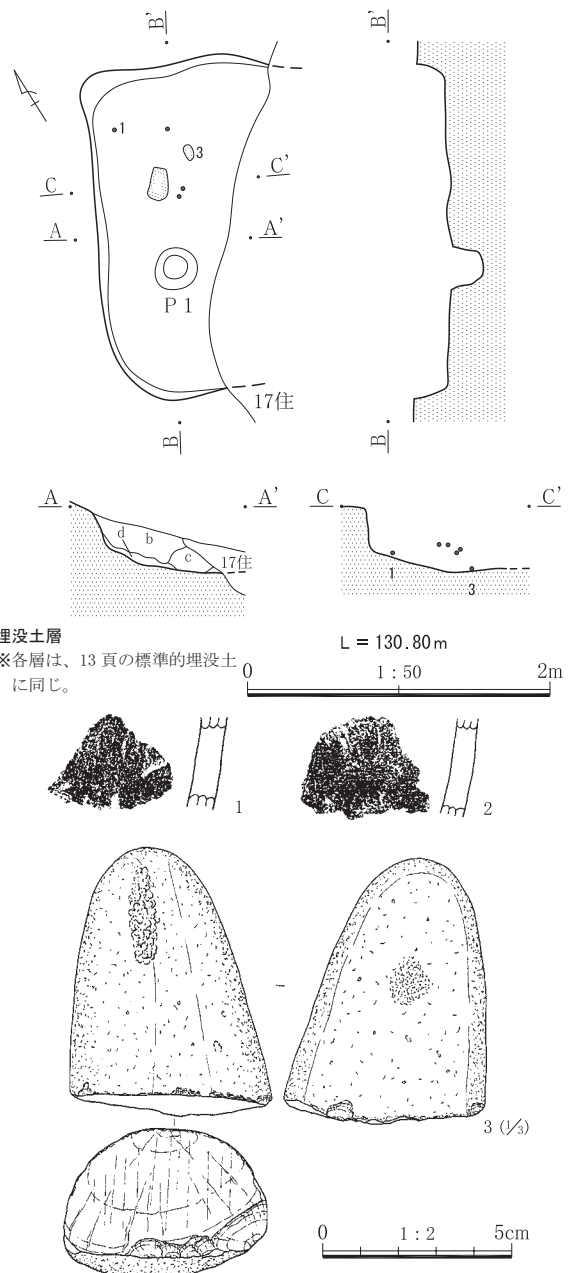
コート	点数	重量
	1	2
	10	3
	未計測	未計測

礫塊

コート	点数	重量
	4	
	1	
	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	総計
合計	1 1



第39図 18号住居と出土遺物

● 19号住居

位置 HD -173

写真 P L 18

面積 不明

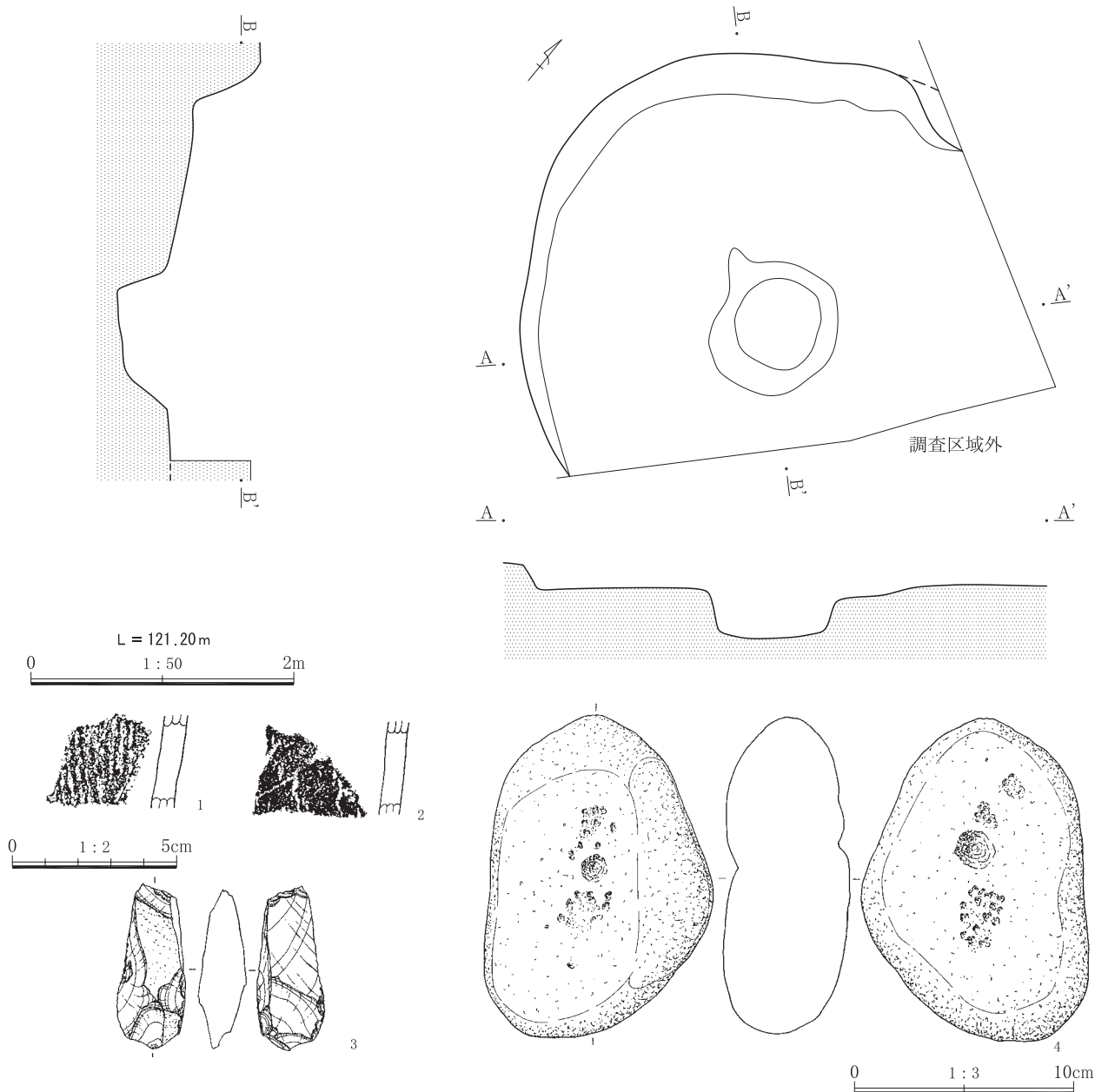
方位 N 41 度 E

形状 東側から南半部にかけて未調査区域となることから、規模については不明であるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸方形を呈すると推定される。壁面は約 70 ～ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、湾曲しつつ走行している。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI層) を最

大 62 cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。中央部に直径約 1 m、深さ 35 cmほどの落ち込みが存在するが、当該住居に随伴する遺構ではなく、他時期の土坑の可能性が高い。

遺物 僅少なながら総数 10 点の遺物 (土器 4、石器 6) が、埋没土中から出土している。土器は小破片のみで



第 40 図 19号住居と出土遺物

あり、夏島式の縄文1点(1)、稲荷台式の撚糸文1点(2)の他に、型式不明2点がある。石器は削器1点(3)、磨り石類1点(4)、剥片4点が組成するが、内容的に極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土遺物が僅少なために確定できないが、夏島式あるいは稲荷台式期の所産と想定される。

(観察表:13・28頁)

その他 炉・柱穴・周溝は検出されなかった。

【19号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	時期不明	総計
合計	1	1	2	4

分類別点数

夏島式	稲荷台式
分類	3
合計	1

縄文原体別点数

夏島式	稲荷台式
分類	2b
合計	1

胎土別点数

胎土	夏島	稲荷台
A	—	1
B	1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	削器類	磨石類	剥片	
合計	1	1	4	6

分類別点数

搔器・削器	
分類	2類
合計	1

磨石類

分類	2類
形態	abc
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器	
コード	1
点数	1
重量	48.5

磨石類

コード	4
点数	1
重量	931

剥片

コード	1	2	3
点数	1	2	1
重量	未計測	未計測	未計測

● 20号住居

位置 GR-153

写真 PL 19

面積 9.05 m²

方位 N 17度 E

重複 北西隅で時期不明の271号土坑が、当住居を切っている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸正方形で、長辺3.95m×短辺3.55m、深さ9～72cmの規模。四辺の壁面は約70～

80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は湾曲しつつ走行している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、合計6本が確認されている。各柱穴の配列は整然としていないが、P1-P2-P3とP4-P5-P6の2列配置の可能性が高い。主な柱穴の芯心間の距離はP1～P2:1.7m、P2～P3:1.0m、P3～P4:1.3m、P4～P5:1.6mの規模。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:34×11cm、P2:28×31cm、P3:31×13cm、P4:32×15cm、P5:56×20cm、P6:47×11cmの規模。尚、P5・P6の直径が他よりも大きいのは、掘りすぎによるものであり、元来は30cm前後と推定される。

床面 勾配約12度の斜面地のローム層(VI層)を最大72cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、西側から東側方向へ比高差10cmの僅かな傾斜が存在する。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ30～50cmのa層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数56点の遺物(土器35、石器21)が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、全て埋没土上位のa層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、夏島式の無文3点(8～10)、稲荷台式の撚糸文6点(1～6)・無文1点(7)・構成不明3点などの他に、諸磯a式7点、同c式1点、型式不明14点がある。石器には、石錐1点(11)、削器1点(13)、磨り石類1点(14)、多孔石1点(12)、剥片17点などが組成する。また、剥片1点に用いられた黒曜石について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式を主体とすることから、当該期の所産と考えられる。

(観察表:13・18頁)

その他 炉と周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

【20号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稻荷台	諸磯a	諸磯c	時期不明	総計
合計	3	10	7	1	14	35

分類別点数

夏島式		稻荷台式			諸磯c式		
分類	4	分類	3	4	不明	分類	3
合計	3	合計	6	1	3	合計	1

諸磯a式

分類	2	3	4
合計	4	1	2

縄文原体別点数

夏島式		稻荷台式	
分類	18	分類	9b 18
合計	3	合計	6 1

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稻荷台
A		3	3
B		—	1
D		—	3

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他	総計
器種	石錐	削器類	磨石類	多孔石	剥片
合計	1	1	1	1	17

分類別点数

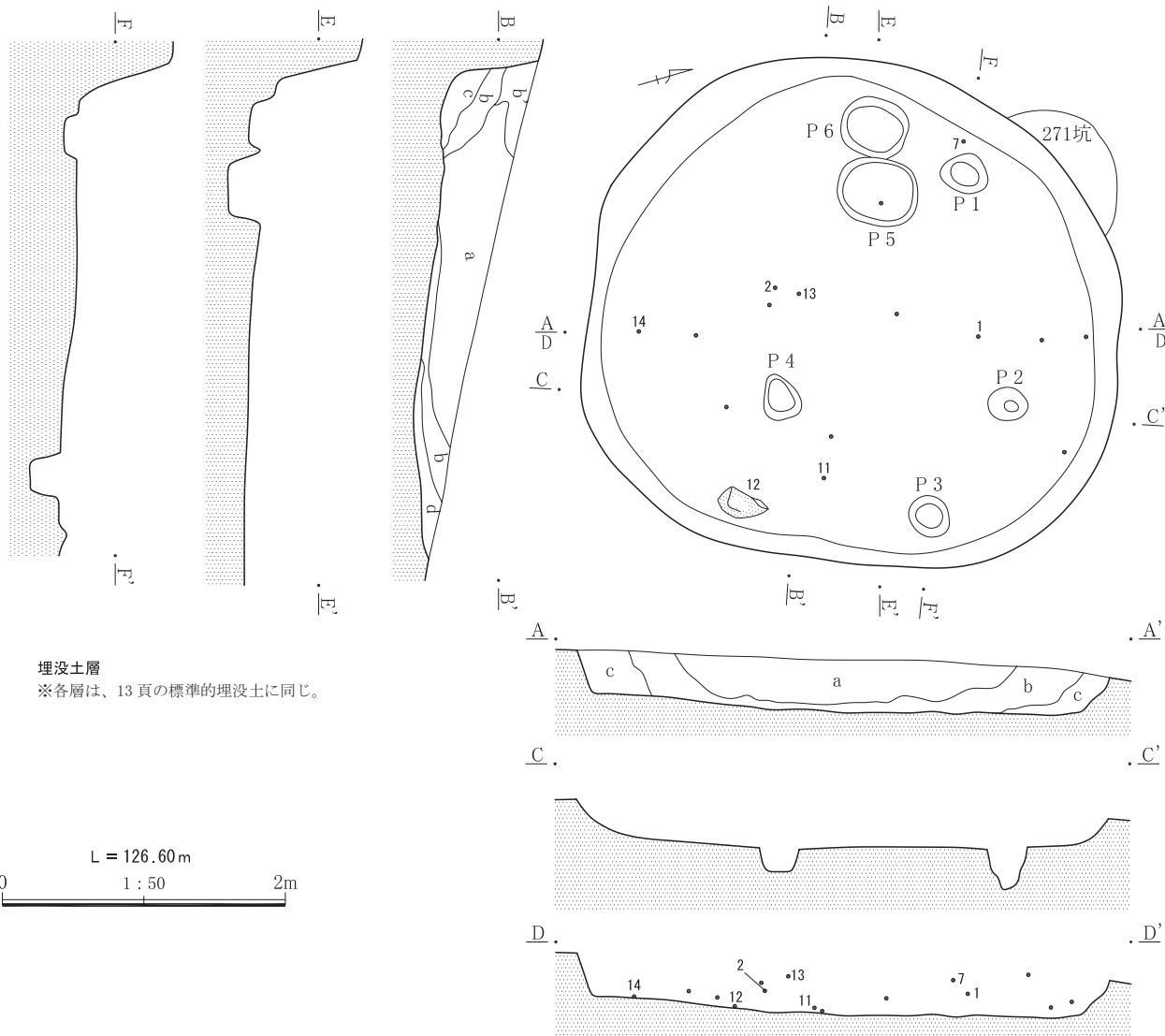
石錐	搔器・削器	磨石類	多孔石
分類	2類	分類	3類
合計	1	合計	1
		形態	ac
		合計	1
		形態	ab
		合計	1

石材別の点数と重量

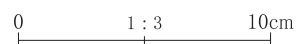
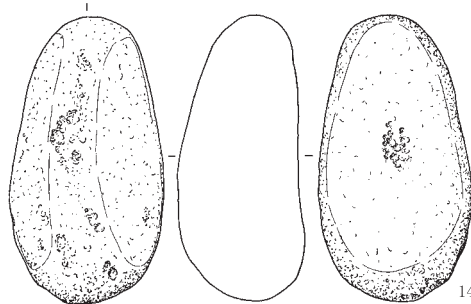
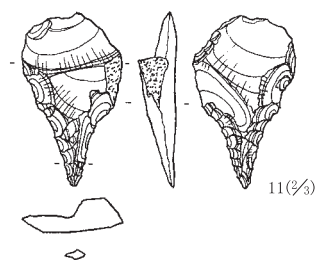
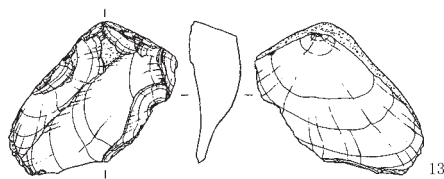
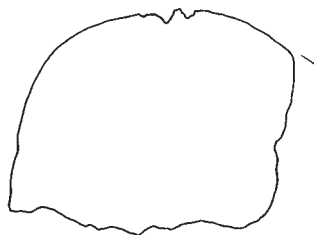
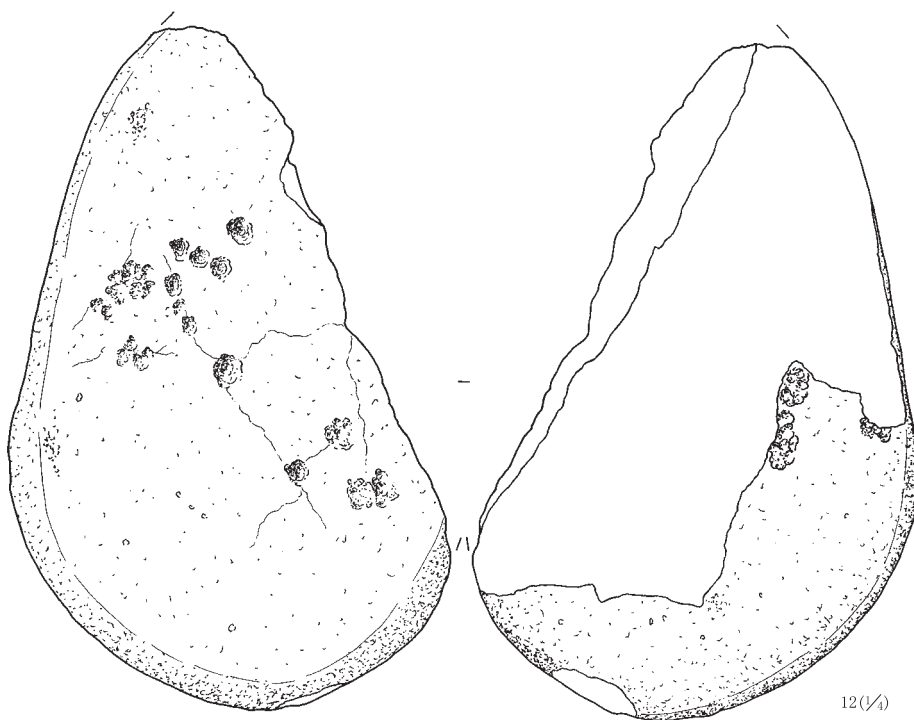
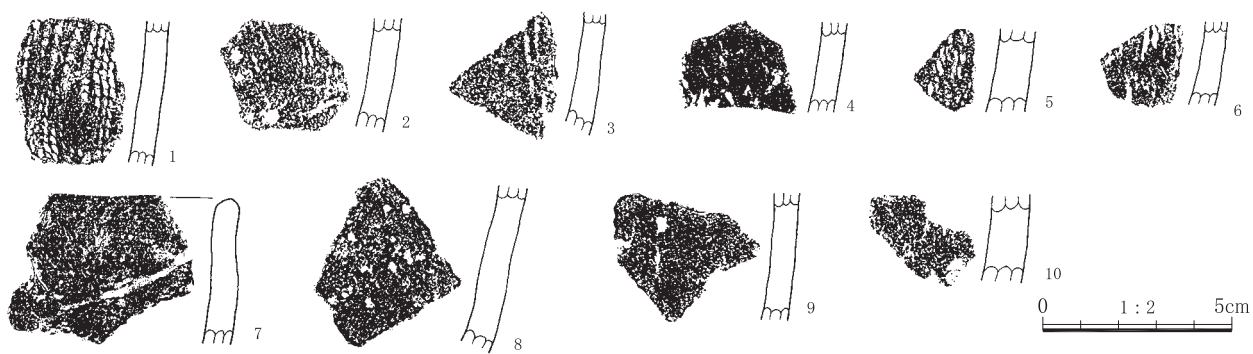
石錐	搔器・削器	磨石類	多孔石
コード	2	コード	4
点数	1	点数	1
重量	3.2	重量	419
		コード	4
		点数	1
		重量	8800

剥片

コード	1	2	3	9	12
点数	7	6	1	2	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測



第41図 20号住居



第42图 20号住居出土遺物

● 21号住居

位置 GK-149

写真 PL 19・20

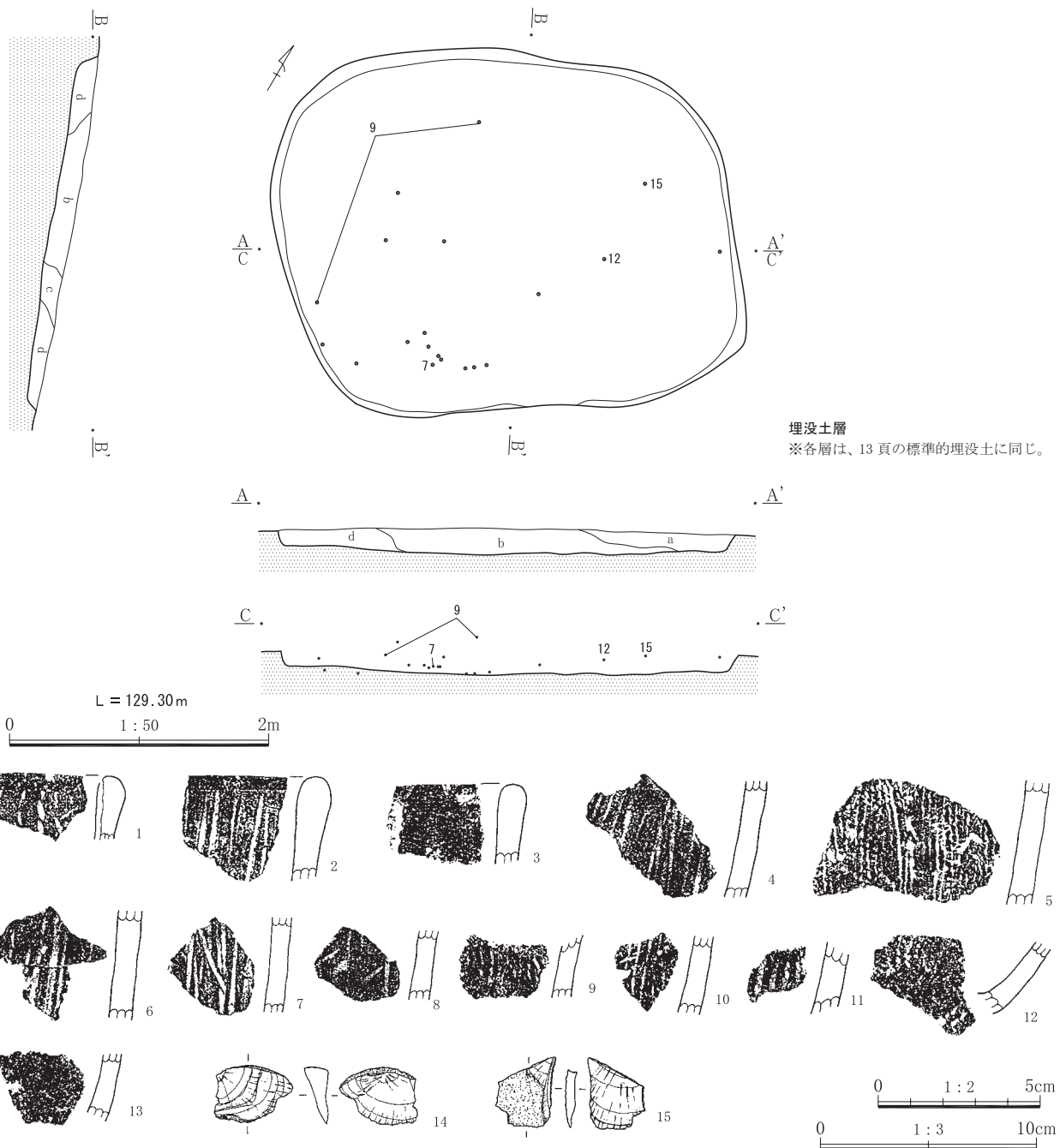
面積 8.05 m²

方位 N 56度E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 3.47 m × 短辺 2.82 m、深さ 2 ~ 21 cm の規模。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度ながら掘り込みは浅く、各辺はほぼ直線的に走行している。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI層) を僅か 21 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 35 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 薄層ながら厚さ 20 cm の a ~ d 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。



第 43 図 21 号住居と出土遺物

遺物 総数 41 点の遺物（土器 26、石器 15）が存在するが、床面に密着したものは 1 点（15）のみで、その他は埋没土上位の a・b 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、夏島式の捺糸文 3 点（5・9・12）・条痕文 6 点（2・4・6～8・10）と、稲荷台式の捺糸文 1 点（3・13）・無文 2 点（3・13）・構成不明 13 点の他に、型式不明 1 点などがある。尚、2・4・7～8 は同一個体。石器は削器 2 点（14・15）、磨石類 1 点、剥片 10 点、礫塊 2 点が組成するのみであり、極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、夏島式と稲荷台式の出土土器が拮抗しており確定できないが、数量的には稲荷台式期の可能性が高い。

（観察表：13・14・28 頁）

その他 炉・柱穴・周溝は検出されなかった。

【21号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	時期不明	総計
合計	9	16	1	26

分類別点数

夏島式		稲荷台式					
分類	2b	3	分類	1a	3	4	不明
合計	1	8	合計	1	1	2	12

縄文原体別点数

夏島式		稲荷台式			
分類	9b	19b	分類	9b	18
合計	3	6	合計	2	2

胎土別点数

胎土	型式		夏島	稲荷台
	A	D		
A	7	4		
D	2	—		

（石器）

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	削器類	磨石類	剥片	礫塊	
合計	2	1	10	2	15

分類別点数

搔器・削器		磨石類		
分類	1類	2類	分類	5類
合計	1	1	形態	a
			合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		磨石類		礫塊		
コード	1	2	コード	4	コード	4
点数	1	1	点数	1	点数	2
重量	7.3	4.2	重量	未計測	重量	未計測

剥片

コード	1	9	不明
点数	8	1	1
重量	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	2	2

● 22号住居

位置 G I -146

写真 P L 21

面積 6.72 m²

方位 N 81 度 E

重複 北東隅で時期不明の 305 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ不整な隅丸形状で、長辺 3.1 m × 短辺 3.0 m、深さ 3～73 cm の規模。四辺の壁面は約 70～80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は湾曲しつつ走行している。

炉 床面中央部のやや北壁寄りに 1 基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径 43 × 短径 37 cm の範囲に被熱による赤化・焼土化が認められる。深さ 5 cm ほど下位まで被熱による焼土化が認められ、かなり長時間の使用状況を窺わせる。

床面 勾配約 12 度の斜面地のローム層（VI 層）を最大 73 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 25 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。敲き床ほどではないが、炉の周辺に若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ 30～40 cm の a・b 層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅少なながら総数 17 点の遺物（土器 7、石器 10）が存在し、その全てが埋没土上位の a・b 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、稲荷台式の捺糸文 2 点（1・5）・無文 3 点（2～4）・構成不明 2 点などがある。石器には、打製石斧 1 点や磨り石類 1 点（7）、石核 1 点（6）、剥片 7 点が組成するのみであり、内容的に極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が全て稲荷台式であることから、当該期の所産と考えられる。

（観察表：14・28 頁）

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

【22号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	総計
合計	7	7

縄文原形別点数

分類	9b	18
合計	2	3

分類別点数

稲荷台式			
分類	3	4	不明
合計	2	3	2

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		4
B		1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	打製石斧	磨石類	剥片	石核	
合計	1	1	7	1	10

分類別点数

打製石斧	
分類	8類
合計	1

磨石類

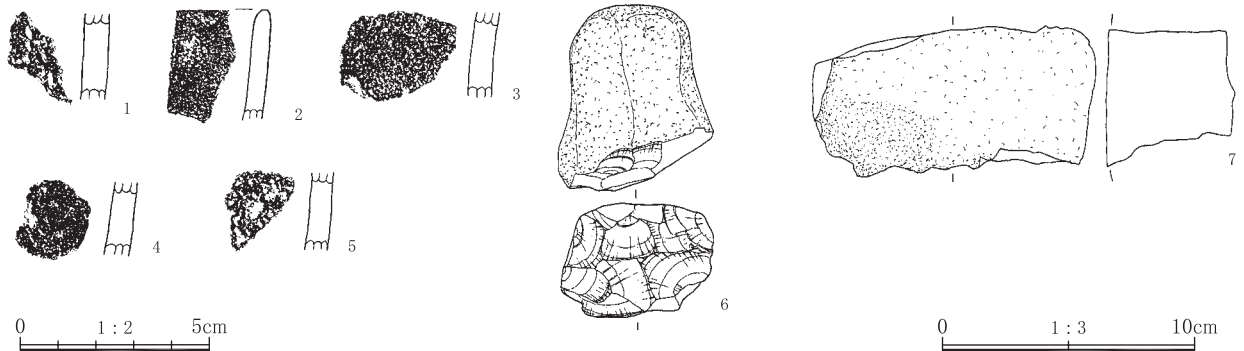
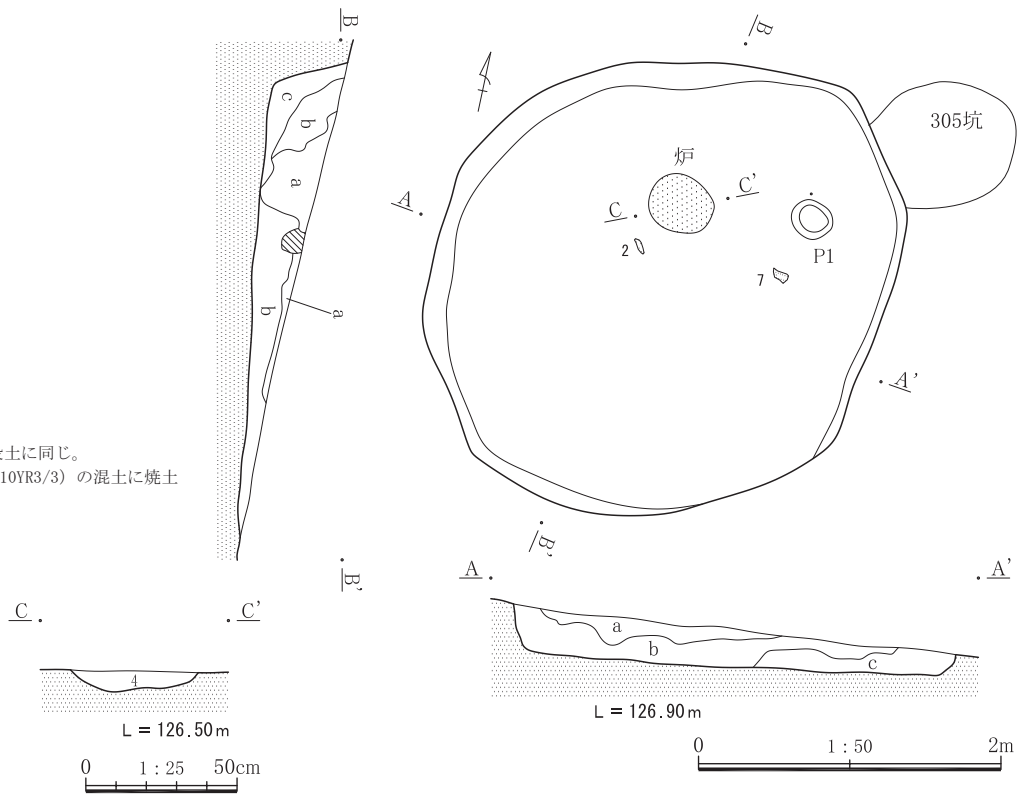
磨石類	
分類	5類
形態	a
合計	1

石材別の点数と重量

打製石斧		磨石類		剥片		石核		
コート	1	コート	18	コート	1	7	コート	1
点数	1	点数	1	点数	6	1	点数	1
重量	未計測	重量	443	重量	未計測	未計測	重量	253

埋没土層

a ~ c. 13 頁の標準的埋没土に同じ。
d. ローム土と暗褐色土 (10YR3/3) の混土に焼土が 30 ~ 40% 混入。



第 44 図 22 号住居と出土遺物

● 23号住居

位置 GH-157

写真 PL 20

面積 6.67 m²

方位 N 51 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 3.22 m×短辺約 2.5 m、深さ 40 cmの規模。壁面は約 80 度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺ともに直線的に走行している。

炉 床面中央部から南壁側に寄った位置に、1 基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径 56×短径 54 cmの範囲に被熱による赤化・焼土化が認められる。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI層) を最大 40 cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で若干の凹凸面を有するが、傾斜の少ない平坦な床面である。また、踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ 20～40 cmの b～d 層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅少なながら総数 41 点の遺物 (土器 18、石器 21) が存在するが、床面に密着したものは少なく (5・7・18)、その大半が埋没土上位の b 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、稲荷台式の捺糸文 7 点 (1～5・7・8)、条痕文 1 点 (6)、無文 7 点 (9～15)、構成不明 3 点などがある。尚、2・3、1・5、13・14 は、各々同一個体である。石器には、削器 3 点 (16・17)、三角錐形石器 1 点 (18)、剥片 17 点が組成するのみであり、内容的に極めて乏しい。これらの遺物の他に、炉の埋没土中よりケヤキの炭化材小片が出土しているが、詳細は 691 頁の「IV 科学的分析」を参照されたい。

当住居の時期については、出土土器が稲荷台式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 14・28 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

【23号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	総計
合計	18	18

縄文原別点数

稲荷台式

分類	9b	18	19b
合計	7	7	1

分類別点数

稲荷台式

分類	3	4	不明
合計	8	7	3

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		15

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他	総計	
器種	削器類	三角錐形	剥片	
合計	3	1	17	21

分類別点数

搔器・削器

分類	1類	3類
合計	2	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1	2
点数	2 (1)	1
重量	(85.7)	5.0

三角錐形石器

コード	1
点数	1
重量	255

剥片

コード	1	2
点数	14	3
重量	未計測	未計測

● 24号住居

位置 GP-150

写真 PL 21

面積 不明

方位 N 22 度 E

重複 南半部を諸磯 c 式期の 52 号住居や倒木痕により切られている。

形状 他時期の住居や倒木痕との重複により、北半部が残存することとどまるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 3.6 m、深さ 40 cmの規模。壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北辺はやや湾曲している。

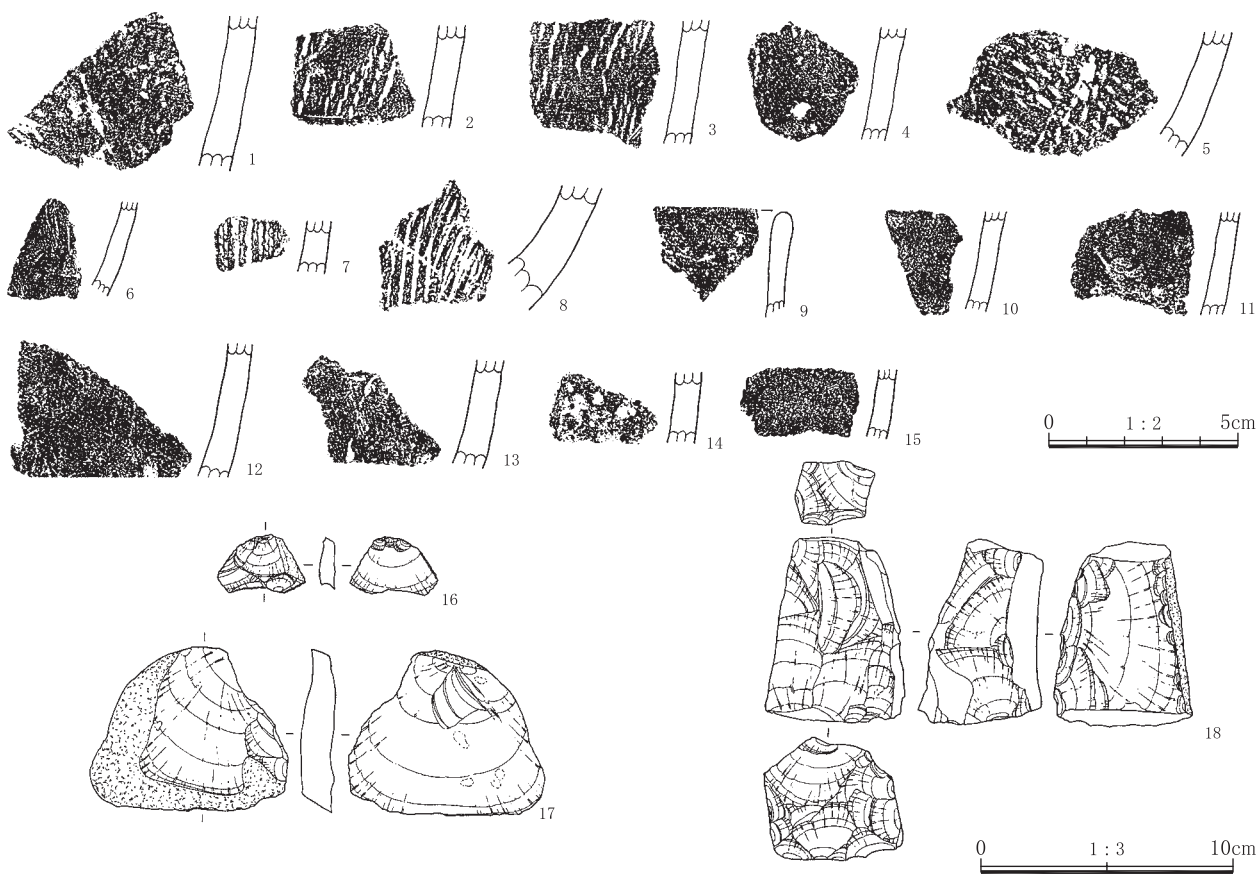
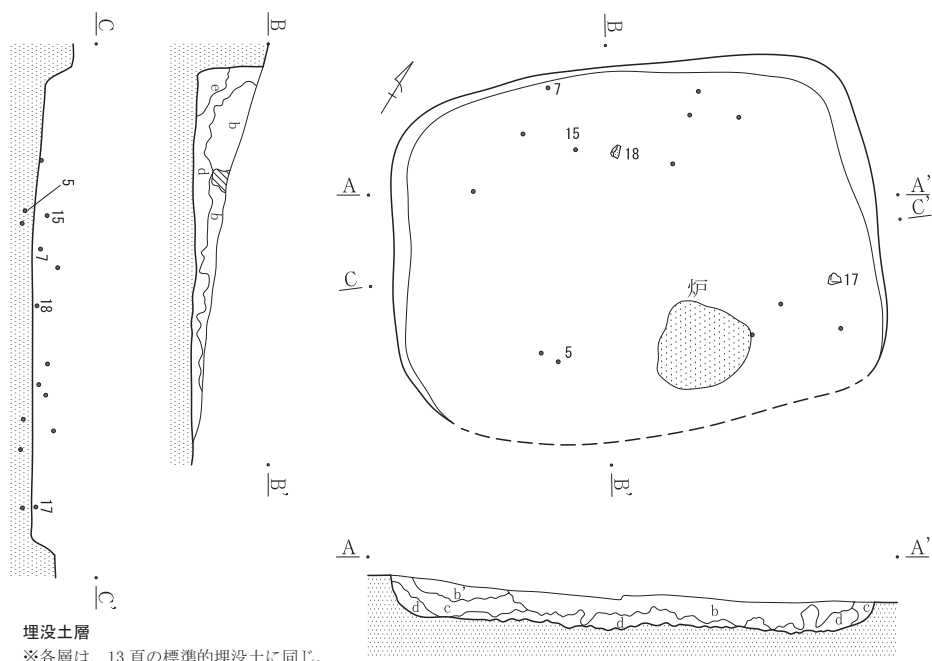
炉 他遺構との重複により、その存在の有無を確認することはできなかった。

床面 残存部分では、勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI層) を 40 cm前後掘り込んでいるのが確認でき、ほぼ平坦で凹凸面も少ない。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 残存部分では、a～c 層が厚さ約 40 cmに堆積し、自然埋没状況を示すと推定される。

遺物 僅少なながら総数 23 点の遺物 (土器 10、石器 13) が存在するが、床面に密着したものは 1 点 (8) のみで、その他は埋没土上位の a・b 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、稲荷台式の捺糸文 1 点 (1)・無文 3 点 (2・4・5)・構成不明 1 点と、稲荷原式の捺糸文 1 点 (3)

II 今井三騎堂遺跡の調査



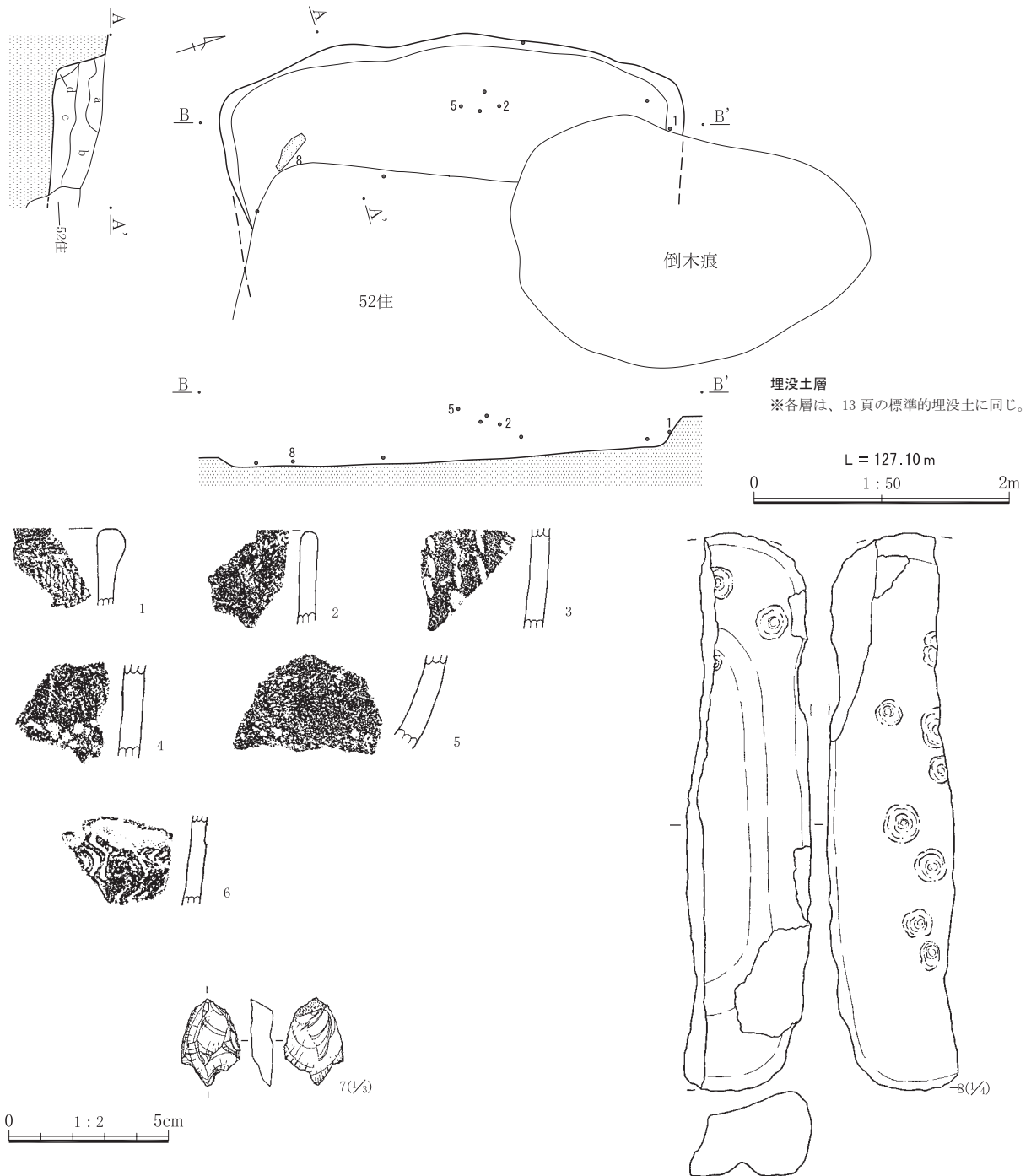
第 45 図 23 号住居と出土遺物

の他に、山形押型文 2 点 (6)、型式不明 2 点などがある。石器には、削器 1 点 (7)、石皿 1 点 (8)、剥片 11 点などが組成するのみで、極めて乏しい。また、黒曜石の剥片 2 点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。尚、8 の石皿は他時期の混入品の可能性がある。

当住居の時期に関しては、出土土器が稲荷台式を主体としており、当該期の可能性が高いが、稲荷原式や山形押型文の存在にも注意を要する。

(観察表: 14・28 頁)

その他 残存部内では、柱穴と周溝は検出されなかった。



第 46 図 24 号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【24号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	稲荷原	押型	時期不明	総計
合計	5	1	2	2	10

分類別点数

稲荷台式			稲荷原式		縄文原体別点数 稲荷台式			
分類	2a	4	不明	分類	1	分類	9b	18
合計	1	3	1	合計	1	合計	1	3

稲荷原式

分類	9b
合計	1

胎土別点数

胎土	型式		
	稲荷台	稲荷原	押型
A	2	1	1
B	2	-	-

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	削器類	石皿	剥片	
合計	1	1	11	13

分類別点数

搔器・削器		石皿	
分類	2類	分類	2類
合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器		石皿	
コード	1	コード	13
点数	1	点数	1
重量	10.5	重量	2500

剥片

コード	1	7	9	12	33
点数	5	1	2	2	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

● 25号住居

位置 G I -161 写真 P L 21

面積 不明 方位 N 63 度 E

形状 全体の3/4が調査区域外のために不明確であるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸形状を呈すると推定される。長・短辺の長さは不明だが、調査部分の深さは44～82cmを測り、壁面は約60度の緩い角度で掘り込まれている。

炉 住居の大半が調査区外であるために、その存在の有無を確認することができなかった。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI層)を80cm前後掘り込んでいる。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ40～60cmのa～c層がレン

ズ状堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 僅かに総数6点の土器破片が、埋没土上位のa・b層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は、稲荷台式の燃糸文3点(1～3)、無文1点(4)、構成不明2点などで、石器は全く検出されていない。

当住居の時期に関しては、出土土器が僅少なために確定的ではないが、稲荷台式期の所産と想定される。

(観察表:14頁)

その他 調査範囲内では、柱穴と周溝は検出されなかった。

【25号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	総計
合計	6	6

分類別点数

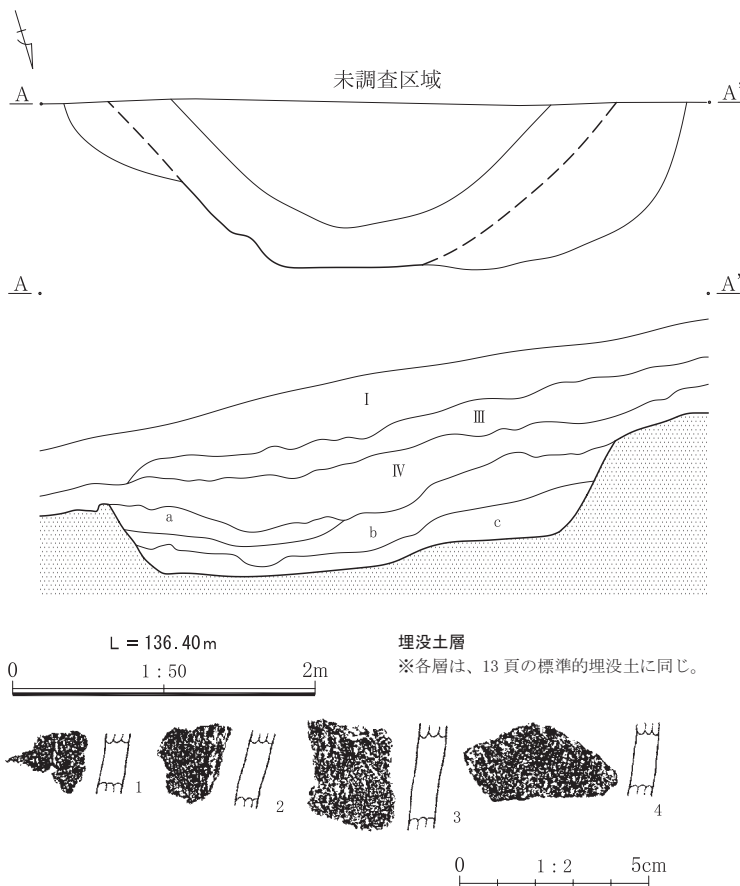
稲荷台式			
分類	3	4	不明
合計	3	1	2

縄文原体別点数

稲荷台式		
分類	9b	18
合計	3	1

胎土別点数

胎土	型式	
	稲荷台	
A	4	



第47図 25号住居と出土遺物

● 26号住居

位置 FW-107 写真 PL 22
面積 約 18.3 m² 方位 N 21 度W

形状 斜面地を浅く掘り込むために、東辺の立ち上がりを検出できなかったが、等高線方向にほぼ並行して南北に長軸を持つ隅丸正方形で、長辺 4.72 m × 短辺約 4.6 m、深さ 26 cm の規模。深度が浅いために壁面の状態は判然としないが、東辺を除く三辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部のやや西壁寄りに 1 基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径 99 × 短径 60 cm の範囲に被熱による赤化・焼土化が認められる。床面下約 5 cm までローム土 (VI 層) の赤化・焼土化が散見されるが、長時間にわたる使用の痕跡に乏しい。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4 本が確認されているが、これ以外にも深度の浅い不明瞭な柱穴が存在した可能性もある。各柱穴は、住居外形とほぼシンメトリーにその対角線上に配置されている。その芯心間の距離は P1 ~ P2 : 2.7 m、P2 ~ P3 : 2.0 m、P3 ~ P4 : 2.5 m、P4 ~ P1 : 2.2 m の規模。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 25 × 45 cm、P2 : 27 × 41 cm、P3 : 28 × 51 cm、P4 : 25 × 47 cm の規模。

床面 ローム層 (VI 層) を最大 26 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ない床面であり、炉の周辺を中心にして、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 a 層が厚さ 10 cm 前後に薄く堆積するのみで、全体的な埋没状況は判然としない。

遺物 僅少なながら総数 24 点の遺物 (土器 7、石器 17) が存在するが、床面に密着したものは少なく (2・4)、その大半が埋没土上位の a 層を中心に出土している。土器はいずれも小破片であり、稲荷台式の無文 2 点 (1・2) と構成不明 1 点の他に、型式不明 4 点がある。また石器は、磨り石類 3 点 (3・4)、剥片 12 点、礫塊 2 点が組成するのみであり、極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が僅少なために断定できないが、住居の形態や支柱の状況から見て、諸磯式期の可能性が高い。 (観察表:14・28 頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【26号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	時期不明	総計
合計	3	4	7

分類別点数

稲荷台式		
分類	4	不明
合計	2	1

縄文原体別点数

稲荷台式	
分類	18
合計	2

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		1
B		1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	磨石類	剥片	礫塊	
合計	3	12	2	17

分類別点数

磨石類		
分類	2類	5類
形態	a	a
合計	2	1

石材別の点数と重量

磨石類

コート	4	9
点数	1	2
重量	未計測	146

剥片

コート	1	7	9
点数	10	1	1
重量	未計測	未計測	未計測

礫塊

コート	4	不明
点数	1	1
重量	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	2	2

● 27号住居

位置 FP-136 写真 PL 22
面積 約 6 m² 方位 N 40 度E

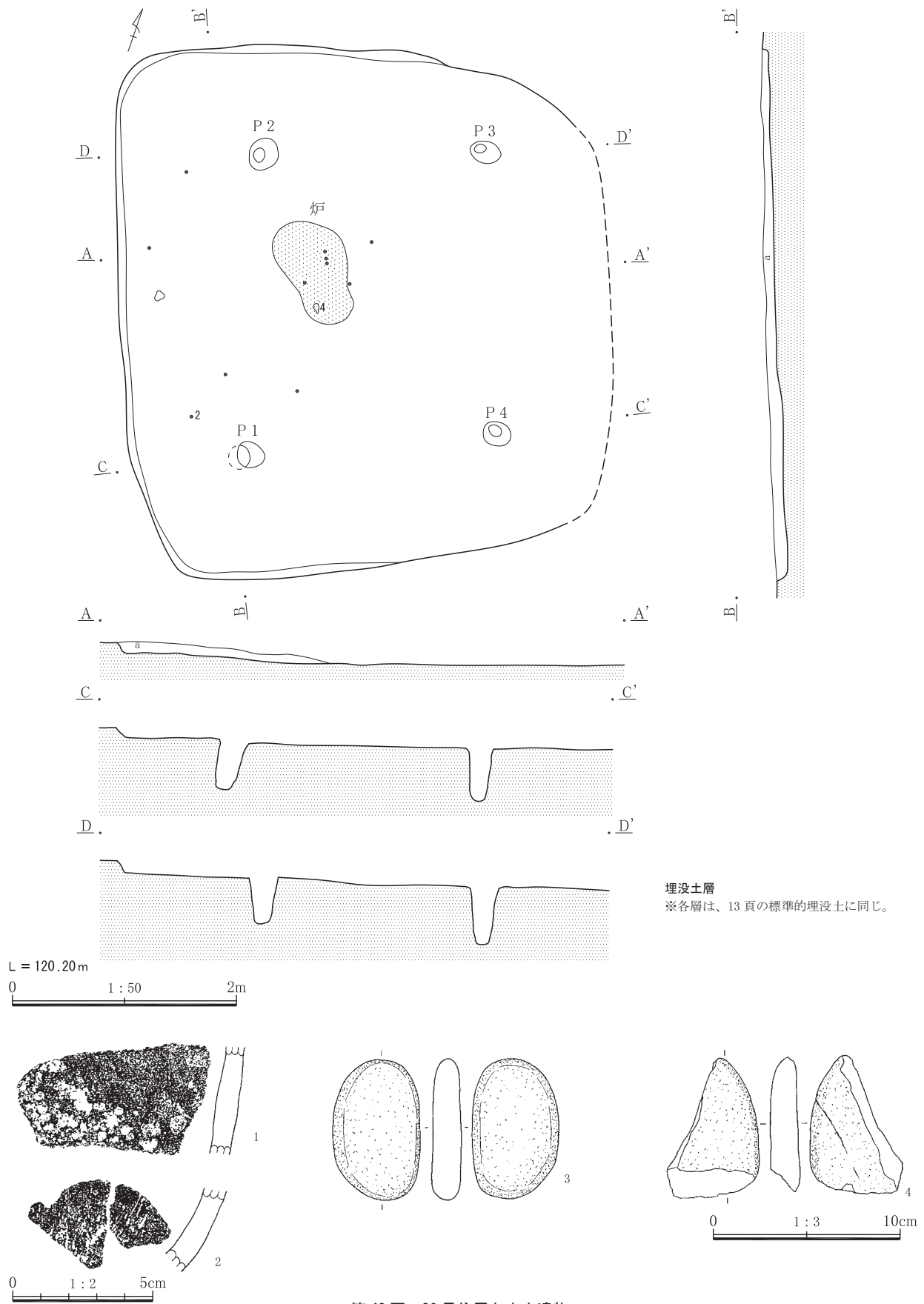
形状 斜面地を掘り込むために、東辺の立ち上がりを検出できなかったが、等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈すると推定され、長辺 3.12 m × 短辺約 2.2 m、深さ 28 cm の規模。東辺を除く三辺の壁面は約 60 度の緩い角度で掘り込まれ、各辺ともほぼ直線的に走行している。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 28 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面の少ない床面であるが、自然地形と同様に約 15 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ約 20 cm 前後の b・c 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅少なながら総数 22 点の遺物 (土器 18、石器 4) が存在するが、床面に密着したものは 1 点 (7) のみで、

II 今井三騎堂遺跡の調査

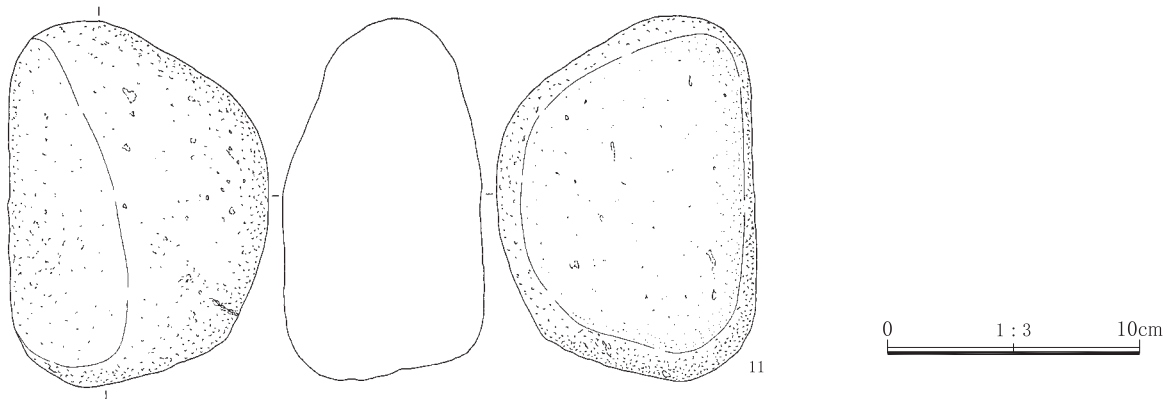
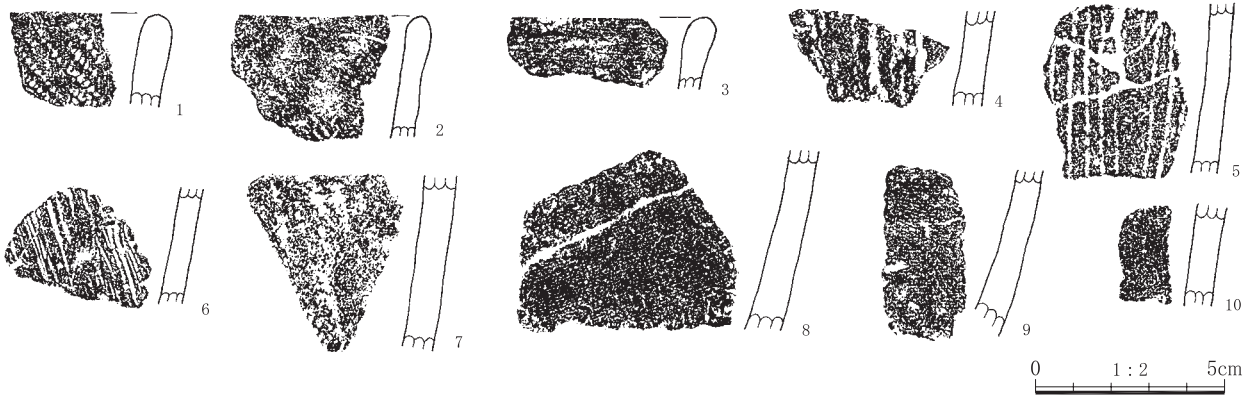
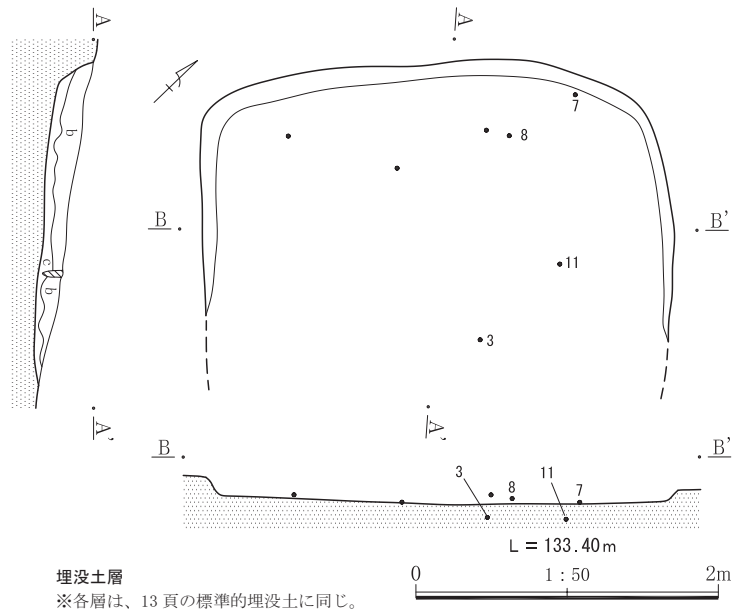


第48図 26号住居と出土遺物

その他は埋没土上位のb層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、夏島式の縄文1点(1)と、稲荷台式の縄文1点(7)・撚糸文2点(4・5)・条痕文1点(6)・無文5点(2・3・8~10)などの他に、型式不明2点がある。尚、2・9・10の無文土器は同一個体。石器には、磨り石類1点(11)と礫塊3点が組成するのみであり、内容的に極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、稲荷台式が主体的であることから、当該期の所産と想定される。(観察表:14・28頁)

その他 炉・柱穴・周溝は検出されなかった。



第49図 27号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【27号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	時期不明	総計
合計	15	3	18

縄文原体別点数

稲荷台式

分類	2b	9a	9b	18	19b
合計	2	1	1	5	1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他	総計
器種	磨石類	礫塊	
合計	1	3	4

分類別点数

磨石類

分類	4類
形態	a
合計	1

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	3	3

分類別点数

稲荷台式

種別	a2	c	d	不明
合計	1	4	5	5

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		6
B		2
D		2

石材別の点数と重量

磨石類	礫塊
コード [*]	コード [*]
4	4
点数	点数
1	3
重量	重量
1422	未計測

被熱礫の石材別点数

コード [*]	4
点数	3

● 28号住居

位置 FK-173

写真 PL 23

面積 不明

方位 N 73 度 E

重複 南半部を5号古墳の周堀により切られている。

形状 古墳との重複により不明確ではあるが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸形状を呈すると推定される。長辺は約2.8mで、深さ24～37cmの規模。壁面は約60～80度の角度で掘り込まれ、残存する各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面のほぼ中央部に1基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径23×短径19cmの範囲に被熱による赤化・焼土化が認められる。

床面 勾配約5度の斜面地のローム層

(VI層)を40cm前後掘り込んで床面を構築する。凹凸や傾斜の少ない平坦な床面であり、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

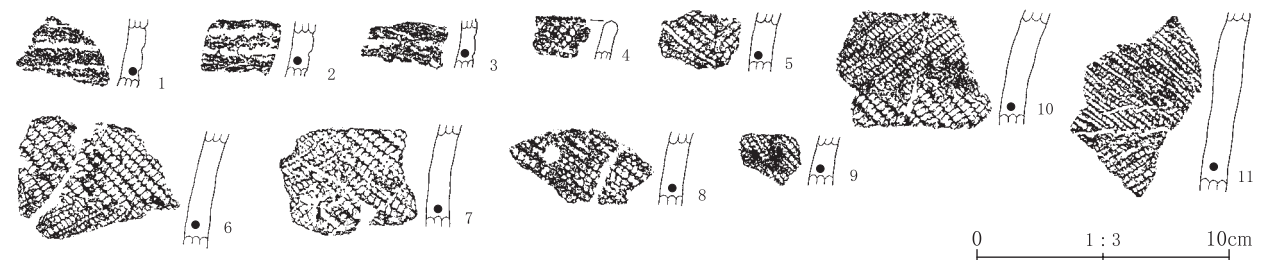
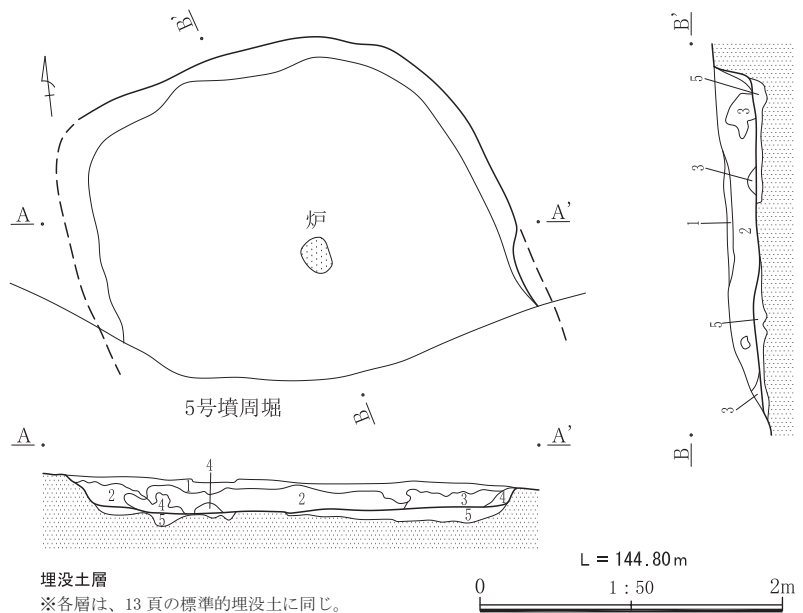
埋没土 厚さ20cm前後の1・2層を主体にレンズ状堆積し、自然埋没状況を示している。

遺物 僅少な総数26点の遺物(土器25、石器1)が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、全て埋没土上位の1・2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は、黒浜式のコンパス文3点(1～3)・縄文19点(5～11)の他に、諸磯a式1点(4)、同c式2点、型式不明2点などがある。石器は、礫塊1点を検出したのみである。尚、2・3と6～8・10は各々同一個体である。

当住居の時期に関しては、出土土器が黒浜式の新段階を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:14頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。



第50図 28号住居と出土遺物

【28号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	黒浜	諸磯a	時期不明	総計
合計	22	1	2	25

分類別点数

黒浜式			諸磯a式	
分類	2b類	3類	分類	4a類
合計	3	19	合計	1

縄文原体別点数

黒浜式						諸磯a式	
分類	2a7b	2b	2b7a	7b	18	分類	2a
合計	1	2	3	1	3	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a
A		—	1
C		10	—

(石器)

器種別点数

系列	その他	総計
器種	礫塊	
合計	1	1

石材別の点数と重量

礫塊	
コード	4
点数	1
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

● 29号住居

位置 F P -140

写真 P L 25

面積 9.90 m²

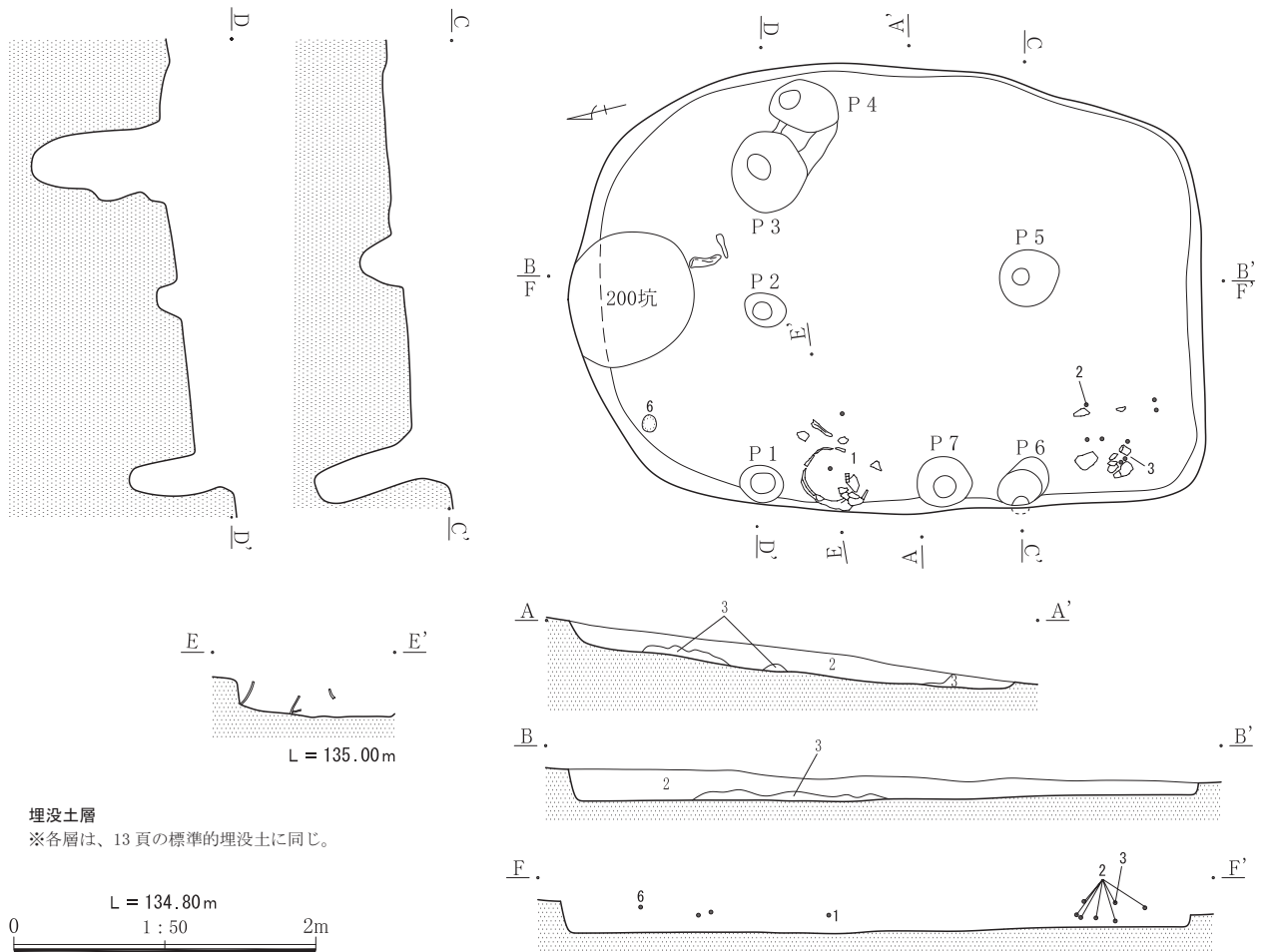
方位 N 16 度 E

重複 北壁際で時期不明の 200 号土坑を切って掘り込まれている。

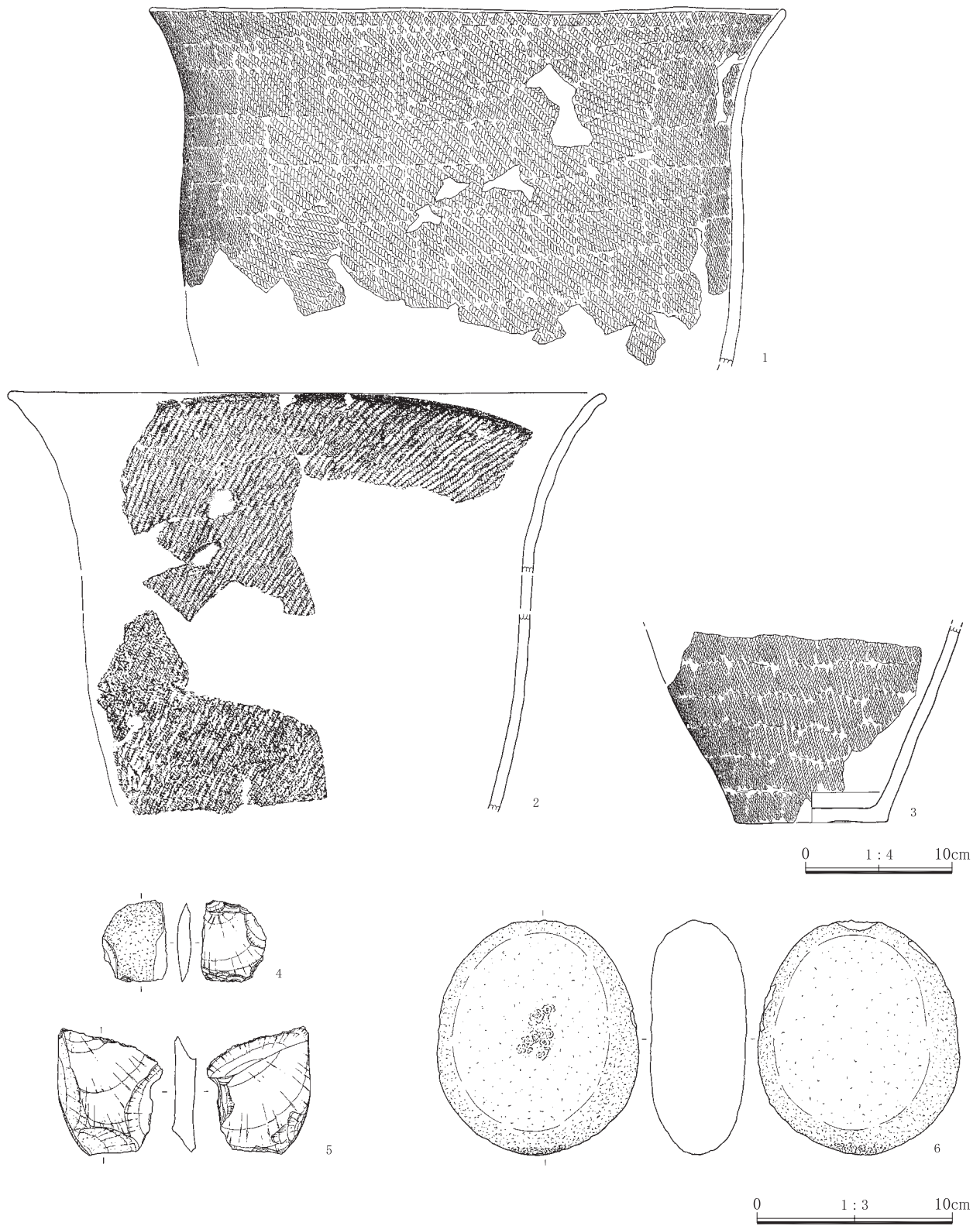
形状 斜面地の等高線方向に直交して、南北に長軸を持つ隅丸長形状で、長辺 3.95 m × 短辺 2.55 m、深さ 2 ~ 37 cm の規模。四辺の壁面は約 60 ~ 80 度の角度で掘り込まれ、北辺はやや湾曲するが他辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面には、被熱により赤化・焼土化した部分は確認できなかった。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、7本が確認されている。各柱穴の配列は、若干ゆがんではいるが、P1・P3・P5・P6の4本主柱で他は支柱と考えられる。主柱穴の芯心間の距離はP1 ~ P3 : 2.1 m、P3 ~ P5 :



第 51 図 29号住居



第52図 29号住居出土遺物

1.9 m、P5～P6:1.4 m、P6～P1:1.7 mの規模。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:29×43 cm、P2:29×15 cm、P3:54×87 cm、P4:45×96 cm、P5:40×29 cm、P6:37×72 cm、P7:35×99 cmの規模。P1・P2・P5を除く他の柱穴の深度が極端に深くなっているが、これは調査ミスによるものであり、元来は20～30 cm前後と推定される。

床面 勾配約8度の斜面地のローム層（VI層）を最大37 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約26 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる堅緻な面は認められず、全体的に軟弱な床面状況を呈する。

埋没土 厚さ15～20 cmの2層のみで埋没しているが、ロームブロックの混入は僅少であることから、自然埋没状況を示すと考えられる。

遺物 僅少なながら総数22点の遺物（土器9、石器13）が出土しているが、逆位で床面に密着して出土した1の土器や6の磨石を除いて、その大半が埋没土上位を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯a式の全面縄文2点（1・2）の他に、構成不明7点（3）がある。石器には、削器3点（4・5）、磨り石類1点（6）、剥片9点が組成するのみで、内容的に極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯a式で構成されることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：14・28頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【29号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	諸磯a	総計
合計	9	9

縄文原体別点数

諸磯a式		
分類	2b	4d
合計	2	7

分類別点数

諸磯a式

分類	4a類	4類	不明
合計	3	5	1

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		2
D		7

（石器）

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	削器類	磨石類	剥片	礫塊	
合計	3	1	9	2	15

分類別点数

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	1	2

磨石類

分類	2類
形態	ac

合計

合計

石材別の点数と重量

搔器・削器

磨石類

剥片

礫塊

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

合計

● 30号住居

位置 FW-155

写真 PL 23・24

面積 約10 m²

方位 N度66 W

重複 南西側と北東側の2カ所を倒木痕により切られている。

形状 斜面地を浅く掘り込んでいるために、南辺の立ち上がりは不明瞭であるが、等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長形状で、長辺3.77 m×短辺約2.8 m、深さ29 cmの規模と推定される。壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面のほぼ中央部に、1基が確認された。円形状の地床炉であり、直径約60 cmの範囲に被熱により焼土化した部分が認められる。

柱穴 倒木痕による攪乱もあり、明瞭な掘り込みを持つ柱穴を確認することはできなかった。

床面 勾配約11度の斜面地のローム層（VI層）を最大29 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、床面の大半を倒木痕により破壊されているために詳細は不明である。ただし、炉の周辺を中心に若干の踏み固めによるやや堅緻な面が残存している。

埋没土 残存部では、厚さ20 cm前後の1～4層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅少なながら総数29点の遺物（土器22、石器7）

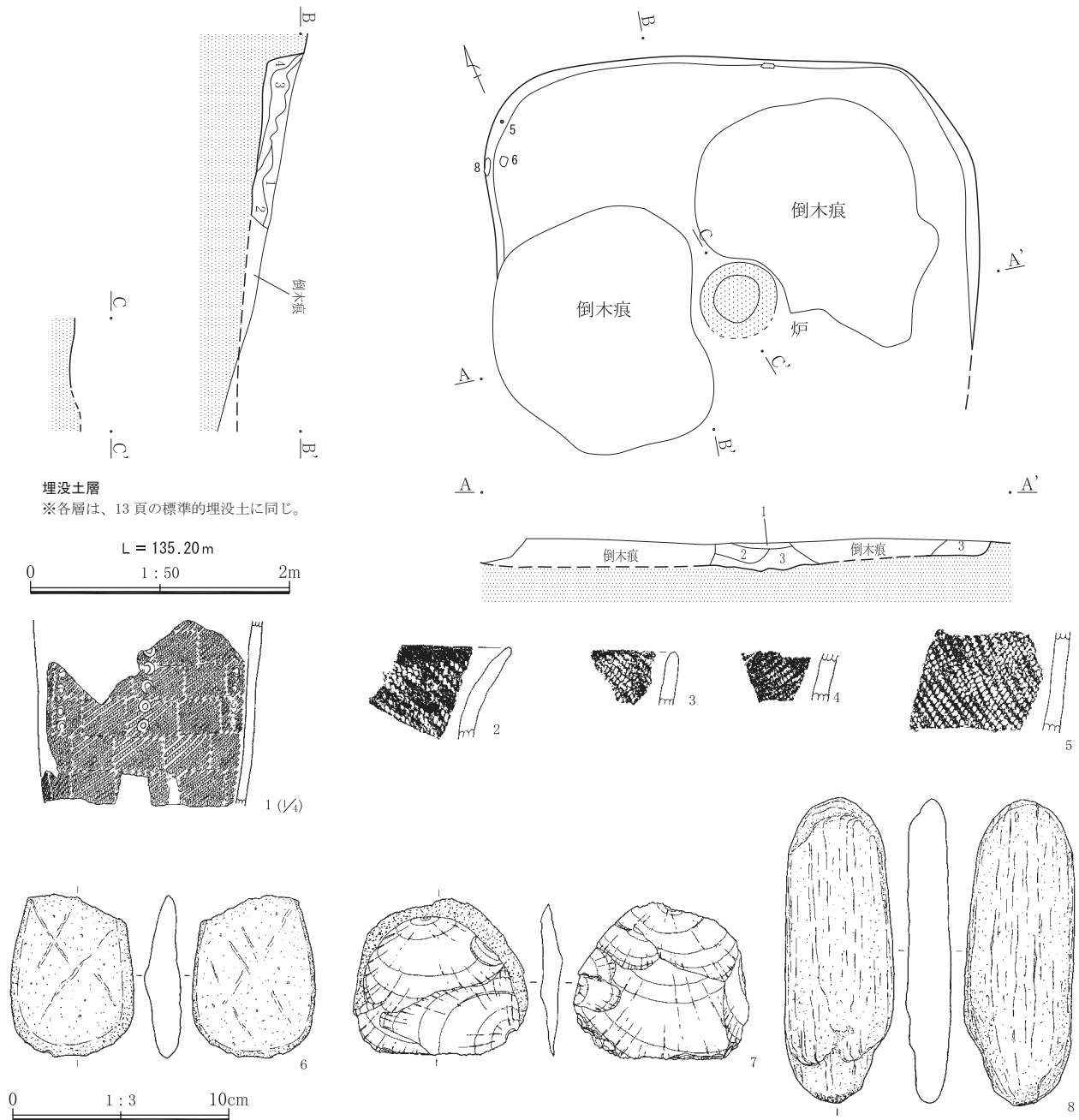
II 今井三騎堂遺跡の調査

が存在するが、床面に密着したものは少なく（6・8）、その大半が埋没土上位の1・2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は、諸磯a式の円形竹管文1点（1）、全面縄文2点（2・3）、構成不明16点（4・5）と、型式不明3点などがある。石器は削器1点（7）、敲き石1点（8）、石皿1点、砥石1点（6）、剥片3点が組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯a式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：14・28頁）

その他 周溝は検出されなかった。



第53図 30号住居と出土遺物

【30号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯a	時期不明	総計
合計	19	3	22

縄文原形別点数

分類	2a	2b	5a
合計	1	3	1

分類別点数

諸磯a式			
分類	2類		4類
種別	c2	不明	a 不明
合計	1	4	4 10

胎土別点数

胎土	型式	
	諸磯a	
A	5	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列			その他	総計
器種	削器類	敲石	石皿	砥石	剥片	
合計	1	1	1	1	3	7

分類別点数

搔器・削器		敲石		石皿		砥石	
分類	1類	分類	3類	分類	5類	分類	1類
合計	1	形態	ac	合計	1	合計	1
		合計	1				

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	5
点数	1
重量	73.3

敲石

コード	14
点数	1
重量	215

石皿

コード	4
点数	1
重量	未計測

砥石

コード	23
点数	1
重量	73.6

剥片

コード	1
点数	3
重量	未計測

● 31号住居

位置 GX -149

写真 PL 24

面積 約 12 m²

方位 N 25 度 E

形状 斜面地をほぼ水平に掘り込んでいるために、東辺の立ち上がりは不明瞭であるが、等高線方向に並行して南北に長軸を持つ隅丸長方形で、長辺 4.27 m×短辺約 3 m、深さ 41 cmの規模と推定される。壁面は約 50～70度の緩い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや西側と南側寄りに、2基が確認された。1号炉は胴部下半を欠損する土器(1)を正位に埋設し、その掘方は直径 40 cm×深さ 39 cmの円筒形状を呈する。2号炉は地床炉に近似した楕円形状の僅かな掘り込みを持つ炉であり、長径 38×短径 33×深さ 5 cmの規模を有する。1・2号炉ともに、焼土の堆積は僅少であるが、1号の埋設土器には被熱による風化が顕著に認められる。

柱穴 礫層の露出による床面はかなり激しい起伏もあ

り、明瞭な掘り込みを持つ柱穴を確認することはできなかった。

床面 勾配約 15度の斜面地を最大 41 cm掘り込んで床面を構築する。床面は、原形面の礫混土層が露出するためかなりの凹凸面を有し、自然地形と同様に約 20 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められるが、敲き床ほどではない。

埋没土 厚さ 20～40 cmの2層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅か7点の遺物(土器4、石器3)が存在するが、床面に密着したものは1点(3)のみであり、他は埋没土の2層を中心にして床面から浮いた状態で出土している。土器は、炉埋設土器を除いて小破片のみであり、諸磯a式の全面縄文2点(1・2)と構成不明2点(3・4)などがある。石器は石鏃未製品1点(5)、削器1点(7)、石核1点(6)のみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯a式により構成されることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 14・28頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【31号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯a	総計
合計	4	4

分類別点数

諸磯a式	
分類	4類
種別	a
合計	4

縄文原形別点数

諸磯a式		
分類	2b	17
合計	3	1

胎土別点数

胎土	型式	
	諸磯a	
A	4	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他		総計
器種	石鏃	削器類	石核	
合計	1	1	1	3

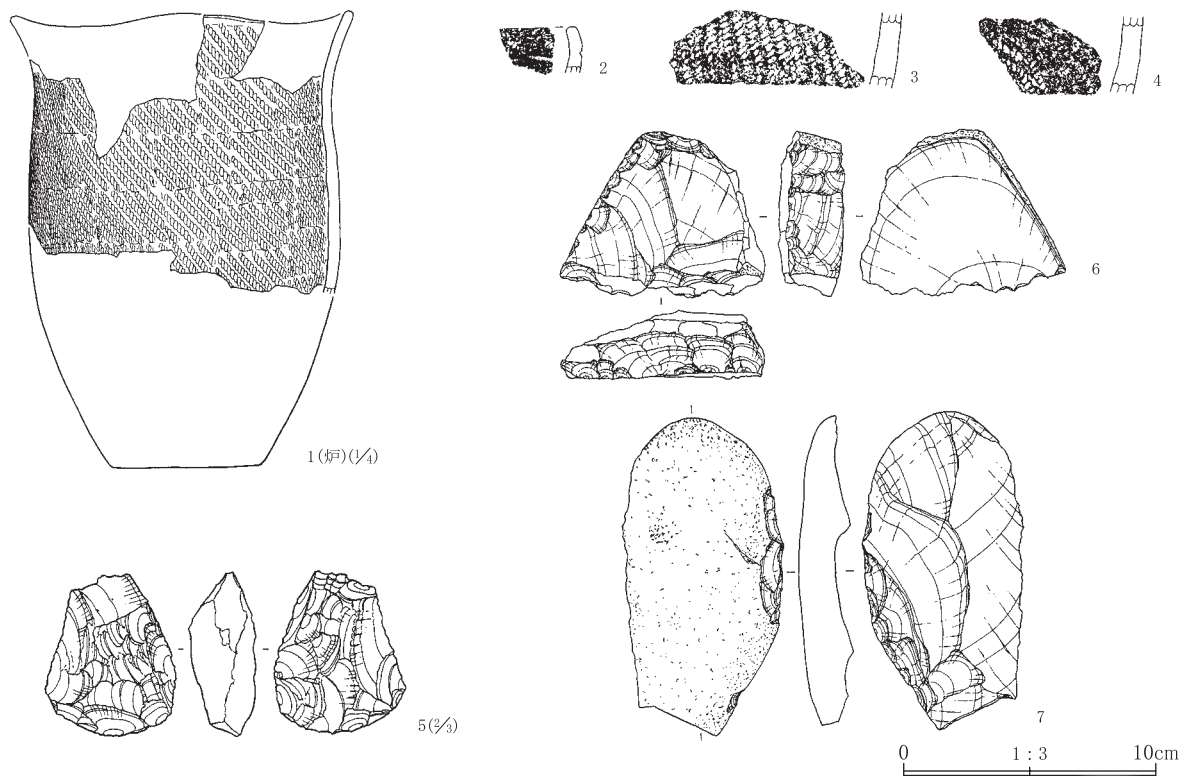
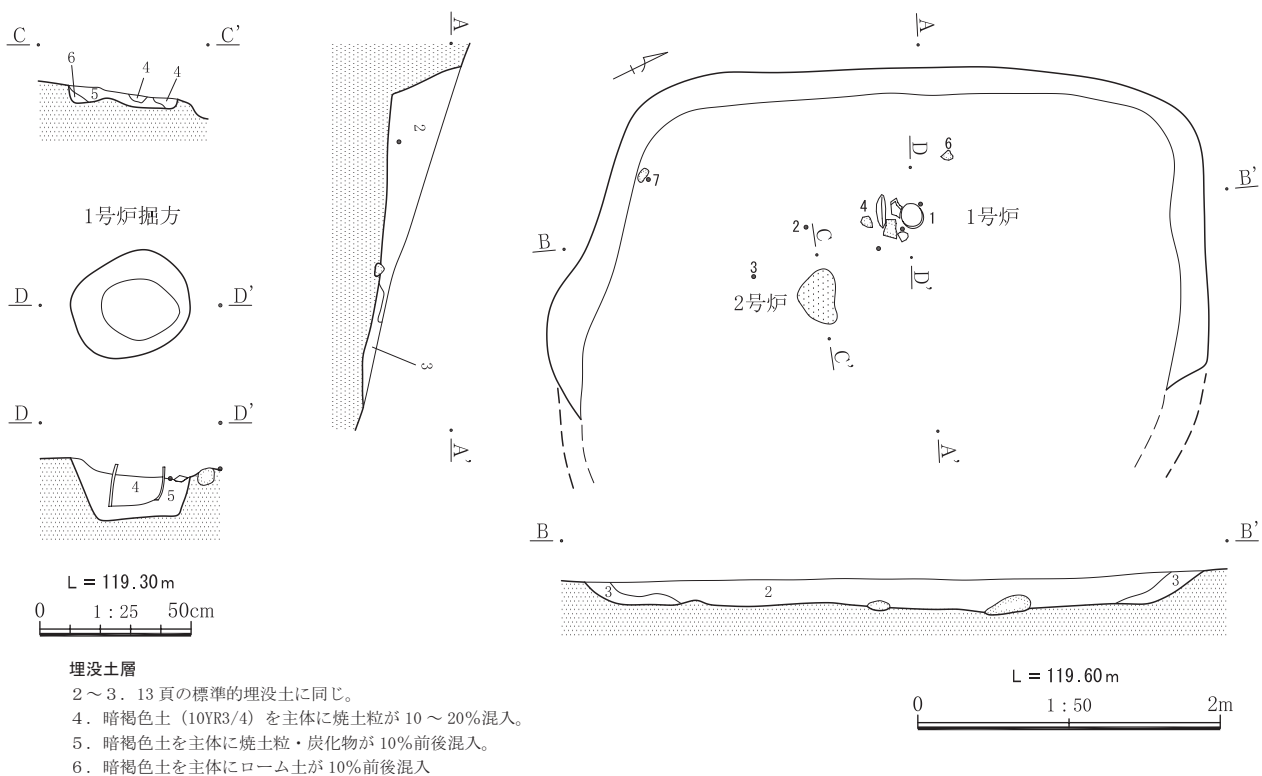
分類別点数

石鏃		搔器・削器	
分類	9類	分類	2類
合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器		石核	
コード	5	コード	1	コード	1
点数	1	点数	1	点数	1
重量	9.9	重量	169	重量	156

II 今井三騎堂遺跡の調査



第54図 31号住居と出土遺物

● 32号住居

位置 GQ-148

写真 PL 26

面積 不明

方位 N 11 度 E

重複 北半部を 52号住居により切られている。

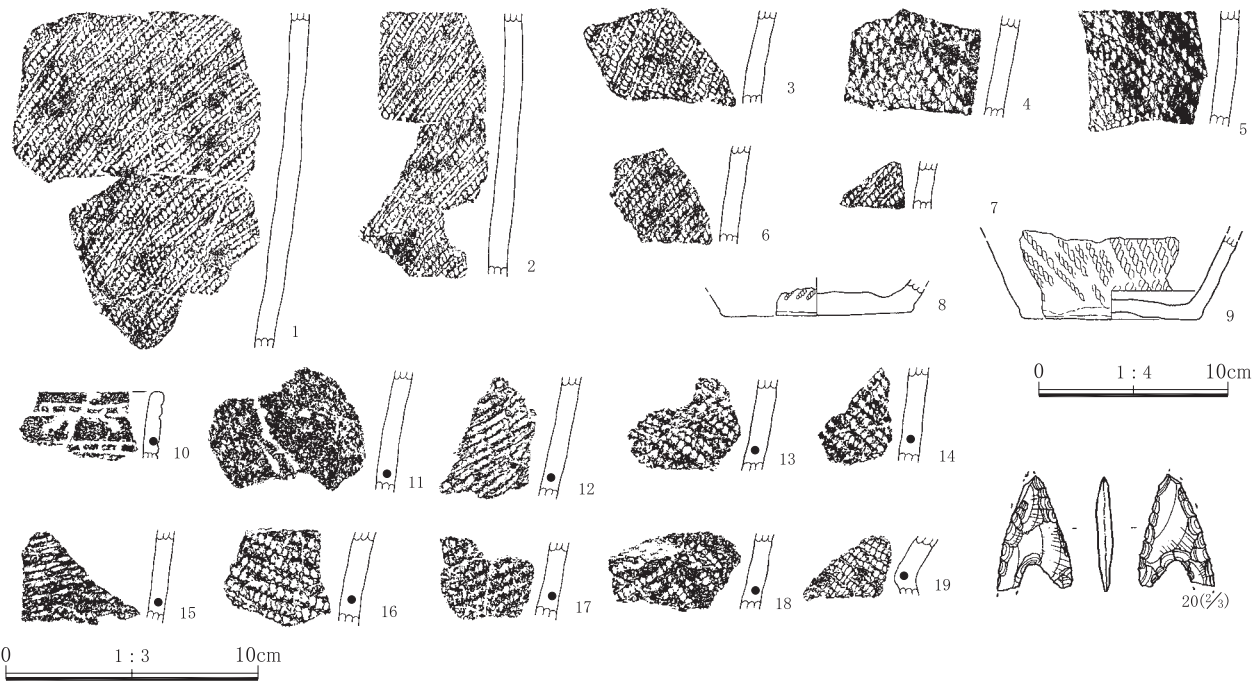
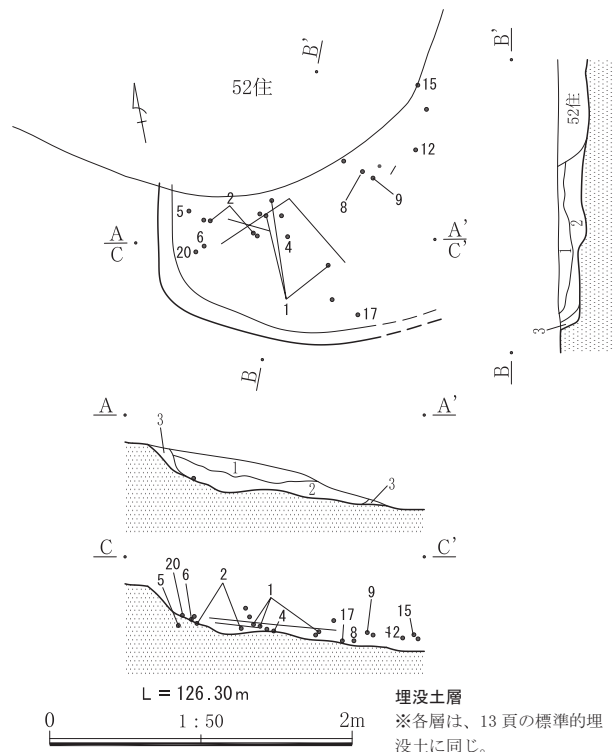
形状 52号住居との重複や斜面地を浅く掘り込むために全形は判然としないが、等高線方向にほぼ並行して南北に長軸を持つ隅丸形状と推定され、短辺約 2.1 m、深さ 30 cmの規模を有する。残存する壁面は約 50～70 度の緩い角度で掘り込まれ、湾曲して走行する。

炉 52号住居との重複により、検出することができなかった。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI層) を最大 31 cm掘り込んで床面を構築する。かなりの凹凸面が認められ、自然地形と同様に少なくとも約 21 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。敲き床ほどではないが、若干の踏み固めによる堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ 20～25 cmの 1・2層を主体にレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 48 点の遺物 (土器 41、石器 7) が存在するが、床面に密着したものは少なく (1・4～6・11・13・16・17)、その大半が埋没土の 1・2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のために全体の文様を窺えるものが少ないが、諸磯 a 式の繊維を含まず縄文を施文するもの 18 点 (1～



第 55 図 32号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

9) が主体を占め、他に繊維を含有する黒浜式の縄文施文土器 19 点 (10～19) などが認められる。尚、1～3・6・7 は同一個体。石器には、石鏃 1 点 (20)、剥片 6 点が組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、黒浜式と諸磯 a 式の出土土器が拮抗していることから確定できないが、両期のいずれかの所産と想定される。

(観察表：14・28 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

【32号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	黒浜	諸磯a	時期不明	総計
合計	2	19	18	2	41

分類別点数

黒浜式				諸磯a式		
分類	2c類	2類	3類	分類	4a類	4類
合計	1	1	17	合計	9	9

縄文原形別点数

黒浜式						
分類	1a	2a	2b	12b	16d	18
合計	2	1	5	1	1	1

諸磯a式

諸磯a式			胎土別点数			
分類	2a	2b	胎土	型式	黒浜	諸磯a
合計	1	4	A		1	10
			C		10	2

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他	総計	分類	3類
器種	石鏃	剥片		合計	1
合計	1	6	7		

石材別の点数と重量

石鏃		剥片		
コード	点数	コード	重量	未計測
	2		1	2
	1		4	1
	0.9		未計測	未計測

33号住居

位置 GM-149 **写真** PL 26・27

面積 8.20 m² **方位** N 23 度W

重複 床面中央部を時期不明の 327 号土坑が切る。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸長方形であり、規模は長辺 3.4 m × 短辺 3.1 m、深さ 10～40 cm である。四辺の壁面は約 60～80 度の角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線

的に走行している。

炉 床面中央部から西壁寄りに、1 基が確認された。土器内には暗褐色土が堆積し、微量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。

床面 勾配約 9 度の斜面地のローム層 (VI 層) を最大 40 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 29 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによる堅緻な面が認められる。

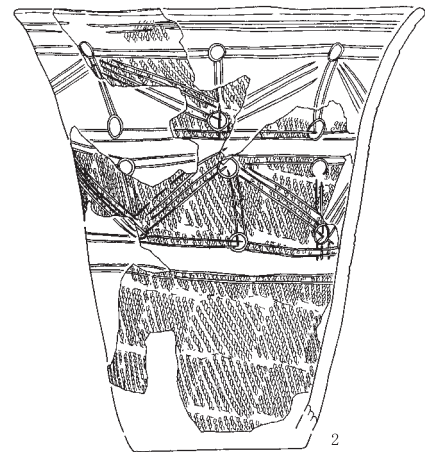
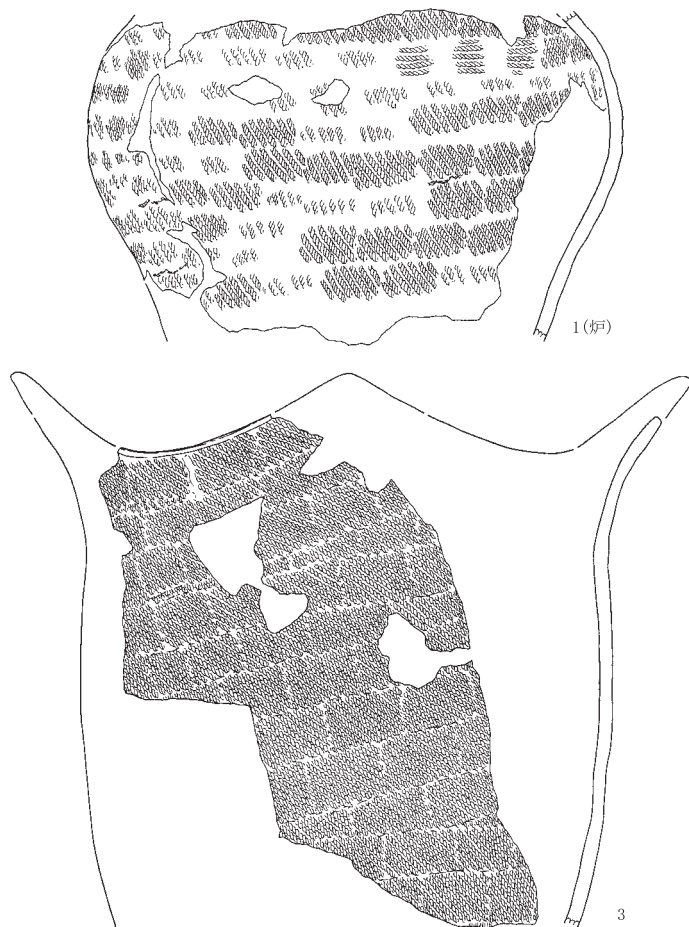
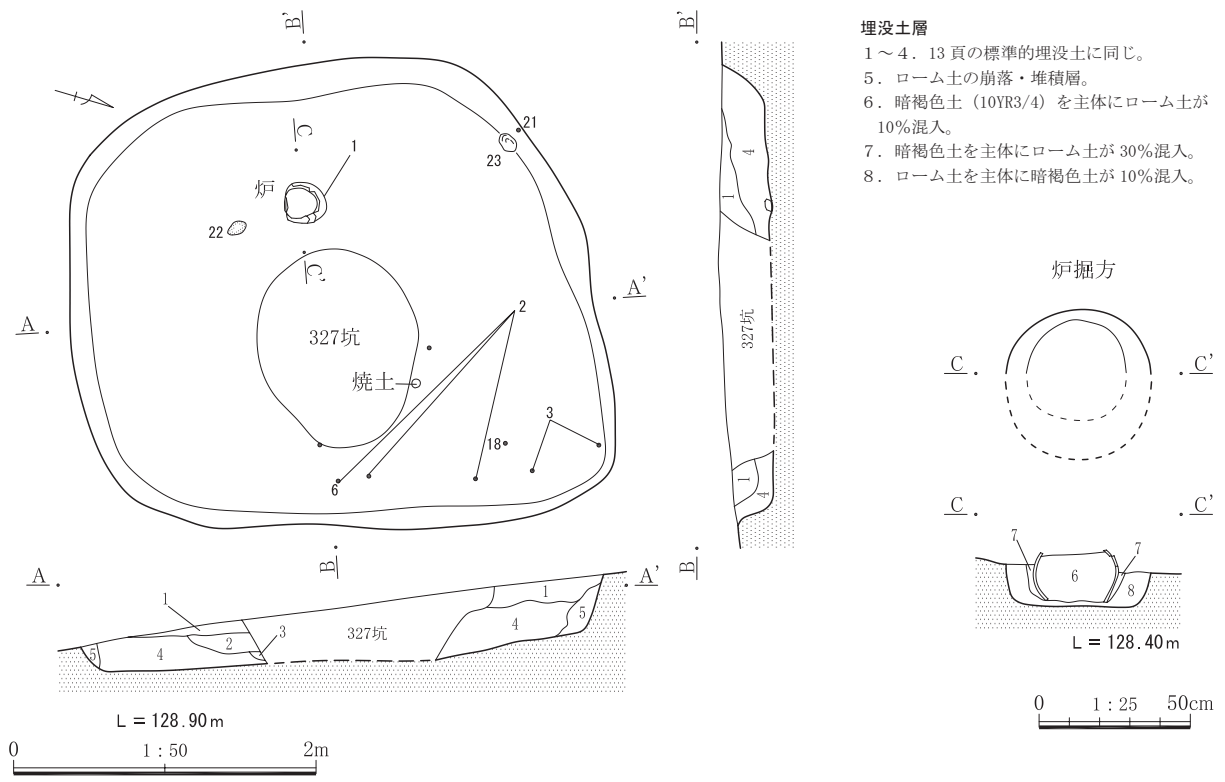
埋没土 厚さ 30～40 cm の 1～5 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 182 点の遺物 (土器 126、石器 56) が出土しているが、床面に密着したもの (2・3・9・23) は少なく、その大半は埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯 a 式の米字文 17 点 (2・6)・肋骨文 1 点 (4)・全面縄文 2 点 (3・5)・文様構成の不明な沈線文 4 点・同じく縄文施文 36 点 (7～15) と、黒浜式 7 点 (12・14) の他に、夏島式 1 点、稲荷台式 22 点、諸磯 c 式 1 点、型式不明 36 点などがある。石器には、削器 8 点 (17～21)、磨製石斧 1 点 (16)、磨り石類 4 点 (22・23)、石核 1 点、剥片 39 点、礫塊 3 点などが組成する。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器を始め出土土器が諸磯 a 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表：14・15・28 頁)

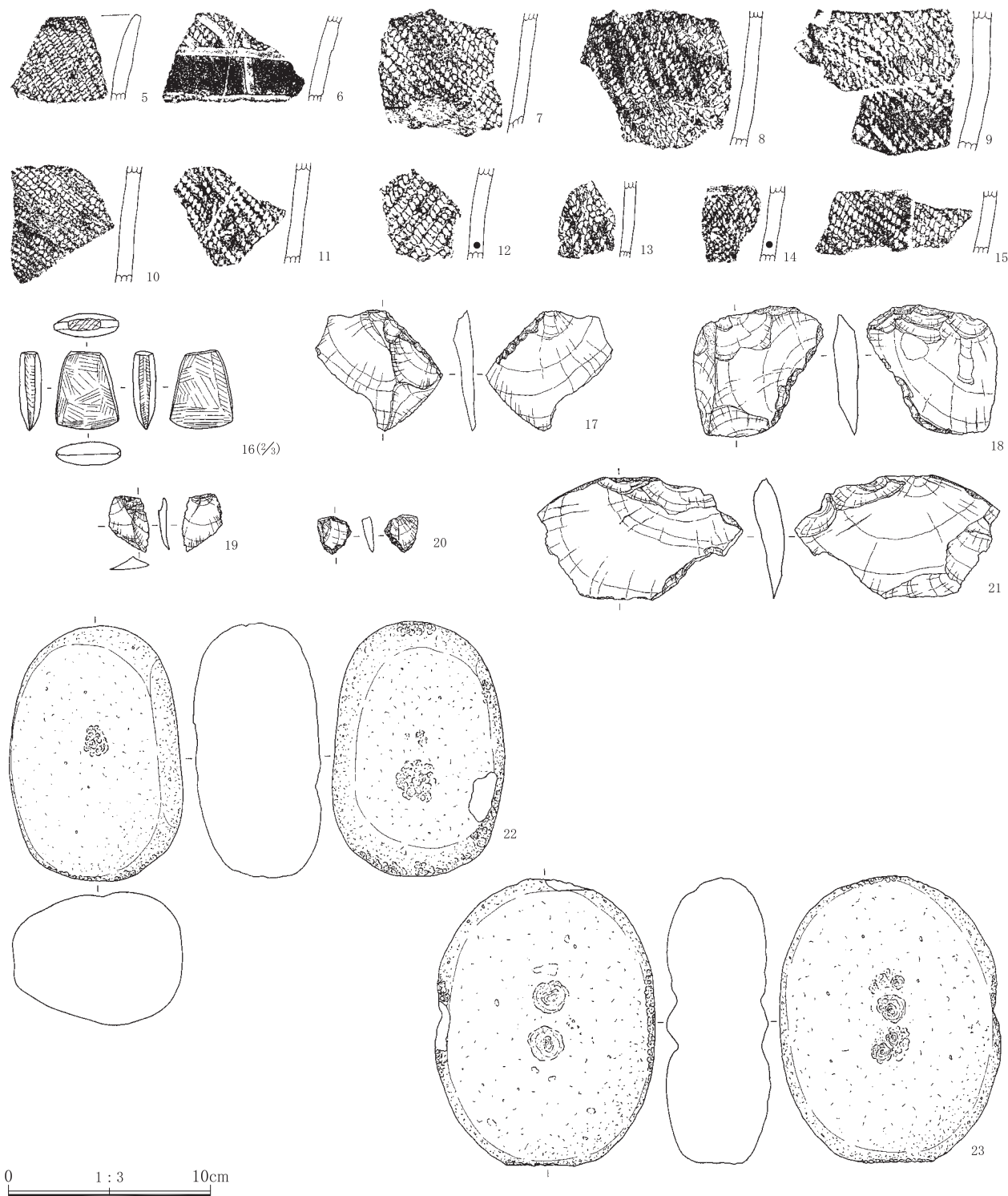
その他 柱穴と周溝は検出されなかった。



0 1:4 10cm

第56図 33号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査



第57図 33号住居出土遺物

【33号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	黒浜	諸磯a	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	22	7	59	1	36	126

分類別点数

黒浜式		諸磯a式					諸磯c式		
分類	3類	分類	1類		2類		4類		不明
合計	7	種別	c	不明	a1	不明	a	不明	不明
		合計	4	13	1	4	10	26	1

縄文原形別点数

黒浜式		諸磯a式				
分類	2a	12a	分類	2b	4a	18
合計	1	1	合計	14	1	1

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a
A		—	13
B		—	2
C		2	—
D		—	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	複合技術系列	その他			総計
器種	削器類	磨石類	磨製石斧	剥片	石核	礫塊	
合計	8	4	1	39	1	3	56

分類別点数

搔器・削器		磨石類			磨製石斧			
分類	1類	2類	分類	2類	5類	分類	2類	
合計	1	7	形態	abc	ac	a	合計	1
			合計	1	1	2		

石材別の点数と重量

剥片		石核		礫塊	
コード		コード		コード	
	1		1		4
点数	34	点数	1	点数	3
重量	未計測	重量	未計測	重量	未計測

搔器・削器		磨石類		磨製石斧	
コード		コード		コード	
	1		4		5
点数	5(3)	点数	3(2)	点数	1
重量	(165)	重量	(1877)	重量	2.6

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	2	1	3

被熱礫の石材別点数

コード	
	4
点数	2

● 34号住居

位置 EW-119

写真 PL 28

面積 6.12 m²

方位 N 30度E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 2.97 m × 短辺約 2.5 m、深さ 23 cm である。壁面は約 60 度前後の緩い角度で掘り込まれ、北辺は若干湾曲するが他辺はほぼ直線的に走行している。

炉 北壁中央部に近接して、2基が確認された。ともに体部下半を欠損する深鉢土器(1・2)を埋設し、その掘方は1号が直径 32 cm × 深さ 20 cm、2号が直径 25 cm × 深さ 16 cm の円筒形状である。両土器内には暗

褐色土が堆積し、微量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。埋設状況から2号が1号に前出する可能性があるが、確定できない。いずれにしても、両炉は同時併存ではなく、時間差を有すると想定される。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、5本が確認されているが、P1～P4の4本主柱を基本にすると考えられる。主な柱穴の芯心間の距離はP1～P2: 8.5 m、P2～P3: 1.2 m、P3～P4: 0.95 m、P4～P1: 1.2 m である。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1: 32 × 16 cm、P2: 31 × 41 cm、P3: 28 × 54 cm、P4: 30 × 29 cm、P5: 20 × 27 cm である。

床面 勾配約 9 度の斜面地のローム層(VI層)を最大 23 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、約 17 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。2基の炉の周辺を中心にして、踏み固めによる敲き床状の堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ 15～20 cm の 1・2 層が堆積するのみだが、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

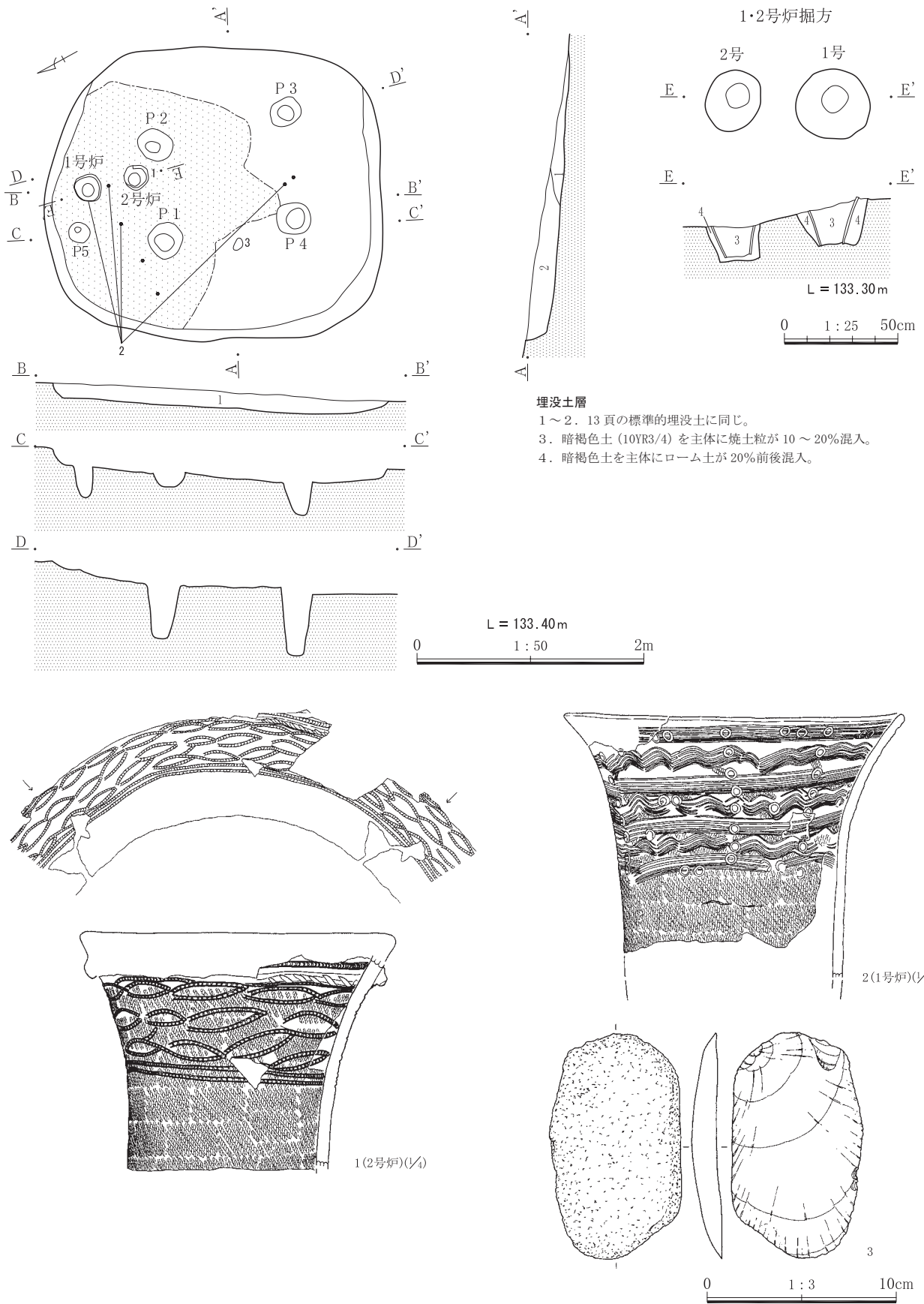
遺物 僅か総数 15 点の遺物(土器 13、石器 2)が存在するが、床面に密着したものは 1 点(3)のみで、他は埋没土の 1・2 層からを中心に床面から浮いた状態で出土している。出土土器は、炉埋設土器を除いて小破片のために掲載していないが、木葉文 1 点(1)・波状沈線文 4 点(2)・文様構成不明の沈線文 4 点・同じく縄文 1 点の他に、井草式 1 点、夏島式 2 点などがある。石器には、削器 1 点(3)と剥片 1 点が組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、炉の埋設土器から諸磯 a 式期に比定される。

(観察表: 15・28 頁)

その他 建て替えや拡張等の顕著な痕跡は確認できず、また周溝については検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査



第 58 図 34 号住居と出土遺物

【34号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	諸磯a	総計
合計	1	2	10	13

分類別点数

諸磯a式

分類	2類		3類	4類
種別	b1	不明	a2	不明
合計	4	4	1	1

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	2b
合計	5

胎土別点数

型式		諸磯a
胎土	A	5

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他	総計
器種	削器類	剥片	
合計	1	1	2

分類別点数

搔器・削器

分類	2類
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	点数	重量
1	1	140

コード	点数	重量
12	1	未計測

● 35号住居

位置 EP-128

写真 PL 29・30

面積 16.10 m²

方位 N 28度W

重複 床面中央部で、17号陥穴を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸台形状を呈し、規模は長辺 4.51 m × 短辺 4.41 m、深さ 12 ~ 59 cm である。四辺の壁面は約 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、北辺は若干湾曲するが他辺はほぼ直線的に走行している。

炉 北壁中央部寄りに埋設土器を伴う 1号炉が、また床面中央部に若干の掘り込みを持つ 2号炉が確認された。1号炉は口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径 30 cm × 深さ 25 cm の円筒形状である。土器内には暗褐色土や褐色土が堆積し、焼土の存在は希薄であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。また、2号炉は長径 88 × 短径 68 × 深さ 32 cm の規模を有する楕円形状の掘り込み炉であり、埋設土の上層を中心に焼土の堆積が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、10本が確認されているが、基本的には長軸に平行する P4 ~ P8 と

P3・P9・P10の各3本を1列とする2列配置の構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は P4 ~ P7 : 2.8 m、P10 ~ P9 : 0.6 m、P5 ~ P6 : 3.0 m、P6 ~ P8 : 0.7 m を測る。また、各柱穴の規模(径 × 深さ)は、P1 : 38 × 58 cm、P2 : 21 × 49 cm、P3 : 29 × 27 cm、P4 : 38 × 22 cm、P5 : 41 × 38 cm、P6 : 26 × 30 cm、P7 : 24 × 22 cm、P8 : 36 × 43 cm、P9 : 33 × 66 cm、P10 : 30 × 34 cm を測る。同一箇所でも重複する P4・P5 や P6・P7 のあり方は、建て替えあるいは補修を示唆するものと推定される。

床面 勾配約 7 度の斜面地のローム層(VI層)を最大 59 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、約 15 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、敲击床ほどではないが、2基の炉の周辺を中心にして、踏み固めによる堅緻な面が認められる。

埋設土 厚さ 30 ~ 50 cm の 1 ~ 6 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋設状況を示している。

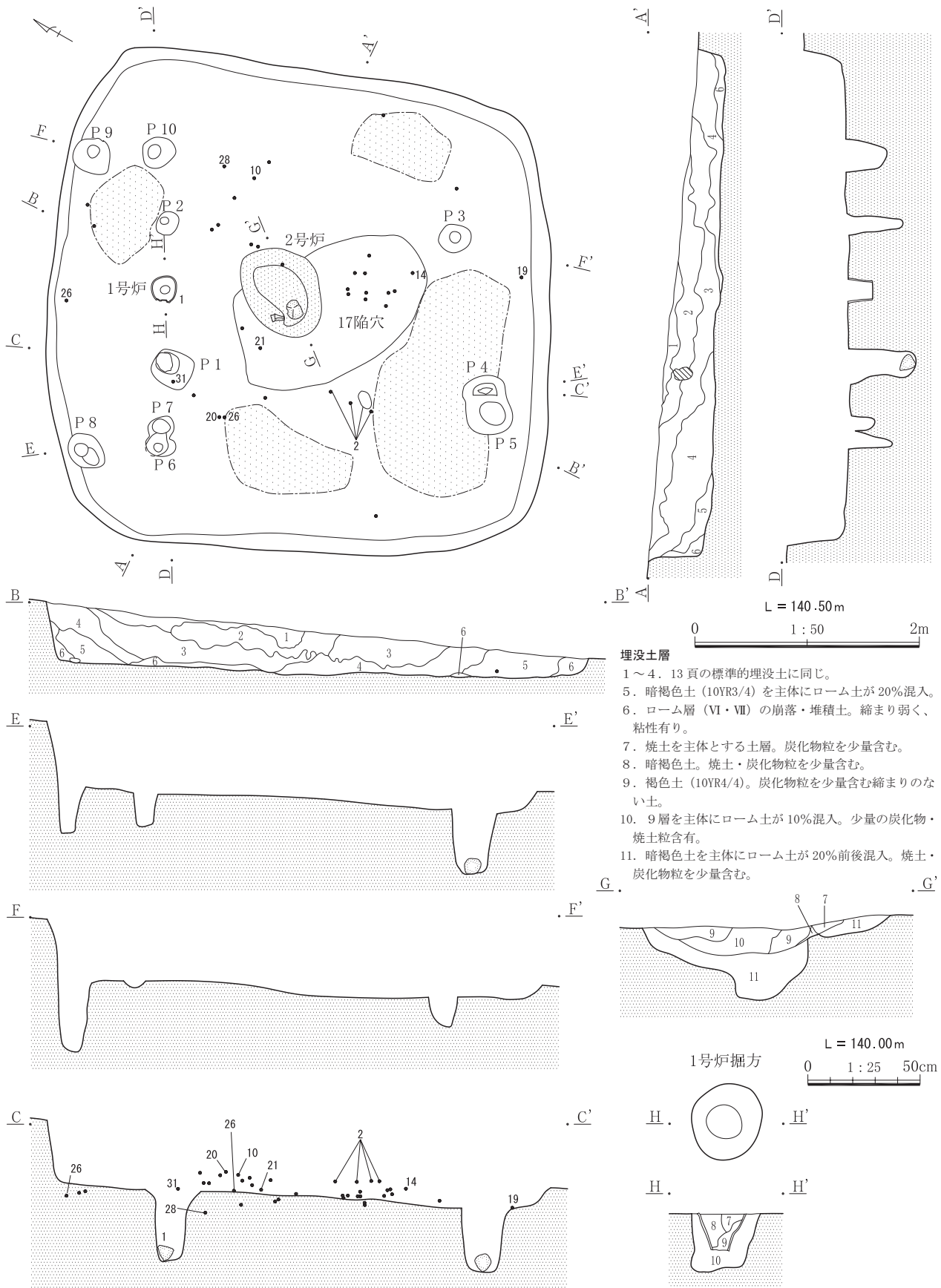
遺物 総数 191 点の遺物(土器 159、石器 32)が出土しているが、床面に密着したもの(26・27・29)は少なく、その大半が没土上位の 1 ~ 3 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯 a 式の米字文 4 点(1・4・11)・肋骨文 2 点(3・5)・平行爪形文 5 点(6 ~ 10)・木葉文 3 点(12・13)・全面縄文 2 点(14・15)・文様構成不明の沈線文 10 点・同じく縄文 71 点(16 ~ 20)・浅鉢 4 点(21・22)と、黒浜式 6 点(20)の他に、稲荷台式 1 点、諸磯 b 式 4 点、同 c 式 1 点、型式不明 23 点などがある。尚、18・19 は同一個体。石器には、削器 3 点(23 ~ 25)、磨製石斧 1 点(26)、磨り石類 5 点(27 ~ 29)、石皿 1 点(30)、多孔石 1 点(31)、砥石 1 点、剥片 17 点、礫塊 4 点などが組成する。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器が諸磯 a 式に比定されることから、当該期の所産と想定される。

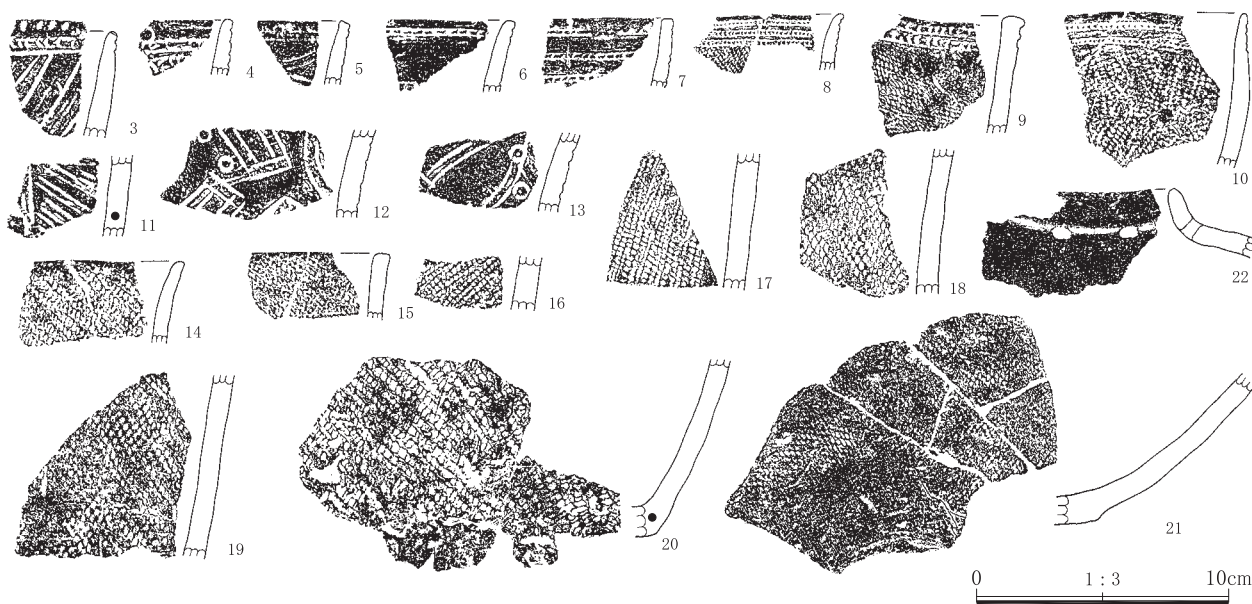
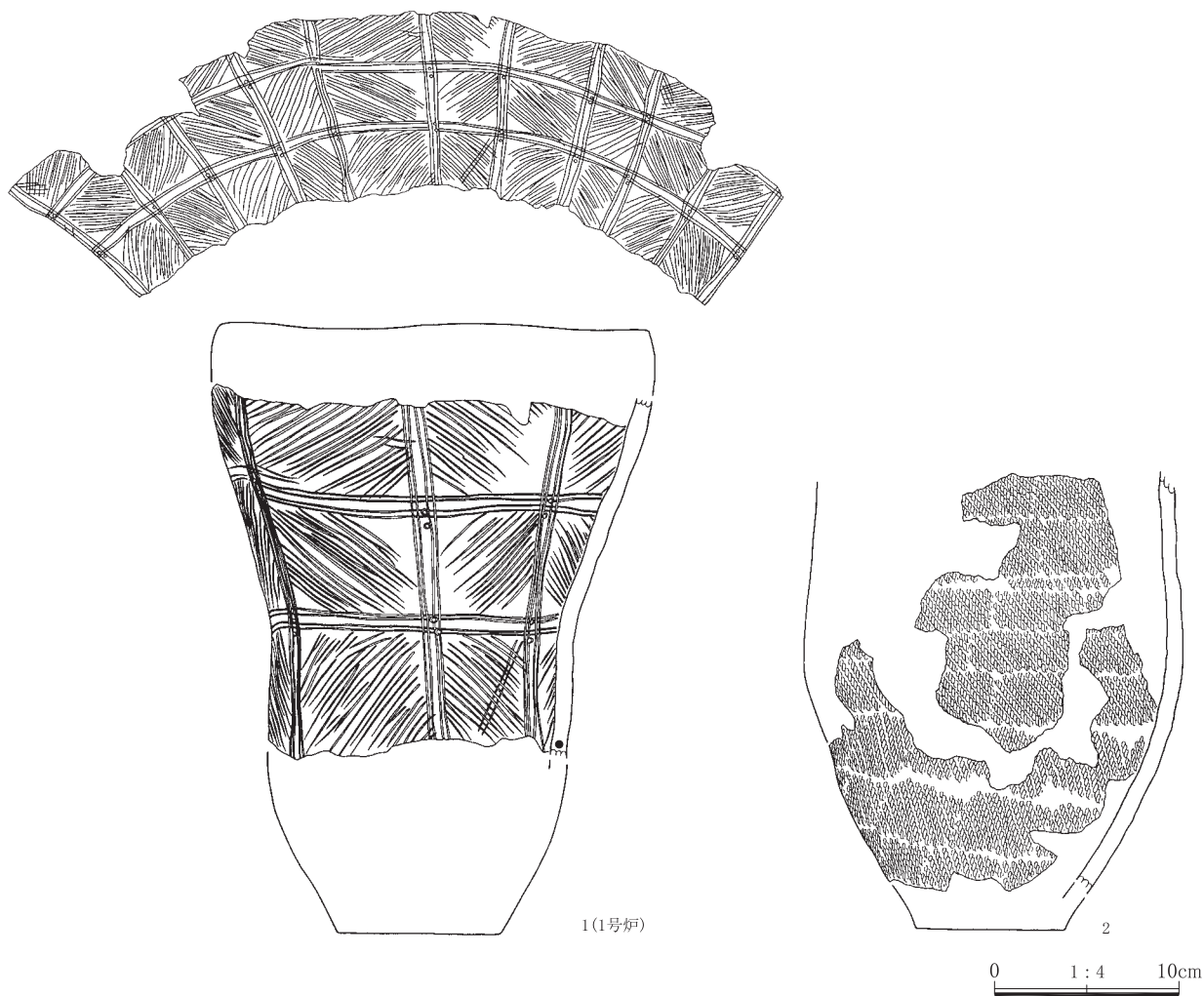
(観察表 : 15・28 頁)

その他 周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

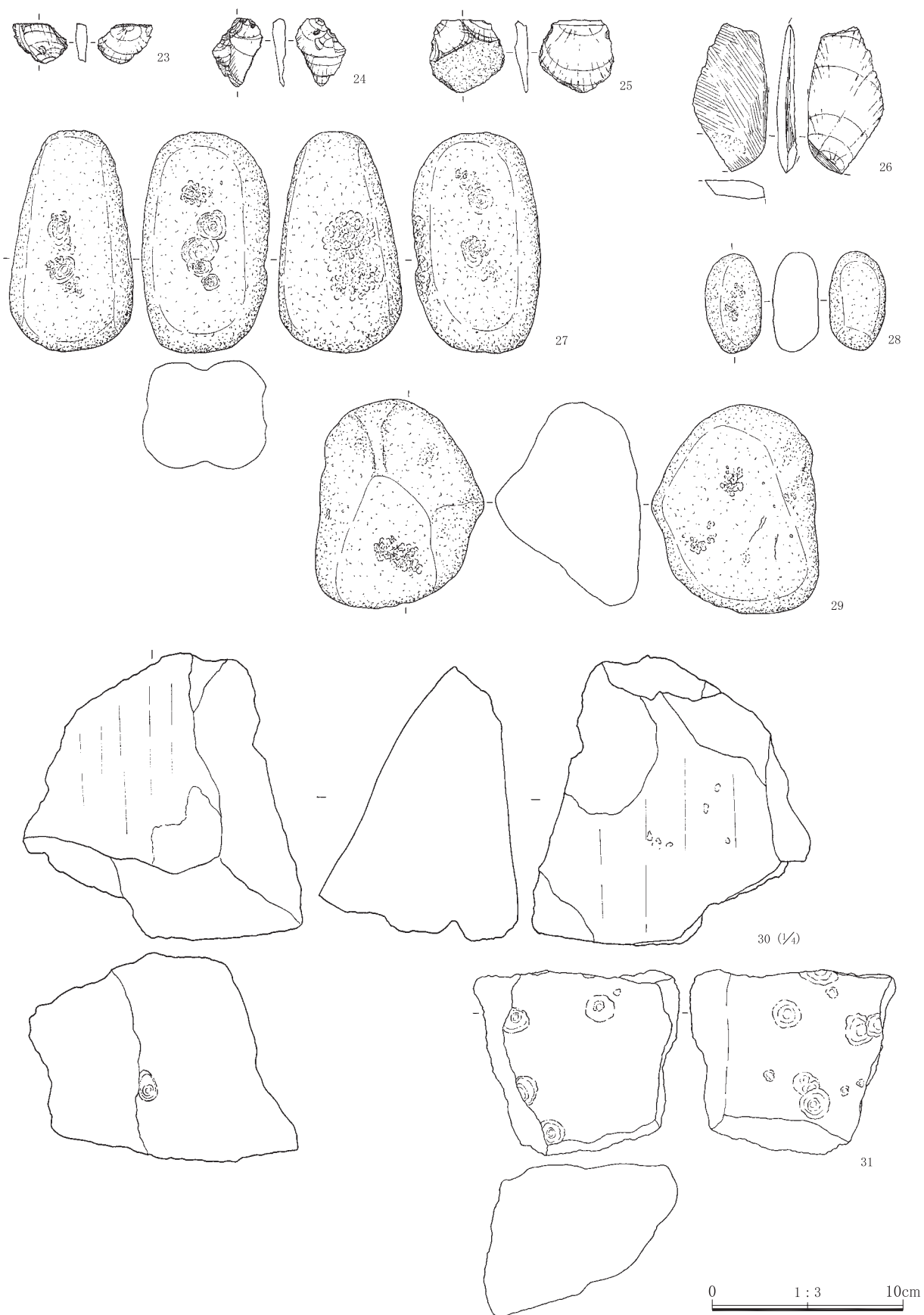


第59図 35号住居



第 60 图 35 号住居出土遺物 (1)

II 今井三騎堂遺跡の調査



第61図 35号住居出土遺物(2)

【35号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	6	97	4	1	50	159

分類別点数

分類	1類			2類				3類	
	a	c	不明	a2	d1	d2	不明	b1	不明
合計	1	2	1	2	3	2	10	2	1

4類			黒浜式		諸磯b式			
a	b	不明	分類	3類	分類	1類	2類	3類
11	1	61	合計	6	合計	2	1	1

諸磯c式

分類	3類
合計	1

縄文原形別点数

黒浜式		諸磯a式					
縄原体	2b	縄原体	2a	2b	5a	5b	18
合計	1	合計	2	12	1	1	8

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a
A	—	—	20
B	—	—	1
C	—	1	2
E	—	—	1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列		複合技術系列		
器種	削器類	磨石類	石皿	砥石	磨斧	多孔石
合計	3	4	1	1	1	1

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
17	1	3	32

分類別点数

分類	搔器・削器		磨石類		不明	
	1類	2類	分類	2類		
合計	1	2	合計	4	合計	1

石皿		砥石		磨製石斧		多孔石	
分類	5類	分類	不明	分類	不明	分類	不明
合計	1	合計	1	合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器			磨石類		石皿	
コード	点数	重量	コード	重量	コード	重量
	2	7.8		4 (812)		4 (4900)
	1	9.8				

砥石			磨製石斧		多孔石	
コード	点数	重量	コード	重量	コード	重量
	9	未計測		32.0		950
	1					

剥片			礫塊	
コード	点数	重量	コード	重量
	1	未計測		未計測
	2			
	9			
	8			
	未計測			
	未計測			

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	2	1	3

被熱礫の石材別点数と重量

コード	重量
	4
	2

● 36号住居

位置 EN-126

写真 PL 31・32

面積 不明

方位 N 60度E

重複 北壁中央部を時期不明の355号土坑により、南側1/3を12号古墳の周堀や356号土坑により、各々切られている。また、当住居が37号住居を切って掘り込まれているが、建て替えあるいは拡張の関係を持つと考えられる。

形状 他遺構との重複により確定的ではないが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長辺4.29m×短辺3.87m、深さ54cmである。壁面は約60～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

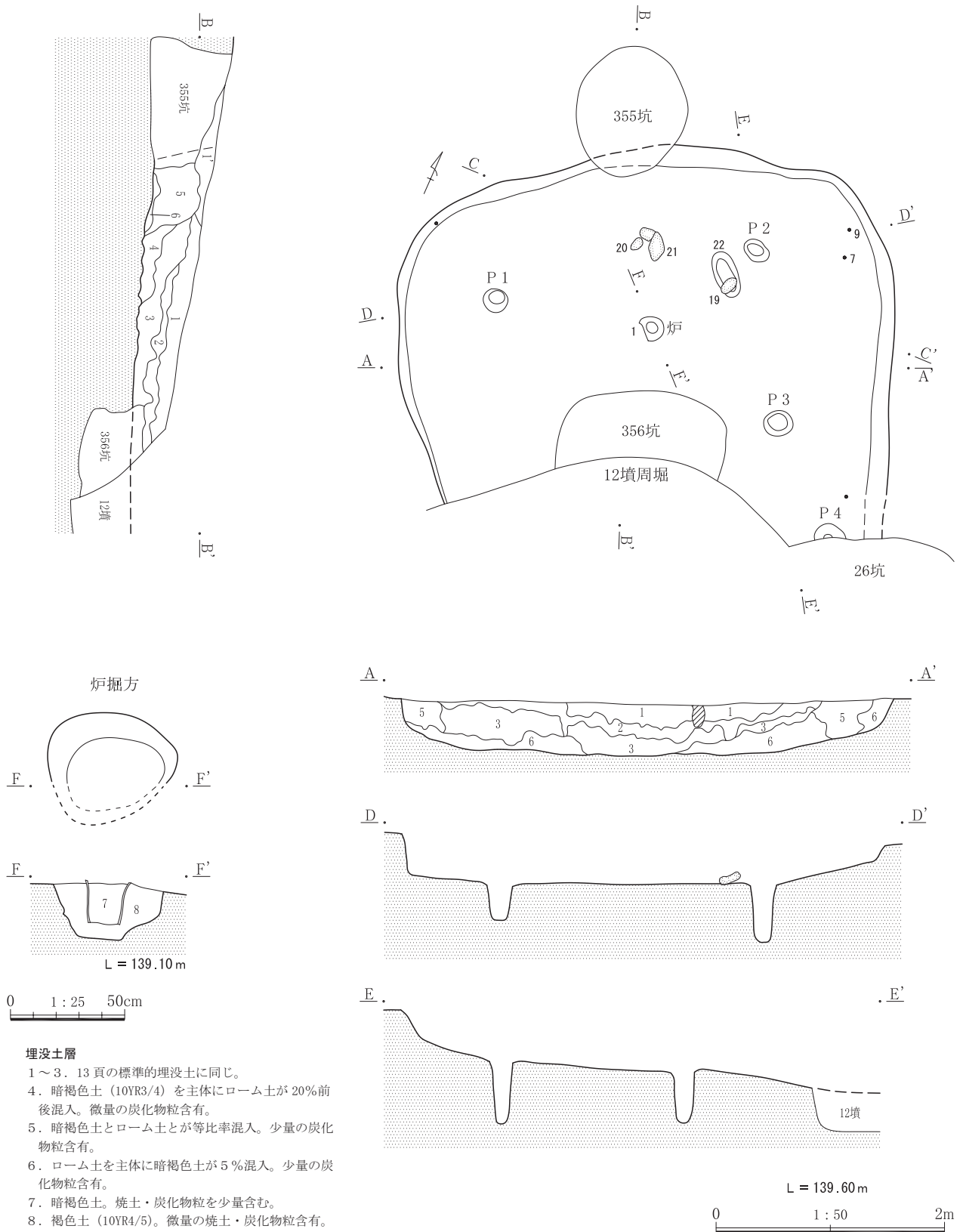
炉 床面中央部からやや北壁寄りに、1基が確認された。底部を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径55cm×深さ25cmの円筒形状である。土器内には微量の焼土粒を含有する暗褐色土が堆積し、土器には顕著な被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されているが、P1～P3の配列から見て4本主柱が想定され、古墳の周堀によりP3に対応する1本が欠失すると考えられる。主な柱穴の芯心間の距離はP1～P2:2.3m、P2～P3:1.5mを測る。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:22×31cm、P2:25×49cm、P3:25×43cm、P4:28×38cmを測る。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI層)を最大54cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、周壁際に比べて中央部が掘り鉢状に窪みながら、自然地形と同様に約16cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心にして、踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ40～50cmの1～6層がレンズ状に堆積し、斜面上位の北方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数41点の遺物(土器23、石器18)が検出されたが、19の磨り石は床面密着の22の石皿の上に置かれた状態で出土している(写真図版のPL 31-c)



第 62 図 36 号住居

を参照)。他に、7・9の土器破片も床面に密着して出土した。土器は、諸磯a式の木葉文2点(3・4)・全面縄文2点(1・5)・文様構成不明の縄文17点(6～14)・同じく沈線文1点の他に、黒浜式1点がある。尚、11・12は同一個体。石器には、削器3点(15～17)、打製石斧1点(18)、磨り石類2点(19・20)、石皿3点(21・22)、剥片8点、礫塊1点などが組成する。また、黒曜石の剥片類3点の内の2点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系1(東餅屋・西餅屋)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器を含めて諸磯a式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。(観察表:15・28頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【36号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	黒浜	諸磯a	総計
合計	1	22	23

分類別点数

黒浜式		諸磯a式					
分類	3類	分類	2類	3類	4類		
合計	1	種別	不明	a1	b2	a	不明
合計	1	合計	1	1	1	13	6

縄文原体別点数

諸磯a式					
分類	2a	2b	6a	7a	18
合計	2	8	1	3	1

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		15

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他			総計	
器種	削器類	打斧	磨石類	石皿	剥片		礫塊
合計	3	1	2	3	8	1	18

分類別点数

搔器・削器			打製石斧		磨石類		石皿		
分類	1類	2類	分類	8類	分類	2類	分類	2類	4類
合計	1	2	合計	1	形態	abc	合計	1	2
					合計	2			

石材別の点数と重量

搔器・削器			打斧		石皿			
コード	1	2	コード	1	コード	4	19	
点数	2	1	点数	1	点数	2(1)	1	
重量	69	6.4	重量	45.3	重量	(6000)	2730	

磨石類		剥片			礫塊		
コード	4	コード	1	2	12	コード	4
点数	2	点数	2	3	3	点数	1
重量	2044	重量	未計測	未計測	未計測	重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	1	1

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1

● 37号住居

位置 EN-126

写真 PL 31・32

面積 不明

方位 N度 71 E

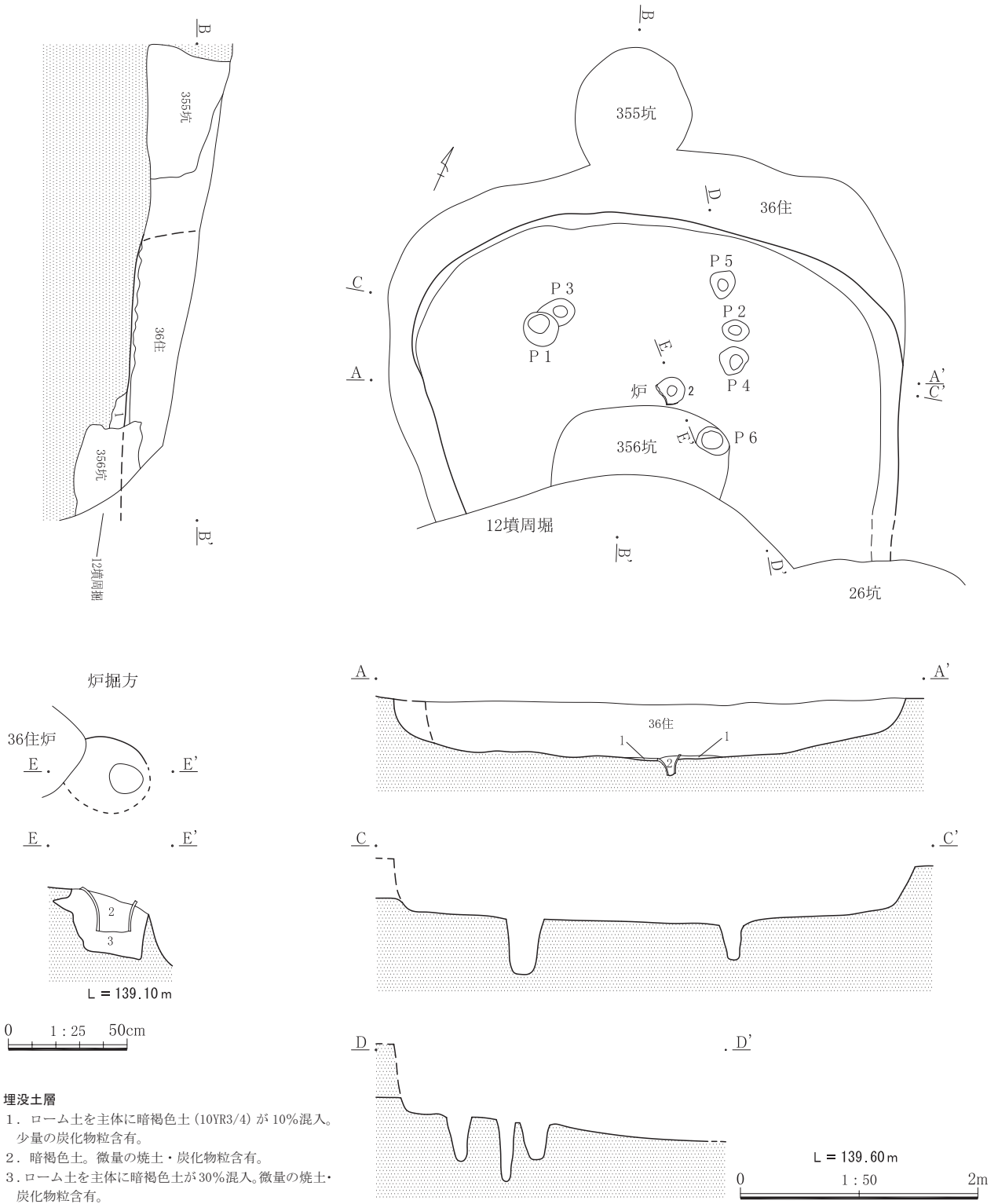
重複 東壁を基軸にして、北壁から西壁にかけて30～60cm外側に拡張して36号住居が構築されている。中央部を時期不明の356号土坑により、南側1/3を12号古墳の周堀により、各々切られている。356号土坑は、当住居や36号住居の埋没土中位から掘り込まれており、完全埋没しない掘り鉢状の窪地を呈している段階での所為と考えられる。南西隅付近で重複する諸磯a式期の26号土坑との先後関係は不明。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長辺4.03m、深さ61cmである。壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、東・西の各辺はほぼ直線的だが北辺は湾曲して走行している。

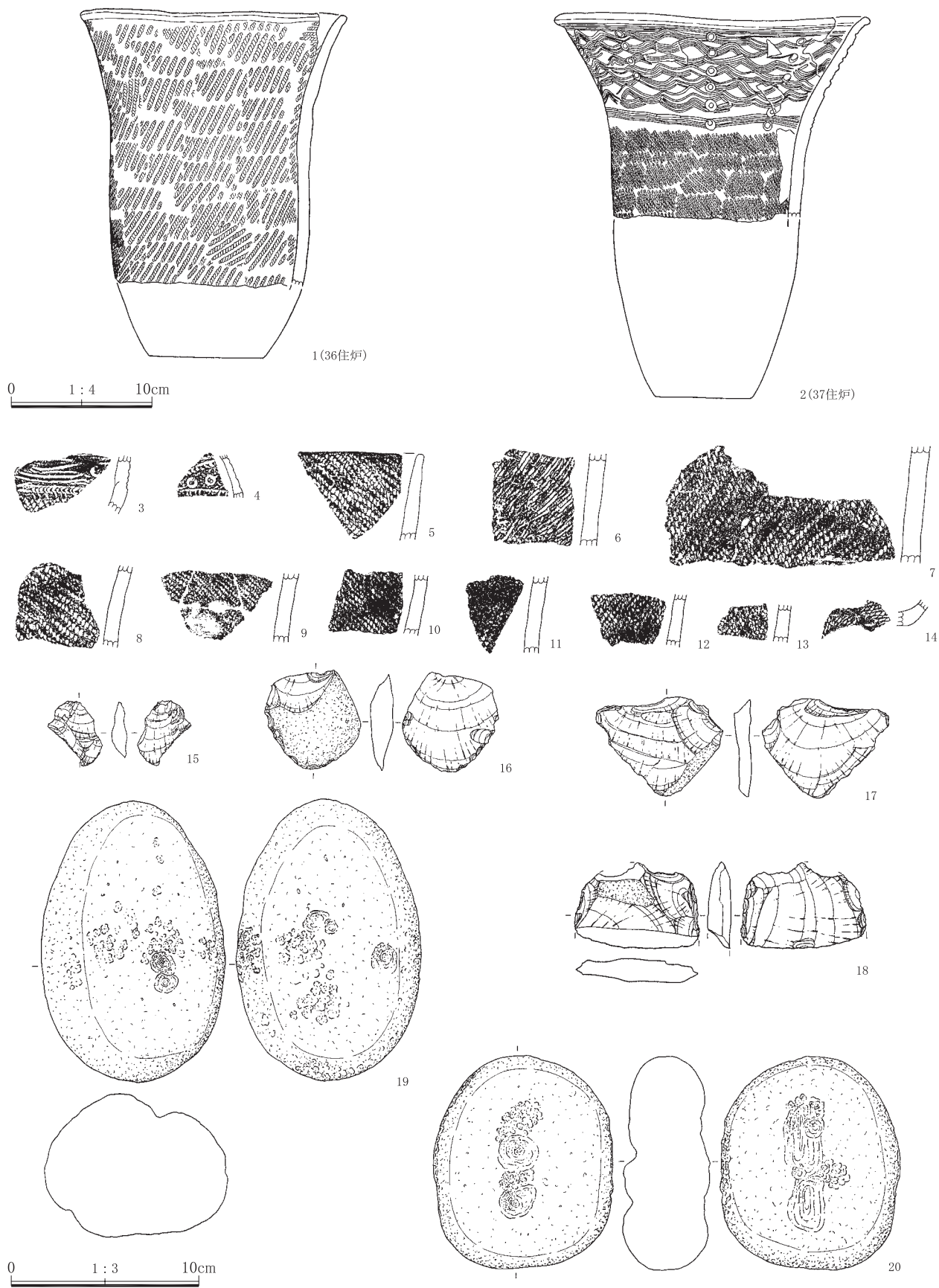
炉 床面中央部から若干北壁寄りにずれて、1基が確認された。体部下半を欠損する深鉢土器(2)を埋設し、その掘方は直径32cm×深さ25cmの円筒形状である。土器内には暗褐色土が堆積し、微量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、6本が確認されている。36号住居と同様に4本主柱を基本にすると想定され、P1とP2に対向する2本が12号墳の周堀により欠失すると考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:1.7m、P5～P6:1.3mを測る。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:30×45cm、P2:23×50cm、P3:23×16cm、P4:25×27cm、P5:23×39cm、P6:28×34cmである。

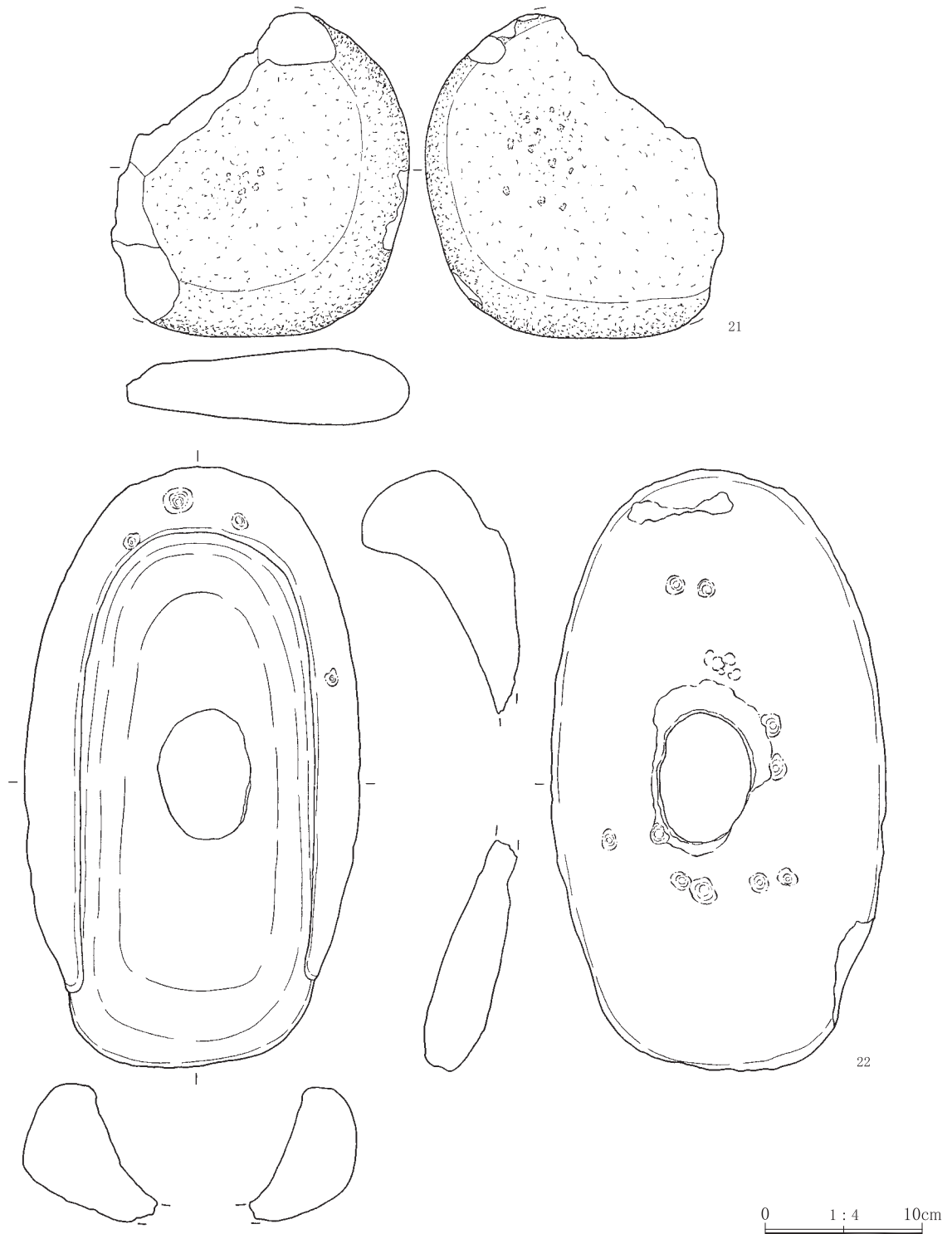
床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI層)を最大61cm掘り込んで床面を構築する。周壁際に比べて中央部が掘り鉢状に窪むが、凹凸面の少ないほぼ平坦な床面である。敲き床ほど堅緻ではないが、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによる硬化面が認められ



第 63 図 37 号住居



第64图 36·37号住居出土遺物(1)



第 65 図 36・37号住居出土遺物(2)

る。

埋没土 36号住居の床面下に僅か層厚5cm前後の暗褐色土が残存するのみであり、全体的な埋没状況の詳細は不明。

遺物 36号住居との重複もあり、2の炉埋設土器を除いて明確な伴出遺物は検出されなかったが、諸磯a式期の所産と考えられる。(観察表:15頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【37号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯a	総計
合計	1	1

分類別点数

分類	2b2類
合計	1

縄文原体別点数
諸磯a式

分類	5b
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a
A		1

● 38号住居

位置 EM-135

写真 PL 32

面積 11.23 m²

方位 N 38度E

重複 北西壁中央部で時期不明の357号土坑を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ正方形に近似した隅丸台形状を呈し、規模は長辺3.92m×短辺3.90m、深さ13~36cmである。四辺の壁面は約60~80度の角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや南西隅寄りに、1基が確認された。床面を僅かに掘り窪めた楕円形状の掘り込み炉であり、長径59×短径33×深さ6cmの規模を有する。内部には、焼土を主体に暗褐色土の堆積が認められる。

床面 勾配約7度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大36cm掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約10cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによる硬化面が認められるが、敲き床ほどではない。

【38号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	1	21	7	1	4	35

分類別点数

諸磯a式

分類	2類				3類	4類
種別	a2	a3	b1	d4	不明	不明
合計	1	1	2	1	2	1

諸磯b式

分類	1類	2類	3類	
種別	b1	b3	不明	c
合計	1	3	2	1

諸磯c式

分類	1類
合計	1

縄文原体別点数

諸磯a式

分類	2a	5b	14d	18
合計	2	5	2	3

諸磯b式

分類	2b	18
合計	1	4

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a	諸磯b
A		12	5

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	石鏃	磨石類	石皿	剥片	
合計	1	2	1	4	8

分類別点数

石鏃

分類	2類
合計	1

磨石類

分類	2類	
形態	abc	ac
合計	1	1

石皿

分類	5類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コート	1
点数	1
重量	1

磨石類

コート	4
点数	2
重量	744

石皿

コート	4
点数	1
重量	3017

剥片

コート	12
点数	4
重量	未計測

礫塊

コート	4
点数	8
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	7	1	8

被熱礫の石材別点数

コート	4
点数	7

埋没土 厚さ30~40cmの1~3層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数51点の遺物(土器35、石器16)が存在するが、床面に密着したものは1点(1)のみで、他は埋没土上位の1・2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は半完形品に復元可能なものもあるが、大半が小破片である。諸磯a式の肋骨文系2点

II 今井三騎堂遺跡の調査

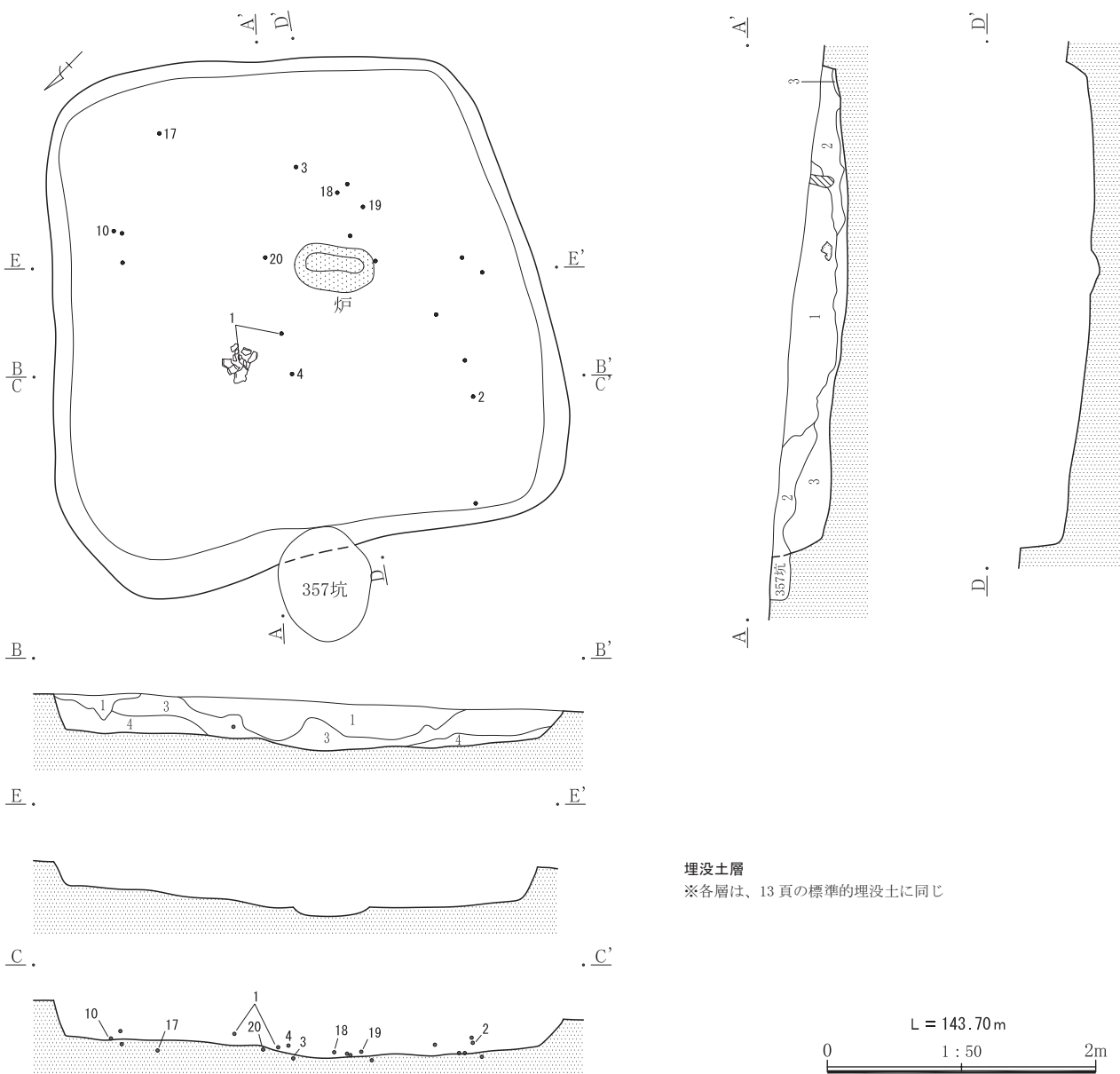
(1・4)・波状沈線文 2 点 (5・6)・平行爪形文 1 点 (3)・全面縄文 2 点 (2・8)・文様構成不明の縄文 11 点 (9～12) と、諸磯 b 式の浮線文 6 点 (13～15)・波状沈線文 1 点 (7)・平行沈線文 1 点 (16) の他に、夏島式 1 点、稻荷台式 1 点、諸磯 c 式 1 点、型式不明 4 点などがある。尚、5・6 は同一個体。石器には、石鏃 1 点 (17)、磨り石類 2 点 (18・19)、石皿 1 点 (20)、剥片 4 点、礫塊 8 点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、黒曜

石の剥片 4 点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

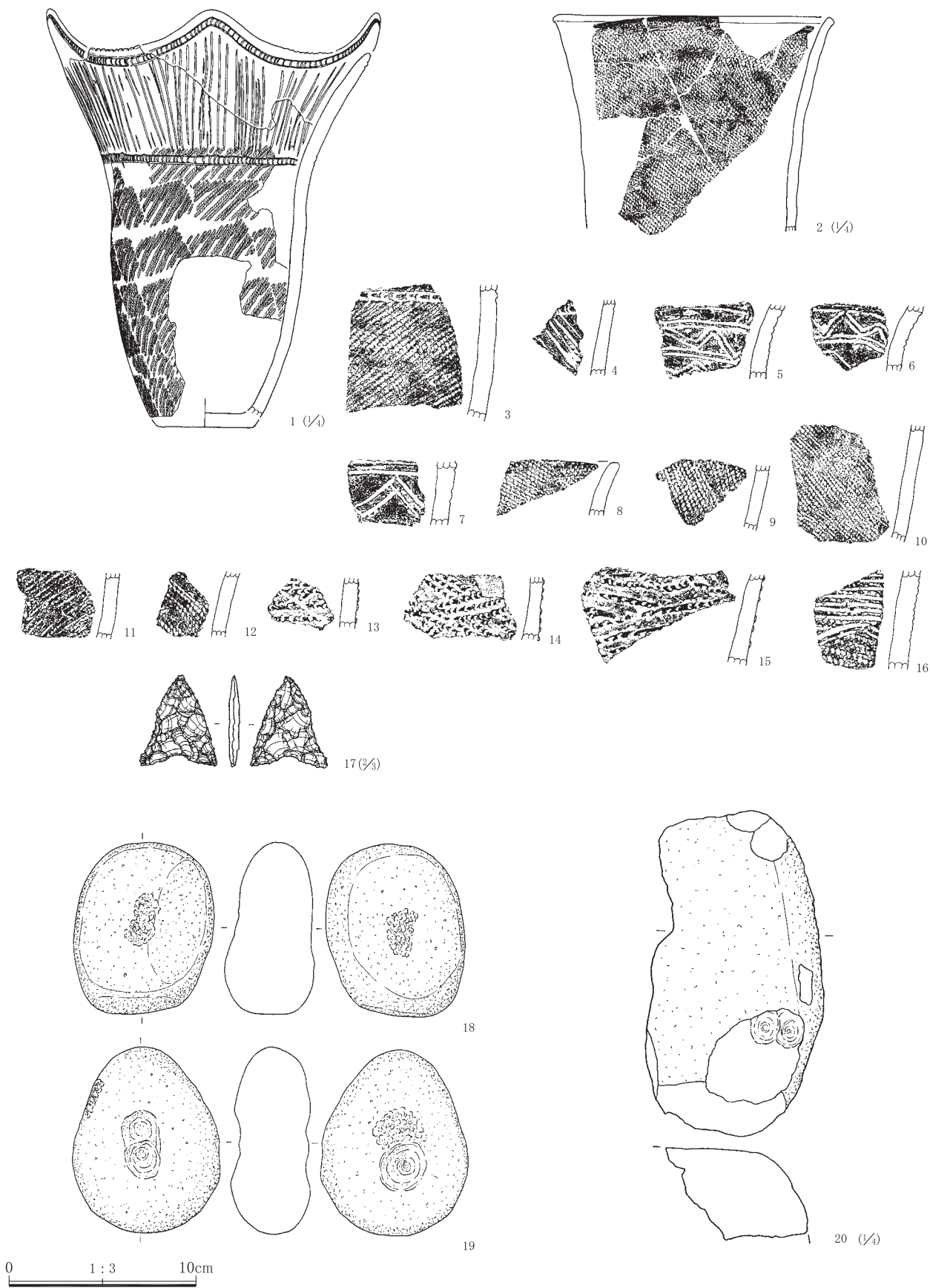
当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 a 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表：15・28・29 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。



第 66 図 38 号住居



第 67 图 38 号住居出土遺物

● 39号住居

(観察表：15・29頁)

位置 FK-108 写真 PL 33

面積 不明 方位 N 50度E

形状 斜面地を浅く掘り込むために、南辺の立ち上がりを確認することができなかったが、等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形と推定される。規模は長辺 3.94 m、深さ 30 cm であり、短辺は 3 m 弱となろう。壁面は約 70～80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、残存する各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや北壁寄りに、2基が確認された。ともに土器埋設炉であり、1号(1)は体部過半を欠失するが、2号(2)は完形品を埋設している。また、両者の掘方は長径 52×短径 40 cm、深さ 25 cm であり、近接埋置されているが、その新旧関係は不明。土器内には暗褐色土が堆積し、微量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。

床面 勾配約 7度の斜面地のローム層(VI層)を最大 30 cm 掘り込んで床面を構築する。かなりの凹凸面を持つが、全体的には傾斜の少ない平坦な床面である。また、炉の周辺を中心にして、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 薄層ながら厚さ 10～25 cm の 1・2層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅少なながら総数 31 点の遺物(土器 27、石器 4)が存在し、炉埋設土器を除く他の全てが、埋没土上位の 1・2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は炉埋設土器以外は小破片のみであり、諸磯 a 式の全面縄文 3 点(1・2・7)、平行爪形文 1 点(3)、米字文 1 点(4)、木葉文 1 点(5)、構成不明 11 点(6・8)の他に、井草式 5 点、型式不明 5 点などがある。石器には、磨り石類 1 点(9)、剥片 1 点、礫塊 2 点が組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器が諸磯 a 式であることから、当該期の所産と想定される。

その他 柱穴と周溝が検出されなかったために判然としないが、2基の土器埋設炉の存在から見て、少なくとも 1 回の建て替えが想定される。

【39号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	諸磯a	時期不明	総計
合計	5	17	5	27

縄文原体別点数
諸磯a式

分類	2b	18
合計	7	2

分類別点数

分類	1類		2類		4類	
	c	d1	不明	a	不明	
合計	1	1	1	5	9	

胎土別点数

胎土	型式		諸磯a
	型	式	
A			8
D			1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	磨石類	剥片	礫塊	
合計	1	1	2	4

分類別点数

磨石類	
分類	2類
形態	abc
合計	1

石材別の点数と重量

磨石類		剥片		礫塊	
コード	点数	コード	点数	コード	点数
	4		1		4
	1		1		2
重量	356	重量	未計測	重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	2	2

被熱礫の石材別点数

コード	点数
	4
合計	2

● 40号住居

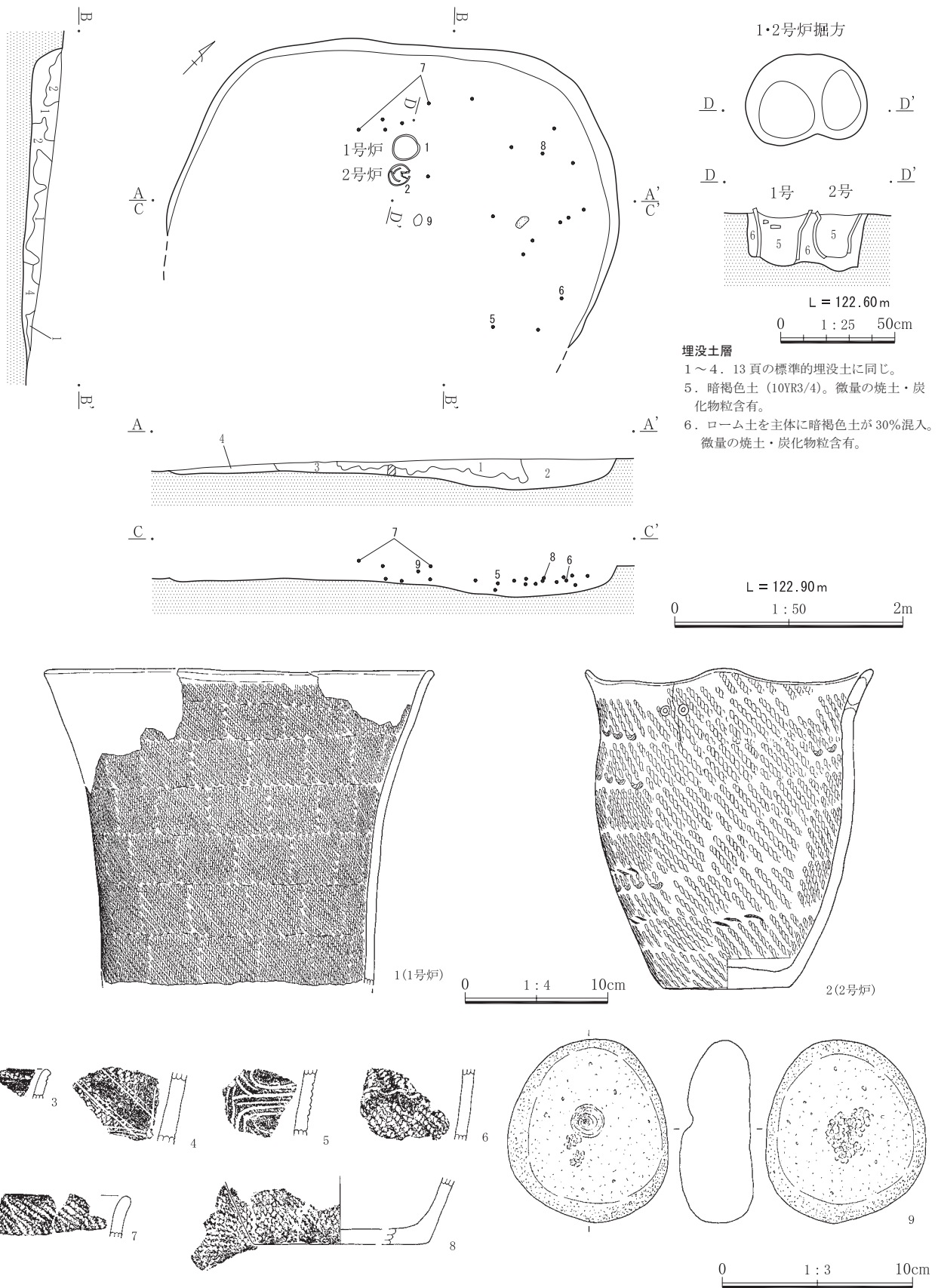
位置 FN-134 写真 PL 34～35

面積 10.38 m² 方位 N 35度E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 4.23 m×短辺 2.97 m、深さ 5～32 cm である。四辺の壁面は約 70～80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、若干湾曲する南辺を除いた各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや北壁寄りに、1基が確認された。口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設し、その掘方は直径 30 cm×深さ 10 cm の円筒形状である。土器内には暗褐色土が堆積し、微量の焼土粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、住居外形の対角



第 68 図 39 号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

線上に4本が確認されている。4本支柱構造であり、各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:1.35m、P2～P3:2.0m、P3～P4:1.55m、P4～P1:1.9mを測る。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:25×19cm、P2:26×20cm、P3:26×23cm、P4:25×18cmである。
床面 勾配約8度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大32cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約18cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

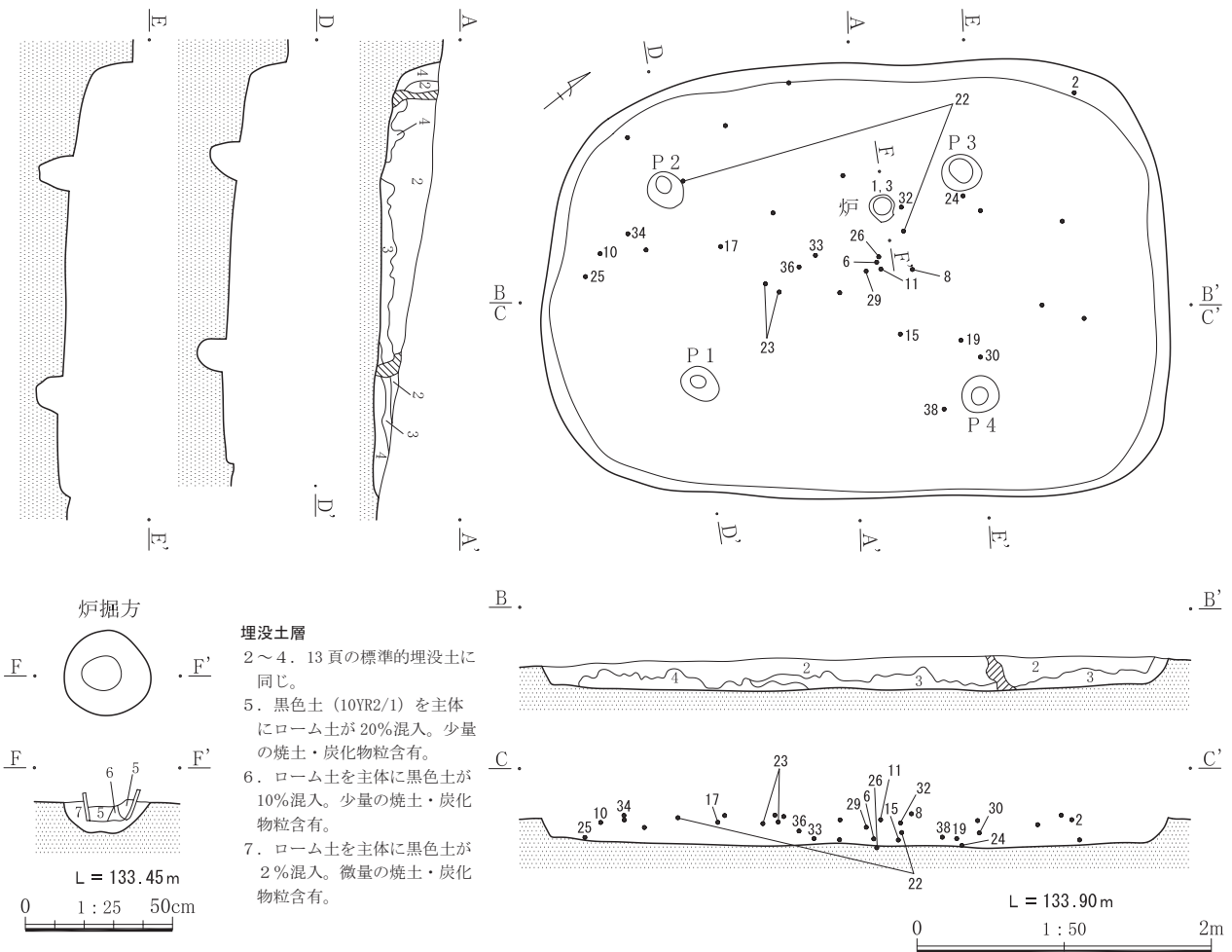
埋没土 厚さ20～45cmの2・3層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数106点のかなり多量の遺物(土器87、石器19)が出土しているが、床面に密着したものの(24

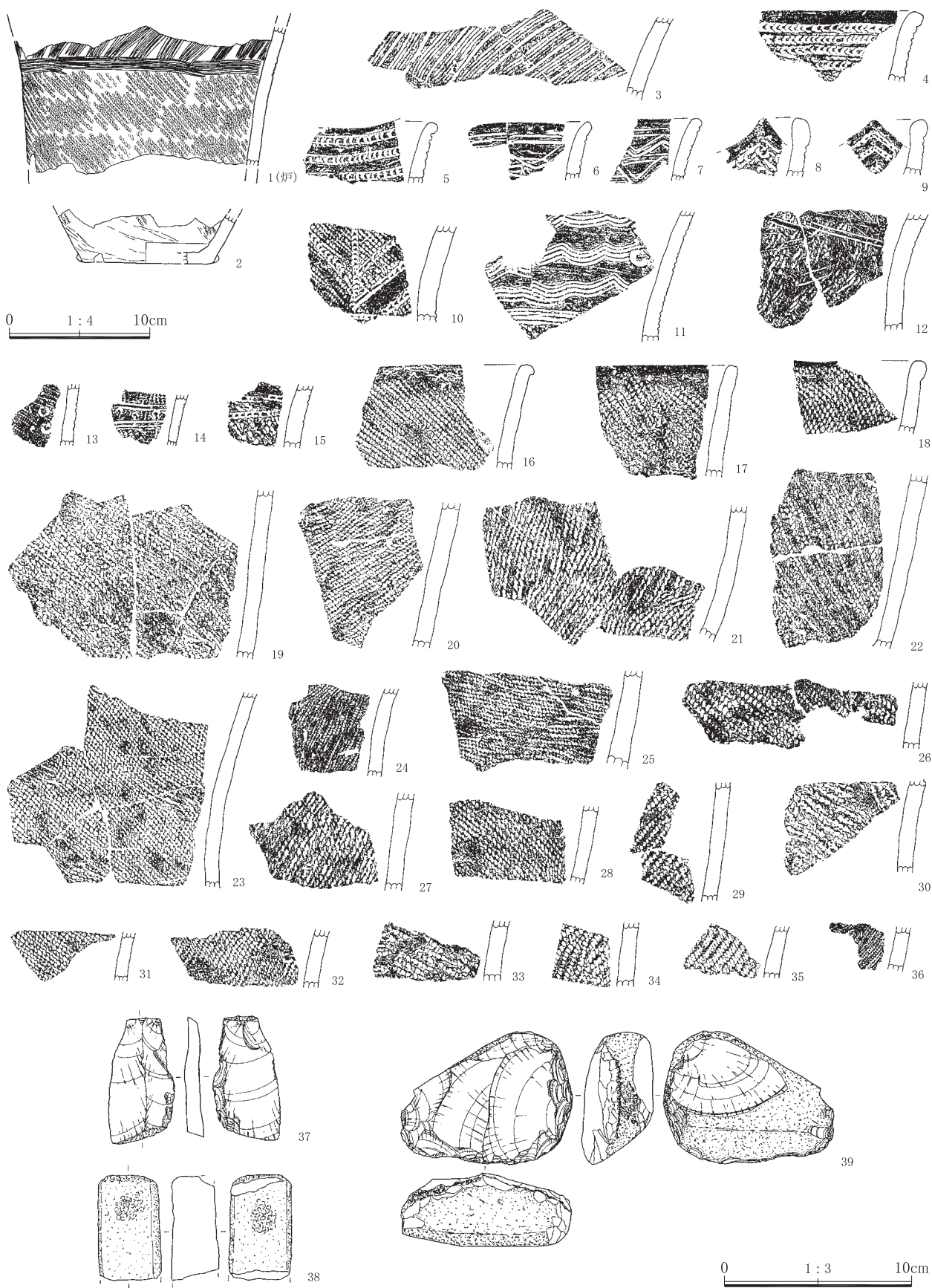
～26・33)は少なく、その大半は埋没土上位の2層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯a式の肋骨文2点(1・3)、米字文3点(10・14・15)、波状沈線文4点(6・7・11・12)、円形竹管文2点(8・13)、平行爪形文3点(4・5・9)、全面縄文3点(16～18)、構成不明50点(19～36)の他に、黒浜式1点、型式不明6点などがある。尚、1・3、13・36、19・22、21・27、30・33の各土器片は、各々同一個体である。石器には、削器1点(37)、礫器1点(39)、磨り石類1点(38)などが組成するのみである。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器をはじめとして諸磯a式が主体的であることから、当該期の所産と想定される。(観察表:15・16・29頁)

その他 周溝は検出されなかった。



第69図 40号住居



第70图 40号住居出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【40号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	黒浜	諸磯a	時期不明	総計
合計	8	1	72	6	87

分類別点数

諸磯a式

分類	1類		2類							
	b	c	a3	b1	b2	b3	c1	c2	d2	不明
合計	1	2	2	2	1	1	1	1	3	4

3類		4類	
不明	a	不明	
1	23	30	

胎土別点数

胎土 型式	A			B		D	
	諸磯a						
	28			4		5	

縄文原体別点数

黒浜式	
分類	3類
合計	1

諸磯a式

分類	2a	2b	4d	5b	6a	7b	18
合計	8	12	1	2	2	4	8

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計	
器種	削器類	礫器	磨石類		剥片
合計	2	1	1	15	19

分類別点数

搔器・削器

分類	2類
合計	2

磨石類

分類	3類
形態	ac
合計	1

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1	2
点数	1	1
重量	24.2	未計測

礫器

コード	1
点数	1
重量	303

磨石類

コード	43
点数	1
重量	91.9

剥片

コード	1	2
点数	11	4
重量	未計測	未計測

● 41号住居

位置 FM-132

写真 PL 35～37

面積 約 18.6 m²

方位 N 50 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 5.14 m × 短辺 4.35 m、深さ 40 cm である。立ち上がりの不明瞭な南辺を除き、各壁面は約 60～80 度の角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや北壁寄りに、2 基が確認された。1 号炉は体部下半を欠損する深鉢土器 (1) を、2 号炉は口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器 (2) を各々埋設する土器埋設炉である。その掘方は、1 号が直径 35 cm × 深さ 10 cm、2 号が直径 28 cm × 深さ 16 cm の円筒形状である。土器の型式差や埋設状況の違いから見て、時間的に 1 号が 2 号よりも新しい。両土器には顕著な被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、7 本が確認されている。P1～P4 を連結した形状は、住居外形とほぼ

シンメトリーであり、4 本主柱構造と考えられる。また、P1 や P4 に柱穴相互の重複が認められ、建て替えの痕跡を示すと想定される。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2、P2～P3、P3～P4 については共に 2.6 m であり、P4～P1 のみが 2.0 m を測る。また、各柱穴の規模 (径 × 深さ) は、P1 : 32 × 66 cm、P2 : 23 × 30 cm、P3 : 24 × 36 cm、P4 : 28 × 76 cm、P5 : 32 × 82 cm、P6 : 24 × 44 cm、P7 : 20 cm × 不明 である。

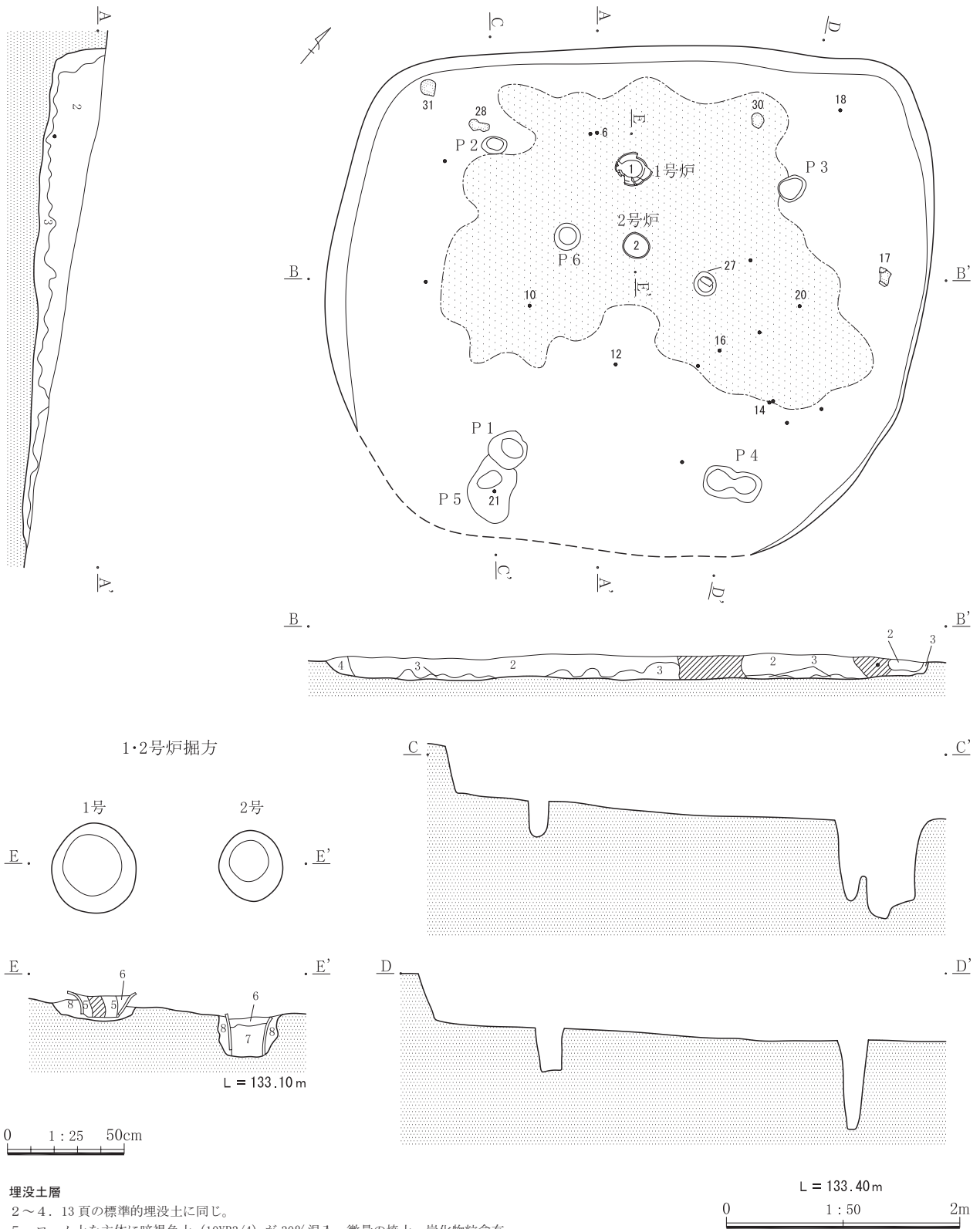
床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI・VII層) を最大 40 cm 掘り込んで床面を構築する。ほぼ平坦で凹凸面も少ないが、自然地形と同様に約 27 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。炉の周辺を中心に、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。また、明瞭に把握することはできなかったが、1 号炉に伴う床面は 2 号炉を埋めて約 5 cm ほど上位に形成されていたと考えられる。

埋設土 厚さ 20～45 cm の 2・3 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋設状況を示している。

遺物 総数 123 点の遺物 (土器 77、石器 45) が出土しているが、その内の 8 点 (10・12・18・21・27～31) が床面に密着し、他は埋設土上位の 2 層を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯 a 式の波状沈線文 8 点 (1・5～9)・肋骨文 1 点 (2)・米字文 2 点 (3・4)・円形竹管文 2 点 (10・17)・平行爪形文 3 点 (11・12)・全面縄文 1 点 (13)・構成不明 20 点 (14～16・18～23) の他に、稲荷台式 10 点、諸磯 b 式 6 点、同 c 式 6 点、型式不明 16 点などがある。尚、5・8、6・9、10・17、18・20 の各破片は、各々同一個体である。石器には、石鏃 1 点 (25 は未製品)、石匙 1 点 (24)、削器 3 点 (26)、打製石斧 2 点 (28)、磨り石類 3 点 (29・30)、敲き石 1 点 (27)、多孔石 1 点 (31)、剥片 30 点、礫塊 6 点などが組成する。また、黒曜石の剥片 1 点について X 線回折試験による産地同定を行い、和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、1・2 号炉の埋設土器を含めて諸磯 a 式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。 (観察表 : 16・29 頁)

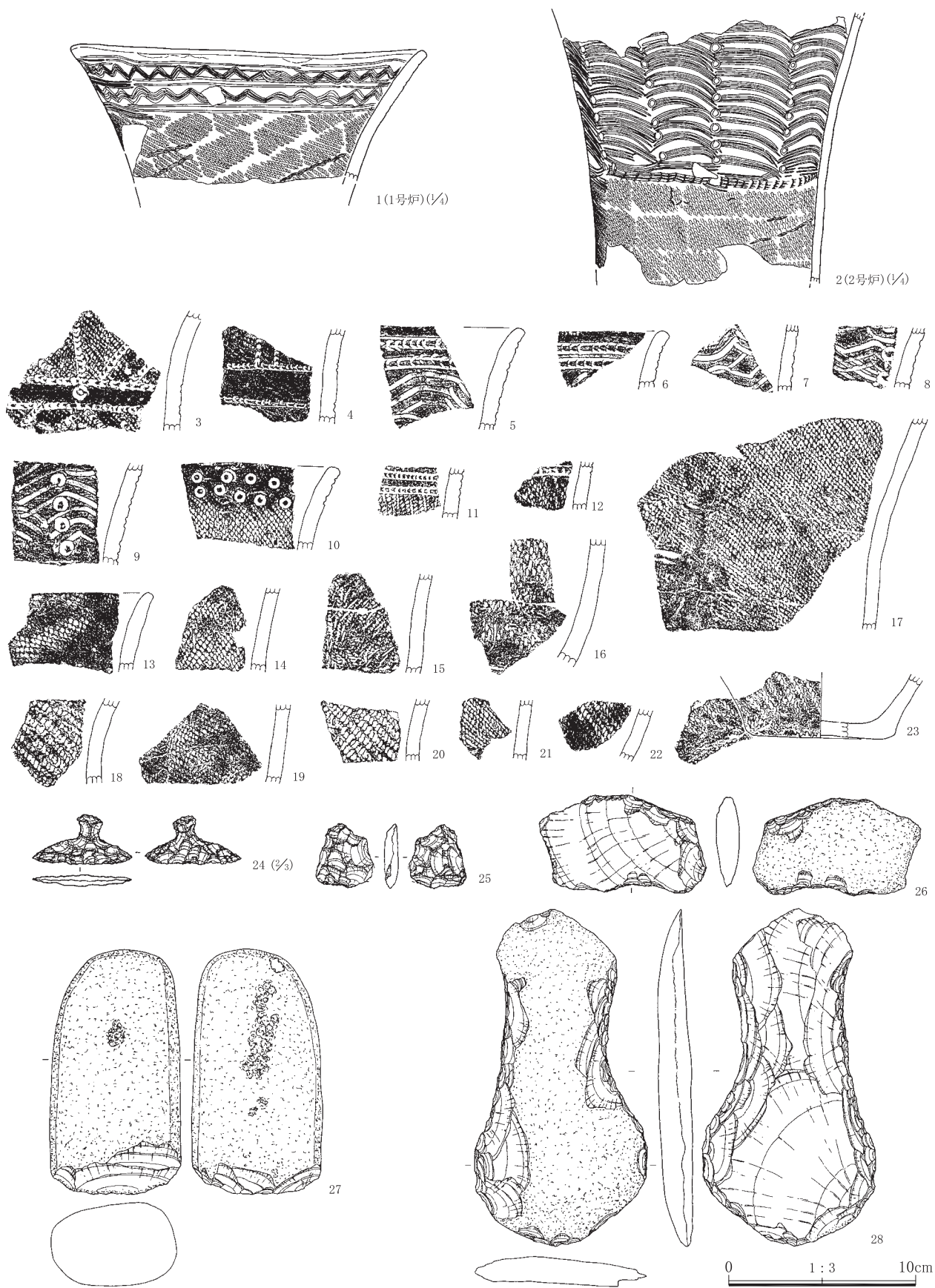
その他 周溝は検出されなかった。



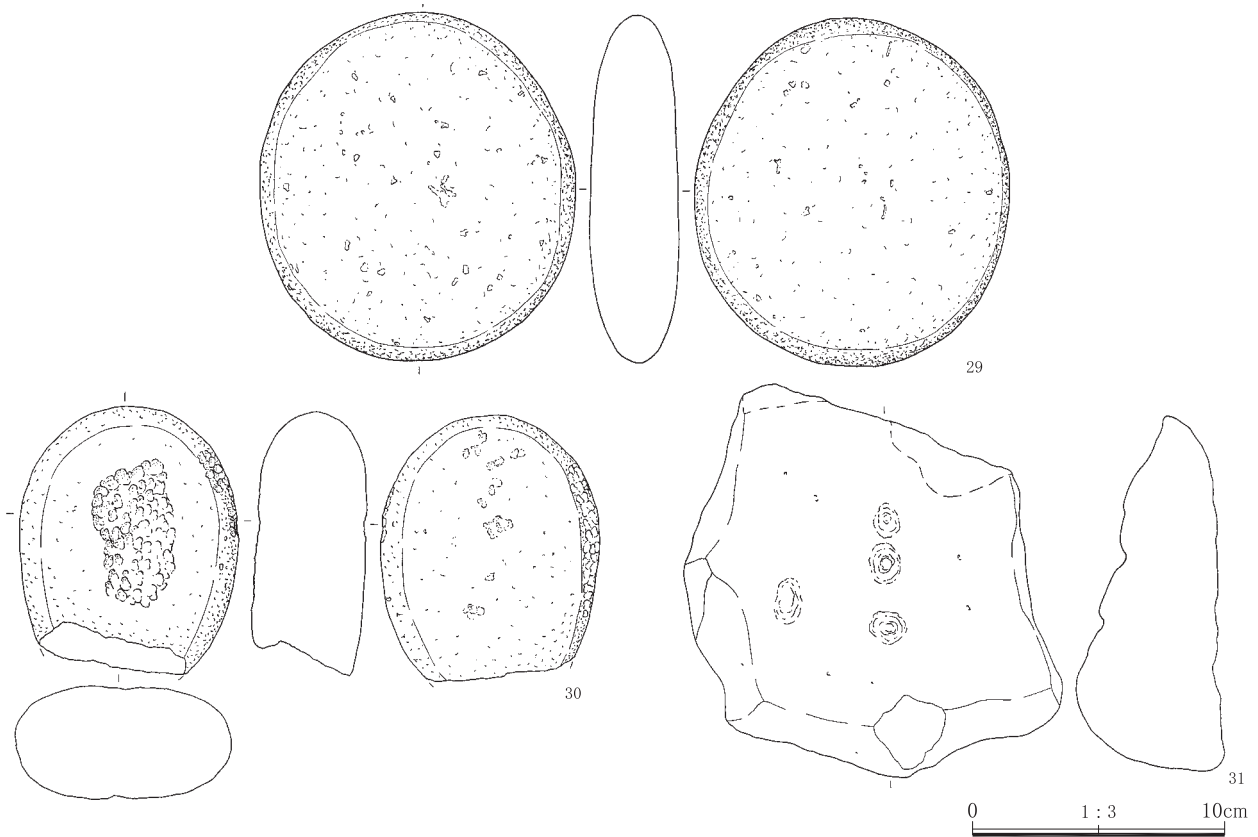
埋没土層

- 2～4. 13頁の標準的埋没土に同じ。
- 5. ローム土を主体に暗褐色土(10YR3/4)が30%混入。微量の焼土・炭化物粒含有。
- 6. 暗褐色土を主体にローム土が5%混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
- 7. 黒褐色土(10YR2/3)を主体に暗褐色土とローム土が各5%混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
- 8. 暗褐色土とローム土が等比率混入。微量の焼土・炭化物粒含有。

第71図 41号住居



第72図 41号住居出土遺物(1)



第73図 41号住居出土遺物(2)

【41号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	10	37	6	6	16	75

分類別点数

分類	2類						4類		
	1類								
種別	b	a1	b1	b2	d1	d4	不明	a	不明
合計	2	1	1	5	2	2	2	10	12

諸磯b式

分類	2類	3類	4類
合計	2	2	2

諸磯c式

分類	1類	3類
合計	3	3

縄文原体別点数

分類	2a	2b	5b	7b	7g	18
合計	2	12	1	2	1	5

胎土別点数

胎土	型式	
	諸磯a	
A	19	
B	3	
D	1	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		複合技術系列		その他		総計
器種	石鏃	石匙	削器類	打斧	磨石類	敲石	多孔石	剥片	礫塊		
合計	1	1	3	2	3	1	1	30	6	48	

分類別点数

石鏃		石匙		搔器・削器		打製石斧	
分類	9類	分類	2類	分類	1類 2類	分類	3類 8類
合計	1	合計	1	合計	1 2	合計	1 1

磨石類

分類	2類	5類	
形態	a	ac	a
合計	1	1	1

敲石

分類	3類
形態	ac
合計	1

多孔石

分類	4類
形態	b
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		石匙		打製石斧	
コード	2	コード	2	コード	4 7
点数	1	点数	1	点数	1 1
重量	8.1	重量	0.6	重量	305 未計測

搔器・削器

コード	1
点数	3(1)
重量	(70.8)

磨石類

コード	4
点数	3(2)
重量	(1531)

敲石

コード	4
点数	1
重量	636

多孔石

コード	4
点数	1
重量	1529

剥片

コード	1	2	7	12
点数	25	2	2	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	6
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	6	6

● 42号住居

位置 FY-150

写真 PL 37

面積 14.4 m²

方位 N 86度E

重複 北半部で倒木痕を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 4.56 m × 短辺 3.97 m、深さ 14 ~ 46 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は若干湾曲しつつ走行している。

炉 南西隅に近接して、1基が確認された。床面を僅かに掘り窪めた円形状の掘り込み炉であり、その規模は直径 26 cm × 深さ 8 cm を測る。内部には黒褐色土を主体に、少量の焼土の堆積が認められる。

床面 勾配約 8 度の斜面地のローム層 (VI・VII層) を最大 46 cm 掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、自然地形と同様に約 26 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。倒木痕との重複もあり、顕著な硬化面は認められなかった。

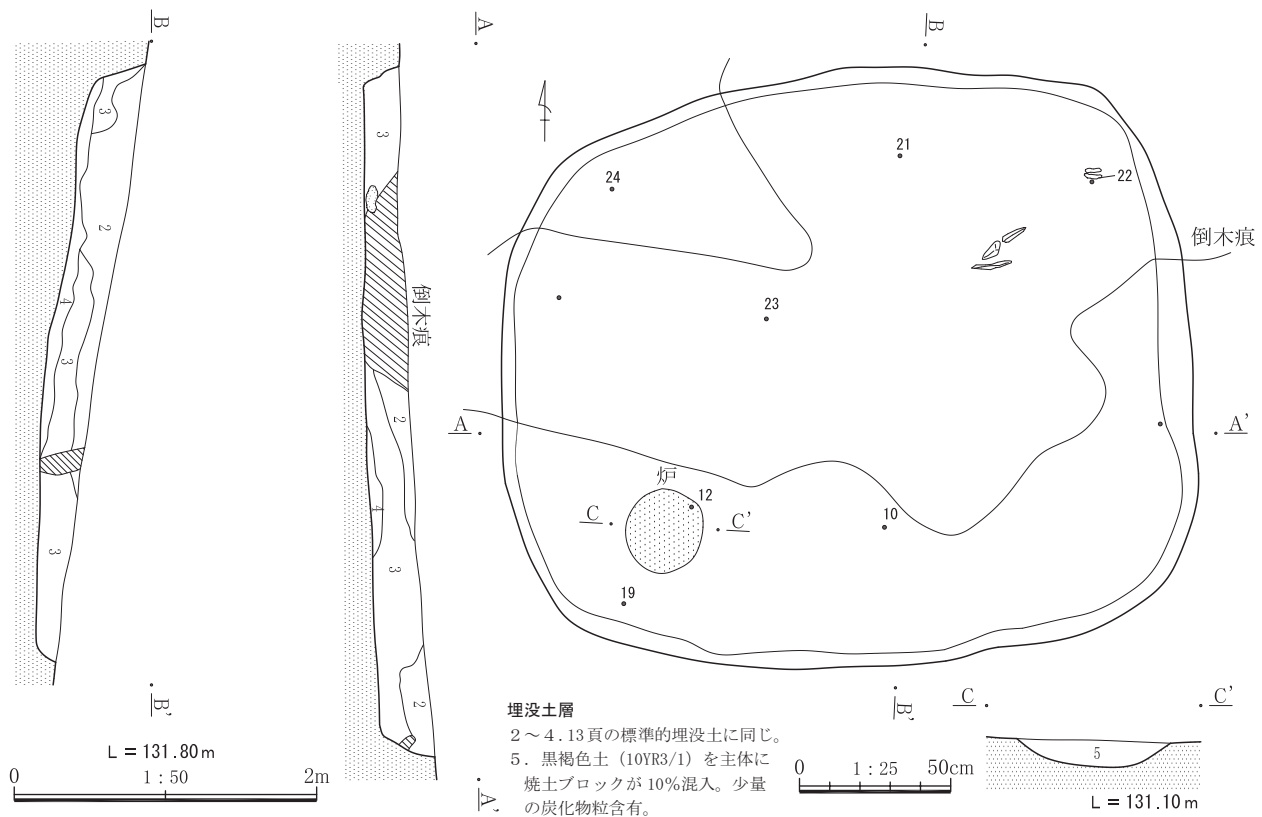
埋没土 厚さ 30 ~ 35 cm の 2 ~ 4 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 68 点の遺物 (土器 35、石器 33) が存在するが、床面に密着したもの (10・21・23・24) は少なく、埋没土上位の 2・3 層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、諸磯 b 式の浮線文 5 点 (1 ~ 3) ・構成不明 9 点 (9 ~ 11・13・14) と、諸磯 c 式の集合沈線文 6 点 (4 ~ 8) の他に、黒浜式 3 点 (12・15)、稻荷台式 3 点、型式不明 9 点などがある。尚、1・2、13・14 の各破片は、各々同一個体である。石器には、削器 5 点 (17 ~ 20)、打製石斧 2 点 (21・22)、磨り石類 3 点 (23・24)、剥片 23 点が組成するのみであり、器種・数量ともに乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 b 式を主体としていることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 16・29 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。



第 74 図 42号住居

【42号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	黒浜	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	3	3	14	6	9	35

分類別点数

稲荷台式		黒浜式		諸磯b式		諸磯c式				
分類	不明	分類	3類	分類	2類	4類	分類	3c類	3類	
合計	1	2	合計	3	種別	b2	不明	a	不明	
				合計	3	合計	3	2	5	4
								合計	5	1

縄文原形別点数

稲荷台式		黒浜式		諸磯b式			諸磯c式		
分類	9b	分類	2a	分類	2a	2b	18	分類	18
合計	1	合計	2	合計	2	3	3	合計	5

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台	黒浜	諸磯b	諸磯c
A		1	—	8	5
C		—	2	—	—

(石器)

器種別点数

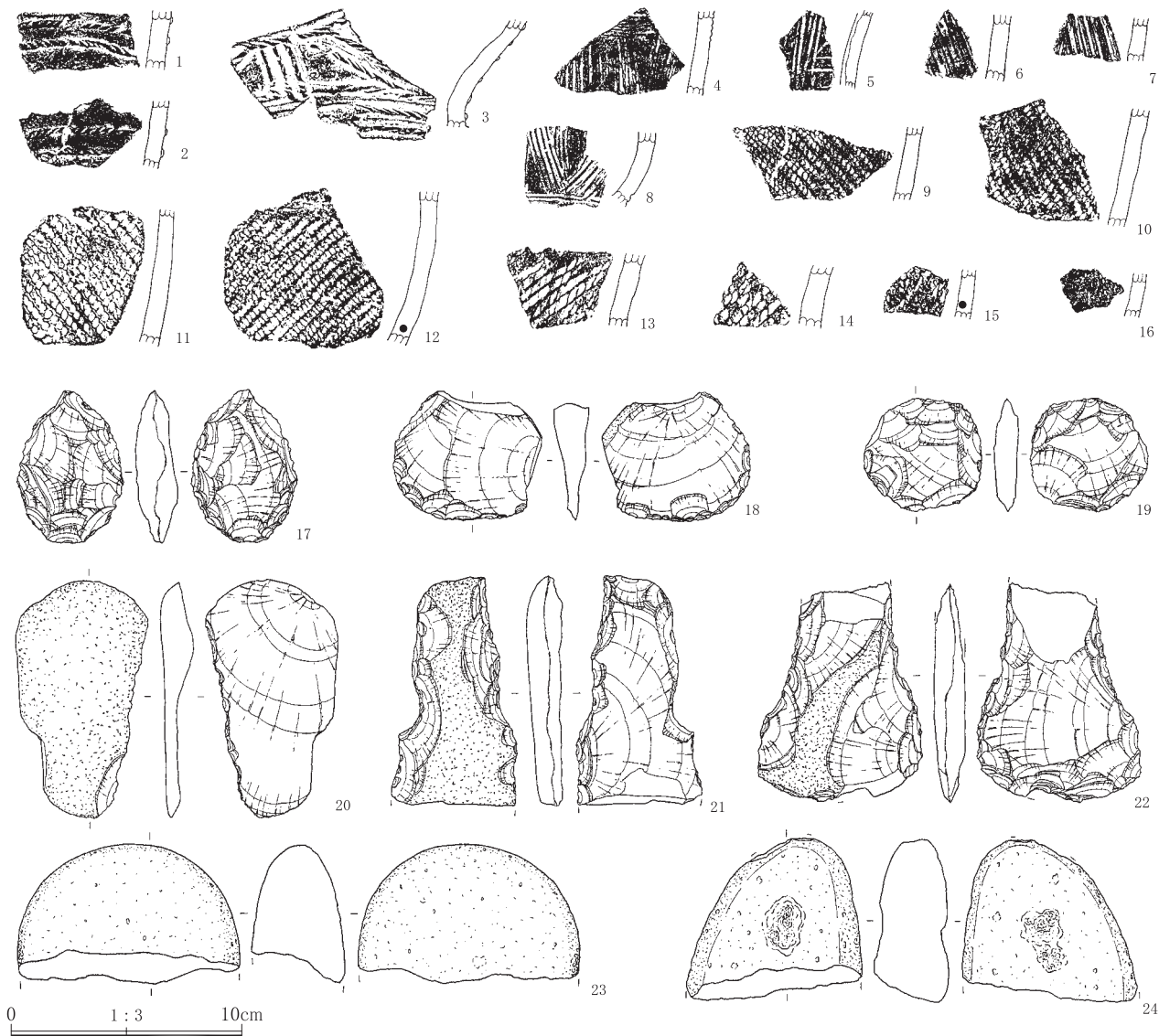
系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計	
器種	削器類	打斧	磨石類	剥片	
合計	4	3	3	23	33

分類別点数

搔器・削器		打製石斧				磨石類				
分類	1類	2類	分類	2類	3類	7類	分類	2類	4類	
合計	3	1	合計	1	1	1	形態	ab	ac	a
							合計	1	1	1

石材別の点数と重量

搔器・削器			打製石斧			磨石類		剥片									
コート	点数	重量	コート	点数	重量	コート	点数	コート	点数	重量	コート	点数	重量				
1	9	43	1	7	16	4	1	2	7	9	12	11	1	1	1	6	4
未計測	未計測	71.8	88.5	52.4	90.1	3(2)	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測



第75図 42号住居出土遺物

● 43号住居

位置 GA-133 写真 PL 38～39

面積 19.6 m² 方位 N 72 度 E

重複 床面中央部の東側で、時期不明の302号土坑を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ円形に近似した隅丸正方形を呈し、規模は長辺 5.10 m × 短辺 5.03 m、深さ 15～73 cm である。四辺の壁面は約 80 度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は湾曲して走行する。

炉 南壁に近接して1・3号炉の2基、北壁に近接して2号炉の計3基が確認された。3号は口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器（1）を埋設した土器埋設炉であり、その掘方は直径 40 cm × 深さ 18 cm の円筒形状である。土器内には暗褐色土が堆積し、微量の炭化物粒を含有する程度であるが、土器には顕著な被熱風化が認められる。1・2号は地床炉に近い楕円形状の掘り込み炉であり、1号が長径 30 × 短径 25 × 深さ 4 cm、2号が長径 30 × 短径 22 × 深さ 9 cm の規模を有する。底面付近には、僅かながら焼土の堆積が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、5本が確認されている。P1・P3～P4を連結した形状は、住居外形とほぼシンメトリーであり、4本主柱構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P3：2.8 m、P3～P4：1.95 m、P4～P5：2.3 m、P5～P1：2.3 m を測る。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：46 × 20 cm、P2：31 × 70 cm、P3：24 × 66 cm、P4：28 × 75 cm、P5：42 × 85 cm である。P1とP2は、いずれか片方が建て替えに伴って掘り直された柱穴と推定される。

床面 勾配約7度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大73 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面や傾斜の少ない平坦な床面である。敲き床ほどではないが、3基の炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによる硬化面が認められる。

埋没土 厚さ20～70 cmの1～7層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。中位

【43号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	2	81	15	21	119

分類別点数

諸磯c式

分類	1類	3類	4類
合計	7	4	4

諸磯b式

分類	1類			2類		3類			4類	
種別	a1	d1	不明	f1	不明	a2	c	不明	a	不明
合計	1	1	1	2	1	1	10	35	9	20

縄文原体別点数

諸磯b式

分類	2b	18
合計	41	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b
A		24
B		19

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	磨斧	多孔石	剥片	礫塊		
合計	1	13	1	1	1	1	15	3	36	

分類別点数

石鏃

分類	9類
合計	1

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	4	9

打製石斧

分類	1類
合計	1

磨石類

分類	2類
形態	ab
合計	1

磨製石斧

分類	3類
合計	1

多孔石

分類	2類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コード	12
点数	1
重量	未計測

搔器・削器

コード	1	7	12
点数	11(6)	1	1
重量	(254)	41.5	未計測

打製石斧

コード	1
点数	1
重量	55.1

磨石類

コード	4
点数	1
重量	388

磨製石斧

コード	10
点数	1
重量	255

多孔石

コード	4
点数	1
重量	9000

剥片

コード	1	2	7	12
点数	9	1	2	3
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	3
重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

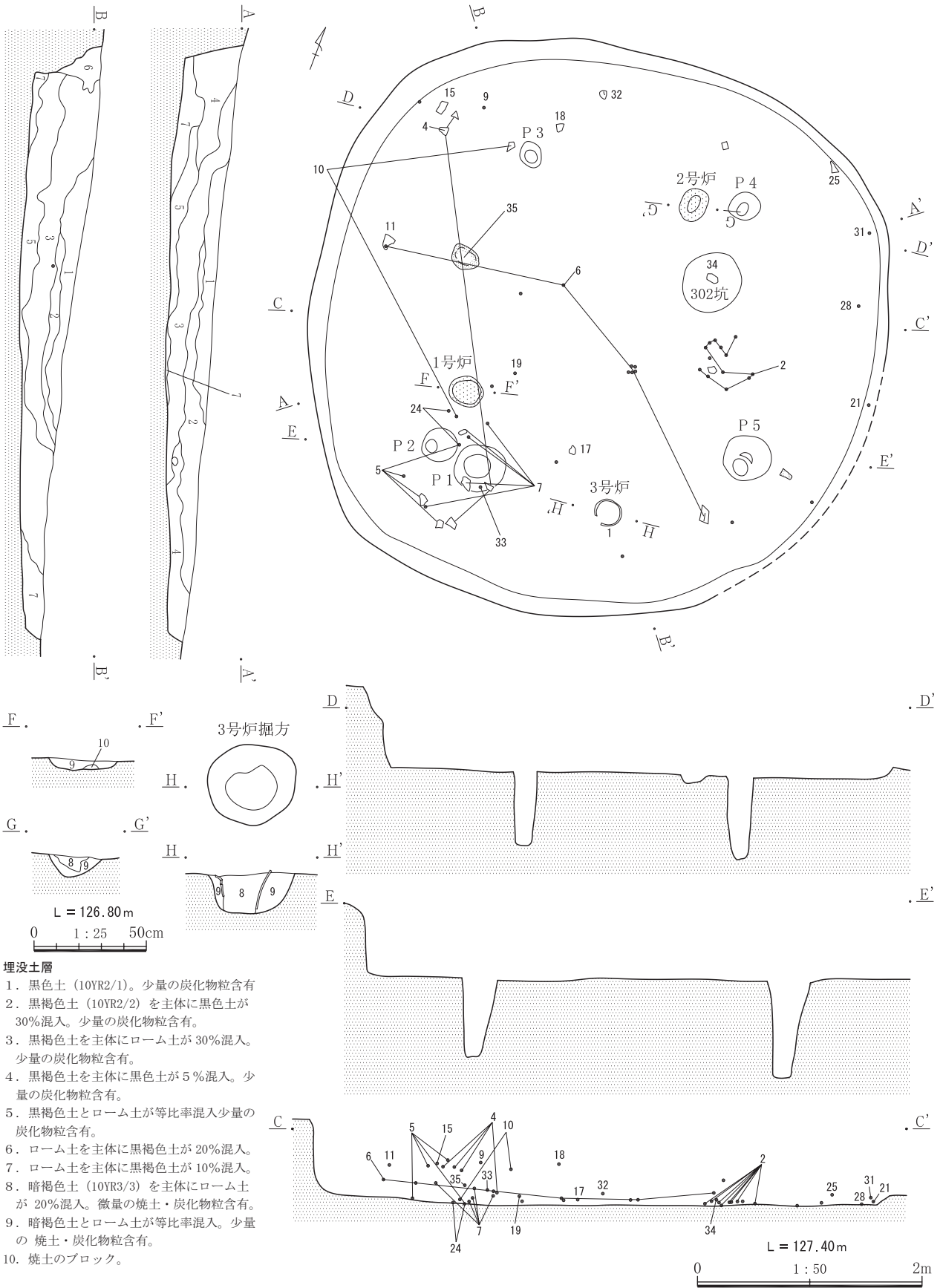
分類	1	2	総計
合計	2	1	3

被熱礫の石材別点数

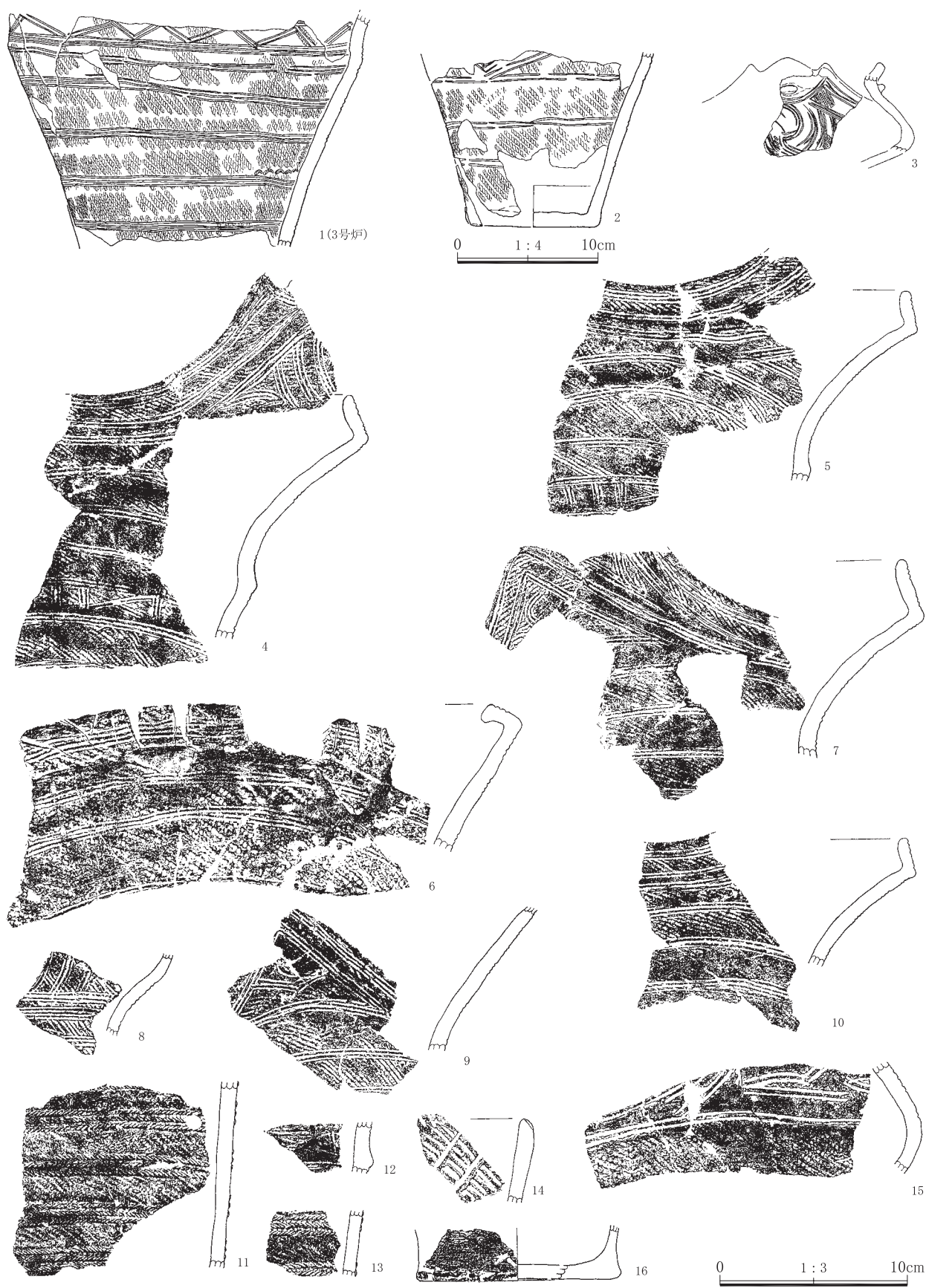
コード	4
点数	2

の3層は、ロームブロックを30%含む黒褐色土であり、土屋根の崩落土の可能性もある。

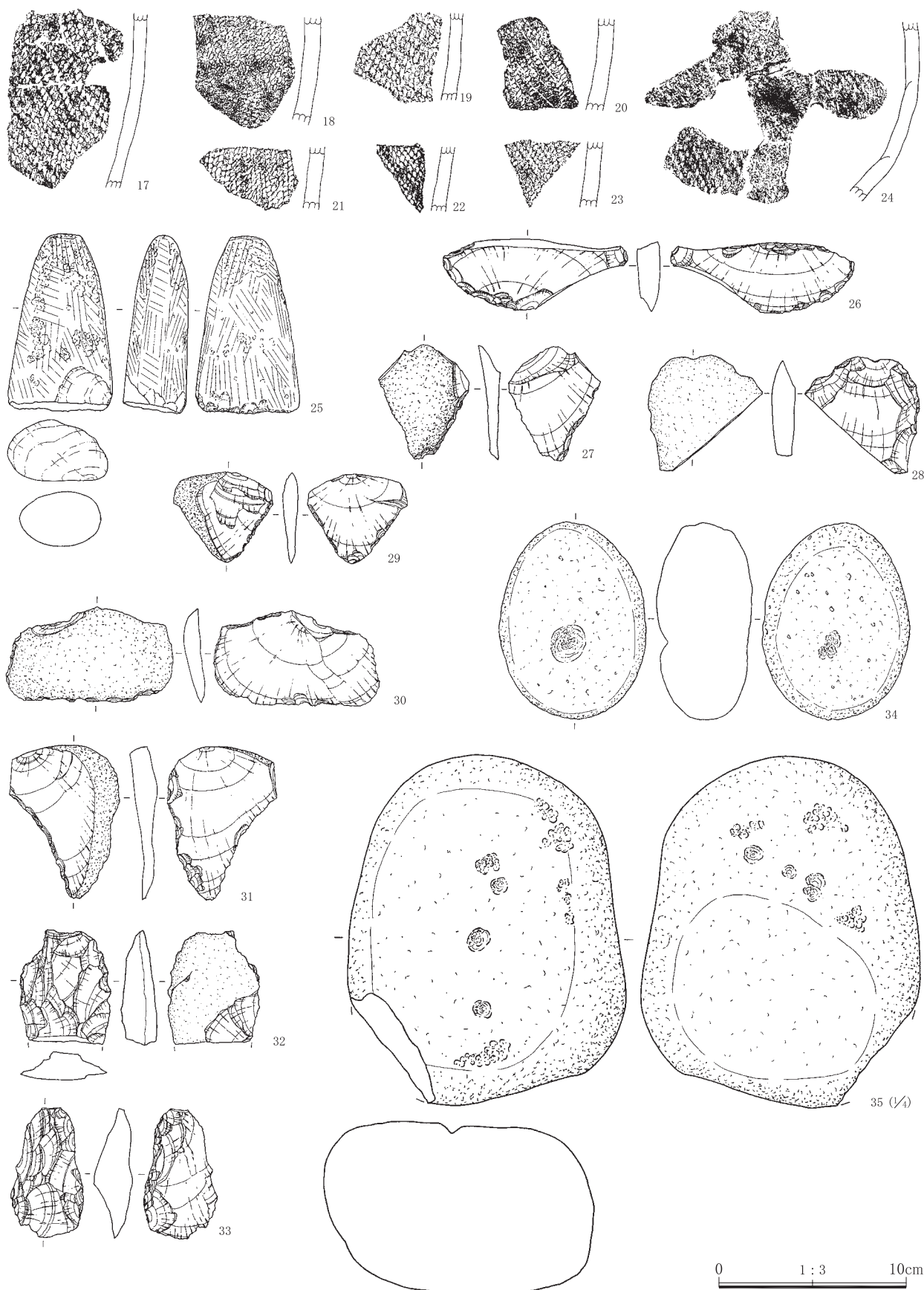
遺物 総数155点のかなり多量の遺物（土器119、石器36）が出土しているが、床面に密着したものは14点（2・7・17・21・24～32・35）のみで、その他



第76図 43号住居



第77図 43号住居出土遺物(1)



第 78 图 43 号住居出土遗物 (2)

II 今井三騎堂遺跡の調査

は埋没土中位の3層下部を中心に床面から浮いた状態であった。土器は、諸磯b式の横位・多段の行沈線文10点(1・2・4～10・12)・条線状平行沈線文37点(3)、浮線文3点(11・13)、格子目文1点(14)、変形木葉文1点(15)、文様構成不明29点(16～24)の他に、稲荷台式2点、諸磯c式15点、型式不明21点などがある。口縁部の強く内折するものが主体的だが、3のように波頂部が靴先状を呈するものも見られる。尚、4・5・7・9・10、11・13、17・19、18・20・21の各破片は各々同一個体である。石器には、石鏃1点、削器13点(26～31・33)、打製石斧1点(32)、磨製石斧1点(25)、磨り石類1点(34)、多孔石1点(35)、剥片15点、礫塊3点などが組成する。また、黒曜石の剥片5点の内2点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器を含め諸磯b式土器が主体的であることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:16・29頁)

その他 周溝は検出されなかった。

● 44号住居

位置 GO-156 写真 PL 40

面積 27.3 m² 方位 N 32度W

重複 北壁側で草創期後半の17号住居と時期不明の310号土坑を切っている。また、南西隅で312号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺6.22m×短辺6.17m、深さ60cmである。壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は若干湾曲気味に走行している。

炉 床面中央部からやや南東隅寄りの3号炉と南西隅寄りの1号炉、東壁中央部に近接した2号炉の計3基が確認された。3号は口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器(1)を埋設した土器埋設炉で、その掘方は直径15cm×深さ13cmの円筒形状である。土器内の埋没土には焼土が存在しないが、土器には顕著な被熱風

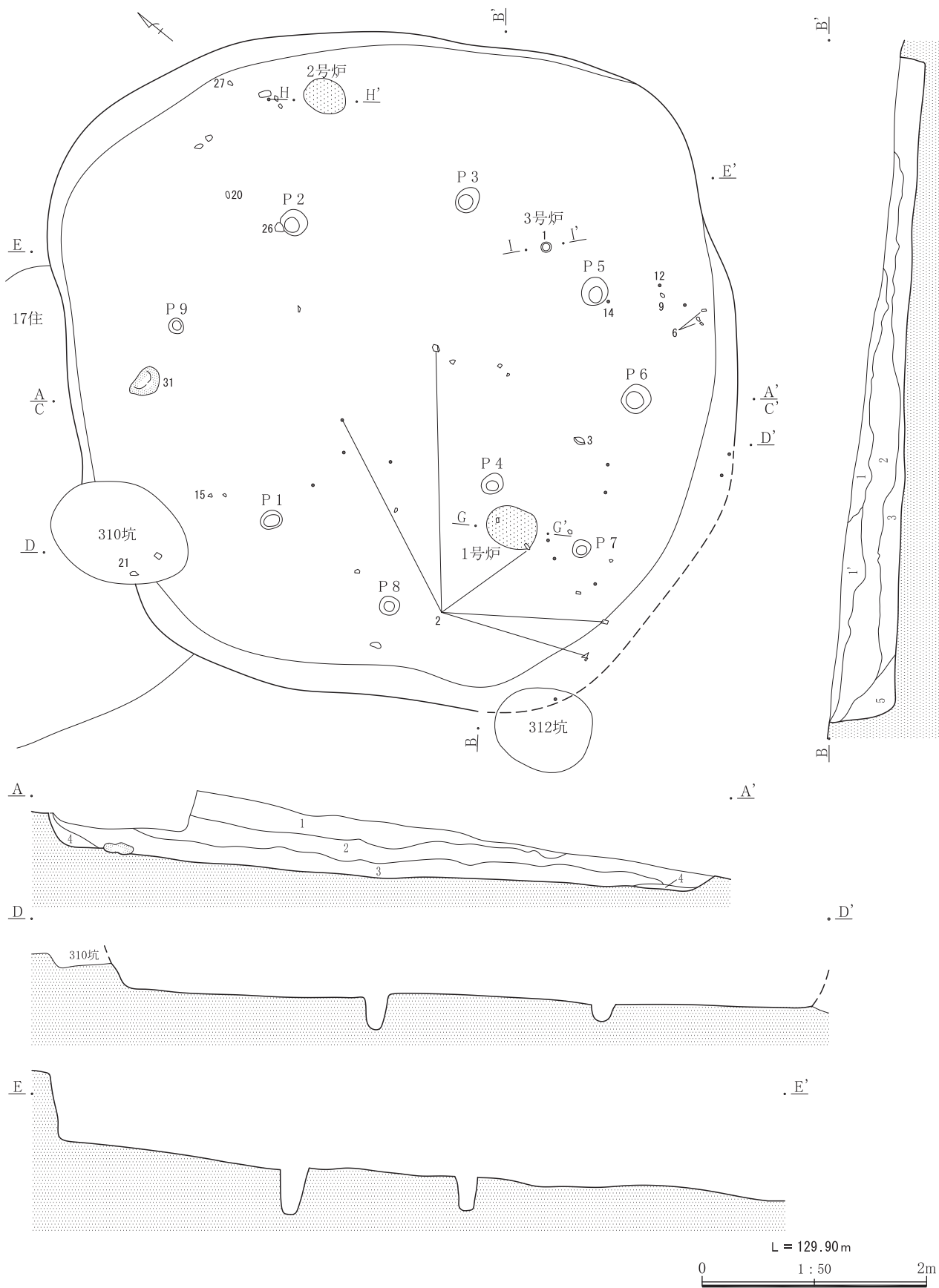
化が認められる。1・2号は深度の浅い楕円形状の掘り込み炉であり、1号が長径46×短径36×深さ6cm、2号が長径39×短径33×深さ7cmの規模を有する。内部底面は、被熱により焼土化している。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、9本が確認されているが、P1～P4の4本を主柱とする構造と考えられる。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.65m、P2～P3:1.6m、P3～P4:2.55m、P4～P1:2.0mを測る。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:21×30cm、P2:25×43cm、P3:25×34cm、P4:20×16cm、P5:26×35cm、P6:27×40cm、P7:16×28cm、P8:18×19cm、P9:14×26cmである。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大60cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約40cmの比高差で北側から南側方向へ傾斜している。3基の炉の周辺や柱穴で圍繞された内側を中心にして、若干の踏み固めによる硬化面が認められる。

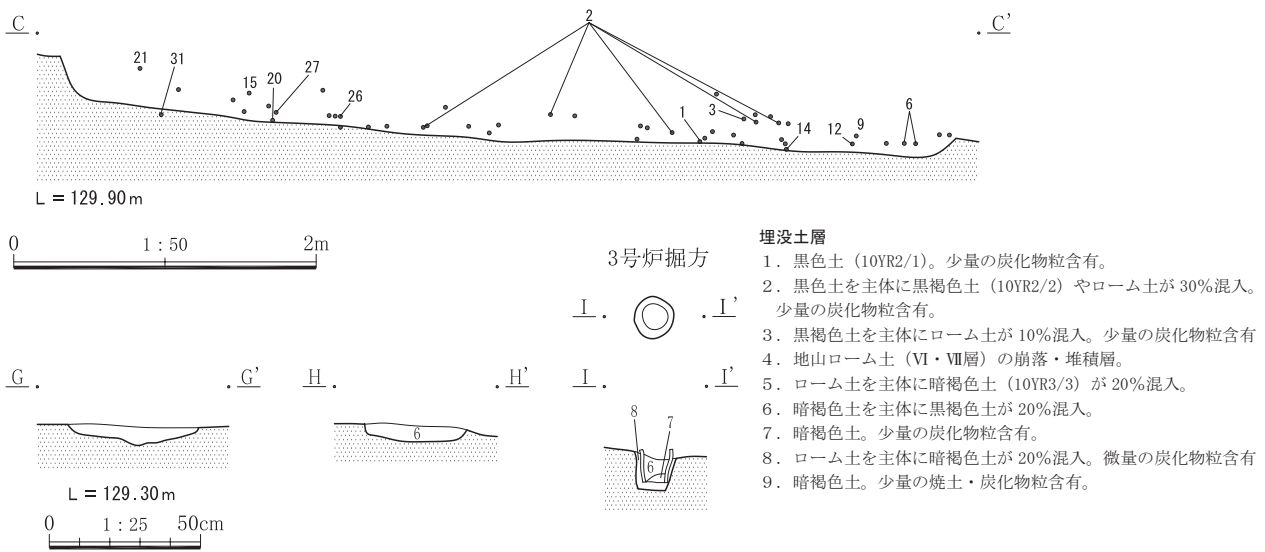
埋没土 厚さ20～60cmの1～3層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数478点の多量の遺物(土器225、石器223)が存在するが、床面に密着したもの(2・14・25～32・35)は少なく、埋没土中位の2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は炉埋設土器を除いて小破片を主体とし、諸磯b式の横位爪形文1点(1)、鋸歯状沈線文8点(6～13)・渦巻状沈線文3点(3・4・5)・浮線文1点・構成不明23点(14・15)や、浮島・興津式系22点(2)と黒浜式2点(16)の他に、夏島式3点、稲荷台式110点、稲荷原式4点、諸磯a式2点、同c式29点、型式不明47点などがある。草創期後半の撚糸文土器が多数存在するのは、当住居と重複する17号住居に随伴したものが、混在しているためと考えられる。尚、6・9・12・13と7・10の各破片は各々同一個体である。石器には、石鏃1点(17)、削器23点(18～20・22・23)、打製石斧3点(21・24)、磨り石類6点(27～30)、石皿1点(31)、石核5点(25・26)、剥片178点、礫塊6点などが組成する。また、黒曜石の剥片18点の内16点につい



第79图 44号住居(1)

II 今井三騎堂遺跡の調査



第 80 図 44 号住居 (2)

【44号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	稲荷原	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	時期不明	総計
合計	3	110	4	2	2	36	29	22	47	255

分類別点数

黒浜式		諸磯a式		諸磯c式		浮島・興津式系		諸磯b式											
分類	2b類	2類	分類	4類	分類	1類	3類	分類	2	不明	分類	1類	2類	3類			4類		
合計	1	1	合計	2	合計	1	28	合計	5	17	種別	不明	不明	a1	a2	b	c	不明	不明
合計	1	1	合計	2	合計	1	28	合計	5	17	合計	1	1	1	1	12	1	15	4

縄文原形別点数

黒浜式		諸磯b式			浮島・興津式系		
分類	2b	分類	2b	17	18	分類	18
合計	1	合計	13	1	1	合計	5

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯b	浮・興
A		—	13	5
B		—	2	—
C		1	—	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他				総計	
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	石皿	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	1	23	3	6	1	178	5	2	4	223

分類別点数

石鏃		搔器・削器			打製石斧			磨石類					石皿				
分類	4類	分類	1類	2類	3類	分類	1類	3類	8類	分類	1類	2類	4類	5類	分類	3類	
合計	1	合計	6	16	1	合計	1	1	1	形態	a	abc	ac	ac	a	合計	1
合計	1	合計	6	16	1	合計	1	1	1	合計	1	1	2	1	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器					打製石斧			磨石類		石皿		
コード	2	コード	1	2	3	5	9	コード	1	6	コード	4	コード	4
点数	1	点数	15 (3)	3	1	2	2	点数	2 (1)	1	点数	6 (4)	点数	1
重量	0.3	重量	(142)	未計測	未計測	49.1	未計測	重量	(56.3)	83.2	重量	(1606)	重量	14700

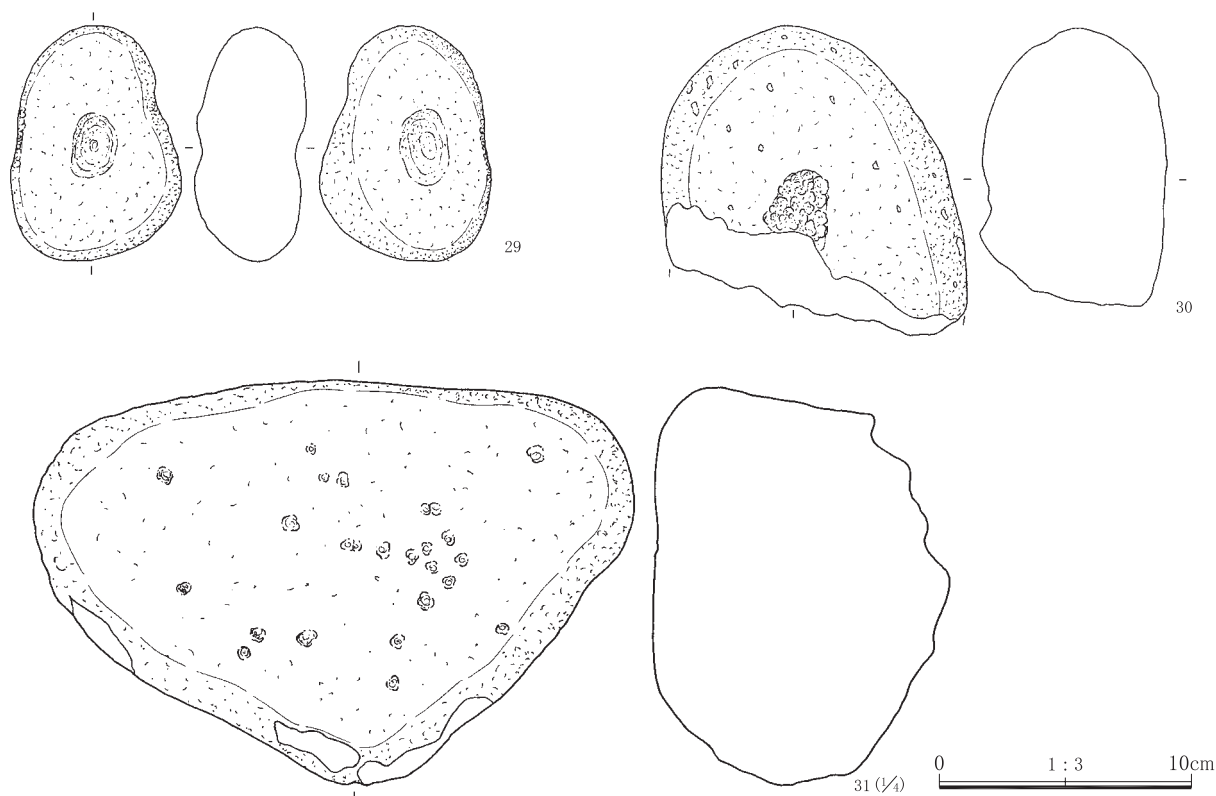
剥片	石核	礫塊											
コード	1	2	4	7	9	12	34	コード	1	2	5	コード	4
点数	131	21	1	1	5	18	1	点数	2	1	2	点数	4
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	重量	未計測	未計測	380	重量	未計測

礫塊の被熱状況			
分類	1	2	総計
合計	3	1	4

被熱礫の石材別点数	
コード	4
点数	3



第81图 44号住居出土遗物(1)



第 82 図 44 号住居出土遺物 (2)

て、X線回折試験による産地同定を行い、全て和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。これらの遺物の他に、埋没土中よりクリの炭化材小片が出土しているが、詳細は黒曜石分析を含めて 691 頁の「IV 科学的分析」を参照されたい。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 b 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 16・17・29 頁)

その他 周溝は検出されなかった。

● 45 号住居

位置 EM-131

写真 P L 41

面積 約 18.7 m²

方位 N 度 75 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺 5.23 m × 短辺 3.78 m、深さ 18 ~ 41 cm である。四辺の壁面は約 60 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部からやや西壁寄りに、1 基が確認された。深度の浅い楕円形状の掘り込み炉であり、長径

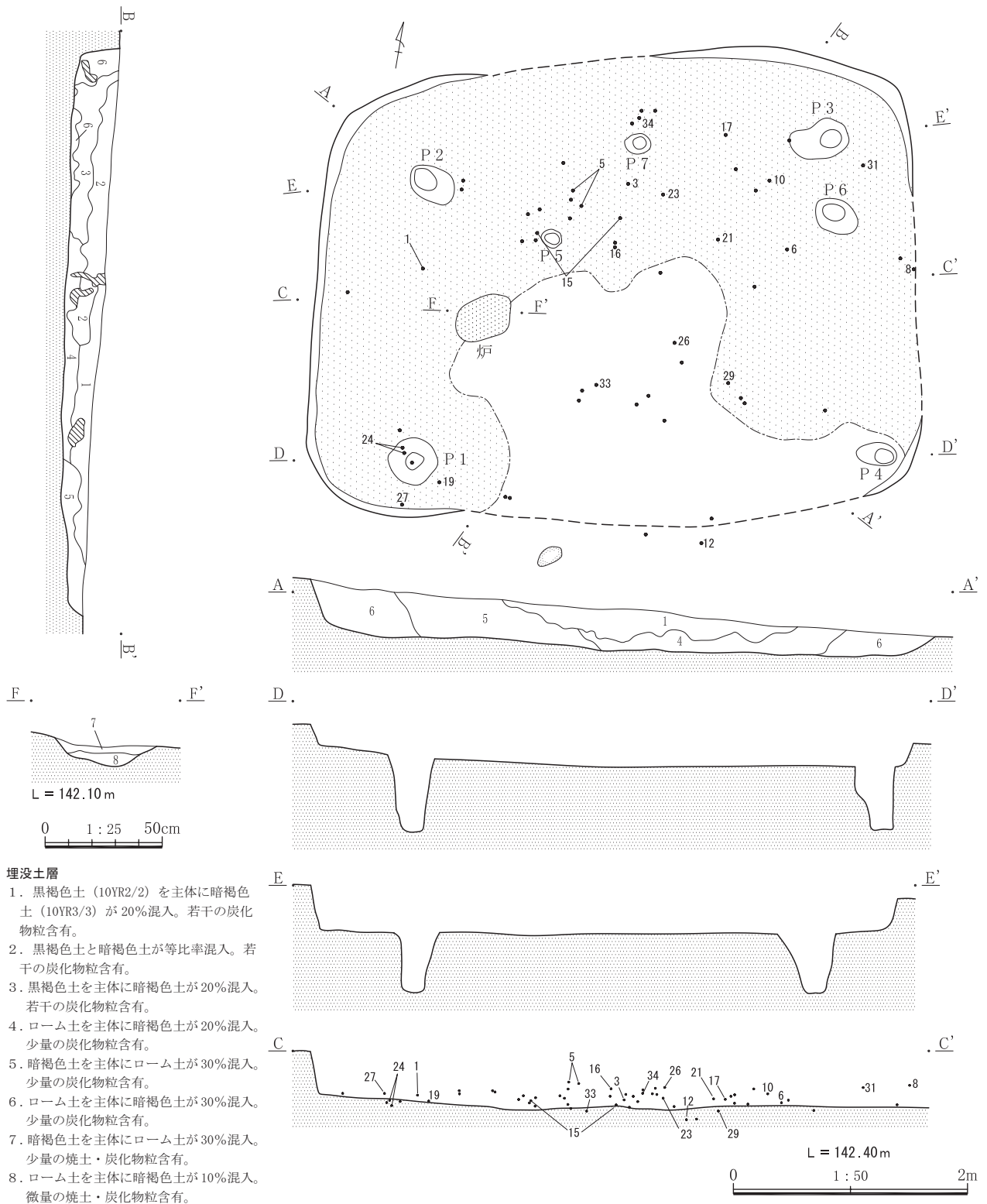
53 × 短径 38 × 深さ 9 cm の規模を有する。埋没土中の焼土は少量で、底面の被熱も僅かに認められる程度である。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、7 本が確認されている。住居の対角線上に位置する P1 ~ P4 の 4 本主柱構造と考えられる。主な柱穴の芯間距離は、P1 ~ P2 : 2.4 m、P2 ~ P3 : 3.5 m、P3 ~ P4 : 2.7 m、P4 ~ P1 : 4.0 m を測る。また、各柱穴の規模(径 × 深さ)は、P1 : 39 × 66 cm、P2 : 28 × 54 cm、P3 : 32 × 52 cm、P4 : 18 × 56 cm、P5 : 17 × 34 cm、P6 : 28 × 44 cm、P7 : 23 × 70 cm である。

床面 勾配約 6 度の斜面地のローム層 (VI・VII 層) を最大 41 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 15 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。炉の南東側の一部を除いて、踏み固めによる硬化面が認められる。

埋没土 厚さ 20 ~ 40 cm の 1 ~ 6 層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 171 点の遺物 (土器 101、石器 70) が存在するが、床面に密着したもの (3・6・12・17・24・



第 83 図 45 号住居

II 今井三騎堂遺跡の調査



第84図 45号住居出土遺物

29・33) は少なく、その大半が埋没土上位の1・2層を中心に床面から浮いた状態で出土している。土器は小破片のみであり、諸磯b式の浮線文33点(1～16)・波状沈線文2点(21)・横位多段沈線文4点・全面縄文1点(23)・構成不明19点(22・24～26)と、諸磯c式の集合沈線文17点(17～21)の他に、稻荷台式1点、諸磯a式5点、型式不明18点などがある。尚、3・4、5・10、7・9、11・15、14・16、24・25の各破片は各々同一個体である。石器には、石錐1点(27)、石匙1点(28)、削器11点(29・30)、磨製石斧1点(31)、磨り石類4点(32・33)、砥石1点(34)石核3点、剥片40点、礫塊8点などが組成する。また、製品(27・28・30)や剥片類を含めた36点に黒曜石が用いられているが、その内の35点についてX線回折試験による産地同定を行い、和田峠系1(東餅屋・西餅屋)1点を除いて他の全てが、和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯b式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 17・29頁)

その他 周溝は検出されなかった。

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列
	石錐	石匙	削器類	磨石類	砥石	磨製石斧
合計	1	1	11	4	1	1

その他			総計
剥片	石核	礫塊	
40	3	8	70

分類別点数

石錐		石匙		搔器・削器	
分類	1類	分類	2類	分類	1類 2類
合計	1	合計	1	合計	4 7

磨石類				砥石		磨製石斧	
分類	2類		4類		分類	2類	
形態	a	abc	ac	ac	合計	1 1	
合計	1	1	1	1	合計	1 1	

石材別の点数と重量

石錐		石匙		搔器・削器				
コード	12	コード	12	コード	1	2	5	12
点数	1	点数	1	点数	1	1	1	8(1)
重量	1.9	重量	3.8	重量	未計測	未計測	50.7	(3.6)

磨石類		砥石		磨製石斧		石核		
コード	4	19	コード	23	コード	10	コード	12
点数	3(2)	1	点数	1	点数	1	点数	3
重量	(702)	未計測	重量	70.4	重量	105	重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

剥片				礫塊		
コード	1	7	12	37	コード	4
点数	11	5	23	1	点数	8
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	6	2	8

被熱礫の石材別点数	
コード	4
点数	6

【45号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稻荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	5	59	17	19	101

分類別点数

諸磯a式				諸磯c式				
分類	2類	3類	4類	分類	3a類	3c類	3類	4類
合計	1	1	3	合計	1	3	12	1

諸磯b式

分類	1類		2類		3類		4類	
種別	c	不明	b2	不明	不明	c	不明	
合計	1	1	16	17	4	5	15	

縄文原体別点数

諸磯b式		諸磯c式		
分類	2b	18	分類	18
合計	24	1	合計	4

胎土別点数

各種土器の胎土別点数			
胎土	型式	諸磯b	諸磯c
A		21	3
B		4	1

● 46号住居

位置 F V -123

写真 P L 42 ~ 43

面積 18.4 m²

方位 N 65 度 E

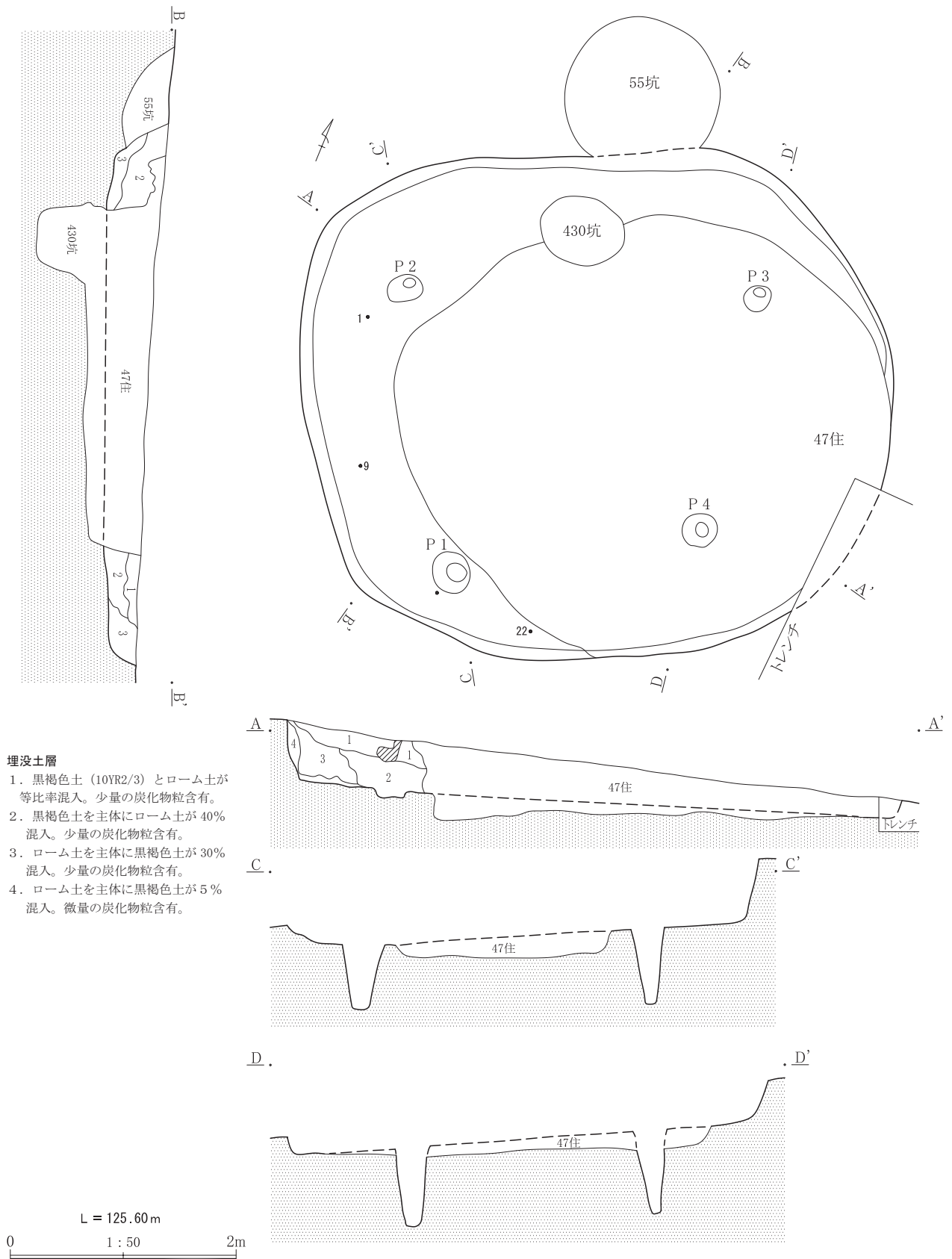
重複 全面積の約2/3を47号住居により切られているが、当該住居とは建て替え・縮小の関係にある。また、時期不明の430号土坑に切られ、諸磯b式期の55号土坑を切っている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形を呈し、規模は長辺5.18m×短辺4.45m、深さ60cmである。壁面は約80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は湾曲気味に走行する。

炉 47号住居との重複により、その存在を確認することができなかった。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認され

II 今井三騎堂遺跡の調査



第85図 46号住居

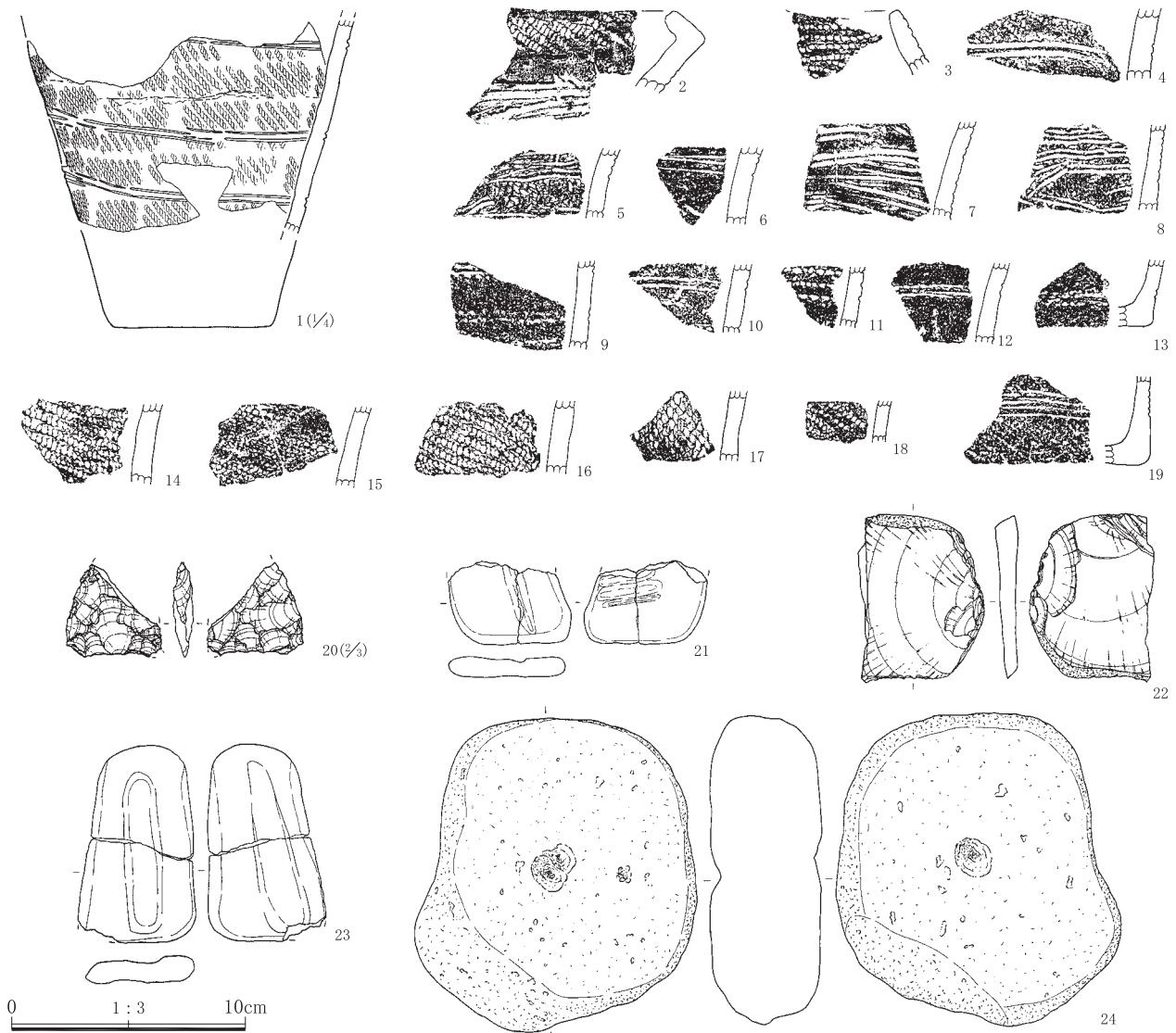
ている。各柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：2.6 m、P2～P3：3.1 m、P3～P4：2.15 m、P4～P1：2.2 mを測る。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：37×56 cm、P2：22×65 cm、P3：24×55 cm、P4：30×63 cmである。

床面 勾配約7度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大60 cm掘り込んで床面を構築する。床面の大半が47号住居により掘り下げられているために、詳細は不明。

埋没土 47号住居との重複により判然としないが、1～4層のロームブロックを多量に含む黒褐色土が厚

さ25～50 cmに堆積しており、人為的な埋没状況を示す可能性が高い。

遺物 僅少なながら総数64点の遺物（土器52、石器12）が存在するが、床面に密着したもの（1・21）は少なく、その大半が埋没土上位の1・2層を中心に周壁際から出土している。土器は小破片のみであり、諸磯b式の平行沈線文31点（1・2・4～8・19）・形骸化した浮線文6点（3・9～13）・構成不明7点（14～18）の他に、稲荷台式1点、諸磯c式1点、型式不明6点などがある。尚、2・4、5・8、9・13、14・16の各破片は各々同一個体である。石器には、



第86図 46号住居出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

石鏃1点(20)、削器1点(22)、磨り石類1点(24)、砥石2点(21・23)、剥片6点、礫塊1点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯b式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:17・29頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【46号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	44	1	6	52

分類別点数

諸磯b式					諸磯c式	
分類	2類	3類	4類		分類	1類
種別	f2	c	不明	a	不明	
合計	6	8	23	5	2	1

縄文原体別点数

諸磯b式		
分類	2b	18
合計	10	9

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b
A		15
B		4

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	磨石類	砥石	剥片	礫塊	
合計	1	1	1	2	6	1	12

分類別点数

石鏃		搔器・削器		磨石類		砥石	
分類	1類	分類	2類	分類	4類	分類	2類
合計	1	合計	1	形態	ab	合計	2
				合計	1		

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器		磨石類		砥石	
コード	2	コード	1	コード	4	コード	23
点数	1	点数	1	点数	1	点数	2
重量	1.4	重量	45.5	重量	903	重量	74.7

剥片

コード	1	2	7	コード	4
点数	2	2	2	点数	1
重量	未計測	未計測	未計測	重量	未計測

礫塊

礫塊の被熱状況		
分類	2	総計
合計	1	1

● 47号住居

位置 F V -123

写真 P L 42

面積 12.1 m²

方位 N 52 度 E

重複 46号住居を切っているが、南壁～東壁の一部を共有しており、規模を縮小しての建て替えと推定される。北壁を時期不明の430号土坑により切られている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つやや歪んだ隅丸正方形を呈し、規模は長辺4.20 m×短辺3.80 m、深さ14～70 cmである。壁面は約80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺は湾曲気味に走行している。

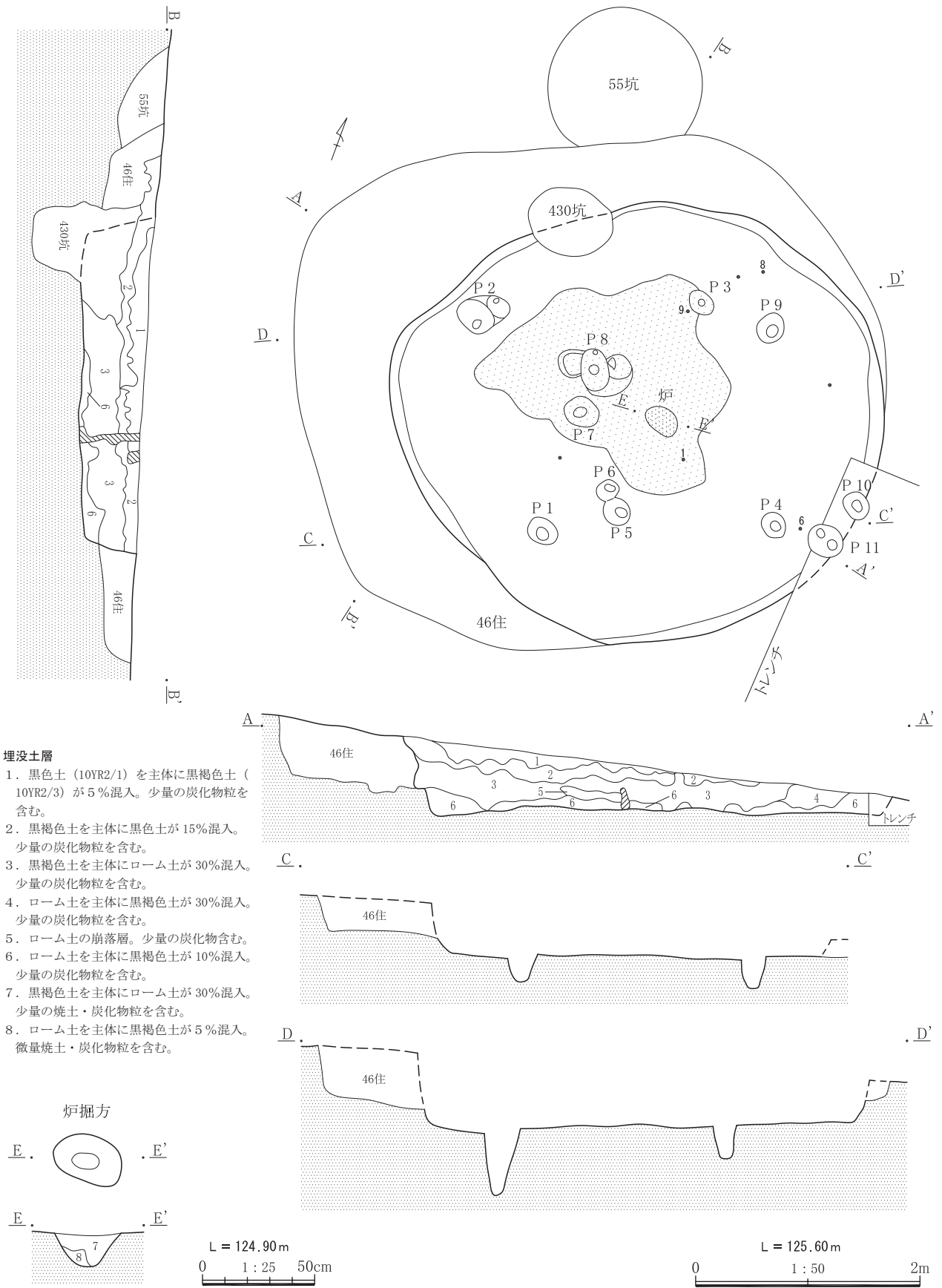
炉 床面のほぼ中央部に、1基が確認された。楕円形状の掘り込み炉であり、長径32×短径21×深さ15 cmの規模を有する。掘り込みの肩部を中心にして、被熱による若干の赤化が認められるが、底面には認められない。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、11本が確認されている。P1～P4あるいはP5－P8－P9－P4の4本主柱構造と考えられ、各柱穴の重複状況から、複数回の建て替えが存在すると推定される。主な柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:1.95 m、P2～P3:2.0 m、P3～P4:2.1 m、P4～P1:2.1 m、P5～P8:1.4 m、P8～P9:1.8 m、P9～P4:1.75 m、P4～P5:1.35 mを測る。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:29×23 cm、P2:30×58 cm、P3:24×30 cm、P4:25×29 cm、P5:25×31 cm、P6:20×49 cm、P7:31×58 cm、P8:26×60 cm、P9:25×28 cm、P10:26×26 cm、P11:31×35 cmである。

床面 勾配約7度の斜面地のローム層(VI・VII層)を最大70 cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持つが、傾斜の少ない平坦な床面であり、炉の周辺を中心にして踏み固めによる硬化面が認められる。

埋没土 厚さ20～70 cmの1～6層がレンズ状堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 僅かに総数17点の遺物(土器8、石器9)が存在し、床面に密着したもの(8・9)は少ないが、比較的床面に近接して出土したものが多い。土器は、諸磯b式の平行沈線文4点(1・3)、形骸化した浮線文1点(2)、構成不明2点(4・6)の他に、諸磯c式の集合沈線文1点(5)などがある。石器には、削器2点(7・8)、砥石1点(9)、剥片4点、礫塊2点が組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、黒曜石の削器(7)1点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2(星ヶ



第87図 47号住居

II 今井三騎堂遺跡の調査

塔) という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 b 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 17・29 頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【47号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯b	諸磯c	総計
合計	7	1	8

分類別点数

諸磯b式				諸磯c式	
分類	2類	3類	4類	種別	3c類
種別	f2	c	不明	a	
合計	1	2	2	2	1

縄文原体別点数

諸磯b式			諸磯c式		
分類	2a	2b	18	分類	18
合計	1	1	3	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b	諸磯c
A		4	1
B		1	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	削器類	砥石	剥片	礫塊	
合計	2	1	4	2	9

分類別点数

搔器・削器		砥石	
分類	2類	分類	1類
合計	2	合計	1

石材別の点数と重量

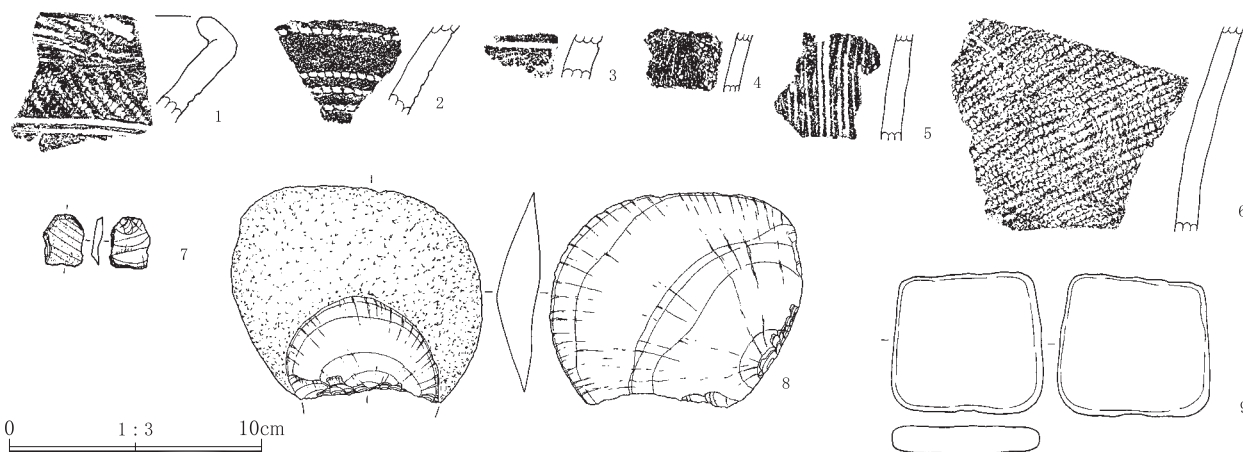
搔器・削器			砥石		剥片		礫塊	
コード	1	12	コード	23	コード	1	コード	4
点数	1	1	点数	1	点数	4	点数	2
重量	161	1.4	重量	57.8	重量	未計測	重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	1	2

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1



第 88 図 47 号住居出土遺物

● 48 号住居

位置 F J -122

写真 P L 44 ~ 45

面積 28.43 m²

方位 N 70 度 E

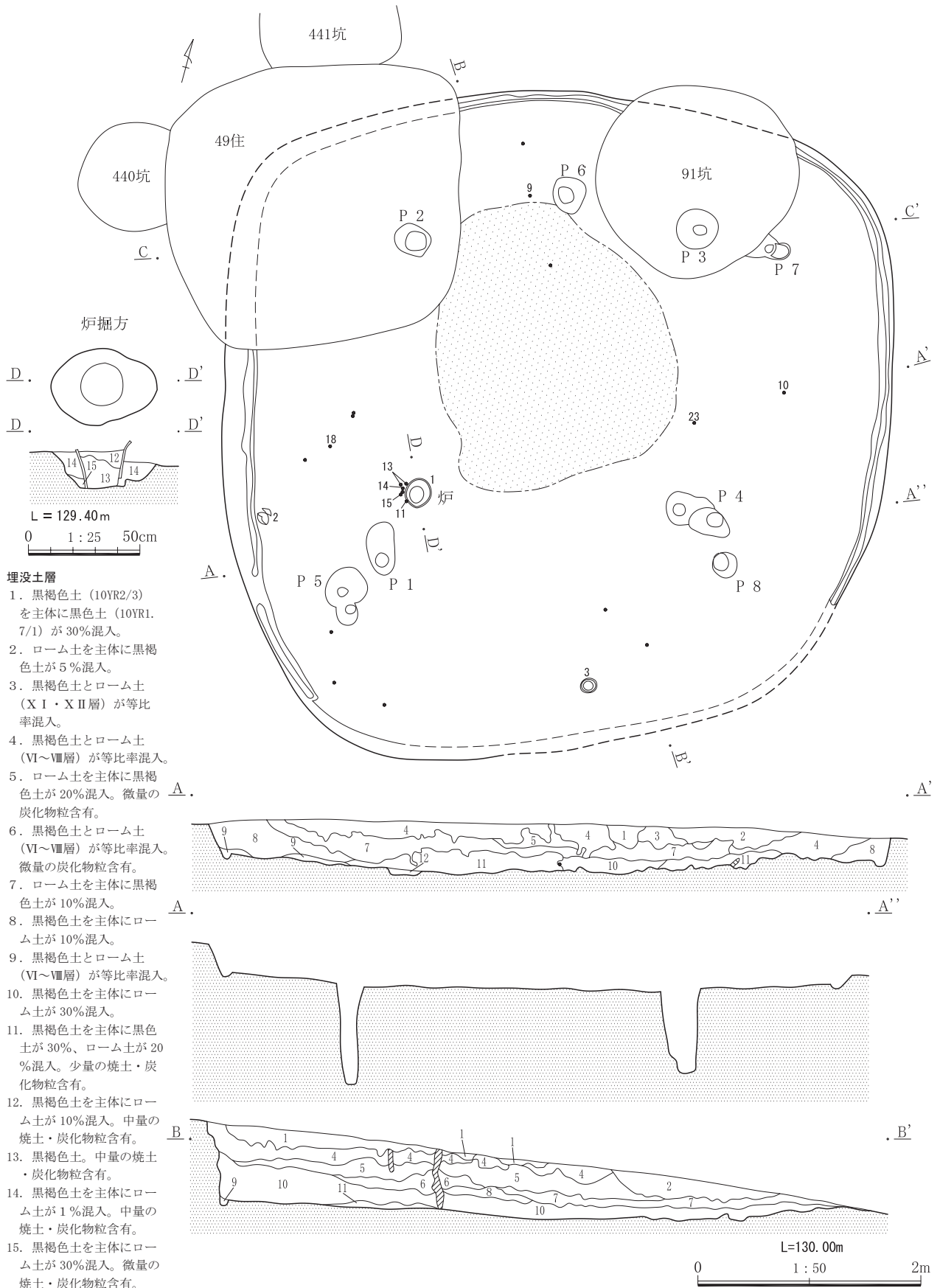
重複 北西隅で 49 号住居と、北東隅で 91 号土坑と重複し、さらに中央部では 50 号住居と重複するが、新旧関係は 50 住居 → 当住居 → 91 坑・49 住居の順で新しい。また、当住居は 50 号住居を拡張する形で構築された可能性が高い。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 6.00 m ×

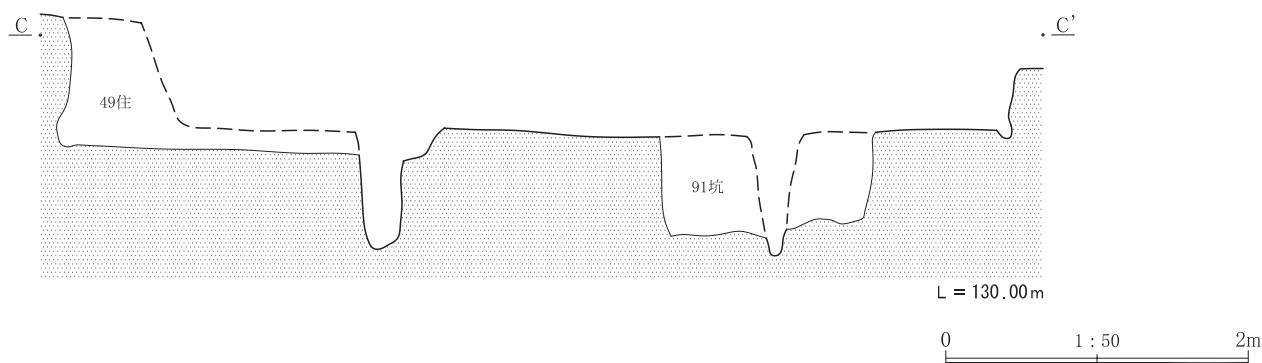
短辺 5.94 m、深さ 1 ~ 70 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面中央部からやや西壁寄りに、土器埋設炉 1 基が確認された。口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器 (1) を正位に埋設し、その掘方は長径 50 cm × 短径 34 cm × 深さ 16 cm を測る。土器内の埋設土には若干の炭化物・焼土粒が存在し、土器にも被熱風化が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、8 本が確認され



第 89 図 48 号住居 (1)



第90図 48号住居(2)

ているが、P1～P4あるいはP2－P3－P8－P5の4本を主柱として、住居外形とほぼシンメトリーに配置する構造と考えられる。P4はP8と、P1はP5と各々近接関係にあり、いずれか片方が建て替え等により再敷設された主柱と想定される。また、P4やP5にも少なくとも1回の堀直しが認められ、複数回の建て替えの存在を窺うことができる。各主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：2.85 m、P2～P3：2.55 m、P3～P4：2.60 m、P4～P1：3.00 m、P2～P5：3.20 m、P5～P8：3.40 m、P8～P3：3.00 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：25×92 cm、P2：32×80 cm、P3：約35×85 cm、P4：26×82 cm、P5：36×53 cm、P6：32×42 cm、P7：約25×61 cm、P8：23×63 cmである。

周溝 49号住居や91号土坑との重複部分や斜面下位部分が欠落するが、基本的に周壁際を全周していたと考えられる。底面幅5～10 cm、深さ5 cm前後の規模である。

床面 勾配約9度の斜面地のローム層（VI～IX層）を最大70 cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、周壁際に比べて中央部が15 cmほどの窪地状を呈するが、傾斜の少ない平坦な床面である。また、炉の周辺や主柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 厚さ70 cmの1～11層が、下層を中心にレンズ状に堆積する。下位の8～11層にかけては、基本的に斜面上位方向からの自然埋没状況を示すと考えられるが、上・中位の1～7層にかけては、ローム土を

多量に含んだ埋没土が互層堆積し、人為的に埋填された可能性もある。

遺物 総数74点の遺物（土器34、石器40）が存在するが、床面に密着したものは少なく（2・3・10・13）、その大半は埋没土上・中位の1～7層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯b式の浮線文7点（1・4・5）、形骸化した浮線文2点（9・10）、横位の平行沈線文15点（2・6～8）、構成不明10点（11～14）の他に、型式不明9点などがある。尚、6・7、11・13・14の各破片は、各々同一個体である。石器には石鏃2点（15）、削器4点（17・19～21）、打製石斧3点（16・18）、磨り石類3点（22・23）、砥石1点、剥片21点、礫塊5点などが組成する。また、黒曜石の剥片8点の内の2点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系1（東餅屋・西餅屋）という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯b式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：17・29頁）



第 91 图 48 号住居出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【48号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯b	時期不明	総計
合計	25	9	34

分類別点数

諸磯b式

分類	2類				3類		4類	
種別	c2	f1	f2	不明	c	不明	a	不明
合計	1	2	2	1	4	5	5	5

縄文原体別点数

諸磯b式

分類	2b	3b	17	18
合計	9	1	2	3

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b
A		15

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	砥石	多孔石
合計	2	4	3	2	1	1

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
21	1	4	39

分類別点数

石鏃

分類	3類	9類
合計	1	1

搔器・削器

分類	1類
合計	4

打製石斧

分類	2類	3類	8類
合計	1	1	1

磨石類

分類	4類	5類
形態	abc	a
合計	1	1

砥石

分類	1類
合計	1

多孔石

分類	5類
形態	不明
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃

コート	2
点数	2(1)
重量	(1.2)

搔器・削器

コート	1	3
点数	3	1
重量	140	132

打製石斧

コート	1	3
点数	2(1)	1
重量	(26.5)	134

磨石類

コート	4
点数	2(1)
重量	(552)

砥石

コート	9
点数	1
重量	未計測

多孔石

コート	4
点数	1
重量	786

()内は総点数の中で重量と計測したものの点数及び重量

剥片

コート	1	2	12	不明
点数	11	2	7	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コート	4	9
点数	3	1
重量	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	3	1	4

被熱礫の石材別点数

コート	4
点数	3

● 49号住居

位置 F I -122

写真 P L 44 ~ 45

面積 5.28 m²

方位 N 69 度 E

重複 南東側約 2/3 で諸磯 b 式期の 48 号・50 号住居と、また北辺や東辺で時期不明の 441 号・440 号土坑

と重複する。土坑との新旧関係は不明だが、両住居を掘り込んで構築されている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 2.64 m × 短辺 2.50 m、深さ 82 ~ 102 cm である。四辺の壁面は垂直に近い角度で掘り込まれ、東辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面のほぼ中央部に、1 基が確認された。長径 28 × 短径 24 × 深さ 6 cm の規模を有する、深度の浅い楕円形状の掘り込み炉と認定したが、地床炉の可能性もある。底面や壁面は、被熱の痕跡に乏しく、むしろ肩部から周縁部に被熱による僅かな赤化が認められる。

柱穴 精査にもかかわらず、確認することができなかったことから、明瞭な掘り込みを持つ柱穴は敷設されなかったと考えられる。

床面 勾配約 9 度の斜面地のローム層 (VI ~ XII 層) を最大 102 cm 掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であるが、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ 1 m 前後の 1 ~ 12 層がレンズ状に堆積し、基本的に斜面上位方向からの自然埋没状況を示すと考えられるが、上・中位の 1 ~ 6 層にかけては、ローム土を多量に含んだ埋没土が互層堆積し、人為的に埋填された可能性もある。

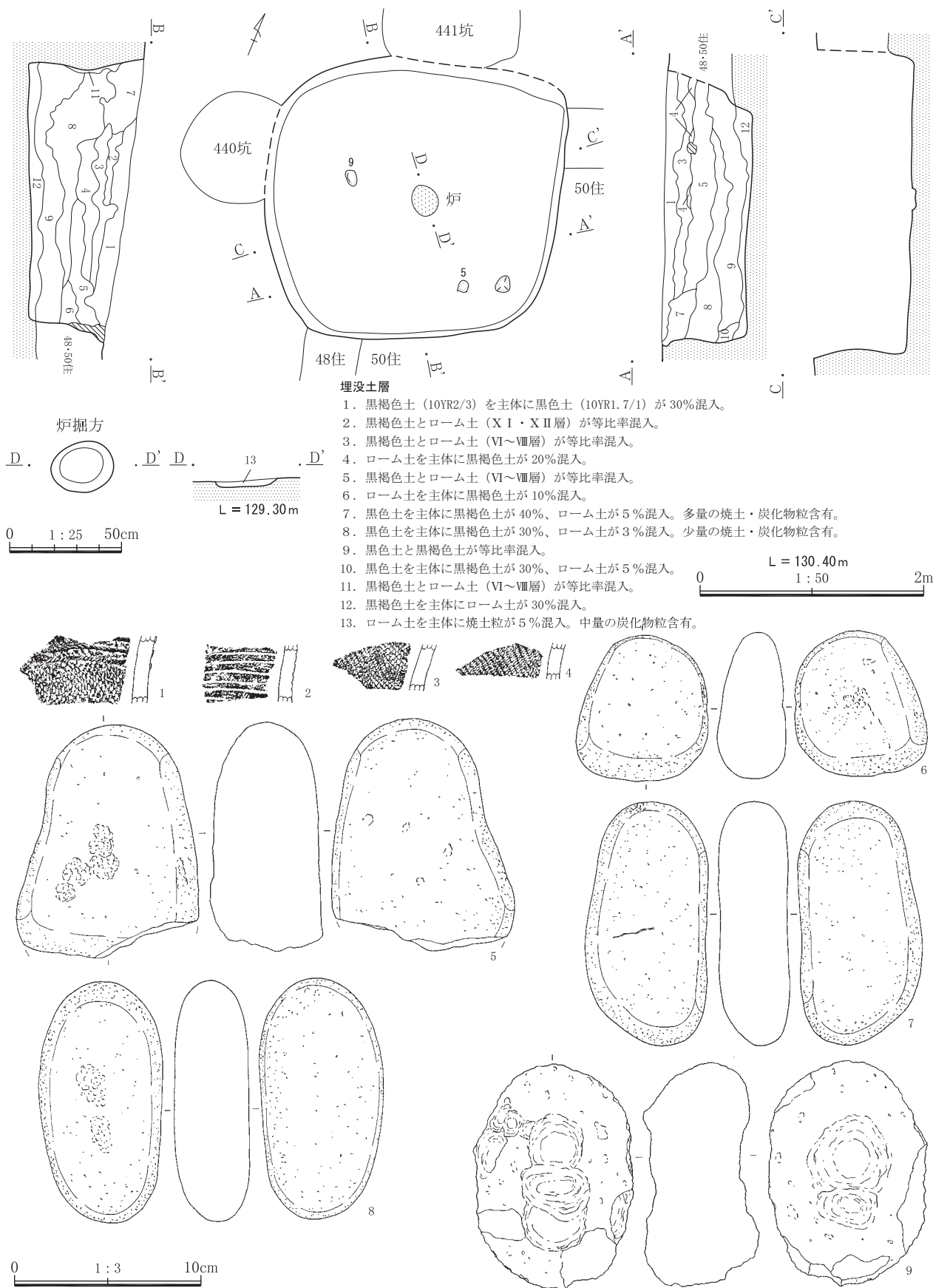
斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 11 点の遺物 (土器 5、石器 6) が存在するが、床面に密着したものは少なく (5)、その大半は埋没土上・中位層を中心に床面から浮いた状態で出土した。浮線文 1 点 (1)、平行沈線文 2 点 (2)、構成不明 2 点 (3・4) などの土器片と、磨り石類 5 点 (5 ~ 9)、剥片 1 点、礫塊 2 点の石器が存在するのみであり、内容・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 b 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 17・29 頁)

その他 周溝は検出されなかった。



第92図 49号住居と出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

【49号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯b	総計
合計	5	5

縄文原体別点数

分類	2b	18
合計	3	1

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他		総計
器種	磨石類	剥片	礫塊	
合計	5	1	2	8

石材別の点数と重量

磨石類

コード	4	20
点数	3	2
重量	1861	1067

剥片

コード	2
点数	1
重量	未計測

礫塊

コード	4
点数	2
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	1	2

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1

分類別点数 諸磯b式

分類	2類	3類	4類	
種別	f1	a2	不明	a
合計	1	1	1	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b
A		4

分類別点数 磨石類

分類	2類	4類	
形態	ac	b	ac
合計	2	1	2

● 50号住居

位置 F J -122

写真 P L 44 ~ 45

面積 19.18 m²

方位 N 70 度 E

重複 48号・49号住居や91号土坑と重複するが、時間的には当住居が最も古い。また、48号住居は当住居が拡張・建て替えされた可能性が高い。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ正方形に近似した隅丸長方形を呈し、規模は長辺5.12m×短辺4.80m、深さ約80cmである。四辺の壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面中央部から東壁寄りに、1基が確認された。地床炉に近似した不整形円形の掘り込み炉であり、直径30cm×深さ10cmの規模を有する。内部には焼土ブロックの堆積が認められ、かなりの使用状況を窺わせる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、23本もの多数本が確認されているが、P1～P4の4本を主柱とする構造と考えられる。P1・P3・P4は、各々P5・P6・P7と重複関係にあり、少なくとも複数回に及ぶ建て替え時の主柱の再敷設に伴って、柱穴の穿鑿が繰り返

されたことを示している。P8～P23については、補助的な支柱穴と推定されるが、当住居と重複関係にある48号住居に付属する支柱穴が混在している可能性もある。各支柱穴の芯心間の距離は、P1～P2:2.10m、P2～P3:2.10m、P3～P4:2.05m、P4～P1:2.20mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:38×76cm、P2:49×62cm、P3:39×86cm、P4:48×37cm、P5:32×31cm、P6:45×33cm、P7:30×36cm、P8:20×47cm、P9:22×35cm、P10:20×47cm、P11:18×50cm、P12:18×46cm、P13:20×34cm、P14:17×36cm、P15:20×29cm、P16:22×8cm、P17:32×55cm、P18:18×37cm、P19:20×31cm、P20:19×41cm、P21:25×30cm、P22:27×73cm、P23:19×35cmである。

床面 勾配約9度の斜面地のローム層(VI～IX層)を最大80cm掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺や主柱の内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

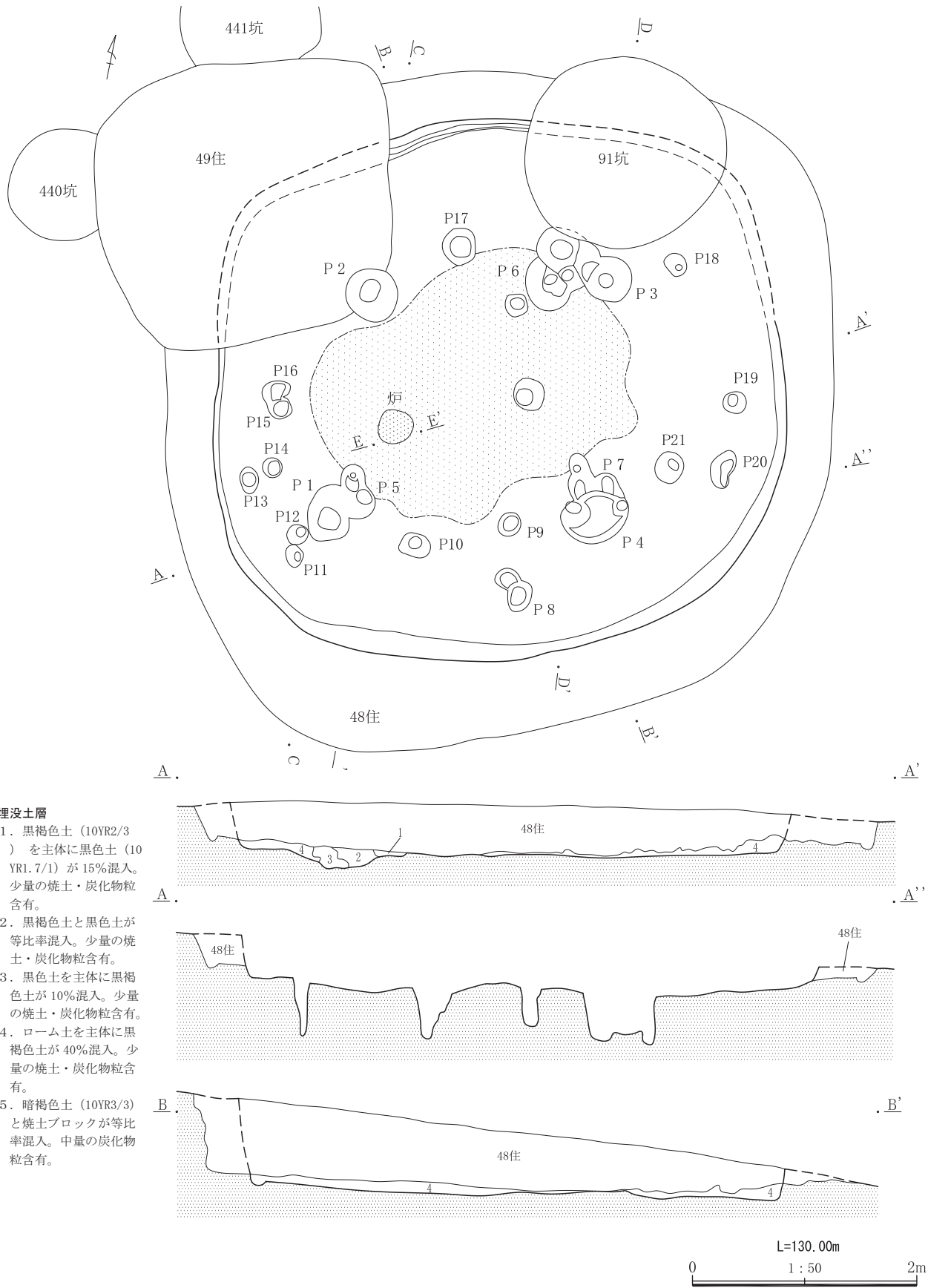
埋没土 48号住居との重複により、残存する埋没土は厚さ10～20cmの1～4層のみであり、全体的な埋没状況を窺うことは困難である。

遺物 総数26点の遺物(土器14、石器12)が存在するのみであるが、床面に密着したものはなく、その全てが床面から5cm以上浮いた状態で出土した。土器は、浮線文8点(1～3)、形骸化した浮線文1点(4)、平行沈線文3点、型式不明2点などがある。石器には石鏃1点(5)、石匙1点(6)、磨り石類1点(7)、剥片7点、礫塊2点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、黒曜石の剥片1点についてX線回折試験による産地同定を行い、和田峠系1(東餅屋・西餅屋)という結果を得た。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯b式新段階を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

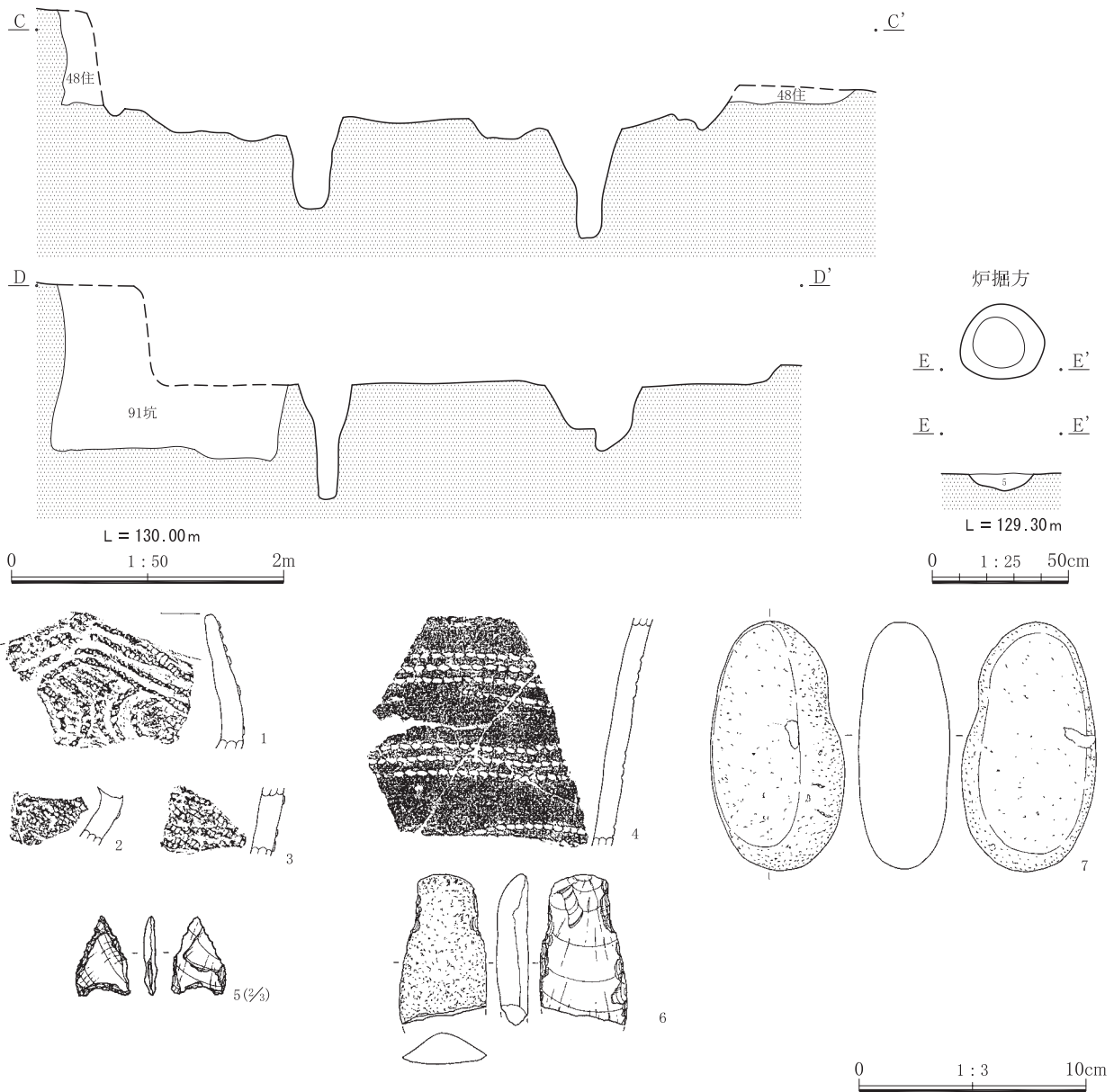
(観察表:17・29頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。



第93図 50号住居(1)

II 今井三騎堂遺跡の調査



第94図 50号住居(2)

【50号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯b	時期不明	総計
合計	12	2	14

縄文原体別点数

諸磯b式		
分類	2b	18
合計	3	1

胎土別点数

胎土	型式	
	諸磯b	
A	4	

分類別点数
諸磯b式

分類	2類		3類	
	種別	a2	f2	不明
合計	3	1	5	3

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他		総計
器種	石鏃	石匙	磨石類	剥片	
合計	1	1	1	7	12

分類別点数

石鏃

分類	2類
合計	1

石匙

分類	1類
合計	1

磨石類

分類	2類
形態	a
合計	1

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	2	2

石材別の点数と重量

石鏃

コード	2
点数	1
重量	0.5

石匙

コード	1
点数	1
重量	44

磨石類

コード	4
点数	1
重量	326

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	2

剥片

コード	1	2	12
点数	4	2	1
重量	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	2
重量	未計測

● 51号住居

位置 FV-158

写真 PL 43

面積 14.95 m²

方位 N 71 度W

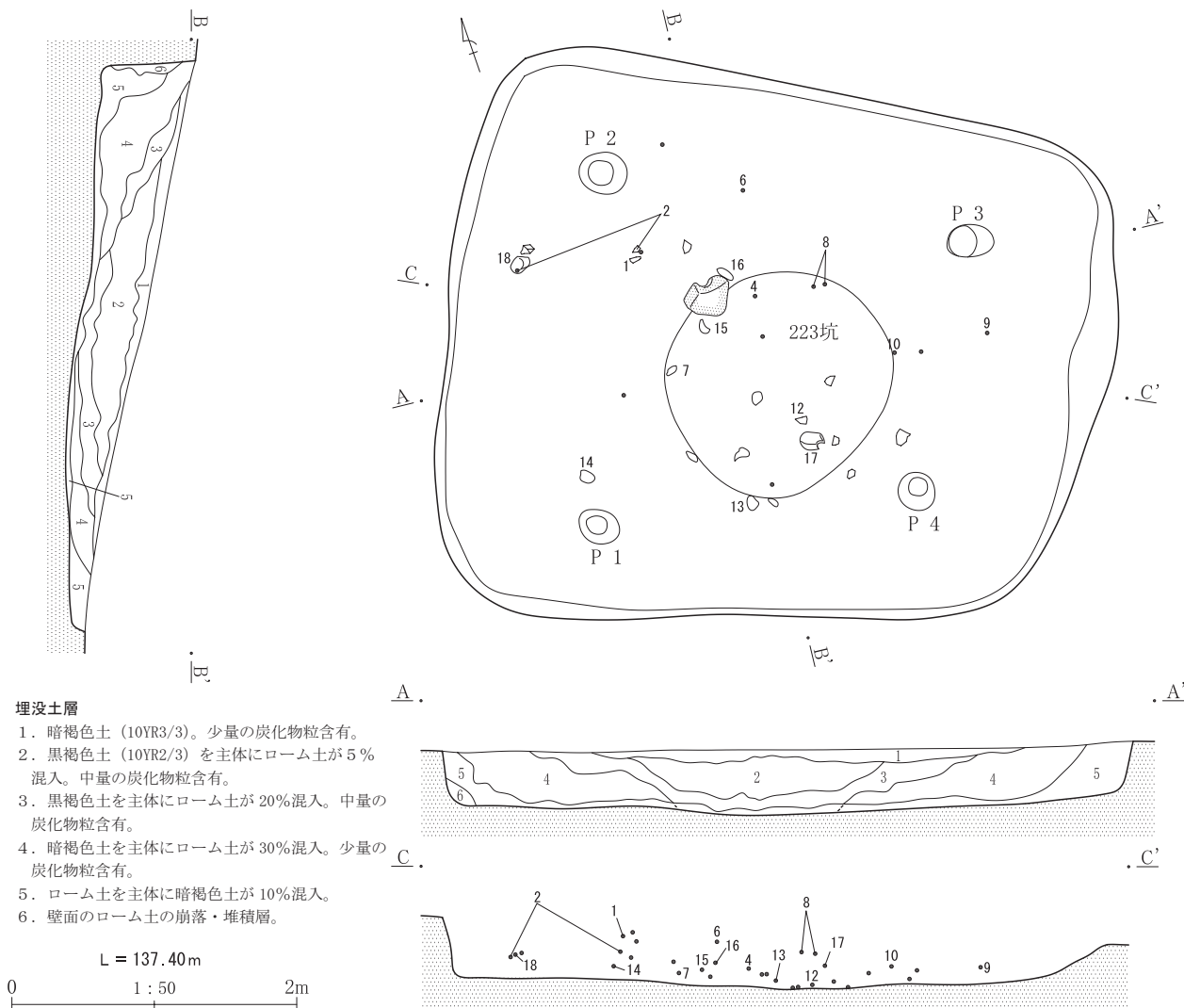
重複 床面のほぼ中央部で時期不明の223号土坑と重複するが、埋没土の状況からその新旧関係を明確に把握することはできなかった。ただし、炉が未検出であることを考慮すれば、223号土坑が当住居を切って掘り込まれている可能性が高い。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸台形状を呈し、規模は長辺4.58 m×短辺4.00 mと3.42 m、深さ6～66 cmである。四辺の壁面は垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 223号土坑との重複もあり、検出されなかった。

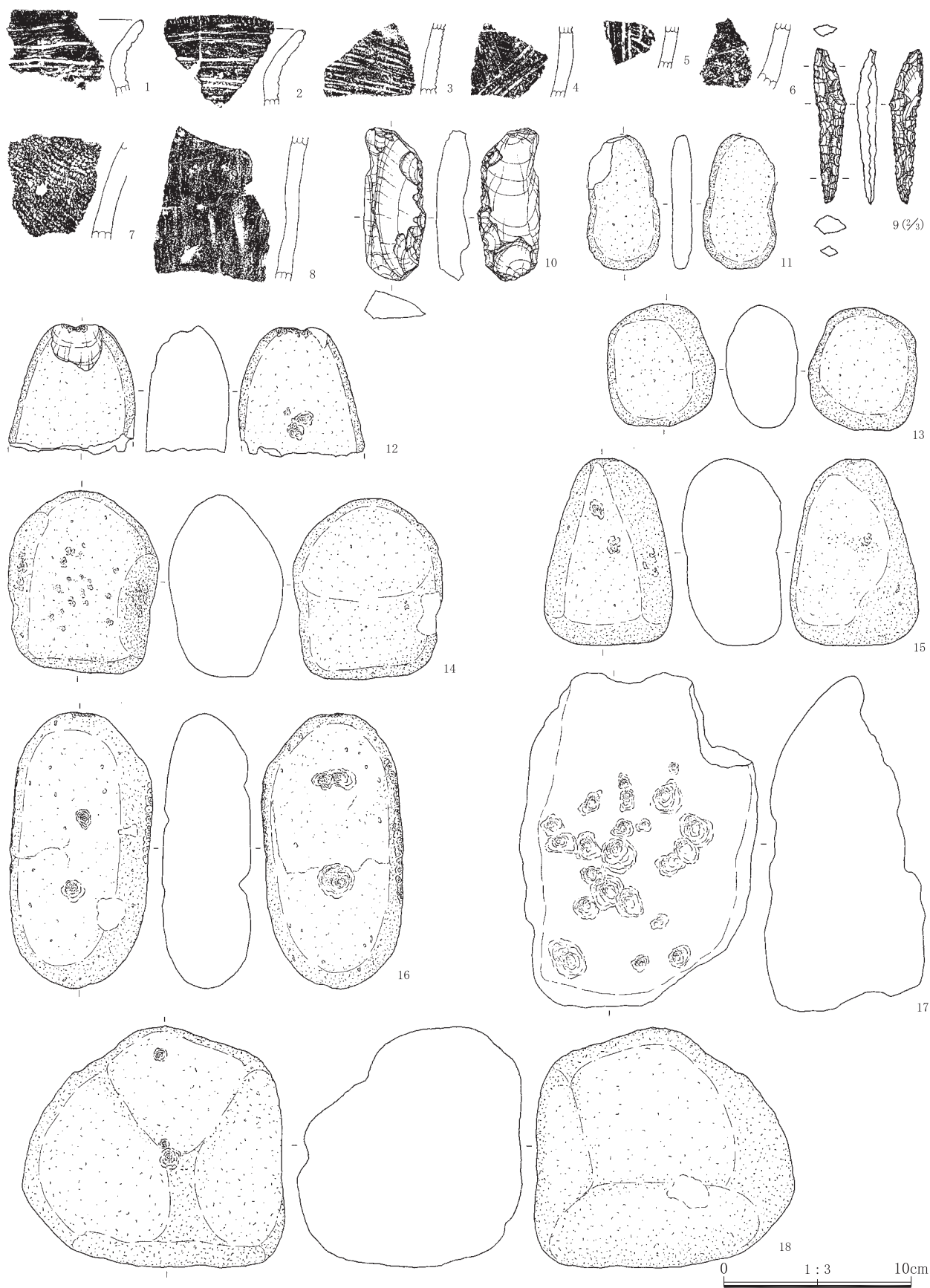
柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されている。P1～P4を連結した形状は、住居外形とほぼシメトリーであり、4本支柱構造と考えられる。各支柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：2.45 m、P2～P3：2.60 m、P3～P4：1.75 m、P4～P1：2.30 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：25×37 cm、P2：30×55 cm、P3：22×21 cm、P4：27×32 cmである。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層（VI～VIII層）を最大66 cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、自然地形と同様に約20 cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。また、支柱で囲繞さ



第95図 51号住居

II 今井三騎堂遺跡の調査



第96図 51号住居出土遺物

2. 竪穴住居

れた内側を中心にして、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ約 60 cm の 1～6 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。尚、223 号土坑との切り合い関係を考慮すれば、4～6 層が堆積した後に同土坑が掘り込まれ、その廃絶後に 1～3 層が堆積した可能性が高い。

遺物 総数 59 点の遺物（土器 16、石器 43）が存在するが、床面に密着したものは少なく（9・12・13・15～18）、その大半は埋没土上・中位の 1～4 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の平行沈線文 6 点（1～5）、縄文 1 点（7）、無文 3 点（6・8）の他に、稲荷台式 1 点、型式不明 5 点がある。石器には、石錐 1 点（9）、削器 1 点（10）、磨り石類 6 点（12～16）、多孔石 2 点（17・18）、砥石 1 点（11）、剥片 21 点、礫塊 11 点などが組成する。また、黒曜石の剥片類 5 点の内の 2 点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系 2（星ヶ塔）という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 c 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：17・29 頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【51号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	10	5	16

縄文原体別点数
諸磯c式

分類	2b	18
合計	1	9

分類別点数

諸磯c式

分類	3類		4類	
種別	c	不明	c	d
合計	5	1	1	3

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c
A		9
D		1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		複合技術系列	その他		総計
器種	石錐	削器類	磨石類	砥石	多孔石	剥片	礫塊	
合計	1	1	6	1	2	21	11	43

分類別点数

石錐

分類	2類
合計	1

搔器・削器

分類	2類
合計	1

砥石

分類	1類
合計	1

磨石類

分類	2類			4類	5類
形態	a	abc	ac	ac	a
合計	1	1	1	2	1

多孔石

分類	4類	
形態	ab	b
合計	1	1

石材別の点数と重量

石錐

コード	2
点数	1
重量	1.5

搔器・削器

コード	7
点数	1
重量	60

磨石類

コード	4
点数	6 (5)
重量	(2183)

砥石

コード	23
点数	1
重量	39.3

多孔石

コード	4
点数	2
重量	3916

剥片

コード	1	7	12
点数	13	2	6
重量	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	11
重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	2	9	11

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	2

● 52号住居

位置 GQ-149

写真 PL 46

面積 約 24 m²

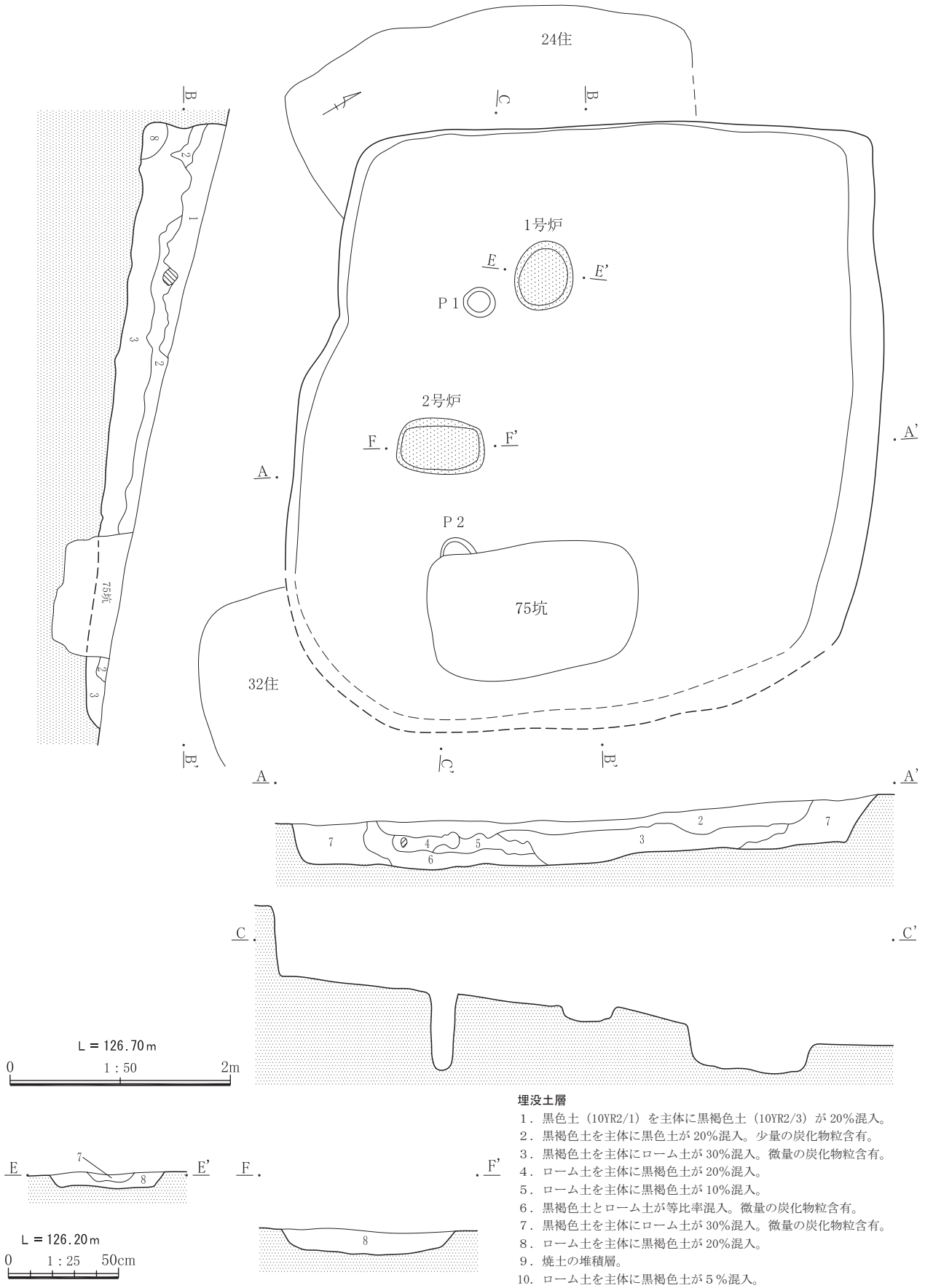
方位 N 58 度W

重複 北東隅で稲荷台式期の 24 号住居を、南西隅で諸磯 a 式期の 32 号住居を各々切って構築されているが、東側では諸磯 c 式期の 75 号土坑により切られている。

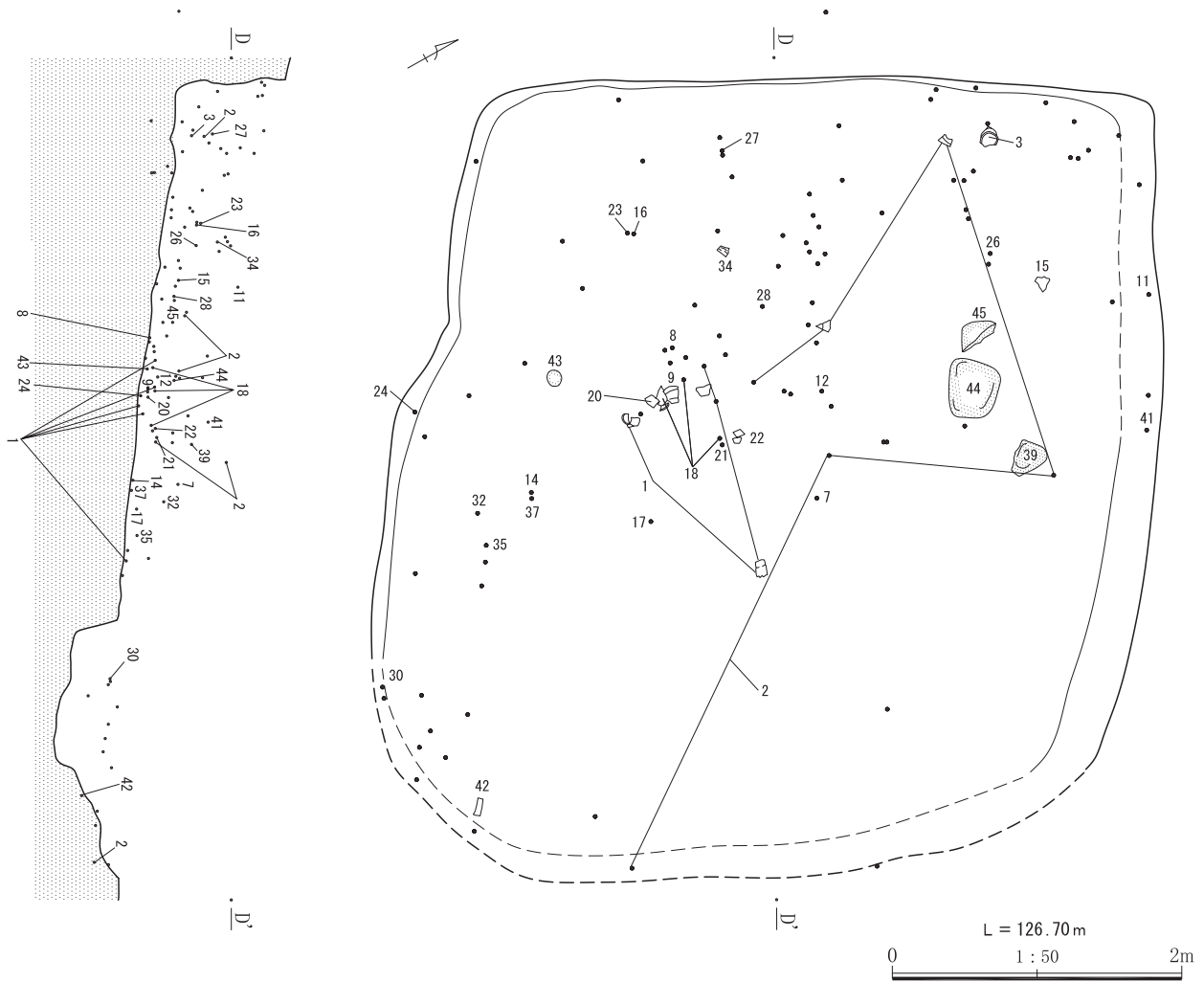
形状 24・32 号住居との重複により不確実ではあるが、斜面地の等高線方向にほぼ平行して、東西に長軸を持つ隅丸長方形の平面形を持つと推定される。規模は長辺約 5.5 m × 短辺 4.73 m、深さ 7～77 cm である。四辺の壁面は約 60～85 度の角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部から東壁寄りと南壁寄りに、各 1 基が確認された。いずれも深度の浅い楕円形状の掘り込み炉と推定され、その規模は 1 号が長径 63 × 短径 53 × 深さ 6 cm、2 号が長径 78 × 短径 50 × 深さ 10 cm である。焼土の堆積は、両炉ともに上位面を中心に僅かに認められる程度であり、地床炉の可能性もある。尚、各炉の時間的な先後関係は不明。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、2 本が確認されたのみであるが、住居外形とほぼシンメトリーな配置状況から見て 4 本支柱構造と考えられ、他の 2 本が未検出と想定される。各支柱穴の芯間距離は、P1～P2:2.30 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1:28 × 64 cm、P2:30 × 21 cm である。



第97図 52号住居(1)



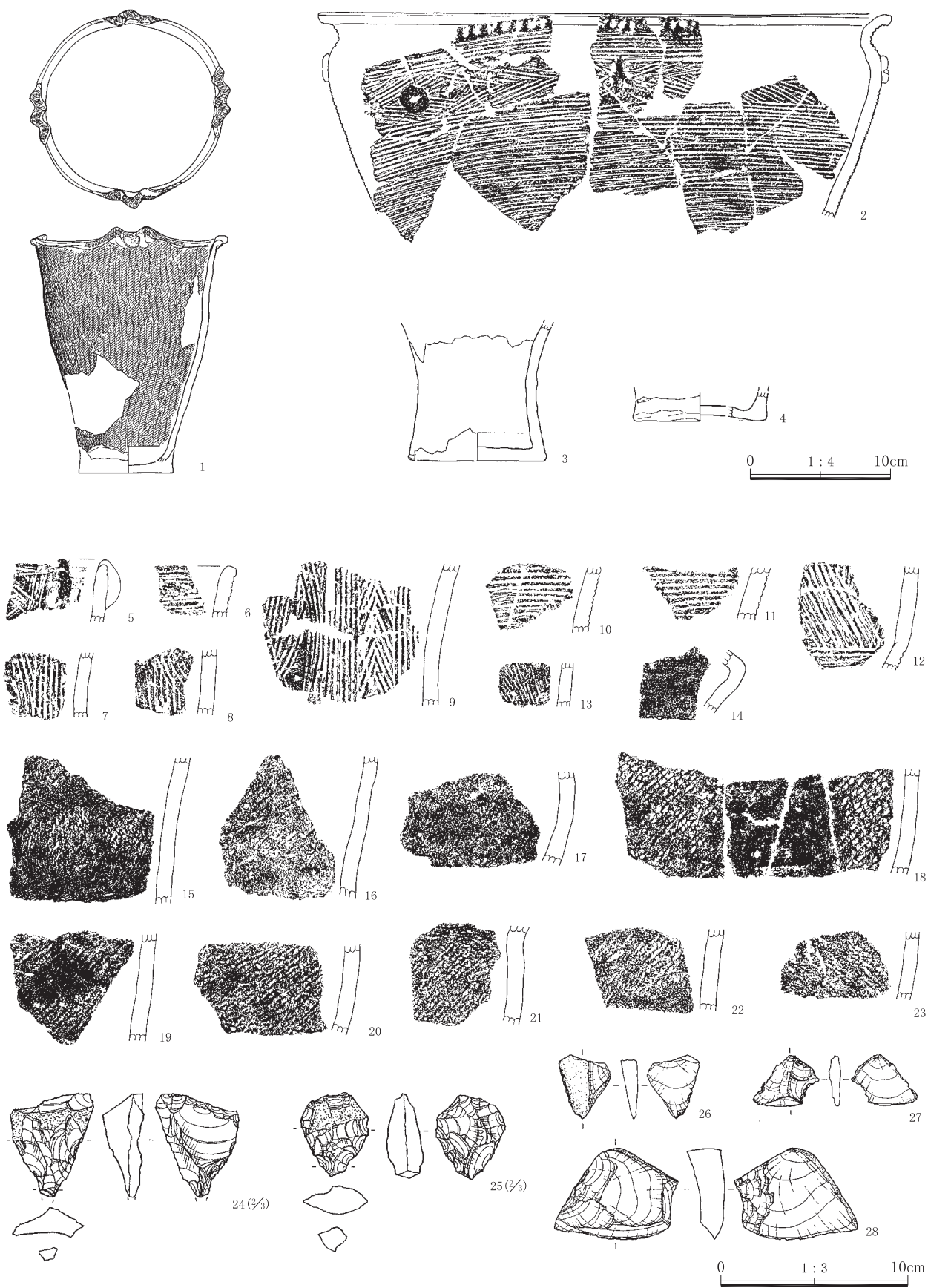
第98図 52号住居(2)

床面 勾配約11度の斜面地のローム層(VI~IX層)を最大77cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約35cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

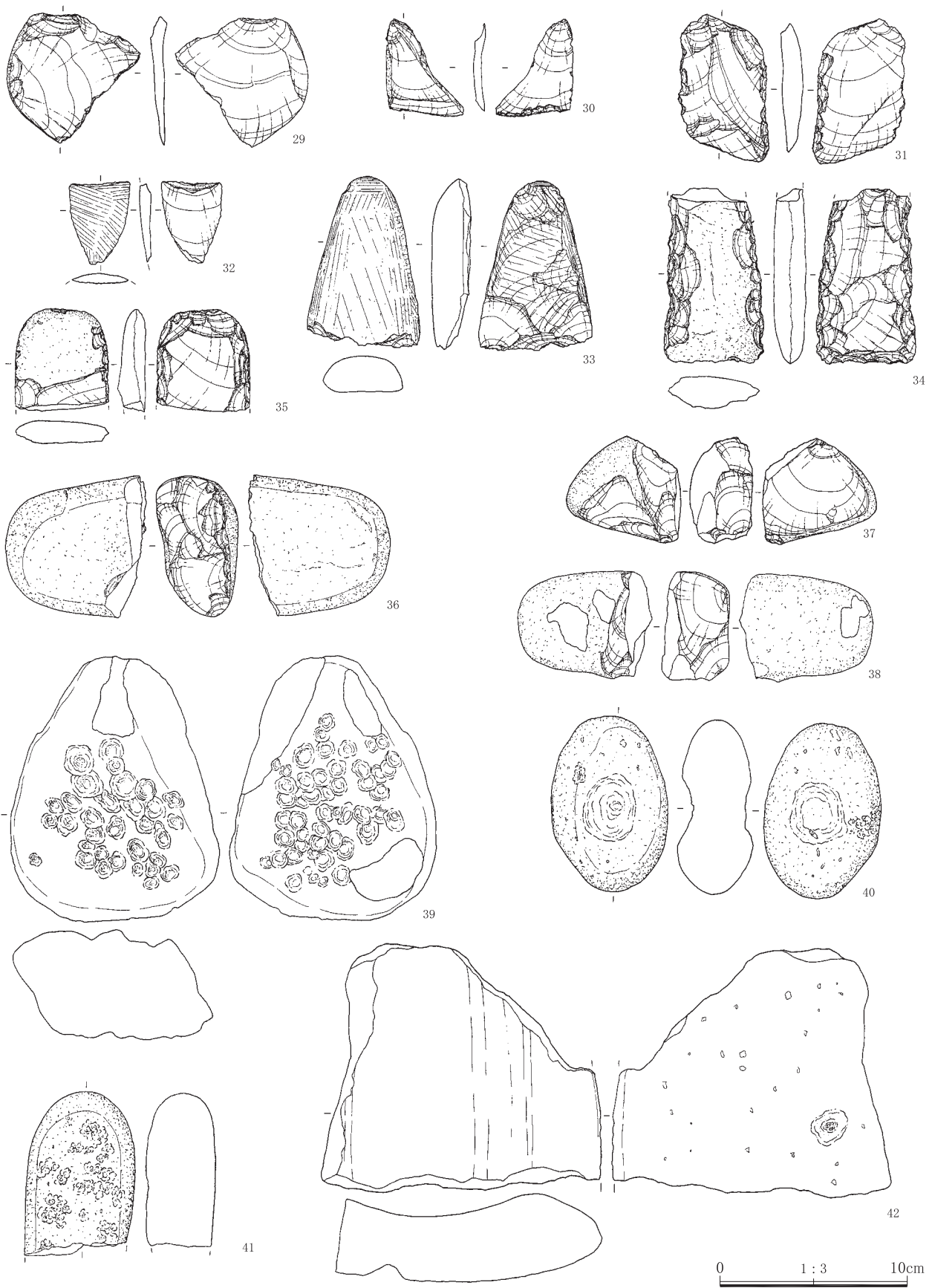
埋没土 厚さ約70cmの1~8層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数382点の多量の遺物(土器231、石器151)が存在するが、床面に密着したものは少なく(8・24・30・42)、その大半が埋没土上・中位の1~3層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、草創期後半や諸磯a式期の住居(24・32号)との重複関係もあって、稻荷台式46点(13)、早期2点、黒浜

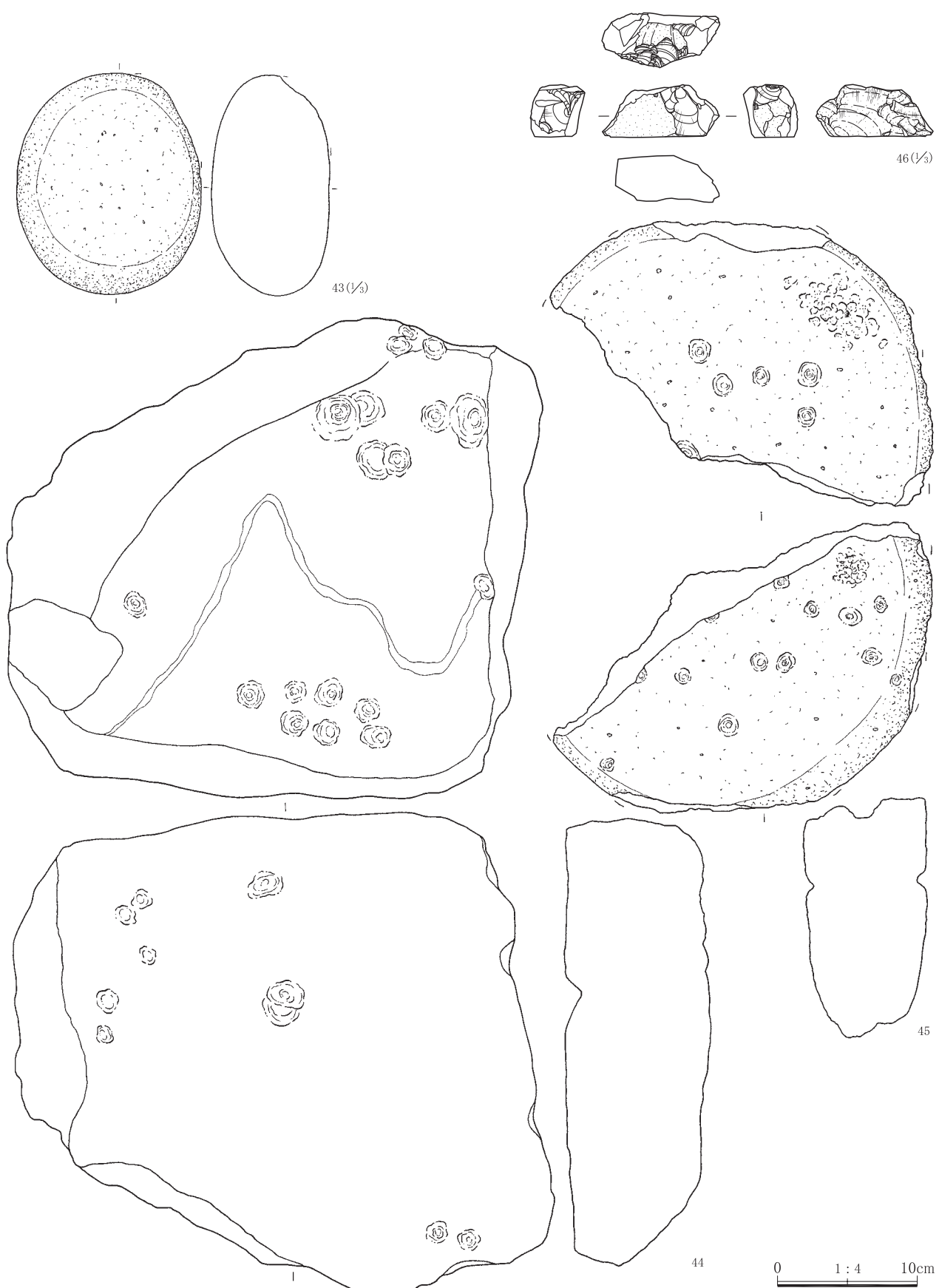
式14点、諸磯a式7点、同b式7点、大木5式系1点、型式不明7点などが混在するが、諸磯c式が主体を占める。集合沈線文+貼付文2点(2・5)、集合沈線文32点(6~12)、結節浮線文1点、縄文8点(15~23)、無文3点(3・4・14)などがある。尚、16・17・23、19~22の各破片は各々同一個体である。石器には、石錐2点(24・25)、削器21点(26~31)、打製石斧2点(34・35)、磨製石斧2点(32・33)、磨り石類6(40・41・43)、石皿2点(42・45)、多孔石2点(39・44)、石核8点(36~38・46)、剥片83点、礫塊17点などが組成する。また、黒曜石の製品(24・25・46)や剥片類12点の内4点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。



第99図 52号住居出土遺物(1)



第100图 52号住居出土遺物(2)



第101図 52号住居出土遺物(3)

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯b・c式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表：17・18・29・30頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【52号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	稻荷台	沈線	条痕	黒浜	諸磯a	諸磯b
合計	1	45	1	1	14	7	7

諸磯c	大木	時期不明	総計
77	1	77	231

分類別点数

稻荷台式

分類	3	不明
合計	1	44

黒浜式

分類	3類
合計	14

諸磯a式

分類	2類	4類
合計	2	5

諸磯b式

分類	2類	3c類	3類	4c類
合計	2	1	3	1

大木式系

分類	2
合計	1

諸磯c式

分類	1類	2類	3類			4類			
種別	b2	不明	不明	b	c	不明	c	d	不明
合計	2	2	1	1	5	26	8	3	29

縄文原形別点数

稻荷台式

分類	18
合計	1

諸磯b式

分類	2a	2b	18
合計	1	1	1

諸磯c式

分類	2a	2b	4c	18
合計	15	1	4	9

大木式系

分類	4c
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	稻荷台	諸磯b	諸磯c	大木
A		1	2	16	1
B		—	1	13	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列	
器種	石錐	削器類	打斧	磨石類	石皿	磨斧	多孔石
合計	2	21	2	6	2	2	2

その他				総計
剥片	石核	自然石	礫塊	
83	8	1	16	145

分類別点数

石錐

分類	2類	3類
合計	1	1

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	10	11

打製石斧

分類	1類	2類
合計	1	1

石皿

分類	4類	5類
合計	1	1

磨製石斧

分類	4類
合計	2

磨石類

分類	2類		3類	4類	5類
形態	a	abc	ac	a	a
合計	2	1	1	1	1

多孔石

分類	3類	4類
形態	abc	b
合計	1	1

石材別の点数と重量

石錐

コード	12
点数	2
重量	7

搔器・削器

コード	1	2	7	9	12
点数	16 (6)	1	1	2	1
重量	(168)	未計測	未計測	未計測	未計測

磨石類

コード	4	19
点数	5 (2)	1
重量	(1219)	322

打製石斧

コード	1
点数	2
重量	170

磨製石斧

コード	1	13
点数	1	1
重量	126	9.5

多孔石

コード	4	25
点数	1	1
重量	6000	15500

礫塊

コード	1	4
点数	1	15
重量	未計測	未計測

石皿

コード	4
点数	2
重量	6112

剥片

コード	1	2	9	12	33
点数	62	3	8	8	2
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

石核

コード	1	9	12
点数	5 (2)	2 (1)	1
重量	(379)	(140)	55.2

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	8	8	16

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	8

● 53号住居

位置 GB-172

写真 PL 47

面積 16.08 m²

方位 N 31 度 E

重複 南東隅で時期不明の168号土坑と重複し、不確実ではあるが土坑が当住居を切って掘り込まれている可能性が高い。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺4.67 m×短辺4.20 m、深さ12～41 cmである。四辺の壁面は約60～80度の角度で掘り込まれ、西辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面のほぼ中央部とやや南壁寄りに、各1基が確認された。1号は、口縁部と底部を欠損する深鉢土器(1)を正位に埋設し、その掘方は直径20 cm×深さ15 cmの掘り鉢状である。土器内の埋設土に焼土はほとんど存在しないが、土器およびそれに接する掘方埋設土には被熱風化や焼土が認められる。2号は、地床炉に近似した深度の浅い楕円形状の掘り込み炉で

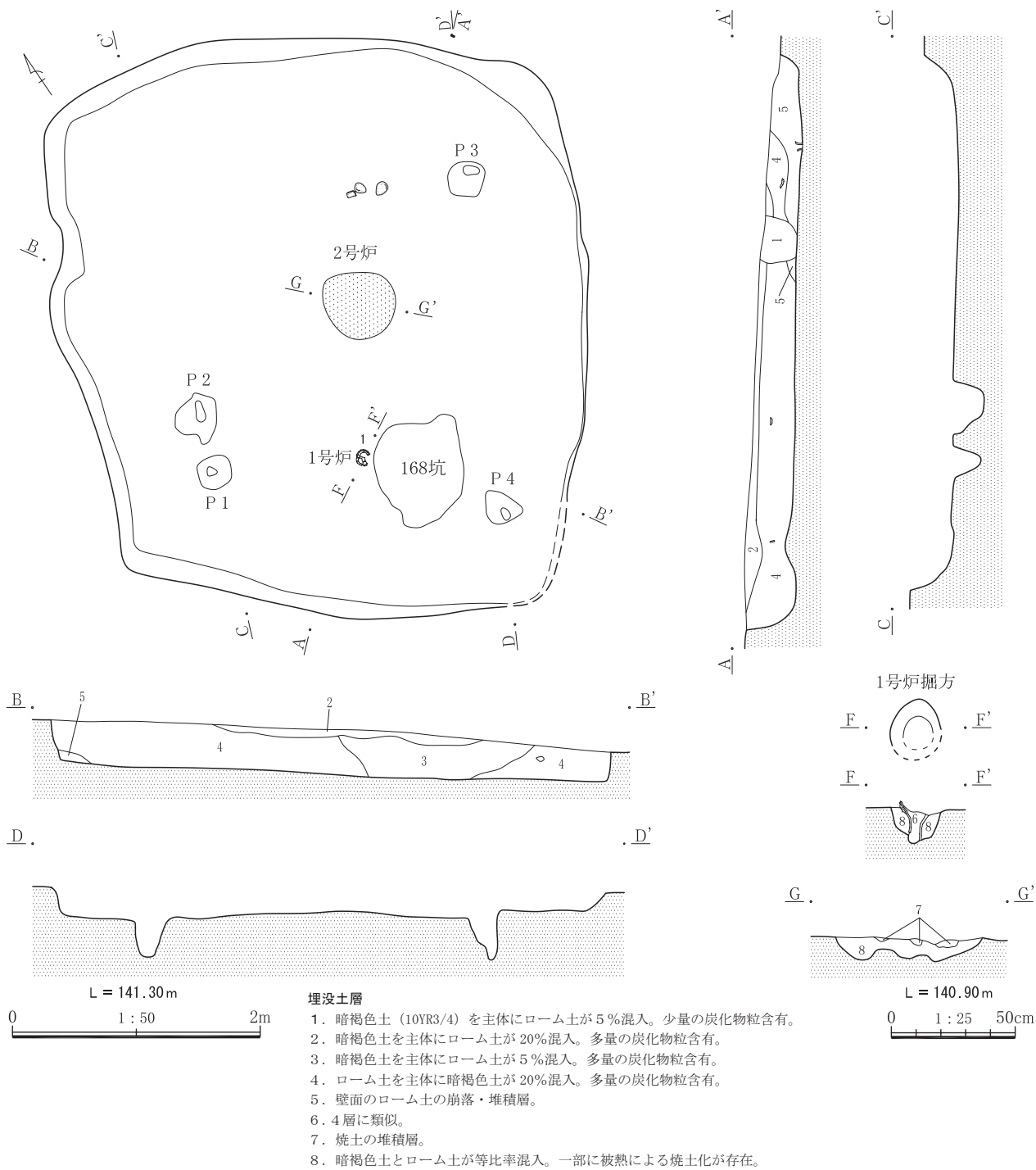
II 今井三騎堂遺跡の調査

あり、長径 62 × 短径 56 × 深さ 10 cm の規模を有する。埋没土の上位面を中心に、焼土が散在している。尚、各炉の時間的な先後関係は不明である。

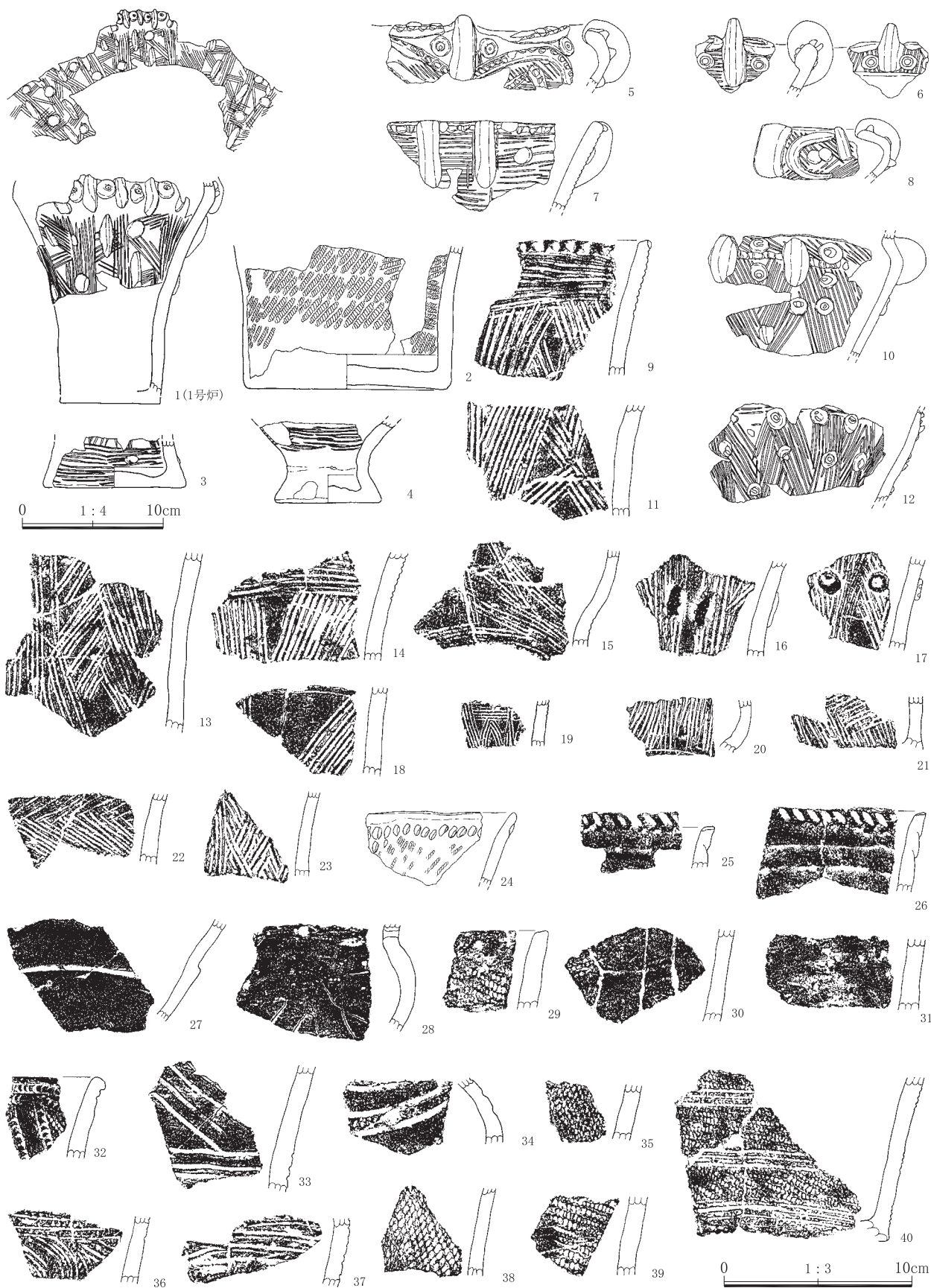
柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、4本が確認されているが、P2を除く他の3本の柱穴配置は住居外形とほぼシンメトリーであり、4本主柱構造と想定され

ることから、北西隅の1本が未検出と考えられる。各主柱穴の芯心間の距離は、P3～P4：2.80 m、P4～P1：2.40 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：27 × 23 cm、P2：32 × 25 cm、P3：30 × 40 cm、P4：32 × 32 cmである。

床面 勾配約5度の斜面地のローム層（VI・VII層）を

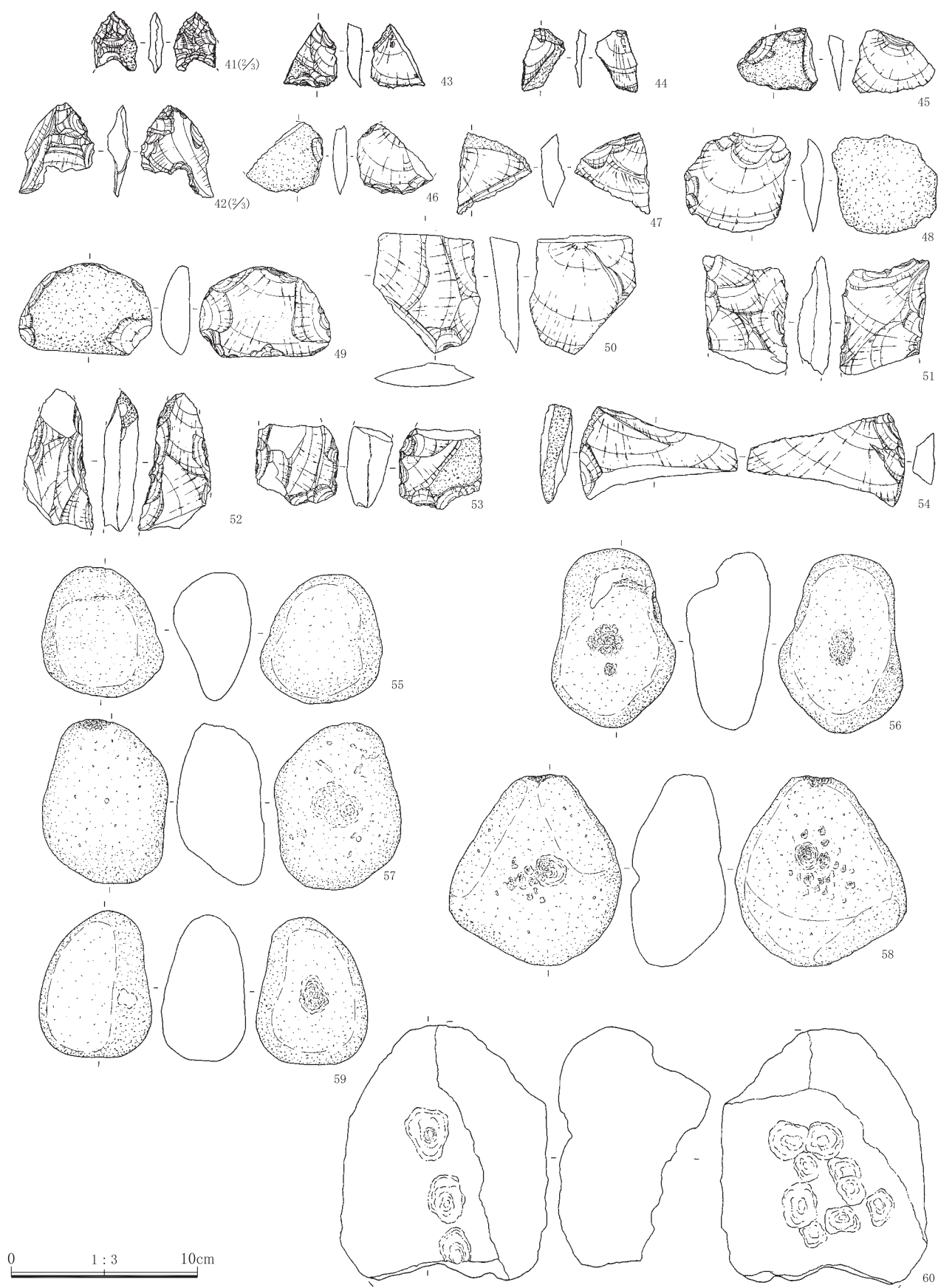


第102図 53号住居(1)

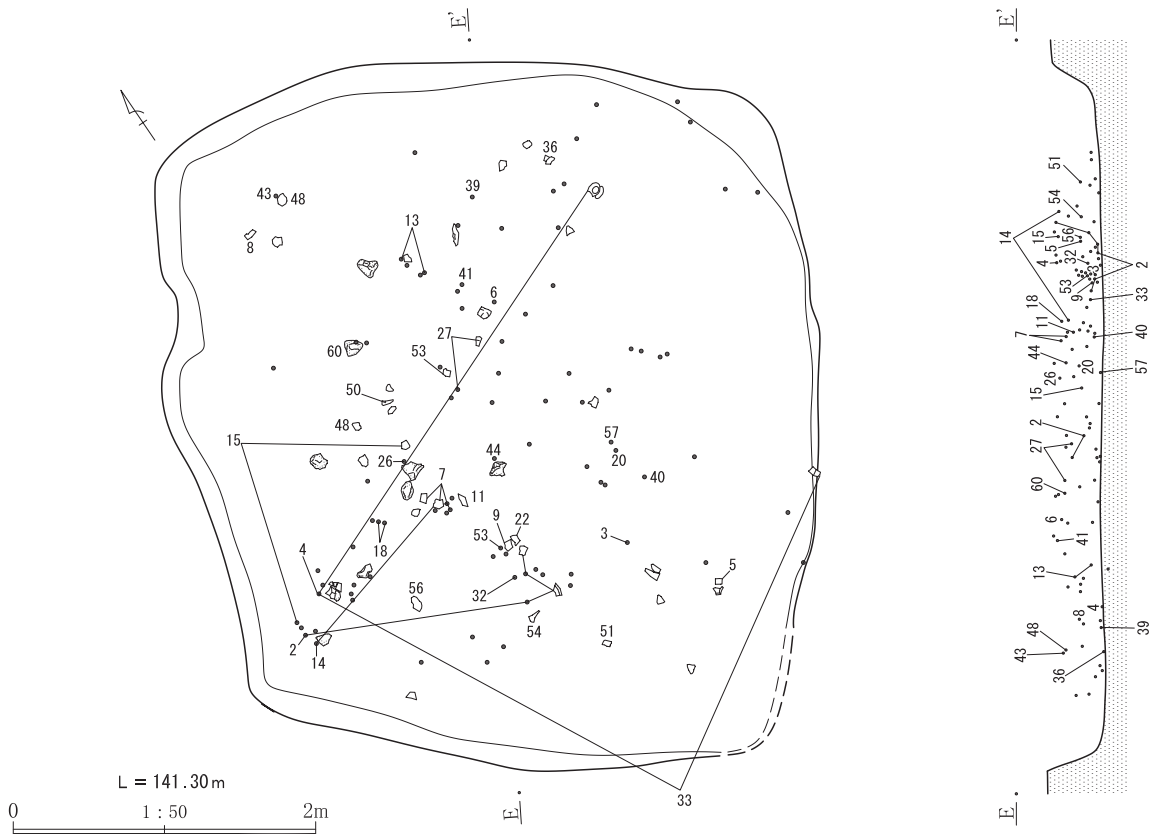


第 103 图 53 号住居出土遺物 (1)

II 今井三騎堂遺跡の調査



第104図 53号住居出土遺物(2)



第105図 53号住居(2)

最大41 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約18 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 厚さ約40 cmの1～5層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。ただし、3層は4層の埋没後に穿鑿された168号土坑の埋没土の可能性が高い。

遺物 総数423点の多量の遺物（土器289、石器134）が存在するが、床面に密着したものは少なく（36・39）、その大半は埋没土中位の4層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、草創期後半の井草式2点、夏島式24点、稻荷台式41点、早期7点、前期の黒浜式1点、諸磯a式32点、同b式29点（15・32～40）、浮島・興津式系5点（25・26）、大木式系1点、型式不明44点なども認められるが、以下のように諸磯c式が103点と他を凌駕している。集合沈線文+

貼付文27点（1・3・5～8・10～12・14・16～18）、集合沈線文46点（3・4・9・13・19～23）、結節浮線文2点、無文3点（27・28・31）、縄文3点（2・24・29）などがある。尚、7・11・14・18、25・26の各破片は、各々同一個体である。石器には、石鏃3点（41・42）、削器10点（43～50・54）、打製石斧3点（51～53）、磨り石類5点（55～59）、多孔石1点（60）、剥片104点、礫塊7点などが組成する。また、黒曜石の製品（41・42・44）や剥片類19点の内の6点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系2（星ヶ塔）という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器を始め出土土器が諸磯c式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。（観察表：18・30頁）

その他 周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

【53号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	稻荷台	沈線	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	大木	時期不明	総計
合計	2	24	41	7	1	32	29	103	5	1	44	289

分類別点数

黒浜式

分類	2類
合計	1

諸磯a式

分類	1類	2類	4類
合計	1	20	11

浮島・興津式系

分類	4	不明
合計	2	3

諸磯b式

分類	1類		2類	3類			4類			
種別	a2	b2	不明	不明	a	c	不明	a	c	不明
合計	2	1	2	5	1	2	10	2	1	3

諸磯c式

分類	1類				2類	3類				4類			
種別	a1	a2	b2	不明	不明	a	c	d	不明	b	c	d	不明
合計	1	4	10	18	2	2	6	1	31	1	3	3	21

縄文原形別点数

諸磯b式			
分類	2b	17	18
合計	6	1	3

諸磯c式

分類	2a	2b	18
合計	9	2	29

浮島・興津式系

分類	18
合計	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b	諸磯c	浮・興	時期不明
A		10	28	2	—
B		—	11	—	1
D		—	1	—	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		複合技術系列		その他			総計
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	多孔石	剥片	自然石	礫塊		
合計	3	10	3	5	1	104	4	3	133	

分類別点数

石鏃		
分類	2類	9類
合計	1	2

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	5	5

打製石斧

分類	1類	6類
合計	2	1

磨石類

分類	2類		4類		
形態	ab	b	a	ab	abc
合計	1	1	1	1	1

多孔石

分類	4類
形態	b
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		
コード	2	12
点数	1	2
重量	未計測	2

搔器・削器

コード	1	2	7	12
点数	7(5)	1	1	1
重量	(197)	2.7	48.4	1.2

打製石斧

コード	1
点数	3
重量	146

磨石類

コード	4
点数	5
重量	1583

多孔石

コード	4
点数	1
重量	886

剥片

コード	1	2	7	12
点数	76	8	4	16
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	3
重量	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	3	3

● 54号住居

位置 FW-150

写真 PL 48

面積 6.98 m²

方位 N 88 度 E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺約 3 m × 短辺 2.75 m、深さ 5 ~ 38 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、西辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 精査にかかわらず、炉と認定される痕跡は検出されなかった。

床面 勾配約 10 度の斜面地のローム層 (VI・VII 層) を最大 38 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 27 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ約 30 cm の 1 ~ 4 層がレンズ状に堆積し、

斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 31 点の遺物 (土器 18、石器 13) が存在するが、床面に密着したものはなく、全て埋没土の 1 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の集合沈線文 9 点 (1 ~ 5)、縄文 3 点 (6) などの他に、稻荷台式 1 点や型式不明 5 点がある。石器には、石鏃 1 点 (7)、礫器 1 点 (8)、剥片 10 点、礫塊 1 点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、黒曜石の製品 (7) や剥片類 4 点の内の 1 点について、X 線回折試験による産地同定を行い、和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 c 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 18・30 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

【54号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稻荷台	諸磯c	時期不明	総計
合計	1	12	5	18

分類別点数

諸磯c式

分類	3c類	3類	4c類	4類
合計	5	4	1	2

縄文原体別点数

諸磯c式

分類	6a	18
合計	1	5

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c
A		6

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他		総計	
器種	石鏃	礫器	剥片	礫塊	
合計	1	1	10	1	13

分類別点数

石鏃

分類	5類
合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		礫器		礫塊	
コート	点数	コート	重量	コート	重量
コート	12	コート	1	コート	4
点数	1	点数	1	点数	1
重量	0.6	重量	179	重量	未計測

剥片

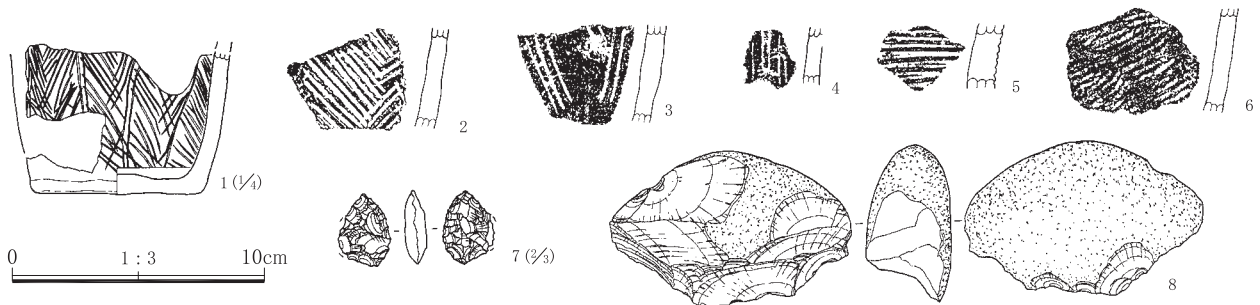
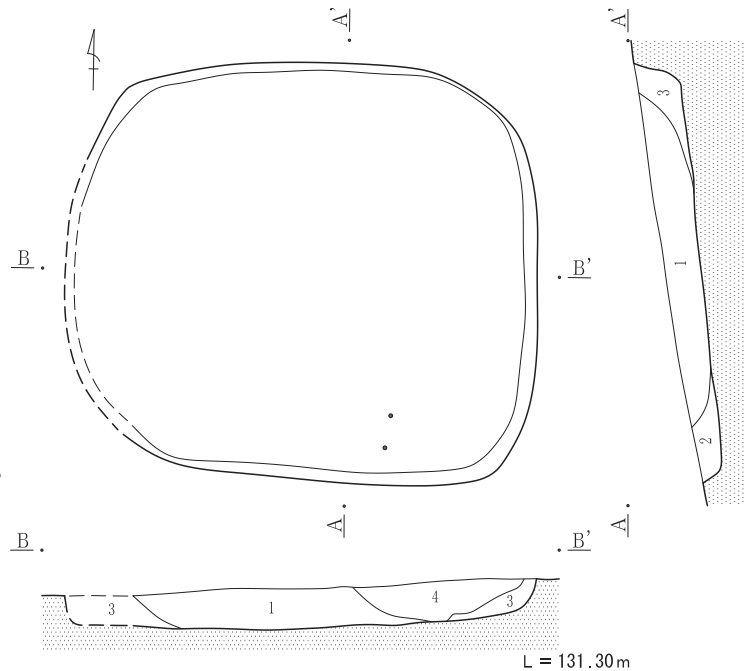
コート	1	2	9	12	37
点数	2	3	1	3	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

埋没土層

1. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が10%混入。少量の炭化物粒含有。
2. 黒褐色土を主体にローム土が20%混入。少量の炭化物粒含有。
3. 暗褐色土 (10YR3/4)。少量の炭化物粒含有。
4. 暗褐色土とローム土が等比率混入。



第106図 54号住居と出土遺物

55号住居

位置 HF-174 写真 PL 48

面積 不明 方位 N 32度E

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸形状と推定されるが、約3/4が調査対象区域外にあるために、規模を含む詳細は不明。調査範囲内での壁面は、垂直に近い角度で掘り込まれている。

炉 調査範囲内では検出されていないが、その有無については不明である。

床面 勾配約12度の斜面地のローム層(VI~IX層)を最大63cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、自然地形と同様に西側から東側方向へ緩傾斜している。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

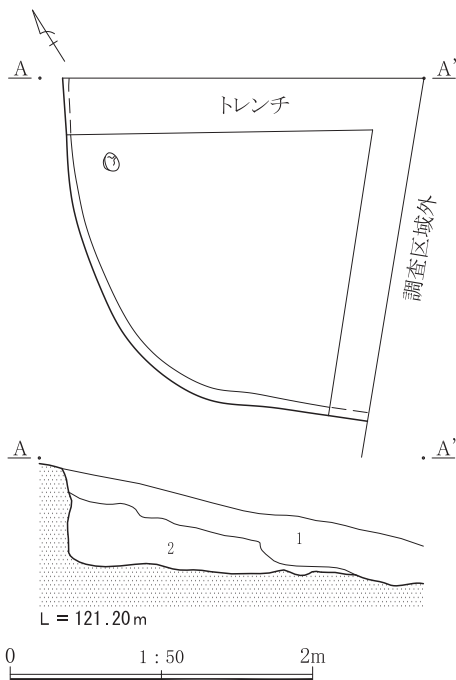
埋没土 部分的な調査ではあるが、厚さ約60cmの1・2層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数9点の土器が存在するのみである。その内の6点は平安時代の土師・須恵器であり、2点が諸磯c式の集合沈線文(1・2)、1点が型式不明の縄文土器である。ともに、埋没土上位の1層を中心に床面から浮いた状態で出土した。

当住居の時期に関しては、土師・須恵器も出土することから平安時代の可能性もあるが、埋没土の様態は他の諸磯式段階の遺構と類似しており、1・2の土器から諸磯c式期の所産と想定される。

(観察表:18頁)

その他 柱穴については存否不明だが、周溝は検出されなかった。



【55号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯c	時期不明	総計
合計	2	1	3

分類別点数
諸磯c式

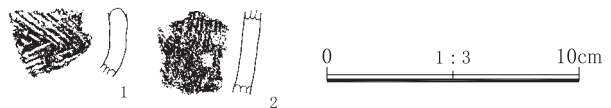
分類	3類
合計	2

縄文原体別点数

分類	諸磯c式
合計	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c
B		1
D		1



埋没土層

1. 黒色土(10YR2/1)を主体に黒褐色土(10YR2/3)が10%混入。多量の炭化物粒を含む。
2. 黒褐色土を主体にローム土が20%混入。少量の炭化物粒含有。

第107図 55号住居

● 56号住居

位置 HC -174 写真 PL 48 ~ 49
 面積 約 13 m² 方位 N 57 度W
 重複 北西隅で大木5式平行期の82号土坑を切って掘り込まれている。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 4.34 m × 短辺約 4.20 m、深さ 13 ~ 89 cm である。北辺を除く三辺の壁面は、約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 精査にもかかわらず、明瞭な炉の痕跡を確認することはできなかった。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、8本が確認されている。住居の長軸に平行して、片側3本×2列の6本主柱の可能性もあるが、中間のP2とP6は深度が浅く、P1 - P3 - P5 - P8を基本とした4本主柱の構造と考えられる。P4やP7は、P3・P8に近接しており、建て替えに伴って再敷設された柱穴と推定される。各主柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P3 : 2.40 m、P3 ~ P5 : 1.65 m、P5 ~ P8 : 2.10 m、P8 ~ P1 : 1.70 m である。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P1 : 39 × 43 cm、P2 : 20 × 15 cm、P3 : 35 × 50 cm、P4 : 34 × 39 cm、P5 : 40 × 38 cm、P6 : 23 × 22 cm、P7 : 34 × 45 cm、P8 : 30 × 26 cm である。

床面 勾配約 13 度の斜面地のローム層(VI~IX層)を最大 89 cm 掘り込んで床面を構築する。傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であるが、周壁際に比べて中央部が 15 cm ほど低く窪地状となる。踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 厚さ 60 cm 前後の 1 ~ 8 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 63 点の遺物(土器 29、石器 34)が存在するが、床面に横転・密着出土した完形の深鉢土器 1 点(1)の他は、全て埋没土上・中位の 1 ~ 6 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の集合沈線文+貼付文 9 点(1・3~7)、集合沈線文 2 点(2)、結節浮線文 1 点、縄文 1 点(11)、無文 6 点(10・12~14)、浮島・興津式系 2 点(8・9)

【56号住居出土物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	諸磯b	諸磯c	浮・興	時期不明	総計
合計	4	19	2	4	29

分類別点数

諸磯b式				浮島・興津式系	
分類	2類	3類	4類	分類	2a
種別	f1	c	a	分類	2a
合計	1	1	2	合計	2

諸磯c式

分類	1類	2類	3類	4類				
種別	b2	不明	不明	a	不明	c	d	不明
合計	6	3	1	1	1	1	4	2

縄文原体別点数

諸磯b式		諸磯c式		浮島・興津式系			
分類	2b	17	分類	1a	18	分類	20a
合計	3	1	合計	1	11	合計	2

胎土別点数

胎土	型式	諸磯b	諸磯c	浮・興
A		3	8	2
B		1	4	-

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		複合技術系列
器種	石匙	削器類	打斧	礫器	磨石類	石皿	磨製石斧
合計	2	8	2	1	4	1	1

その他	総計
剥片 礫塊	
10 4	33

分類別点数

石匙		搔器・削器		打製石斧			
分類	2類	分類	1類	2類	分類	1類	2類
合計	2	合計	2	6	合計	1	1
磨石類		石皿		磨製石斧			
分類	4類	分類	5類	分類	2類		
形態	a b	合計	1	合計	1		
合計	3 1						

石材別の点数と重量

石匙		搔器・削器					
コード	12	コード	1	2	9	10	12
点数	2	点数	3	1	1	1	2
重量	4.5	重量	145	16.9	未計測	94.7	9.9

打製石斧		礫器		磨石類		礫塊	
コード	1	コード	1	コード	4	コード	4 6
点数	2	点数	1	点数	4(2)	点数	3 1
重量	168	重量	537	重量	(864)	重量	未計測 未計測

磨製石斧		剥片			石皿		
コード	42	コード	1	9	12	コード	4
点数	1	点数	5	1	4	点数	1
重量	38.0	重量	未計測	未計測	未計測	重量	2506

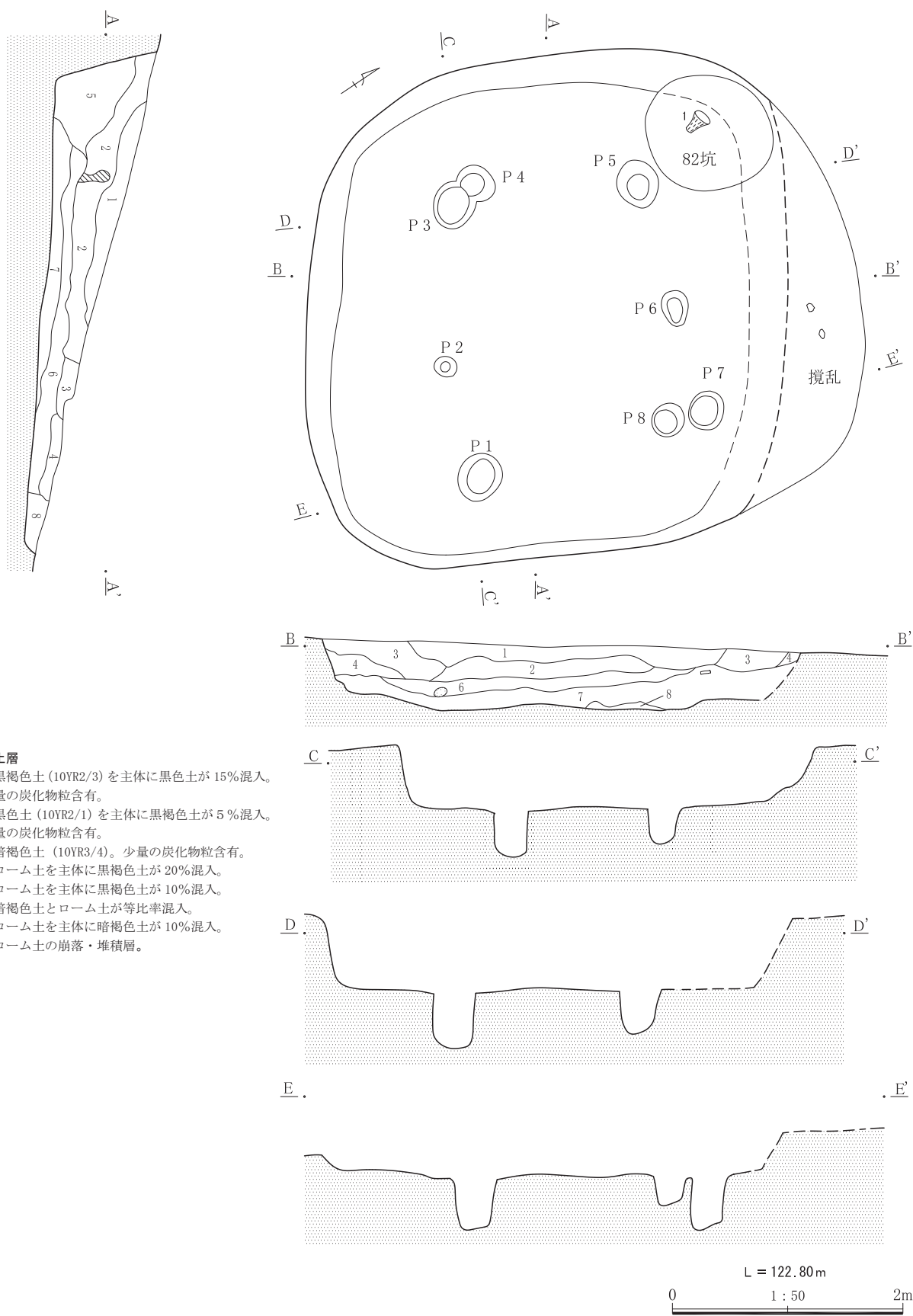
礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	3	4

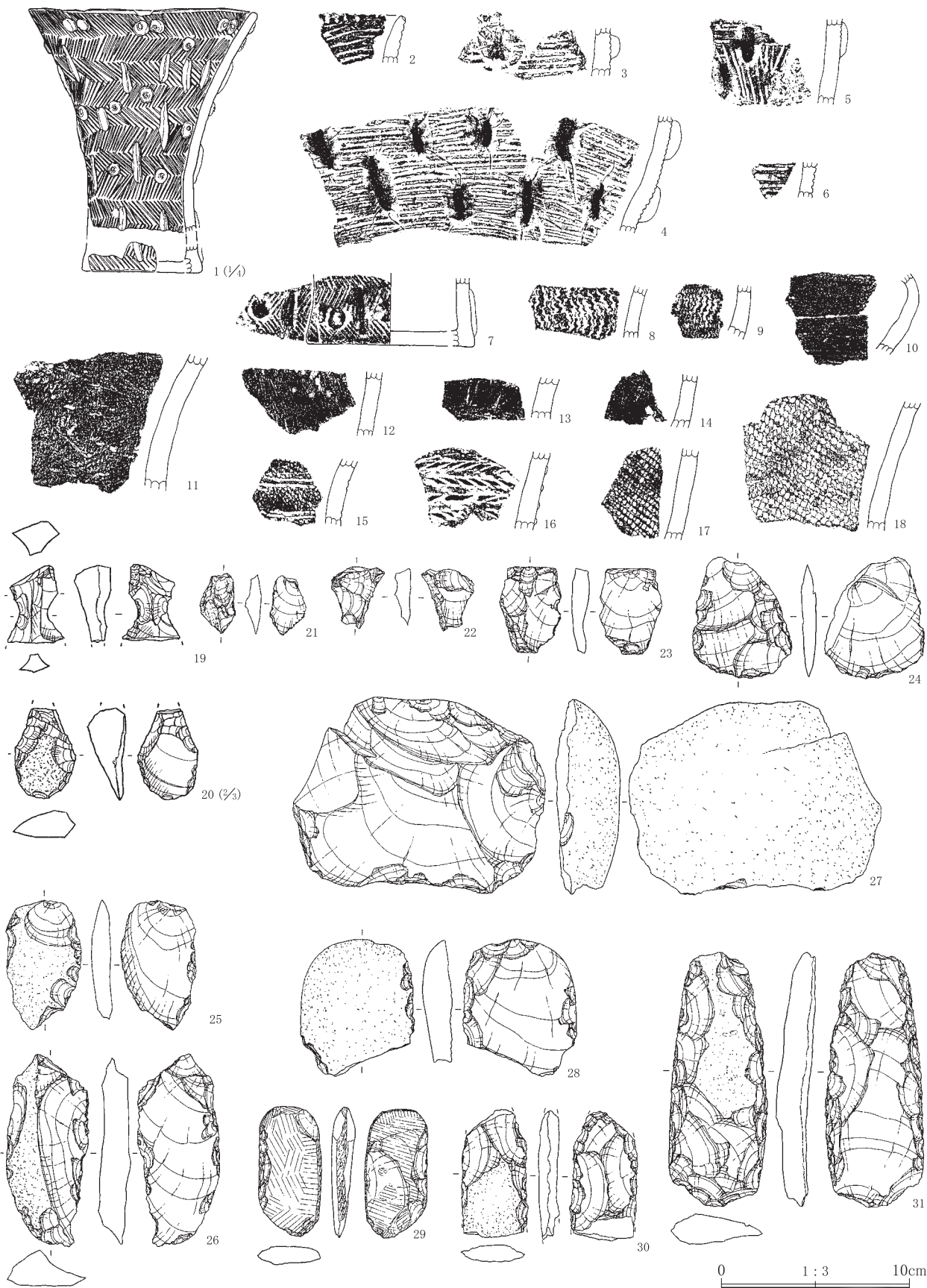
被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1

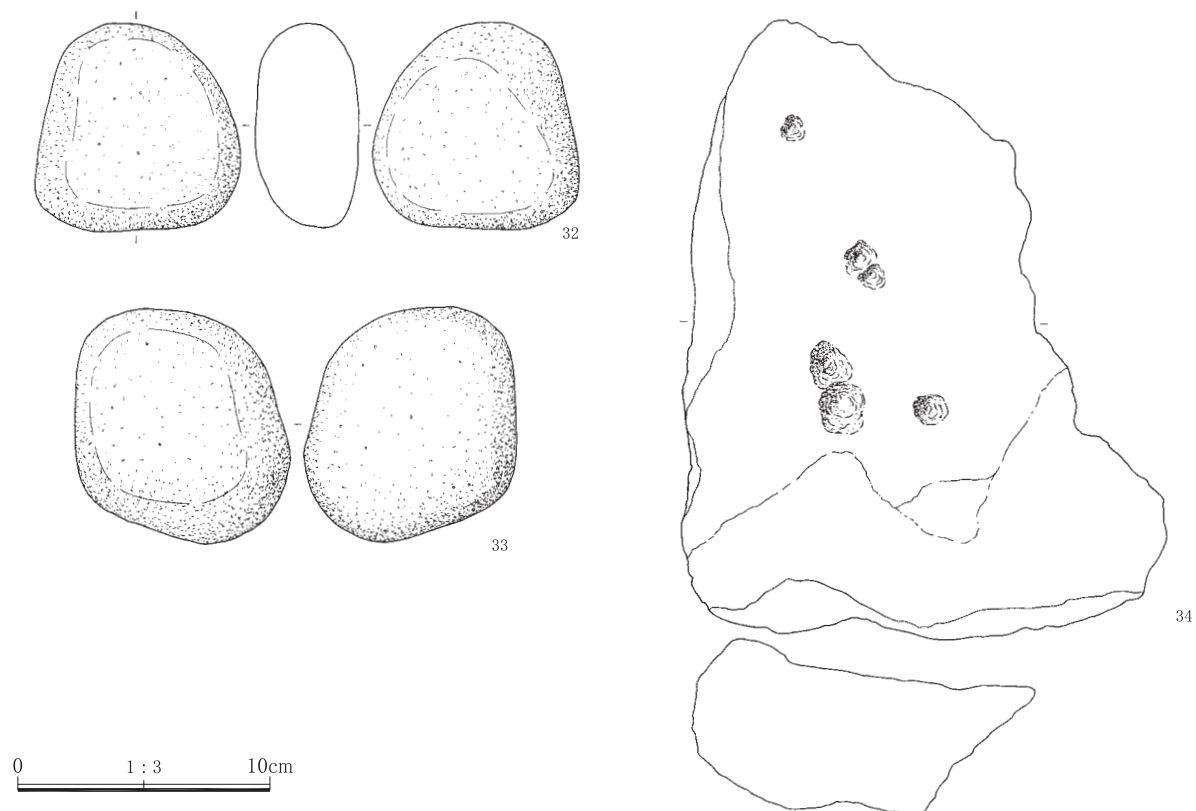
II 今井三騎堂遺跡の調査



第 108 図 56 号住居



第 109 图 56号住居出土遺物(1)



第110図 56号住居出土遺物(2)

の他に、諸磯b式4点(15～18)、型式不明4点などがある。尚、3・4・6、8・9、12・14の各破片は、各々同一個体である。石器には、石匙2点(19・20)、削器8点(21～26・28)、打製石斧2点(30・31)、礫器1点(27)、磨製石斧1点(29)、磨り石類4点(32・33)、石皿1点(34)、剥片10点、礫塊4点などが組成する。また、黒曜石製の製品(19～22)や剥片類8点の内の7点について、X線回折試験による産地同定を行い、その全てが和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、床面に密着して出土した1の諸磯c式土器から見て、当該期の所産と想定される。(観察表:18・30頁)

その他 周溝は検出されなかった。

● 57号住居

位置 GX-162

写真 PL 49～50

面積 約15 m²

方位 N 14度E

重複 北辺際で時期不明の326号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地をほぼ水平に掘り込むために、下位の東壁の立ち上がりを確認できないが、等高線方向にほぼ並行して南北に長軸を持つ隅丸正方形の平面形と推定される。規模は長辺4.70 m、深さ77 cmである。四辺の壁面は約70～80度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面のほぼ中央部に、1基が確認された。楕円形状の地床炉であり、長径34×短径26 cmの範囲に焼土の散布が認められる。

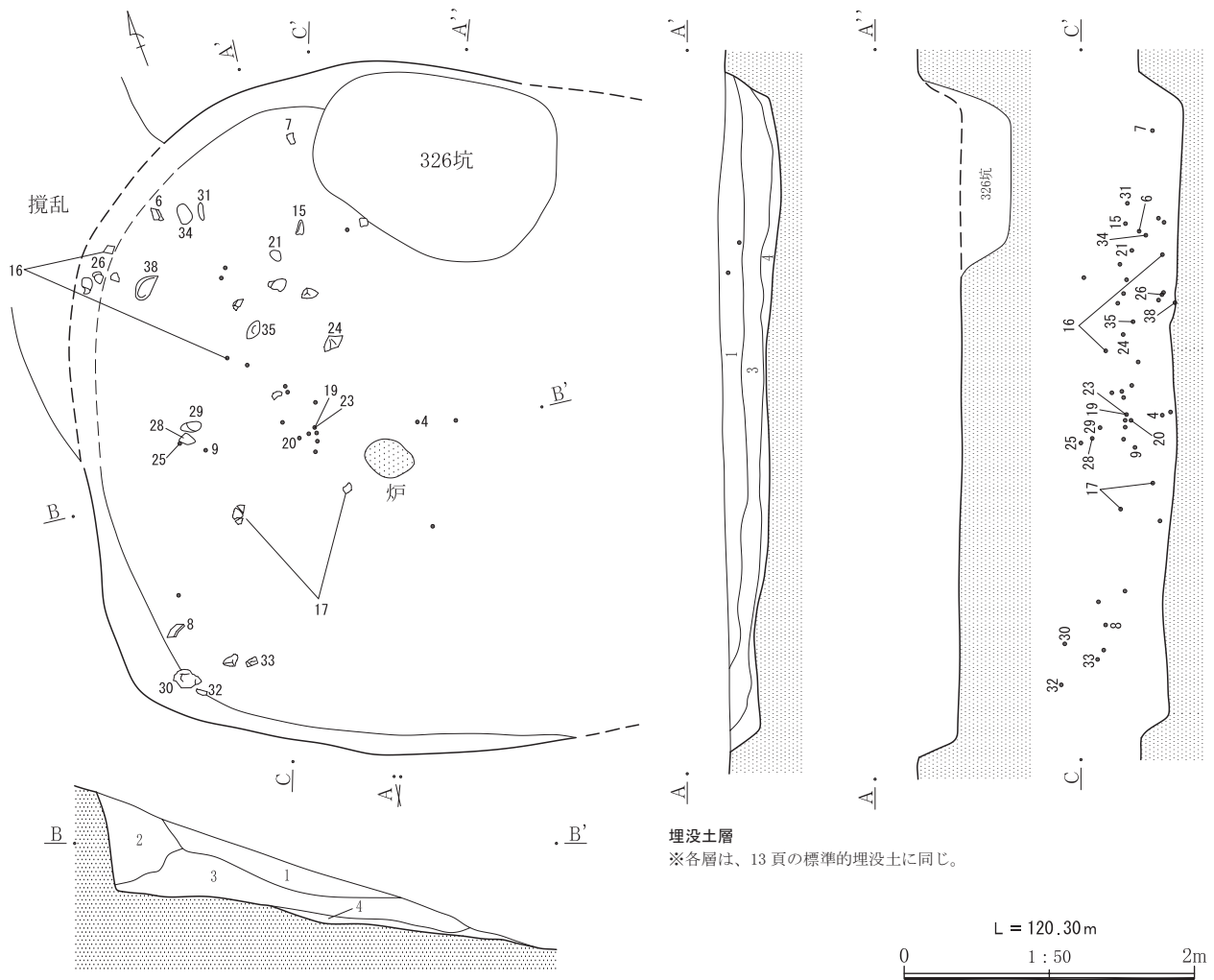
柱穴 精査にもかかわらず、明瞭な掘り込みを持つ柱穴は確認できなかったが、埋没土と地山ローム土との識別が困難なこともあり、その存否については確定できない。

床面 勾配約 19 度の急斜面地のローム層 (VI~IX層) を最大 77 cm 掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 33 cm の比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして、若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 平均層厚 40 cm 前後の 1~4 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 100 点の遺物 (土器 39、石器 61) が存在するが、床面に密着したものは僅かに 9 のみであり、その他は埋没土上・中位の 1~3 層を中心に床面から

浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の集合沈線文 8 点 (1~5)、結節浮線文 1 点、縄文 2 点 (7・13)、無文 5 点 (14~17)、浮島・興津式系 3 点 (8~10) の他に、井草式 1 点、夏島式 6 点、稲荷台式 3 点 (11・12)、稲荷原式 1 点、諸磯 b 式 1 点 (6)、大木式系 1 点、型式不明 7 点などがある。尚、14~16 は浅鉢土器であり、また 2・3、8~10 の各破片は、各々同一個体である。石器には、石鏃 3 点 (18~20)、削器 13 点 (21~25・28・29)、打製石斧 3 点 (31~33)、礫器 2 点 (27・30)、磨り石類 3 点 (34~36)、石皿 2 点 (37・38)、砥石 1 点 (26)、剥片 26 点、礫塊 6 点などが組成する。また、黒曜石製の製品 (18



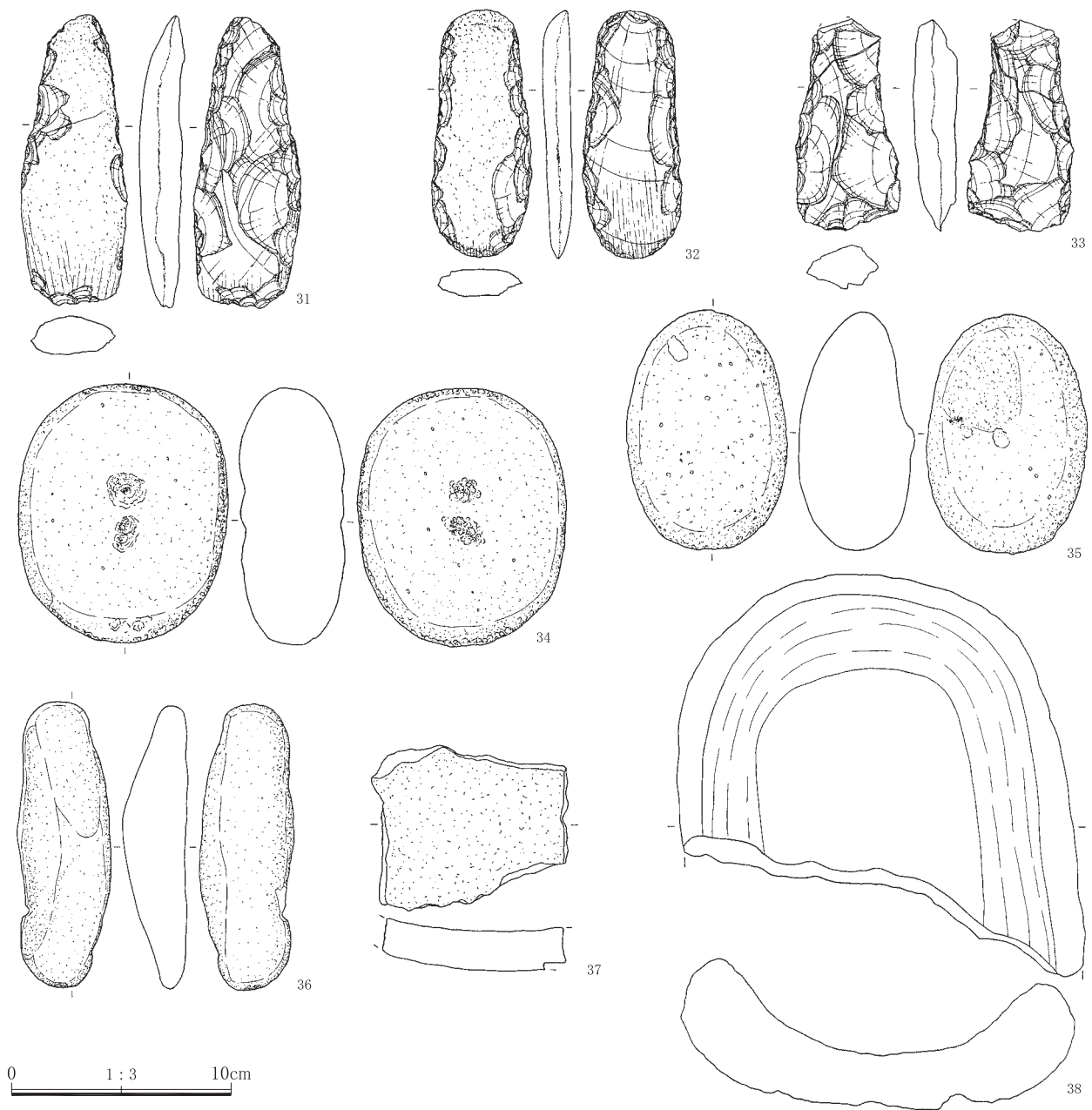
埋没土層
※各層は、13 頁の標準的埋没土に同じ。

第 111 図 57 号住居

II 今井三騎堂遺跡の調査



第112図 57号住居出土遺物(1)



第113図 57号住居出土遺物(2)

～20) や剥片類11点の内の5点について、X線回折試験による産地同定を行い、いずれも和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯c式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表:18・19・30頁)

その他 周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

【57号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	夏島	稲荷台	稲荷原	諸磯b	諸磯c	浮・興
合計	1	6	3	1	1	16	3

大木	時期不明	総計
1	7	39

分類別点数

稲荷台式		稲荷原式		浮島・興津式系		諸磯b式			
分類	3	不明	分類	不明	分類	5	分類	1類	
合計	2	1	合計	1	合計	3	種別	e2	
								合計	1

諸磯c式

分類	2類		3類		4類		
種別	不明	c	d	不明	c	d	不明
合計	1	4	1	3	2	4	1

縄文本体別点数

井草式		稲荷台式		諸磯b式		諸磯c式			
分類	18	分類	18	分類	18	分類	2a	2b	18
合計	1	合計	2	合計	1	合計	1	1	8

浮島・興津式系 胎土別点数

分類	20a		胎土					
合計	3		胎土	井草	稲荷台	諸磯b	諸磯c	浮・興
			A	—	2	—	4	3
			B	—	—	1	3	—
			D	—	—	—	1	—
			E	1	—	—	3	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列		
器種	石鏃	削器類	打斧	礫器	磨石類	石皿	砥石
合計	3	13	3	2	3	2	1

その他			総計
剥片	自然石	礫塊	
26	1	5	59

分類別点数

石鏃			搔器・削器			打製石斧			
分類	2類	3類	9類	分類	1類	2類	分類	1類	2類
合計	1	1	1	合計	7	6	合計	1	2
磨石類			石皿		砥石				
分類	2類		3類	分類	4類	5類	分類	2類	
形態	a	abc	ac	合計	1	1	合計	1	
合計	1	1	1						

石材別の点数と重量

石鏃			搔器・削器				石皿	
コード	12	コード	1	9	12	43	コード	4
点数	3	点数	10(6)	1	1	1	点数	2
重量	2.6	重量	(543)	未計測	未計測	67.2	重量	1456

打製石斧

打製石斧		礫器		砥石	
コード	1	5	コード	1	3
点数	2	1	点数	1	1
重量	229	91.3	重量	235	461

磨石類

磨石類			礫塊			
コード	4	18	50	コード	4	9
点数	1	1	1	点数	4	1
重量	788	480	196	重量	未計測	未計測

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

剥片

コード	1	2	4	7	9	12
点数	13	1	1	1	3	7
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	2	3	5

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	9
点数	1	1

● 58号住居

位置 HA -171

写真 PL 50 ~ 51

面積 約 34 m²

方位 N 50 度 E

形状 斜面地をほぼ水平に掘り込むために、下位の南壁の立ち上がりを確認できないが、等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形の形態と推定される。規模は長辺 7.15 m、深さ 120 cm である。四辺の壁面は約 50 ~ 70 度の緩い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部から北壁寄りと東壁寄りの 2 カ所で、計 4 基が確認された。第 115 図の G ~ J 断面では、5 cm 前後の掘り込みを伴う表現となっているが、基本的に地床炉の可能性が高い。1 号は長径 72 × 短径 65 cm、2 号は長径 55 × 短径 47 cm、3 号は長径 113 × 短径 52 cm、4 号は長径 47 × 短径 35 cm の範囲に焼土の集中分布が認められる。尚、各炉の時間的な先後関係は不明である。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、12 本が確認されているが、住居の長軸に平行して、北側に P3 - P5 - P6 の 3 本を、中央部に P2 - P11 - P7 の 3 本を、南側に P1 - P9 の 2 本を配置する計 8 本主柱の構造と考えられる。P3・P5・P6 には、少なくとも 1 ~ 2 回の掘り直しが認められ、建て替えや補修に伴って再敷設されたことを示している。各主柱穴の芯心間の距離は、P1 ~ P9 : 2.85 m、P2 ~ P11 : 2.15 m、P11 ~ P7 : 1.95 m、P3 ~ P5 : 2.40 m、P5 ~ P6 : 2.20 m、P1 ~ P2 : 1.40 m、P2 ~ P3 : 2.90 m、P6 ~ P7 : 2.60 m、P7 ~ P9 : 1.75 m である。また、各柱穴の規模(径 × 深さ)は、P1 : 24 × 48 cm、P2 : 32 × 38 cm、P3 : 37 × 47 cm、P4 : 25 × 31 cm、P5 : 34 × 54 cm、P6 : 38 × 46 cm、P7 : 25 × 19 cm、P8 : 31 × 28 cm、P9 : 38 × 31 cm、P10 : 22 × 10 cm、P11 : 22 × 18 cm、P12 :

20 × 13 cmである。

床面 勾配約 16 度の斜面地のローム層 (VI~X II層) を最大 120 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約 30 cmの比高差で北西側から南東側方向へ緩傾斜している。また、図示はしていないが、炉の周辺や支柱で圍繞された内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 平均層厚約 60 cmの 1~5 層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 525 点の多量の遺物 (土器 272、石器 253) が存在するが、床面に密着出土したものは 26 点 (1・2・4・6・7・9・12・15・20・26・42・44・47・48・52・59・64・69・70~72・76・77・82~84) に過ぎず、その大半は埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯 c 式の集合沈線文+貼付文 9 点 (1~3・5・8・19・21)、集合沈線文 103 点 (4・6・7・9~28・43~45)、結節浮線文 1 点、縄文 10 点 (46・51~59)、無文 22 点 (29~34・47~50)、構成不明 74 点、浮島・興津式系 16 点 (35~42) などと、稻荷台式 1 点、諸磯 a 式 2 点、同 b 式 1 点、型式不明 33 点がある。尚、2・19・21、7・20、9・12、14・16・18・27・28、24・26、29・32・40・41、30・31、33・34、39・42、51・52・55 の各破片は、各々同一個体である。石器には、石鏃 2 点 (60・61)、削器 15 点 (62・64~67・69)、打製石斧 4 点 (63・68・71 は未製品)、磨製石斧 1 点 (70)、磨り石類 16 点 (72~78・80・81)、多孔石 5 点 (82~85)、砥石 1 点 (79)、剥片 164 点、礫塊 16 点などが組成する。また、黒曜石製の製品 (61) や剥片類 140 点の内の 31 点について、X線回折試験による産地同定を行い、全点が和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯 c 式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

(観察表: 19・30・31 頁)

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

【58号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稻荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	時期不明	総計
合計	1	2	1	219	16	33	272

分類別点数

諸磯c式

分類	1類		2類		3類		4類	
種別	b2	不明	不明	c	不明	c	d	不明
合計	7	2	1	24	79	10	22	74

浮島・興津式系

分類	2	5	不明
合計	4	4	8

縄文原別点数

諸磯c式

分類	2a	12a	18
合計	2	7	56

浮島・興津式系

分類	2a	20a
合計	9	4

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c	浮・興	時期不明
A		47	3	—
B		6	4	1
D		—	6	—
G		13	—	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列		複合技術系列		その他	
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	砥石	磨斧	多孔石	剥片	自然石 礫塊
合計	2	15	4	16	1	1	5	164	1 15

分類別点数

石鏃	1類		9類		搔器・削器			砥石	
分類	1類	9類	分類	1類	2類	3類	分類	1類	
合計	1	1	合計	5	9	1	合計	1	

打製石斧

分類	1類	2類	6類	8類
合計	1	1	1	1

磨製石斧

分類	2類
合計	1

多孔石

分類	4類
形態	b
合計	5

磨石類

分類	1類		2類				4類	
形態	abc	不明	a	ab	abc	ac	a	b
合計	1	1	2	1	4	1	3	3

石材別の点数と重量

石鏃			搔器・削器			打製石斧			
コード	2	12	コード	1	9	コード	1	9	24
点数	1	1	点数	13(5)	2(1)	点数	2	1	1
重量	2.6	1.1	重量	(226)	(29.7)	重量	86.2	未計測	128

磨製石斧

コード	42
点数	1
重量	5.4

多孔石

コード	4
点数	5(4)
重量	(13439)

磨石類

コード	4	18
点数	15(8)	1
重量	(3369)	589

砥石

コード	23
点数	1
重量	64.4

礫塊

コード	4	9
点数	14	1
重量	未計測	未計測

剥片

コード	1	2	3	4	7	9	12
点数	10	2	2	1	1	9	139
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

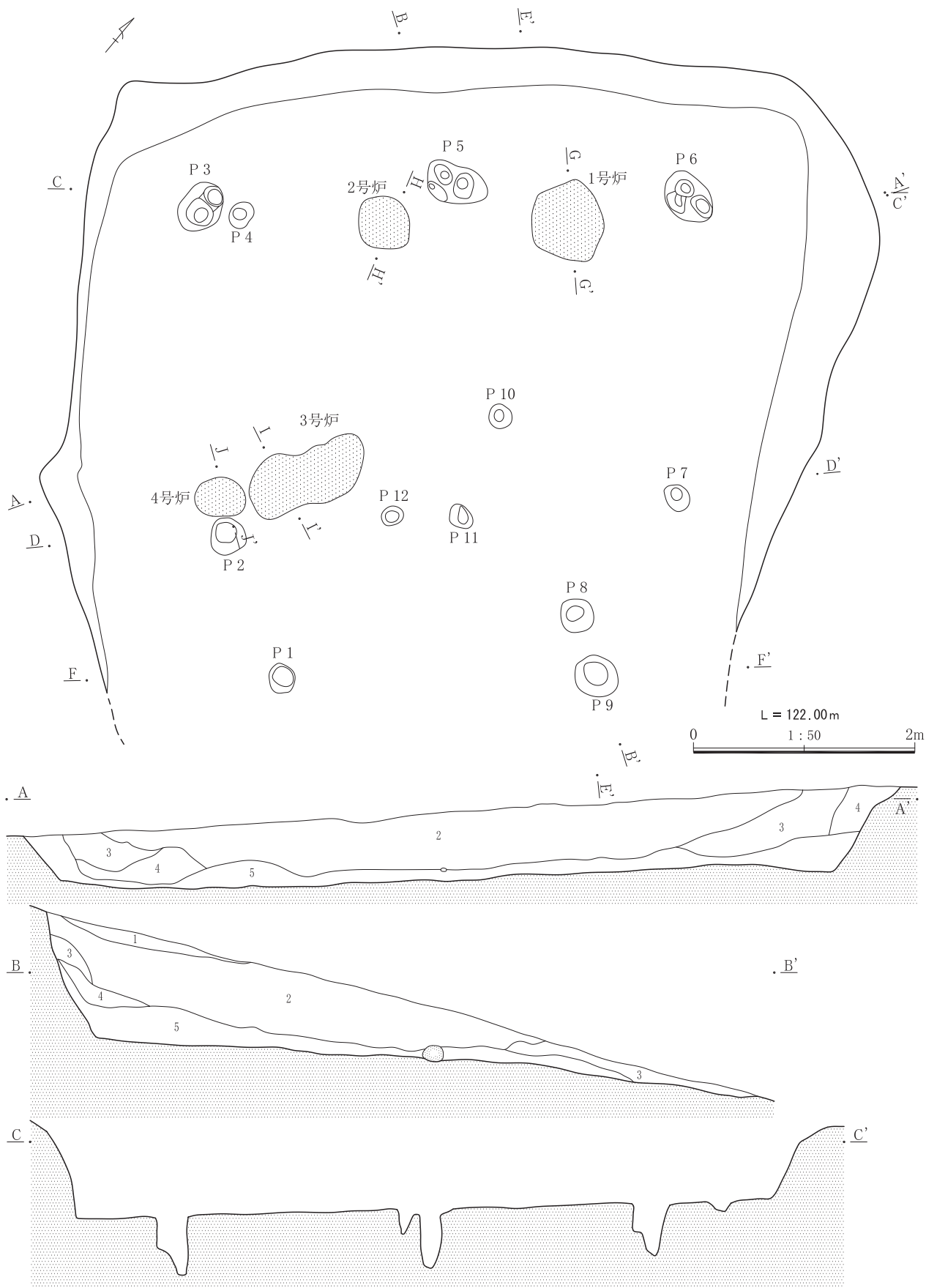
()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

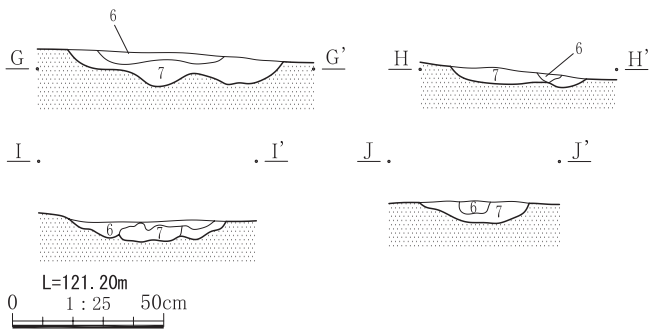
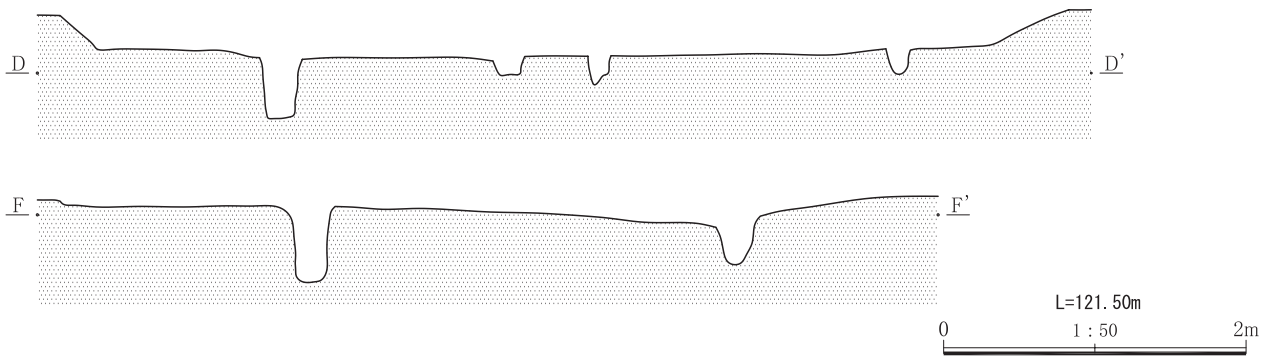
分類	1	2	総計
合計	3	12	15

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	9
点数	2	1

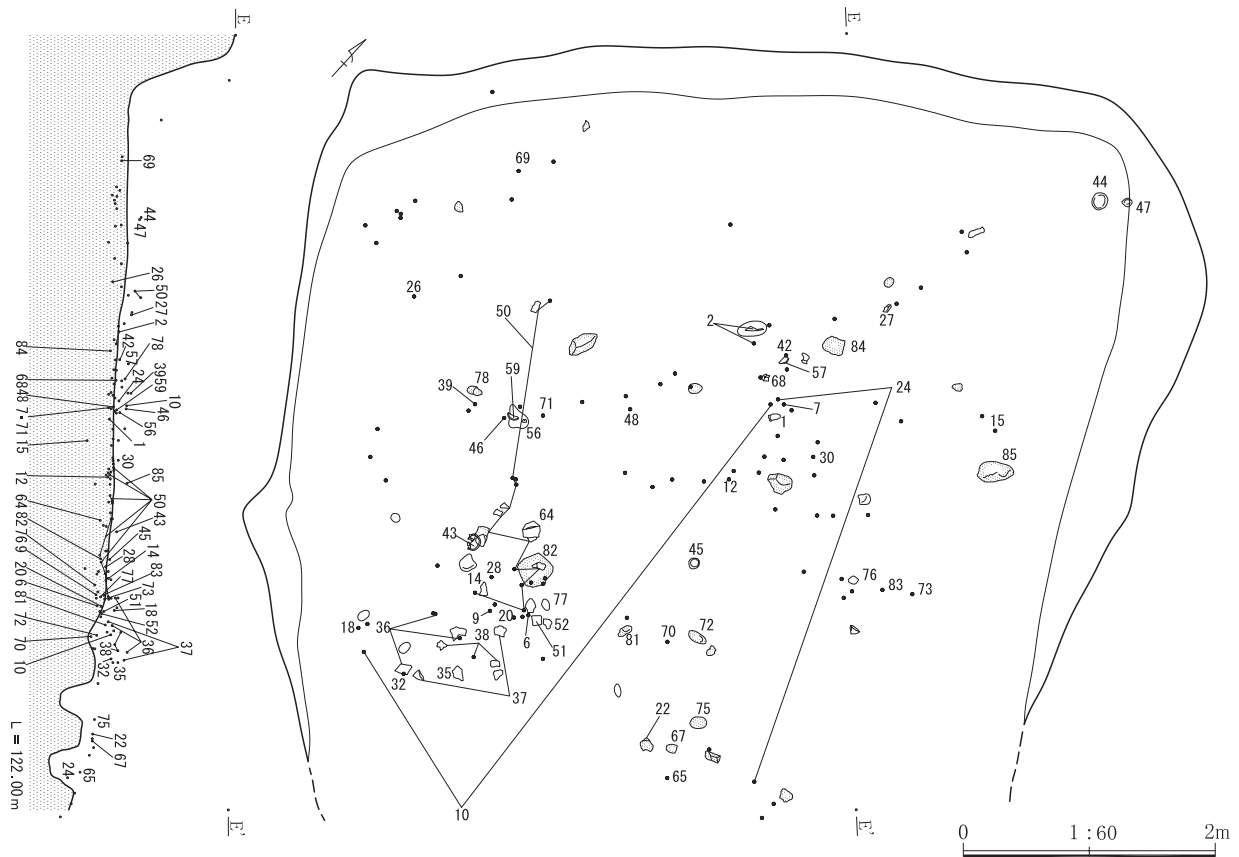


第114図 58号住居(1)

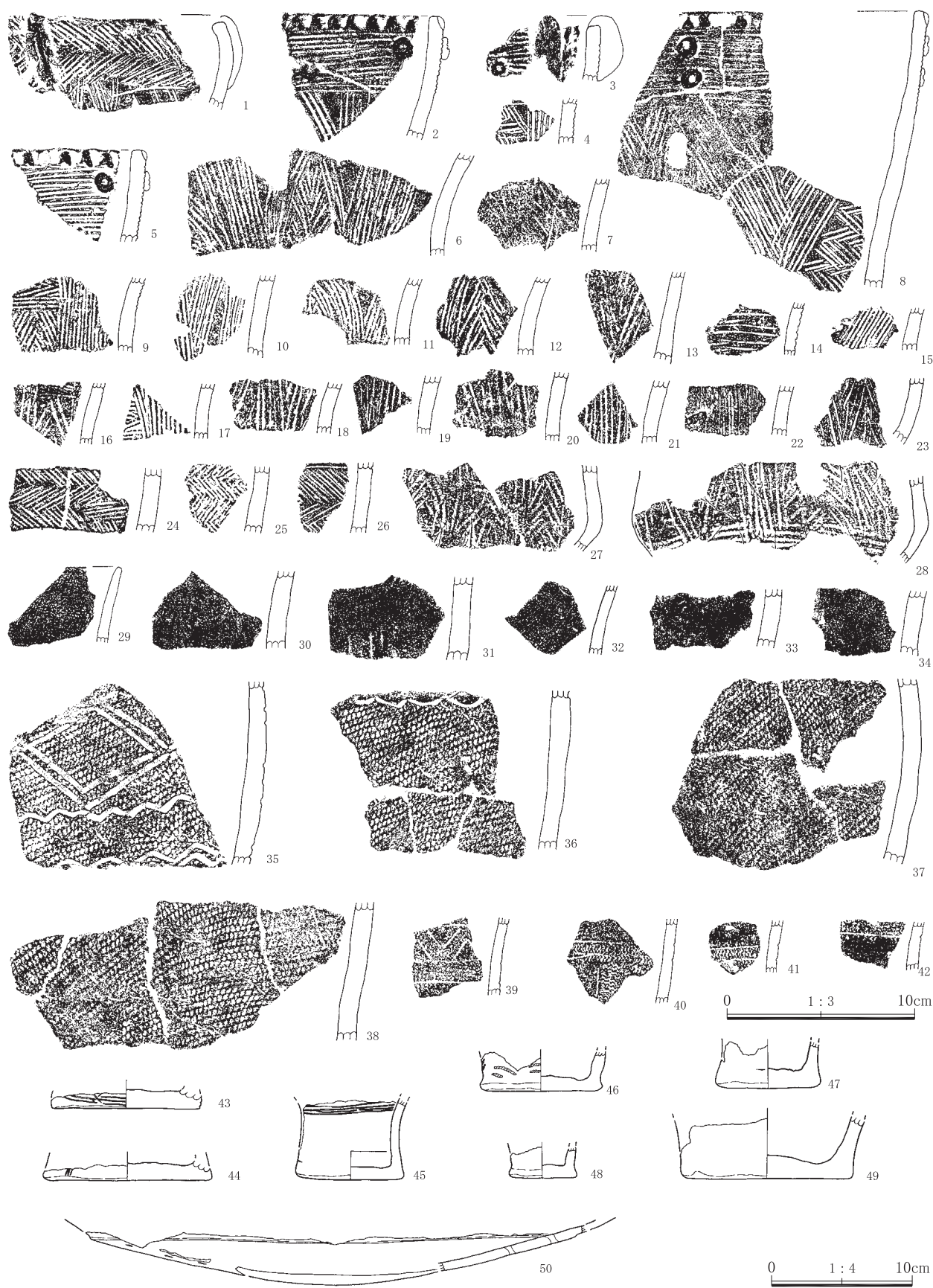


埋没土層

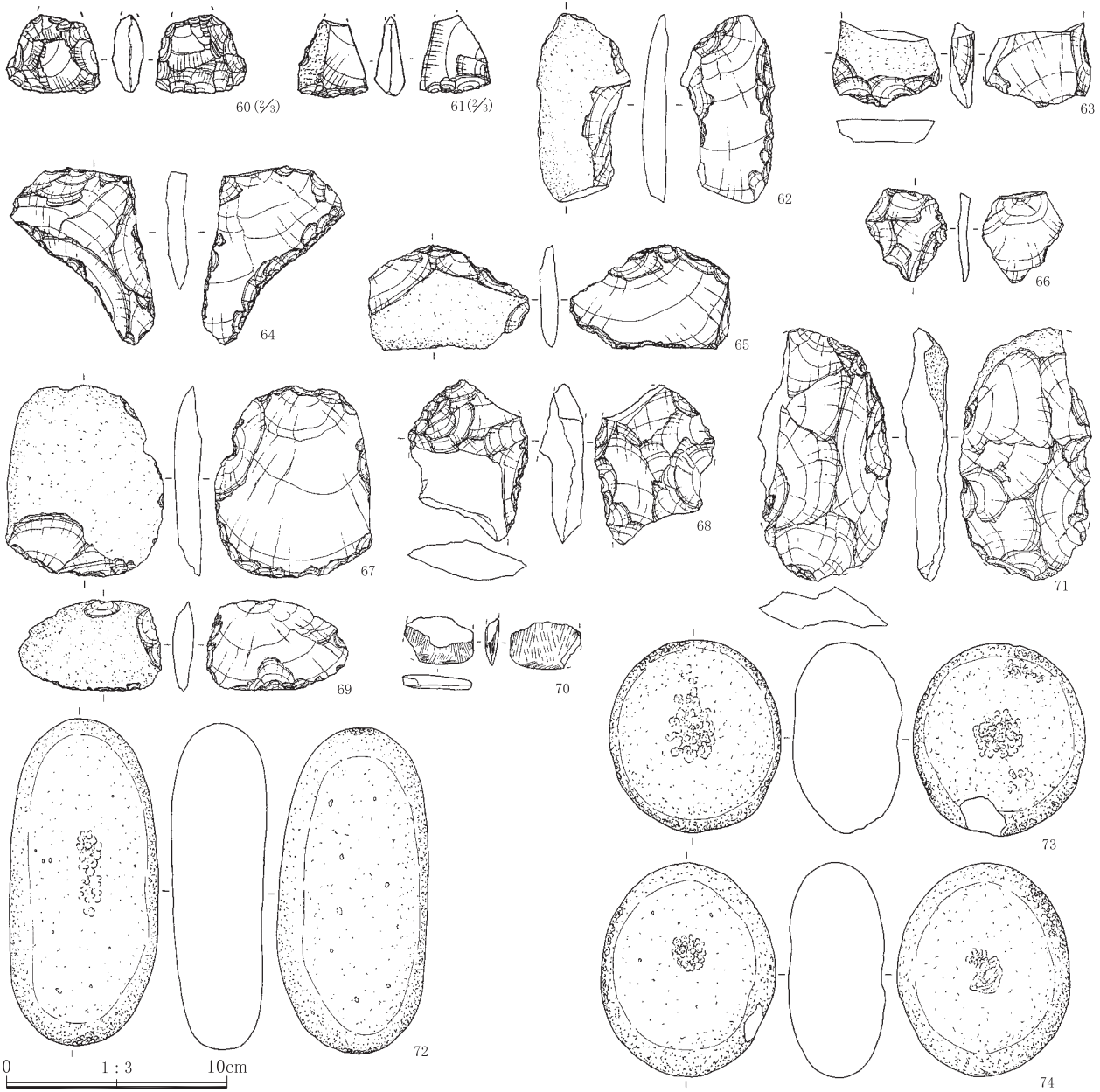
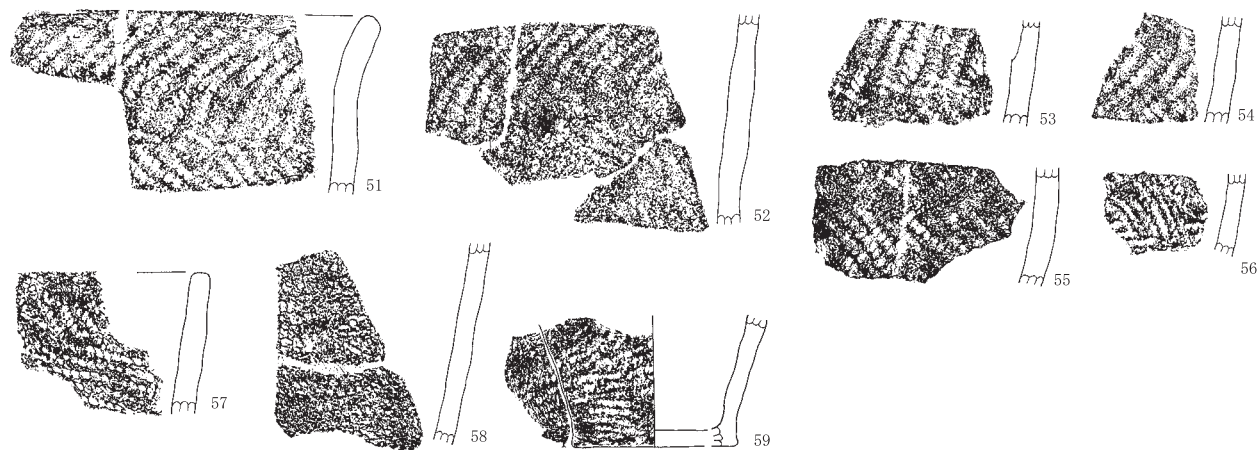
1. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が10%混入。多量の炭化物粒含有。
2. 黒色土を主体に黒褐色土が20%混入。多量の炭化物粒含有。
3. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。少量の炭化物粒含有。
4. ローム土を主体に黒褐色土が30%混入。微量の炭化物粒含有。
5. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。
6. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。少量の炭化物粒含有。
7. 黒褐色土と焼土ブロックが等比率混入。多量の炭化物粒含有。



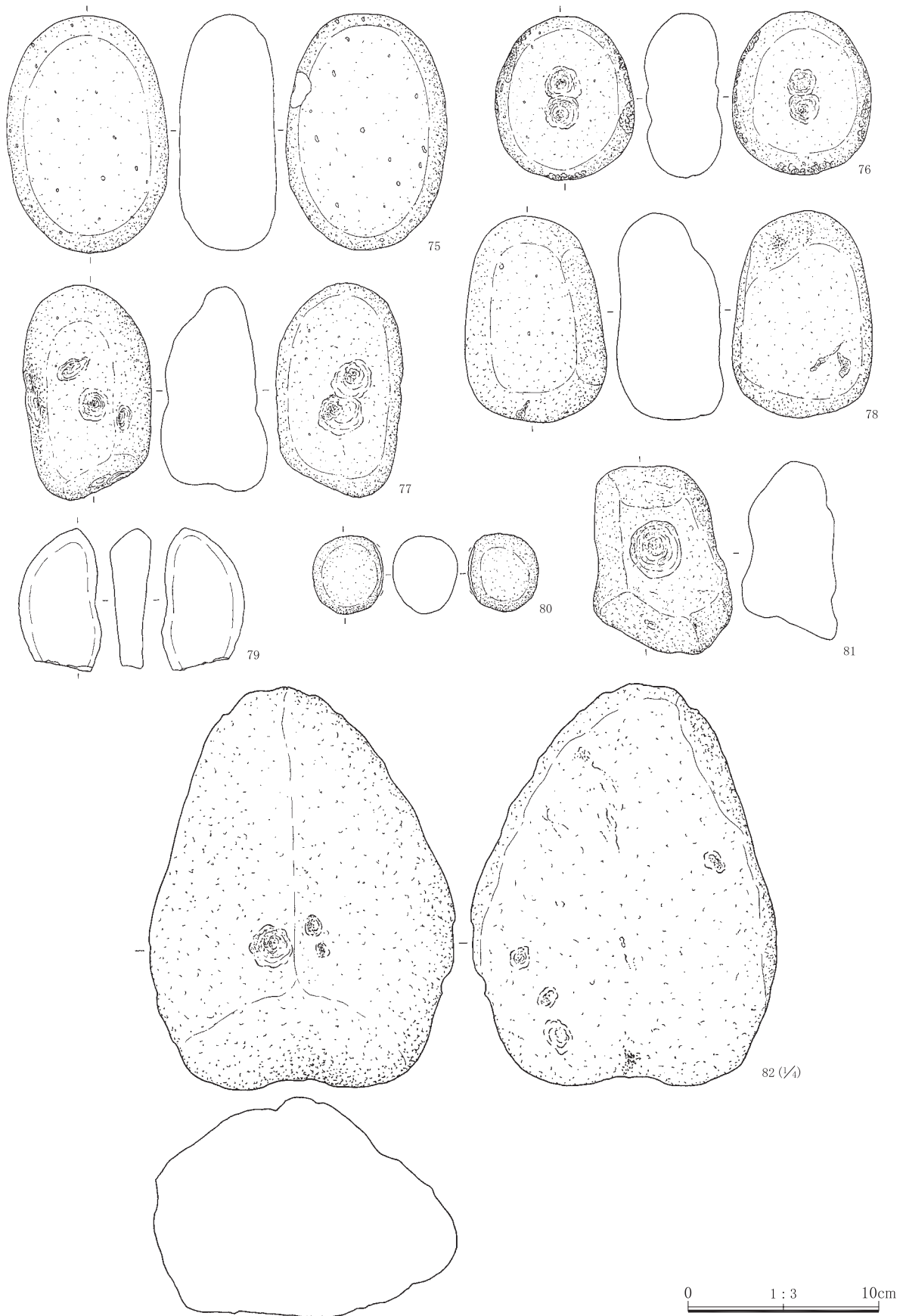
第115図 58号住居(2)



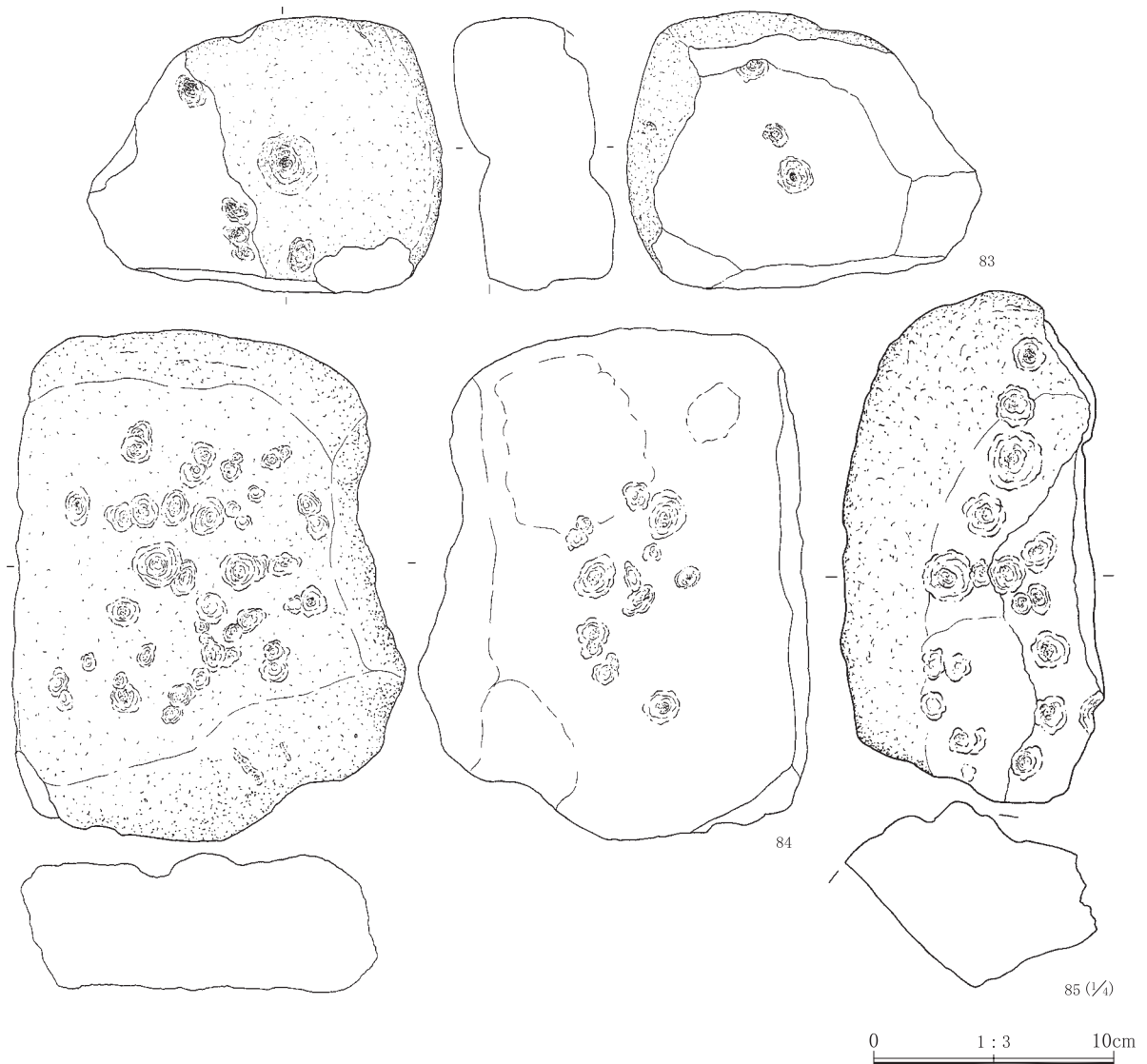
第116図 58号住居出土遺物(1)



第117图 58号住居出土遗物(2)



第118図 58号住居出土遺物(3)



第119図 58号住居出土遺物(4)

● 59号住居

位置 GR-151 写真 PL 52～53

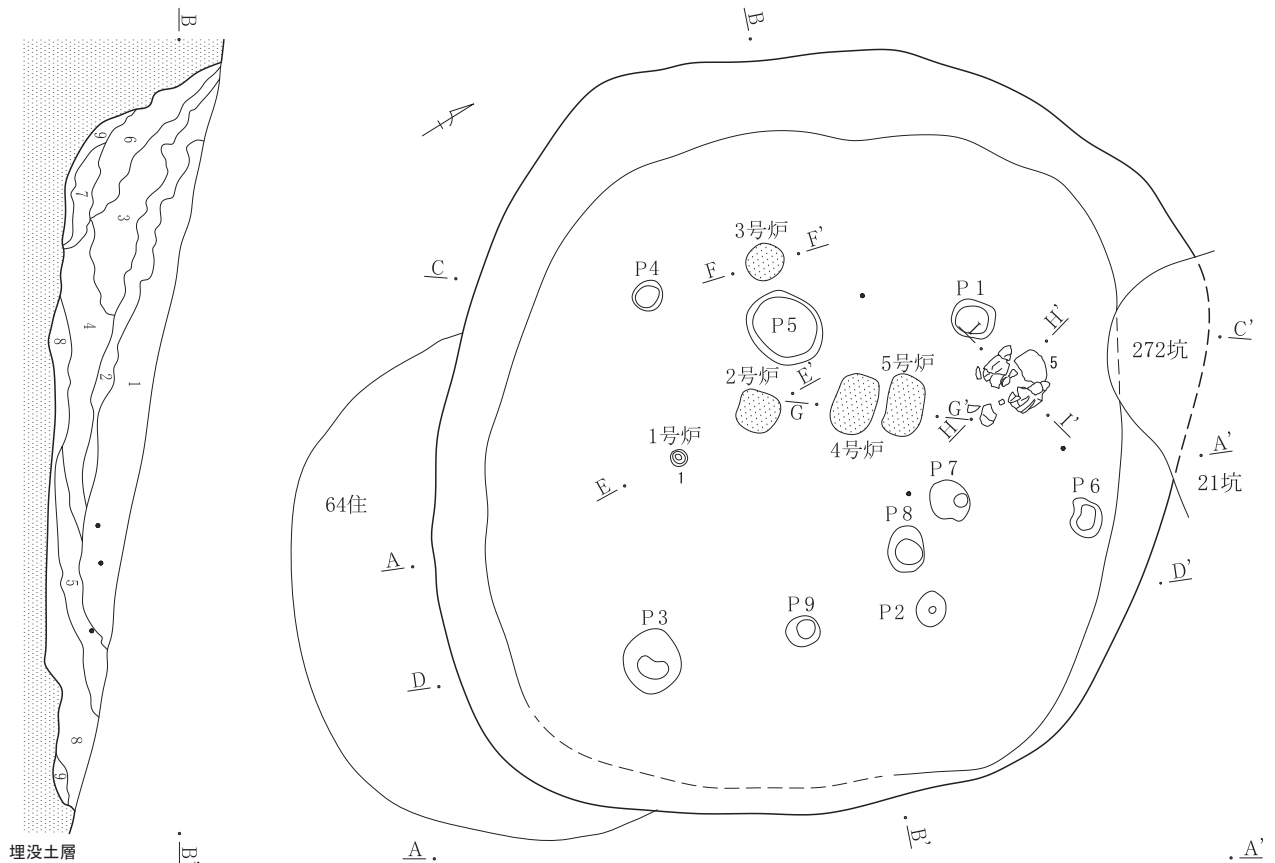
面積 15.78 m² 方位 N 33度E

重複 南辺と北辺の2カ所で、時期不明の64号住居や272号土坑および黒浜式期の21号土坑と重複するが、その新旧関係は64住・21坑→当住居→272坑の順で新しくなる。

形状 若干歪んではいるが、斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺5.02m×短辺4.85m、深さ8～101cmである。四辺の壁面は約60～70度の角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

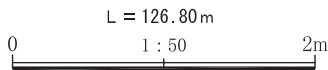
炉 床面中央部付近や西壁および南壁寄りの3カ所にかけて、5基が確認された。1号は底部と体部上半を欠損する深鉢土器(1)を正位に埋設し、その掘方は長径56×短径34×深さ19cmの楕円形状である。土器内の埋没土には微量の焼土が混在するのみだが、土器には被熱風化が認められる。2～5号は不定形状の地床炉であり、各々長径30～40cm×短径20～30cmの範囲に焼土の散布が認められる。尚、各炉の時間的な併行あるいは先後関係は不明である。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、9本が確認されているが、P1～P4を基本とした4本主柱の構造と考えられる。各主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2 :

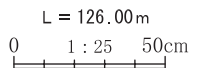
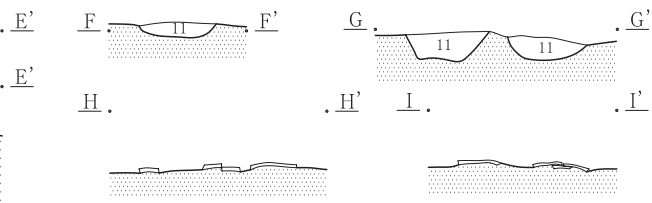
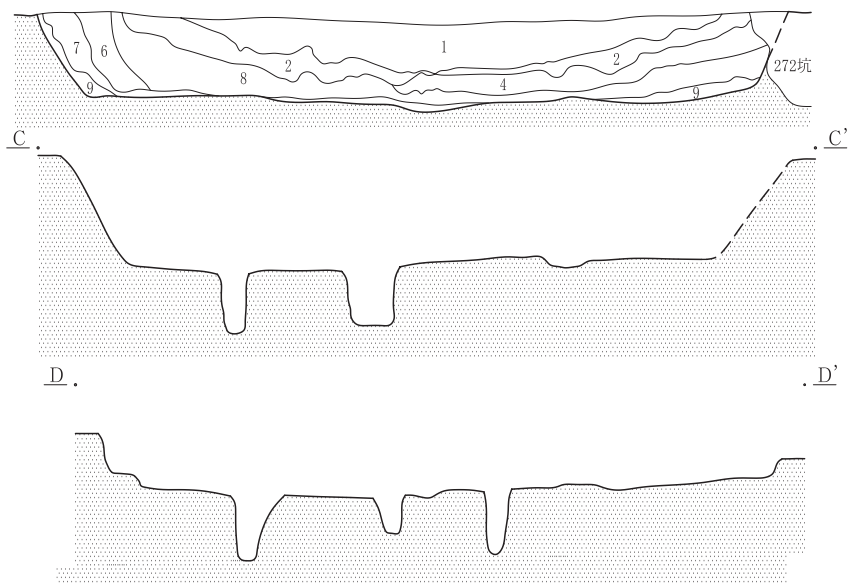
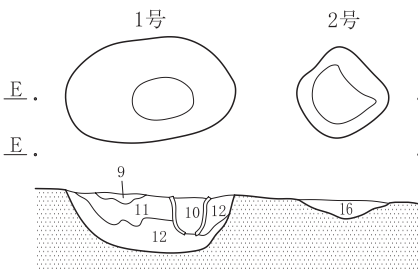


埋没土層

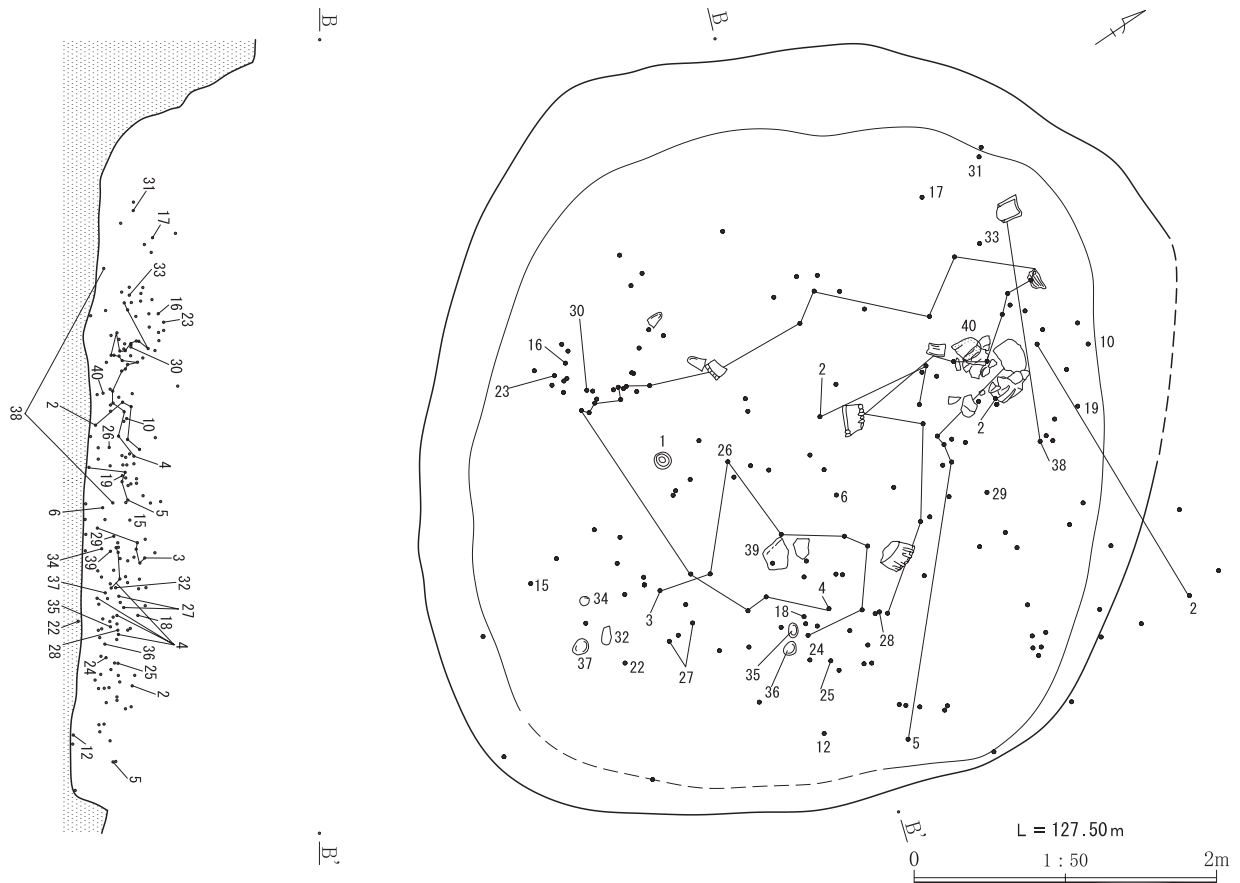
1. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が5%混入。
2. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
3. ローム土VI~VIII層を主体にローム土X I・X II層が30%混入。
4. ローム土X I・X II層を主体にローム土VI~VIII層が30%混入。
5. ローム土VI~VIII層を主体に黒褐色土が30%混入。
6. ローム土X I・X II層を主体にローム土VI~VIII層が20%混入。
7. ローム土X I・X II層を主体にローム土VI~VIII層が10%混入。
8. ローム土X I・X II層を主体にローム土VI~VIII層が10%混入。
9. ローム土X I・X II層を主体にローム土VI~VIII層が30%混入。
10. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
11. 焼土ブロックを主体に黒褐色土が10%混入。
12. ローム土X I・X II層を主体に黒褐色土とローム土VI~VIII層が30%混入。



1・2号炉掘方



第120図 59号住居 (1)



第121図 59号住居(2)

1.95 m、P2～P3：1.90 m、P3～P4：2.45 m、P4～P1：2.15 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：28×6 cm、P2：23×52 cm、P3：38×52 cm、P4：19×39 cm、P5：45×30 cm、P6：26×8 cm、P7：30×7 cm、P8：29×18 cm、P9：22×30 cmである。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層（VI～XII層）を最大101 cm掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持つが、傾斜や凹凸面の少ない平坦な床面であり、炉の周辺や支柱で囲繞された内側を中心にして、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。

埋没土 平均層厚約50 cmの1～9層がレンズ状に堆積しているが、3層以下はローム土を主体とした埋没土であり、周堤帯あるいは土屋根等に敷設されていた用土が、廃絶後に崩落・再堆積した可能性もある。

遺物 総数469点の多量の遺物（土器314、石器155）が存在するが、床面に密着したものは少なく（4・12・22）、その大半は埋没土中位の2～4層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯c式

の集合沈線文+貼付文67点（1・2・4・8～10）、集合沈線文15点（6・7・11～13）、無文50点（14・15・18）、浮島・興津式系3点（16・17）、大木5式系1点（3）の他に、夏島式3点、稲荷台式55点、早期押型文2点、同沈線文2点、同条痕文1点、黒浜式9点、諸磯a式18点、同b式9点、型式不明78点などがある。石器には、石錐1点（19）、削器25点（20～26・28～30）、打製石斧5点（27・31・33）、磨り石類12点（38・40）、スタンプ形石器2点、石核1点、石皿2点（38・40）、多孔石1点（39）、砥石1点、剥片90点、礫塊12点などが組成する。また、黒曜石製の製品（20）や剥片類6点の内の3点について、X線回折試験による産地同定を行い、全点が和田峠系2（星ヶ塔）という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯c式を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：19・31頁）

その他 周溝は検出されなかった。

II 今井三騎堂遺跡の調査

【59号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	押型	沈線	条痕	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	大木	時期不明	総計
合計	3	55	2	2	1	9	18	9	133	3	1	78	314

分類別点数

黒浜式		諸磯a式			諸磯b式				大木式系			
分類	3類	分類	1類	2類	4類	分類	1類	2類	3類	4類	分類	2
合計	9	合計	1	9	8	合計	1	1	4	3	合計	1

諸磯c式

分類	1類			3類			4類		
種別	a1	b2	不明	a	c	不明	c	d	不明
合計	3	4	61	1	4	10	1	3	46

浮島・興津式系

分類	2a	不明
合計	2	1

縄文原形別点数

黒浜式		諸磯c式		浮島・興津式系		大木式系		
分類	11a	分類	11a	18	分類	20a	分類	11a
合計	1	合計	5	52	合計	2	合計	1

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯c	浮・興	大木
A		1	17	2	1
B		—	30	—	—
D		—	6	—	—
G		—	4	—	—

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列				複合技術系列		その他			総計
器種	石錐	削器類	打斧	スラブ形	磨石類	石皿	砥石	多孔石	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	1	25	5	2	12	3	1	1	90	1	1	11	153

分類別点数

石錐		搔器・削器			打製石斧				スタンプ形石器		石皿			
分類	2類	分類	1類	2類	3類	分類	2類	3類	8類	分類	1類	4類	分類	4類
合計	1	合計	11	13	1	合計	2	2	1	合計	1	1	合計	3

磨石類

分類	1類		2類		3類		4類		5類		不明
形態	a	abc	ac	ac	ac	a	ac	a			
合計	1	1	1	1	1	1	1	4	1		

砥石

分類	2類
合計	1

多孔石

分類	4類
形態	b
合計	1

石材別の点数と重量

石錐		搔器・削器					打製石斧			スタンプ形石器			
コード	1	コード	1	2	3	4	12	コード	1	9	16	コード	4
点数	1	点数	18(9)	2(1)	1	1	3(1)	点数	3	1	1	点数	2
重量	8	重量	(613)	(31.6)	未計測	未計測	(2.7)	重量	283	未計測	56.6	重量	未計測

磨石類

コード	4	9	20
点数	10(3)	1	1
重量	(1166)	未計測	583

石皿

コード	4
点数	3
重量	2944

砥石

コード	9
点数	1
重量	未計測

多孔石

コード	4
点数	1
重量	2571

剥片

コード	1	2	3	7	9	12	33	34	37
点数	64	5	2	4	8	3	2	1	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

石核

コード	2
点数	1
重量	未計測

礫塊

コード	4	9	51
点数	9	1	1
重量	未計測	未計測	未計測

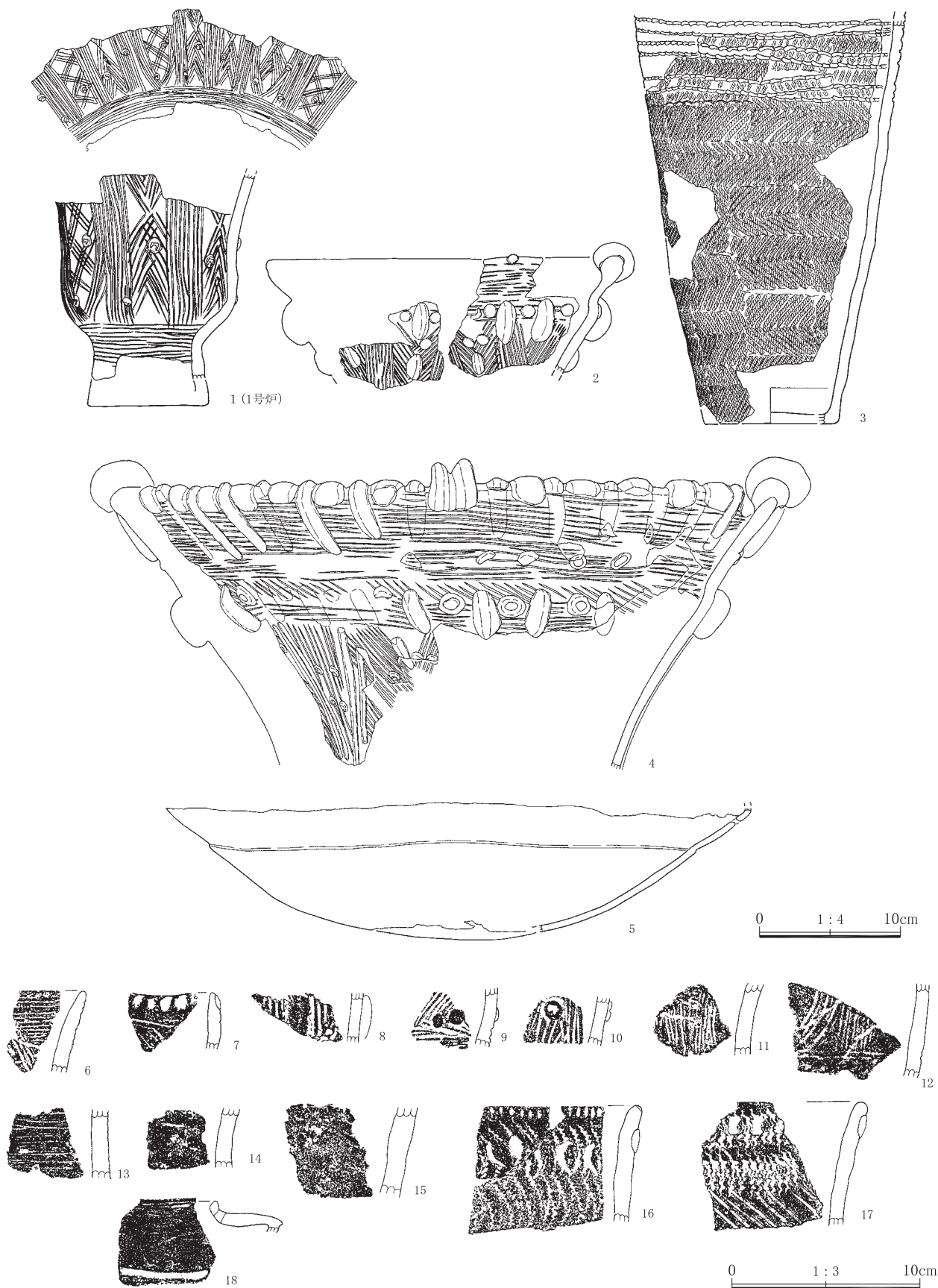
礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	4	7	11

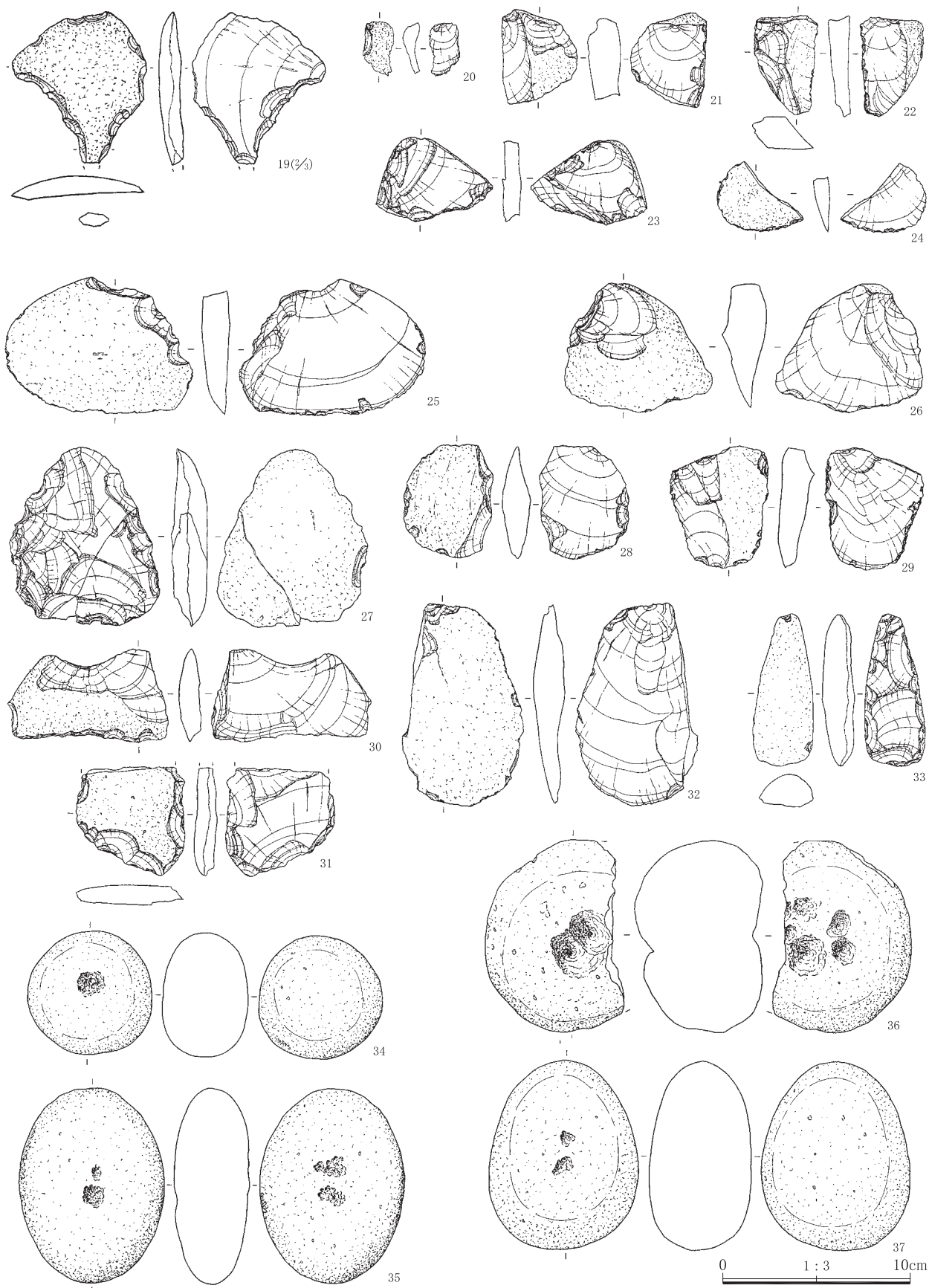
被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	4

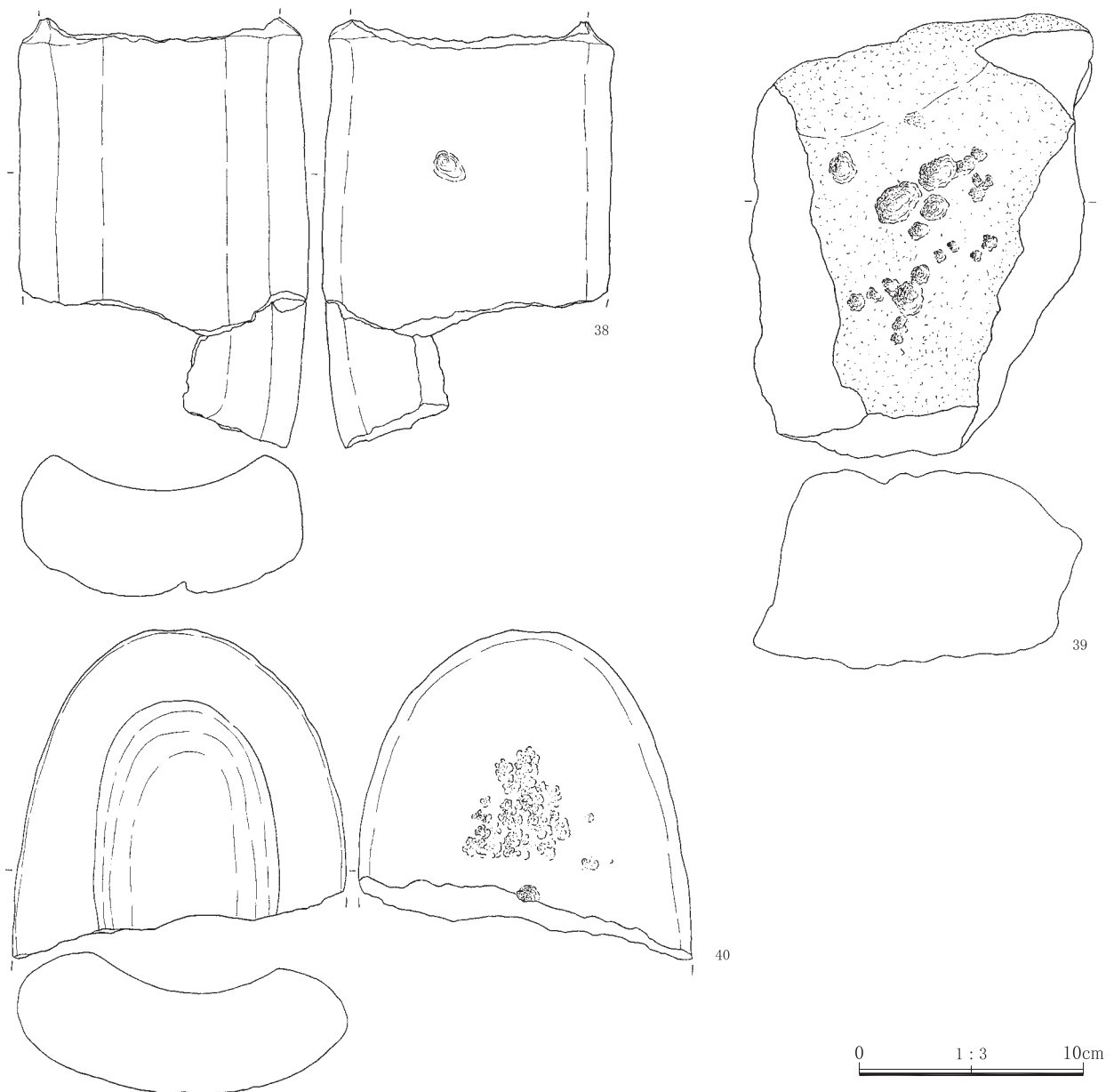
()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量



第 122 图 59 号住居出土遺物 (1)



第123図 59号住居出土遺物(2)



第124図 59号住居出土遺物(3)

● 60号住居

位置 GU-174

写真 PL 51

面積 約 8.5 m²

方位 N 67 度W

重複 床面中央部で時期不明の328号土坑が重複し、新旧関係は不明であるが、328号土坑が当住居に後出する可能性が高い。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、東西に長軸を持つ若干歪んだ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 3.43 m × 短辺 3.15 m、深さ 7 ~ 46 cm である。

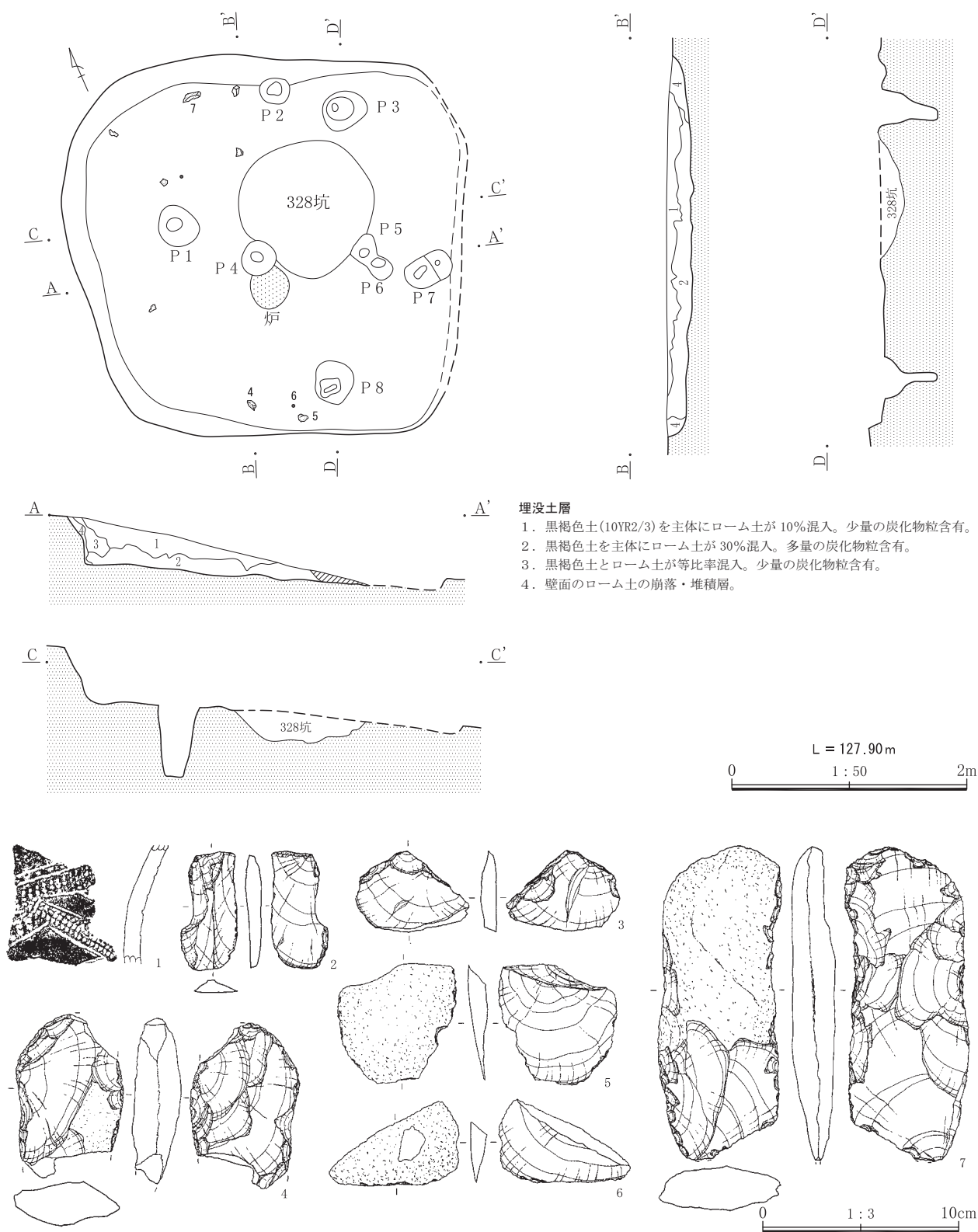
四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、各辺はほぼ直線的に走行している。

やや外湾気味に張り出している。

炉 床面のほぼ中央部に、1基が確認された。不定形状の地床炉であり、長径 37 × 短径 33 cm の範囲に焼土の散布が認められる。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、8本が確認されている。4本主柱の構造と推定されるが、各柱穴を連結した形状は住居外形とシンメトリーではなく、未検

II 今井三騎堂遺跡の調査



第 125 図 60 号住居と出土遺物

出の柱穴の存在も考慮される。各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：36×61 cm、P2：25×22 cm、P3：38×47 cm、P4：30×29 cm、P5：25×21 cm、P6：19×10 cm、P7：25×41 cm、P8：38×45 cmである。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大46 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約20 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 平均層厚約20 cmの1～4層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数19点の僅少な遺物（土器2、石器17）が存在するが、床面に密着したものは僅かに2点（6・7）のみで、その他は埋没土上位の1層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、浮島・興津式系1点（1）と型式不明1点のみで、石器についても削器4点（2・3・5・6）、打製石斧2点（4・7）、剥片9点、礫塊2点など、組成する器種・数量ともに極めて乏しい状況である。

当住居の時期に関しては、出土土器に乏しく確定できる状況にないが、住居形態も考慮すれば諸磯C式期の所産と想定される。（観察表：19・31頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【60号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	浮・興	時期不明	総計
合計	1	1	2

分類別点数

浮島・興津式系

分類	5
合計	1

縄文原体別点数

浮島・興津式系

分類	20a
合計	1

胎土別点数

胎土	型式	浮・興
A		1

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	その他	総計		
器種	削器類	打斧	剥片	その他	
合計	4	2	9	2	17

分類別点数

搔器・削器

分類	1類	2類
合計	2	2

打製石斧

分類	1類
合計	2

石材別の点数と重量

搔器・削器

コード	1
点数	4
重量	85

打製石斧

コード	1	27
点数	1	1
重量	256	117

剥片

コード	1	4	7	13
点数	5	2	1	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	2
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	総計
合計	2	2

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	2

● 61号住居

位置 F V -133

写真 P L 54・55

面積 45.58 m²

方位 N 44度 E

重複 北西隅で時期不明の403号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺7.58 m×短辺7.32 m、深さ5～76 cmである。四辺の壁面は約80度前後の垂直に近い角度で掘り込まれ、西辺を除く各辺はほぼ直線的に走行している。

炉 床面中央部から北壁寄りに3基、南壁寄りに2基の計5基が確認された。1・4号は、口縁部と体部下半を欠損する深鉢土器（1・2）を正位に埋設し、その掘方は1号が直径28 cm×深さ22 cm、4号が直径21 cm×深さ19 cmの円形状である。土器内の埋没土は、1号では焼土の存在は希薄だが、4号ではかなり多量の焼土が混在し、土器にはともに被熱風化が認められる。一方、2・3・5号は僅かな窪地状の掘り込みを伴うものの、様態的には不定形状の地床炉に近似している。2号は長径34×短径25 cm、3号は長径46×短径34 cm、5号は長径48×短径39 cmの範囲に焼土の散布が認められる。尚、各炉の時間的な併行・先後関係は判然としないが、1・4号に関しては床面上に僅かに突出する埋設土器上端の比高差から、時間的に1号が4号よりも新しいと判断される。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、13本が確認さ

II 今井三騎堂遺跡の調査

れているが、住居の東西軸に平行して1列3本単位に3列配置する9本主柱を基本とした構造と考えられる。ちなみにその配列は、P1 - P2 - P3、P4A - P5 - P10、P7 - P8 - P9Aが想定できるが、2基の土器埋設炉と3基の地床炉の存在からも明瞭なように、少なくとも複数回の建て替えや修復が想定され、各列上に存在するP12・P13、P4B・P6、P9B・P11などは、それに伴って再敷設された柱穴であろう。各列における主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：2.00 m、P2～P3：1.90 m、P4A～P5：2.25 m、P5～P10：2.30 m、P7～P8：1.60 m、P8～P9A：2.10 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：30×58 cm、P2：36×69 cm、P3：24×70 cm、P4A：37×44 cm、P4B：38×61 cm、P5：39×53 cm、P6：27×50 cm、P7：41×59 cm、P8：43×52 cm、P9A：41×76 cm、P9B：30×58 cm、P10：37×30 cm、P11：30×50 cm、P12：35×65 cm、P13：30×34 cmである。

床面 勾配約6度の斜面地のローム層（VI～IX層）を最大76 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約38 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心に、踏み固めによる敲き床状の硬化面が認められる。
埋没土 平均層厚約50 cmの1～8層がレンズ状に堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数169点の遺物（土器70、石器99）が存在するが、炉埋設土器を除いて床面に密着したものは少なく（6・9・10）、その大半が埋没土上位の1～4層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、諸磯c式の集合沈線文+貼付文8点（1・5・6・8）、集合沈線文19点（2・9・11）、結節浮線文7点（3）、無文7点（7）と、浮島・興津式系1点（10）の他に、稻荷台式4点、諸磯a式1点、同b式4点、型式不明5点などがある。石器には、石鏃2点（12）、削器11点（13・14）、磨り石類3点（15・16）、剥片48点、礫塊7点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、黒曜石製の製品（12）や剥片類38点の全てについて、X線回折試験による産地同定を行い、全て和田峠系2（星ヶ塔）という結果を得

ている。

当住居の時期に関しては、炉埋設土器が諸磯c式に比定されることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：19・20・31頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【61号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	稻荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	十三菩提
合計	4	1	4	41	1	13

時期不明	総計
6	70

分類別点数

諸磯a式		諸磯b式			浮島・興津式系		
分類	4類	分類	1類	3類	4類	分類	5
合計	1	合計	1	1	2	合計	1

十三菩提式		諸磯c式								
分類	3	分類	1類		2類		3類		4類	
合計	13	種別	a1	b2	不明	b	不明	c	不明	d
		合計	1	3	4	1	6	3	16	7

縄文原体別点数

諸磯c式		浮島・興津式系		十三菩提式	
分類	18	分類	20a	分類	18
合計	10	合計	1	合計	13

胎土別点数

胎土	型式	諸磯c	浮・興	十三菩提
A		8	1	13
B		2	—	—

（石器）

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他		総計
器種	石鏃	削器類	磨石類	剥片	礫塊		
合計	2	11	3	48	7	71	

分類別点数

石鏃			搔器・削器			磨石類				
分類	9類	10類	分類	1類	2類	3類	分類	1類	2類	5類
合計	1	1	合計	4	6	1	形態	b	a	ac
							合計	1	1	1

石材別の点数と重量

石鏃			搔器・削器			磨石類		
コード	12		コード	1	12	コード	4	
点数	2(1)		点数	5(2)	6	点数	3(2)	
重量	(2.8)		重量	(136)	未計測	重量	(622)	

剥片

コード	1	2	12	不明
点数	15	2	30	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4	51
点数	6	1
重量	未計測	未計測

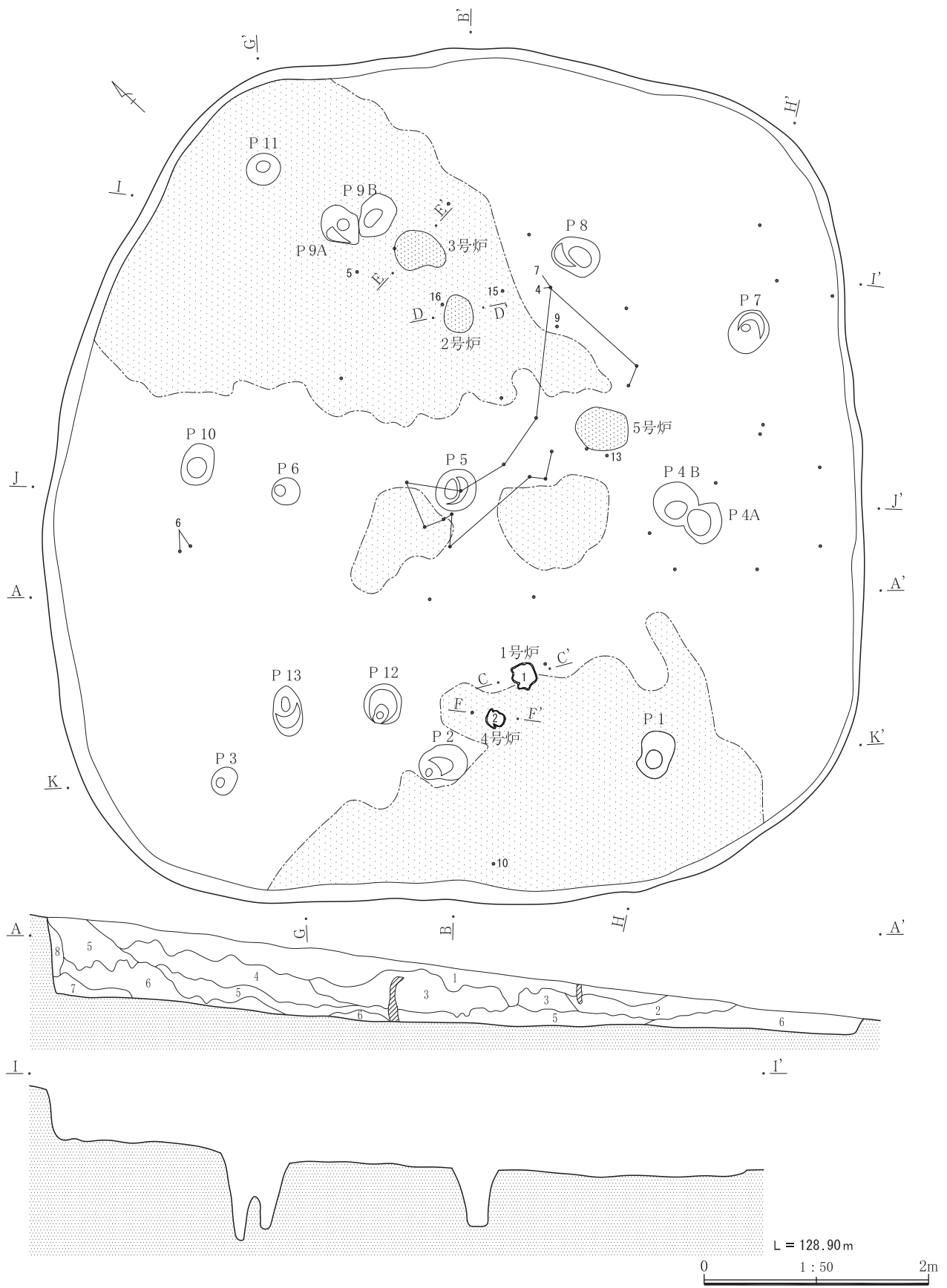
()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	6	7

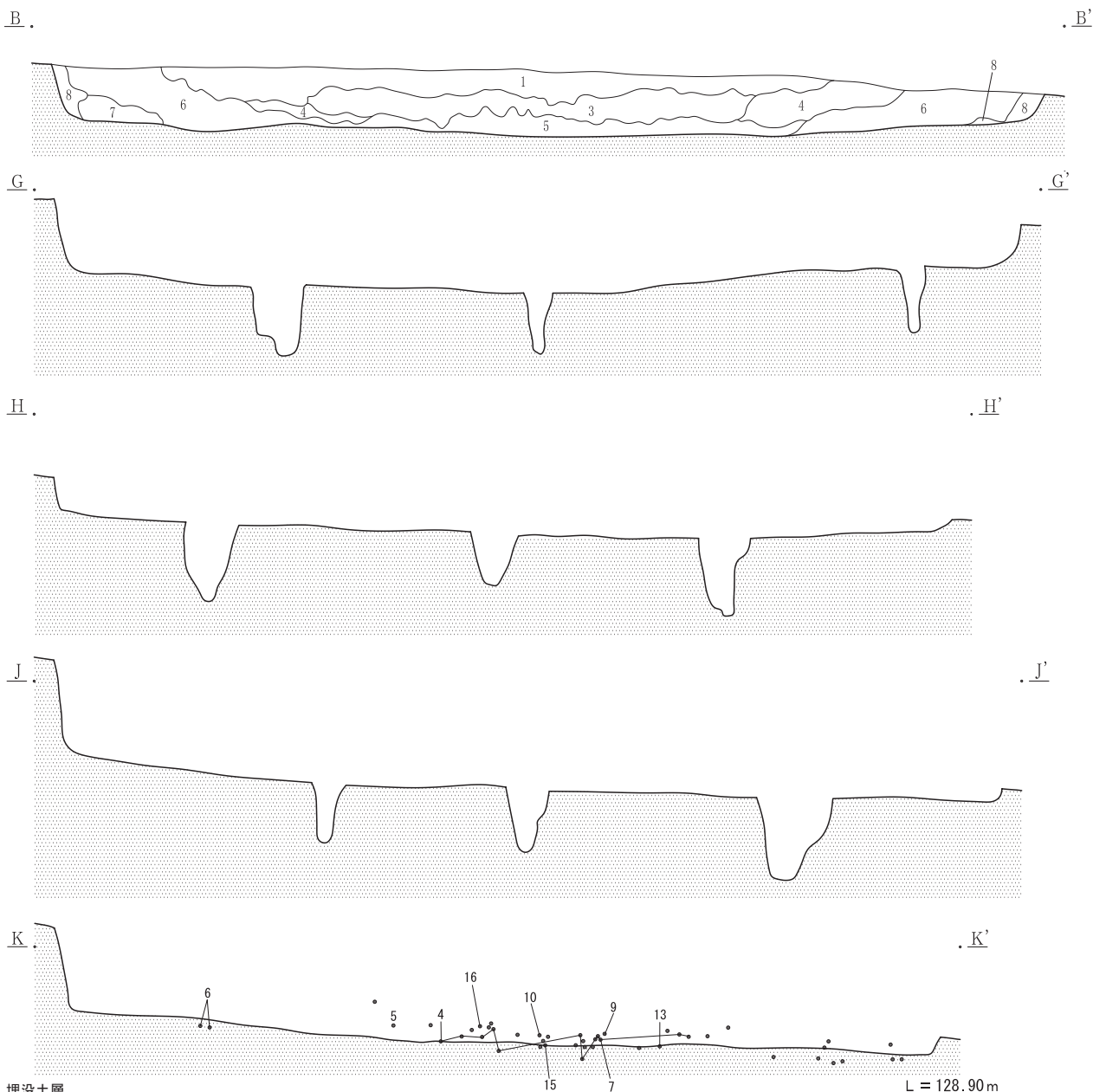
被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1



第 126 图 61 号住居 (1)

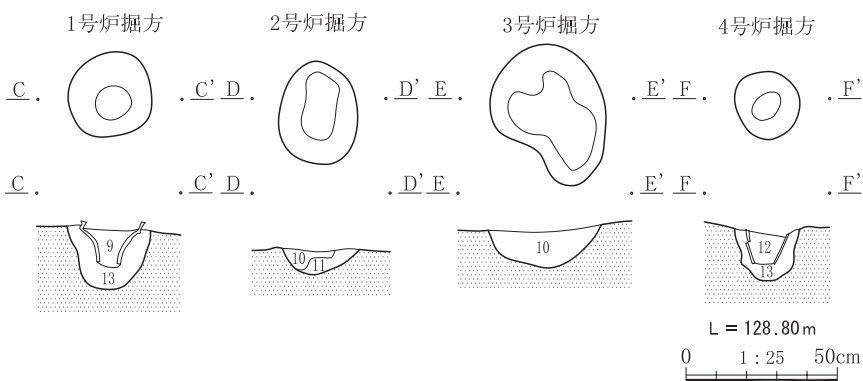
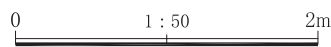
II 今井三騎堂遺跡の調査



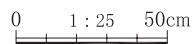
埋没土層

1. 黒色土 (10YR2/1) と黒褐色土 (10YR2/3) が等比率混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
2. 黒色土・黒褐色土・ローム土が等比率混入。
3. 黒色土を主体に黒褐色土が 15% 混入。
4. 黒褐色土とローム土が等比率混入。
5. ローム土を主体に黒色土と黒褐色土が 30% 混入。
6. ローム土を主体に黒褐色土が 30% 混入。
7. 黒褐色土を主体にローム土が 20% 混入。中量の焼土・炭化物粒含有。
8. ローム土を主体に黒褐色土が 10% 混入。
9. ローム土を主体に黒褐色土が 30% 混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
10. 黒褐色土を主体にローム土が 30% 混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
11. ローム土を主体に黒褐色土が 30% 混入。少量の焼土・炭化物粒含有。
12. 黒褐色土を主体にローム土が 5% 混入。多量の焼土・炭化物粒含有。
13. ローム土を主体に黒褐色土が 10% 混入。

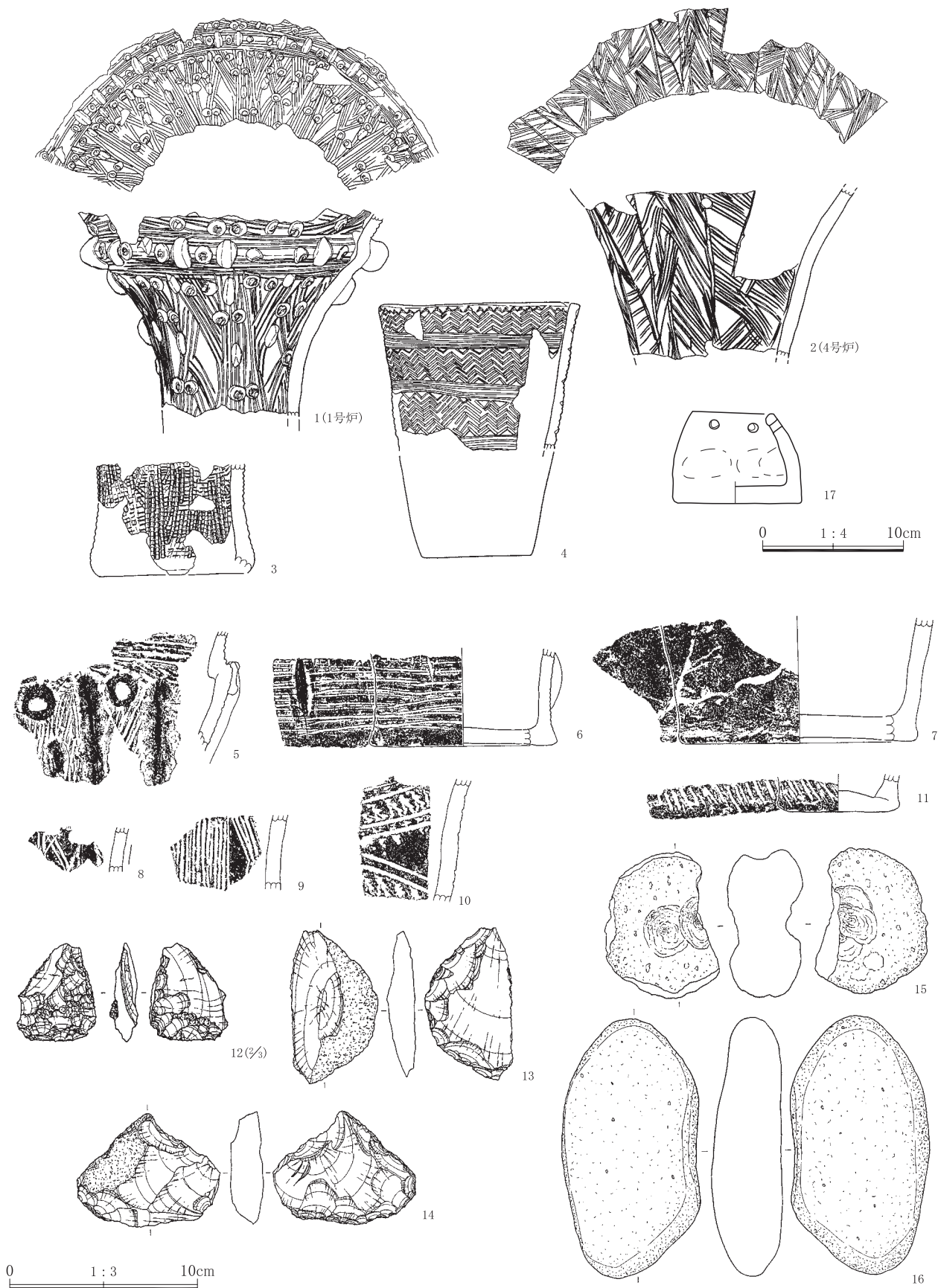
L = 128.90m



L = 128.80m



第 127 図 61 号住居 (2)



第 128 图 61 号住居出土遺物

● 62号住居

位置 G J -129

写真 P L 56

面積 不明

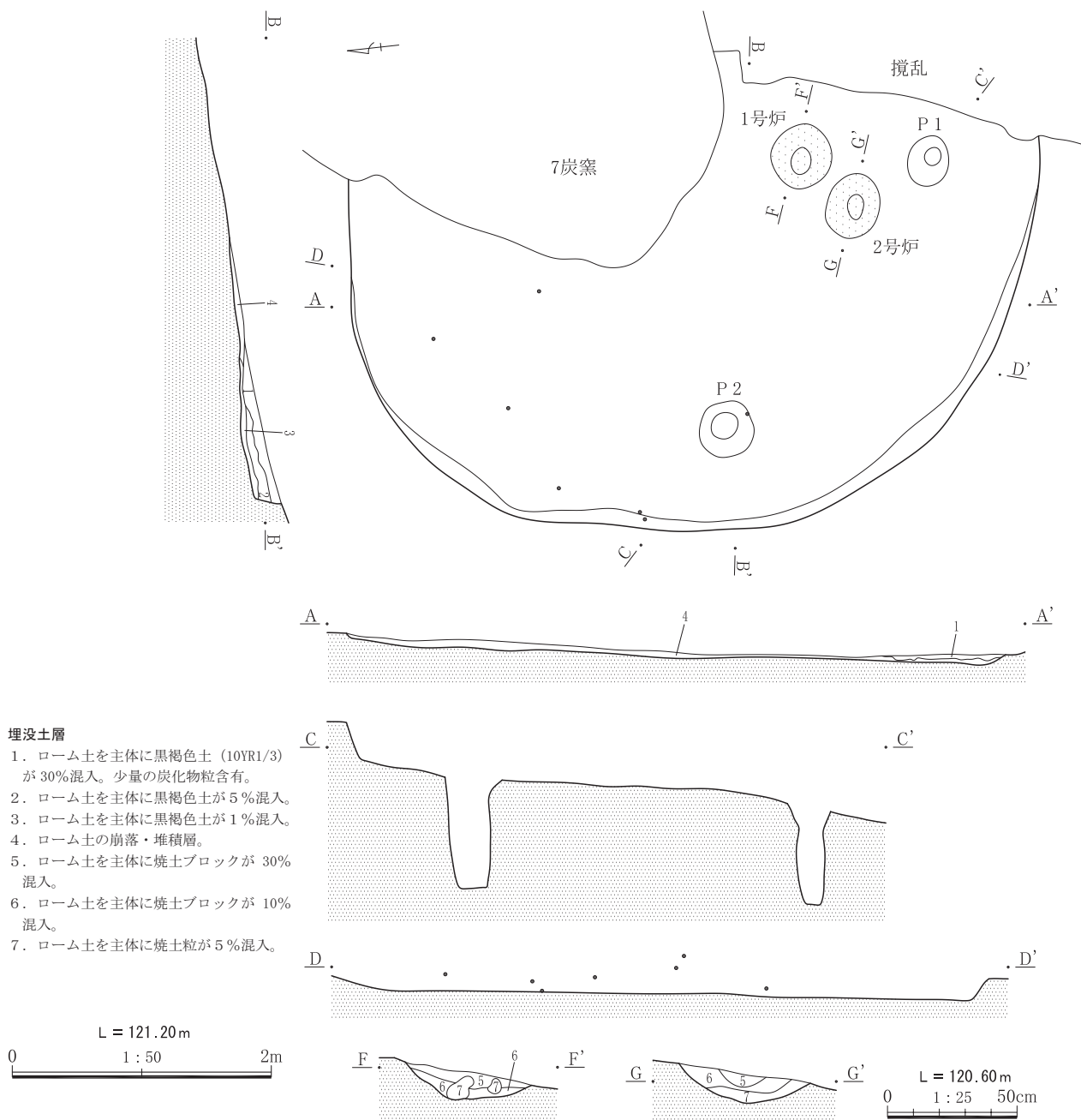
方位 N 8 度 E

重複 東半部が平安時代の7号炭焼き窯と後世の攪乱により削平されている。

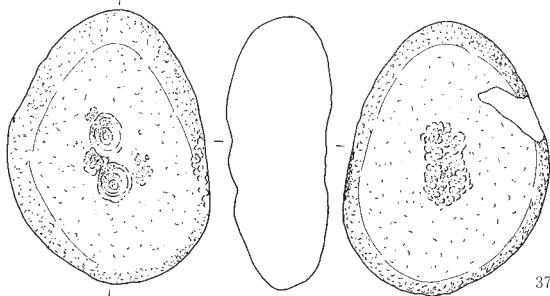
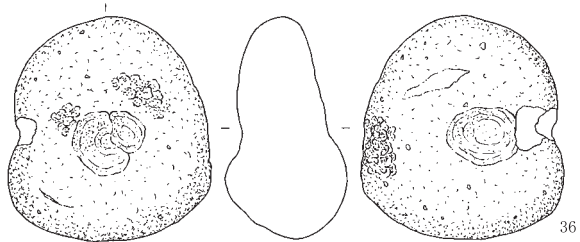
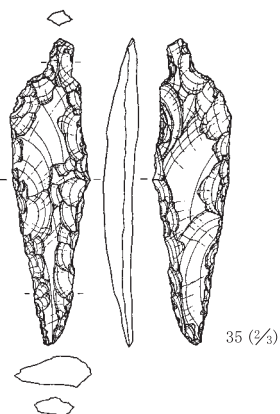
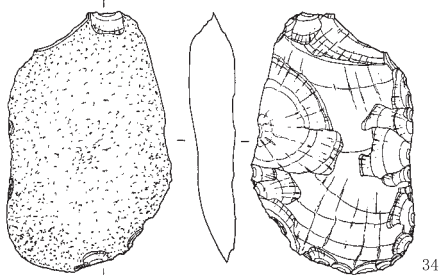
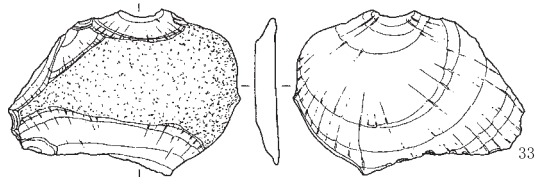
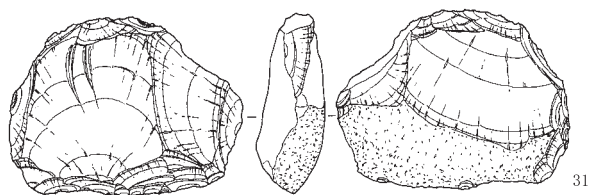
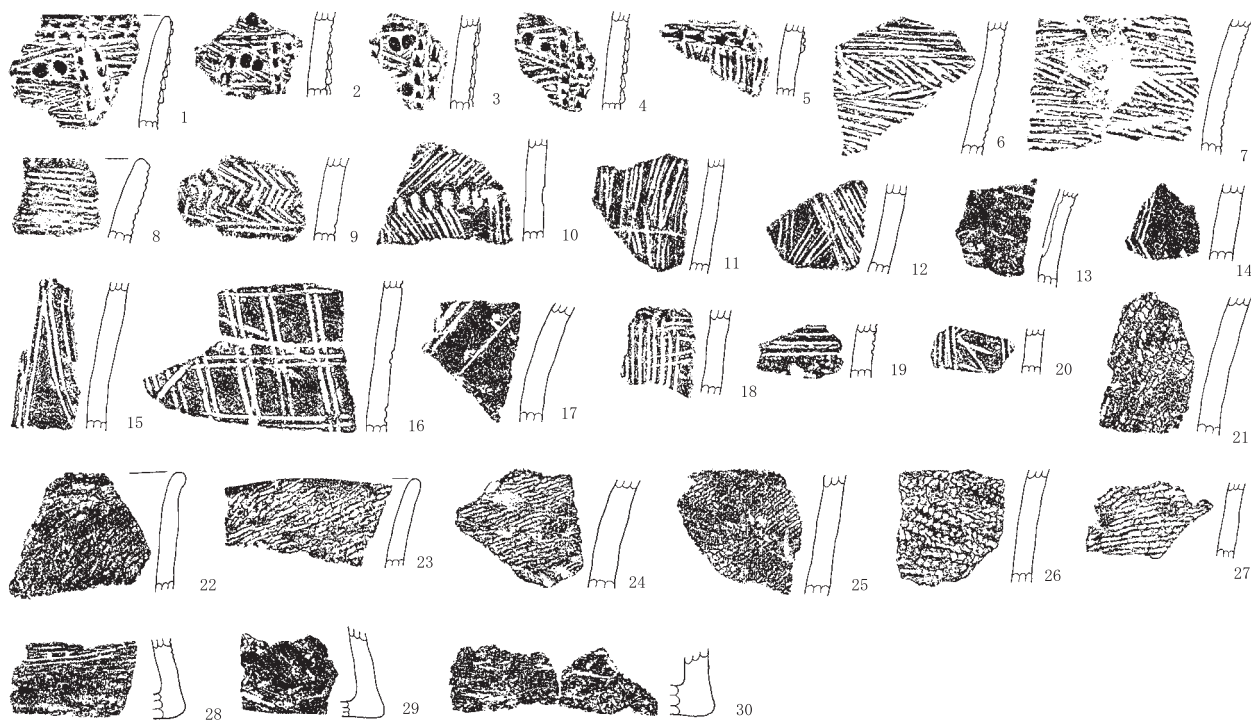
形状 他遺構との重複により西半部が残存するのみで、全体形状は判然としないが、斜面地の等高線方向にほぼ並行して、南北に長軸を持つ隅丸方形状を呈す

ると推定される。規模は長辺 5.33 m、深さ 27 cm である。四辺の壁面は約 70 ~ 80 度の垂直に近い角度で掘り込まれ、残存する各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 床面中央部からやや南壁寄りに、2基が確認された。1・2号ともに深度の浅い楕円形状の掘り込み炉であり、1号が長径 50 × 短径 47 × 深さ 25 cm、2号が長径 50 × 短径 40 × 深さ 20 cm の規模を持つ。埋



第 129 図 62号住居



0 1:3 10cm

第 130 图 62 号住居出土遺物

II 今井三騎堂遺跡の調査

没土の上・中位には、かなり多量の焼土の堆積が認められる。尚、両炉の時間的な併行・先後関係は不明である。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、2本が確認されているだけであるが、その配置状況から見て、4本主柱の構造と考えられる。各主柱穴の芯心間の距離は、P1～P2：2.65 mである。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：39×80 cm、P2：42×89 cmである。

床面 勾配約11度の斜面地のローム層（VI・VII層）を最大27 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約30 cmの比高差で西側から東側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 平均層厚約10 cmの1～4層が堆積しているが、薄層のために全体的な埋没状況は判然としない。

遺物 総数95点の遺物（土器69、石器26）が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、その全てが床面から10 cm前後浮いた状態で出土した。土器は、諸磯c式の結節浮線文5点（1～5）、集合沈線文20点（6・7～9～20・28）、縄文6点（21～25・27）、構成不明5点（29・30）、集合沈線文+貼付文1点の他に、稲荷台式2点、諸磯a式1点（26）、同b式8点、型式不明13点などがある。尚、2～5、8・9の各破片は、各々同一個体である。石器には、石匙1点（35）、削器6点（32～34）、礫器1点（31）、磨り石類4点（36・37）、剥片12点、礫塊2点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。また、黒曜石製の製品や剥片類2点の内の1点について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2（星ヶ塔）という結果を得ている。

当住居の時期に関しては、出土土器が諸磯c式新段階を主体とすることから、当該期の所産と想定される。

（観察表：20・31頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【62号住居出土遺物の分類一覧】

（土器）

型式別点数

型式	稲荷台	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	2	1	8	39	13	63

分類別点数

諸磯a式		諸磯b式			
分類	4a類	分類	2類	3類	4類
合計	1	合計	1	4	3

諸磯c式

分類	1類	2類	3類		4類		不明		
種別	不明	a	c	d	不明	c		d	不明
合計	1	5	13	3	5	6	2	3	1

縄文原体別点数

諸磯a式		諸磯c式			
分類	2b	分類	1a	2a	18
合計	1	合計	5	1	23

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a	諸磯c
A		1	27
B		—	1
D		—	1

（石器）

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他		総計
器種	石匙	削器類	礫器	磨石類	剥片	礫塊	
合計	1	6	1	4	12	2	26

分類別点数

石錐		搔器・削器		磨石類				
分類	2類	分類	1類	2類	分類	2類	4類	5類
合計	1	合計	2	4	形態	abc	bc	a
					合計	1	1	2

石材別の点数と重量

石匙			搔器・削器			礫器		
コード [°]	1		コード [°]	1	7	12	コード [°]	3
点数	1		点数	4(3)	1	1	点数	1
重量	37.4		重量	(244)	未計測	未計測	重量	170
磨石類			剥片			礫塊		
コード [°]	4		コード [°]	1	7	12	コード [°]	4
点数	4(2)		点数	9	2	1	点数	2
重量	(726)		重量	未計測	未計測	未計測	重量	未計測

礫塊の被熱状況

（ ）内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

分類	2	総計
合計	2	2

● 63号住居

位置 FD-141

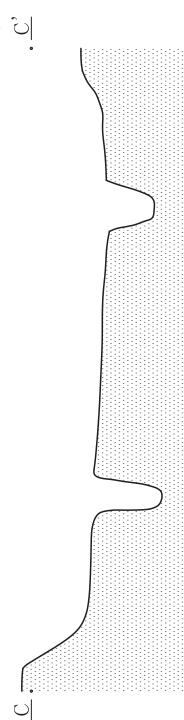
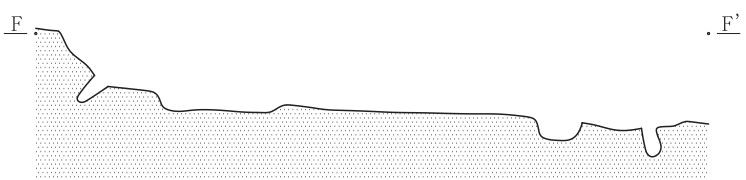
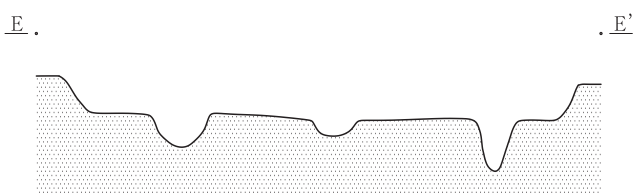
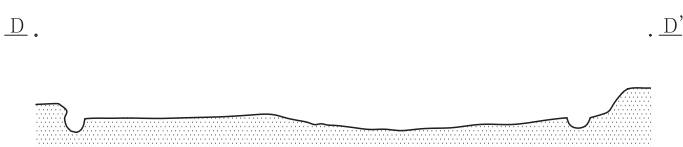
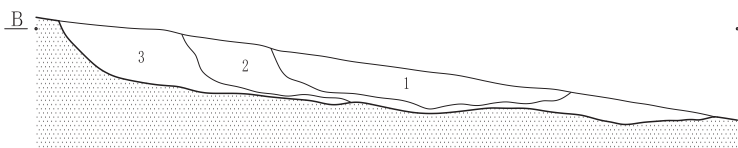
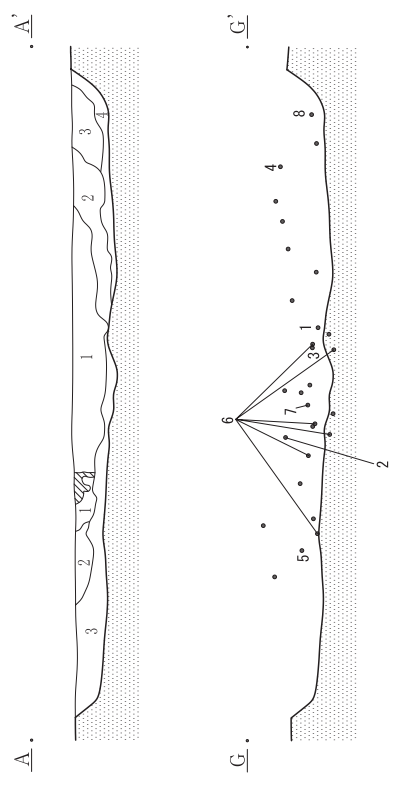
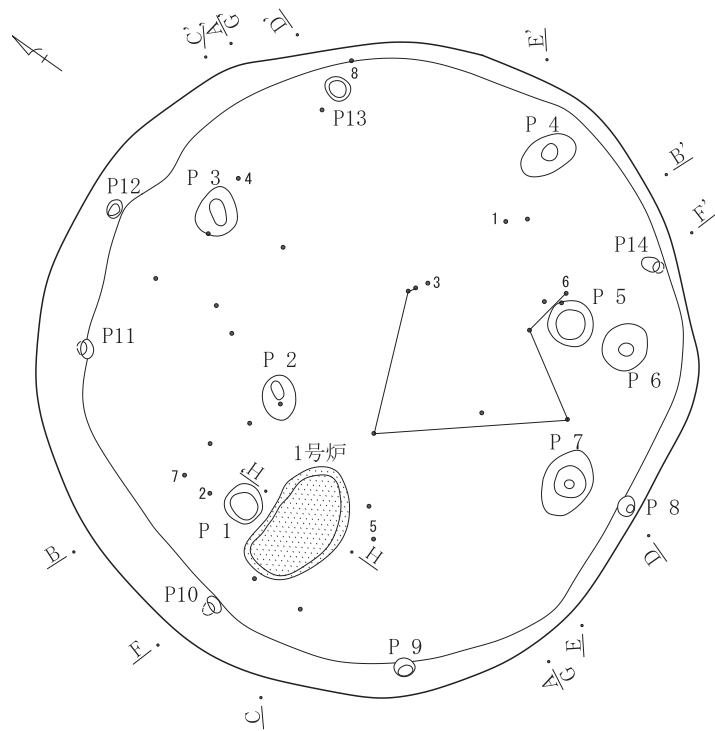
写真 PL 57

面積 12.15 m²

方位 N 41度W

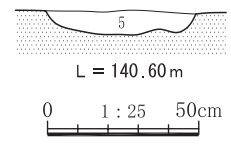
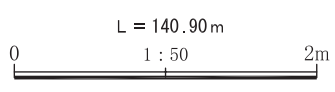
形状 斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ円形状を呈し、規模は長軸4.42 m×短軸4.32 m、深さ5～45 cmである。壁面は約50～60度の緩い角度で掘り込まれている。

炉 床面中央部から西壁寄りに、1基が確認された。地床炉に近似した深度の浅い楕円形状の掘り込み炉であり、長径85×短径49×深さ8 cmの規模を持つ。埋没土中には、少量の焼土・炭化物粒を含有するのみで、

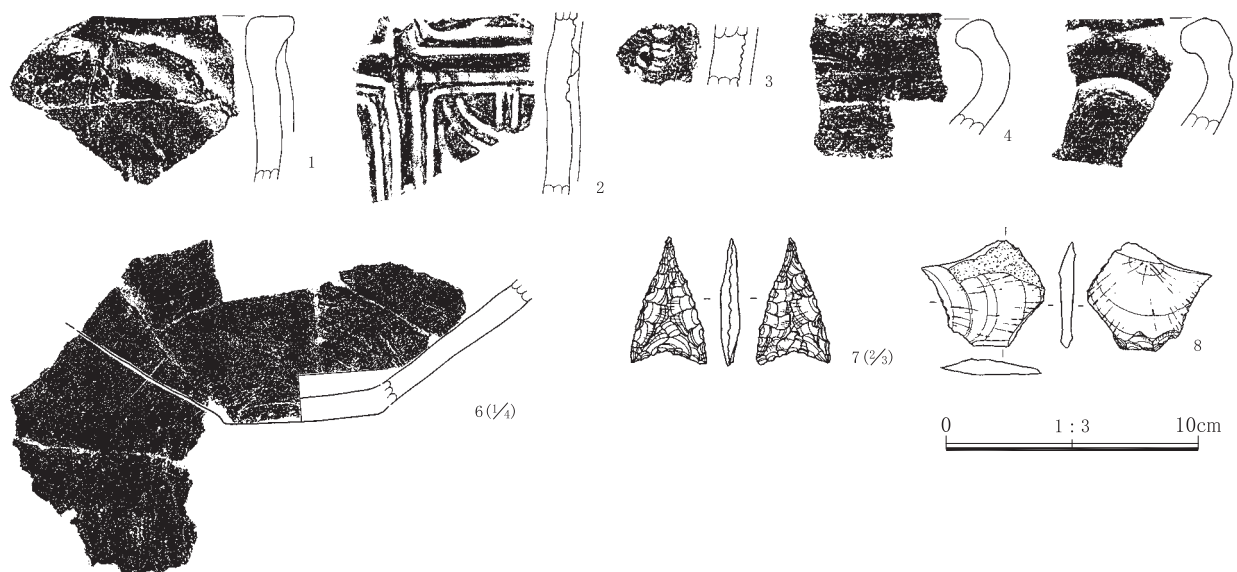


埋没土層

1. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が 10～20% 混入。少量の炭化物粒を含む。
2. 黒褐色土を主体にローム土が 20%前後混入。少量の炭化物粒を含む。
3. ローム土を主体に黒褐色土が 20%混入。
4. ローム土の崩落・堆積層。
5. ローム土を主体に暗褐色土 (10YR3/4) が 20%混入。少量の焼土・炭化物粒含有



第 131 図 63号住居



第 132 図 63 号住居出土遺物

壁面も被熱の痕跡に乏しい。

柱穴 明瞭な掘り込みを持つ柱穴は、主柱に比定される P1～P7 の 7 本と、周壁際を巡る支柱穴の P8～P14 の 7 本が確認されている。主柱については、その配置状況から見て、P1－P3－P4－P7 の 4 本をメインとする構造と考えられる。支柱穴は、P12・P13 を除いて 45～70 度の斜位に掘り込まれており、垂木の根元が堅穴内に敷設された可能性も窺える。上記主柱穴の芯心間の距離は、P1～P3：1.95 m、P3～P4：2.25 m、P4～P7：2.20 m、P7～P1：2.20 m である。また、各柱穴の規模（径×深さ）は、P1：26×37 cm、P2：30×45 cm、P3：34×32 cm、P4：29×34 cm、P5：31×10 cm、P6：32×22 cm、P7：32×22 cm、P8：14×9 cm、P9：13×9 cm、P10：12×6 cm、P11：14×6 cm、P12：13×8 cm、P13：17×9 cm、P14：14×19 cm である。

床面 勾配約 9 度の斜面地のローム層（VI・VII 層）を最大 45 cm 掘り込んで床面を構築する。若干の凹凸面を持ち、自然地形と同様に約 38 cm の比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。また、炉の周辺を中心にして若干の踏み固めによるやや堅緻な面が認められる。

埋没土 平均層厚約 25 cm の 1～4 層がレンズ状に堆

積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示している。

遺物 総数 36 点の遺物（土器 23、石器 13）が存在するが、床面に密着したものは皆無であり、その全てが埋没土上位の 1・2 層を中心に床面から浮いた状態で出土した。土器は、阿玉台Ⅲ式 1 点（1）、井戸尻式 8 点（2・4～6）、藤内式 1 点（3）、中期前半 2 点の他に、井草式 2 点、稲荷台式 3 点、黒浜式 2 点、諸磯 b 式 3 点などがある。石器には、石鏃 1 点（7）、削器 1 点（8）、剥片 11 点などが組成するのみであり、器種・数量ともに極めて乏しい。

当住居の時期に関しては、僅少なながらも出土土器が中期前半の阿玉台Ⅲ式や井戸尻式を主体とすることから、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式平行期の所産と想定される。

（観察表：20・31 頁）

その他 周溝は検出されなかった。

【63号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	稲荷台	黒浜	諸磯b	阿玉台Ⅲ	藤内
合計	2	3	2	3	1	1

井戸尻	中期前半 不明	時期不明	総計
8	2	1	23

分類別点数

黒浜式		諸磯b式	
分類	3類	分類	2類 3類
合計	2	種別	不明 不明
		合計	1 2

縄文原体別点数

黒浜式		阿玉台Ⅲ式	
分類	18	分類	18
合計	1	合計	1

藤内式

分類	18	井戸尻式	分類	18
合計	1	合計	8	

胎土別点数

胎土	型式		黒浜	阿玉台Ⅲ	藤内	井戸尻
	A					
	1	1	1	1	8	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		その他	総計
器種	石鏃	削器類	剥片	
合計	1	1	11	13

分類別点数

石鏃		搔器・削器	
分類	2類	分類	2類
合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器		剥片	
コード	2	コード	1	コード	1 3
点数	1	点数	1	点数	10 1
重量	0.9	重量	14.7	重量	未計測 未計測

● 64号住居

位置 FM-165

写真 PL 57

面積 8.98 m²

方位 N 5 度 E

重複 南西隅で時期不明の178号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

形状 西辺側を後世の攪乱で壊されているために不確実ではあるが、斜面地の等高線方向にほぼ直交して、南北に長軸を持つ隅丸台形状を呈すると推定される。規模は長辺3.60 m×短辺約3.4 m、深さ3～29 cmである。残存する壁面は約60度前後の緩い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 精査にもかかわらず、炉に認定し得る痕跡は検出されなかった。

柱穴 その配列や掘り込み形状などから、柱穴と認定できるものは検出されなかったが、床面中央部からやや北壁寄りに、直径55 cm、深さ35 cmの円形状の落ち込みが存在する。

床面 勾配約10度の斜面地のローム層(VI・VII層)

を最大29 cm掘り込んで床面を構築する。凹凸面は少ないが、自然地形と同様に約34 cmの比高差で北側から南側方向へ緩傾斜している。また、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 平均層厚約20 cmの1・2層が堆積するが、薄層のために全体的な埋没状況は判然としない。

遺物 僅かに総数6点の石器が存在するのみであるが、3・4は床面に密着し、その他は埋没土中より出土した。器種は、削器1点(1)、磨り石類2点(2・3)、多孔石1点(4)、礫塊2点などが組成する。

当住居の時期に関しては、出土土器が皆無であることから、不明である。(観察表:31頁)

その他 周溝は検出されなかった。

【64号住居出土遺物の分類一覧】

(石器)

器種別点数

系列	打製系列	使用痕系列	その他	総計
器種	削器類	磨石類	石皿 礫塊	
合計	1	2	1 2	6

分類別点数

搔器・削器		磨石類		石皿	
分類	2類	分類	3類 4類	分類	5類
合計	1	形態	ac a	合計	1
		合計	1 1		

石材別の点数と重量

搔器・削器		磨石類		石皿		礫塊	
コード	3	コード	4	コード	4	コード	4
点数	1	点数	2	点数	1	点数	2
重量	42.5	重量	835	重量	1020	重量	未計測

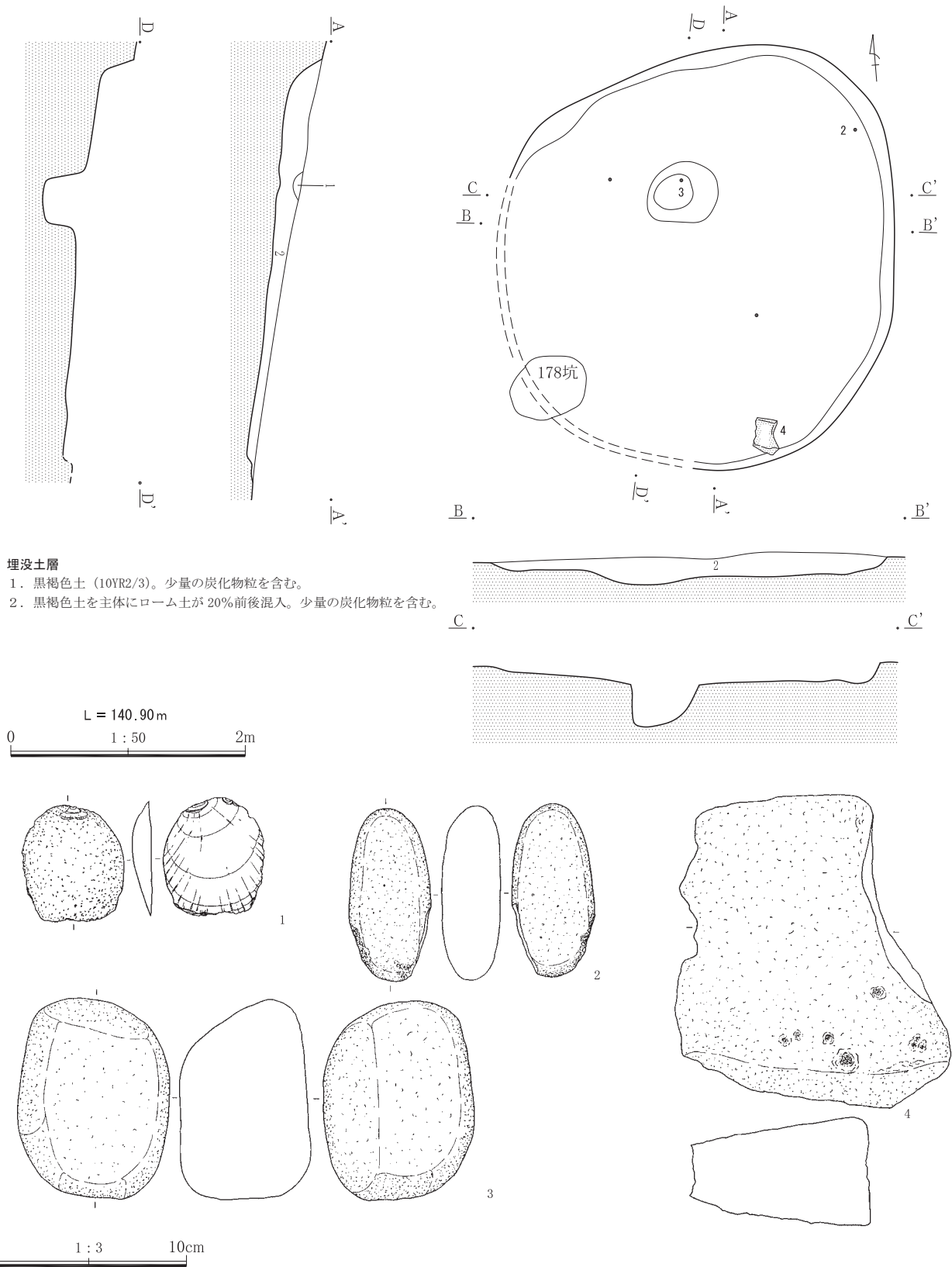
礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	1	2

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1

II 今井三騎堂遺跡の調査



第133図 64号住居と出土遺物

● 65号住居

位置 FE-140

写真 PL 57

面積 7.35 m²

方位 N 50度W

形状 斜面地の等高線方向にほぼ並行して、東西に長軸を持つ隅丸正方形を呈し、規模は長辺 3.41 m × 短辺 3.06 m、深さ 13 ~ 29 cm である。四辺の壁面は約 60 度の緩い角度で掘り込まれ、各辺はやや外湾気味に張り出している。

炉 精査にもかかわらず、炉に認定し得る痕跡は検出されなかった。

床面 勾配約 9 度の斜面地のローム層 (VI・VII層) を最大 29 cm 掘り込んで床面を構築する。かなり激しい凹凸面を持ち、自然地形と同様に約 40 cm の比高差で北西側から南東側方向へ傾斜している。また、踏み固めによる硬化面は認められず、全体的に軟弱な床面状態を呈する。

埋没土 薄層ではあるが、平均層厚約 15 cm の 1・2 層が堆積し、斜面上位方向からの自然埋没状況を示すと考えられる。

遺物 出土遺物は皆無であり、従って当住居の時期に関しても判然としないが、埋没土は前期以前の遺構の事例と類似することから、草創期後半あるいは前期段階に比定される可能性が高い。

その他 柱穴と周溝は検出されなかった。

【65号住居出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	総計
合計	6	6

縄文原体別点数

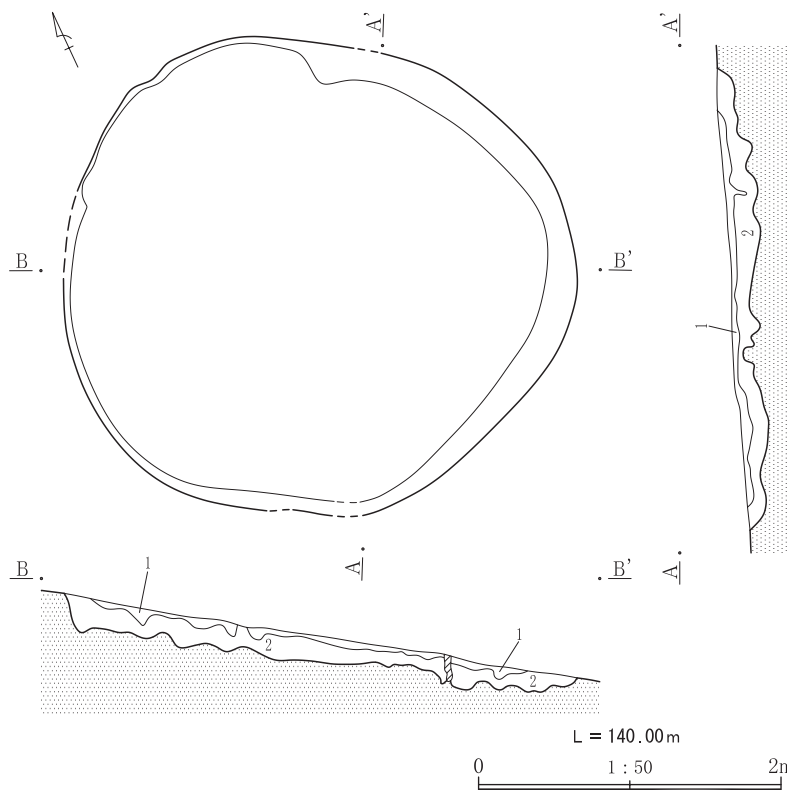
稲荷台式		
分類	9b	18
合計	3	1

分類別点数

稲荷台式		
分類	3	不明
合計	4	2

胎土別点数

胎土	型式	稲荷台
A		4



埋没土層

1. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が 10 ~ 20% 混入。少量の炭化物粒を含む。
2. 黒褐色土を主体にローム土が 20% 前後混入。少量の炭化物粒を含む。

第 134 図 65号住居

3. 土 坑

1～6区の各調査区において、IV・V層の縄文遺物包含層を調査・除去後にVI層のローム土上面で、総計445基の土坑の検出・調査を行った。帰属時期を指示するような遺物を伴出する土坑は、全体の40%弱の172基にとどまるが、完形土器を含む一括遺物を出土する土坑は僅少であり、複数期にわたる土器片が混入するケースが多見されることから、時期決定にあたっては数量的に主体を占める土器型式を重視した。その内訳は草創期後半53基、前期黒浜式期4基、諸磯a式期20基、同b式期65基、同c式期25基、中期6基となる。残り272基の土坑については、時期比定が困難であるが、埋没土の内容観察や堅穴住居との位置関係を考慮すれば、その大半が諸磯a～c式期を中心とした前期に帰属する可能性が高い。

この埋没土層については、前述した堅穴住居の場合と同様に、前期の各土坑相互間で類似性が認められることから、その内容的な記述を以下のように類型化した。また、草創期や中期の土坑のように、堆積土層の内容がこれと異なる場合には、個別に記載するようにした。

- 1層. 褐色土(10YR4/4)。2層が樹木根により攪乱された部分に相当する。少量の炭化物粒を含む。
- 2層. 黒褐色土(10YR2/2)を主体に褐色土(10YR4/4)が30～40%混入。多量の炭化物粒や微細な白色軽石粒を含む。
- 2'層. 2層に類似するが、ローム土を10%前後混入。
- 3層. 褐色土(10YR4/4)を主体にローム土が20～30%混入。微量の炭化物粒を含む。
- 4層. 褐色土(10YR4/4)とローム土が1:1で混入。少量の炭化物粒を含む。
- 5層. 壁面のローム土の崩落・堆積層。

※ダッシュ付きの土層は、僅かな色調の違いにより分類されることを示す。

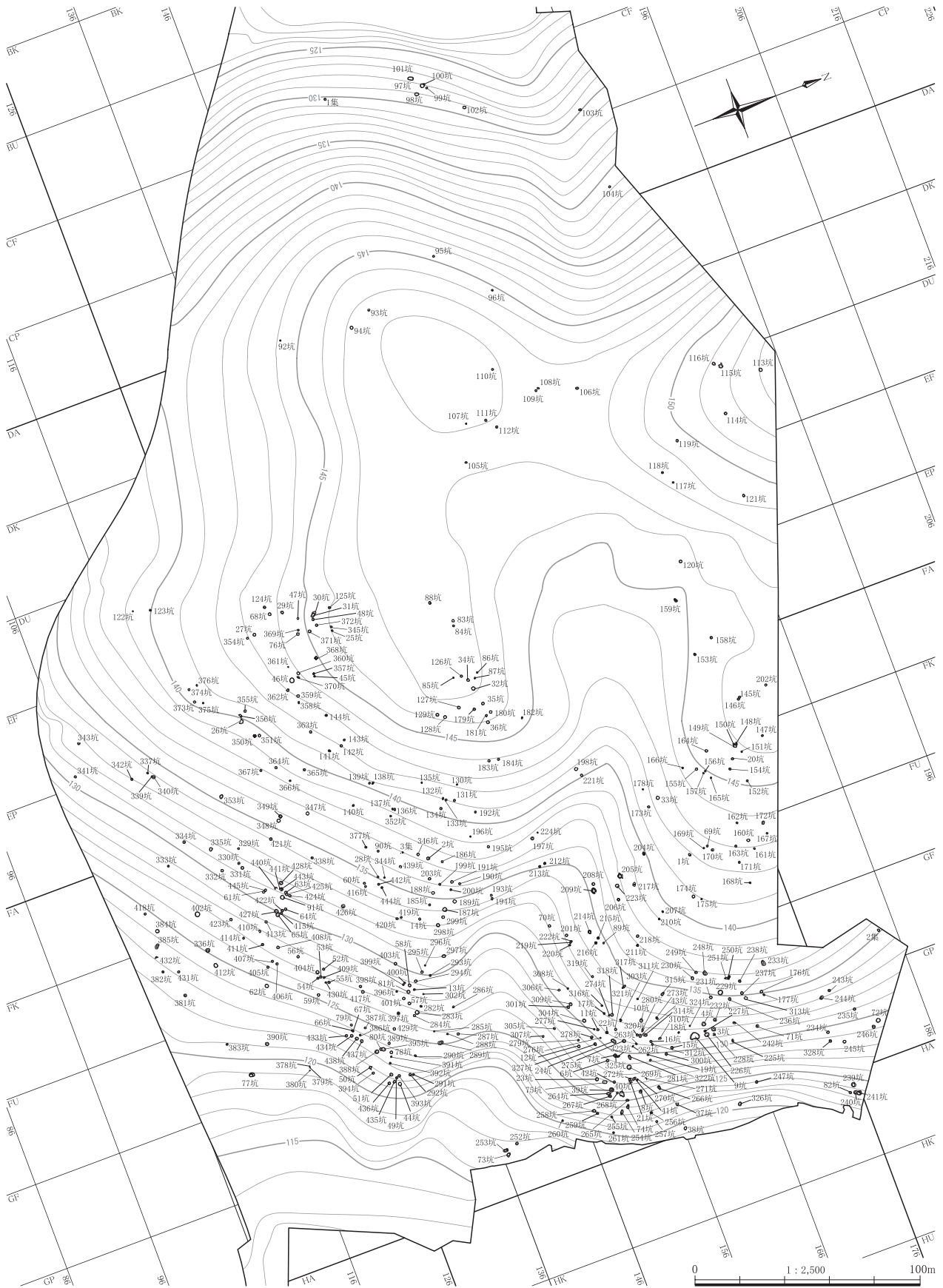
各土坑の規模に関しては、直径1～1.5m、深さ0.5～1m程度のものが最も多く、その平面形も円形

を基本としている。また、断面形状を観察すると、円筒形状を主体として壁面がオーバーハングする袋状のものが客体的に認められるが、元来は袋状を基本形態として廃絶・埋没の過程を経由する中で、その開口部付近が崩落し、最終的に円筒状に変化したものが相当数を占めていると推定される。これら以外には、平面形が楕円形状や不定形なものも僅少認められる。

出土遺物は、埋没土の上・中位を中心にして、土器片や削器・打製石斧・磨り石類・剥片などの石器を少量伴出するケースが多見されるが、前期や中期の土坑を中心にして、複数個の完形土器や石皿などを伴出するものも僅少ながら存在する。前者は貯蔵穴としての機能・用途を、また後者は墓坑的な用途を各々想定できるが、形態的には両者ともに円形・袋状を基本にしており、大差が認められない。また、草創期後半や前期の土坑からは、黒曜石製の製品や剥片類の出土がかなりの頻度で認められるが、内容的に良好な9基(15・39・40・65・72・76・82・301・310号)の黒曜石について、X線回折試験による産地同定を実施しており、それらの具体的な分析内容については、691頁の「IV 科学的分析」を参照されたい。

各土坑の中心的分布域は、堅穴住居が集中する丘陵頂部の東側斜面に相当する3～6区であり、特に3・4区での分布が密である。こうした傾向は、土坑と堅穴住居とが相互に密接な関係を保持していることと共に、土坑が集落内に設置されていることを示している。また、両者の関係で注目されるのは、諸磯a～c式期の33・36・51・60号住居などでは、廃絶後の埋没過程で掘り鉢状を呈する段階において、ほぼその中央部に土坑が掘り込まれている点である。基本的には、土坑の掘削に伴う労力の省力化を意図した可能性が高いが、集落の継続性や各土坑の機能・用途という側面からも検討が必要であろう。

尚、各土坑の規模・形状・出土遺物等については195頁の第2表を、また遺物の分類や個別の内容については別巻20～26・31～32頁の観察一覧を参照頂き、ここでは各時期別に見た土坑の特徴や様相について、概括的な記述を行うことにする。



第 135 図 今井三騎堂遺跡の土坑の分布

(1) 草創期後半の土坑

概要 当該期には1～19号(第136・140・141図)の他に、出土遺物が僅少なために確定的ではないが、163・185・187・189・196・206・211・217・219・220・226・227・230・262・272・275・281・298・307・311・313～318・323・354・401・411・435・439・442・444号など、合計53基が存在する。各土坑の平面形態は、円形を基調とするものが大半を占めているが、楕円形状(5・217・230・262・264・281・314・315・323号)や不定形(9号)なものも、僅かに認められる。また、断面形状では、円筒形状のものに混じって壁面がオーバーハングして袋状を呈するものも存在するが、4基(11・14・15・307号)のみであり、むしろ例外的な存在とも言える。規模的には、長径1m前後、深度50～80cmのものが主体的であるが、深度については30～50cmあるいは20cm未満の浅いものも少なからず認められ、斉一的な状況ではない。

埋没状況では、黒褐色土を中心に自然堆積を示すものが多数を占めているが、多量のローム土の混入が認められる11・12・307・318・323号などは、人為的な埋填状況を窺うことができる。こうした埋没状況の差異が、機能・用途の差異を反映したものか否か断定できないが、貯蔵穴に限定されない可能性も考慮される。

遺物は、土器片を主体にしていずれの土坑でも10～20点前後の出土数量が認められるが、前期の土器片も存在することから、多少の混入があると思われる。9号土坑では、228点(土器142、石器86)もの遺物を出土する点で注意されるが、その大半が埋没土中からの出土であり、特筆されるような出土状況は認められない。

各土坑の時期について出土土器から判断すれば、夏島式期の14号を除いて全て稲荷台式期に比定することができる。これらは住居周辺に散在しており、各住居に付随して貯蔵穴が設置されていることを示す。

いくつかの土坑について若干補足すれば、5・9号のように不定形かつ大規模なものは、小形住居的な様

相も認められ、機能・用途的にも検討を要する。また、317号土坑は、平・断面形状や底面の小ピットの状況から見て陥穴の可能性が高く、同様に18号は木柱を敷設したピットの、不定形な平面形状や凹凸のある底面を持つ3・8・13・18・217・226・281・314・315号などは、倒木や小動物による攪乱の痕跡の可能性が高い。

出土遺物(第137～139図) 稲荷台式は、太めの原体を用いた条間隔のやや粗いものや無文のものが主体を占め、新しい様相を呈している。原体はRの絡条体が主体で、Lや縄文は僅少である。胎土は、Aタイプを主体に結晶片岩を含むDタイプも僅かに見られる。尚、1号の2・3、4号の13～15、5号の17～21、9号の2・11、15・16、18・21、41・49などの土器片は、各々同一個体である。

一方、出土石器の中で主体を占めるのは、剥片類217点であるが、磨石類7点、石鏃・削器・スタンプ形が各5点、打製石斧4点、三角錐形2点なども少量ながら散見される。磨石類は、不定形礫を素材として両面に凹み穴、磨耗痕や敲打痕が組成するものが目立つ。10号の短冊形の磨製石斧については、諸磯式期のものに対比され、いわゆる礫斧状の局部磨製ではないことも含めて混入品の可能性が高い。使用石材を総点数で比較すると、打製系列では黒色頁岩が38%を占め、チャート44%、ホルンフェルス19%、黒曜石1%などがある。使用痕系列では、粗粒輝石安山岩73%を筆頭に、ひん岩13%、牛伏砂岩1%などがあり、複合技術系列では変玄武岩のみが認められる。打製系列と関係する石核や剥片は、黒色頁岩が8割を占めて他を圧倒しており、その優越性が窺える。また、砂岩の原石・剥片も存在するが、これは打製系列の打製石斧や削器類との関係性が想定される。

尚、15号出土の黒曜石製品1点(第139図15坑3)について、X線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

【夏島式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	総計
合計	2	2

分類別点数

夏島式		
分類	2b	3
合計	1	1

縄文原体別点数

夏島式		
分類	2b	2d
合計	1	1

(石器)

胎土別点数

胎土	型式	夏島
A		2

器種別点数

系列	その他	総計
器種	礫塊	
合計	1	1

礫塊の被熱状況

分類	2	総計
合計	1	1

石材別の点数と重量

コト ^o	4
点数	1
重量	未計測

【稲荷台式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	花積下層	諸磯a	諸磯b	諸磯c	時期不明	総計
合計	16	280	1	7	2	1	35	342

分類別点数

夏島式					
分類	1b	2b	2c	3	不明
合計	1	1	1	12	1

稲荷台式

分類	1a	2a	3	4	不明
合計	8	1	46	43	182

花積下層式

分類	2類
合計	1

諸磯a式

分類	4類
合計	7

諸磯b式

分類	2類	3類
合計	1	1

諸磯c式

分類	3類
合計	1

縄文原体別点数

夏島式				
分類	2b	9a	9b	19b
合計	6	1	7	1

稲荷台式					
分類	2b	9a	9b	18	19b
合計	1	4	45	46	2

胎土別点数

胎土	型式	夏島	稲荷台
A		9	81
B		6	11
D		-	6

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列				複合技術系列	その他				総計
器種	石鏃	削器類	打斧	三角錐形	スラブ形	磨石類	石皿	砥石	磨製石斧	剥片	石核	自然石	礫塊	
合計	5	5	4	2	5	7	1	2	1	217	4	2	8	263

分類別点数

石鏃				
分類	2類	4類	9類	
合計	1	1	3	

搔器・削器

分類	1類	2類	3類
合計	1	3	1

打製石斧

分類	8類
合計	4

三角錐形石器

分類	1類	5類
合計	1	1

磨製石斧

分類	2類
合計	1

スタンプ形石器

分類	1類	3類
合計	4	1

磨石類

分類	2類	4類			
形態	b	a	ab	abc	ac
合計	1	3	1	1	1

石皿

分類	5類
合計	1

砥石

分類	1類	2類
合計	1	1

石材別の点数と重量

コト ^o	2	12
点数	4 (3)	1
重量	(5.3)	0.9

コト ^o	1	2
点数	2	3
重量	未計測	未計測

コト ^o	1	3
点数	2	2
重量	未計測	未計測

コト ^o	1
点数	2 (1)
重量	(108)

コト ^o	4
点数	1
重量	未計測

スタンプ形石器

コト ^o	4	20
点数	3 (1)	2
重量	(468)	953

剥片

コト ^o	1	2	3	4	7	9	12	33	不明
点数	172	17	3	1	5	13	2	3	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

磨石類

コト ^o	1	4
点数	1	6 (2)
重量	149	(378)

砥石

コト ^o	4	23
点数	1	1
重量	10.2	48.8

磨製石斧

コト ^o	10
点数	1
重量	57.8

石核

コト ^o	1	9
点数	2	2
重量	未計測	未計測

礫塊

コト ^o	4
点数	8
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	3	5	8

被熱礫の石材別点数

コト ^o	4
点数	3

(2) 前期の土坑

A. 黒浜式期

概要 20・22号(第141図)の2基の他に、不
 確実ではあるが320・321号の合計4基が存在する。
 平面形状はともに円形を基本としており、20・320号
 の断面形状は壁面がオーバーハングする袋状を呈して
 いる。規模的には、長径が1m前後と小規模であり、
 深度は50cm以上を測るものと30cm未満の浅い両者が

認められる。各土坑の埋没状況は、黒褐色土を主体に
 自然埋没するものが多いが、320号などはローム土の
 混土層が互層的に堆積し、人為的な埋填を示唆してい
 る。

遺物については、22号の埋没土上位で横転したほ
 ぼ完形の深鉢土器(第142図22坑1)が認められる
 他は、各土坑ともに小破片の土器と剥片・砥石などの
 石器が存在する程度で、特徴的な出土状況は見られな

II 今井三騎堂遺跡の調査

い。ただし、20号では埋没土の中位より90点を越える土器片が出土しており、他とはやや異なったあり方を示している。

当該期の堅穴住居には、28号住居の1棟が存在するのみであるが、20号土坑はこれに比較的近接していることから、同時併存していた可能性が高い。しかし、他の土坑については、いずれも100m以上離れていることから直接的な関係の有無を見極め難いが、いずれにしても1棟あたりの土坑の少なさを窺うことができる。

出土遺物(第142図) 黒浜式が主体的だが、諸磯a式も少量含まれている。小破片のために、その大半が縄文地文を確認できるのみだが、円形竹管文などを施す新段階のもので占められる。原体は、非結束の単節羽状縄文が多い。尚、20号の2・16、22号の2・3などの土器片は、各々同一個体である。

石器は砥石と剥片があるのみで、組成内容が極めて乏しい。剥片の石材は、黒色頁岩を主体にチャート、黒曜石などがある。

【黒浜式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	早期沈線	黒浜	諸磯a	諸磯b	時期不明	総計
合計	7	1	97	18	1	14	138

分類別点数

黒浜式

分類	2d類	2類	3類
合計	1	3	93

諸磯a式

分類	4a類	4類
合計	4	14

諸磯b式

分類	2類
合計	1

縄文原体別点数

黒浜式

分類	12a	12a4d	12d
合計	15	1	1

諸磯a式

分類	2b	6a	12a4d
合計	3	1	1

胎土別点数

胎土	型式	黒浜	諸磯a
A		—	3
C		17	2

(石器)

器種別点数

系列	使用痕系列	その他	総計
器種	砥石	剥片	
合計	1	15	16

分類別点数

砥石

分類	1類
合計	1

石材別の点数と重量

砥石

コード	23	1	2	7	9	33
点数	1	8	4	1	1	1
重量	14.4	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

剥片

コード	1	2	7	9	33
点数	8	4	1	1	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

B. 諸磯a式期

概要 21・23～28号(第141図)の7基の他に、不確実ながら190・209・269・277・349・355・364・402～404・412・426・438号の合計20基が存在している。平面形状は全て円形を基調とするもので占められているが、壁面がオーバーハングして袋状形態を呈するものは、26・27・190・349・355・403・412号の7基であり、他は主に円筒形状である。規模は、直径が1～1.5m程度のものが主体的であり、直径約2m前後のもの(26・209・269・402号)は少ない。掘削深度は、30cmに満たないもの(209・364号)は僅少で、50～80cm前後のものが多数を占める。

各土坑の埋没土は、ローム土を多量に含有した黒褐色土や褐色土が堆積する人為的な埋め戻しが想定されるもの(269・403号)と、黒褐色土がレンズ状や円錐形状に堆積をする前者以外の自然埋没状況を示すものに分かれる。機能的には、両者ともに貯蔵穴としての形態を有しているが、前者の最終的な用途については墓を含めての検討が必要であろう。

出土遺物は、土器の破片を主体に調整剥片や石鏃・打製石斧などの石器が少量認められるが、合計40点以上の遺物を出土する土坑としては、26・27号の2基にとどまる。これらの遺物は、埋没土の上～中位を中心に出土し、その埋没途中で坑内に廃棄されたことを示している。

上記の各土坑は、丘陵の南東斜面の6区を中心に分布しており、同区内に占地する諸磯a式期の29～41号住居との密接な関連性が想定される。尚、当該期に比定された土坑の中で、掘り鉢状の断面形状を持つ24・426号などは、倒木や小動物による攪乱の痕跡の可能性が高い。

出土遺物(第142・143図) 土器には稲荷台式も若干混入するが、諸磯a式の新段階の肋骨文や波状沈線文などが主体を占め、古段階の米字文は少ない。原体は、単節斜縄文のRLを主体に、附加条第1種・1段多条・直前段合燃などがある。胎土は、Aタイプを主体に繊維を含むCタイプも僅かに見られる。尚、掲載

した遺物の中で、24号の4・6・8、27号の8・11、28号の1・3の土器片は、各々同一個体である。

石器は、量的に僅少なながら石鏃・削器・打製石斧・石皿各1点の他に、混入品と考えられるスタンプ形石器がある。25坑6の打製石斧は、「水平回転技法」で作出されている。石材については、打製系列や剥片類は黒色頁岩を、使用痕系列は粗粒輝石安山岩を使用する傾向が認められる。

【諸磯a式期土坑出土遺物】

(土器)

型式別点数

型式	稲荷台	黒浜	諸磯a	諸磯b	時期不明	総計
合計	21	2	137	4	25	189

分類別点数

黒浜式		諸磯b式			
分類	3類	分類	1類	2類	3類
合計	2	合計	1	1	2

胎土別点数

型式	胎土		
	A	C	F
黒浜	—	2	—
諸磯a	37	1	1

諸磯a式

分類	1類		2類					4類		
種別	a	不明	b1	b2	b3	d1	d4	不明	a	不明
合計	4	3	1	1	2	3	1	9	23	90

縄文原体別点数

黒浜式		諸磯a式								
分類	1b	7b	分類	2a	2b	5a	7f	14d	17	18
合計	1	1	合計	1	20	3	5	3	1	6

(石器)

器種別点数

系列	打製系列		使用痕系列		その他			総計	
器種	石鏃	削器類	打斧	スタンプ形	石皿	剥片	自然石		礫塊
合計	1	1	1	1	1	49	1	7	62

分類別点数

石鏃	搔器・削器	打製石斧	スタンプ形石器	石皿					
分類	3類	分類	2類	分類	2類	分類	1類	分類	5類
合計	1	合計	1	合計	1	合計	1	合計	1

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器		打製石斧		
コード	2	コード	9	コード	1	
点数	1	点数	1	点数	1	
重量	0.6	重量	未計測	重量	62.1	
スタンプ形石器		石皿		礫塊		
コード	3	コード	4	コード	4	9
点数	1	点数	1	点数	6	1
重量	未計測	重量	未計測	重量	未計測	未計測
剥片						
コード	1	2	7	9	12	34
点数	40	3	1	2	2	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	1	6	7

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	1

C. 諸磯b式期

概要 29～65号(第144・149・151・155図)の37基と、不確実ながら91・113・124・130・160・173・178・179・201・205・208・261・266・268・300・326・362・372・398・409・417・422・427・428・432・433・436・437号の合計65基が存在し、全時期を通じて最多を数える。

平面形状は、楕円形の2基(41・266号)を除いて、全て円形を基調としている。壁面がオーバーハングして袋状形態を呈するものは、32号をはじめとして全体の1/3に相当する21基が存在し、土坑の基本的形態であることを窺わせる。他の土坑は円筒形状であるが、袋状の開口部上端が崩落して同形状となったものが相当数含まれていると考えられる。

規模については、円形土坑の場合、その約90%が直径1～1.5mの大きさで占められ、掘削深度に関しては50～80cm前後のものが主体的であるが、30cmに満たないものが8基(31・38・48・56・124・130・178・201号)存在し、かなりのバラツキが認められる。また、直径が2m前後のものが3基(39・40・46号)存在しており、数量に差があるものの規模的には大小に二分される。尚、平面形が瓢形の31号は2基の重複と考えられ、また断面形が挿り鉢状の30・41号は倒木や小動物による攪乱の痕跡の可能性が高い。

埋没状況は、黒褐色土を中心にレンズ状や円錐形状に堆積をするものが90%以上を占め、基本的に自然埋没していることを示している。その一方で、32・39・63・91・266号などは、全体的に多量のローム土を混在させており、人為的な埋填状況を窺うことができる。諸磯a式期の土坑で既述したように、こうした差異が用途の違いを反映している可能性もあり、特に大規模な91号のように、底面近くの壁面際に完形の石皿を伏せた状況は、当該遺物が遺体の顔面あるいは足部分を覆っていたと理解することもでき、墓としての用途が推定される。

出土遺物については、総数30点以下の土坑が大半を占め、内容的には土器片を主体に調整剥片や削器・

II 今井三騎堂遺跡の調査

【諸磯b式土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稻荷台	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	中期前半	時期不明	土製品	総計
合計	1	40	8	12	638	13	15	1	157	1	886

分類別点数

諸磯b式

分類	1類					2類					3類					4類						
	a2	d1	e1	e2	不明	b2	b3	c2	e1	f1	f2	g	不明	a1	a2	不明	b	c	不明	a	c	不明
合計	4	2	3	2	12	14	4	1	1	36	18	1	109	7	5	3	7	23	144	58	4	180

土製品

分類	2類
合計	1

諸磯a式

分類	2類	4a類	4類
合計	4	1	7

諸磯c式

分類	2類	3c類	3d類	3類	4類
合計	3	1	1	2	6

浮島・興津式系

分類	2a	2b	3	不明
合計	1	1	4	9

縄文原形別点数

諸磯a式

分類	2b
合計	1

諸磯c式

分類	18
合計	2

浮島・興津式系

分類	18	20a
合計	5	3

諸磯b式

分類	1a	2a	2b	3b	5b	6a	7a	7b	17	18	20a
合計	1	11	128	2	1	6	1	2	9	40	3

胎土別点数

胎土	型式	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興
A		1	196	2	8
B		-	2	-	-
C		-	-	-	-
D		-	5	-	-
F		-	1	-	-

(石器)

器種別点数

系列	打製系列				使用痕系列			複合技術系列		その他				総計
器種	石鏃	石匙	削器類	打斧	スタンプ形	磨石類	石皿	多孔石	剥片	石核	自然石	礫塊		
合計	5	1	7	13	2	14	3	2	254	2	2	17	322	

分類別点数

石鏃

分類	1類	3類	8類	9類
合計	2	1	1	1

石匙

分類	1類
合計	1

搔器・削器

分類	2類	不明
合計	6	1

打製石斧

分類	2類	4類	8類	不明
合計	4	1	7	1

磨石類

分類	2類	3類	4類		5類		
形態	ac	ac	abc	ac	a	ac	b
合計	2	1	4	1	4	1	1

スタンプ形石器

分類	1類	2類
合計	1	1

石皿

分類	4類	5類
合計	1	2

多孔石

分類	4類
合計	2

石材別の点数と重量

石鏃

コード	1	2	12
点数	1	1	3
重量	未計測	1.6	3.5

石匙

コード	7
点数	1
重量	7.2

搔器・削器

コード	1	3	7
点数	4(2)	2(1)	1
重量	94.7	90.5	未計測

打製石斧

コード	1	9	24
点数	11(8)	1	1
重量	438	未計測	66.3

スタンプ形石器

コード	20
点数	2
重量	1127

磨石類

コード	4	21	33
点数	12(6)	1	1
重量	3965	234	未計測

石皿

コード	4	41
点数	2(1)	1
重量	1021	5000

多孔石

コード	4
点数	2(1)
重量	1878

石核

コード	1	9
点数	1	1
重量	223	未計測

剥片

コード	1	2	3	7	9	12	34	37
点数	107	49	2	44	38	12	1	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

自然石

コード	不明
点数	2
重量	未計測

礫塊

コード	4	18
点数	16	1
重量	未計測	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	9	8	17

被熱礫の石材別点数と重量

コード	4	18
点数	16	1

打製石斧・磨石類などの石器類が僅かに組成する程度である。その中でも、32・39・42・47・48・59号では、40点以上の遺物が検出されており、特に32・38号では100点を超える多量の遺物が認められる。ただし、これらの遺物は、埋没土の上・中位を中心に出土しており、各土坑の廃絶後に投棄されたことを示している。また、56号では底面付近から口縁部と底部を欠損する深鉢土器1点（第152図56坑1）やスタンプ形石器が出土するが、後者の石器は混入の可能性が高い。58号では破片ながら土偶が出土しており、注意を要する

各土坑の分布は、東側～南東側斜面にあたる3～6区を中心に分布しており、丘陵頂部付近の2区に1基、西側斜面の1区は皆無という状況である。しかし、土坑のみで密集分布するような状況は見当たらず、基本的に同期の竪穴住居の周縁に近接して設置されていることが窺える。

出土遺物（第143・145～148・150・152～154図）

諸磯b式土器は、古段階の爪形文や平行沈線文が23点に対して、新段階の浮線文や沈線文が373点と多数を占める。また、浮島・興津式系も8点と僅かながら認められる。原体では、単節斜縄文RLが主体を占めるが、無節・1段多条・附加条第1種なども僅かに存在する。胎土はAタイプを基本とするが、僅かながら結晶片岩の砂礫を含むDタイプが、新段階の浮線文に認められる点は注目される。尚、32号の5～7・11・12、16・18・19、27～29、31・33、34号の3～5、35号の1・2、3・4、39号の2・4、8・10、11・12、41号の1・2、3～5、46号の3・4、47号の2・4、48号の1～3・7、4～6、59号の2・4などの破片は、各々同一個体である。

石器には、磨石類14点、打製石斧13点、削器7点、石鏃5点、石皿3点、多孔石2点、石匙1点などがある。打製石斧は、混入品と推定される分銅形1点を除けば全て撥形であり、「垂直敲打技法」により作出されているものが目立つ（35坑9・39坑18・40坑7・58坑7・65坑9）。磨石類は、円・楕円形と不定形状が併存し、両面に敲打痕や磨り面を形成するものが主体的であ

る。使用石材は、打製系列では黒色頁岩が61%を占め、黒曜石12%、ホルンフェルスと黒色安山岩が8%などが主なものである。使用痕系列では、粗粒輝石安山岩65%を中心に行っている。打製系列と関連する石核や剥片も、黒色頁岩が42%、チャート19%、黒色頁岩17%と全体の8割強を占めており、在地の石材を多用している。

これらの遺物の他に、39・40・65号では製品（39号14）や剥片類を含めて合計6点に黒曜石が用いられているが、この内の3点についてX線回折試験による産地同定を行い、和田峠系2（星ヶ塔）が2点、和田峠系1（東餅屋・西餅屋）が1点という結果を得ている。

D. 諸磯c式期

概要 66～82号（第155・158・161図）の17基と、不確実ながら162・254・258・259・264・267・295・400号の合計25基が存在している。平面形状は、円形が主体を占めるが、その他に楕円形が7基（73・74・77・254・258・264・267号）、方形が1基（75号）存在している。壁面がオーバーハングして袋状形態を呈するものは、68・70・76・81号の3基であり、他は円筒形状である。規模については、円形状土坑の場合、そのほとんどが直径1～1.5mの範囲に収まるが、掘削深度が30cm以下の浅いもの（78・80・162・259・400号）も認められる。楕円形土坑では、長径2m×短径1m前後の規模を持ち、深度は30cm前後と浅いものが多い。方形土坑も規模的には楕円形土坑と同様であるが、深度が約60cmとやや深い点が異なる。尚、掘削深度が2m弱の74号は陥穴の可能性が、また断面形が播り鉢状を呈する71・73号などは、倒木や小動物による攪乱の痕跡の可能性が高い。同様に、イレギュラーな平面形状を持つ77号は、楕円形土坑と円形土坑2基の重複と考えられる。

各土坑の埋没状況は、平面形状の差異にかかわらず、黒褐色土がレンズ状や円錐形状に自然堆積するものが大半を占めているが、人為的な埋め戻しを示唆するようなローム土との互層堆積やそれを多量に含む事例が

II 今井三騎堂遺跡の調査

【諸磯c式期土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	夏島	稲荷台	条痕	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	大木	時期不明	総計
合計	1	9	1	2	10	51	466	12	37	70	659

分類別点数

黒浜式		諸磯a式			諸磯b式															
分類	3類	分類	3類	4類	分類	1類					2類					3類			4類	
合計	2	合計	3	7	種別	a1	e1	b2	b3	c	f1	f2	不明	c	f2	不明	a	不明		
合計	2	合計	3	7	合計	1	1	2	1	1	6	1	19	1	1	8	3	6		

諸磯c式

分類	1類				2類	3類				4類			
種別	a1	b1	b2	不明	不明	a	c	d	不明	a	c	d	不明
合計	2	3	18	52	10	7	31	1	179	2	14	6	141

浮島・興津式系

分類	2b	3	5	不明
合計	2	2	1	7

大木式系

分類	3	不明
合計	1	36

縄文原形別点数

諸磯b式				諸磯c式				浮島・興津式系		大木式系	胎土別点数									
分類	2a	2b	17	18	分類	2a	2b	6a	18	分類	18	20a	分類	2b	胎土	型式	諸磯b	諸磯c	浮・興	大木
合計	3	10	1	4	合計	1	11	8	64	合計	2	3	合計	4	A	15	86	5	4	
合計	3	10	1	4	合計	1	11	8	64	合計	2	3	合計	4	B	3	7	—	—	
															D	—	5	—	—	
															E	—	5	—	—	
															F	—	1	—	—	

(石器)

器種別点数

系列	打製系列			使用痕系列			その他		総計
器種	石鏃	削器類	打斧	磨石類	石皿	砥石	剥片	礫塊	
合計	1	8	3	7	1	2	158	12	192

分類別点数

石鏃		搔器・削器			打製石斧		磨石類			石皿		砥石	
分類	3類	分類	1類	2類	3類	分類	8類		分類	2類	4類	分類	1類
合計	1	合計	2	5	1	合計	3	形態	abc	a	abc	a	b
合計	1	合計	2	5	1	合計	3	合計	1	1	2	2	1

石材別の点数と重量

石鏃		搔器・削器				打製石斧		磨石類		石皿		砥石			
コード	7	コード	1	9	10	12	コード	1	9	コード	4	25	コード	4	23
点数	1	点数	4(2)	1	1	2(1)	点数	2(1)	1	点数	6(5)	1	点数	1	2
重量	0.5	重量	69.2	未計測	42.8	7.4	重量	23.7	未計測	重量	1290	228	重量	488	98

剥片

コード	1	2	3	7	9	12	34
点数	34	9	1	7	17	89	1
重量	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測	未計測

礫塊

コード	4
点数	12
重量	未計測

礫塊の被熱状況

分類	1	2	総計
合計	10	2	12

被熱礫の石材別点数

コード	4
点数	10

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

75・76・267号の3基に認められる。前者については貯蔵穴としての用途が推定されるが、後者の3基の中で75・267号については、形態的にも墓である可能性が高いと言える。また、大形の72号は人為的な埋填が顕著ではないが、壁面に近接して底面から10cmほど浮いた状態で、平置された長径約30cmの河床礫が出土している。前述したように、前段階の諸磯b式期でもこれと類似したあり方を示す事例(91号)があり、墓に比定されたが、当土坑もその可能性が想定できよう。

出土遺物については、69・82号で完形に近い深鉢土器が認められるが、いずれも埋没土の上・中位に

破片として散在していたものである。また、68・69・70・72・75・76号では、40点以上の遺物が検出されており、特に69・70・76号では100点を超える多量の遺物が認められる。これらの中では、82号での大木5b式の深鉢土器の存在と、76号の黒曜石を主体とした117点に及ぶ調整剥片の存在が目される。ただし、これら各土坑の遺物は、ともに埋没土の上・中位から出土しており、土坑の機能停止した後で廃棄された遺物と考えられる。

各土坑の分布は、東側～南東側斜面にあたる3～6区にその全てが集中しており、丘陵頂部付近の2区や西側斜面の1区には皆無である。全体的には、同期の

堅穴住居の周縁に近接して設置されており、墓的な土坑もその立地に大きな差異が認められない。

出土遺物（第154・156・157・159・160図） 総数466点の諸磯c式土器については、結節浮線文を施すものは10点にとどまり、そのほとんどが条線状の沈線文と耳状やボタン状の貼付文を施すものである。また、僅少ではあるが、浮島・興津式系や大木5b式系の土器も存在している。縄文は基本的に施文されないが、単節斜縄文RLや無節Lなどを地文として施文するものもある。胎土はAタイプを基本とし、結晶片岩を含むDタイプや花崗岩起源の砂礫を含むEタイプなどが僅かに認められる。尚、掲載した遺物の中で、66・67号の10・11、68号の1・6、11・12、69号の6・8、70号の2・5、6・7、74号の1～4、76号の4・5、11～13、78号の1・2、79号の1～3・6、81号の3～5は、各々同一個体である。

石器については、削器類8点、磨石類7点、打製石斧3点、砥石2点、石鎌1点などがある。削器は、不定形な縦長剥片を素材とする頻度が高い。打製石斧は欠損品のみであるが、68坑13は「垂直敲打技法」により作出されている。磨石類は、円・楕円形と不定形状が併存し、両面に凹み穴や敲打痕・磨り面を形成するものが主体的である。使用石材は、打製系列では黒色頁石が50%を占め、黒曜石と砂岩が20%、黒色安山岩10%などがある。砂岩は、主に打製石斧に利用されている。使用痕系列では粗粒輝石安山岩が突出し、打製系列とは大きな差異がある。砥石は、牛伏砂岩をほぼ限定的に利用している。

またこれらの他に、72・76・82号では製品や剥片類を含めて合計85点に黒曜石が用いられているが、この内の8点についてX線回折試験による産地同定を実施したところ、その全てが和田峠系2（星ヶ塔）という結果を得ている。

（3）中期の土坑

概要 83～88号（第161図）の6基が認められる。出土土器により時期別に分類すれば、新道式併行期には85号、藤内I式併行期には86号、阿玉台Ⅲ式併行

期には88号の各1基が存在し、井戸尻式併行期には83・84・87号の3基が存在する。各土坑の平面形状は、若干不整形のものもあるが、全て円形状を基本としている。壁面がオーバーハングして明瞭な袋状形態を呈するものは、83号の1基のみであり、他は円筒形状である。

規模については、そのほとんどが直径0.5～1m前後であり、1.5mを超えるようなケースは認められない。また、掘削深度は88号を除いて30cm以下と浅いのが特徴的である。

各土坑の埋没土の状況は、深度の浅いものが多いこともあり、人為的埋没状況を窺わせるローム混土の堆積は顕著ではない。

遺物の出土状況については、84号を除く各土坑内から、少量ながら土器の大形破片や半完形品などが検出されている。85号では、底面に密着して出土しているが、他の土坑では埋没土の上～中位より出土しており、それらの遺物は各土坑の埋没途上において投棄されたものと推定される。

出土遺物（第160・162図） 中期前半の土器は85点が存在するが、内容的には勝坂3式併行のものが主体を占める。土器型式には、新道・藤内・井戸尻式系と阿玉台Ⅲ式が混在している。胎土については、花崗岩起源の雲母を含むEタイプが、前3者には認められない点で差異がある。尚、掲載した遺物の中で83号の1・2、8・9の土器は、各々同一個体である。

一方、石器については、僅かに剥片5点の出土があるのみで、質・量ともに極めて貧弱な状況である。

（4）時期不明の土坑

概要 帰属時期を明示するような遺物を随伴しない土坑は、合計272基が存在する。各土坑番号が順不同のため、その詳細は第2表を参照頂きたいが、形態的には楕円形39基、方形1基（136号）の他は、全て円形状を基本としている。また、断面形態が袋状のものは26基（108・128・164・168・188・191・193・194・198・203・254・278・283・284・312・327・346・347・360・368・413・425・431・434・441・443

II 今井三騎堂遺跡の調査

【中期前半土坑出土遺物の分類一覧】

(土器)

型式別点数

型式	井草	諸磯b	阿玉台Ⅲ	新道	藤内	井戸尻	中期前半
合計	1	2	5	1	3	21	55

胎土別点数

中期後半	時期不明	総計
2	5	95

胎土	型式	阿玉台Ⅲ	新道	藤内	井戸尻
A		1	1	3	16
B		—	—	—	3
D		—	—	—	1
E		2	—	—	—
F		2	—	—	1

縄文原体別点数

阿玉台Ⅲ式	新道式
分類 18	分類 18
合計 5	合計 1

藤内式

分類 18
合計 3

井戸尻式

分類 2a	2b	18
合計 4	1	16

(石器)

器種別点数

系列	その他	総計
器種	剥片	
合計	5	5

石材別の点数と重量
剥片

コード	1	7
点数	4	1
重量	未計測	未計測

号)であり、194号を除いていずれもその平面形が円形の土坑に限定されている。

規模としては、円形状土坑の場合は直径1m前後で深さが50～80cmとなるものが主体を占めているが、直径1.5～2mの大きなもの(97・115・236・248・283・348・384・388・395号)や、掘削深度が30cmに満たないもの(89・99・107・117・127～129・139・142・153・161・175・176・180・181・186・195・199・202・203・210・213・215・221・234・236・274・279・282・291・296・299・301・303・308・309・325・329・339・350・351・359・365・367・373～375・381・389・399・406・415・416・418・419号)などがある。

一方、楕円形の土坑では、長径2m×短径1m×深さ50cm前後の規模を持つものが多い。また、長方形の136号は、長径1m×短径0.7mとやや小さく、円形土坑の規模に近似している。

尚、直径が40cm以下の361・378～380号は、掘立柱建物の柱穴かあるいは樹木痕の可能性もある。また、イレギュラーな平面形状を持つ159・241・278号は、楕円形土坑と円形土坑2基の重複と考えられる。さらに、不整形な平面形と掘り鉢状の断面形を持つ93・100・104・122・123・133・135・152・166・177・

204・228・229・240・242～244・246・249・250・255・256・260・263・273・280・285・286・288・289・290・322・328・330・335・336・340・343・344・353・357・370・377・386・396・397号などは、倒木や小動物による攪乱の痕跡の可能性が高い。

各土坑の埋没土は、その平面形状に関わりなく、レンズ状や円錐形状の堆積状態を示すものが大半を占めているが、不鮮明ながら黒褐色土とローム土との互層的堆積やかなり多量のローム土の挟在などから、人為的埋没状態を窺うことのできるものには、225・251・387・393・424・440・441・443号の8基がある。これらの中で、楕円形状を呈する225・251号と、円形状ではあるが底面付近に径30cmほどの垂角礫が存在する393号などは、墓としての用途を想定できる。また、387号は中位のb層に灰白色粘質土ブロックが堆積しており、土器の素地土を貯蔵する土坑の可能性が高い。

出土遺物 前述したように土器の存在が皆無であるが、調整剥片を主体として、削器・石鏃・打製石斧・磨石類や黒曜石原石などの石器類が僅かに認められる。これらの石器は、基本的に埋没土の中・上位から出土しており、各土坑の埋没途中で投棄あるいは流れ込んだものと考えられ、副葬等の意識的な埋置を示す事例は確認できない。尚、剥片類主体とする黒曜石が、301号では67点、310号では5点それぞれ検出されているが、これらの内の7点(第162図301坑1)についてX線回折試験による産地同定を行い、その全てが和田峠系2(星ヶ塔)という結果を得ている。

各土坑の時期を確定することは困難であるが、327・356・223・328号は、各々33・36号住居(諸磯a式期)や51・60号住居(諸磯c式期)の廃絶後の埋没中途段階で、ほぼその中央部に掘り込まれた可能性が高く、時間的に各住居と近接していることが想定される。また、他の土坑についてもその埋没土が草創期後半や前期の竪穴住居と類似しており、両時期のいずれかに比定されると言えよう。

第2表 土坑の規模一覧

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物	
						長さ	深さ		
1	3区	FW-167	稲荷台	円形	円筒状	124	95	30	稲6, 剥2, 礫塊1
2	3区	FL-139	稲荷台	円形	円筒状	142	129	22	夏1, 稲5, 諸b1
3	4区	GP-162	稲荷台	円形	楕円状	127	106	37	稲3, 剥4, 礫塊1,
4	4区	GO-162	稲荷台	円形	円筒状	193	169	63	夏1, 稲5, 剥6, x1
5	4区	GM-165	稲荷台	楕円形	円筒状	313	247	52	稲12, 礫1, 剥3
6	4区	GO-150	稲荷台	円形	円筒状	120	105	37	稲6, 花1, 諸a1, 不1, 剥4
7	4区	GO-151	稲荷台	楕円形	円筒状	173	134	51	稲14, 諸a2, 諸c1, 不13, 剥10
8	4区	GS-152	稲荷台	楕円形	楕円状	156	123	37	稲4, 不1, 削2, 剥5, x1
9	4区	GP-160	稲荷台	楕円形	円筒状	424	286	110	夏13, 稲127, 礫1, 削1, 斧2, 三1, 剥75, x2, 砥1, 核2, 礫塊1
10	4区	GL-155	稲荷台	円形	円筒状	161	126	97	稲5, 斧1, 磨斧1, 砥1, 剥16, 礫塊1
11	4区	GR-150	稲荷台	円形	袋状	103	90	81	稲3, 磨1, 剥7
12	4区	GL-148	稲荷台	円形	円筒状	128	113	83	夏1, 稲10, 諸a1, 諸b1, 礫1, 剥7, 礫塊1
13	4区	FV-133	稲荷台	円形	楕円状	89	75	16	夏1, 稲4, 諸a3, 剥3
14	4区	FR-136	夏島	円形	楕円状	96	86	74	夏2, 礫塊1
15	4区	GP-157	稲荷台	円形	袋状	115	105	86	稲3, 不3, 礫1, 剥7, 核1, 礫塊3
16	4区	GO-155	稲荷台	円形	円筒状	105	97	35	稲3, 礫1, 剥1
17	4区	GJ-152	稲荷台	円形	楕円状	88	74	27	稲13, 削1, 剥4
18	4区	GO-159	稲荷台	円形	円筒状	86	62	67	稲8, 剥5
19	4区	GP-155	稲荷台	円形	円筒状	87	70	47	稲4, 磨1, 剥11
20	3区	FW-175	黒浜	円形	袋状	104	92	24	沈1, 黒90, 諸b1
21	4区	GR-152	諸磯 a	円形	不明	(110)	(88)	30	稲1, 黒1, 諸a1, 諸b1, 不2, 礫1, 剥4
22	4区	GL-151	黒浜	円形	楕円状	104	76	45	稲4, 黒1, 諸a17, 不4, 砥1, 剥7
23	4区	GP-148	諸磯 a	円形	円筒状	138	125	53	黒1, 諸a2, 不3, 剥9, 礫塊1
24	4区	GW-152	諸磯 a	円形	楕円状	250	135	82	稲7, 諸a12, 不5, 剥18
25	5区	EL-138	諸磯 a	円形	円筒状	87	67	35	稲7, 諸a11, 斧1
26	5区	EO-125	諸磯 a	円形	袋状	163	不明	88	諸a44, 不3, 剥1
27	5区	EO-130	諸磯 a	円形	袋状	126	124	56	諸a32, 諸b2, 不8, 剥3, 礫塊3
28	3区	FL-133	諸磯 b	円形	円筒状	83	80	52	諸a5, 不1
29	3区	EP-135	諸磯 b	円形	円筒状	127	109	53	諸b12, 不4, 剥5, 礫塊2
30	3区	EO-137	諸磯 b	円形	楕円状	160	130	40	稲1, 黒3, 諸b2
31	3区	EO-137	諸磯 b	円形	円筒状	200	132	28	諸b10, 不5
32	3区	EU-151	諸磯 b	円形	袋状	350	330	50	稲4, 諸b139, 浮9, 中前1, 不37, 斧3, 磨5, 剥B4, 礫塊2
33	3区	FN-166	諸磯 b	円形	袋状	142	138	51	諸b5, 不1, 磨1, 剥3
34	3区	ES-150	諸磯 b	円形	袋状	122	99	52	諸a24, 不5, 剥2
35	3区	EW-151	諸磯 b	円形	円筒状	133	117	55	諸b12, 斧1, 磨4, 剥3, 礫塊1
36	3区	EV-151	諸磯 b	円形	袋状	127	117	53	諸a27, 浮1, 不10, 斧1, 剥3, 礫塊1
37	4区	GW-156	諸磯 b	円形	円筒状	112	108	53	稲3, 黒1, 諸b6, 諸c3,
38	4区	GV-156	諸磯 b	円形	円筒状	156	110	27	諸a1, 諸b9, 不1, 斧1, 剥2, 礫塊2
39	4区	GR-149	諸磯 b	円形	円筒状	191	180	67	稲14, 黒3, 諸b54, 不25, 礫1, 削3, 斧2, 剥26, 礫塊3
40	4区	GS-150	諸磯 b	円形	円筒状	216	189	60	稲3, 諸b9, 諸c8, 不6, 斧1, 剥21
41	4区	GR-152	諸磯 b	楕円形	楕円状	194	93	39	稲4, 黒1, 諸a7, 諸b6, 諸c1, 浮2, 不2, 剥3

II 今井三騎堂遺跡の調査

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物	
						長さ	深さ		
84	3区	EM-151	井戸尻	円形	楕円状	90	83	23	中前7, 井戸6, 剥1
85	3区	ES-149	新道	楕円形	円筒状	71	50	18	諸b1, 中前1, 新1,
86	3区	ES-152	藤内1	円形	円筒状	70	58	13	中前3, 藤1
87	3区	ET-151	井戸尻	円形	円筒状	80	62	19	諸b1, 中後2, 井戸1
88	3区	EJ-149	阿玉台III	円形	円筒状	110	89	55	井1, 中前26, 不1, 阿III3, 藤2, 井戸6
89	3区	GB-154	不明	円形	楕円状	155	140	30	弁2
90	5区	FJ-134	不明	円形	円筒状	94	91	34	皿1
91	6区	FJ-123	諸磯b	円形	袋状	178	169	68	桶1, 諸b1, 剥5
92	1区	DB-144	不明	円形	円筒状	70	59	31	
93	1区	DB-155	不明	円形	楕円状	96	87	52	
94	1区	DC-156	不明	円形	円筒状	146	129	72	
95	1区	CX-163	不明	円形	円筒状	91	85	53	磨1
96	1区	DE-168	不明	円形	円筒状	88	70	45	
97	1区	CP-168	不明	円形	円筒状	188	173	60	
98	1区	CP-169	不明	楕円形	円筒状	188	131	52	
99	1区	CP-169	不明	円形	円筒状	93	77	33	
100	1区	CF-169	不明	円形	楕円状	90	68	23	
101	1区	CD-168	不明	楕円形	円筒状	247	143	63	
102	1区	CI-172	不明	円形	円筒状	141	127	37	
103	1区	CN-184	不明	楕円形	円筒状	130	90	70	
104	1区	CX-185	不明	円形	楕円状	96	85	43	
105	2区	GV-159	不明	楕円形	円筒状	100	73	71	
106	2区	DR-173	不明	楕円形	円筒状	143	98	103	
107	2区	DR-160	不明	円形	円筒状	71	58	18	
108	2区	DQ-169	不明	楕円形	袋状	97	55	104	
109	2区	DQ-169	不明	円形	円筒状	91	91	46	
110	2区	DM-165	不明	円形	円筒状	92	80	46	
111	2区	DR-162	不明	円形	円筒状	112	97	100	
112	2区	DS-163	不明	円形	円筒状	137	102	52	
113	2区	DX-193	諸磯b	円形	円筒状	157	146	63	諸b1
114	2区	EB-188	不明	円形	円筒状	124	120	61	
115	2区	DV-189	不明	円形	円筒状	231	193	133	
116	2区	DI-189	不明	円形	円筒状	149	118	53	
117	2区	EG-180	不明	円形	円筒状	81	70	24	
118	2区	EF-179	不明	円形	円筒状	97	88	29	
119	2区	EC-182	不明	円形	円筒状	118	102	47	
120	2区	EP-177	不明	円形	円筒状	134	121	52	
121	2区	EK-187	不明	円形	円筒状	125	93	40	
122	3区	DX-118	不明	円形	楕円状	58	45	25	
123	3区	DV-120	不明	円形	楕円状	95	83	58	
124	3区	ED-132	諸磯b	円形	円筒状	130	108	16	諸b1, 剥1
125	3区	EG-139	不明	円形	円筒状	120	77	40	
126	3区	ES-150	不明	円形	円筒状	106	102	65	不4, 剥4, 磯埋3
127	3区	EU-148	不明	円形	円筒状	125	120	25	
128	3区	EW-147	不明	円形	袋状	136	125	24	
129	3区	EV-146	不明	円形	円筒状	135	130	27	
130	3区	FE-145	諸磯b	円形	円筒状	75	60	31	諸b1
131	3区	FG-144	不明	円形	円筒状	108	94	42	
132	3区	FF-143	不明	円形	円筒状	112	55	31	
133	3区	FF-143	不明	円形	楕円状	104	86	42	
134	3区	FG-143	不明	円形	円筒状	106	102	44	
135	3区	FD-142	不明	円形	円筒状	69	57	34	
136	3区	FE-138	不明	方形	円筒状	108	76	37	
137	3区	FE-138	不明	楕円形	円筒状	87	63	61	
138	3区	FB-136	不明	楕円形	円筒状	120	73	37	
139	3区	FD-136	不明	円形	円筒状	90	80	22	
140	3区	FC-134	不明	円形	円筒状	100	87	42	
141	3区	EV-133	不明	円形	円筒状	120	90	24	
142	3区	EU-135	不明	円形	円筒状	114	109	26	
143	3区	EU-135	不明	円形	円筒状	92	84	35	
144	3区	ER-134	不明	円形	円筒状	116	93	95	
145	3区	FG-178	不明	円形	円筒状	113	92	38	
146	3区	FG-178	不明	円形	円筒状	107	88	43	
147	3区	FI-179	不明	円形	円筒状	98	82	29	
148	3区	FI-176	不明	楕円形	円筒状	136	65	35	
149	3区	FI-176	不明	円形	円筒状	100	70	28	
150	3区	FI-176	不明	楕円形	円筒状	151	104	24	
151	3区	FW-176	不明	円形	円筒状	70	65	31	
152	3区	FW-176	不明	円形	楕円状	89	87	25	
153	3区	FP-175	不明	円形	円筒状	112	100	22	
154	3区	FN-174	不明	円形	円筒状	114	97	36	
155	3区	FW-171	不明	円形	円筒状	119	106	33	
156	3区	FW-172	不明	円形	円筒状	76	73	30	
157	3区	FN-171	不明	円形	円筒状	72	58	33	
158	3区	EY-178	不明	円形	円筒状	113	106	39	
159	3区	ES-175	不明	円形	円筒状	180	110	41	
160	3区	FV-174	諸磯b	円形	円筒状	142	110	37	諸b3, 剥4
161	3区	FW-174	不明	円形	円筒状	88	70	25	
162	3区	FT-173	諸磯c	円形	円筒状	89	71	27	諸c3, 剥2
163	3区	FV-172	稲荷台	円形	円筒状	97	89	23	桶1, 剥1
164	3区	FK-173	不明	円形	袋状	116	104	46	
165	3区	FN-172	不明	円形	円筒状	73	59	50	磨3, 磯埋3
166	3区	FI-169	不明	円形	円筒状	77	71	37	
167	3区	FW-175	不明	円形	円筒状	81	72	52	
168	3区	GB-172	不明	円形	袋状	82	67	54	
169	3区	FV-169	不明	円形	円筒状	72	63	40	不1
170	3区	FV-169	不明	円形	円筒状	121	108	38	弁1, 核1, 剥1
171	3区	FX-172	不明	円形	円筒状	102	84	30	剥3
172	3区	FI-176	不明	円形	円筒状	152	109	58	
173	3区	FO-164	諸磯b	円形	袋状	102	89	42	諸b1, 不1, 磨1, 剥1
174	3区	GA-166	不明	円形	円筒状	138	130	32	
175	3区	GB-166	不明	楕円形	円筒状	66	65	22	
176	3区	GN-169	不明	円形	円筒状	130	117	30	
177	3区	GN-169	不明	円形	楕円状	96	67	20	

番 号	地 区	位 置	时 期	平 面 形	断 面 形	規 模 (cm)		出 土 遺 物
						長 徑	短 徑	
178	3区	PM-164	諸磯 b	凹形	凹筒状	62	56	21 諸b1
179	3区	EW-150	諸磯 b	凹形	凹筒状	115	107	38 諸b4, 剥1
180	3区	EX-152	不明	凹形	凹筒状	110	110	24
181	3区	EX-151	不明	凹形	凹筒状	108	84	30
182	3区	FA-155	不明	凹形	凹筒状	100	53	22 剥2
183	3区	FD-149	不明	凹形	凹筒状	99	99	50
184	3区	FD-151	不明	凹形	凹筒状	100	96	40
185	3区	FQ-138	稻荷台	凹形	凹筒状	90	88	30 箱1
186	3区	PM-141	不明	凹形	凹筒状	93	86	17
187	3区	FR-139	稻荷台	凹形	凹筒状	190	178	55 箱1, 磨1, 剥1
188	3区	FP-138	不明	凹形	袋状	123	115	61
189	3区	FQ-140	稻荷台	凹形	袋状	142	140	60 三.1, x1
190	3区	FP-142	諸磯 a	凹形	袋状	91	90	41 諸a7, 不1, 剥3
191	3区	FO-141	不明	凹形	袋状	120	105	67 剥4
192	3区	FI-146	不明	凹形	凹筒状	95	74	70
193	3区	FR-144	不明	凹形	袋状	100	95	36
194	3区	FR-144	不明	椭圆形	袋状	133	86	65
195	3区	PM-146	不明	凹形	凹筒状	106	100	26
196	3区	FK-145	稻荷台	凹形	凹筒状	61	56	19 x1
197	3区	FN-151	不明	凹形	凹筒状	136	134	70
198	3区	FP-158	不明	凹形	袋状	153	127	70
199	3区	FO-140	不明	凹形	凹筒状	95	90	24
200	3区	FP-140	不明	凹形	凹筒状	86	82	40
201	3区	FY-151	諸磯 b	凹形	袋状	108	104	28 諸b2
202	3区	FG-181	不明	凹形	凹筒状	95	90	15
203	3区	FN-139	不明	凹形	凹筒状	120	112	23 磨1, 剥2
204	3区	FT-162	不明	凹形	播鉢状	136	100	67 剥1
205	3区	FU-159	諸磯 b	凹形	凹筒状	206	180	52 箱1, 諸a1, 諸b1, 剥2
206	3区	FW-158	稻荷台	凹形	凹筒状	113	98	56 箱1
207	3区	GA-162	不明	椭圆形	凹筒状	80	55	14
208	3区	FV-156	諸磯 a	凹形	凹筒状	130	128	65 諸b1
209	3区	FV-155	諸磯 a	凹形	凹筒状	242	199	(30) 諸a2, 削1, 剥2, 礫塊1
210	3区	GB-161	不明	凹形	凹筒状	75	67	25
211	3区	GD-158	稻荷台	凹形	凹筒状	82	68	16 箱1
212	3区	FQ-151	不明	凹形	凹筒状	95	82	41
213	3区	FQ-151	不明	凹形	凹筒状	88	81	37
214	3区	GA-153	不明	凹形	凹筒状	143	116	69 削3, 剥3, 礫塊1
215	3区	GB-154	不明	凹形	凹筒状	95	90	28
216	3区	GB-154	不明	凹形	凹筒状	95	92	83
217	3区	FW-160	稻荷台	椭圆形	播鉢状	171	115	85 箱2, 剥2
218	3区	GC-158	不明	椭圆形	播鉢状	123	108	66
219	3区	GA-151	稻荷台	凹形	袋状	74	72	49 箱1, 礫塊1
220	3区	GA-151	稻荷台	凹形	凹筒状	84	84	31 箱2
221	3区	FI-159	不明	凹形	凹筒状	115	97	38
222	3区	GA-151	不明	凹形	凹筒状	90	79	37
223	3区	FV-158	不明	凹形	凹筒状	161	154	23 剥1
224	3区	PM-152	不明	凹形	不明	60	50	不明
225	4区	GR-164	不明	椭圆形	凹筒状	135	74	63
226	4区	GP-162	稻荷台	凹形	播鉢状	203	173	63 箱1, 皿1, 剥1
227	4区	GP-162	稻荷台	凹形	凹筒状	111	91	39 箱2
228	4区	GP-162	不明	凹形	凹筒状	196	173	57 剥3
229	4区	GI-165	不明	凹形	播鉢状	216	208	40 剥2
230	4区	GJ-162	稻荷台	椭圆形	凹筒状	152	108	65 箱1, 剥2
231	4区	GI-163	不明	凹形	凹筒状	137	125	53
232	4区	GO-163	不明	凹形	凹筒状	132	126	61 剥3
233	4区	GR-170	不明	椭圆形	凹筒状	239	148	53
234	4区	GI-174	不明	凹形	凹筒状	127	108	38
235	4区	GS-178	不明	凹形	凹筒状	111	107	30
236	4区	GM-165	不明	凹形	凹筒状	143	116	28
237	4区	GM-167	不明	凹形	凹筒状	132	125	33 礫塊1
238	4区	GI-167	不明	凹形	凹筒状	119	107	43
239	4区	HP-175	不明	凹形	凹筒状	198	170	75
240	4区	HC-175	不明	凹形	凹筒状 (186)	157	53	
241	4区	HO-175	不明	椭圆形	凹筒状	237	185	77
242	4区	GP-165	不明	椭圆形	凹筒状	130	89	65
243	4区	GP-176	不明	凹形	凹筒状	100	97	37
244	4区	GQ-175	不明	椭圆形	凹筒状	131	128	72
245	4区	GV-176	不明	凹形	凹筒状	197	128	38
246	4区	GV-179	不明	凹形	凹筒状	146	143	36
247	4区	GW-165	不明	凹形	凹筒状	124	100	82
248	4区	GJ-164	不明	凹形	凹筒状	196	170	41
249	4区	GI-163	不明	凹形	凹筒状	130	104	94 剥1, 礫塊1
250	4区	GR-166	不明	凹形	凹筒状	108	108	42
251	4区	GR-166	不明	椭圆形	凹筒状	(83)	65	43
252	4区	GT-138	不明	椭圆形	凹筒状	132	117	47
253	4区	GT-136	不明	椭圆形	凹筒状	219	125	38
254	4区	GI-150	諸磯 c	凹形	凹筒状	217	100	54 諸c2
255	4区	GI-148	不明	凹形	凹筒状	96	68	39
256	4区	GI-153	不明	凹形	凹筒状	110	100	55
257	4区	GW-153	不明	凹形	袋状	84	84	49
258	4区	GT-147	諸磯 c	凹形	凹筒状	171	118	68 諸c1
259	4区	GT-147	諸磯 c	凹形	凹筒状	106	80	28 諸c1
260	4区	GS-143	不明	凹形	凹筒状	83	63	36
261	4区	GW-148	諸磯 b	凹形	凹筒状	85	85	35 諸b2
262	4区	GN-153	稻荷台	凹形	凹筒状	93	38	42 箱1, 不2, 剥1
263	4区	GN-154	不明	凹形	凹筒状	100	69	42
264	4区	GR-149	諸磯 c	凹形	凹筒状	193	101	48 箱3, 諸c2, 不3, 剥1
265	4区	GT-151	不明	凹形	凹筒状	140	84	78 剥2
266	4区	GT-155	諸磯 b	凹形	凹筒状	179	110	91 諸b2, 剥3
267	4区	GS-149	諸磯 c	凹形	凹筒状	153	109	36 箱3, 諸c3, 剥5, 礫塊2
268	4区	GS-150	諸磯 b	凹形	凹筒状	80	78	40 諸b7, 不1, 剥3
269	4区	GP-152	諸磯 a	凹形	凹筒状	196	190	82 箱4, 諸a2, 剥5
270	4区	GR-153	不明	凹形	凹筒状	102	69	60
271	4区	GR-153	不明	不明	凹筒状	不明	不明	38

II 今井三騎堂遺跡の調査

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物	
						長径	短径		
272	4区	GR-152	稲荷台	円形	不明	130	115	47	稲1, 弁1, 剥2
273	4区	GL-157	不明	楕円形	楕円状	138	84	63	剥2
274	4区	GI-152	不明	円形	円筒状	85	71	32	不2, 剥5
275	4区	GM-153	稲荷台	円形	円筒状	148	149	40	夏1, 稲2, 剥4
276	4区	GL-150	不明	円形	円筒状	(58)	54	37	剥3
277	4区	GN-150	諸磯 a	円形	円筒状	63	62	29	諸a1, 不1, 剥2
278	4区	GL-149	不明	円形	袋状	133	99	88	剥1
279	4区	GL-148	不明	円形	円筒状	86	77	25	礫塊2
280	4区	GM-155	不明	楕円形	楕円状	144	71	28	底1
281	4区	GO-153	稲荷台	楕円形	楕円状	218	104	48	稲4, 剥6
282	4区	GB-133	不明	円形	円筒状	96	84	30	
283	4区	GB-132	不明	円形	袋状	177	168	54	
284	4区	GC-132	不明	円形	袋状	100	93	61	
285	4区	GE-133	不明	円形	袋状	60	58	35	
286	4区	GC-136	不明	円形	楕円状	100	82	37	
287	4区	GF-136	不明	円形	円筒状	107	100	60	
288	4区	GF-134	不明	円形	楕円状	86	56	28	
289	4区	GG-133	不明	楕円形	楕円状	241	151	35	
290	4区	GG-130	不明	楕円形	楕円状	110	88	30	
291	4区	GI-129	不明	円形	円筒状	101	81	31	
292	4区	GI-129	不明	円形	円筒状	120	115	36	
293	4区	FX-135	不明	円形	円筒状	92	89	41	
294	4区	FX-133	不明	円形	円筒状	127	106	78	
295	4区	FW-134	諸磯 c	円形	円筒状	117	107	41	諸c3
296	4区	FW-135	不明	円形	円筒状	66	55	26	
297	4区	FW-137	不明	楕円形	円筒状	170	127	31	
298	4区	FS-138	稲荷台	円形	円筒状	150	147	51	稲2, 礫1, 磨1, 剥4
299	4区	FR-139	不明	円形	円筒状	126	115	36	剥1
300	4区	GP-157	諸磯 b	楕円形	円筒状	138	103	50	諸b1, 不5, 剥16
301	4区	GH-148	不明	円形	円筒状	123	120	37	剥2, 核2, 剥62, 黒原1
302	4区	FY-133	不明	円形	円筒状	54	50	(33)	不1
303	4区	GK-153	不明	円形	円筒状	111	101	42	
304	4区	GI-149	不明	円形	円筒状	159	138	54	
305	4区	GI-146	不明	円形	円筒状	110	81	38	磨1
306	4区	GP-148	不明	円形	円筒状	100	82	72	
307	4区	GI-144	稲荷台	円形	袋状	84	75	39	稲1
308	4区	GF-149	不明	円形	円筒状	77	72	25	
309	4区	GH-149	不明	円形	円筒状	140	125	37	
310	4区	GO-156	不明	円形	円筒状	130	(92)	(33)	剥12
311	4区	GJ-156	稲荷台	円形	円筒状	75	74	28	稲2, 磨2, 剥2
312	4区	GO-156	不明	円形	袋状	85	70	68	
313	4区	GN-167	稲荷台	円形	袋状	136	116	71	稲2, 剥3
314	4区	GN-155	稲荷台	楕円形	楕円状	193	124	67	稲3, 剥2
315	4区	GJ-159	稲荷台	楕円形	楕円状	180	94	70	稲2, 剥2
316	4区	GI-152	稲荷台	円形	円筒状	83	73	49	稲1, 剥2
317	4区	GH-155	稲荷台	楕円形	楕円状	196	83	68	稲2, 剥4
318	4区	GJ-152	稲荷台	円形	円筒状	132	124	66	稲3, 不2, 削1, 剥3
319	4区	GF-152	不明	円形	円筒状	96	95	45	
320	4区	GM-154	黒浜	円形	袋状	98	90	63	稲1, 黒3, 諸a1, 不8, 剥7
321	4区	GL-151	黒浜	円形	円筒状	106	98	35	稲2, 黒2, 不1, 剥1
322	4区	GO-155	不明	円形	楕円状	96	75	46	不2, 剥7, 礫塊2
323	4区	GO-151	稲荷台	楕円形	円筒状	121	65	69	稲1, 剥2
324	4区	GN-160	不明	円形	円筒状	67	57	46	
325	4区	GO-151	不明	円形	円筒状	(77)	(67)	(21)	諸b1, 不1, 削1
326	4区	GV-162	諸磯 b	円形	円筒状	(167)	(124)	不明	
327	4区	GM-150	不明	円形	袋状	135	106	136	
328	4区	GV-174	不明	円形	袋状	(116)	(116)	不明	
329	5区	FC-120	不明	円形	円筒状	83	81	17	
330	5区	FE-119	不明	円形	楕円状	113	97	46	
331	5区	FE-117	不明	円形	円筒状	127	126	36	
332	5区	FE-112	不明	円形	円筒状	112	110	86	
333	5区	FE-112	不明	円形	円筒状	87	81	38	
334	5区	EY-114	不明	円形	円筒状	124	115	51	
335	5区	FE-117	不明	円形	円筒状	157	120	53	
336	5区	EW-113	不明	円形	円筒状	180	178	59	
337	5区	EQ-113	不明	円形	円筒状	97	70	42	
338	5区	FG-127	不明	円形	円筒状	111	95	56	
339	5区	EQ-114	不明	円形	円筒状	85	(57)	30	
340	5区	EQ-114	不明	円形	円筒状	144	(136)	80	
341	5区	EX-106	不明	円形	円筒状	98	98	58	
342	5区	EQ-112	不明	円形	円筒状	110	98	54	
343	5区	EK-107	不明	円形	楕円状	117	(89)	57	
344	5区	FI-134	不明	円形	円筒状	65	63	40	
345	5区	FI-138	不明	円形	円筒状	87	71	33	
346	5区	FK-138	不明	円形	袋状	106	105	84	
347	5区	FP-128	不明	円形	袋状	130	129	60	
348	5区	FP-125	不明	円形	円筒状	(154)	147	57	不5
349	5区	FP-125	諸磯 a	円形	袋状	133	125	82	稲1, 諸a4, 諸b1,
350	5区	EQ-126	不明	円形	円筒状	118	113	35	
351	5区	EQ-126	不明	円形	円筒状	124	105	40	
352	5区	FP-137	不明	円形	円筒状	80	74	43	
353	5区	EV-120	不明	楕円形	円筒状	182	130	71	
354	5区	FG-129	稲荷台	円形	円筒状	90	88	30	稲1
355	5区	EN-126	諸磯 a	円形	袋状	116	96	69	諸a1
356	5区	EN-125	不明	楕円形	円筒状	149	不明	55	
357	5区	EW-135	不明	楕円形	円筒状	86	70	18	
358	5区	EO-132	不明	楕円形	円筒状	110	68	34	
359	5区	EO-132	不明	円形	円筒状	125	103	24	剥1
360	5区	EI-133	不明	円形	袋状	126	118	48	
361	5区	EK-132	不明	円形	円筒状	53	39	82	
362	5区	EN-131	諸磯 b	円形	円筒状	130	(109)	66	諸b4
363	5区	ES-132	不明	円形	円筒状	113	102	38	
364	5区	EI-127	諸磯 a	円形	円筒状	106	105	29	諸a1, 不1
365	5区	EW-130	不明	円形	円筒状	105	100	28	

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物
						長径	深さ	
413	6区	FI-120	不明	円形	袋状	103	46	
414	6区	FI-117	不明	円形	円筒状	100	78	
415	6区	FI-122	不明	円形	円筒状	98	96	
416	6区	FI-122	不明	円形	円筒状	88	83	
417	6区	FI-127	諸磯b	円形	円筒状	133	123	諸b1, 砥原1
418	6区	FI-108	不明	円形	円筒状	93	89	22
419	6区	FQ-134	不明	円形	円筒状	88	79	26
420	6区	FQ-134	不明	円形	円筒状	111	85	60
421	6区	FI-124	不明	円形	円筒状	126	118	34
422	6区	FK-122	諸磯b	円形	円筒状	113	106	36
423	6区	FI-116	不明	円形	円筒状	118	106	55
424	6区	FI-123	不明	円形	円筒状	112	106	56
425	6区	FI-123	不明	円形	袋状	107	103	37
426	6区	FI-129	諸磯a	円形	楕円状	150	149	76
427	6区	FK-122	諸磯b	円形	袋状	162	155	46
428	6区	FI-123	諸磯b	円形	袋状	159	148	82
429	6区	GC-129	不明	円形	円筒状	113	104	44
430	6区	FI-124	不明	円形	円筒状	77	60	62
431	6区	FI-109	不明	円形	袋状	100	87	68
432	6区	FK-107	諸磯b	円形	円筒状	100	90	41
433	6区	GB-124	諸磯b	円形	袋状	93	58	諸b1
434	6区	GB-124	不明	円形	袋状	121	106	56
435	6区	GI-127	稲荷台	円形	円筒状	129	104	23
436	6区	GI-126	諸磯b	円形	円筒状	115	115	33
437	6区	GC-125	諸磯b	円形	袋状	131	113	60
438	6区	GC-125	諸磯a	円形	円筒状	136	131	51
439	6区	FI-136	稲荷台	円形	円筒状	120	98	30
440	6区	FI-122	不明	円形	円筒状	107	90	74
441	6区	FI-123	不明	円形	袋状	124	110	100
442	6区	FI-133	稲荷台	円形	円筒状	91	89	60
443	6区	FI-123	不明	円形	袋状	125	95	79
444	6区	FI-133	稲荷台	円形	円筒状	90	79	37
445	6区	FI-121	不明	円形	円筒状	115	93	45

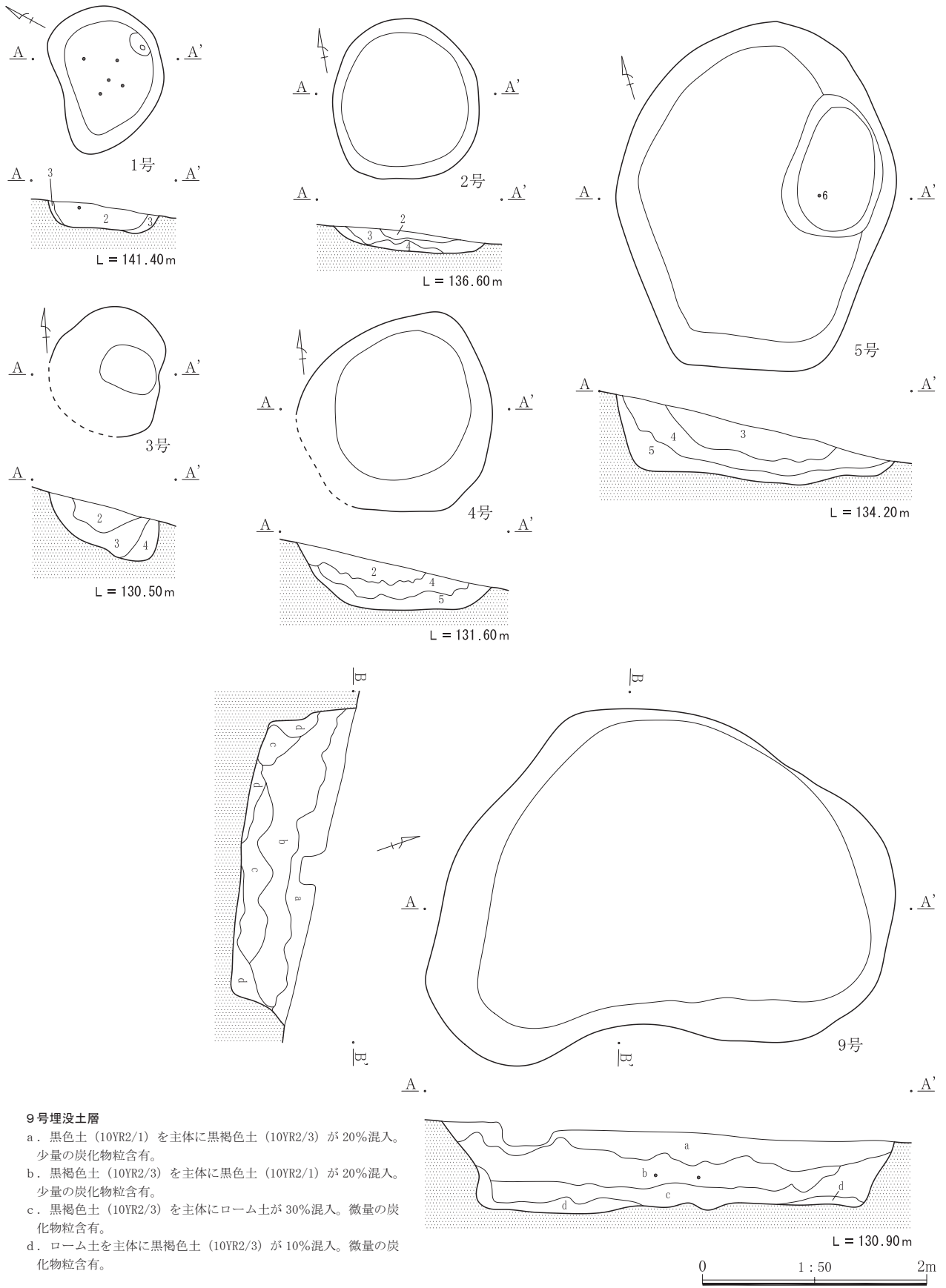
※ () 内は推定値

出土遺物の凡例

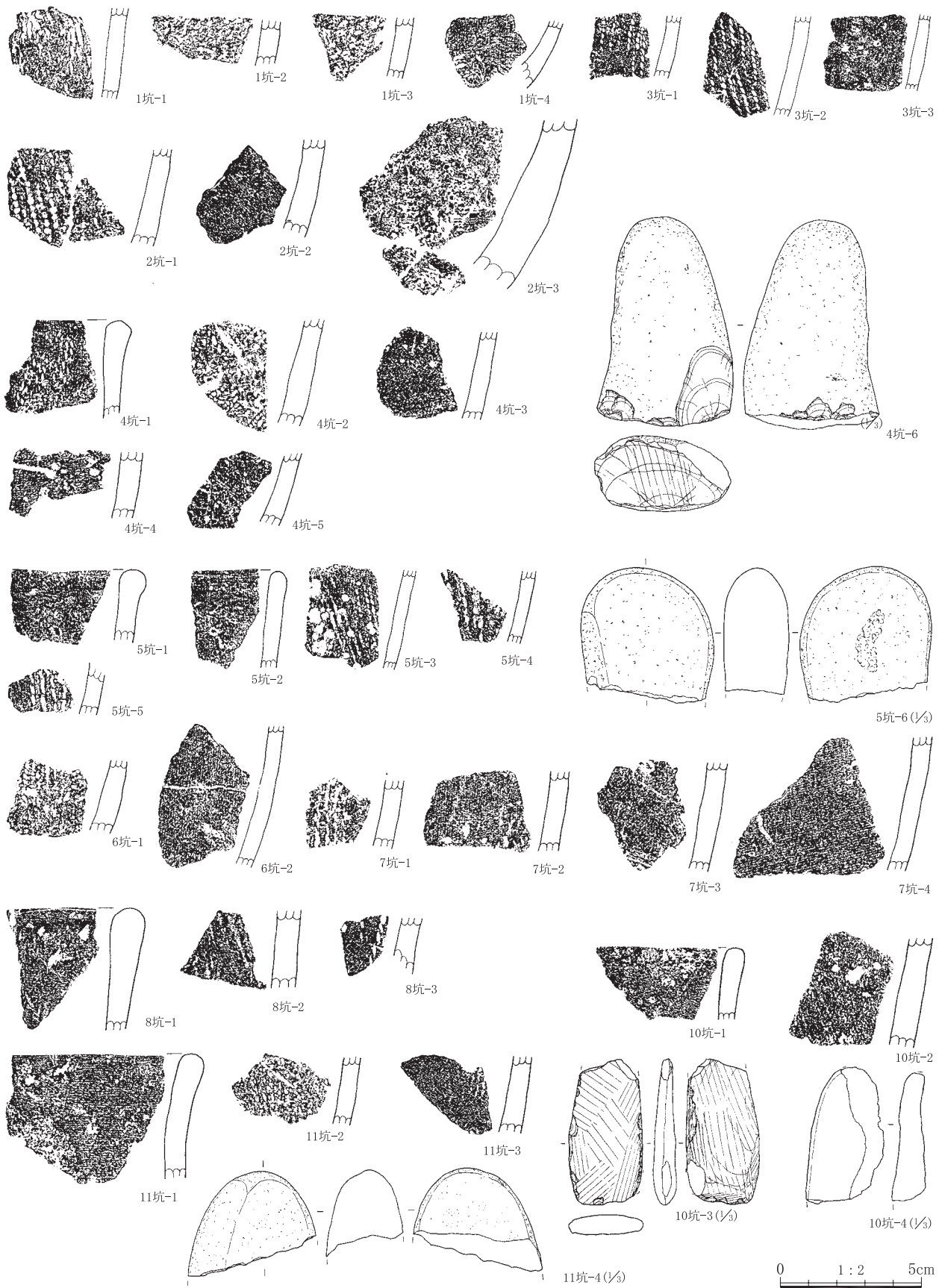
井：井草式、夏：夏島式、稲：稲荷台式、田下：田戸下層式、条：早期未条痕文、花：花積下層式、黒：黒斑式、諸a：諸磯a式、諸b：諸磯b式、諸c：諸磯c式、浮：浮島・興津式系、大5b：大木5b式系、中前：中期前半、中後：中期後半、五II：五領ヶ台II式、阿II：阿玉台II式、阿III：阿玉台III式、新：新道式、藤：藤内式、井戸：井戸尻式、E1：加曾和I式、E2：加曾和II式、大8a：大木8a式、曹：曹和式系、堀2：堀之内2式、不：裂式不明、鏝：石鏝、削：削器、斧：打製石斧、礮：礮器、磨斧：磨製石斧、磨2：磨石類、又：スタンブ形石器、皿：石皿、台：台石、砥：砥石、剥：剥片、核：石核、砥原：砥石原石、三：三角錐形石器、

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)		出土遺物
						長径	深さ	
366	5区	EW-128	不明	円形	円筒状	77	69	
367	5区	EK-125	不明	円形	楕円状	93	93	
368	5区	EK-135	不明	円形	袋状	114	104	41
369	5区	EH-135	不明	円形	円筒状	83	78	54
370	5区	EM-133	不明	楕円形	円筒状	147	66	40
371	5区	EH-136	不明	円形	円筒状	132	124	37
372	5区	EH-137	諸磯b	円形	円筒状	107	106	37
373	5区	EK-121	不明	円形	円筒状	97	95	22
374	5区	EJ-121	不明	円形	円筒状	92	87	25
375	5区	EL-122	不明	円形	円筒状	72	70	19
376	5区	EJ-122	不明	楕円形	円筒状	79	58	35
377	5区	FI-133	不明	円形	円筒状	(80)	50	
378	6区	GD-119	不明	円形	円筒状	41	40	52
379	6区	GD-119	不明	円形	円筒状	37	31	43
380	6区	GD-119	不明	円形	円筒状	35	32	46
381	6区	EQ-109	不明	円形	円筒状	137	125	31
382	6区	FI-107	不明	円形	円筒状	100	97	47
383	6区	FI-111	不明	円形	円筒状	92	75	64
384	6区	FI-108	不明	円形	円筒状	158	153	83
385	6区	FI-107	不明	楕円形	円筒状	241	127	93
386	6区	GC-125	不明	円形	楕円状	79	77	35
387	6区	GB-126	不明	円形	円筒状	92	82	36
388	6区	GE-126	不明	円形	円筒状	180	158	89
389	6区	GE-128	不明	円形	円筒状	107	97	25
390	6区	FI-115	不明	円形	円筒状	160	145	50
391	6区	GP-128	不明	円形	円筒状	125	116	75
392	6区	GC-127	不明	円形	円筒状	90	83	39
393	6区	GH-128	不明	円形	円筒状	113	111	71
394	6区	GG-125	不明	円形	円筒状	(105)	94	50
395	6区	GE-127	不明	円形	円筒状	162	150	35
396	6区	FX-131	不明	円形	円筒状	79	77	21
397	6区	GB-130	不明	円形	楕円状	124	122	69
398	6区	FI-127	諸磯b	円形	円筒状	120	102	48
399	6区	FX-132	不明	円形	円筒状	84	76	27
400	6区	FX-132	諸磯c	円形	円筒状	82	75	24
401	6区	FI-131	稲荷台	円形	円筒状	120	116	49
402	6区	FI-113	諸磯a	円形	円筒状	223	212	58
403	6区	FI-132	諸磯a	円形	袋状	110	101	62
404	6区	FS-123	諸磯a	円形	円筒状	148	140	47
405	6区	FQ-118	不明	円形	円筒状	108	105	36
406	6区	FQ-119	不明	円形	円筒状	106	101	41
407	6区	FP-119	不明	円形	円筒状	97	91	45
408	6区	FO-120	不明	円形	円筒状	113	112	70
409	6区	FI-124	諸磯b	円形	円筒状	95	83	43
410	6区	FM-119	不明	楕円形	円筒状	(105)	(81)	84
411	6区	FN-119	稲荷台	円形	円筒状	112	100	35
412	6区	FO-113	諸磯a	円形	袋状	180	132	95

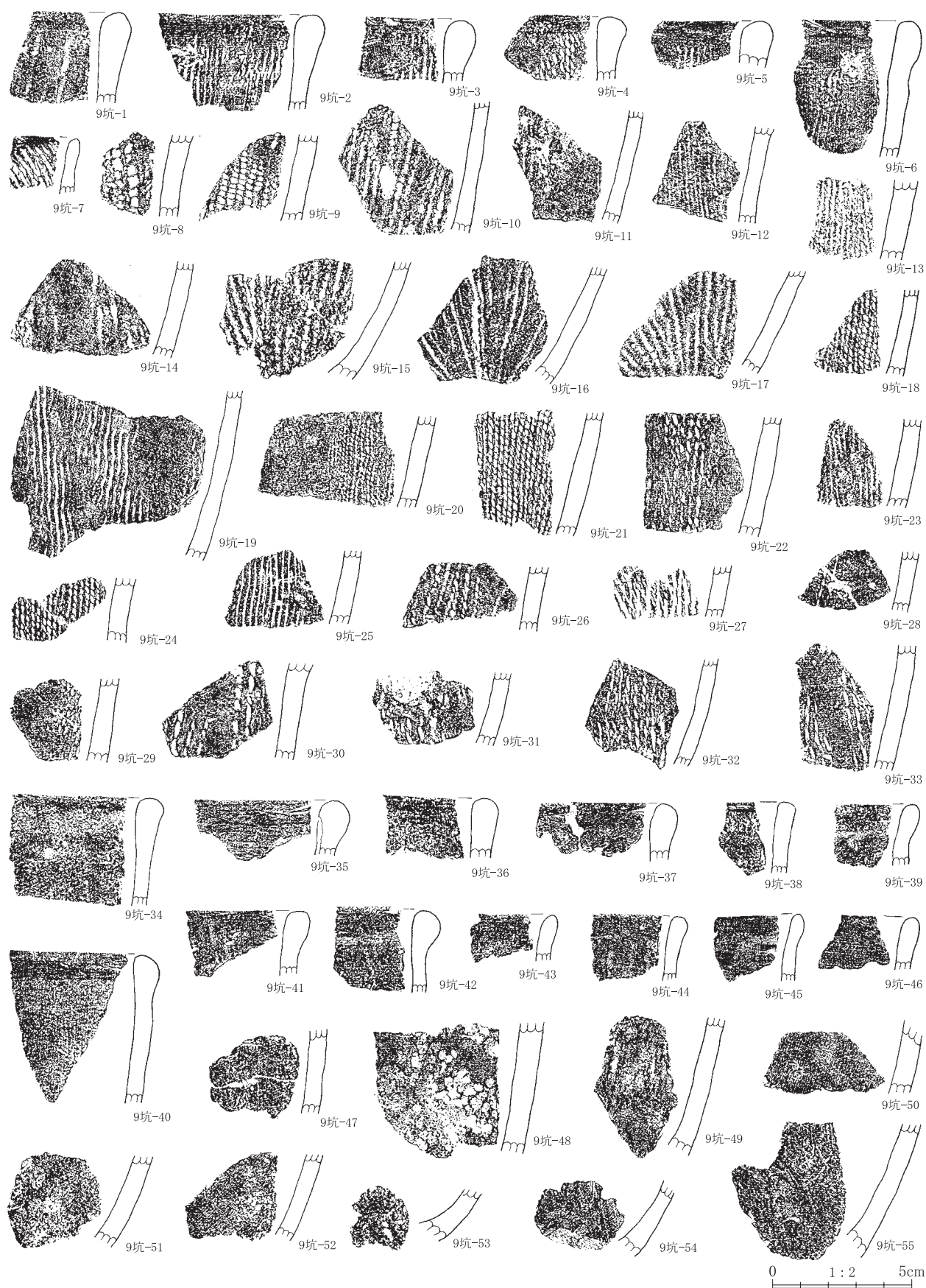
II 今井三騎堂遺跡の調査



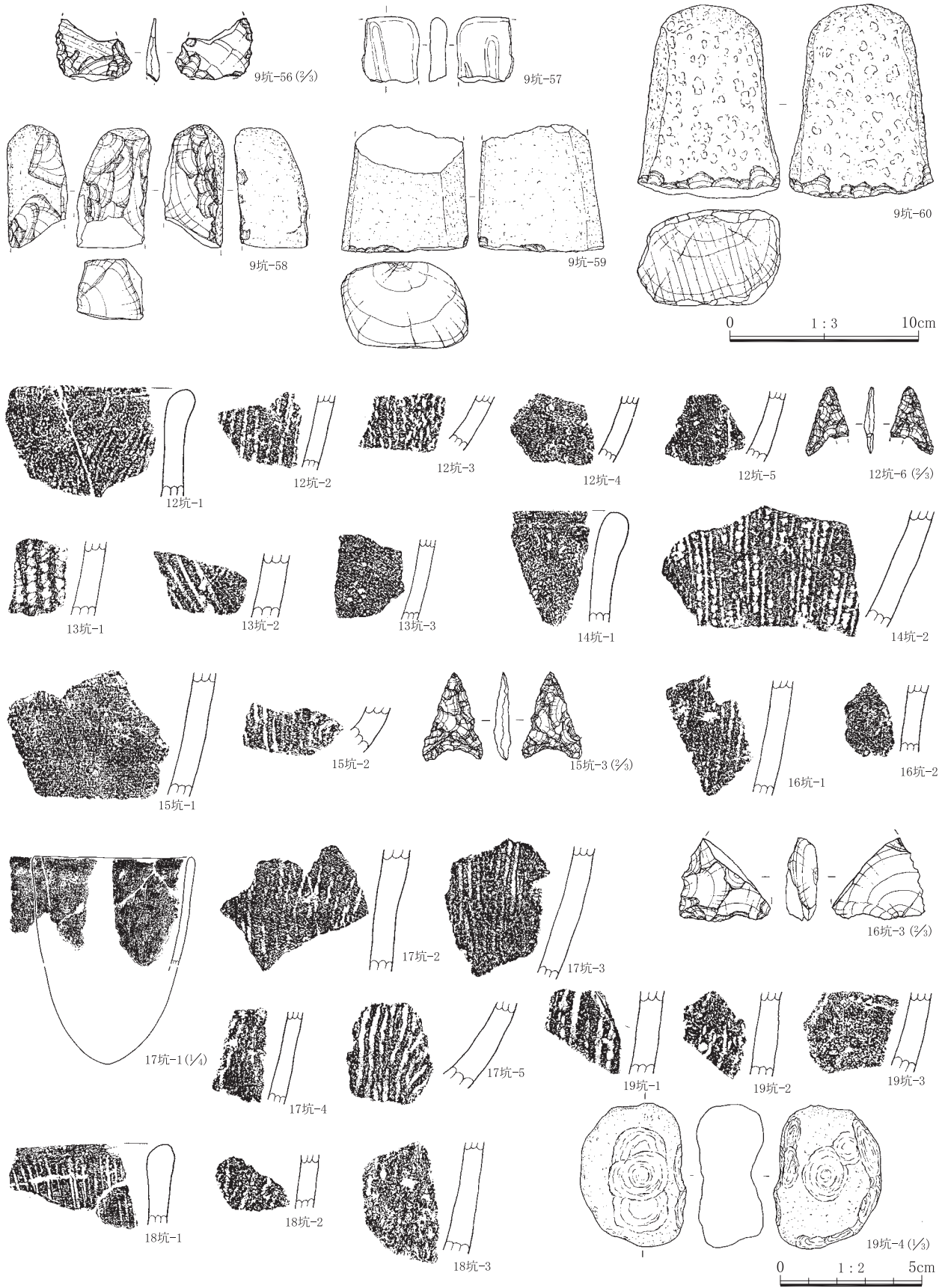
第136図 1号土坑～5号土坑・9号土坑



第 137 图 土坑出土遺物 (1)

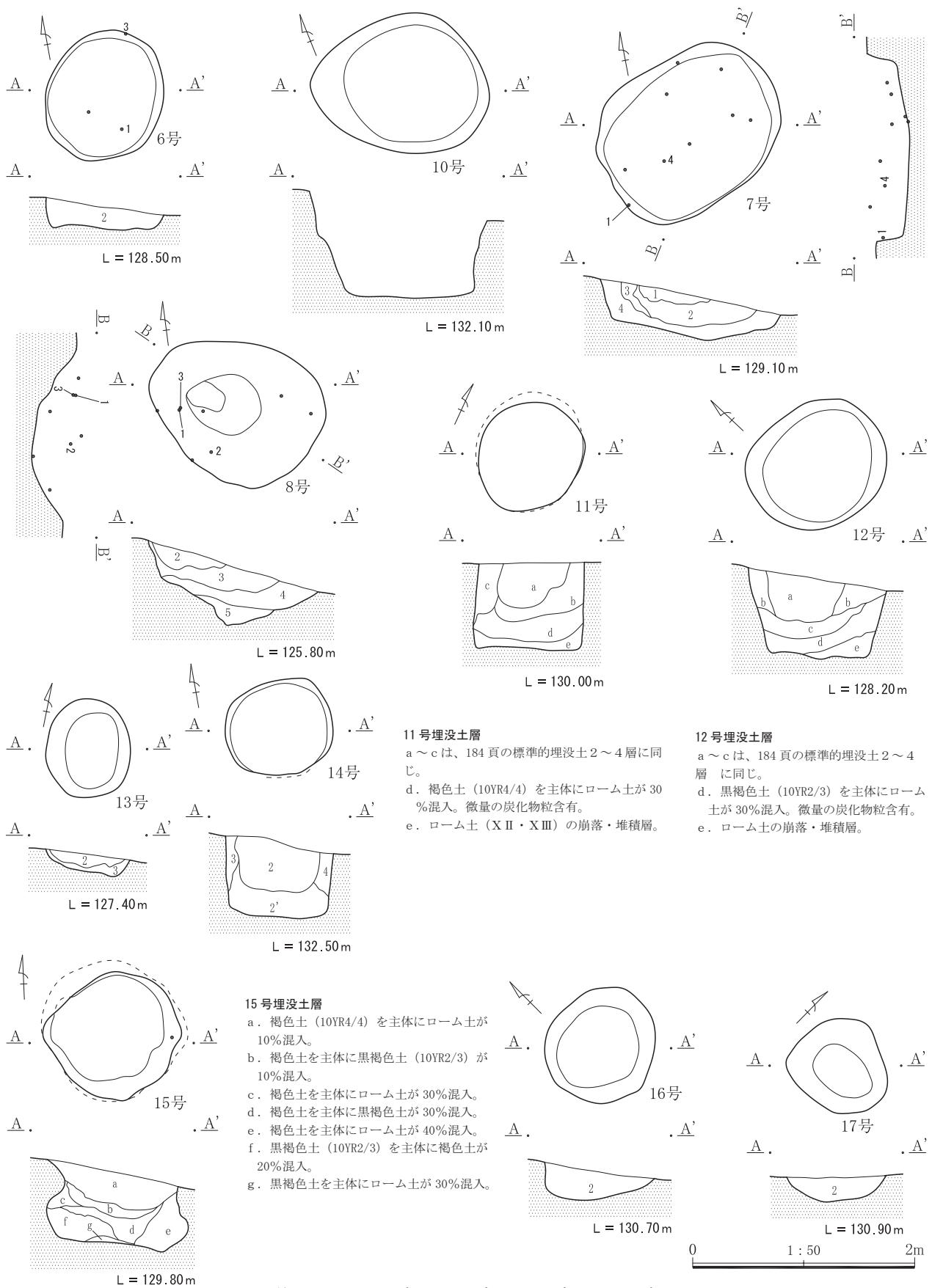


第138図 土坑出土遺物(2)



第139图 土坑出土遺物(3)

II 今井三騎堂遺跡の調査



11号埋没土層

a～cは、184頁の標準的埋没土2～4層に同じ。
 d. 褐色土(10YR4/4)を主体にローム土が30%混入。微量の炭化物粒含有。
 e. ローム土(XII・XIII)の崩落・堆積層。

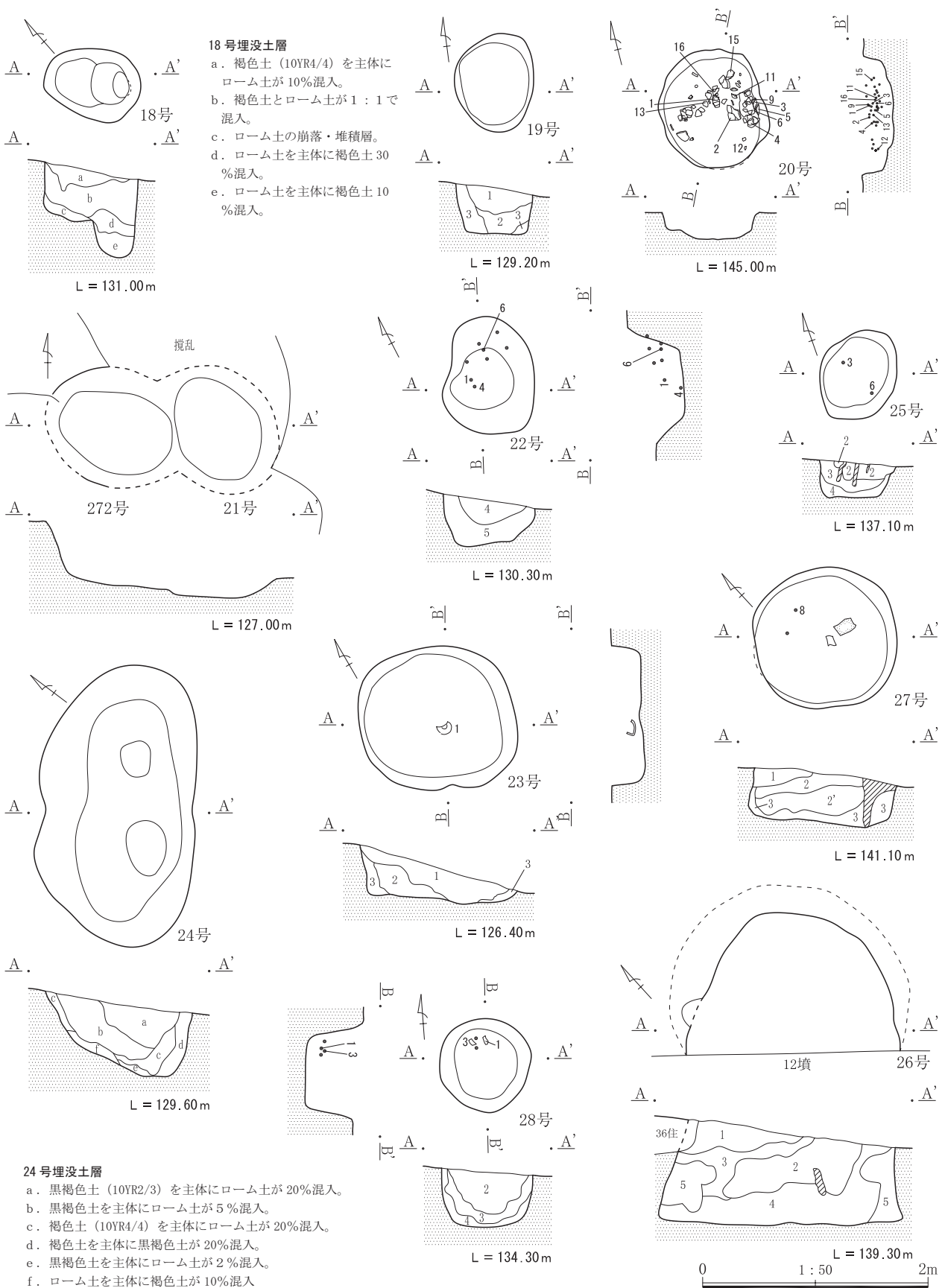
12号埋没土層

a～cは、184頁の標準的埋没土2～4層に同じ。
 d. 黒褐色土(10YR2/3)を主体にローム土が30%混入。微量の炭化物粒含有。
 e. ローム土の崩落・堆積層。

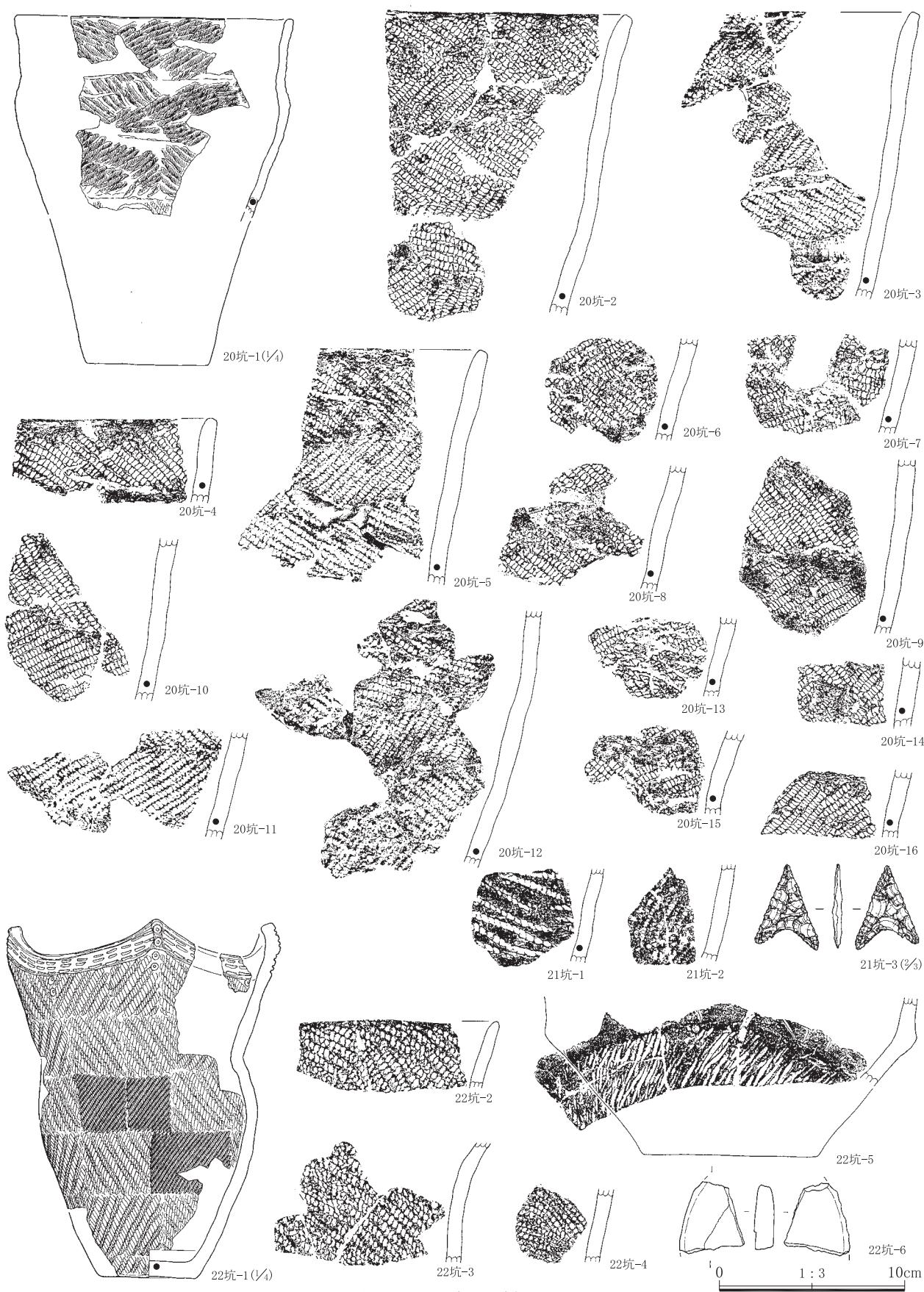
15号埋没土層

a. 褐色土(10YR4/4)を主体にローム土が10%混入。
 b. 褐色土を主体に黒褐色土(10YR2/3)が10%混入。
 c. 褐色土を主体にローム土が30%混入。
 d. 褐色土を主体に黒褐色土が30%混入。
 e. 褐色土を主体にローム土が40%混入。
 f. 黒褐色土(10YR2/3)を主体に褐色土が20%混入。
 g. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。

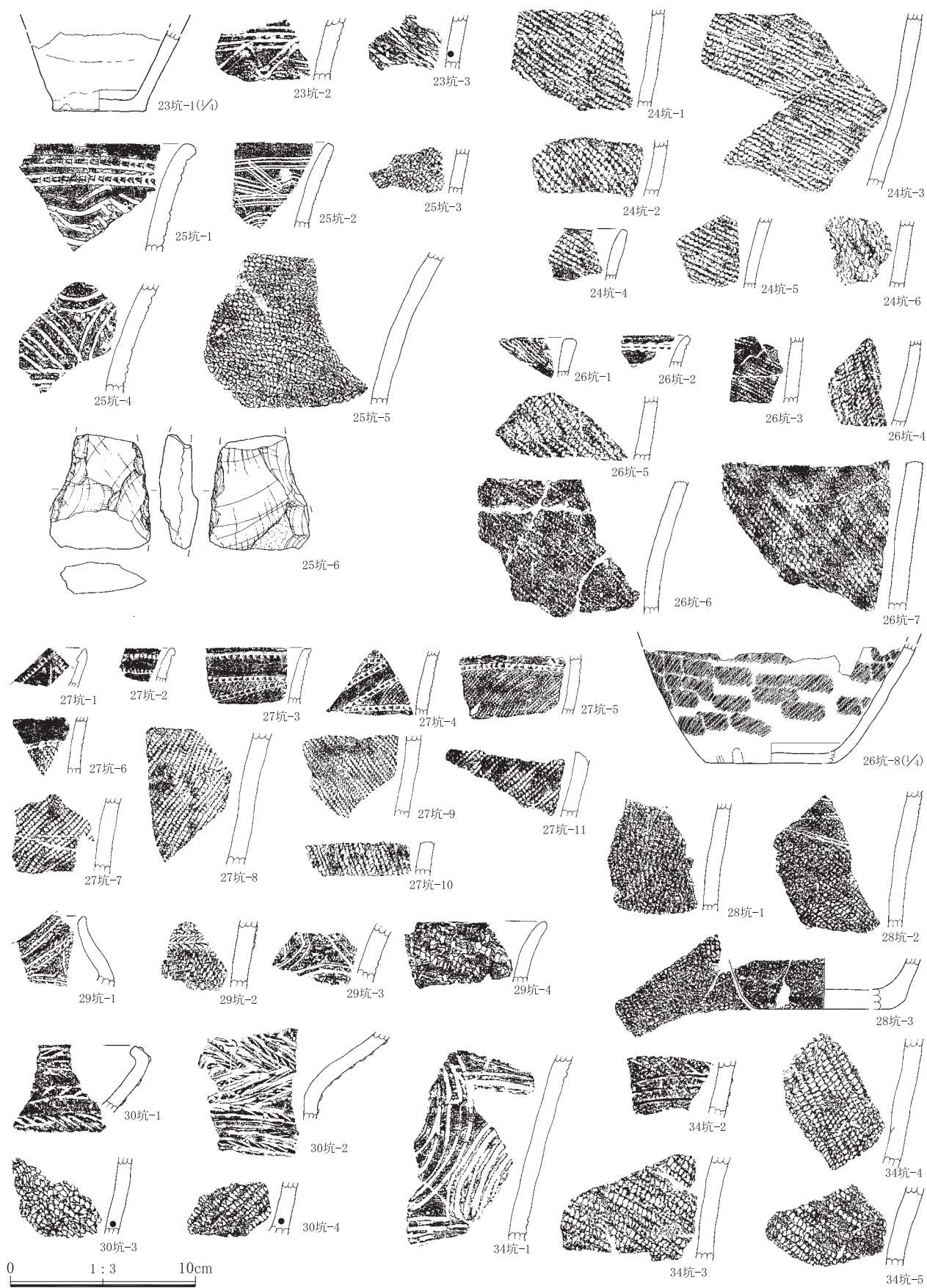
第140図 6号土坑～8号土坑・10号土坑～17号土坑



第141図 18号土坑～28号土坑・272号土坑

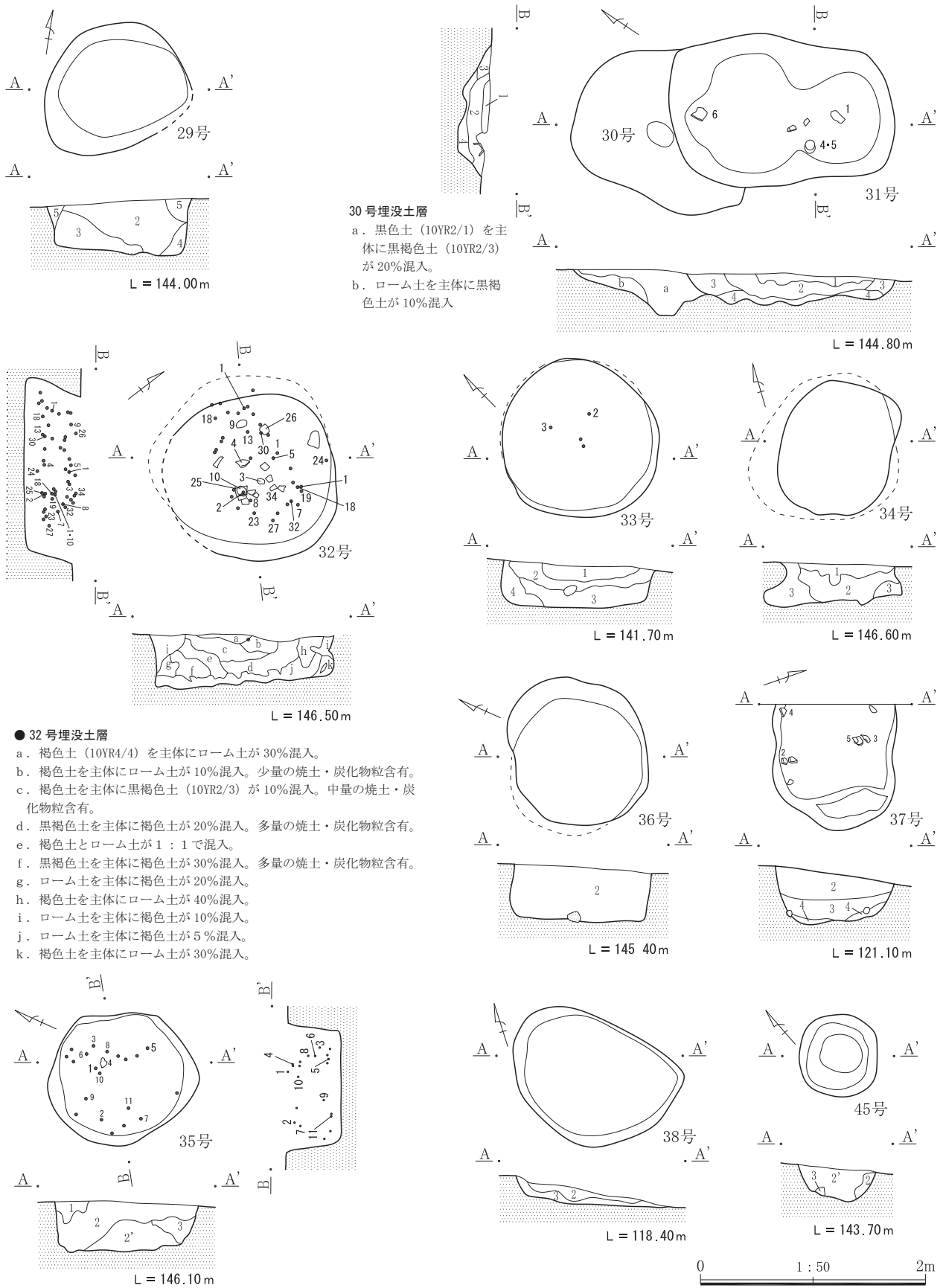


第 142 図 土坑出土遺物 (4)

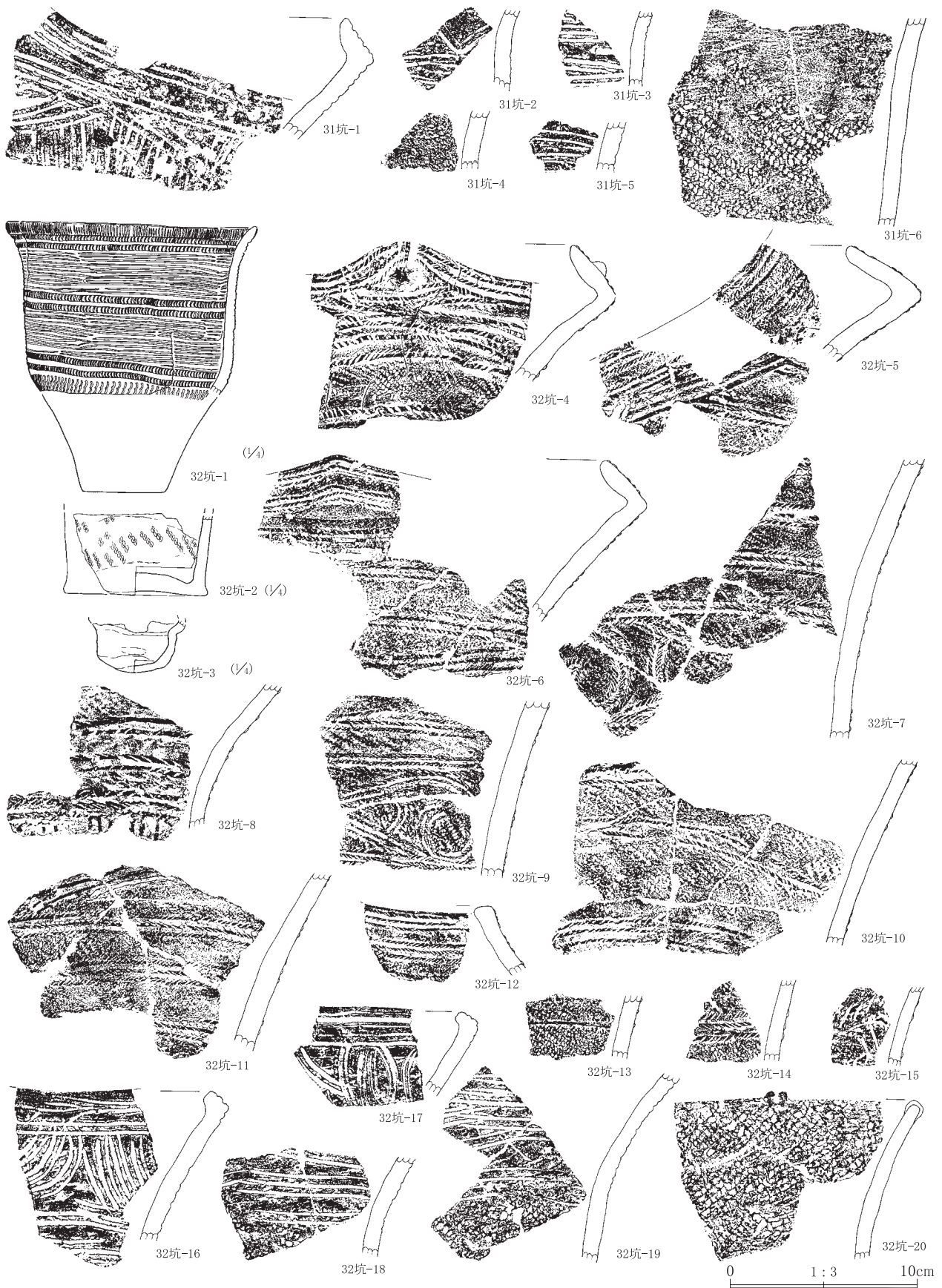


第 143 图 土坑出土遗物 (5)

II 今井三騎堂遺跡の調査

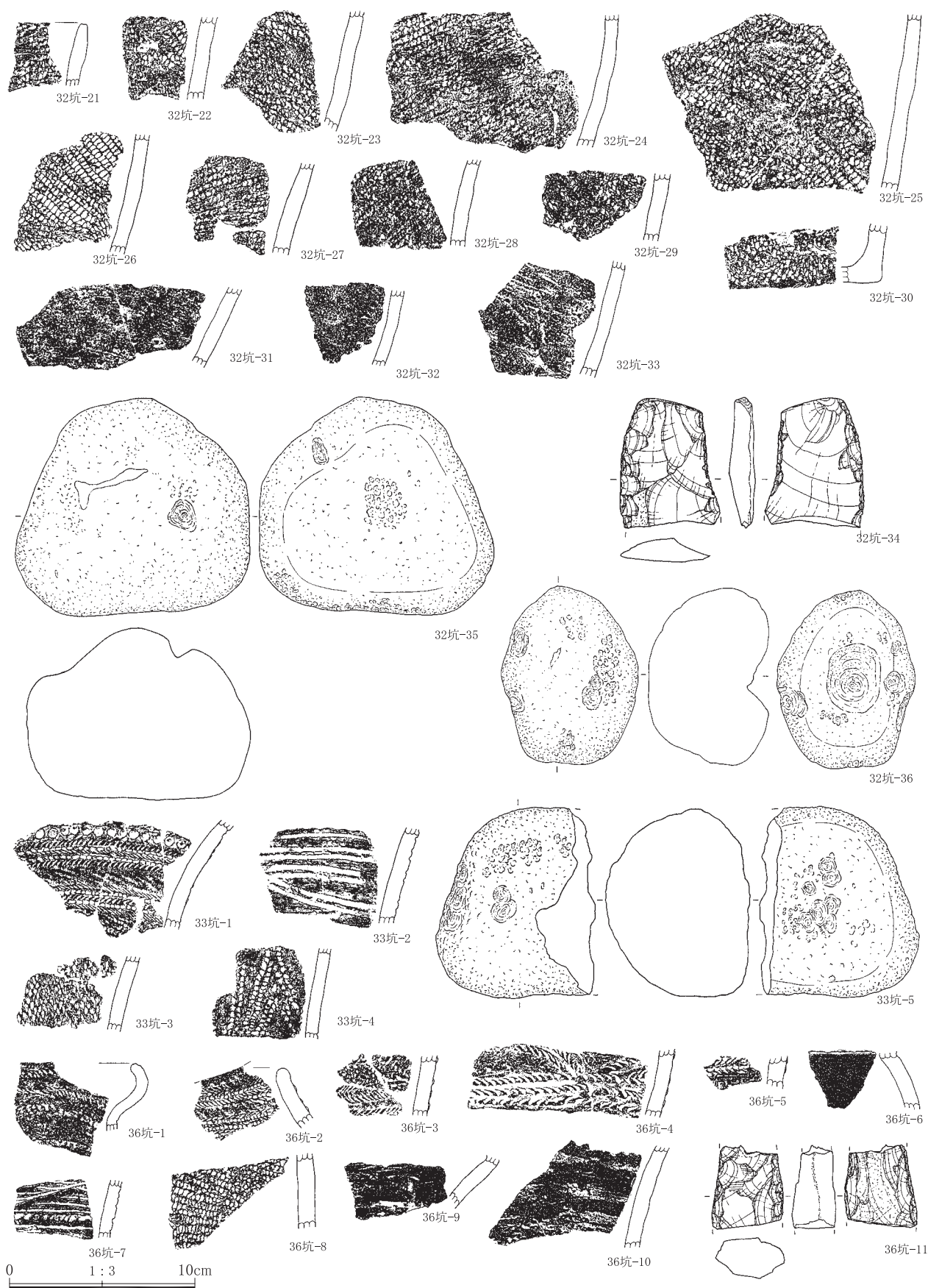


第144図 29号土坑～38号土坑・45号土坑

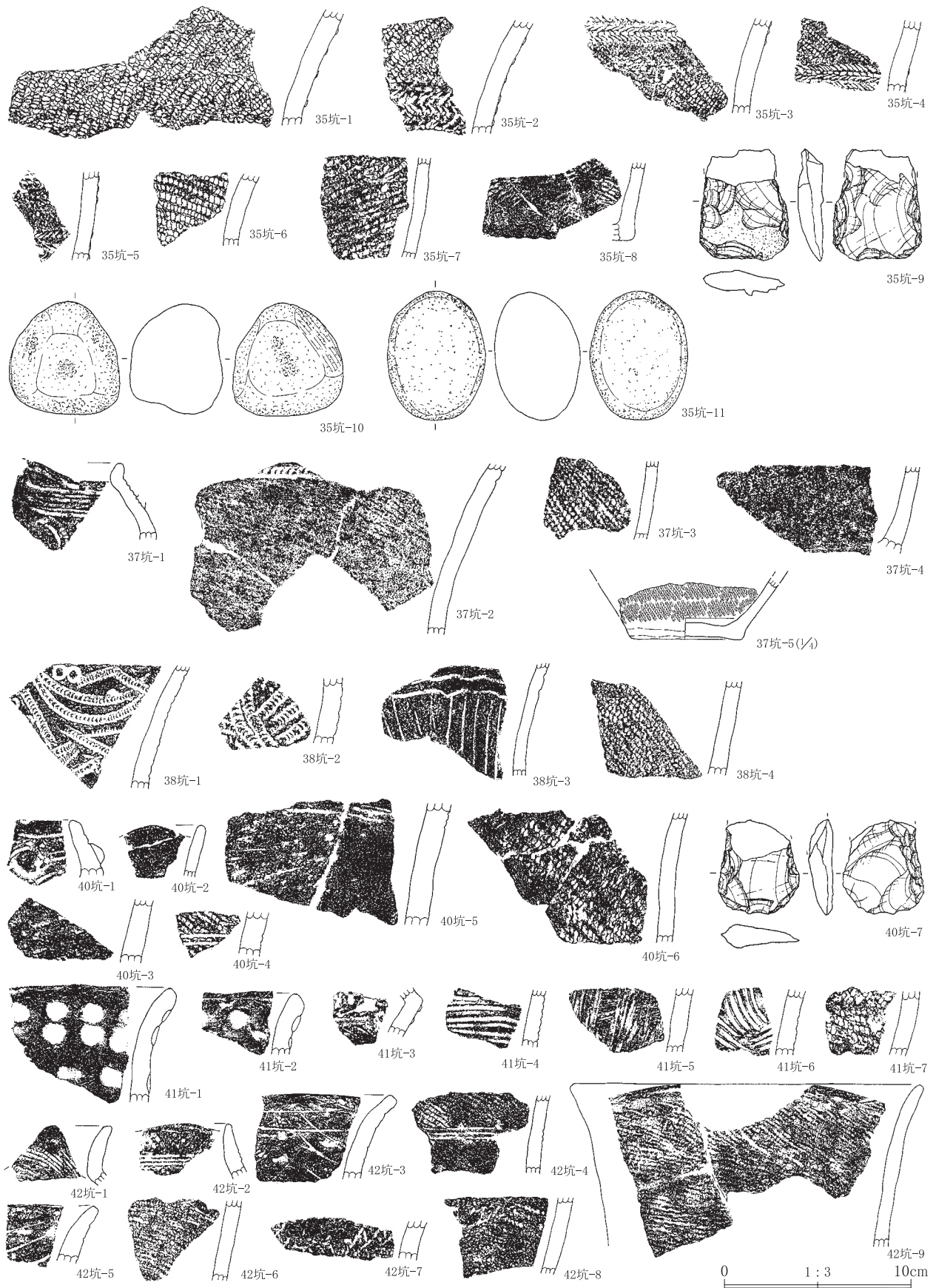


第 145 图 土坑出土遗物 (6)

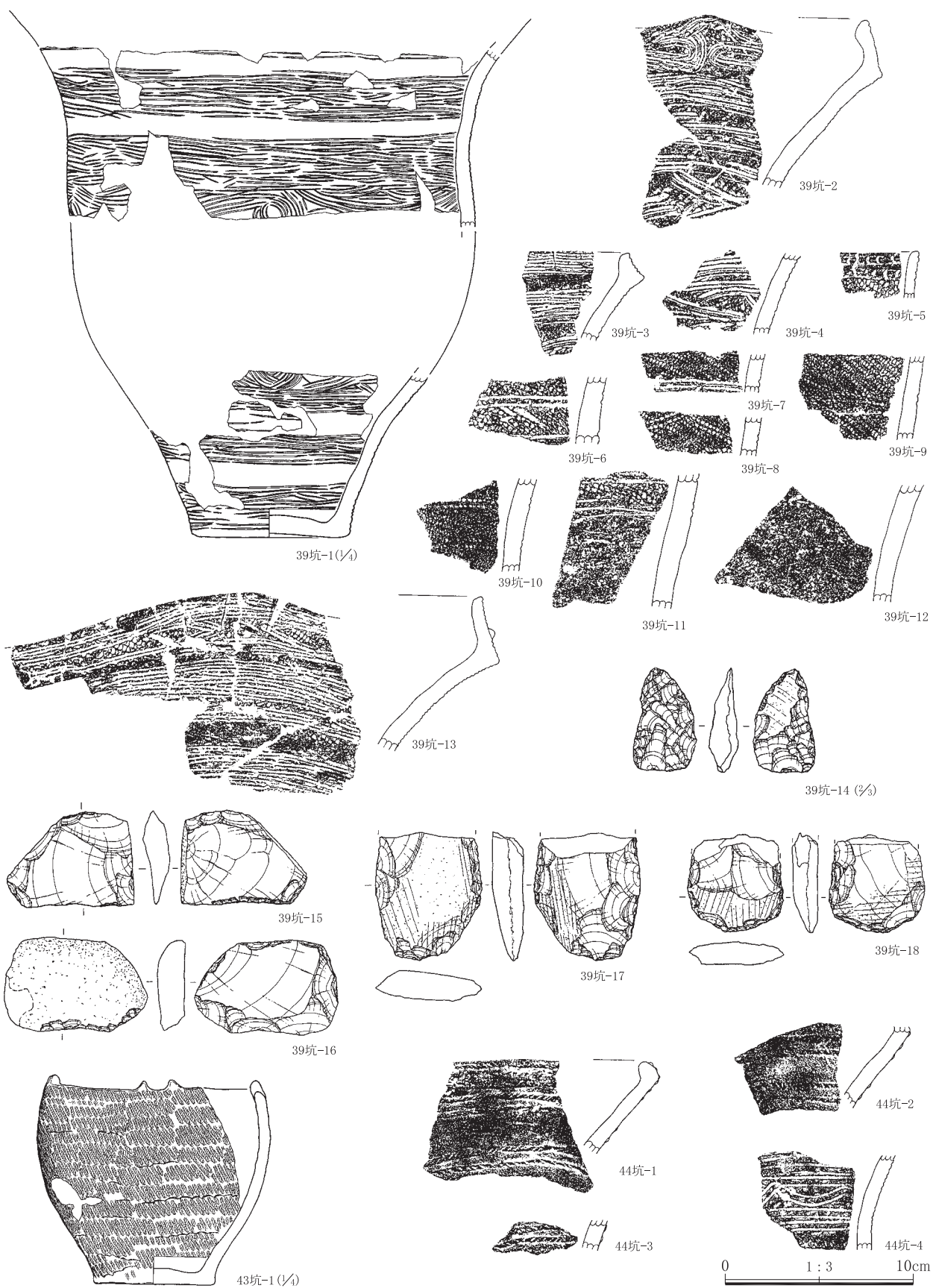
II 今井三騎堂遺跡の調査



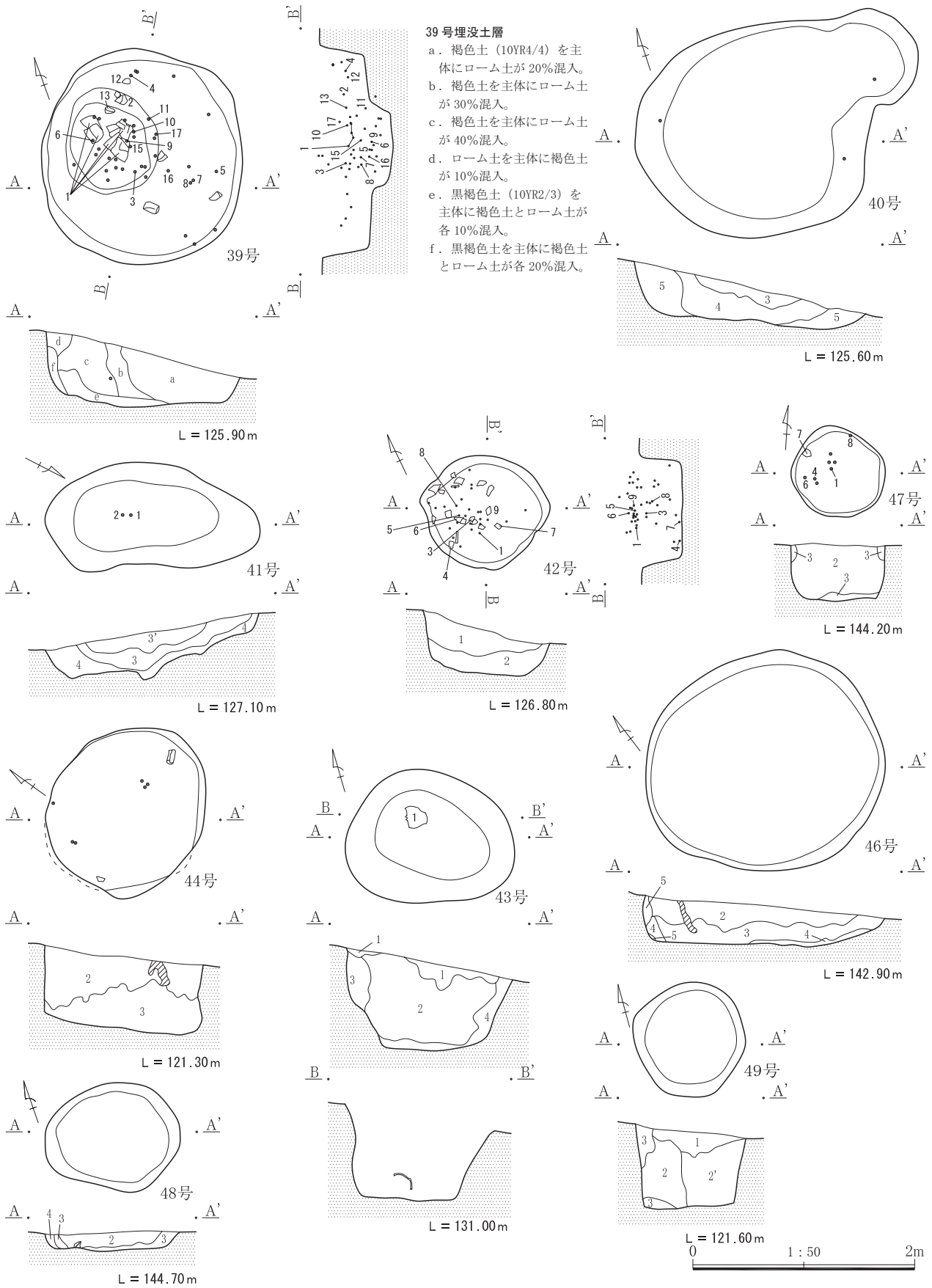
第 146 図 土坑出土遺物 (7)



第 147 图 土坑出土遺物 (8)

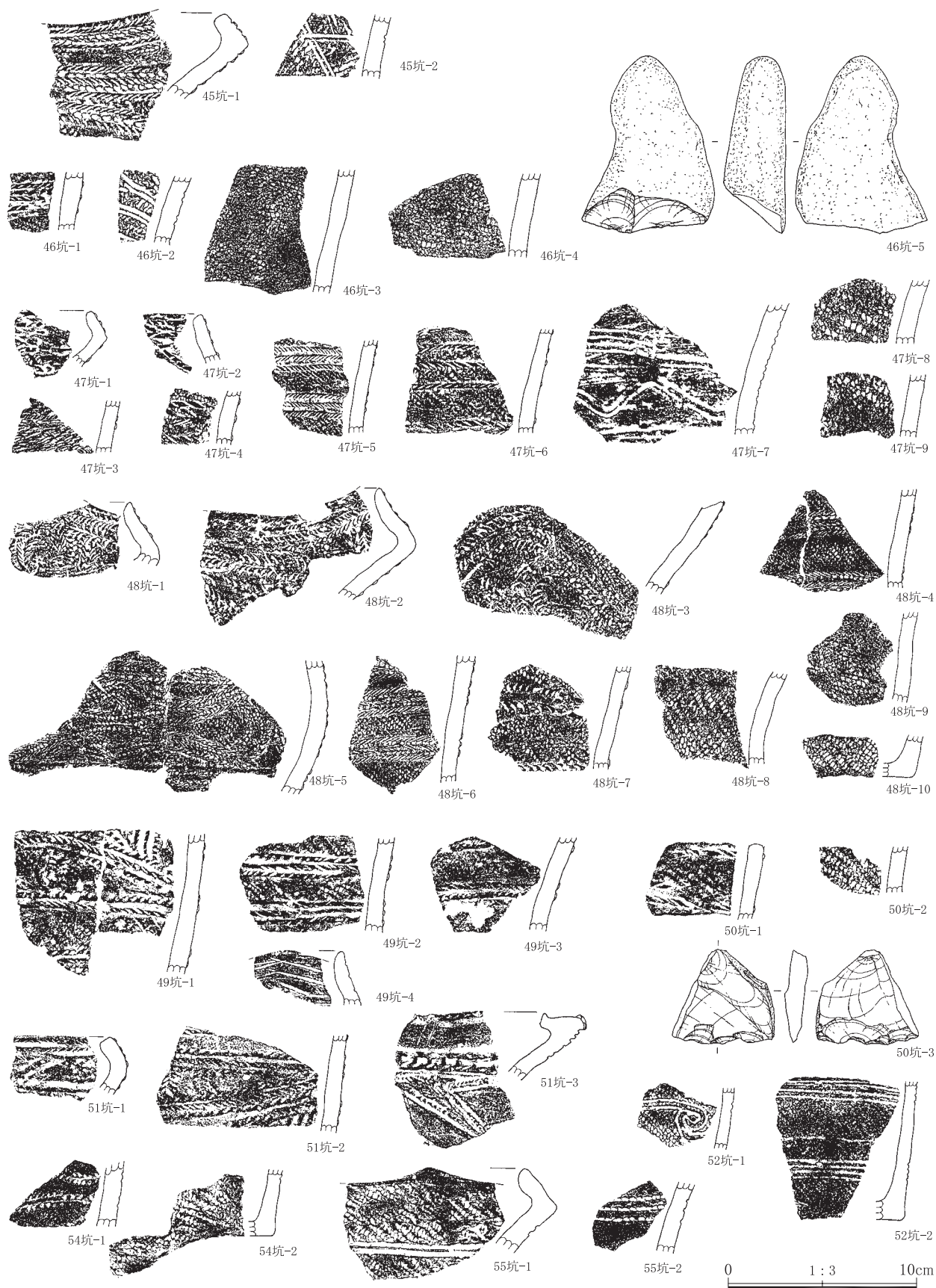


第148図 土坑出土遺物(9)

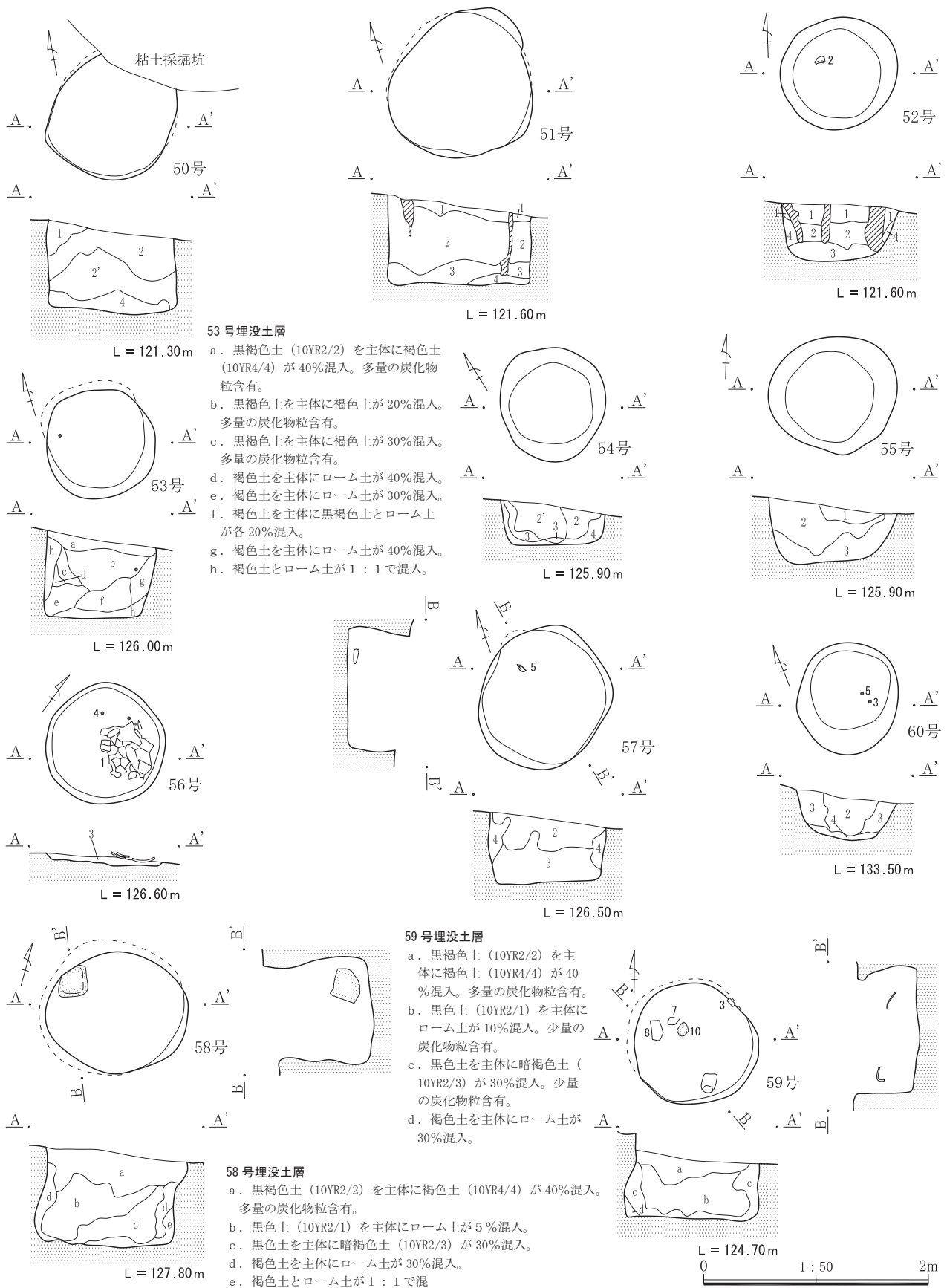


第149図 39号土坑~44号土坑・46号土坑~49号土坑

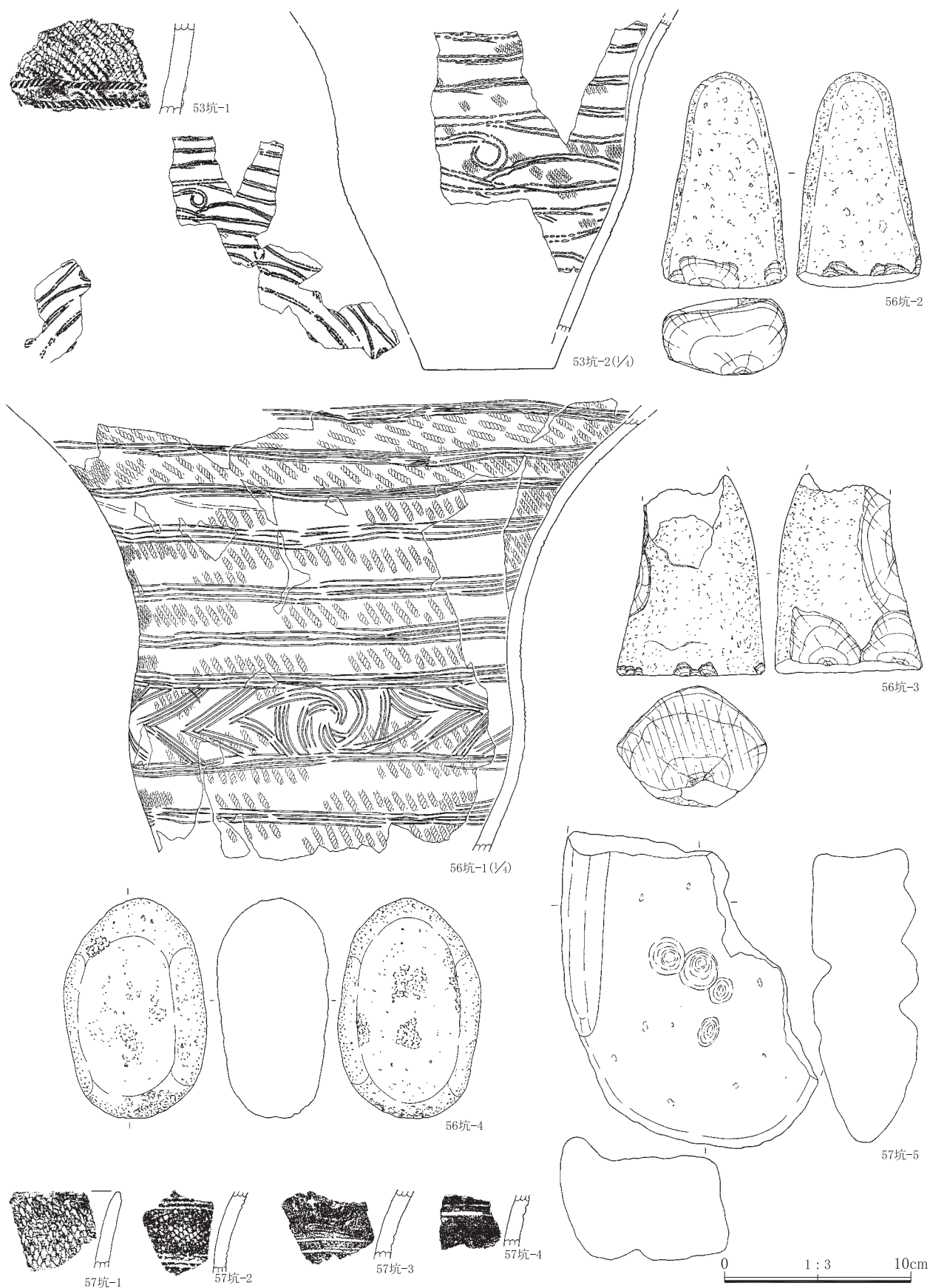
II 今井三騎堂遺跡の調査



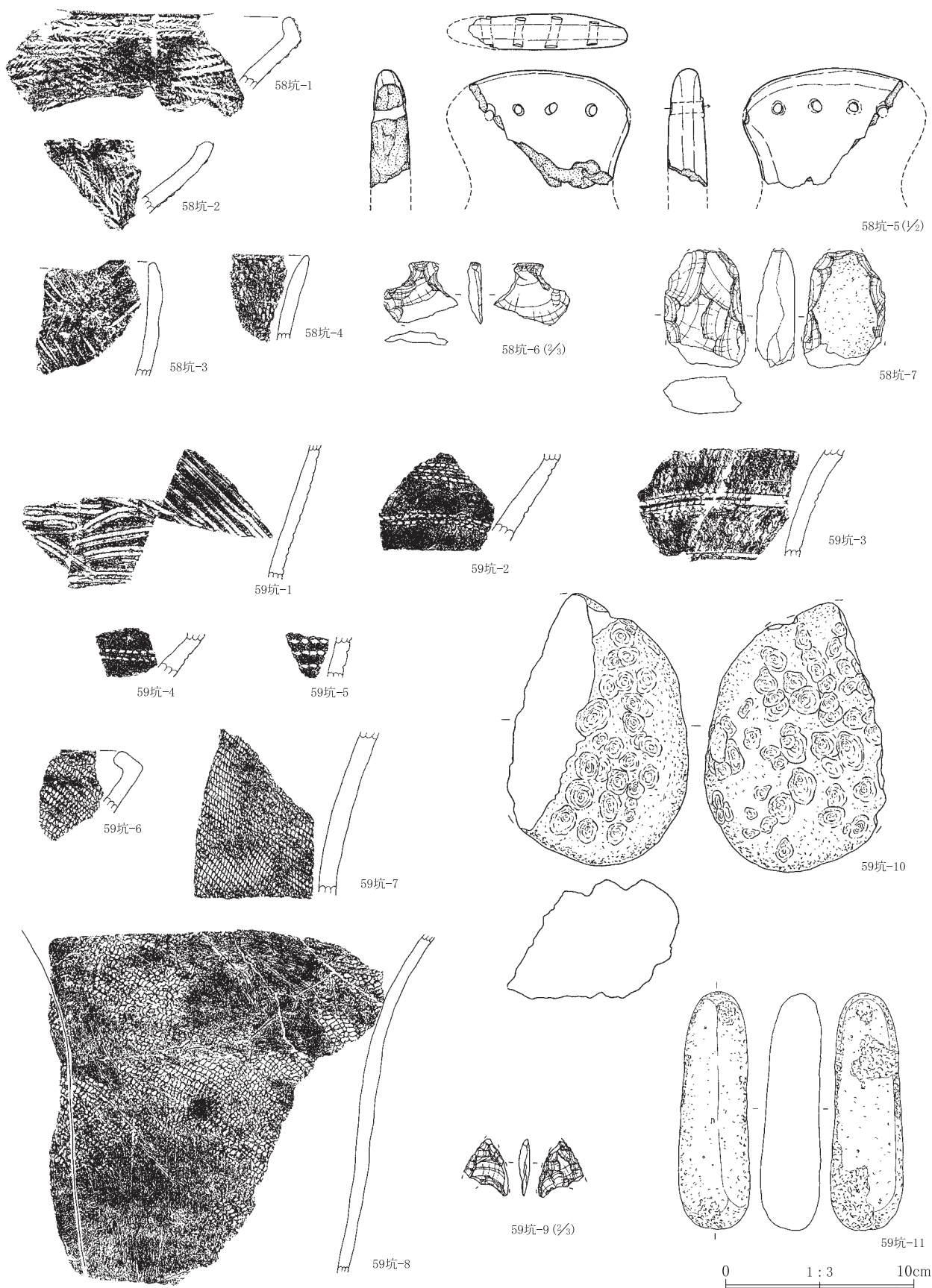
第 150 図 土坑出土遺物 (10)



第 151 図 50 号土坑～ 60 号土坑



第 152 図 土坑出土遺物 (11)

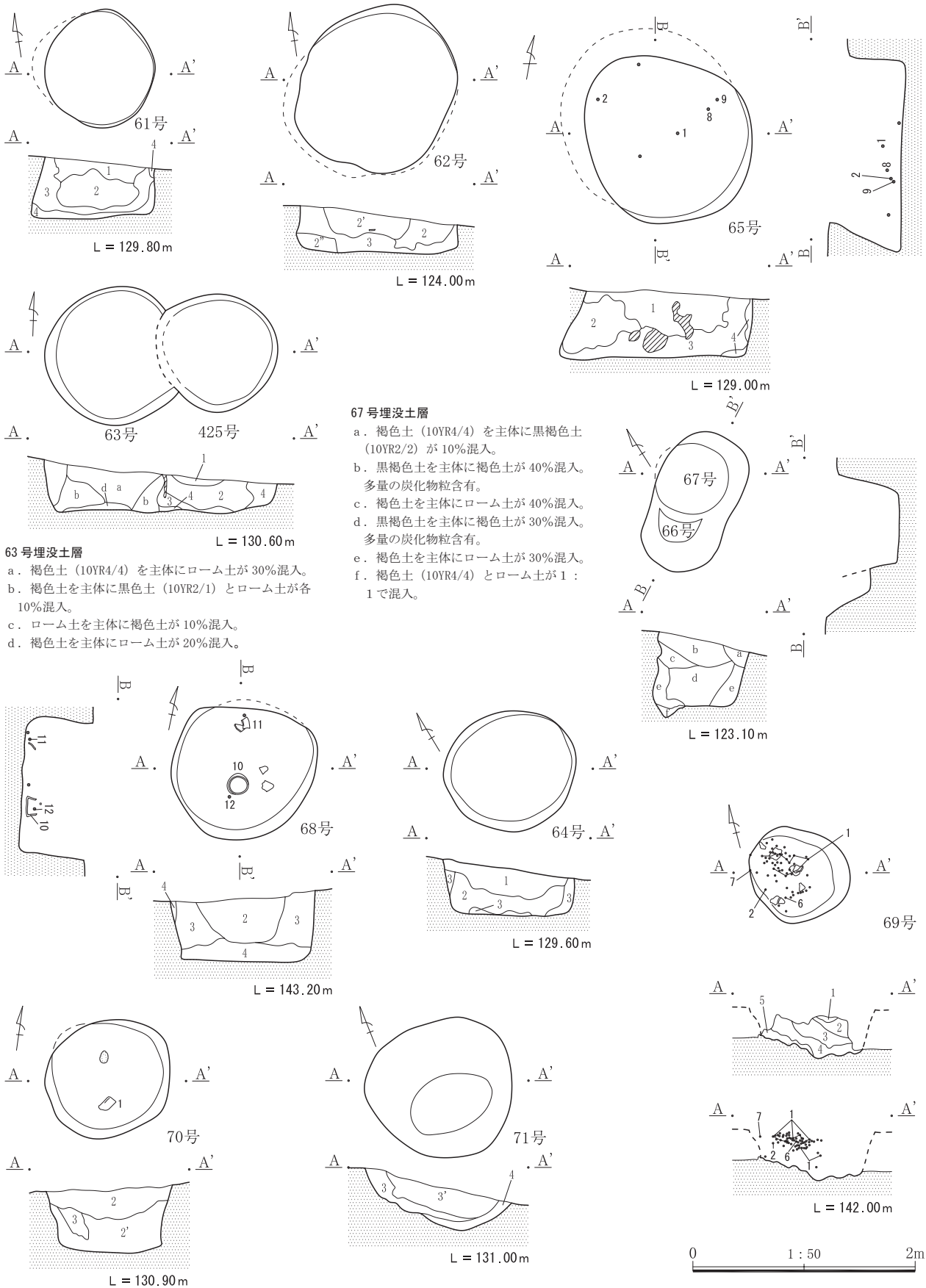


第 153 图 土坑出土遗物 (12)

II 今井三騎堂遺跡の調査

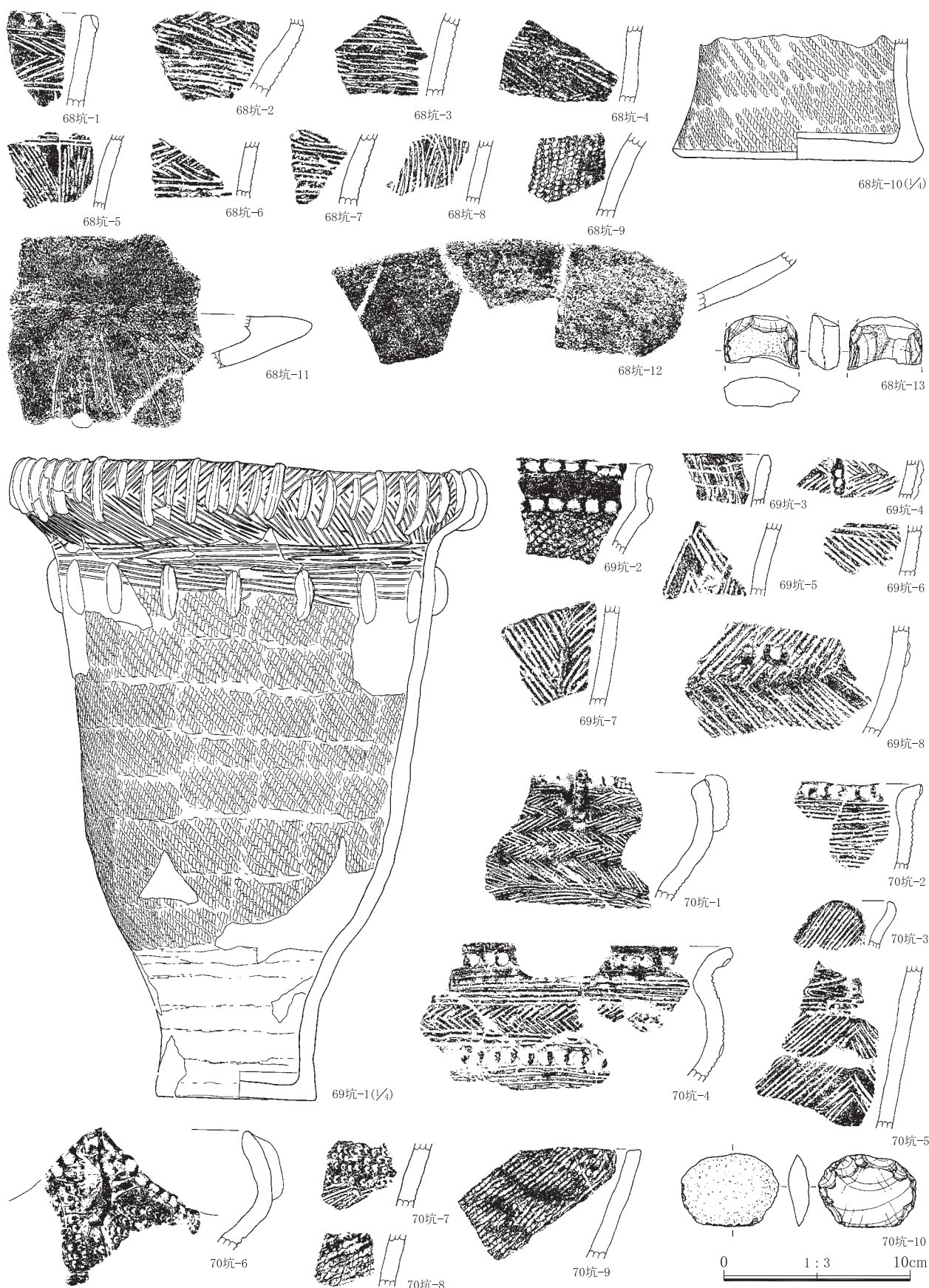


第154図 土坑出土遺物(13)

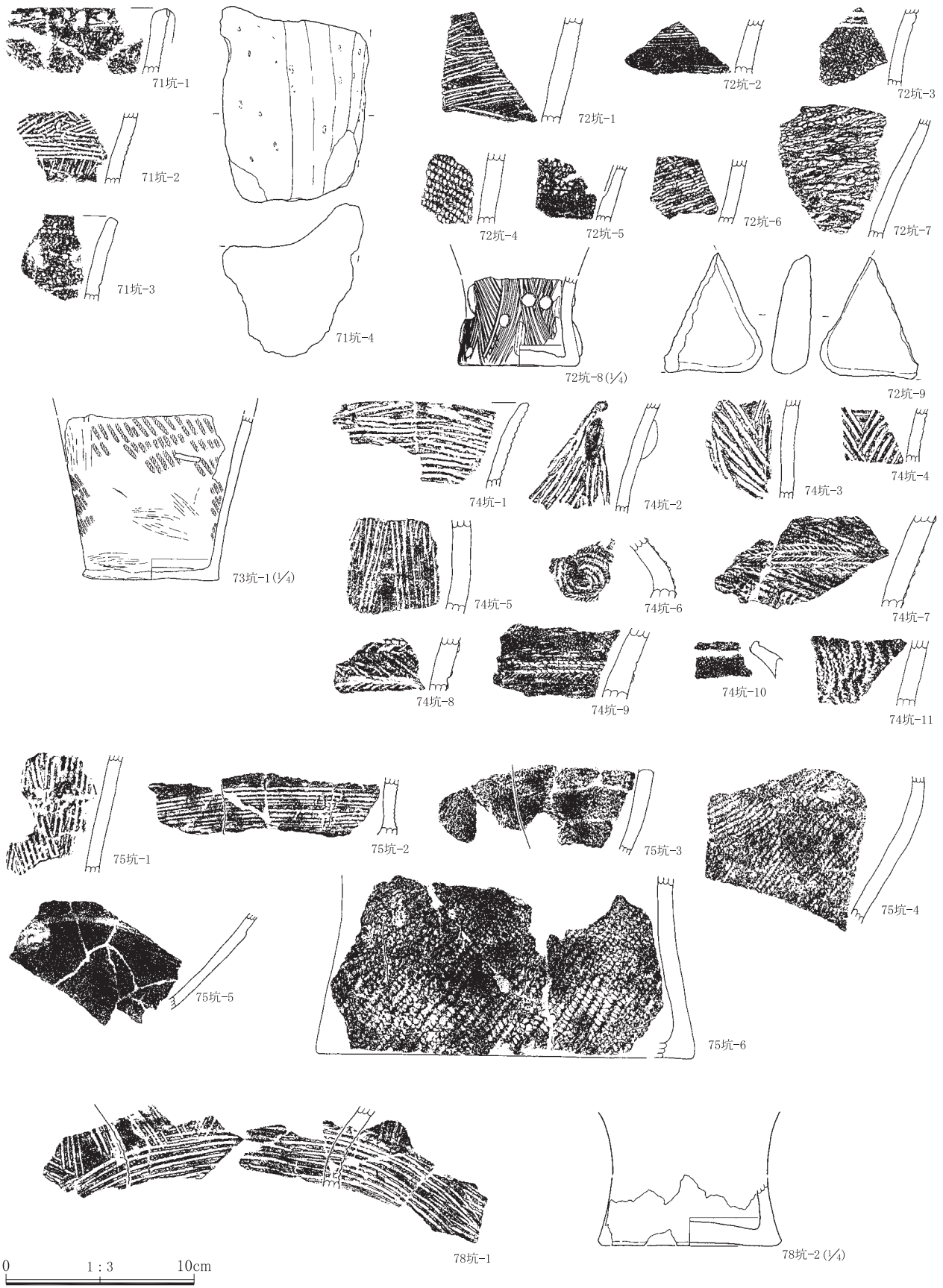


第155図 61号土坑~71号土坑・425号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査

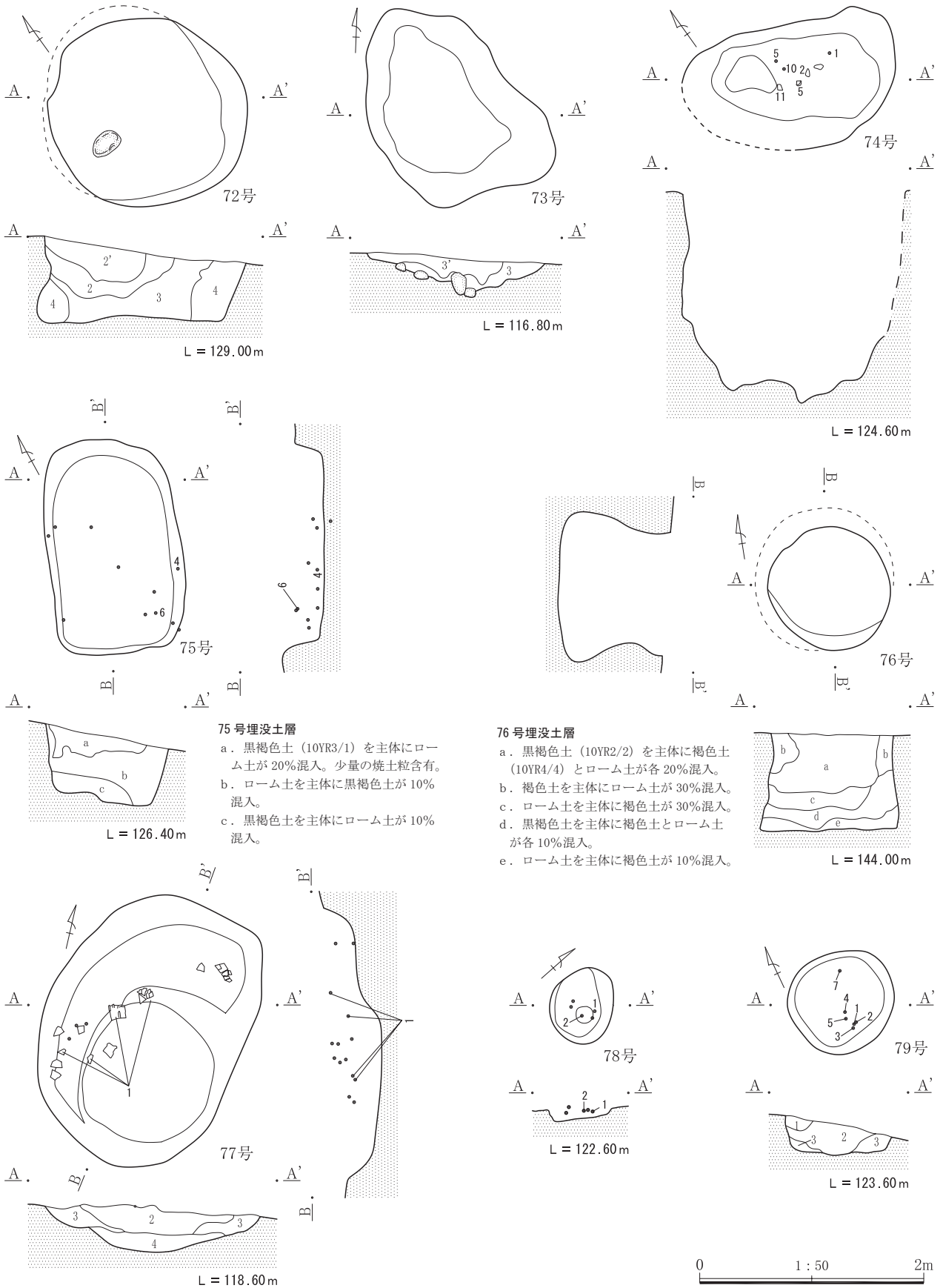


第 156 図 土坑出土遺物 (14)



第 157 图 土坑出土遗物 (15)

II 今井三騎堂遺跡の調査

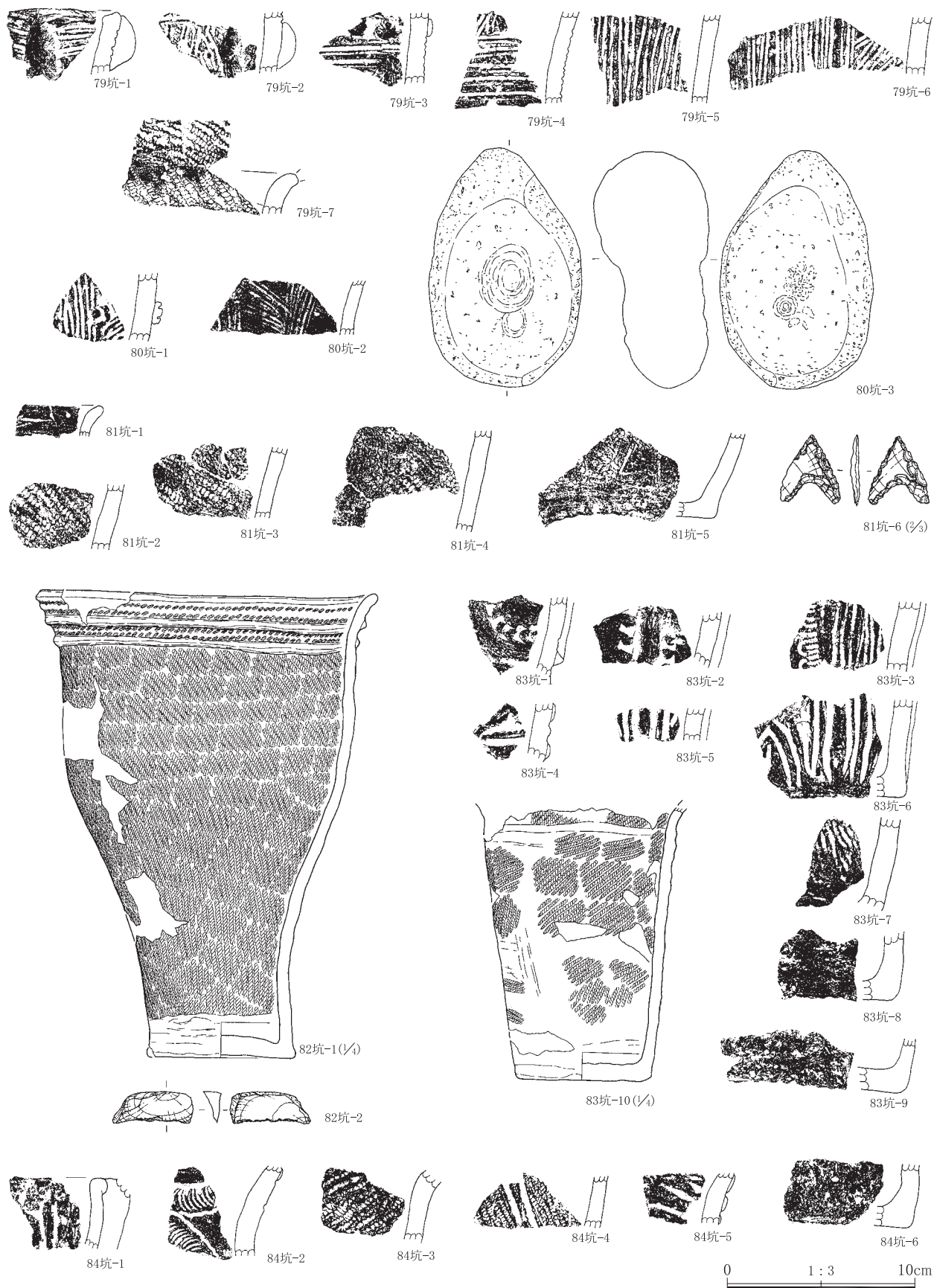


第 158 図 72 号土坑～79 号土坑

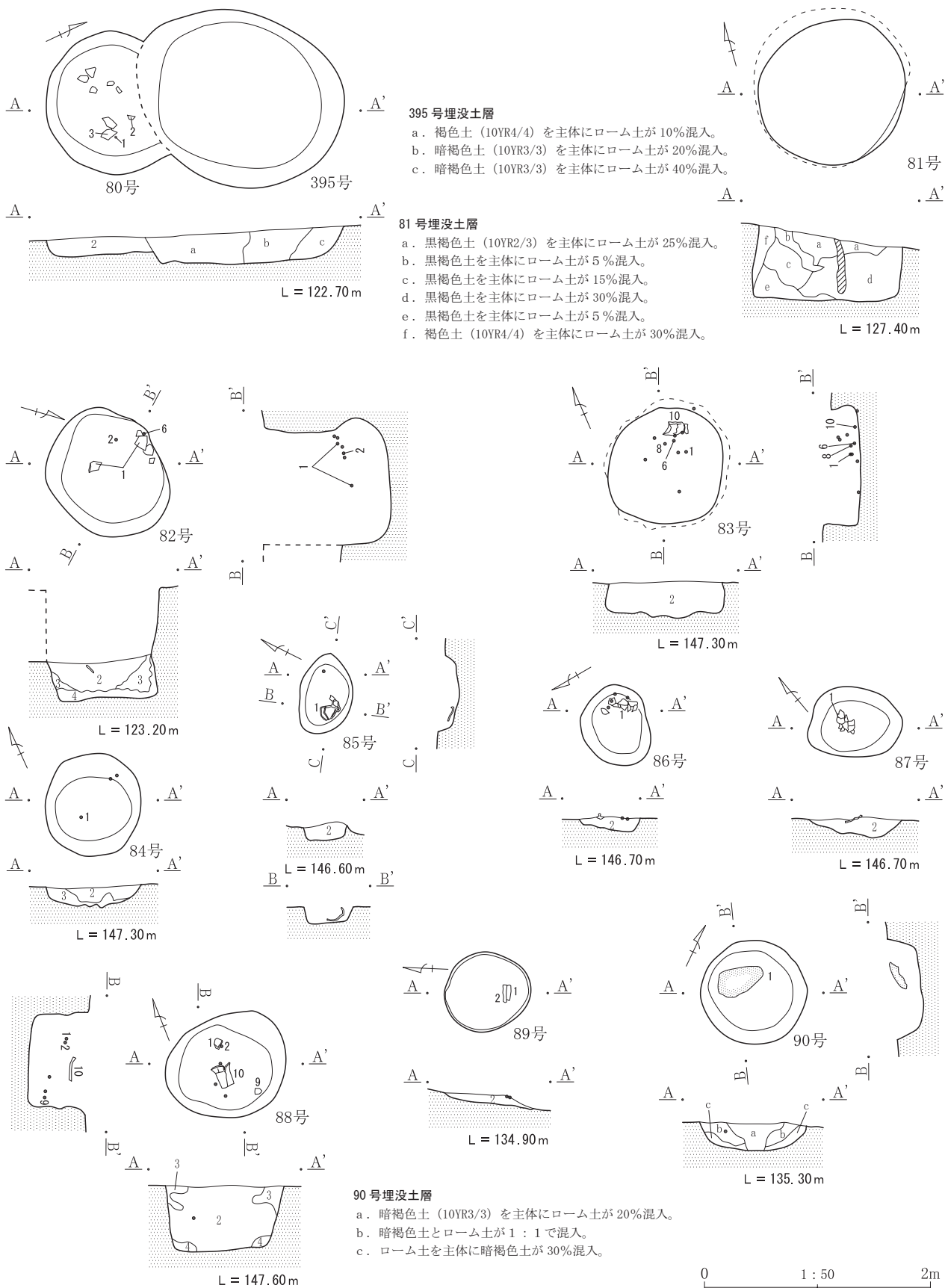


第 159 图 土坑出土遗物 (16)

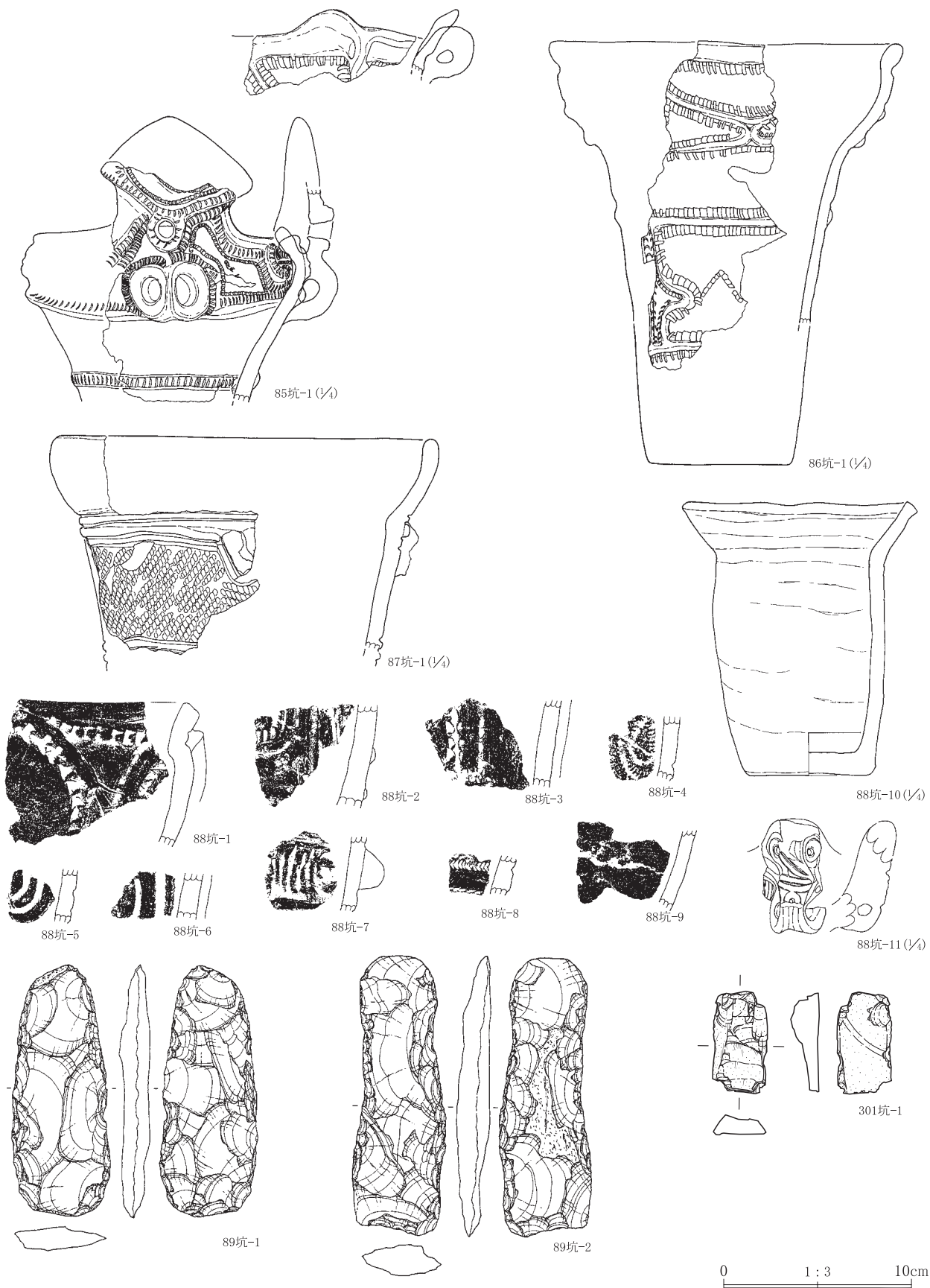
II 今井三騎堂遺跡の調査



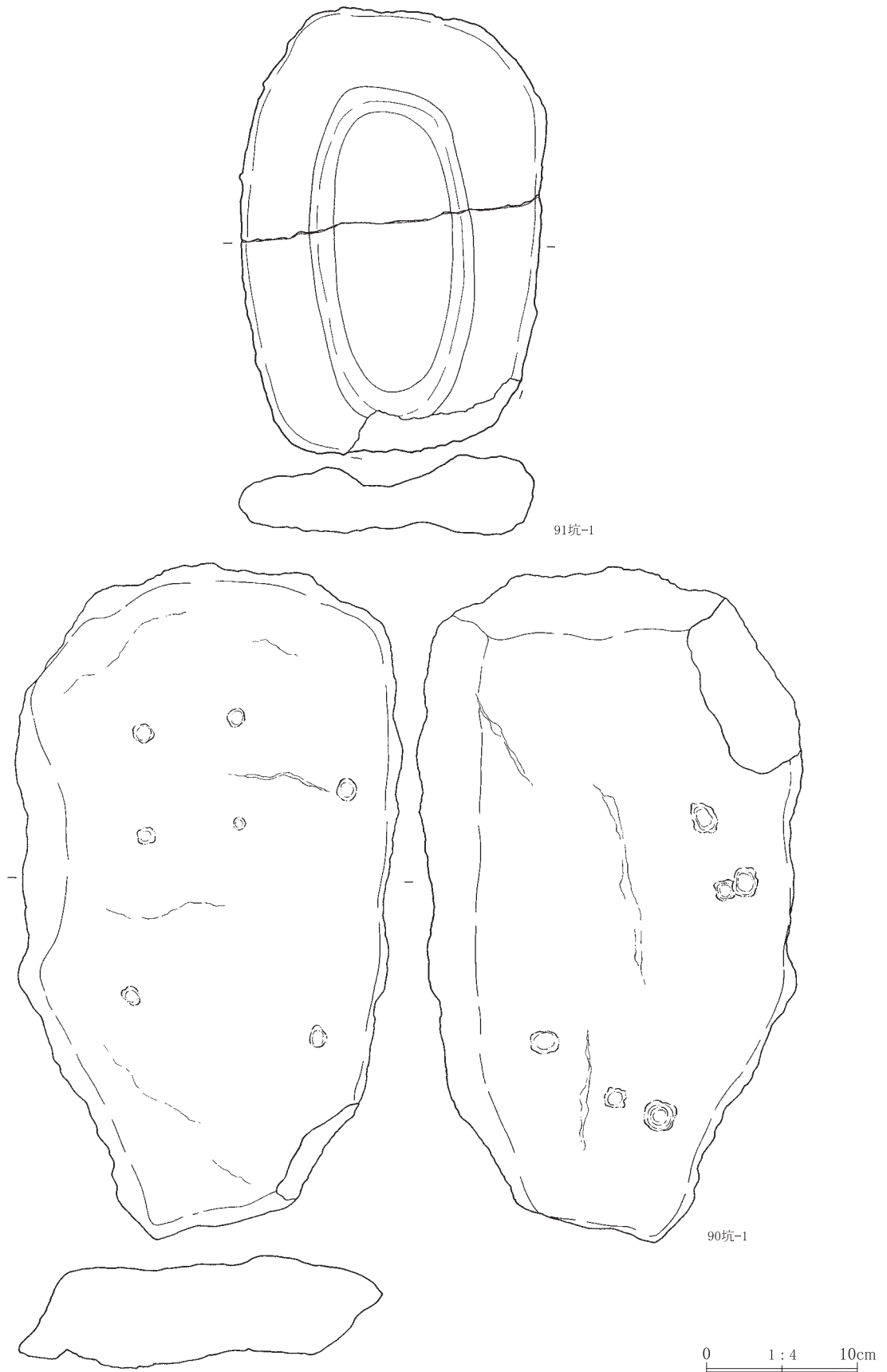
第 160 図 土坑出土遺物 (17)



第161図 80号土坑~90号土坑・395号土坑

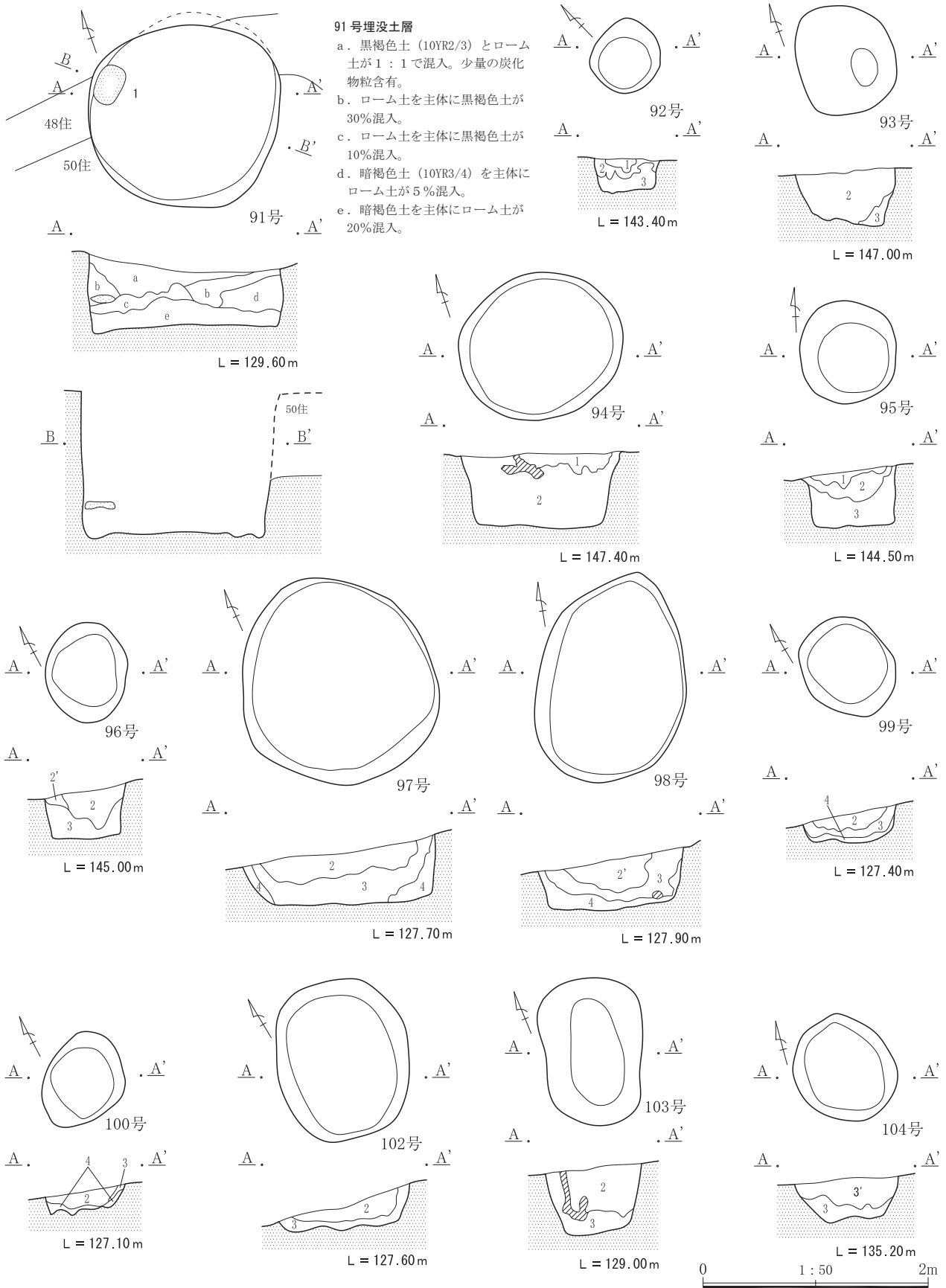


第 162 図 土坑出土遺物 (18)



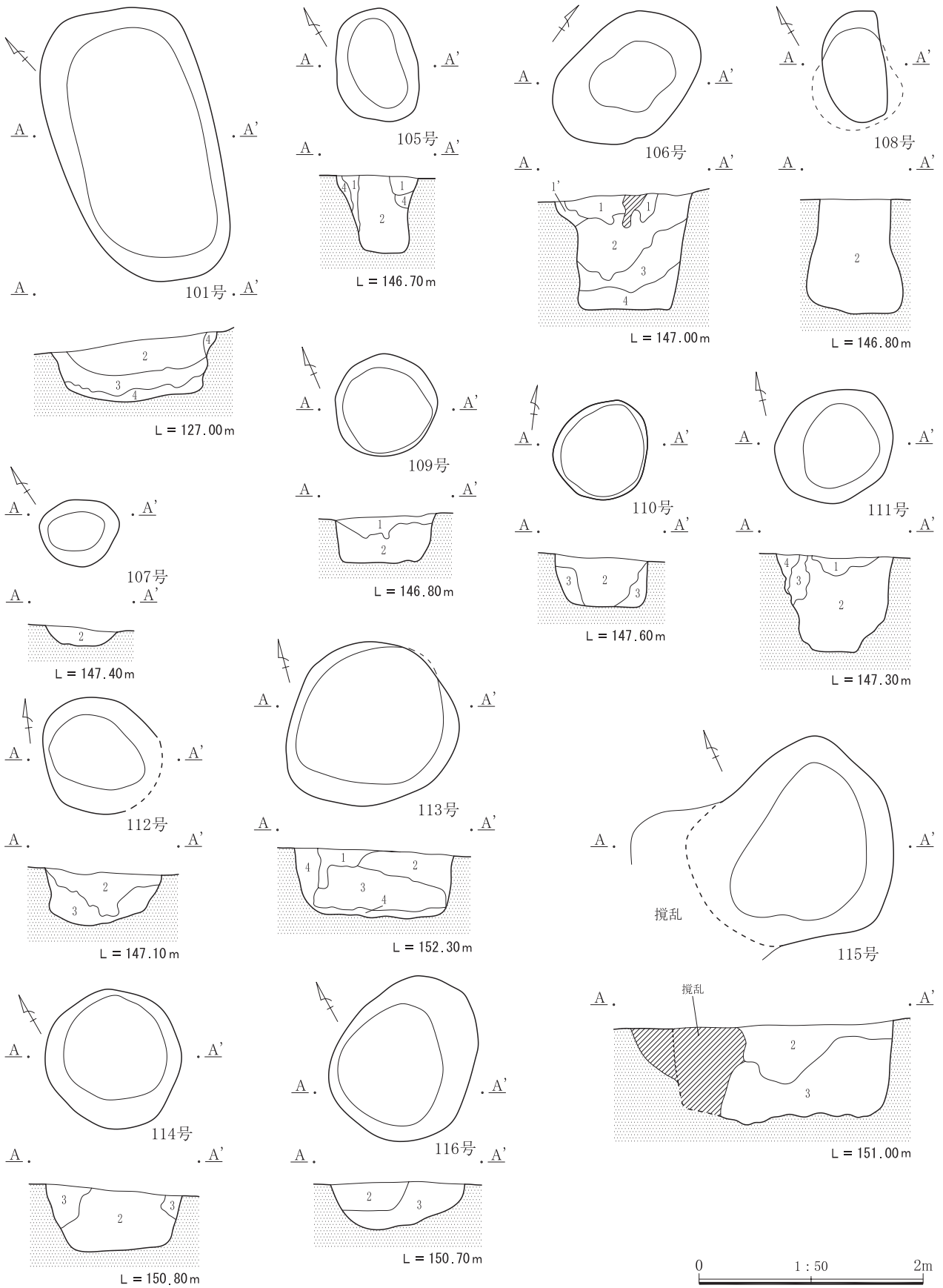
第 163 图 土坑出土遺物 (19)

II 今井三騎堂遺跡の調査



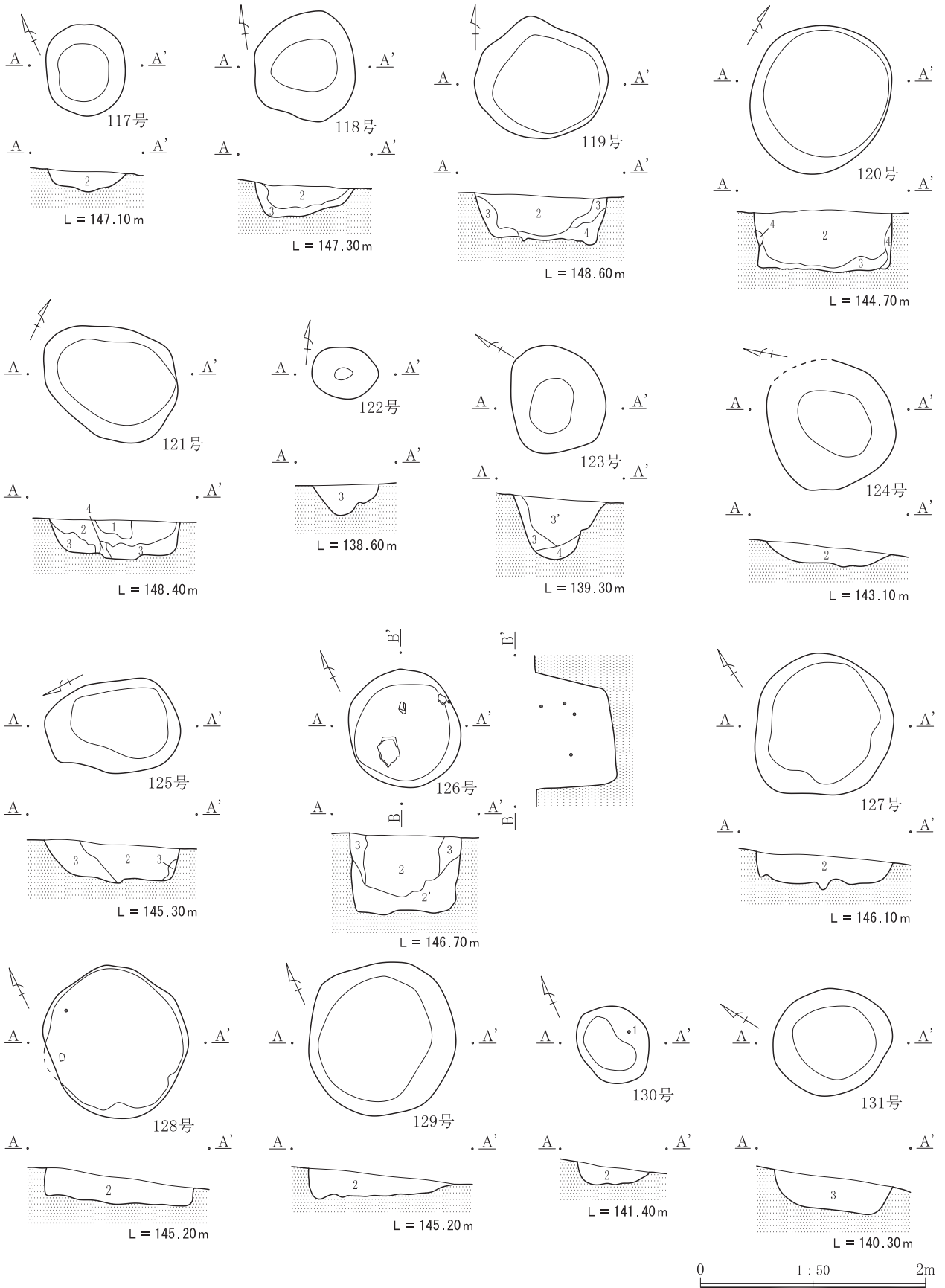
第 164 図 91 号土坑～100 号土坑・102 号土坑～104 号土坑

3. 土坑



第165图 101号土坑·105号土坑~116号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



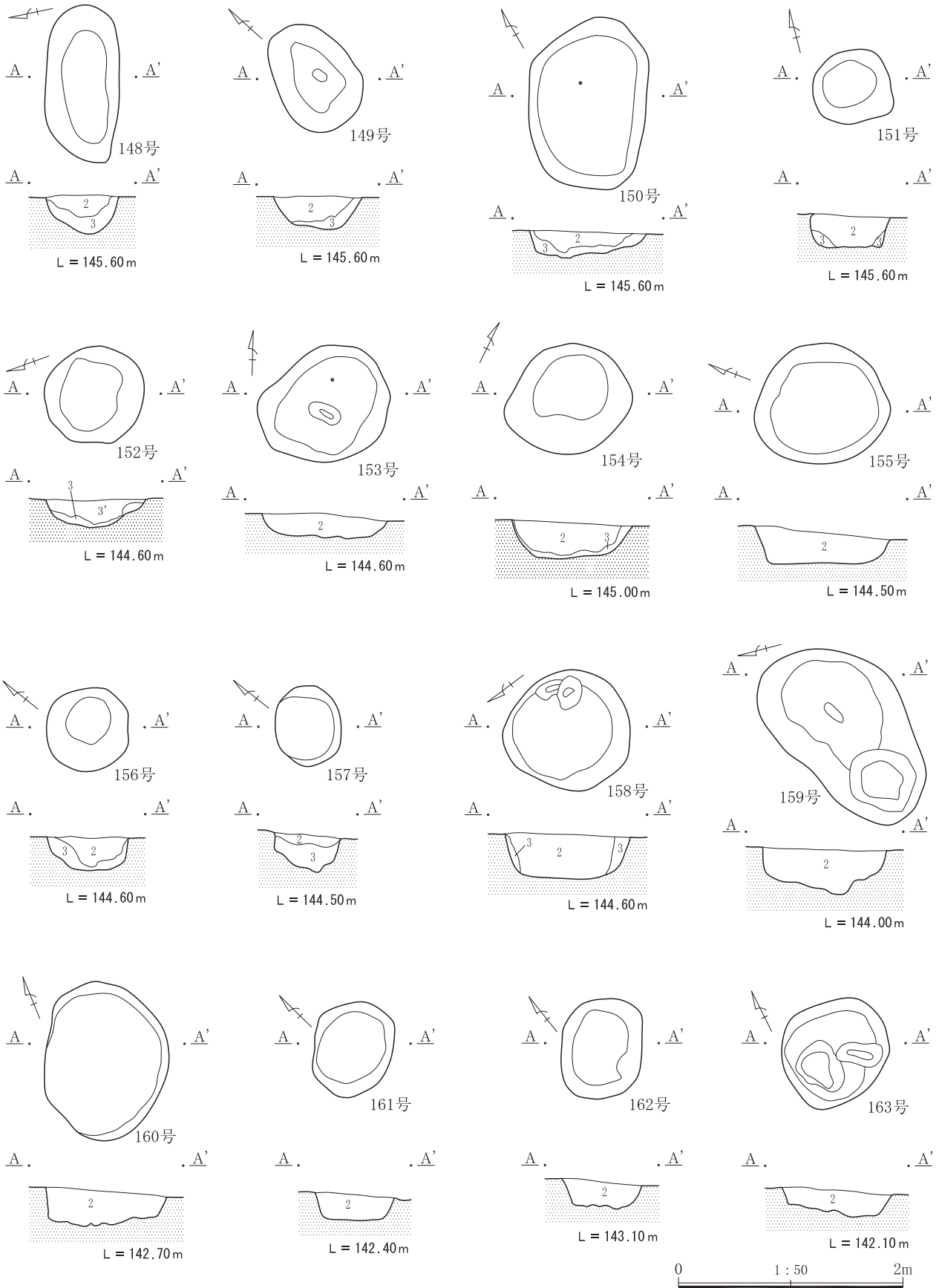
第 166 図 117 号土坑～131 号土坑

3. 土坑



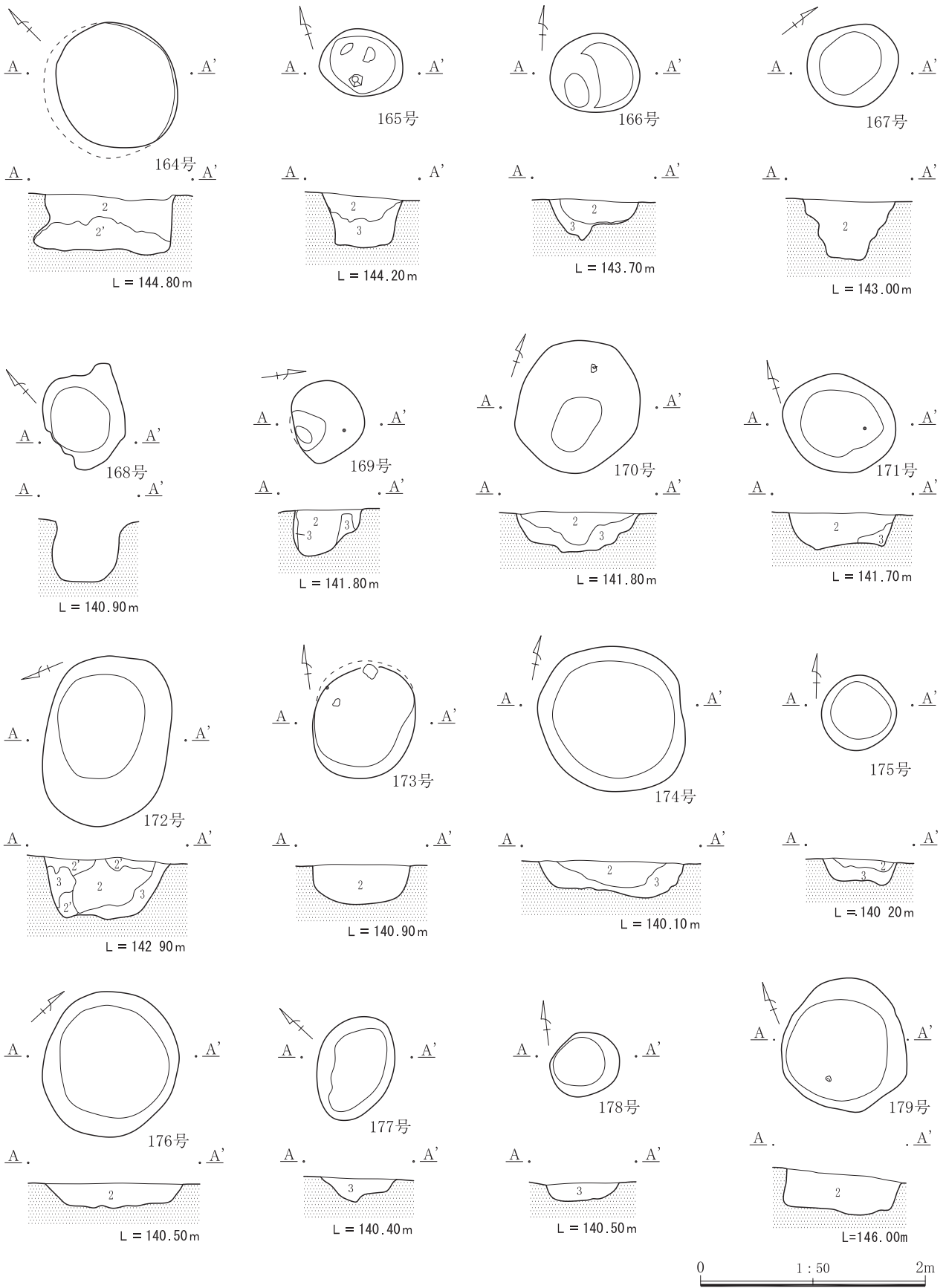
第167图 132号土坑~147号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



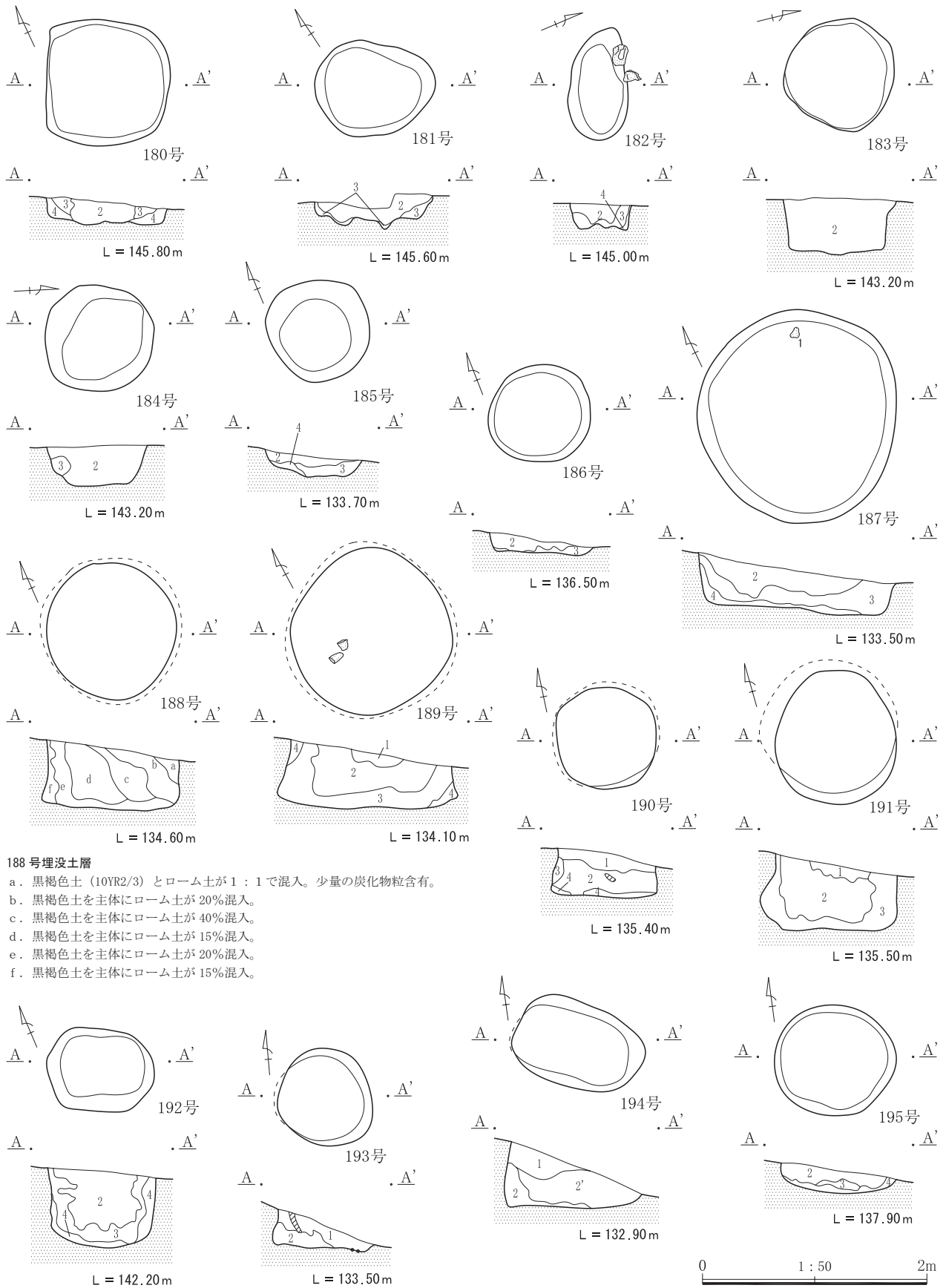
第168図 148号土坑～163号土坑

3. 土坑



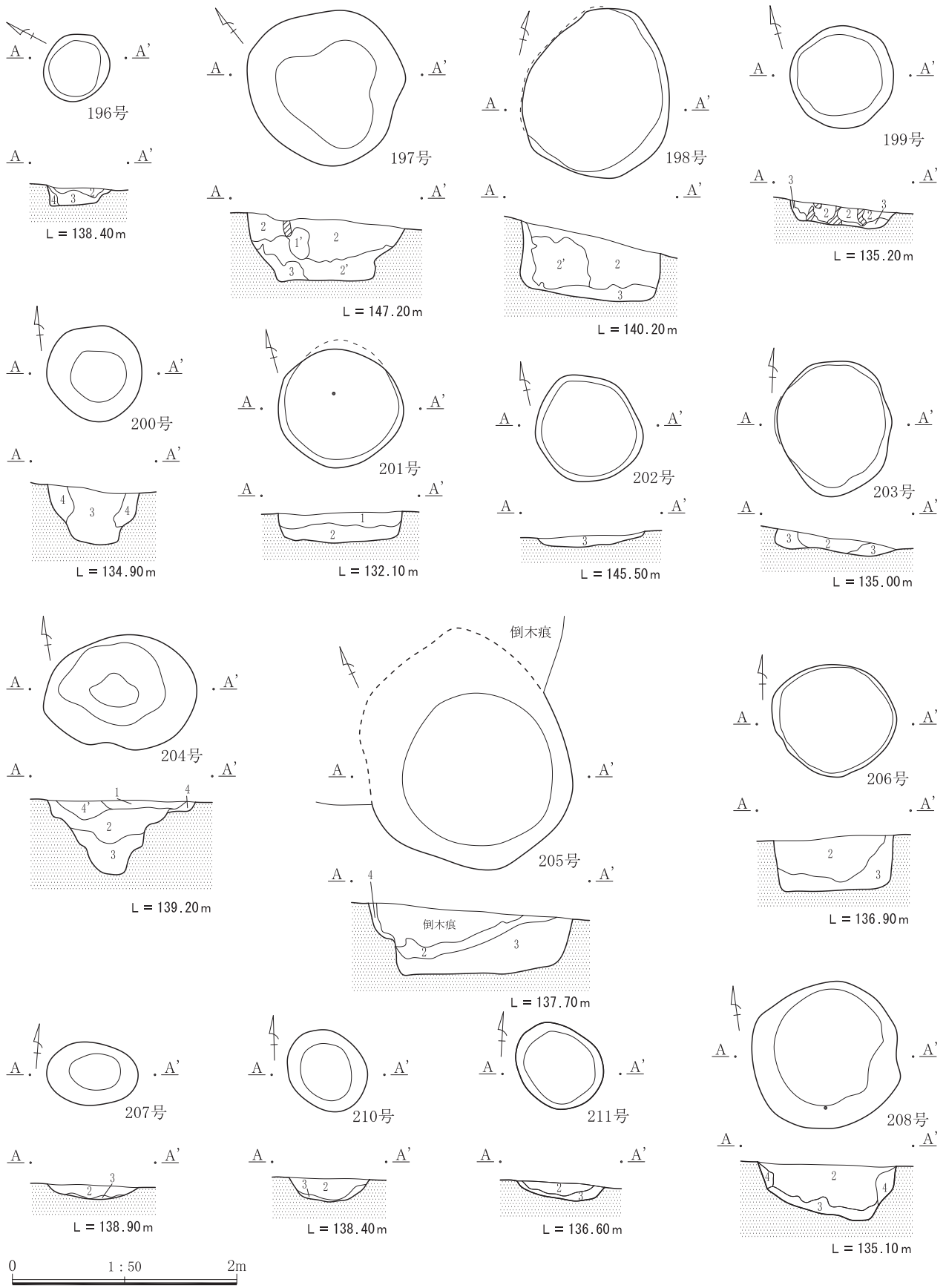
第169图 164号土坑~179号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



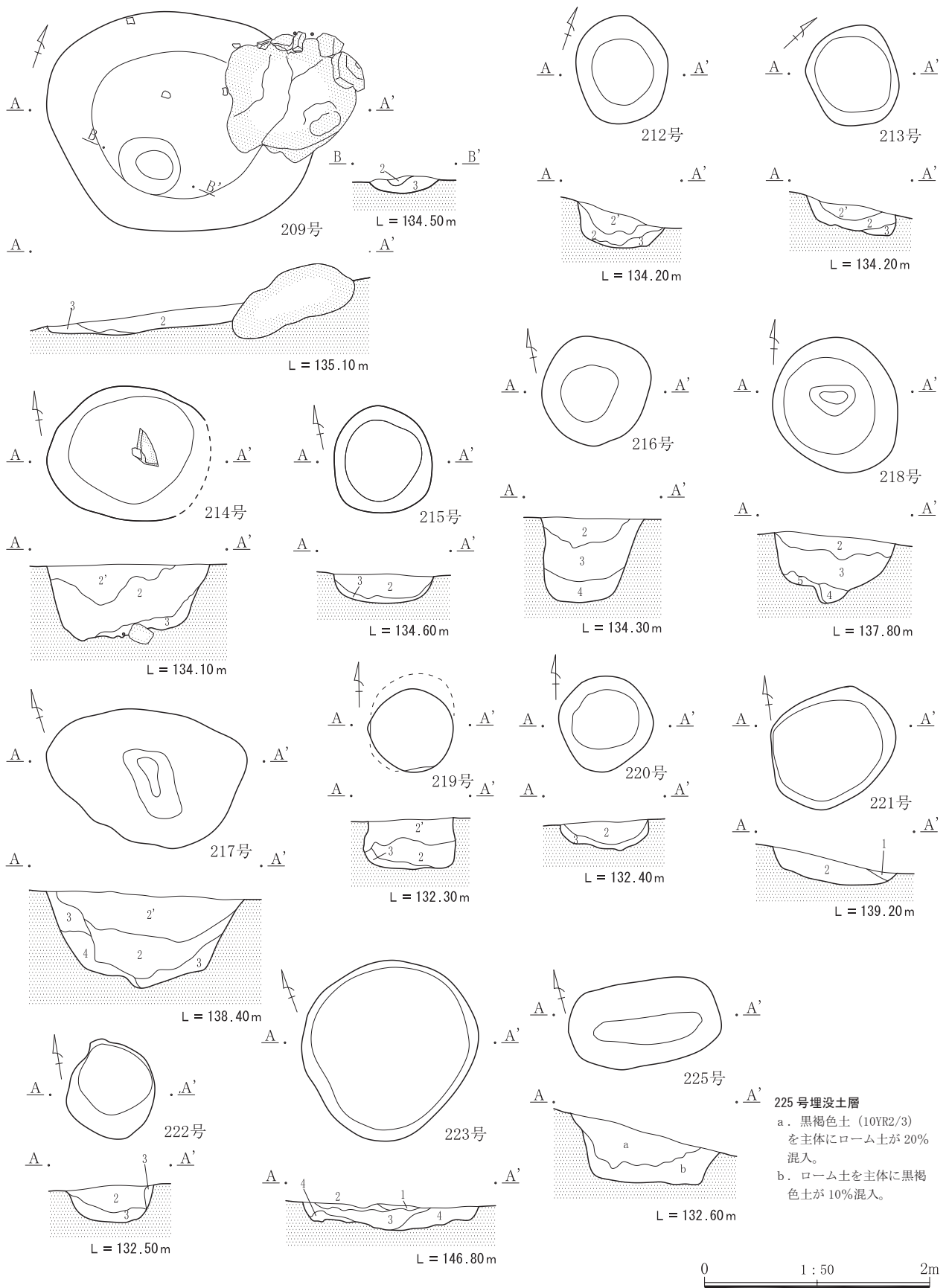
第170図 180号土坑～195号土坑

3. 土坑

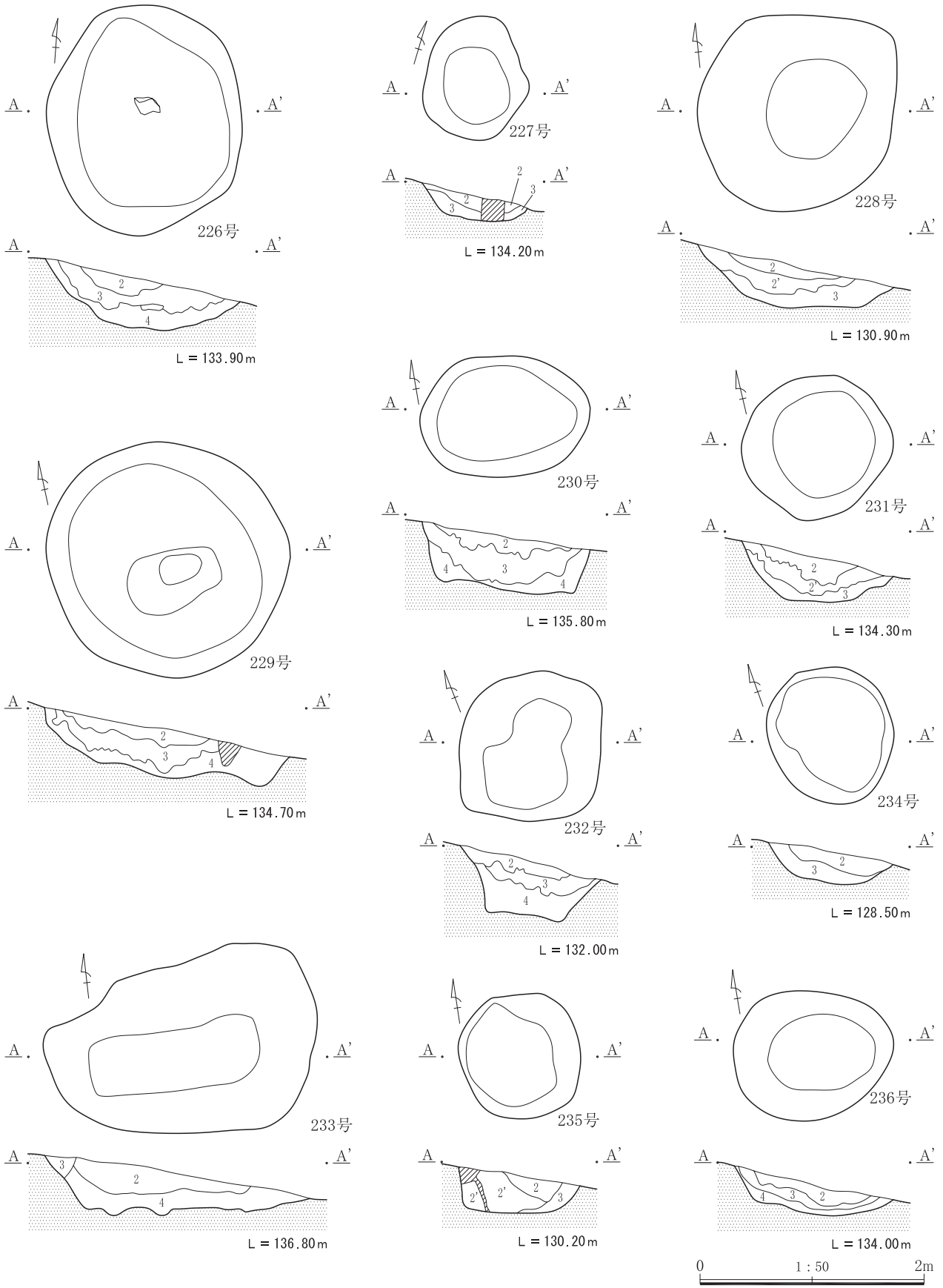


第171图 196号土坑~208号土坑·210号土坑·211号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査

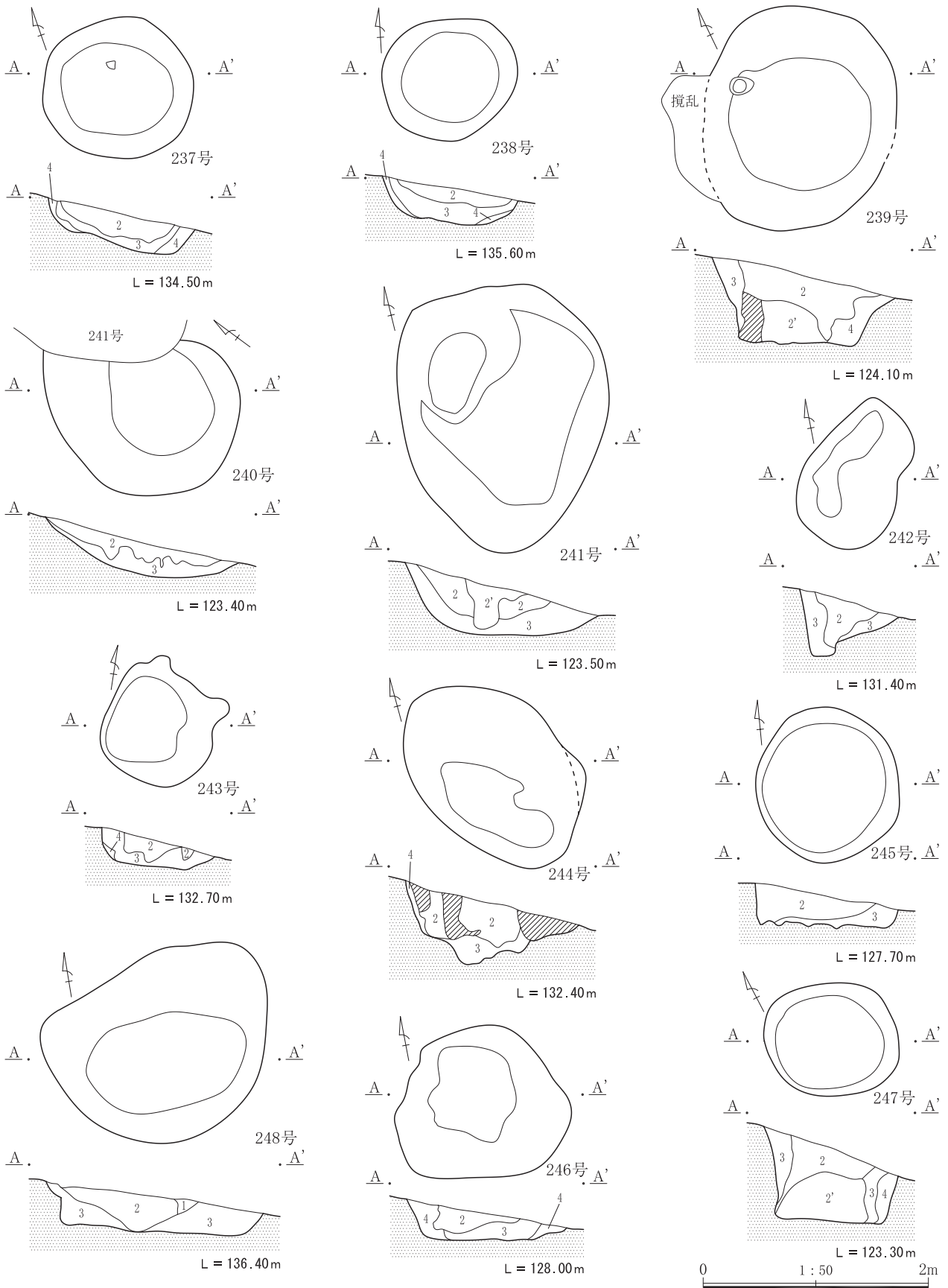


第172図 209号土坑・212号土坑～223号土坑・225号土坑



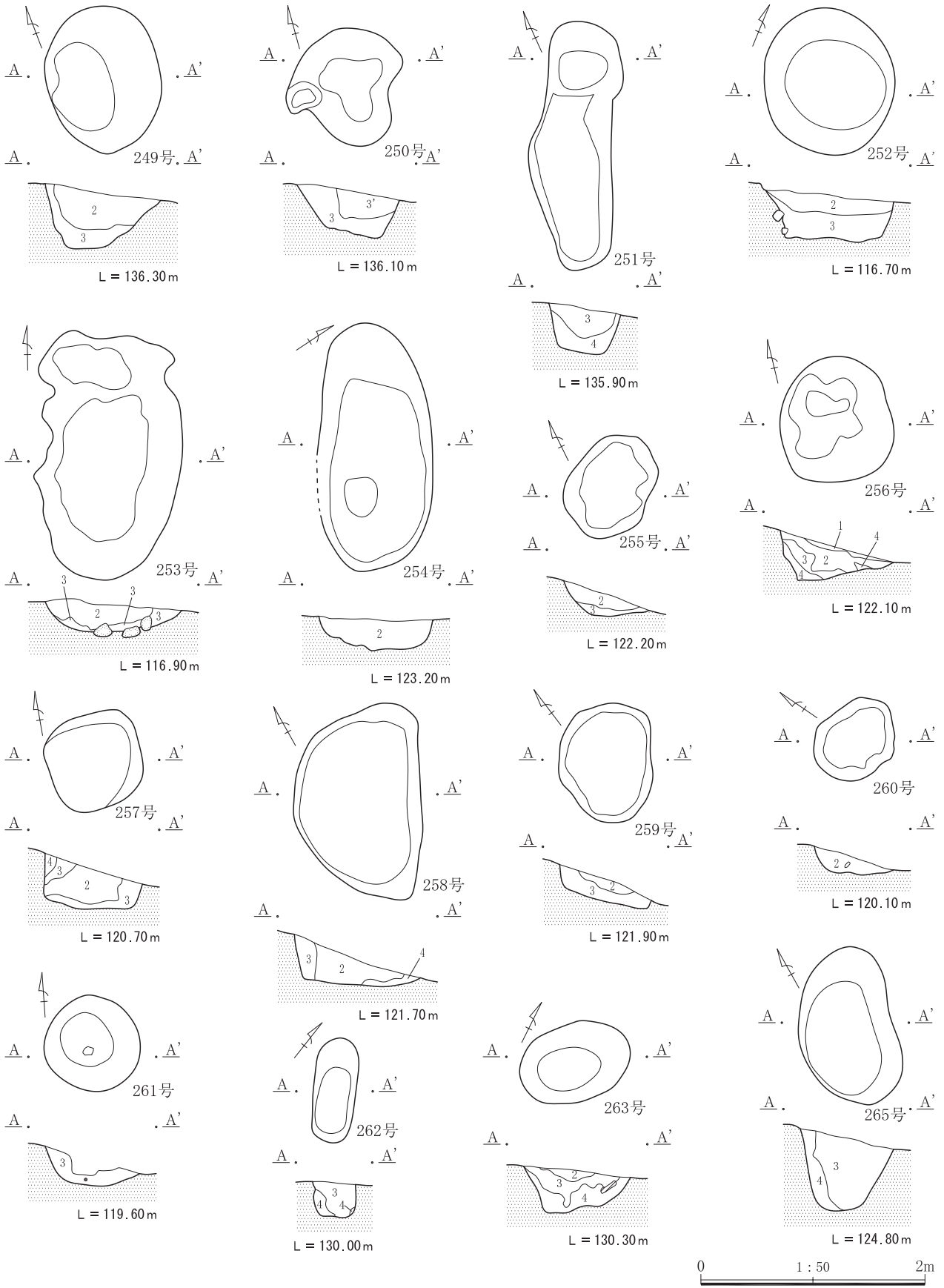
第 173 图 226 号土坑~236 号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



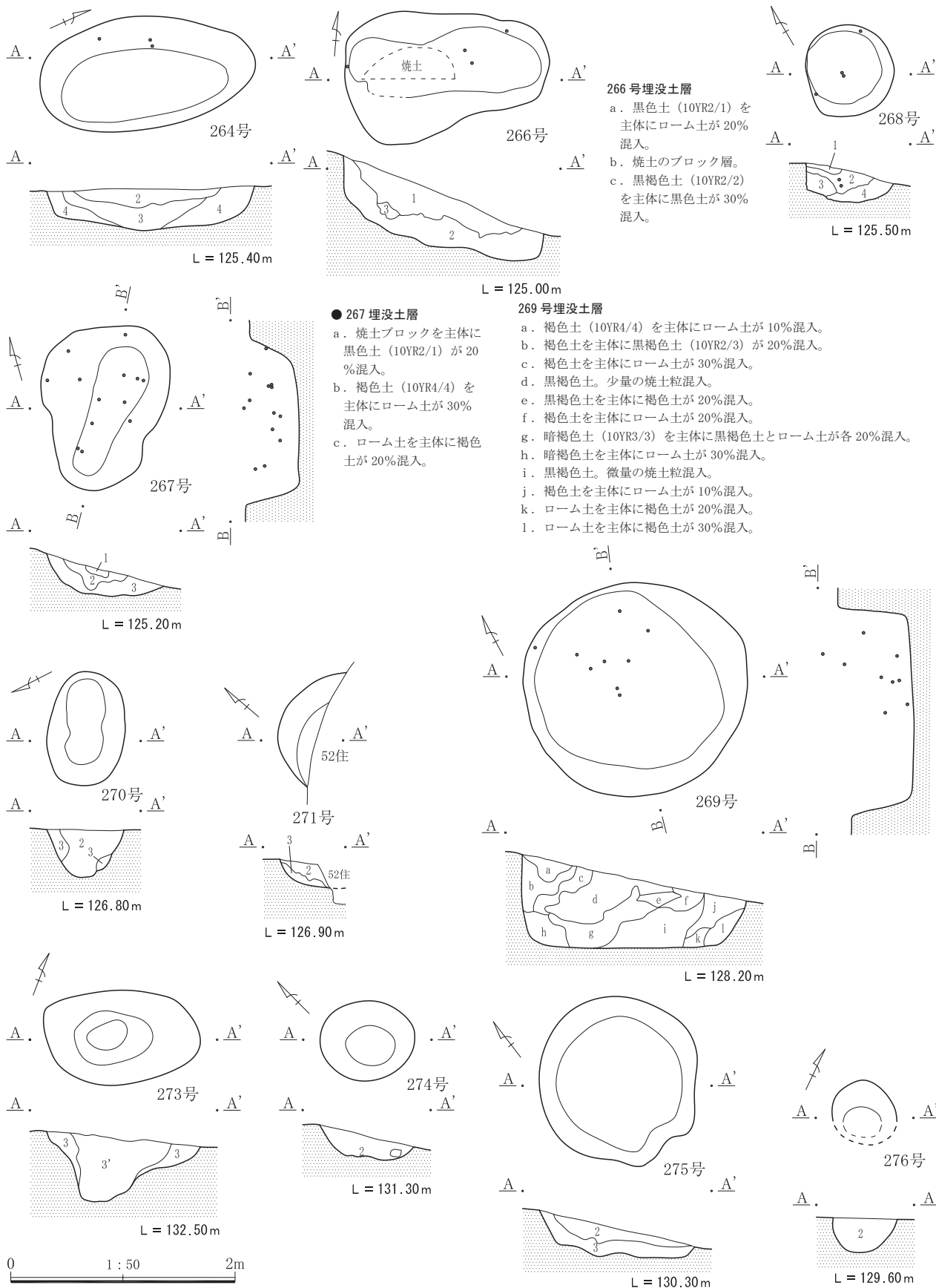
第174図 237号土坑～248号土坑

3. 土坑

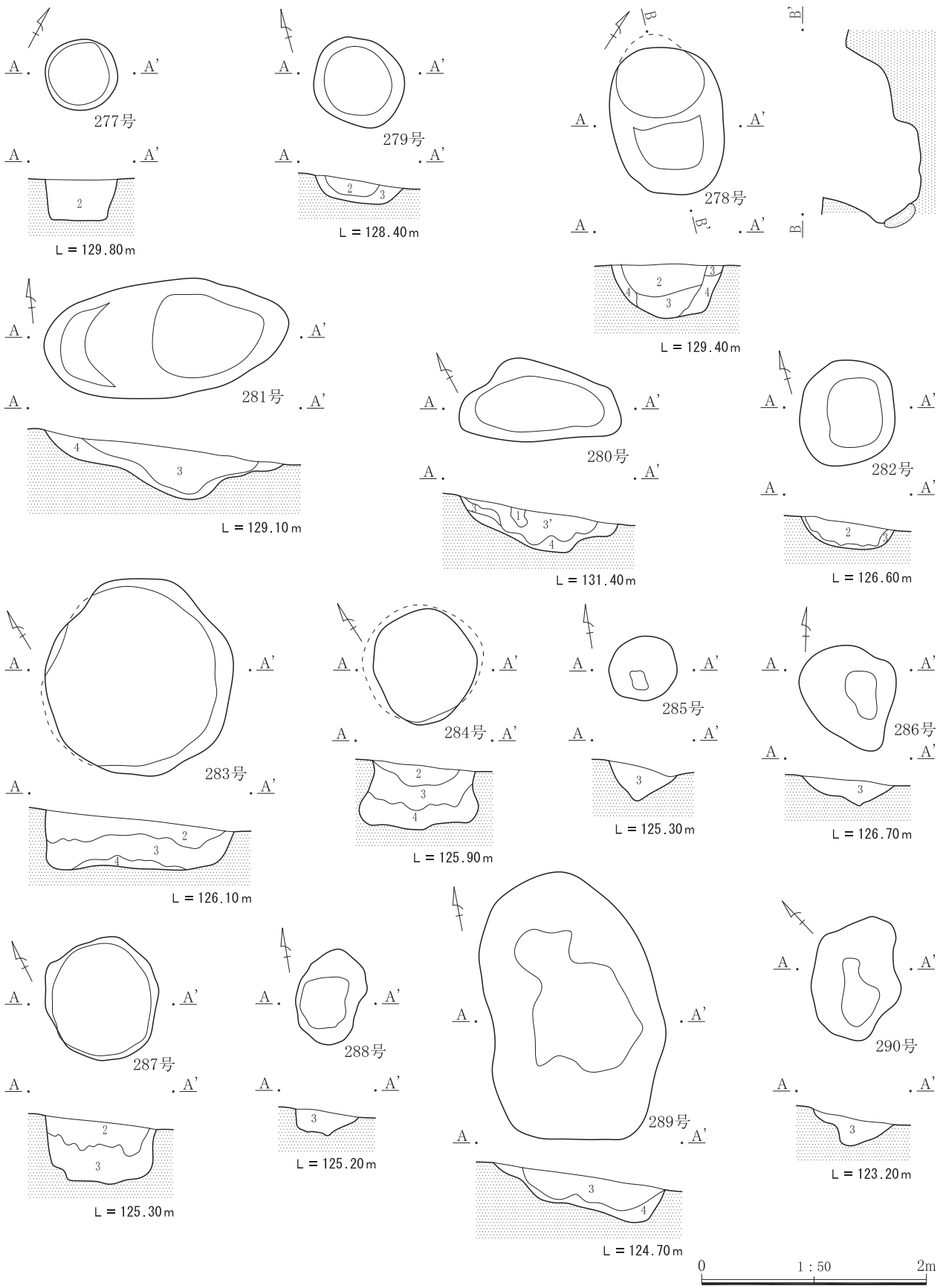


第175图 249号土坑~263号土坑·265号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査

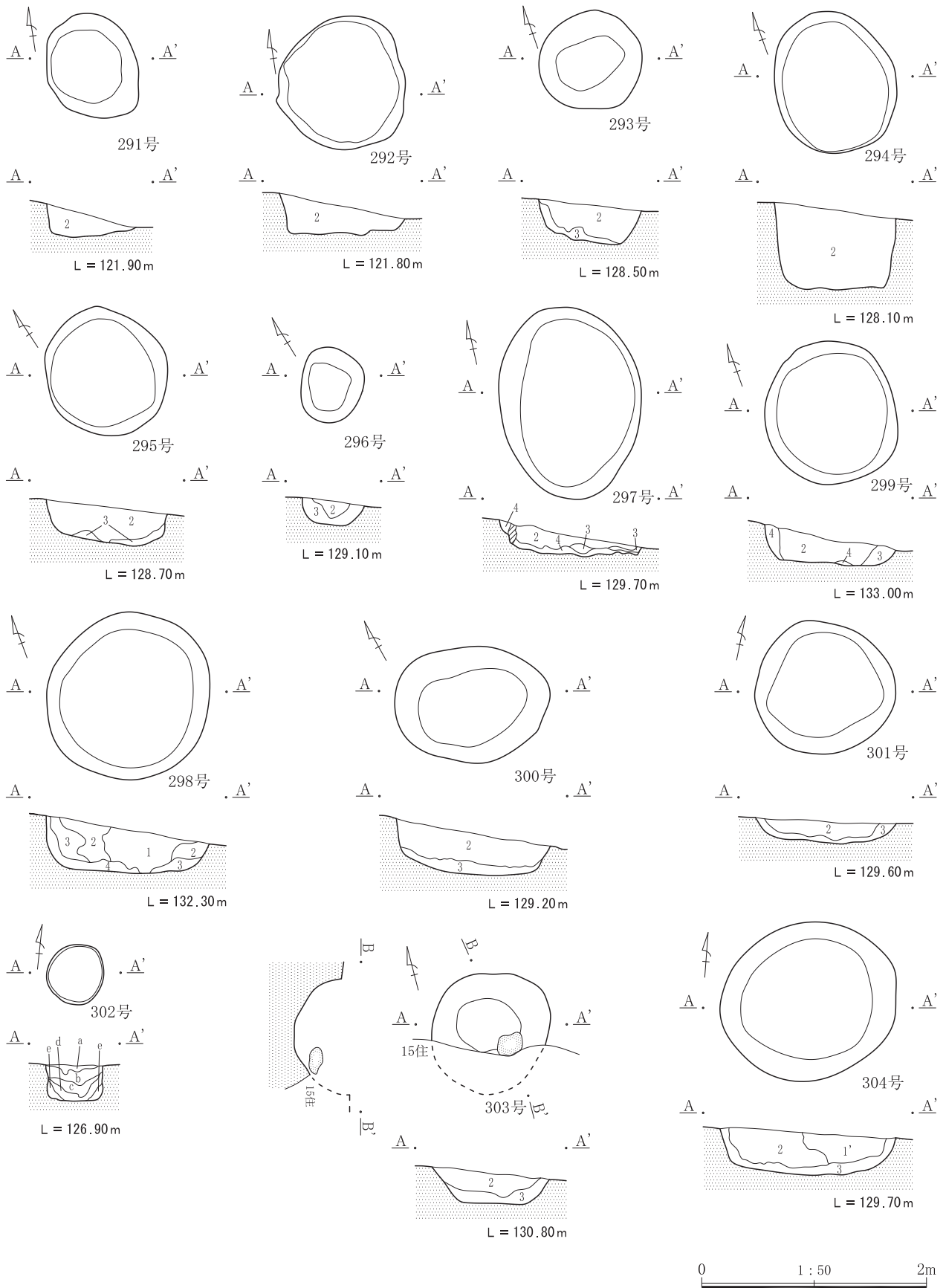


第176図 264号土坑・266号土坑～271号土坑・273号～276号土坑

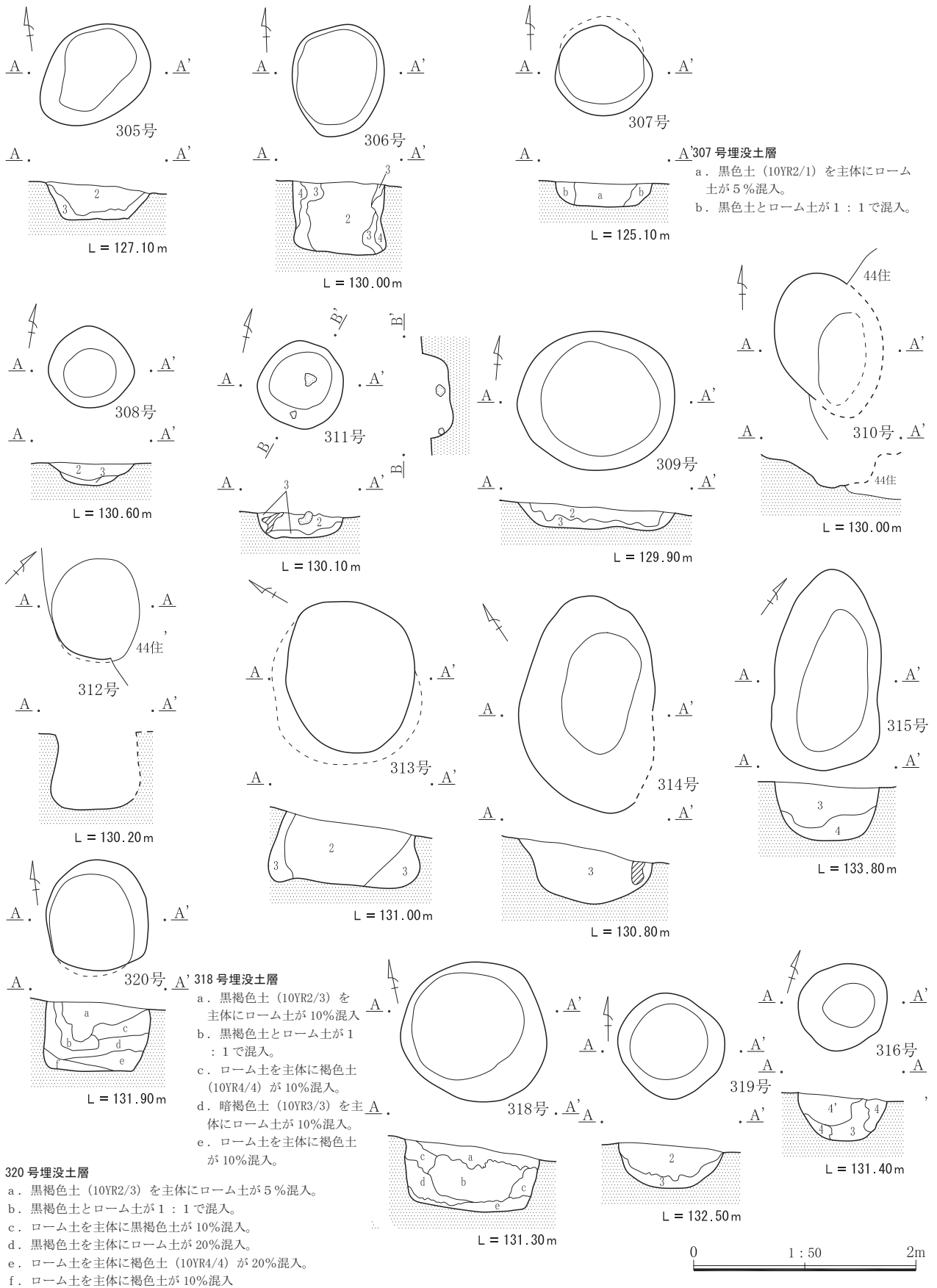


第177图 277号土坑~290号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査

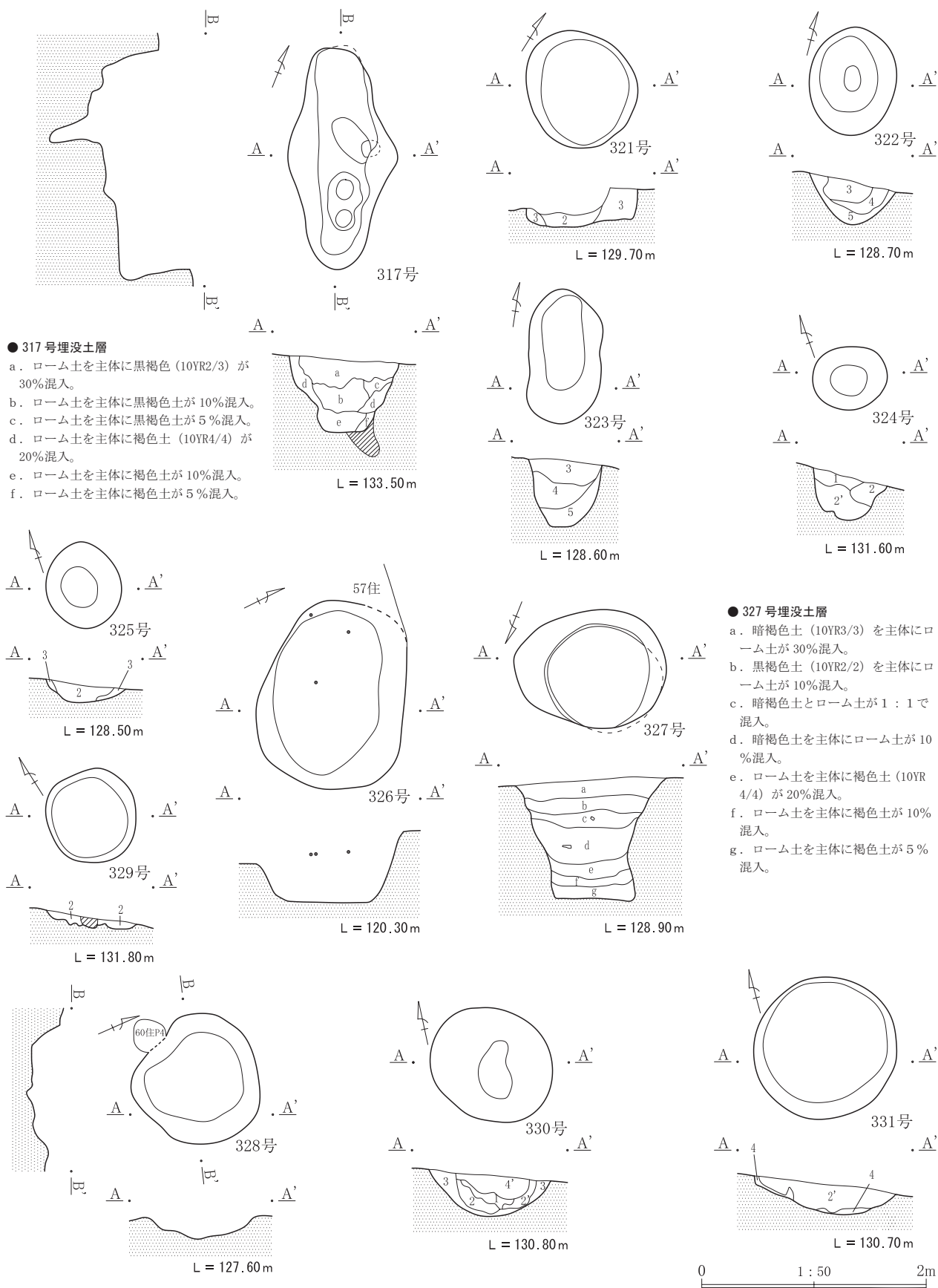


第178図 291号土坑～304号土坑



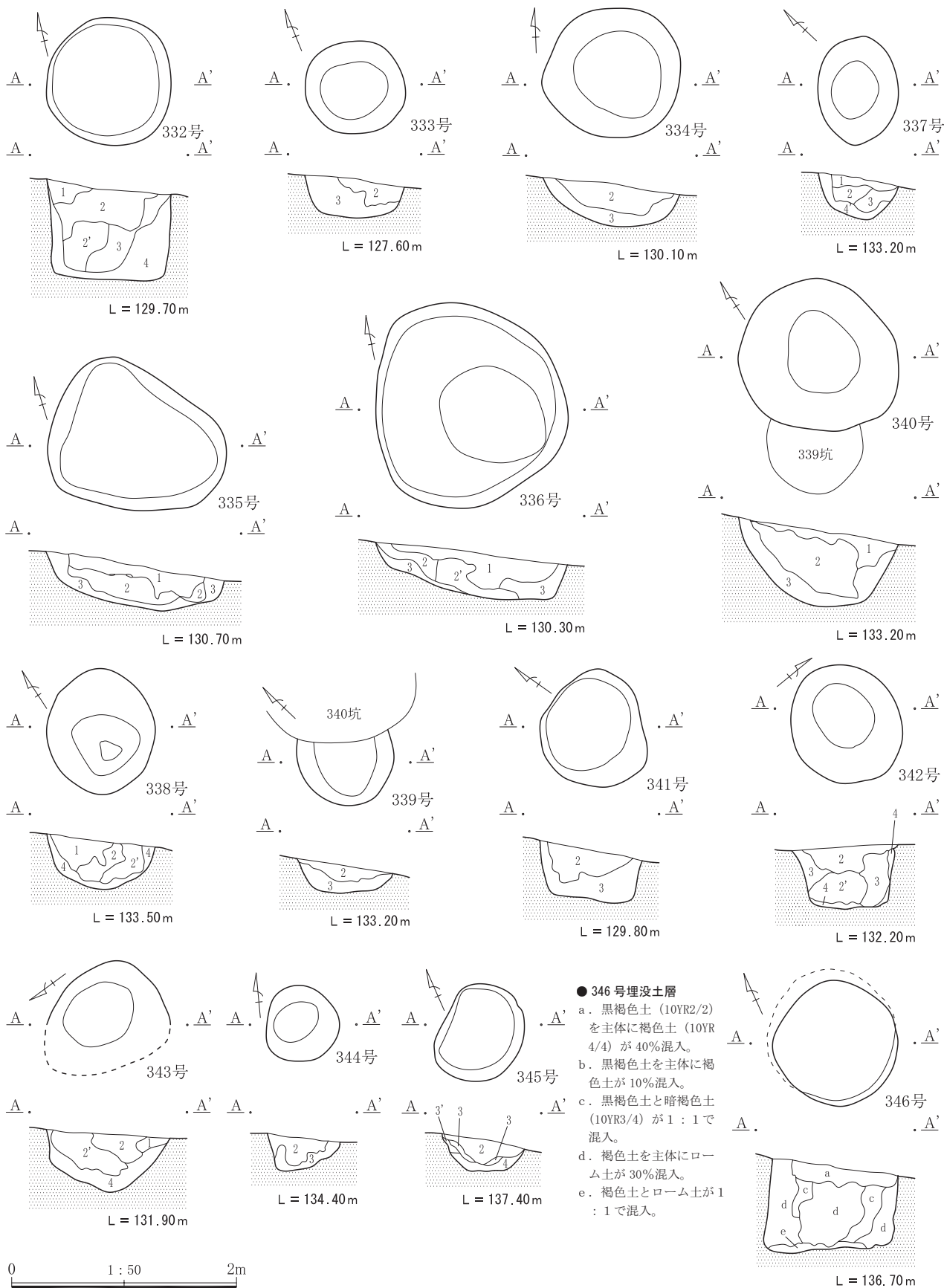
第179図 305号土坑～316号土坑・318号土坑～320号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



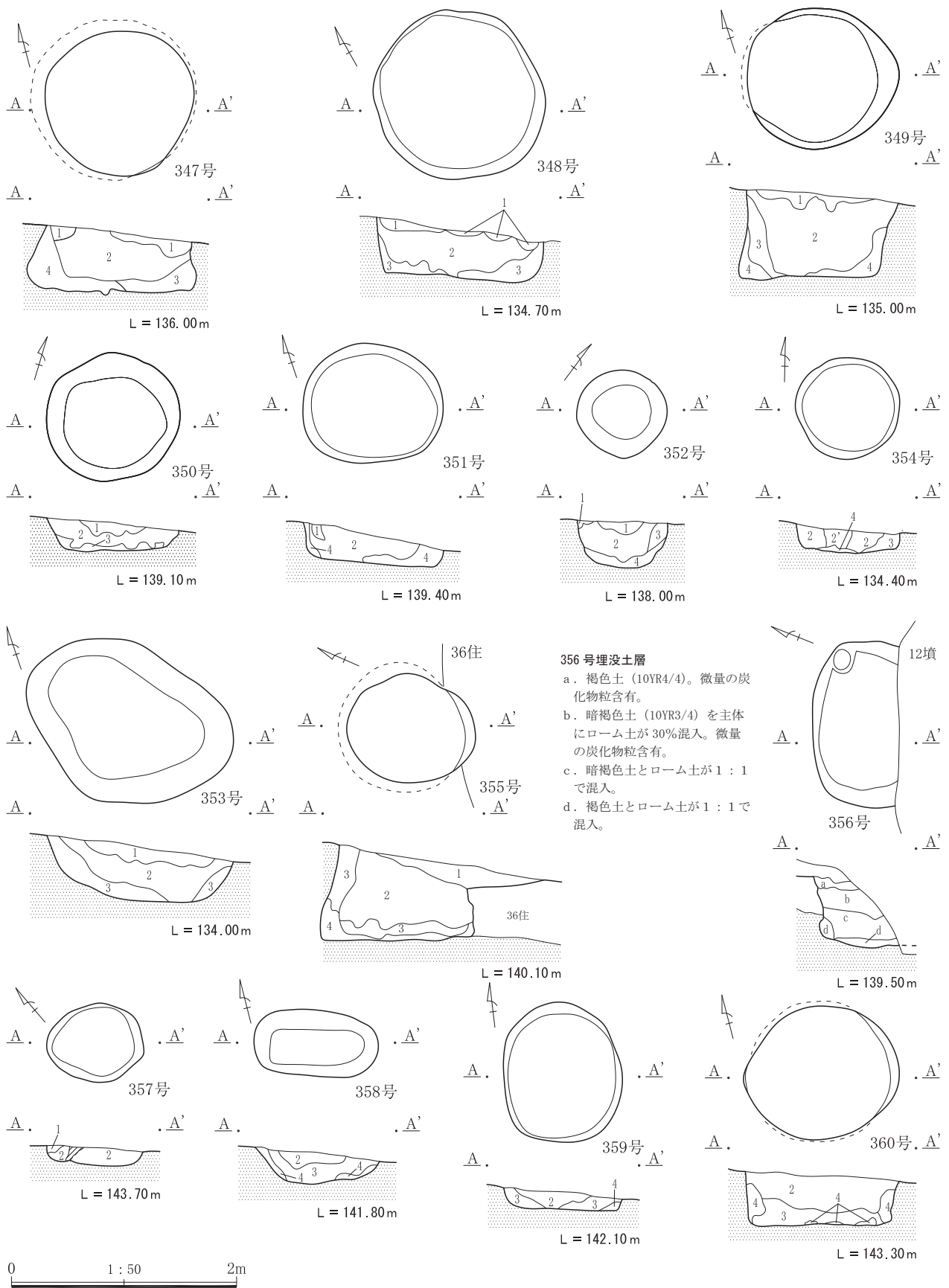
第 180 図 317号土坑・321号土坑～331号土坑

3. 土坑

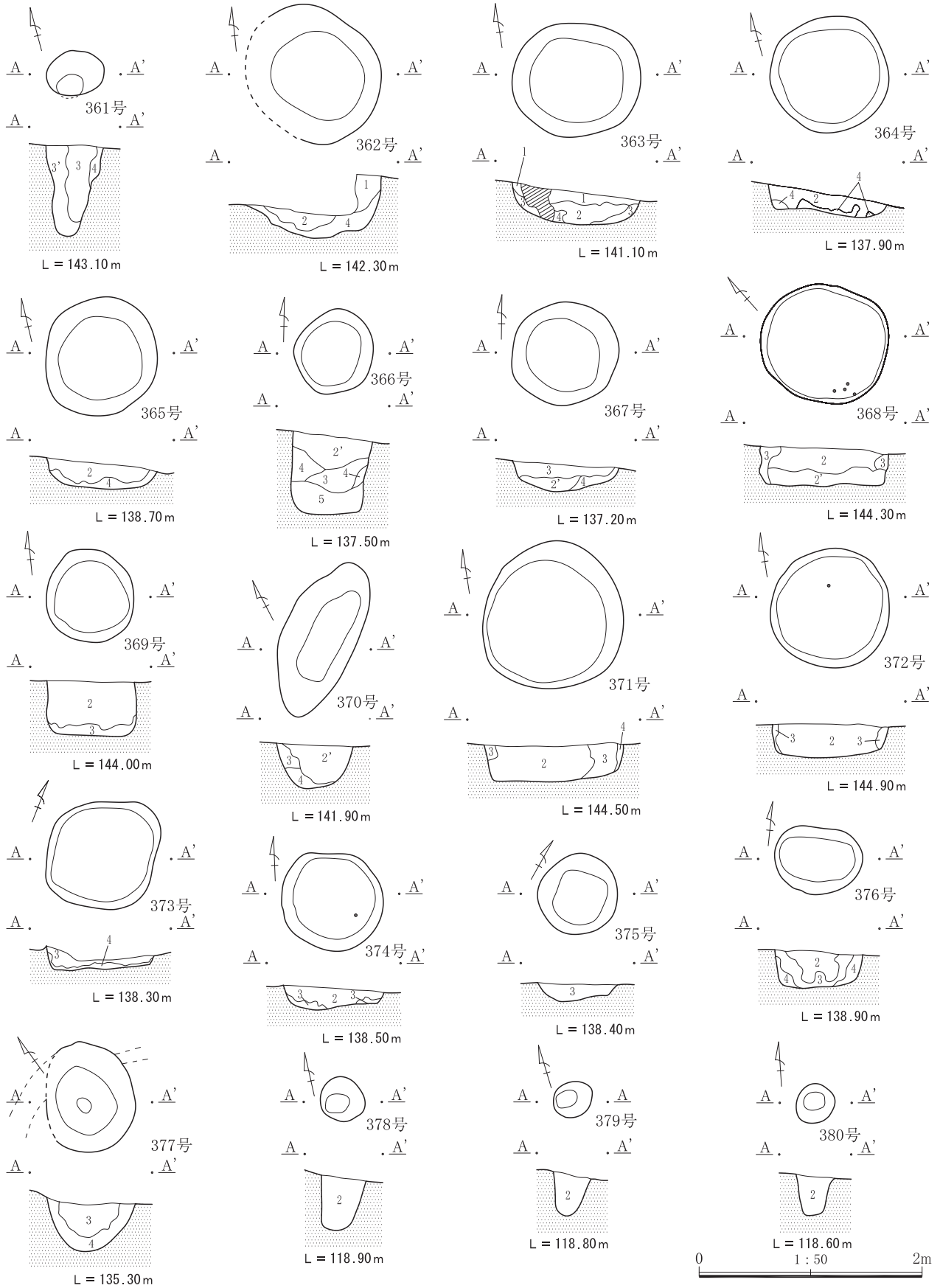


第181図 332号土坑～346号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査

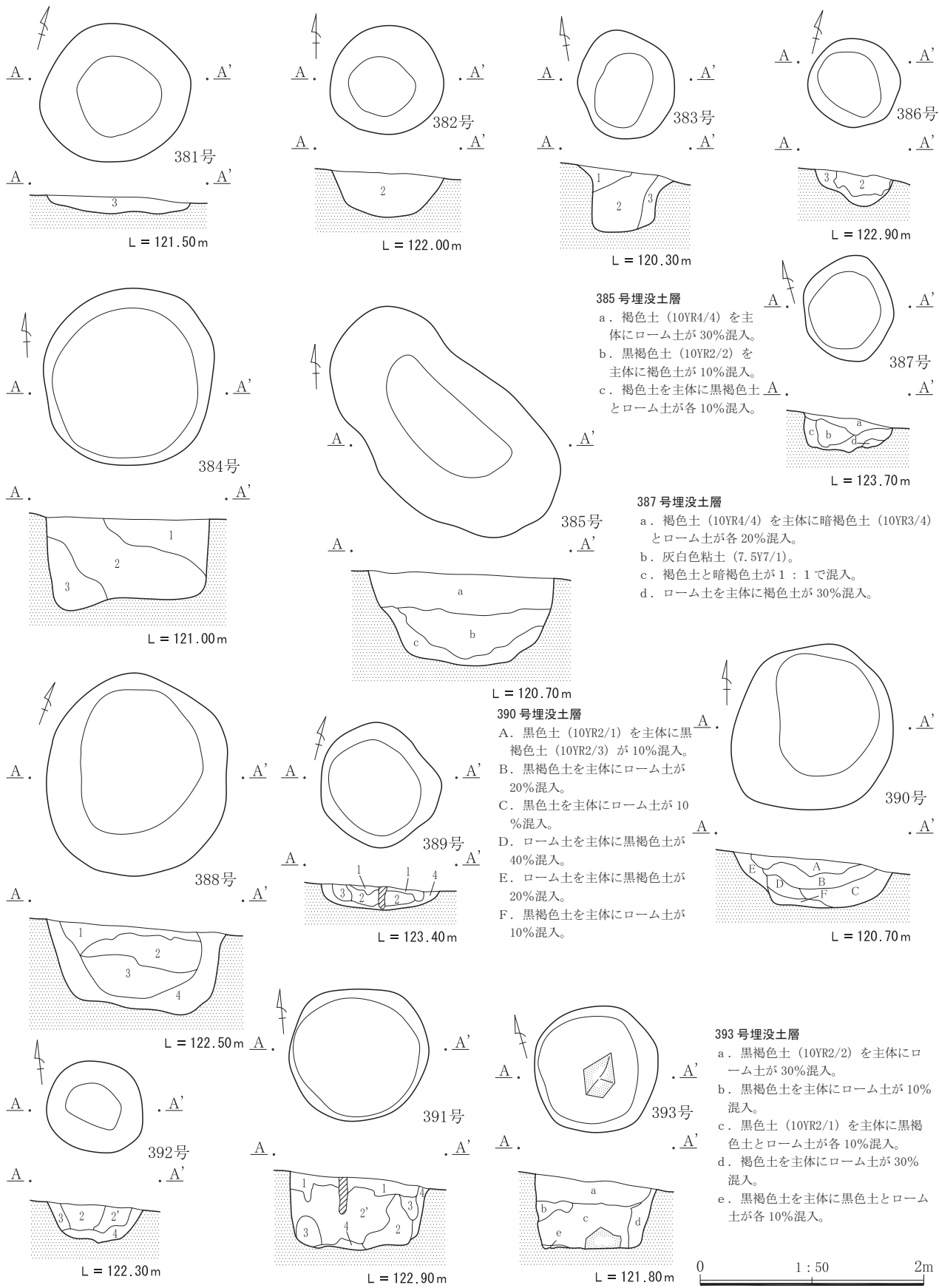


第182図 347号土坑～360号土坑



第 183 图 361 号土坑~380 号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



385号埋没土層

- a. 褐色土 (10YR4/4) を主体にローム土が30%混入。
- b. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体に褐色土が10%混入。
- c. 褐色土を主体に黒褐色土とローム土が各10%混入。

387号埋没土層

- a. 褐色土 (10YR4/4) を主体に暗褐色土 (10YR3/4) とローム土が各20%混入。
- b. 灰白色粘土 (7.5Y7/1)。
- c. 褐色土と暗褐色土が1:1で混入。
- d. ローム土を主体に褐色土が30%混入。

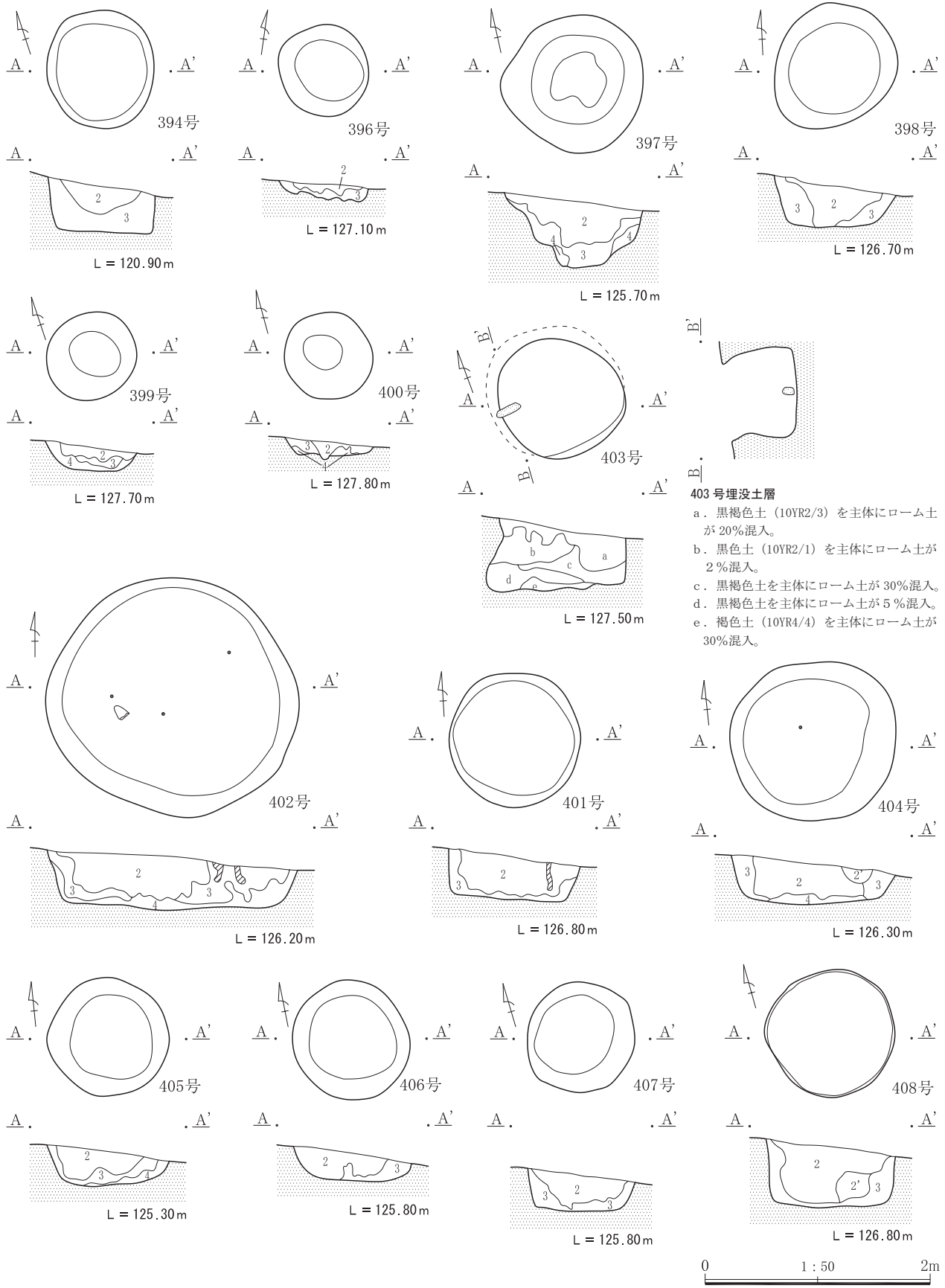
390号埋没土層

- A. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/3) が10%混入。
- B. 黒褐色土を主体にローム土が20%混入。
- C. 黒色土を主体にローム土が10%混入。
- D. ローム土を主体に黒褐色土が40%混入。
- E. ローム土を主体に黒褐色土が20%混入。
- F. 黒褐色土を主体にローム土が10%混入。

393号埋没土層

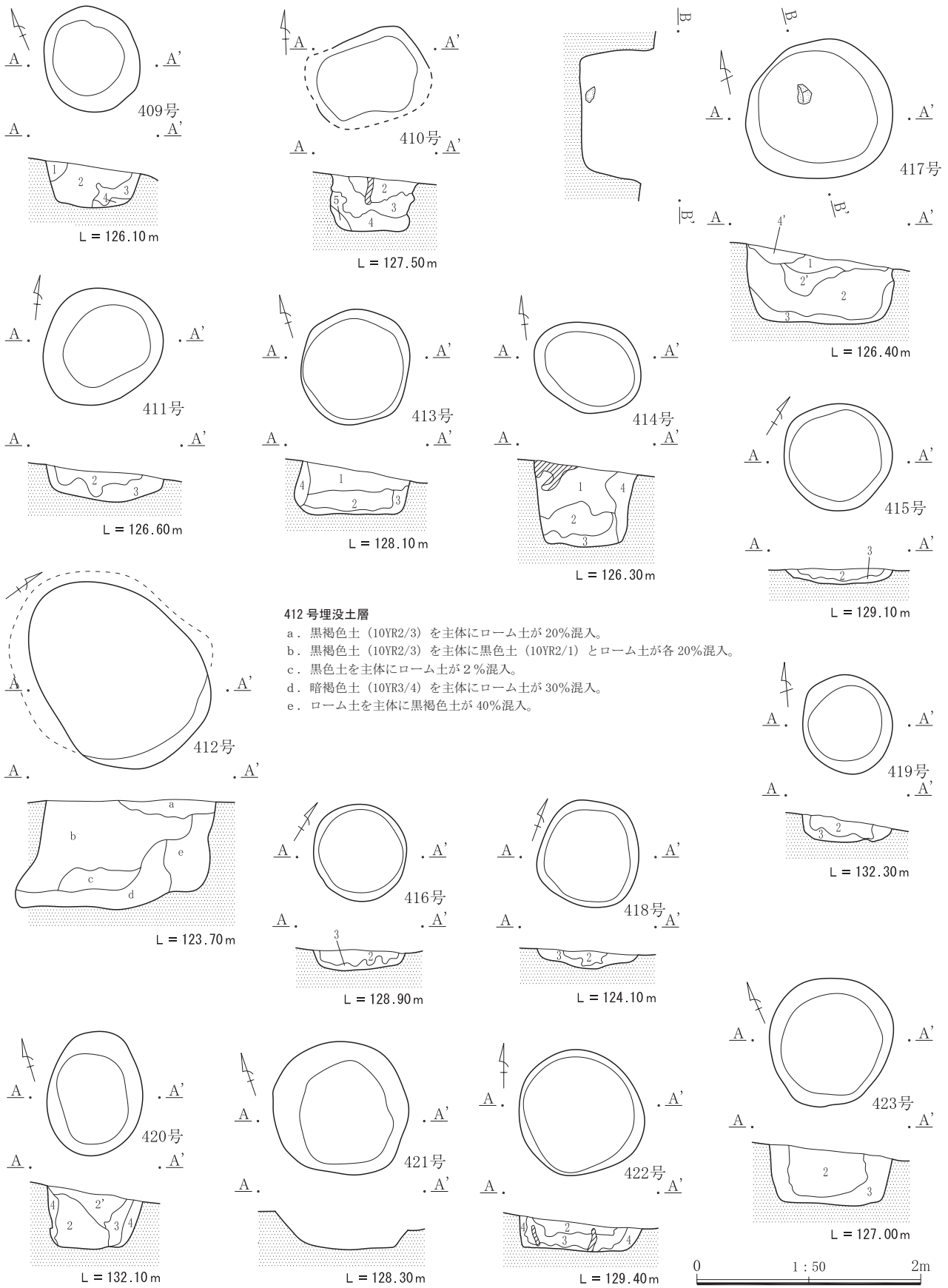
- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が30%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が10%混入。
- c. 黒色土 (10YR2/1) を主体に黒褐色土とローム土が各10%混入。
- d. 褐色土を主体にローム土が30%混入。
- e. 黒褐色土を主体に黒色土とローム土が各10%混入。

第184図 381号土坑～393号土坑

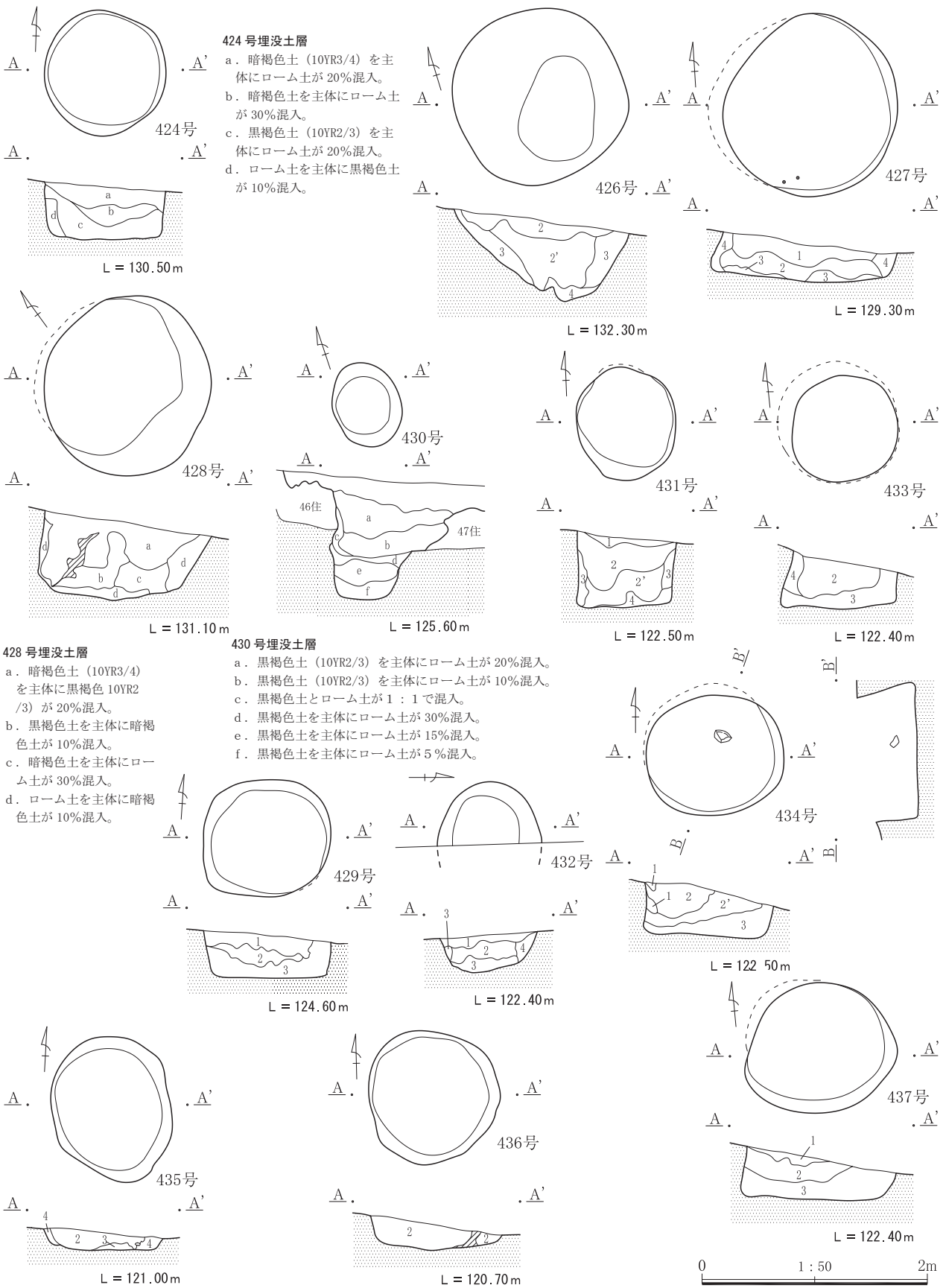


第185図 394号土坑・396号土坑～408号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査

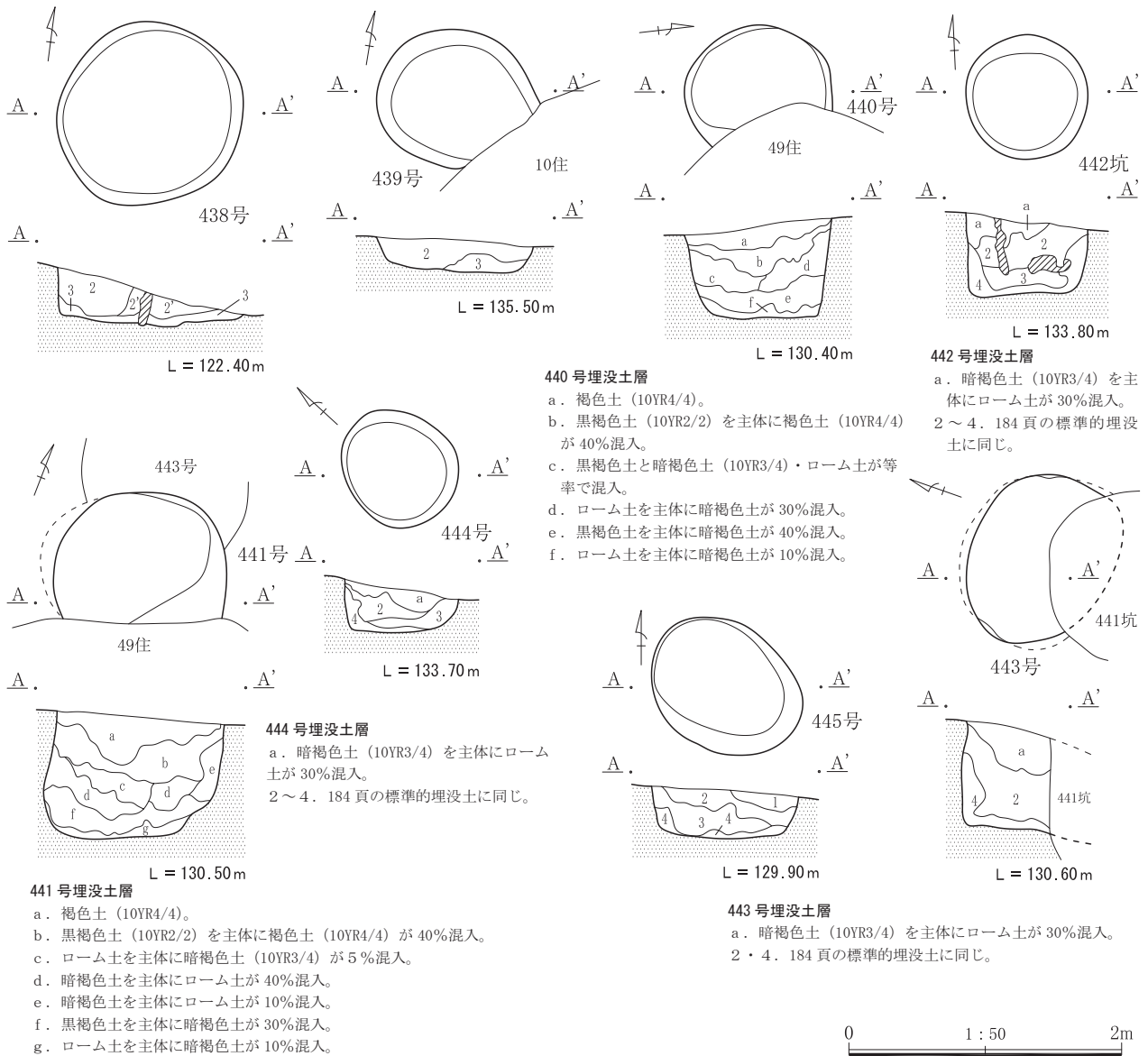


第 186 図 409 号土坑～423 号土坑



第187図 424号土坑・426号土坑～437号土坑

II 今井三騎堂遺跡の調査



第188図 438号土坑～445号土坑

4. 陥 穴

丘陵の頂部から東側斜面部の2～6区にかけた範囲から18基が、また西側斜面部の1区から1基の合計19基が検出されている。頂部から東側斜面部を中心とした分布状況は、今井見切塚遺跡と同様であり、両遺跡陥穴群がともに有機的な関連性を持って存在したことを示唆している。

これら各陥穴の規模・形状の詳細については、第3表に掲載してあるのでそちらを参照頂き、ここでは主

な特徴を概括的に述べておきたい。まず、平面形状については、開口部では樹木痕や小動物による攪乱もあり、大半の陥穴が楕円形を呈しているが、底面部の形状を基本にして分類すると、①長方形 (1・2・9・13・15～19号)、②楕円形 (3・5・10～12・14号)、③長楕円形 (6～8号)、の3タイプが認められる。③については、底面が幅狭でV字状の横断面形を持ち、底面に逆茂木痕を随伴しない点で他類とは大きく異なっている。縦断面形状では、各タイプともに底面付近がオーバーハング気味に掘り込まれているのが特徴的

である。

規模の面では、①②ともに大小のバラエティが認められる点で共通し、小規模なものは長径1.5m×短径1m×深さ1m前後、大規模なものは長径2.5m×短径2m×深さ1.5m前後を測る。③については、倒木痕の可能性が高い7号を除いて、長径3m×短径1m×深さ1.5m前後とかなり斉一的な規模を有している。

①②タイプの底面の中央部には、逆茂木を打設あるいは埋填したと推定される直径20cm前後の小ピットを伴う事例が多見され、同タイプの基本的な要素の一つであることが窺える。一方、随伴しない4・5・11～14・12・17号については、小ピット内の埋没土と地山との区別が難しく、技術的に検出し得なかったことや、倒木痕（播り鉢状の断面形状をもつ12・14号）を誤認している可能性が想定される。小ピットの数量は、1基（1・18号）、2基（16・19号）、3基（15号）、4基以上（2・3・9・10号）に分かれる。しかし、4基以上の小ピットを持つケースについては、例えば2号はP3・P10の2基を、3号はP1・P3・P5の3基を、9号はP1・P2の2基を、10号はP2～P4の3基を、各々メインとすることが想定できよう。また、小ピットの深度については、スライス調査法により確認した19号では45cm前後を測るが、他の例については不確実である。尚、大半の陥穴でスライス調査を実施していないこともあり、この小ピット内に逆茂木の痕跡を確認することはできなかった。

各陥穴の埋没土の状況は、黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没したことを示しているが、2・3・11・16号では底面に近接して腐食土の堆積が認められる点で特徴的である。

ところで、各陥穴の分布や立地状況からは、いくつかの単位が認められ、同一標高を基軸にして少なくとも6つにグルーピングすることが可能である。例えば、a：丘陵頂部の2～5号、b：東斜面標高145～147

第3表 陥穴の規模一覧

番号	地区	位置	時期	平面形	断面形	規模 (cm)			出土遺物
						長径	短径	深さ	
1	1区	CD-184	早期?	方形	円筒形	139	81	114	
2	2区	DR-173	早期?	方形	円筒形	272	174	136	
3	2区	DR-172	早期?	楕円形	円筒形	256	157	124	諸c1
4	2区	DO-170	早期?	不明	不明	不明	不明	94	
5	2区	DV-187	早期?	楕円形	円筒形	144	130	86	
6	2区	ES-185	早期?	楕円形	円筒形	310	121	154	
7	2区	ED-155	早期?	楕円形	円筒形	不明	56	24	
8	3区	EX-180	早期?	楕円形	円筒形	317	(103)	92	
9	3区	FQ-173	早期?	方形	円筒形	192	119	118	
10	4区	GL-179	早期?	楕円形	円筒形	213	118	80	
11	4区	GP-179	早期?	楕円形	円筒形	200	105	78	諸c1
12	4区	GW-162	早期?	楕円形	円筒形	303	156	83	稲2
13	4区	GJ-167	早期?	楕円形	円筒形	323	154	126	稲4, 剥2
14	4区	GU-152	早期?	楕円形	円筒形	不明	136	88	
15	5区	FC-108	早期?	方形	円筒形	235	127	93	井1
16	5区	EX-105	早期?	方形	円筒形	233	167	108	
17	5区	EP-128	早期?	方形	円筒形	176	105	138	磨1
18	5区	EK-121	早期?	方形	円筒形	172	98	149	磨1
19	6区	FL-109	早期?	方形	円筒形	208	113	114	黒2, 諸b1

※ () 内は推定値

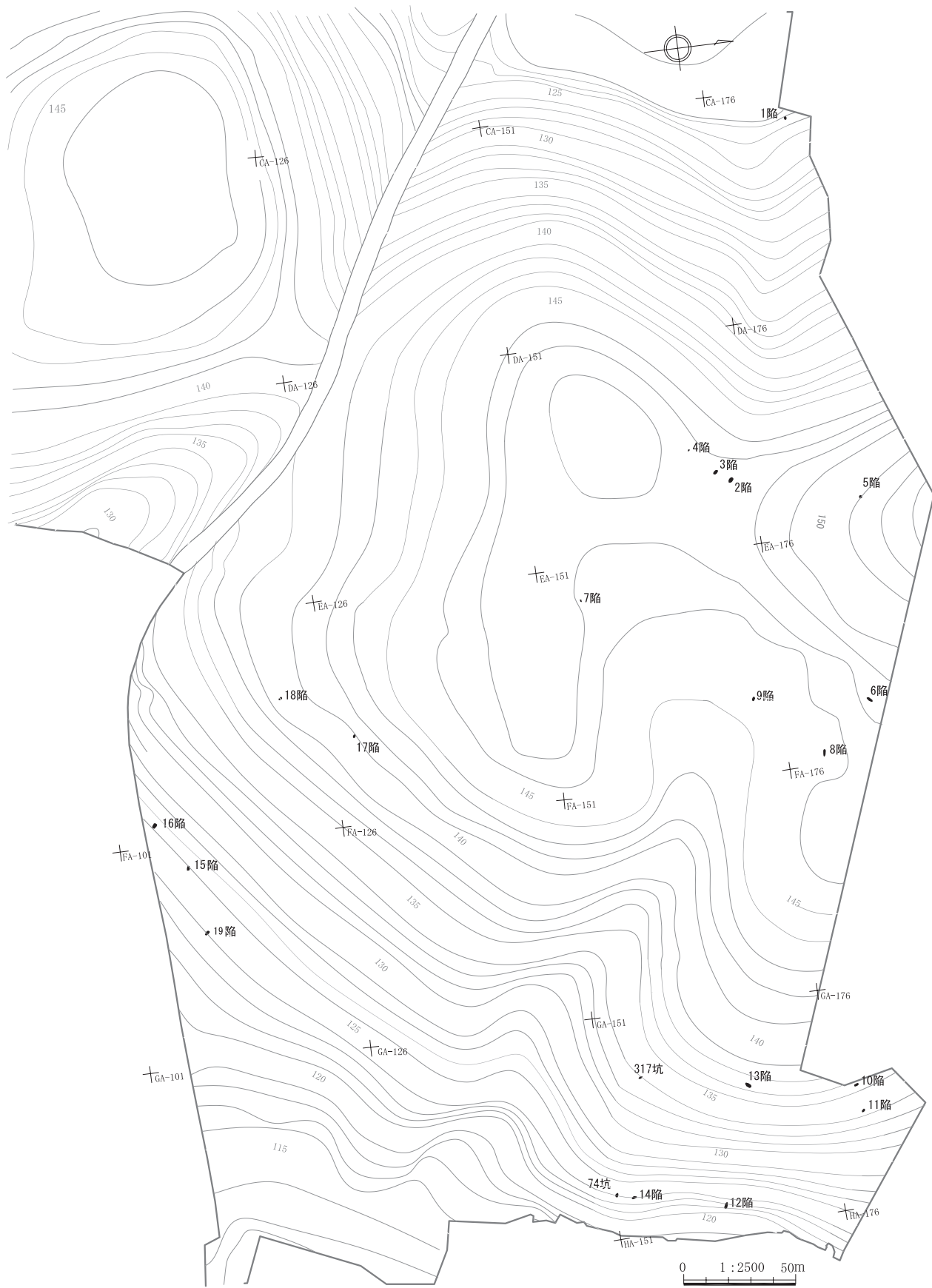
出土遺物の凡例

井：井草式、稲：稲荷台式、黒：黒浜式、諸a：諸磯a式、諸b：諸磯b式
諸c：諸磯c式、磨：磨石類、剥：剥片

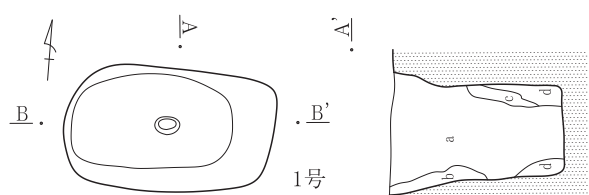
mラインの6～9号、c：東側斜面標高134～137mラインの10・11・13号、d：東側斜面標高123～124mラインの12・14号、e：東南斜面標高140mラインの17・18号、f：東南側斜面標高124～126mラインの15・16・19号、などである。先の平面形によるタイプ分類を加味すれば、①②タイプについてはその差が僅少であることから、同一グループ内での混在は可としても、差異の大きい③タイプは分離すべきであろう。bグループでは、この③タイプの6・8号が混在しており、b1グループの6・8号とb2グループの7・9号とに分離して、合計7グループとなる。これら各グループ内の陥穴相互間に、真に有機的な関係が有るのか否かを断定することは難しいが、aグループの2～4号やb1グループの6・8号、c～fグループなどは、その長軸方向と地形（等高線）との関係に斉一的な様相が認められ、時間的な併存性を含めて強い関連性を持っていることが窺える。

尚、前項の各期土坑で既述したように、稲荷台式期の317号土坑と諸磯a式期の74号土坑は陥穴の可能

II 今井三騎堂遺跡の調査



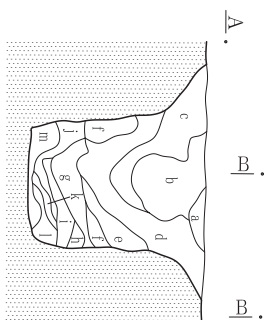
第 189 図 今井三騎堂遺跡の陥穴の分布



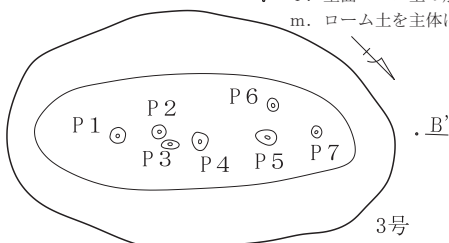
1号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が10%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
- c. ローム土を主体に黒褐色土が20%混入。
- d. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。
- e. ローム土を主体に暗褐色土 (10YR3/3) が10%混入。
- f. 壁面ローム土の崩落・堆積層。
- g. 黒色土 (10YR2/1)。締まりの弱い腐食土層。
- h. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- i. ローム土を主体に暗褐色土が5%混入。
- j. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- k. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。
- l. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- m. ローム土を主体に暗褐色土が5%混入。

L = 137.70m

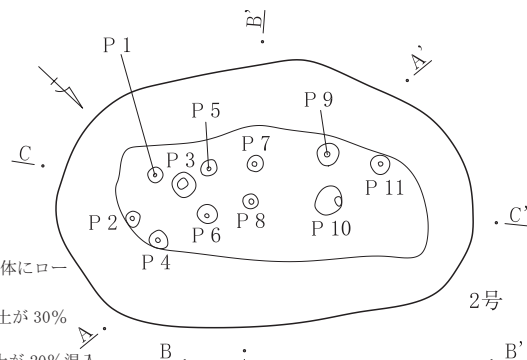


L = 146.70m

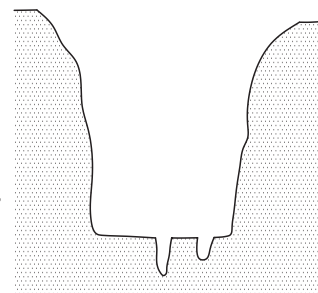


2号埋没土層

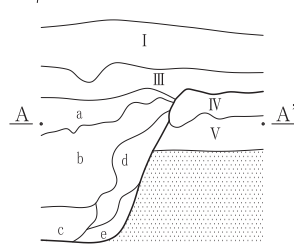
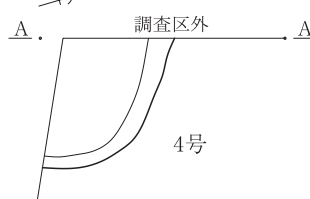
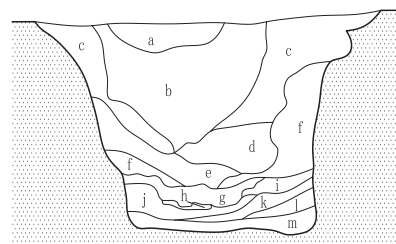
- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が10%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
- c. ローム土を主体に黒褐色土が20%混入。
- d. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。
- e. ローム土を主体に暗褐色土 (10YR3/3) が10%混入。
- f. 壁面ローム土の崩落・堆積層。
- g. 黒色土 (10YR2/1)。締まりの弱い腐食土層。
- h. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- i. ローム土を主体に暗褐色土が5%混入。
- j. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- k. ローム土を主体に黒褐色土が10%混入。
- l. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- m. ローム土を主体に暗褐色土が5%混入。



2号



L = 146.90m



L = 146.60m

3号埋没土層

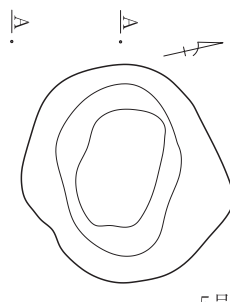
- a. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にローム土が10%混入。
- b. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が30%混入。
- c. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
- d. ローム土を主体に暗褐色土が20%混入。
- e. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- f. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- g. 黒色土 (10YR2/1)。締まりの弱い腐食土層。
- h. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- i. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- j. ローム土を主体に暗褐色土が5%混入。
- k. 壁面ローム土の崩落・堆積層
- l. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- m. 暗褐色土を主体にローム土が10%混入。

4号埋没土層

- a. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体に黒褐色土 (10YR2/2) が10%混入。
- b. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体に暗褐色土が20%混入。
- c. 暗褐色土を主体にローム土が10%混入。
- d. ローム土を主体に暗褐色土が20%混入。
- e. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- f. 黒褐色土を主体に暗褐色土が10%混入。
- g. ローム土を主体に暗褐色土が5%混入。



L = 150.50m

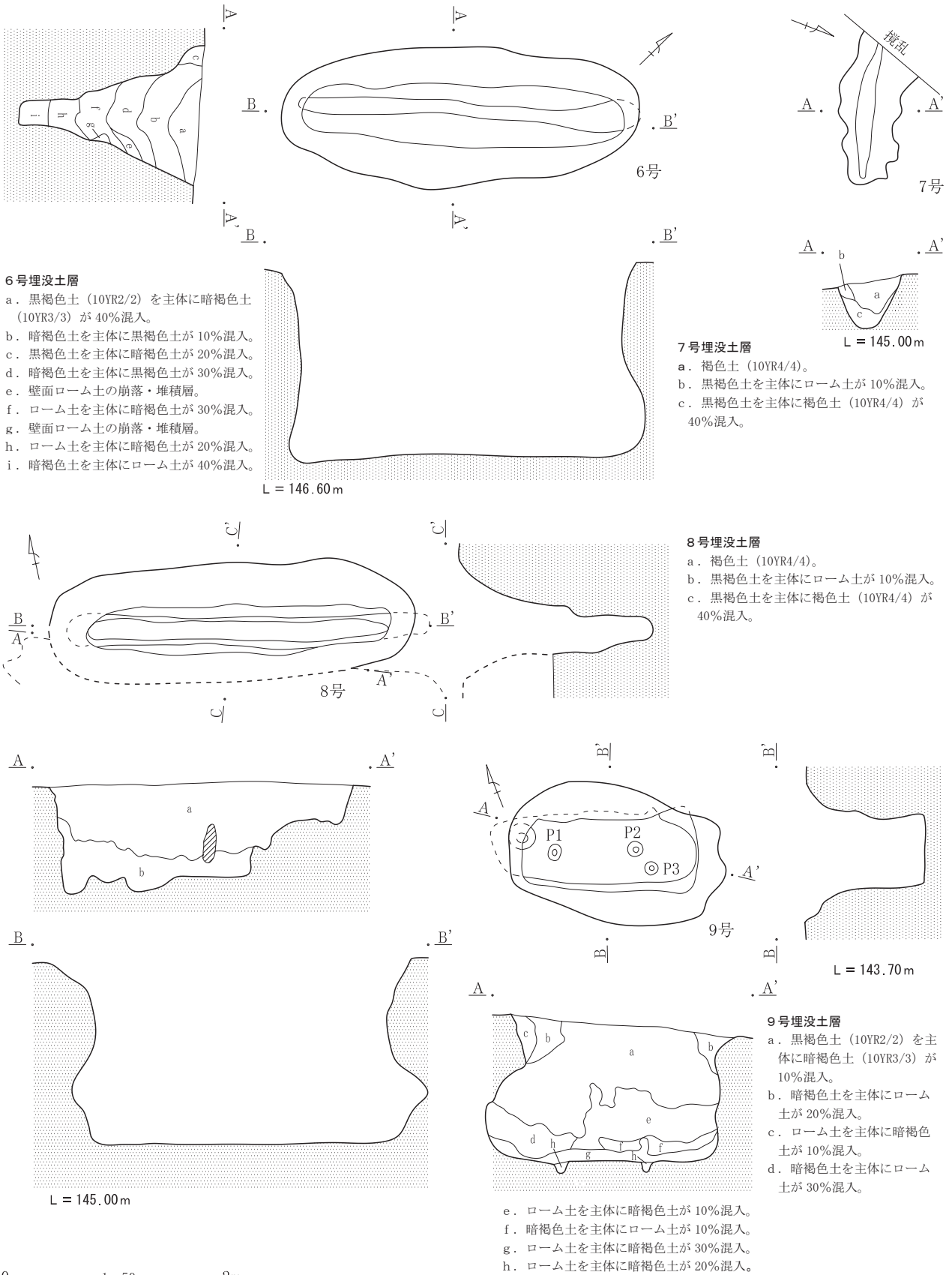


5号

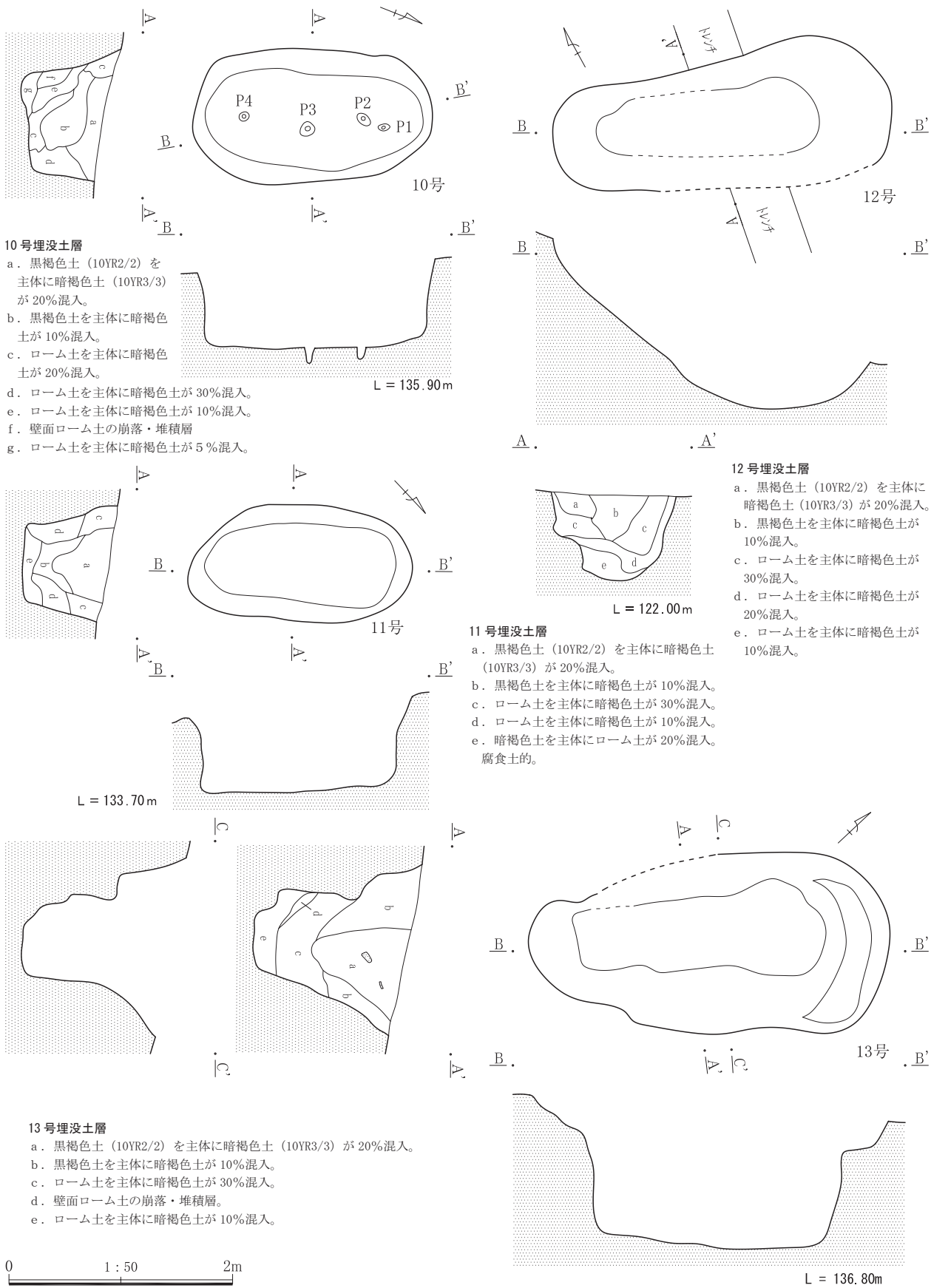
0 1 : 50 2m

第190図 1号陥穴～5号陥穴

II 今井三騎堂遺跡の調査

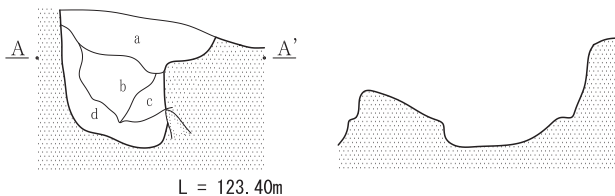
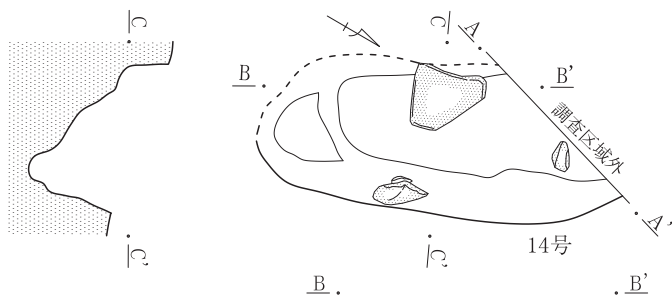


第 191 図 6号陥穴～9号陥穴



第 192 図 10号陥穴～13号陥穴

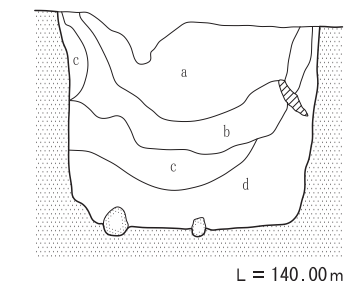
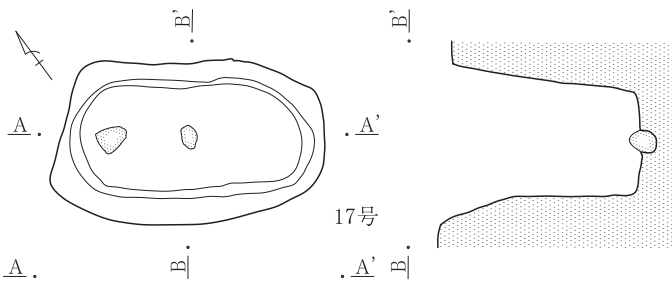
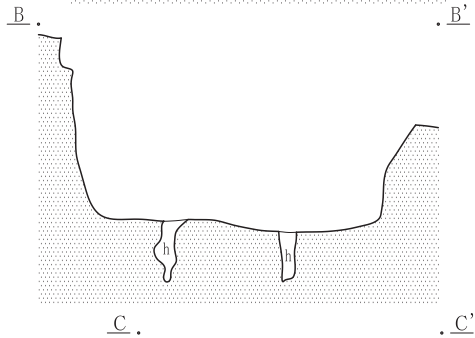
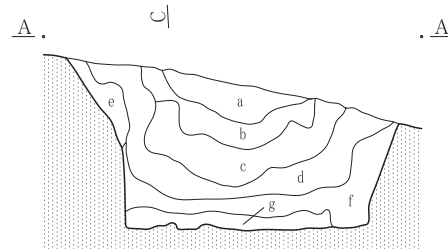
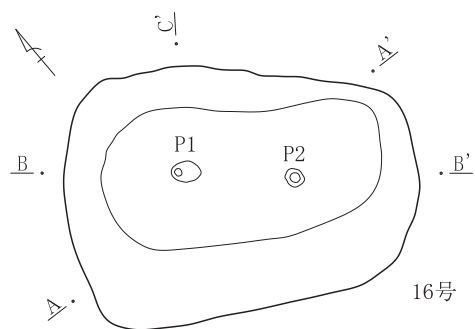
II 今井三騎堂遺跡の調査



L = 123.40m

14号埋没土層

- a. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が20%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が10%混入。
- c. ローム土を主体に黒褐色土が30%混入。
- d. 黒褐色土を主体にローム土が5%混入。



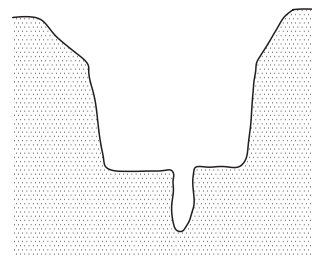
L = 140.00m

17号埋没土層

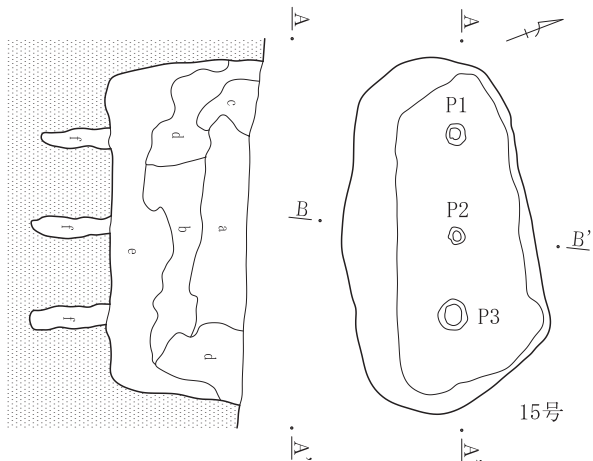
- a. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にローム土が30%混入。
- b. 黒褐色土 (10YR2/2) を主体にローム土が20%混入。
- c. ローム土を主体に暗褐色土が10%混入。
- d. ローム土を主体に暗褐色土が30%混入。

15号埋没土層

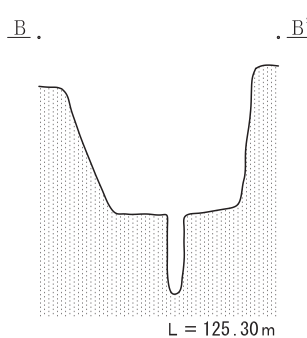
- a. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/2) が10%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が10%混入。
- c. 黒褐色土を主体にローム土が30%混入。
- d. 黒褐色土を主体にローム土が40%混入。
- e. ローム土を主体に暗褐色土 (10YR3/3) が30%混入。
- f. 黒褐色土を主体にローム土が10%混入。逆茂木痕。



L = 125.60m



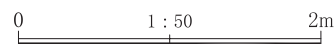
15号



L = 125.30m

16号埋没土層

- a. 黒色土 (10YR1.7/1) を主体に黒褐色土 (10YR2/2) が10%混入。
- b. 黒褐色土を主体にローム土が5%混入。
- c. 黒褐色土を主体にローム土が20%混入。
- d. 暗褐色土 (10YR3/3) を主体にローム土が40%混入。
- e. 壁面ローム土の崩落・堆積層。
- f. 暗褐色土とローム土が1:1で混入。
- g. 黒褐色土を主体にローム土が5%混入。腐食土的。
- h. 縮まりのない暗褐色土。逆茂木痕。



第193図 14号陥穴～17号陥穴

4. 陥穴



第194図 18号陥穴・19号陥穴

性が高く、317号はcグループに、74号はdグループに帰属すると考えられる。

各陥穴の出土遺物については、極めて希薄な状況であり、稻荷台式や諸磯式を中心とする僅かな土器片や石器類が、その埋没土中より検出されているに過ぎず、これらの遺物が各陥穴の帰属時期を直接指示するか否か判断できる状況にはない。ただし、諸磯a式期

の35号住居により切られているeグループの17号陥穴のあり方を考慮すれば、時期的には同期を遡ることは確実である。また、遺構の性格として集落内に設置される可能性も低いことから、集落形成の認められない早期段階にまで遡ることが想定される。

(遺物観察表：26・32頁、写真：PL-83～85)

5. 集石土坑

1～3号の3基が存在するのみであり、3号については集石下部に土坑状の掘り込みが認められない点で他とはやや異なっているが、便宜的に集石土坑として扱ってある。それらの分布は、特定の地点に集中することなく1・4・5区に分散し、1号は草創期後半や前期の遺構分布域から西側に離れているが、2・3号は当該期の集落エリア内に存在している。各集石土坑の規模を含めたその内容については、第4表を参照頂き、ここでは特徴的な要素に関して簡単に触れておきたい。

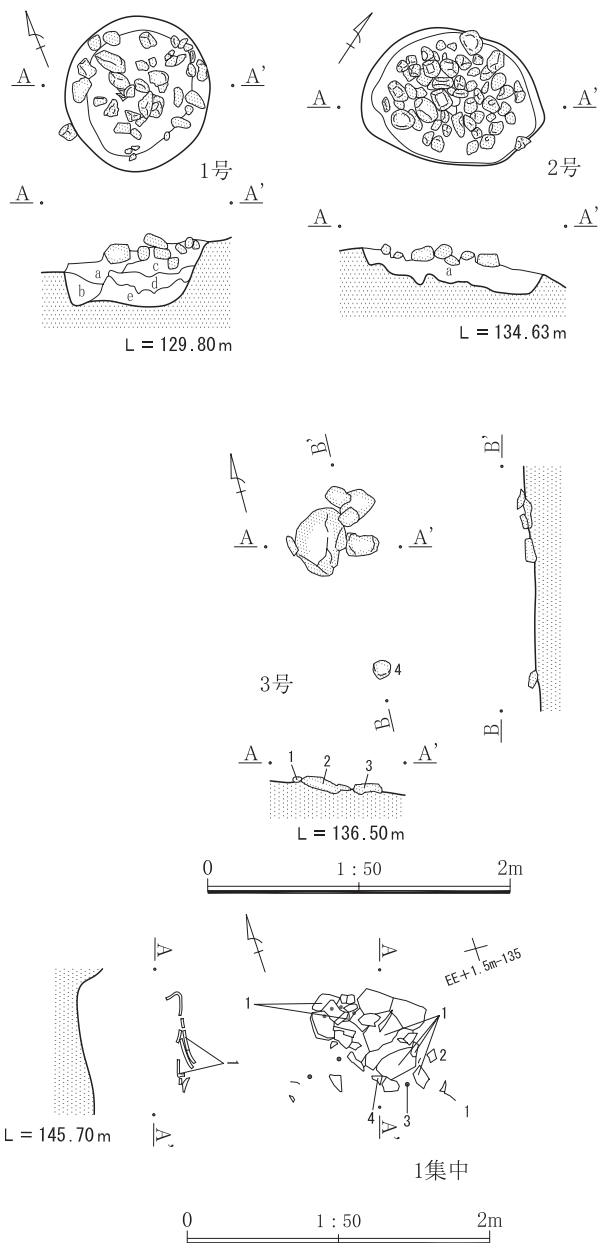
各集石土坑を構成する礫群は、1・2号では直径5～15cm程度の輝石安山岩の河床礫や亜角礫を素材としており、その多くに被熱による赤化や煤状炭化物の付着が認められる。ちなみに、1号では93%、2号は97%の礫にその痕跡を確認することができる。また、各礫には、意識的な配置状況が認められず、下位の土坑底面から10～20cmほど浮上した状態であった。3号は、直径が15～45cm大の亜角礫により構成されることや、被熱・煤付着の痕跡が顕著ではない等の点で、他の事例とは異なる。

1・2号では、集石下部に直径100～120cm×深さ15～30cm程度の土坑状の掘り込みを伴うが、その壁面や埋没土中に焚火行為を窺わせる被熱痕や焼土の堆積は認められない。こうした点は、礫への加熱行為が各集石土坑内ではなく、別の場所で行われて当該箇所を持ち込まれたことを示している。被熱礫や土坑の掘り込みが不明瞭な3号については、1・2号とはその機能・性格を異にする可能性もある。

出土遺物は極めて僅少であるが、1号では4点の磨石類と1点の石皿破片が礫材として転用され、同様に2号では2点の磨石類が転用されている。

各集石土坑の帰属時期については、破片を含めて土器の出土が皆無のために確定できないが、土坑内の埋没土は前項で既述した前期土坑の例に類似しており、当該期の所産である可能性が高いと考えられる。

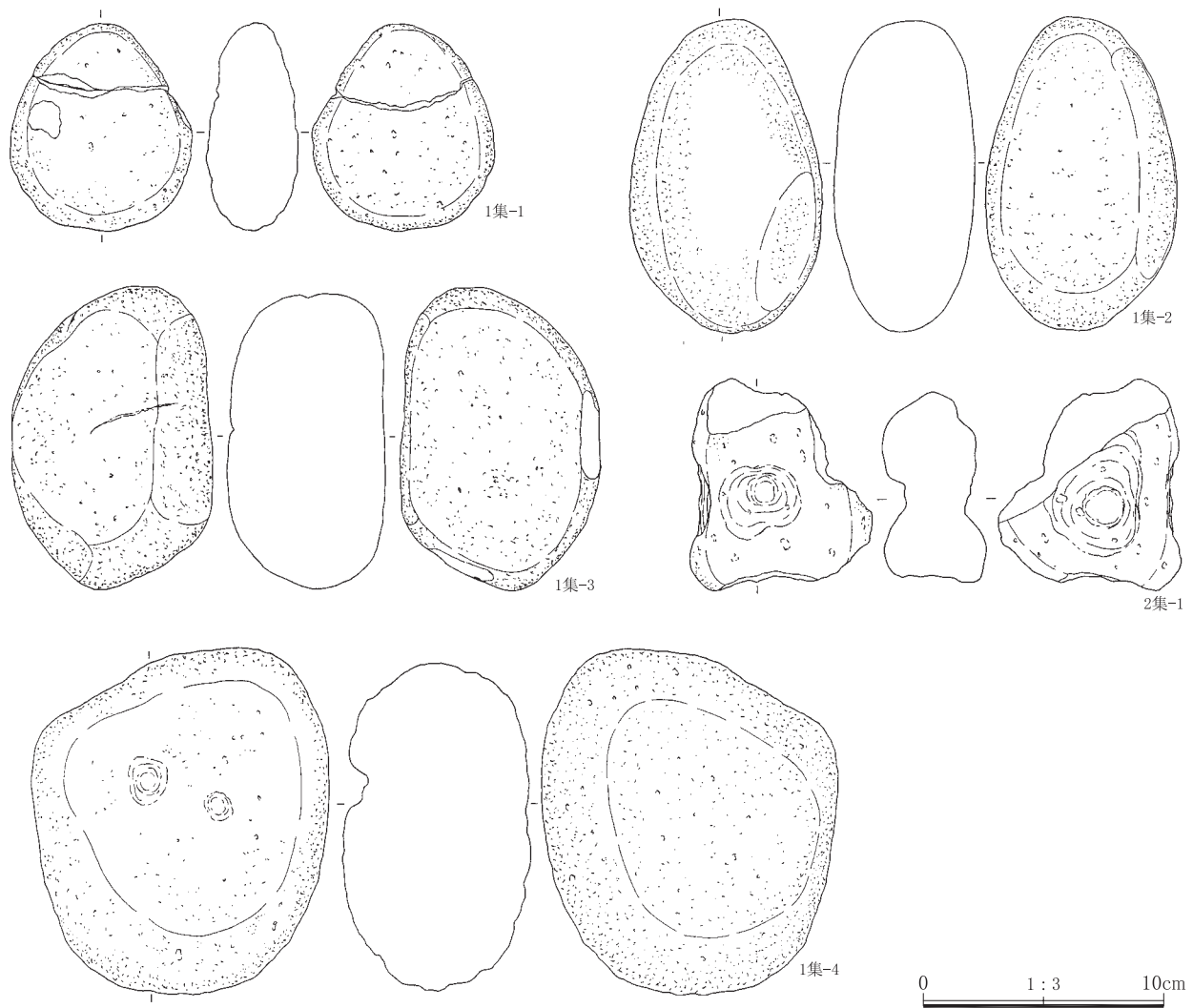
尚、集石土坑周辺のグリッドの遺物包含層(IV・V層)内からは、約1,000点に及ぶ被熱礫が検出されており、後世の攪乱等により散逸して原形をとどめない集石土坑も相当数存在したことを示唆している。



第195図 1号集石～3号集石・1号遺物 集中

第4表 集石土坑の規模一覧

番号	地区	位置	土坑の形状・規模 (cm)				石材数
			平面形	長径	短径	深さ	
1	1区	CD-158	円形	102	96	30	62
2	4区	GL-184	楕円形	121	88	16	30
3	5区	FJ-137	不明	不明	不明	不明	7



第 196 图 集石土坑出土遺物

6. 屋外炉

1～4号の4基が、V層下位からVI層上面にかけて検出された。位置的には、草創期後半や前期の竪穴住居や土坑が密集する4・5区に限定されており、それらとの有機的な関係性が窺える。

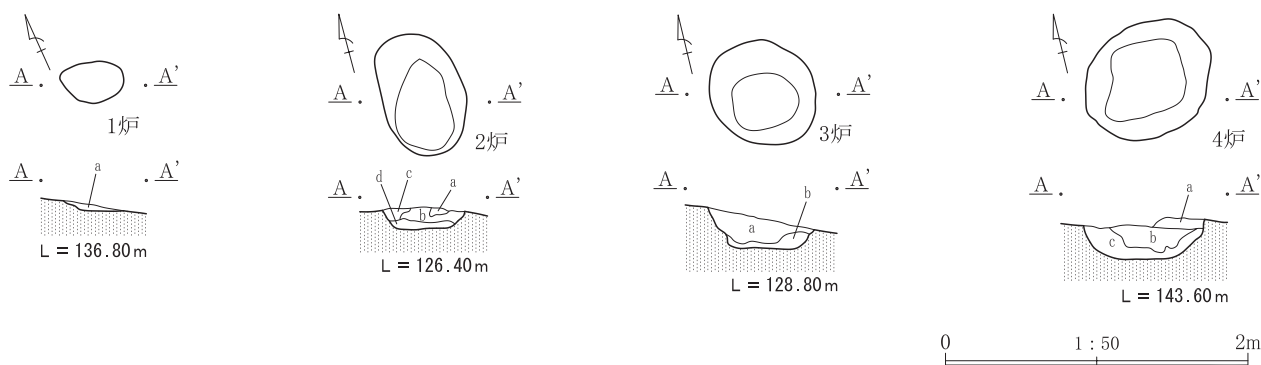
各屋外炉の規模や内容の詳細は、第5表を参照して頂きたいが、1号のように長径が50cm未満の掘方を随伴しない小規模なもの、2～4号などの長径1m前後の掘方を持つものに分類できる。しかし、その掘方の深度は20cm前後と浅く、各炉ともに焚火行為による焼土層の形成・堆積は上位層を中心になされ、掘方の壁面や底面に被熱の痕跡は認められない。こうしたことは、各屋外炉の敷設が土坑状の深い掘り込みを必要条件とするものではなく、当時の地表面を僅かに窪める程度の、どちらかと言えば地床炉に近似するものであったことを示唆している。換言すれば、竪穴住居や土坑ほど意図的に配置された遺構ではなく、生活上の必要に応じた焚火行為の中で形成された痕跡の可能性が高い。

これら屋外炉の帰属時期については、出土遺物が皆無であることから確定できないが、2～4号の掘方埋没土が前期の住居や土坑のそれと近似していることや、当該期の竪穴住居の近縁に存在していることなどを重視すれば、前期を中心とした時期に比定される可能性が高い。

尚、屋外での焚火行為という側面で屋外炉とも類縁性を有する遺構としては、前述した4・5区に位置する2・3号集石土坑の存在を上げることができる。しかし、距離的にこれら集石土坑と近接する屋外炉はなく、両者間に明瞭な有機的な関係性を見出すことは困難である。

第5表 屋外炉の規模一覧

番号	地区	位置	掘方の形状・規模 (cm)			
			平面形	長径	短径	深さ
1	4区	GJ-164	楕円形	43	28	不明
2	5区	GR-151	楕円形	83	55	15
3	4区	GQ-155	不整形	76	66	24
4	5区	EK-133	不整形	110	85	28



第197図 1号屋外炉～4号屋外炉

7. 倒木痕

倒木痕については、VI層のローム上面において、長径2 m前後の不定形な落ち込みとして確認されるものであり、その埋没土中に逆・横転した基本土層の堆積を確認できることが大きな特徴でもある。産廃処理場により確認面の土壌攪乱や破壊を受けていた2区を除き、1区では13基、3区では21基、4区では20基、5区では54基、6区では30基の合計138基を検出している。

調査方法としては、埋没土と基本土層との対比や、転倒方向を割り出すことを主眼として、ローム層上面にて平面プランと埋没土の分層状態を撮影・図化した。ここでは残存不良なものを除外した132基について掲載してある。

個々の規模や形状、それに転倒方位などの詳細については、第6表に記載しておいたのでそちらを参照されたいが、いくつかの特徴について概述しておきたい。まず、規模の観点では、その長径が3 mを超える1区8・9号、4区6・7・19号、5区21・44・50号、6区3・9・21号のような大規模なものや、1 m前後の1区1・2・10・12～13号、3区1・3・5・9・12・14・19号、4区12号、5区11・24・26・33・35・41・51・52号、6区24号のような小規模なものもあるが、全体としては2 m前後のものが主体を占めている。

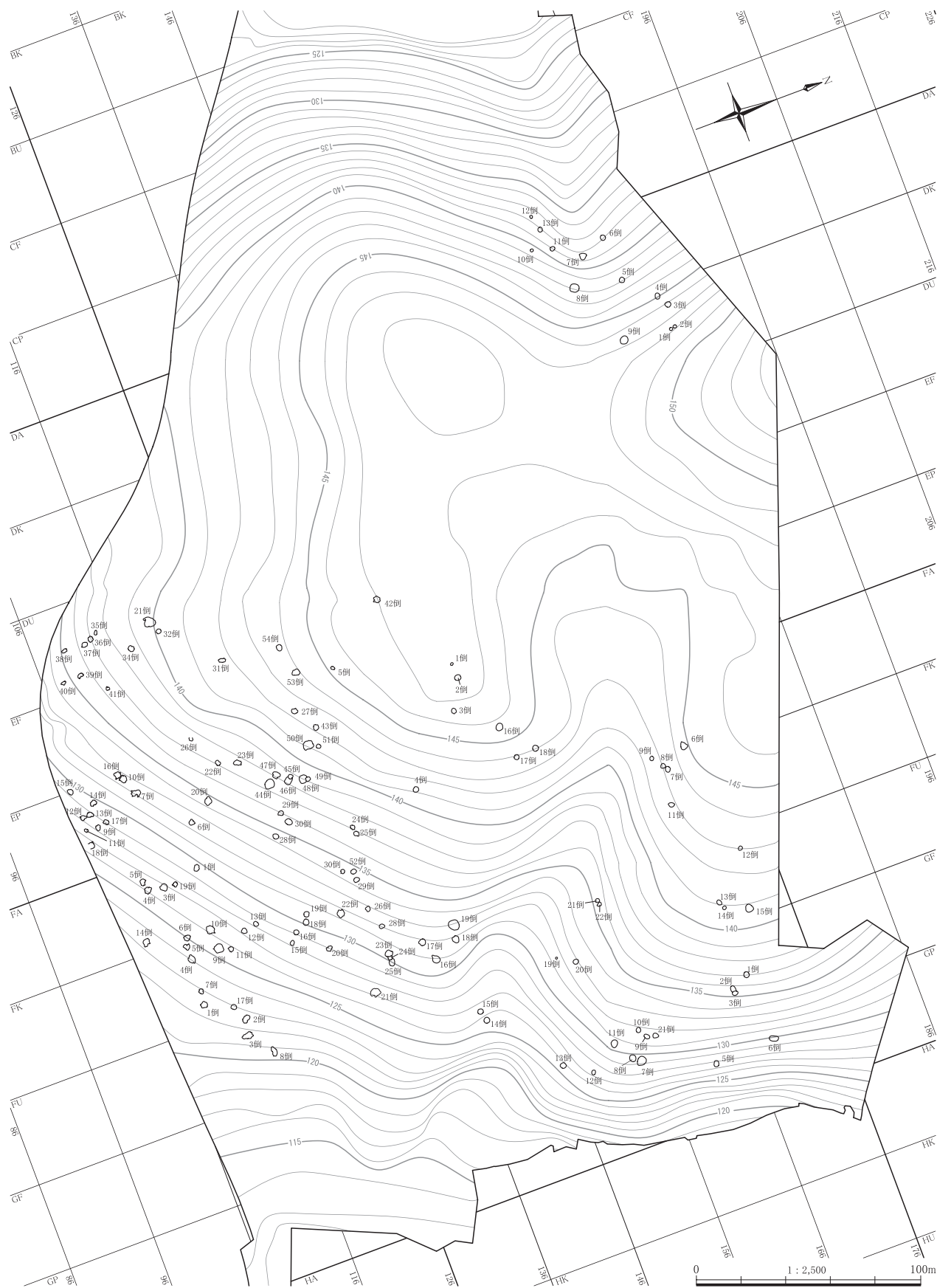
逆・横転した埋没土層を観察すると、①Ⅲ層以下、②Ⅳ層以下、③Ⅴ層以下、の各層以下を巻き込む3つのタイプに大別することができ、それらの数的比率は①タイプが2%、③タイプが9%であり、②タイプが全体の90%弱を占めて他を圧倒している。また、横転により巻き上げられた最下層は、Hr-HP 軽石層（Ⅶ層）にまで及ぶものも存在するが、全体的にはAs-BP 軽石層（Ⅸ層）の前後層までを巻き込むものが約7割を占めている。各倒木痕の規模とこの逆転層位深度との相関性は、長径3 m前後の大規模なものに深層を巻き込む傾向も窺えるが、2 m前後の中規模な

ものにもⅩⅡ層の暗色帯を巻き込むものが少なからず存在し、必ずしも明確な対応関係にはない。こうした点は、倒木痕を形成した樹木の属種差に関連性を有すると考えられ、水平・垂直方向への根の拡散状態の違いが影響している可能性が高い。

ところで、これらの逆転層を伴う倒木痕の形成は、ともに関連した原因により生じたものと想定され、この逆転層の堆積ラインと直行する軸線が、基本的に風向を示すと考えることができる。つまり、これを基本土層と同様に上下方向に正置した場合、下位方向が風上を示すことになる。このようにして、各倒木の転倒方向を割り出してみると、各倒木痕ともかなりのバラツキが認められるが、北東から南東という東方向を基軸とした営力（風力）と、北西から南西の西方向を基軸とした営力による転倒に2分類することが可能である。数的には前者が全体の90%を占め、後者（1区6号、5区14・38・39・44・45・47・49号、6区16・18・20・21・26号）は10%弱にとどまる。このような東方向を主体としたある程度一定の方向性をもつ営力は、台風等の強風を想定することが最も妥当と言えよう。また、西方向からの営力による倒木痕の形成も、風向を変えた台風による可能性が高いが、冬季の強風による可能性も考慮される。

各倒木痕の形成時期については、それを確定できる状況にないが、住居・土坑との重複関係から見ると、諸磯b式期の417号土坑は6区21号倒木痕を切って掘り込まれ、また諸磯b式期の42号住居は倒木痕で切られており、縄文時代の同期を遡るものやそれ以降の倒木痕が存在することは確実である。また、逆転堆積層の内容で見れば、その大半が縄文時代前期の遺物包含層であるⅣ層以下を巻き込んでおり、こうした点も加味すればその大半が縄文時代の前期を中心に形成された可能性が高い。同様に、Ⅲ層以下を巻き込む5区21・23号、6区9号などは、弥生～平安時代の間の形成を想定することができる。

II 今井三騎堂遺跡の調査

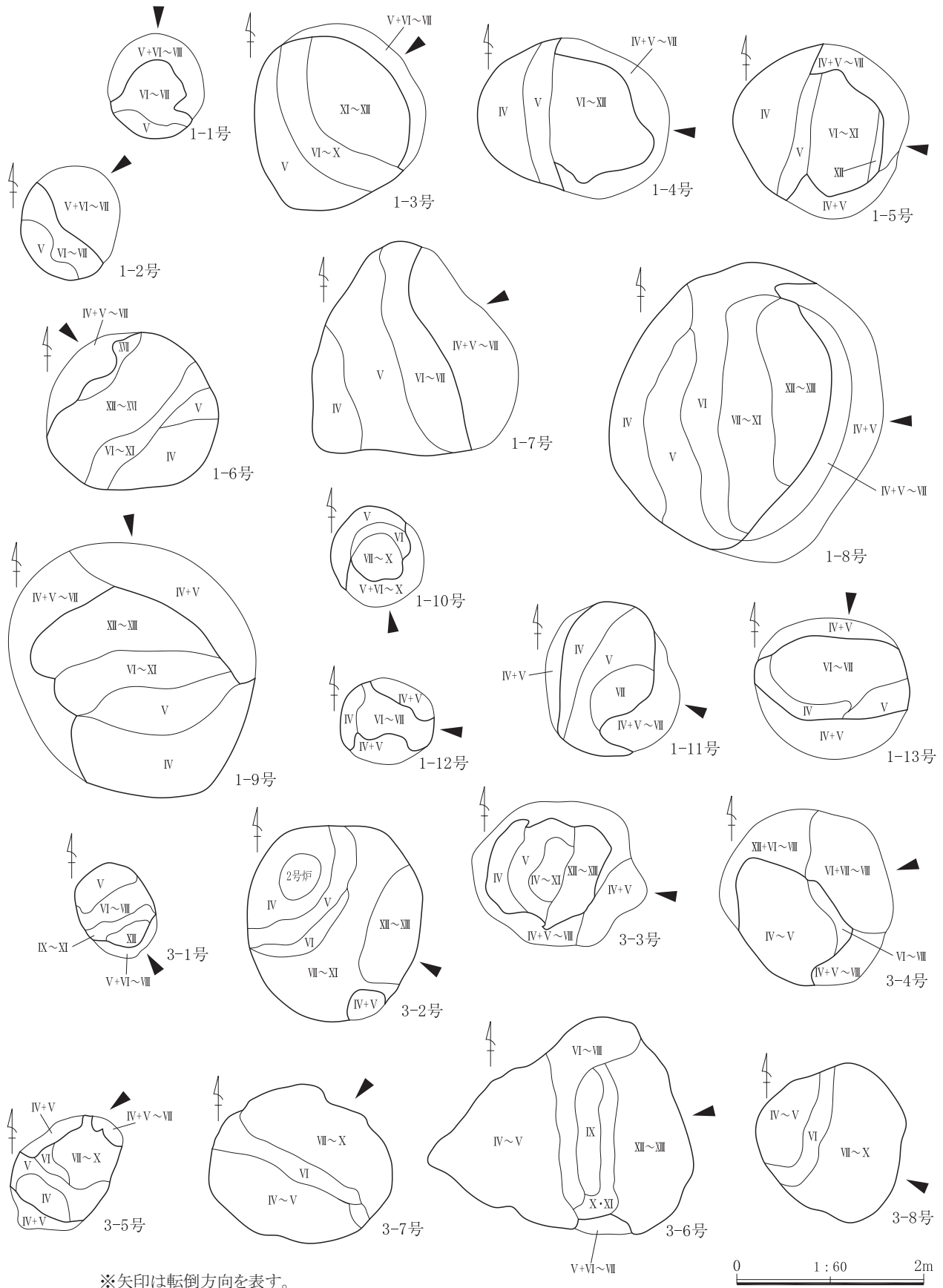


第198図 今井三騎堂遺跡の倒木痕の分布

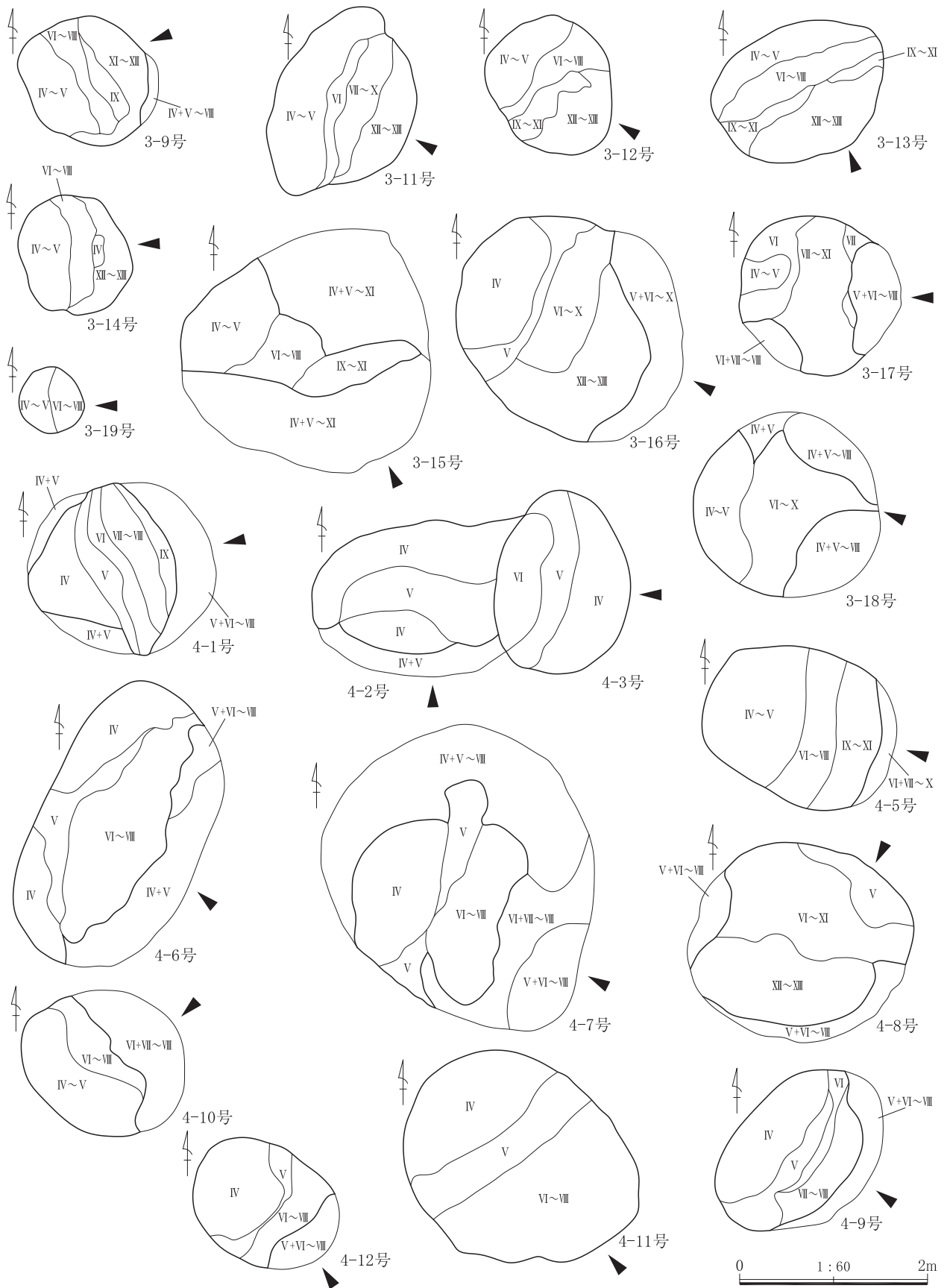
第6表 倒木痕の規模一覧

番号	位置	規模(cm)	転倒方位	埋没土	番号	位置	規模(cm)	転倒方位	埋没土
		長径×短径					長径×短径		
1-01	DO-186	112×102	N180W	V～VII	5-18	EV-104	不明×210	N113W	IV～VIII
1-02	DO-186	122×106	N133W	V～VII	5-19	FE-112	190×168	N174E	IV～VIII
1-03	DM-186	194×182	N134W	V～X II	5-20	EV-119	246×220	N60W	IV～X III
1-04	DL-185	204×166	N91W	IV～X II	5-21	EA-119	375×344	N134W	III～IX
1-05	DI-183	188×186	N82W	IV～X II	5-22	ER-121	194×150	N115W	IV～X III
1-06	DC-182	184×168	N136E	IV～X VII	5-23	ES-123	260×190	N59W	III～VII
1-07	DE-179	230×220	N113W	IV～VII	5-24	FF-133	156×150	N118W	IV～VIII
1-08	DG-177	320×290	N92W	IV～X III	5-25	FF-133	170×166	N63W	IV～VIII
1-09	DO-180	270×262	N173E	IV～X III	5-26	FO-119	不明×120	N173W	IV～VIII
1-10	DB-174	106×100	N10W	V～X	5-28	FC-124	186×178	N26W	IV～VIII
1-11	DC-176	162×138	N68W	IV～VII	5-29	FA-126	196×160	N94W	IV～X
1-12	CW-175	102×92	N84W	IV～VII	5-30	FB-126	250×210	N3E	IV～X
1-13	CY-176	162×150	N175W	IV～VII	5-31	EH-126	230×144	N74W	IV～VIII
3-01	EQ-149	104×80	N35W	V～X II	5-32	EB-120	180×156	N90W	IV～X III
3-02	ES-149	210×186	N61W	IV～X III	5-33	CY-119	150×100	N79W	IV～X II
3-03	EV-148	180×154	N80W	IV～X III	5-34	EC-116	210×208	N88W	IV～X II
3-04	FD-141	188×182	N106W	IV～VIII	5-35	DY-113	160×90	N72W	IV～IX
3-05	EM-137	146×100	N130W	IV～X	5-36	EA-112	190×178	N16W	V～X II
3-06	FJ-170	280×230	N102W	IV～X III	5-37	EA-112	232×160	N120W	IV～IX
3-07	FL-168	196×170	N140W	IV～X	5-38	DY-109	200×110	N42E	IV～VIII
3-08	FK-167	170×156	N67W	IV～X	5-39	ED-110	210×130	N40E	IV～VIII
3-09	FJ-167	152×130	N110W	IV～X II	5-40	ED-108	180×112	N120W	IV. V
3-11	FO-167	210×150	N60W	IV～X III	5-41	EF-112	122×120	N180W	V～VIII
3-12	FW-173	150×130	N60W	IV～X III	5-42	EH-114	234×230	N122W	IV～VIII
3-13	GC-168	190×146	N22W	IV～X III	5-43	ER-133	不明×160	N121W	IV～X III
3-14	GC-168	130×112	N91W	IV～X III	5-44	EW-125	340×300	N38E	IV～IX
3-15	GE-171	264×260	N25W	IV～X I	5-45	EW-128	168×160	N69E	IV～IX
3-16	FA-152	240×238	N62W	IV～X III	5-46	EW-128	不明×210	N104W	IV～IX
3-17	FE-152	172×170	N90W	IV～X I	5-47	EV-127	260×244	N126E	IV～IX
3-18	FD-155	200×198	N68W	IV～X	5-48	EX-129	280×260	N89W	IV～VIII
3-19	GB-149	72×68	N88W	IV～VIII	5-49	EX-129	160×150	N147E	IV～VIII
4-01	GK-168	200×184	N104W	IV～IX	5-50	ET-131	350×280	N101W	IV～IX
4-02	GM-166	不明×166	N1W	IV. V	5-51	EU-132	160×150	N117W	IV～IX
4-03	GM-166	196×142	N91W	IV～VI	5-52	FJ-130	142×138	N57W	IV～VIII
4-05	GS-162	206×170	N75W	IV～X I	5-53	EL-133	270×214	N108W	IV～IX
4-06	GS-169	310×180	N51W	IV～VIII	5-54	EI-132	214×180	N87W	IV～IX
4-07	GQ-154	334×276	N63W	IV～VIII	6-01	FR-110	226×216	N74W	IV～VIII
4-08	GP-153	236×210	N153W	V～X III	6-02	FU-114	300×190	N150W	IV～IX
4-09	GN-155	200×144	N56W	IV～VIII	6-03	FW-113	368×230	N150W	IV～VIII
4-10	GM-154	180×154	N133W	IV～VIII	6-04	FN-111	320×220	N117W	IV～IX
4-11	GN-152	260×214	N43W	IV～VIII	6-05	FL-111	210×206	N107W	IV～IX
4-12	GO-148	164×125	N36W	IV～VIII	6-06	FJ-111	230×190	N129W	IV VIII
4-13	GM-154	170×156	N123W	IV～X I	6-07	FQ-110	180×160	N108W	IV. V
4-14	GF-139	196×194	N50W	IV～X III	6-08	GA-116	340×164	N104W	IV～VIII
4-15	GE-139	190×174	N55W	V～X III	6-09	FM-114	300×290	N83W	III～VIII
4-16	FW-136	320×210	N125W	V～X III	6-10	FK-114	270×268	N132W	IV～VIII
4-17	FT-136	232×212	N138W	IV～VIII	6-11	FN-115	174×160	N140W	IV～VIII
4-18	FU-139	240×216	N104W	IV～X III	6-12	FL-117	180×178	N140W	IV～VIII
4-19	FT-139	340×336	N88W	IV～X VIII	6-13	FL-119	170×160	N138W	IV～VIII
4-20	GC-151	190×160	N88W	IV～VIII	6-14	FJ-107	234×220	N166W	IV～IX
4-21	GN-156	190×162	不明	不明	6-15	FO-122	160×150	N132W	IV～VIII
5-01	FD-115	226×190	N80W	IV～X III	6-16	FN-123	174×162	N166E	IV～VIII
5-03	FE-110	250×244	N58W	IV～VIII	6-17	FT-113	190×178	N104W	IV～X II
5-04	FD-109	270×206	N60W	IV～VIII	6-18	FN-124	210×194	N42E	IV～VIII
5-05	FC-109	220×200	N118W	IV	6-19	FM-124	188×182	N105W	IV～IX
5-06	EX-116	184×180	N89W	IV～VIII	6-20	FQ-125	210×180	N152E	IV～VIII
5-07	ES-111	302×234	N8W	IV～X	6-21	FX-129	340×292	N142E	IV～X III
5-09	ET-106	210×146	N74W	IV～VIII	6-22	FN-128	268×240	N60W	IV～X
5-10	EP-110	266×258	N163W	IV～VIII	6-23	FT-131	272×不明	N125W	IV～IX
5-11	ET-105	124×112	N92W	IV～VIII	6-24	FT-131	150×120	N90W	V～VIII
5-12	ES-105	210×160	N106W	IV～VIII	6-25	FT-131	不明×190	N124W	IV～IX
5-13	ES-105	238×170	N156W	V～X I	6-26	FN-131	164×154	N180W	IV～IX
5-14	ER-106	230×174	N174E	IV～IX	6-27	EP-131	200×170	N53W	IV～VIII
5-15	EP-104	200×170	N118W	IV～VIII	6-28	FQ-132	188×140	N123W	IV～IX
5-16	EP-110	230×200	N130W	IV～VIII	6-29	FK-131	200×158	N178W	IV～VIII
5-17	ET-107	190×170	N120W	IV～VIII	6-30	FJ-131	200×160	N180W	IV～VIII

II 今井三騎堂遺跡の調査

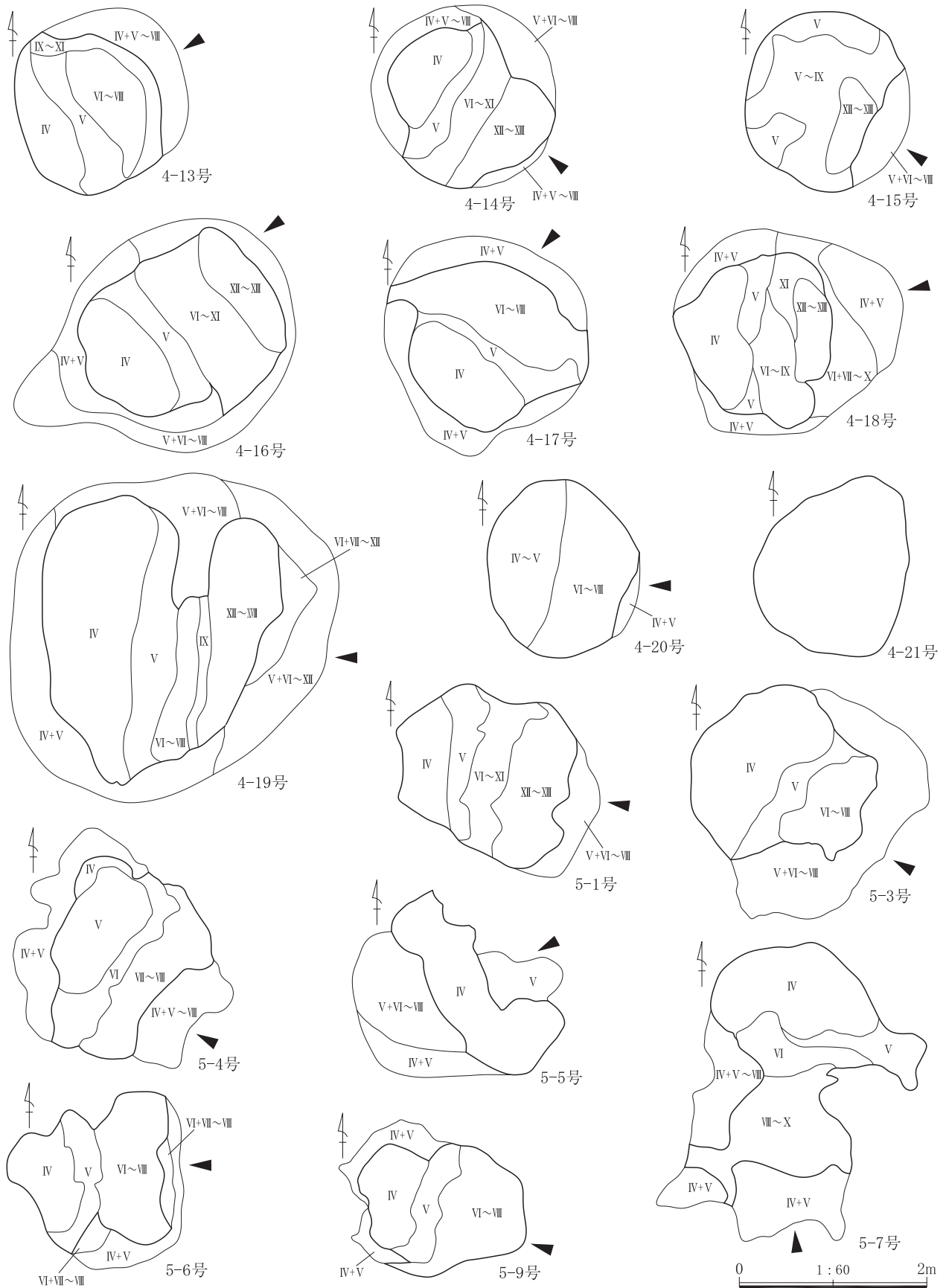


第 199 図 1 区・3 区の倒木痕

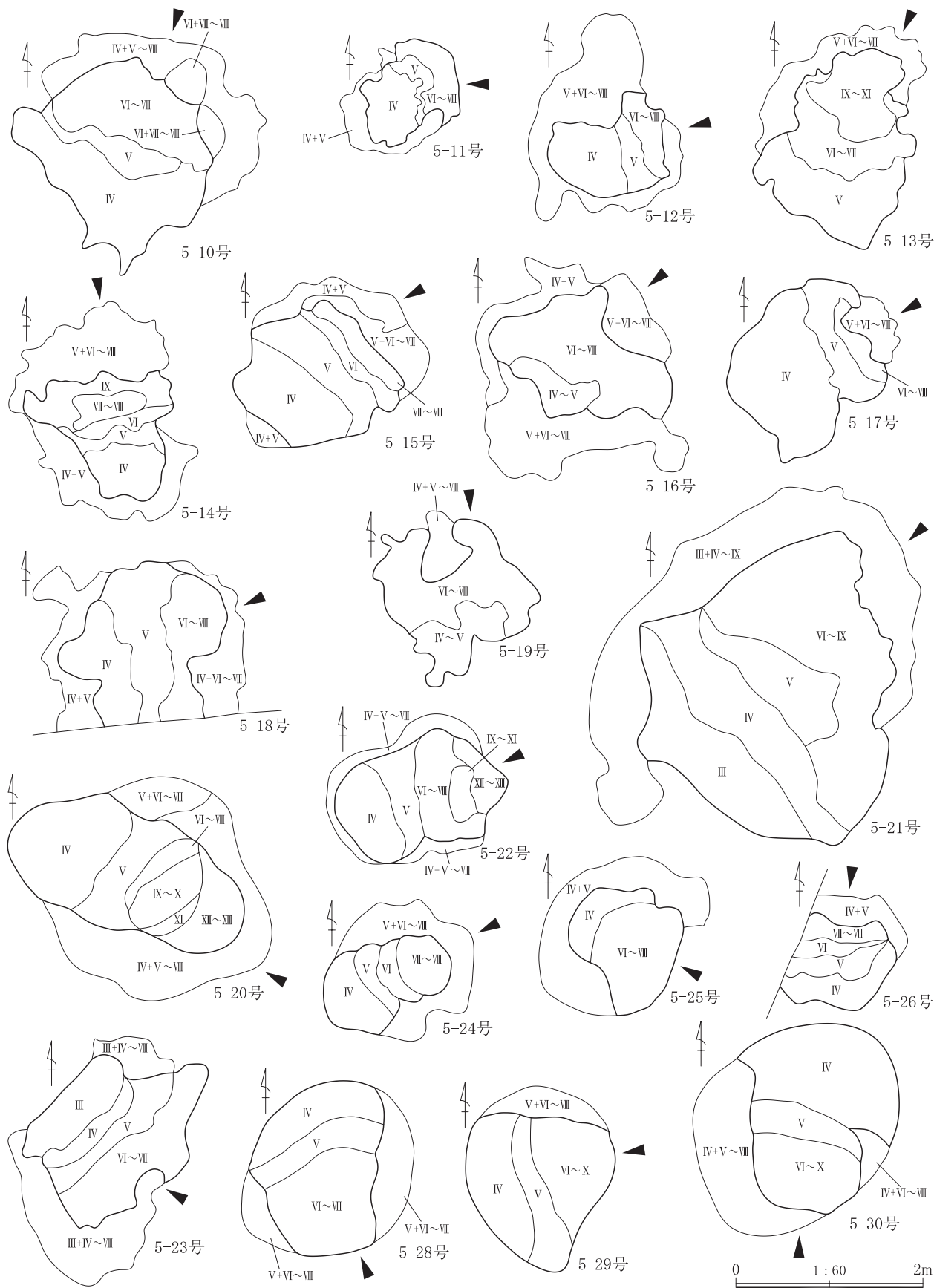


第200图 3区・4区の倒木痕

II 今井三騎堂遺跡の調査



第 201 図 4 区・5 区の倒木痕

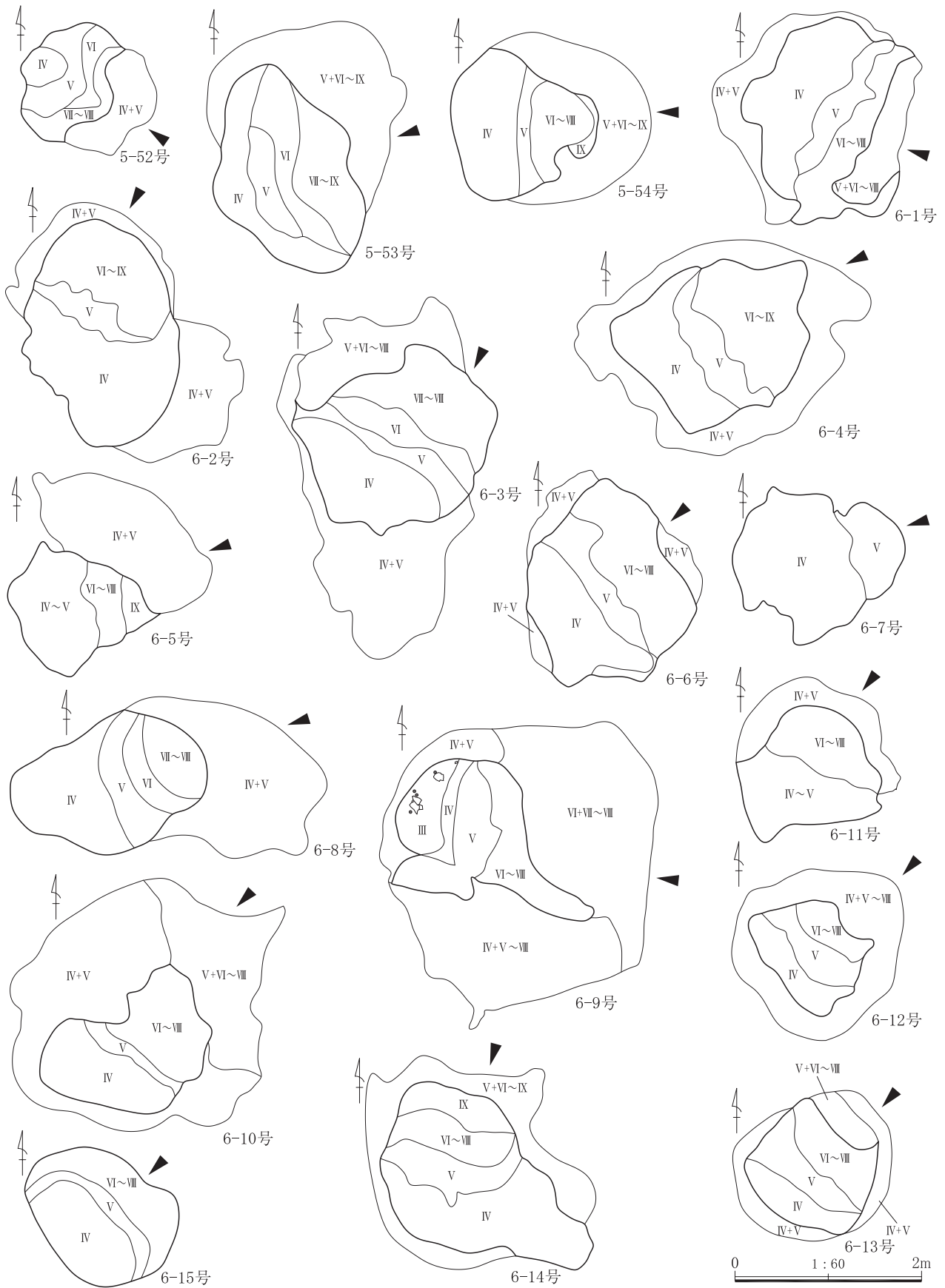


第 202 図 5 区の倒木痕

II 今井三騎堂遺跡の調査

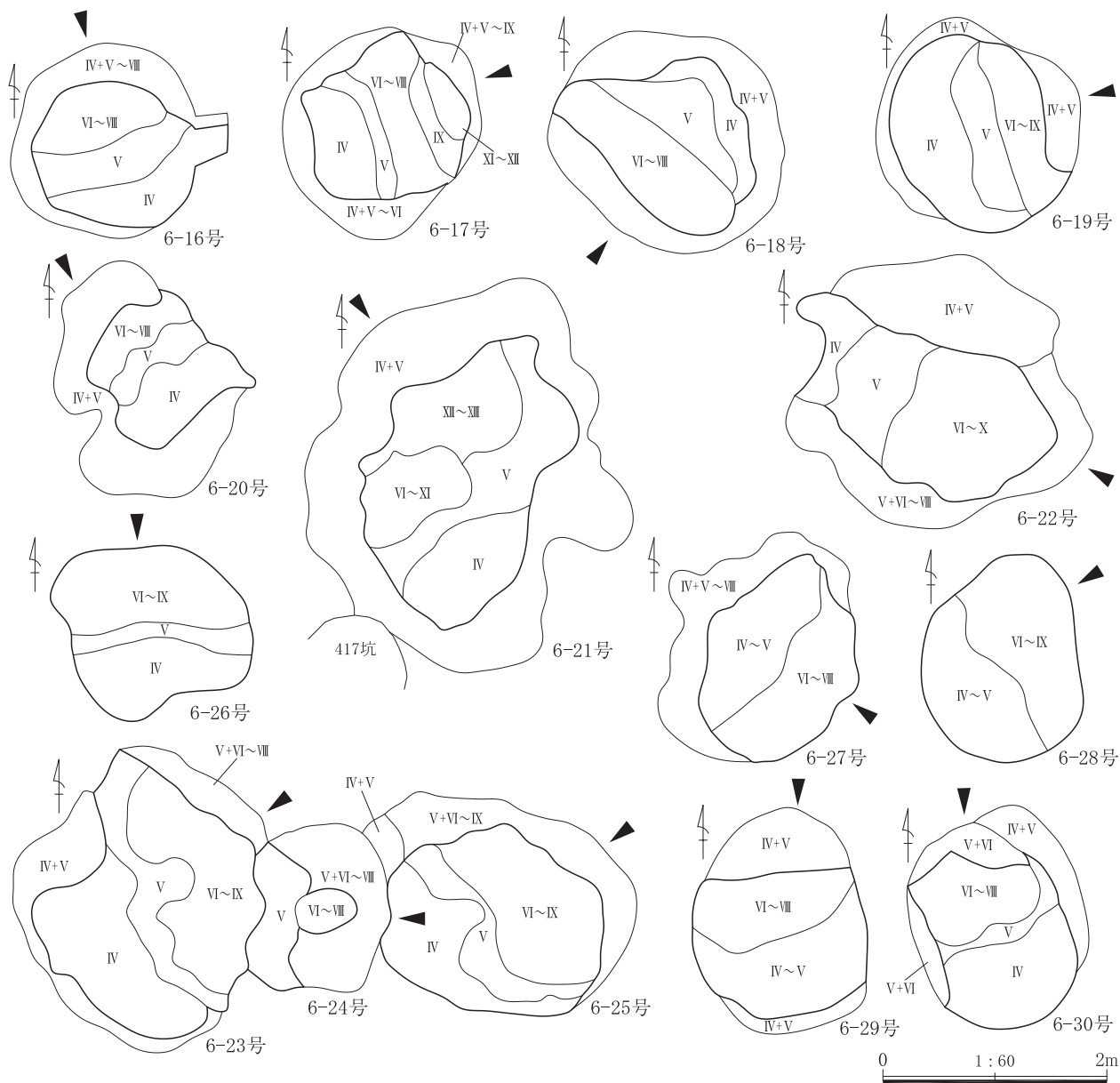


第 203 図 5 区の倒木痕



第204图 5区・6区の倒木痕

II 今井三騎堂遺跡の調査



第205図 6区の倒木痕

8. 包含層の出土遺物

(1) 出土状況

131,750 m²に及ぶ全調査面積の中で、その2/3に相当する3～6区を中心とした約85,000 m²の範囲に、草創期後半や前期後半の遺物包含層が存在する。この包含層は、層厚15～20 cmのIV層（淡色黒ボク土）と、層厚20～30 cmのV層（ローム漸移層）の二層にわたるが、遺物と出土層位との有意な関係は認められず、各層ともに各時期の遺物が混在している状況であった。また内容的に、土器はいずれも大小の破片であり、完形・準完形品は見当たらない。

出土遺物の内容や数量については、288～290頁の一覧表に掲載してあるので、そちらを参照いただきたいが、総点数で見ると、土器22,974点、剥片や礫塊を含む石器15,445点がある。総量的には今井見切塚遺跡をかなり下回っているが、これは調査期間との関係で精緻な包含層調査が困難であったことも、その要因の一つと考えられる。従って、遺物の総量把握では今井見切塚遺跡に比べて若干精度が落ちるが、その分布が3～6区に集中することや、1・2区では皆無あるいはそれに近似した状態であったことについては、確実なことである。

尚、遺物の膨大な量やその分布域が広大であるため、整理の都合上そのエリアを2～4区と5・6区の2つに分割し、各エリア単位で遺物の図版化を行っている。

A. 土器の概要と分布

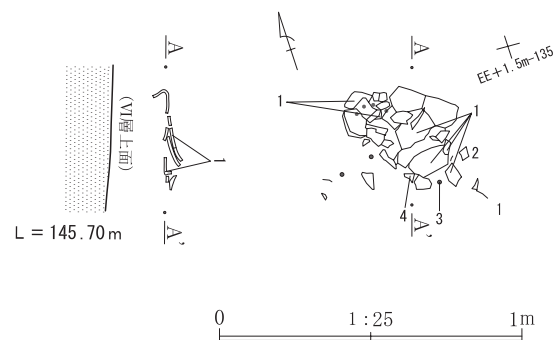
出土土器の大別時期毎の内訳は、草創期前半1点、同後半6,203点、早期473点、前期9,006点、中期41点、後期61点、晩期4点、時期不明7,134点、土製品51点である。時期不明や土製品を除いた総点数に占める比率は、草創期後半が39%、前期が57%であり、両時期が突出している。こうした傾向については、当遺跡での集落立地が両時期を主体とすることと、相関関係にあると見て良い。

各時期の内容を細別型式単位に、その分布状況も含

めて概観してみよう。先ず草創期前半は、多縄文系土器が1点のみであるが、草創期後半の撚糸文土器群と同一地点に分布する。

草創期後半は、井草式229点（I式：24、II式：18、未分類187）、夏島式592点、稲荷台式5,206点、稲荷原式174点などがある。最多数を占める稲荷台式は、FP～GU－140～170グリッドの3・4区と、小さな開析谷を挟んだFA～FP－125～135グリッドの5・6区に集中した分布域が認められる。この両地点ともに、当該期の竪穴住居が存在するが、その棟数に比べて前者での出土点数や分布域の広さが際立っており、調査区域外の北側にも竪穴住居などの遺構が存在する可能性が高い。また、場の機能や占地期間などの側面で、各地点が同等ではなかった可能性も考慮する必要がある。井草式や夏島式、それに稲荷原式についても、この稲荷台式とほぼ類似したあり方を見せており、遺構の占地を含めてともに同一地点を継続的に利用した状況を窺うことができる。

早期では、東山式2点、押型文62点、三戸・田戸式202点、条痕文207点などがある。当該期の遺構は検出されていないが、基本的に草創期後半段階の分布と重複する傾向が認められる。量的にもかなりの点数が存在することから、竪穴住居は伴わないものの、時期比定のできない土坑を含め何らかの活動が展開していたと推定される。個別の分布状況では、押型文段階ではGK～GU－140～150グリッドとかなり狭小かつ限定的であるのに対して、三戸・田戸式や条痕文段階では同域を中心としつつも、斜面上方の西側や開析谷を隔てた5・6区へも広がり、やや異なった様相も認



第206図 包含層の遺物出土状況

II 今井三騎堂遺跡の調査

められる。

前期では、花積下層式 63 点、黒浜式 504 点、諸磯 a 式 2, 513 点、諸磯 b 式 4, 501 点、諸磯 c 式 1, 203 点、浮島・興津式 204 点、十三菩提式 6 点、大木式系 12 点などがある。最多数の諸磯 b 式は、3～6 区の広域に分布するが、その密度には濃淡があり、密集する地点としては開析谷西側の EA～EP - 125～135 グリッド、東側の FK～FU - 145～170 グリッドの 2 地点がある。また、その間隙を埋めるように、FF～FK - 130～135 グリッドや GA～GP - 115～125 グリッド、GK～GU - 140～160 グリッドなどの密度の薄い地点が散在する。これらの地点には、竪穴住居や土坑などが占拠しており、基本的にその周縁に捨てられた生活廃棄物の様相を呈している。しかし、最も密集する 2 地点には、住居が各 1 棟と土坑数基が存在するのみであり、遺構数との対比関係でみれば、他の地点よりも突出している。こうした状況は、前段階の黒浜式や諸磯 a 式でもほぼ同様であり、諸磯 b 式がそれらの場を継続的に踏襲していることを窺わせる。ただし、黒浜式については遺構の占拠する FK - 173 グリッド（住居 1 棟）と GL - 151 グリッド（土坑 1 基）周辺以外の、FU～GA - 140～150 グリッドや FF～FK - 130～135 グリッドにも分布しており、土坑が存在した可能性もある。諸磯 c 式は、同 b 式とほとんど同一地点を踏襲しているが、北東斜面側への遺構の広がりに対応するように、GU～HA - 165～180 グリッド付近にも集中する状況が見られる。

中期前半は、五領ヶ台Ⅱ式 2 点、井戸尻式 2 点、大木 8a 式系 3 点、不明 15 点などがある。分布状況は、竪穴住居 1 棟と土坑 6 基が占拠する EJ～FD - 141～151 グリッド周辺にまとまる傾向にあるが、量的に極めて乏しく、居住や活動期間の短さを窺わせる。

中期後半・後期・晩期については、各期に帰属する明確な遺構がなく、量的にも僅少であるが、FP - 145 グリッドから北東斜面部にかけて散漫に分布する。

土製品には、土製円盤 28 点、土偶 2 点、不明 21 点（未分類）などがあるが、そのほとんどが前期の諸磯式期に比定されるものであり、分布状況も前述の土器と重

複関係にある。

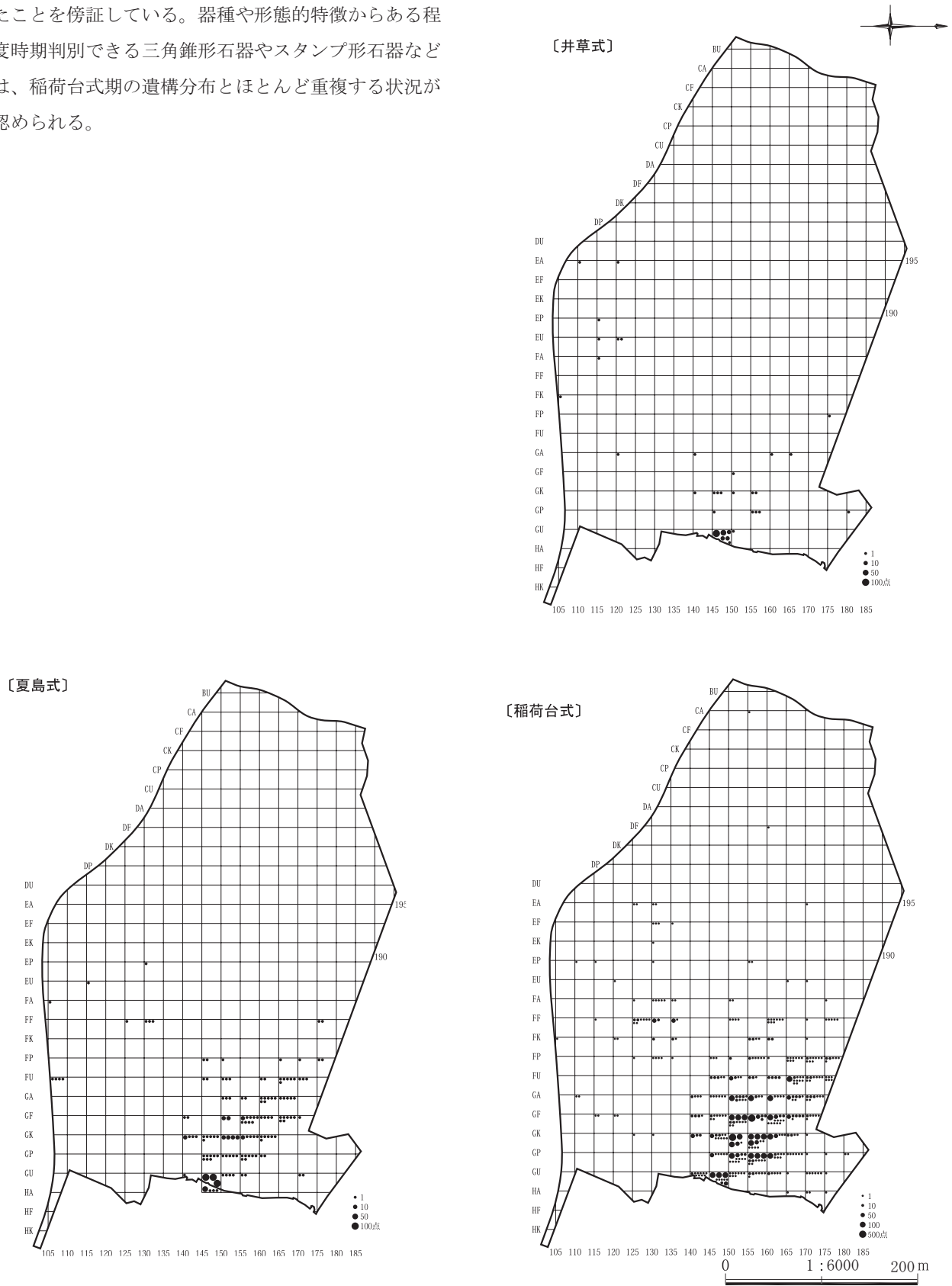
B. 石器の概要と分布

器種別では、削器類が 494 点と最も多く、磨石類 460 点、スタンプ形石器 218 点、打製石斧 163 点、石鏃 135 点、磨製石斧 47 点などの順となる。また、石核・原石 434 点や剥片類 11, 243 点の存在も注意されるところであり、遺跡内に石器素材を持ち込んでの石器製作が行われたことを窺うことができる。一方、打製・使用痕・複合技術などの系列には含まれないが、直径 5 cm 前後の自然礫 2, 067 点が存在し、その内の 990 点に被熱の痕跡が確認できる。

石材では、石鏃・石錐を除く石匙・削器・石斧などの「打製系列」の石器には黒色頁岩が多用され、全体の 71% を占めている。またそれらの石核や剥片に占める黒色頁岩の比率も 74% と同比率を有しており、「打製系列」における同石材の優位性が際立っている。石鏃の場合、チャートが 62% と最多を占めるのに対して、黒曜石は 24% に過ぎず、他は黒色安山岩 8%、黒色頁岩 4% にとどまる。基本的に、在地産の石材を主体に構成されるが、足尾山系のチャートが突出する点で特徴的である。これに関連して、打製石斧や削器類を中心に、渡良瀬川河床や大間々扇状地礫層に存在するホルンフェルスも多用されており、多様な石材構成が注目される。また磨石・石皿等の「使用痕系列」の石器には、当遺跡近隣の河床に産出する粗粒輝石安山岩が 65% と多用されており、「打製系列」の石材選別とは明確な差異を有している。「複合技術系列」の内、磨製石斧は黒色頁岩が 38% を占め、他に変玄武岩・砂岩・変輝緑岩などが認められる。

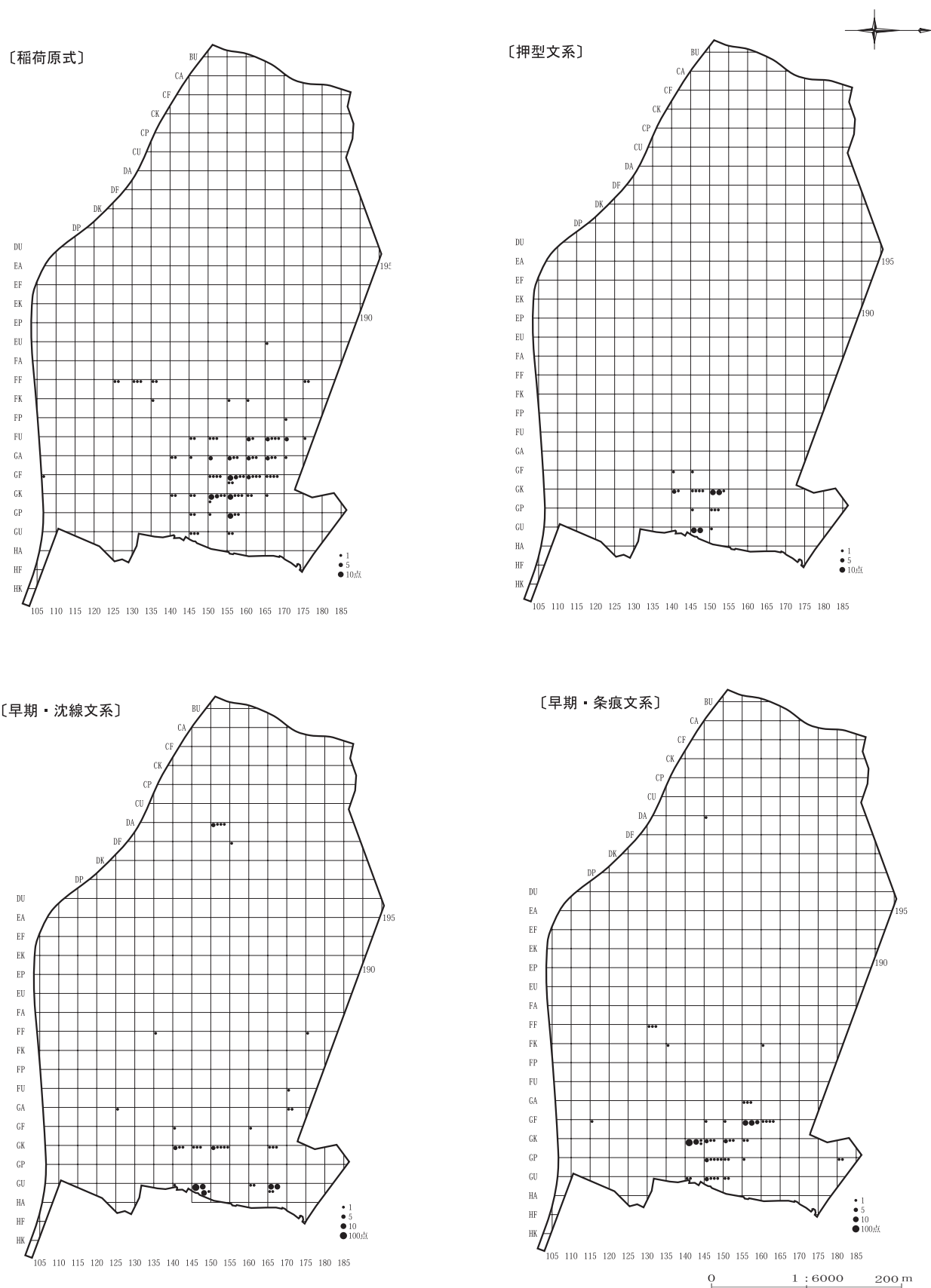
各器種の分布状況については、280～283 頁のドットマップを参照されたいが、大半のものが草創期後半や前期後半の遺構や土器の分布と重複しており、それらとの関係性が想定できる。特に、点数的に多い削器類・磨石類・剥片などは広範囲に分布するが、ともに FU～GU - 145～170 グリッドをはじめ複数地点での密集状態が類似している。また、石核も類似した分布域を形成しており、前述のような石器製作が行われ

たことを傍証している。器種や形態的特徴からある程度時期判別できる三角錐形石器やスタンプ形石器などは、稻荷台式期の遺構分布とほとんど重複する状況が認められる。

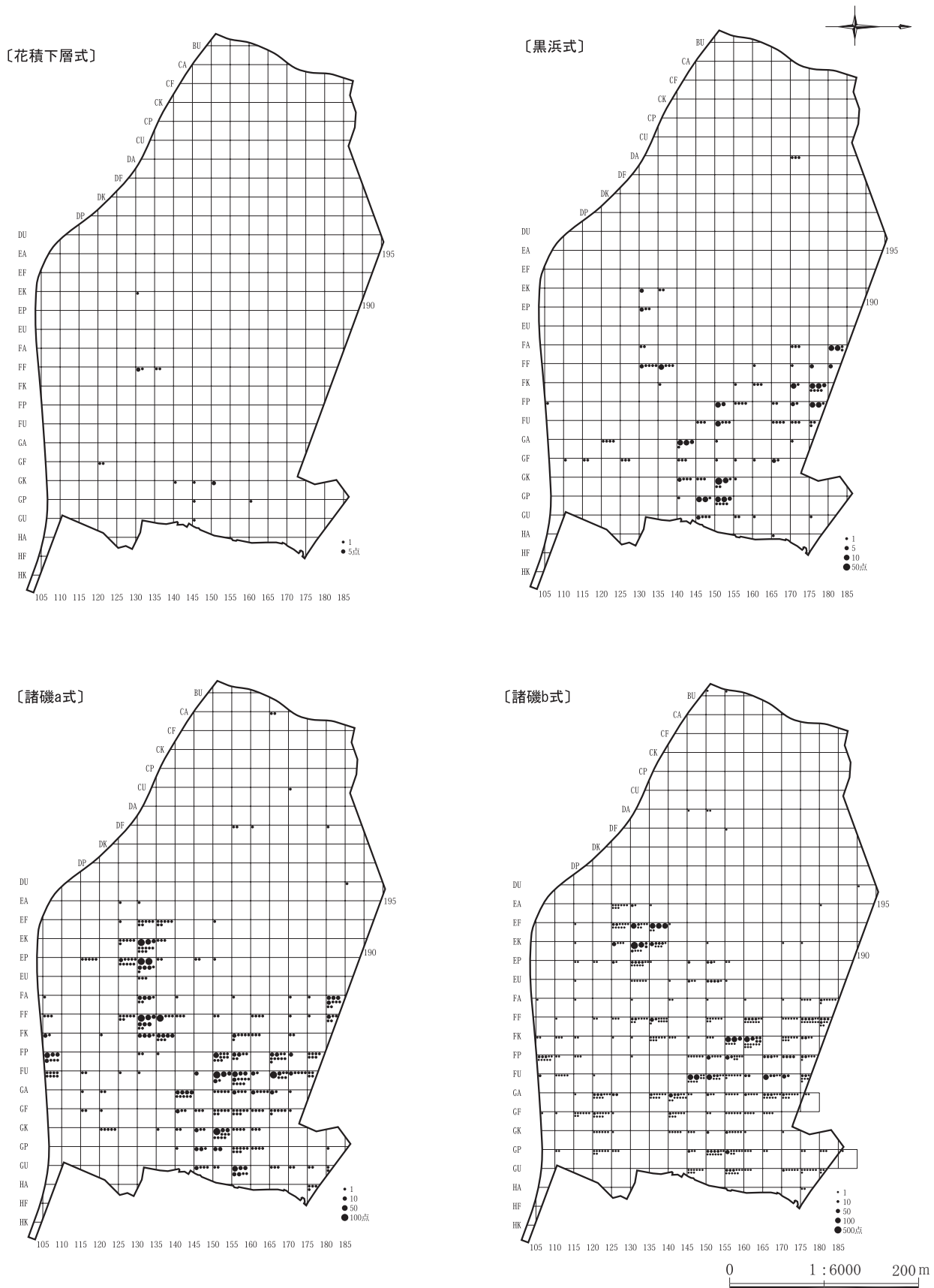


第 207 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (1)

II 今井三騎堂遺跡の調査

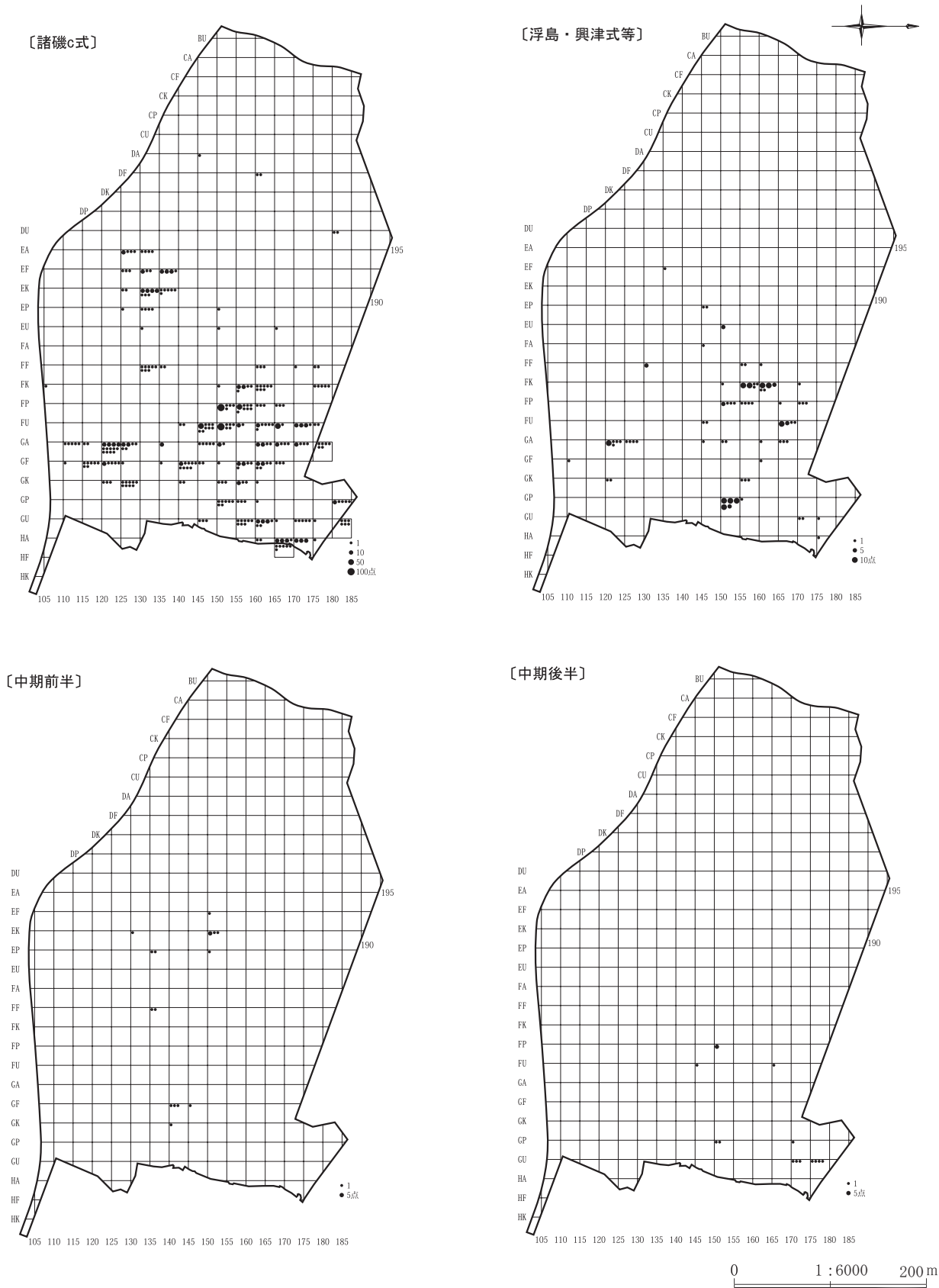


第 208 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (2)

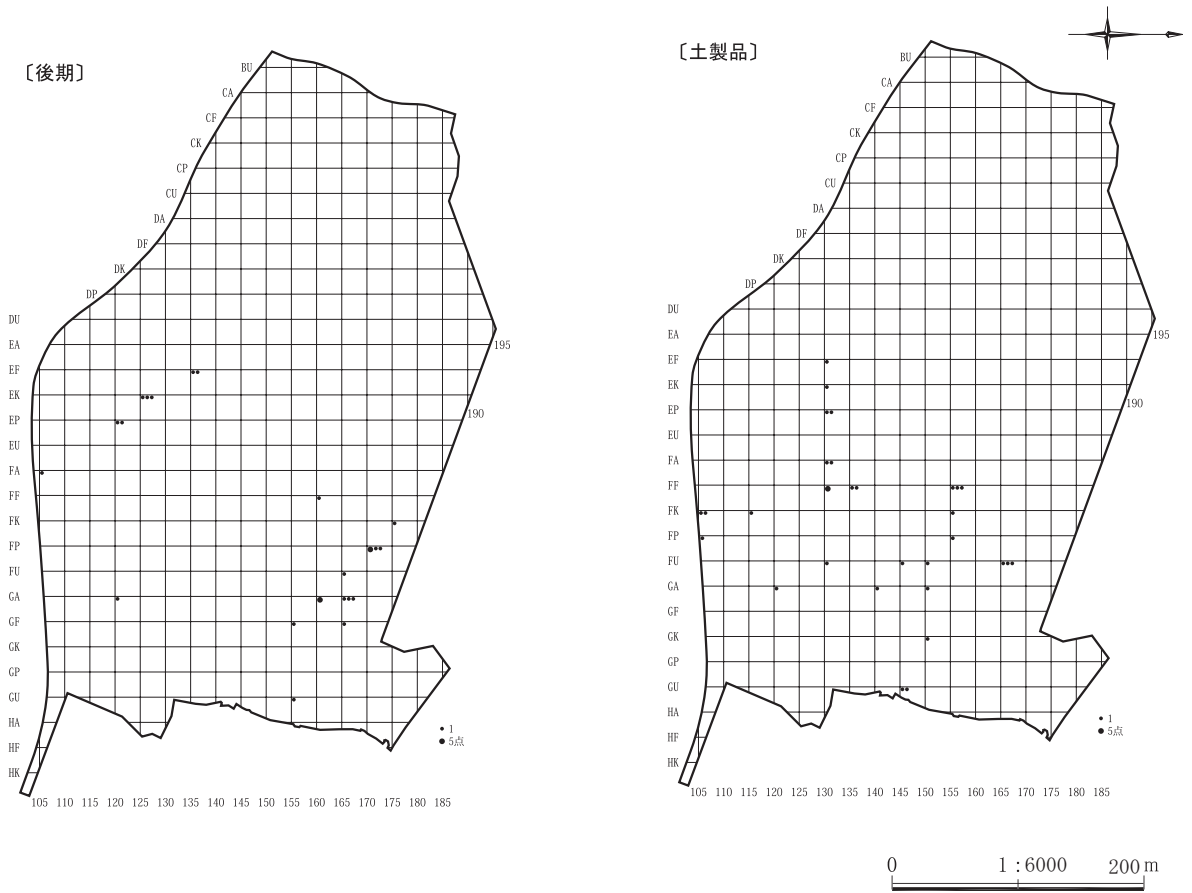


第 209 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (3)

II 今井三騎堂遺跡の調査

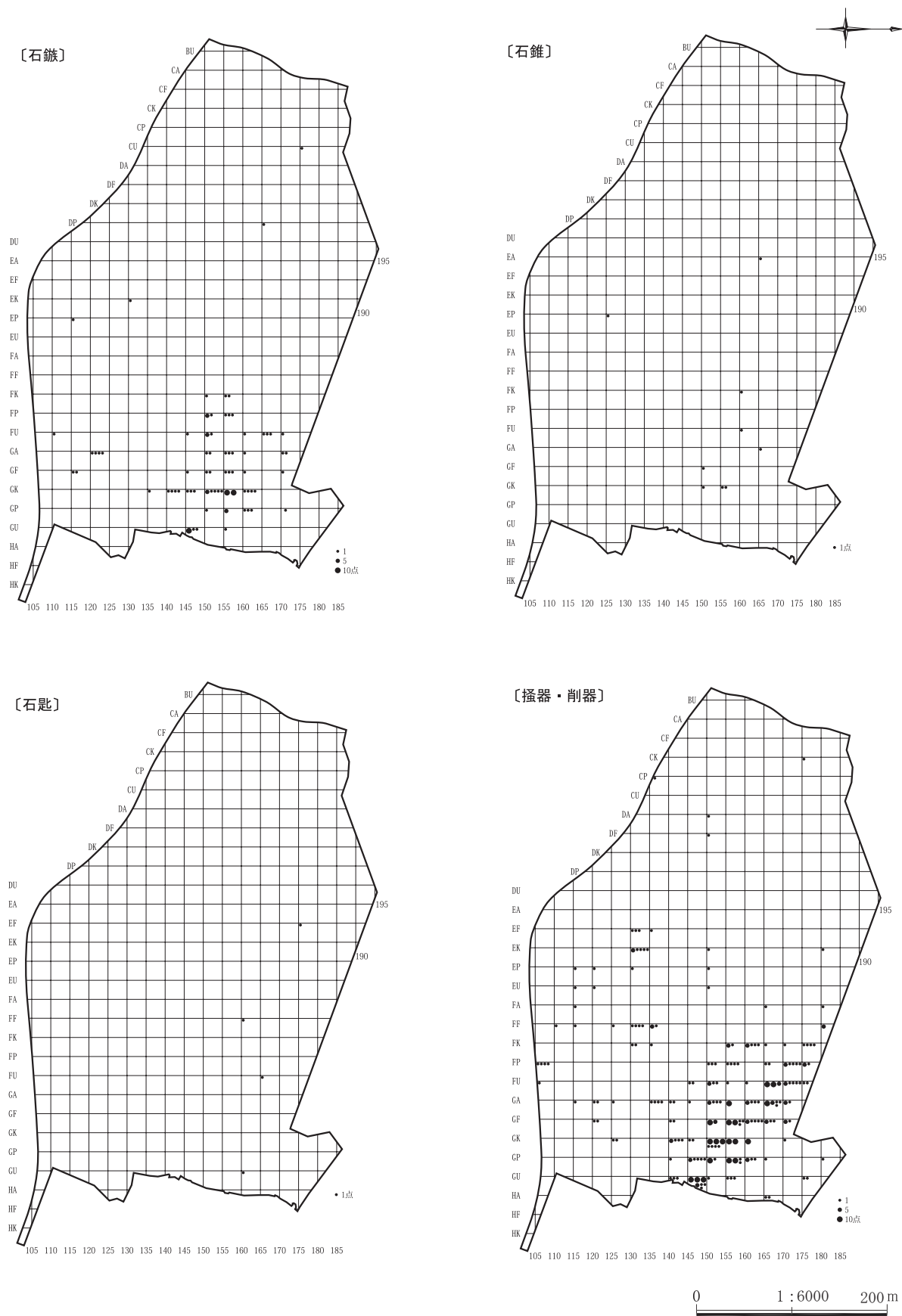


第 210 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (4)



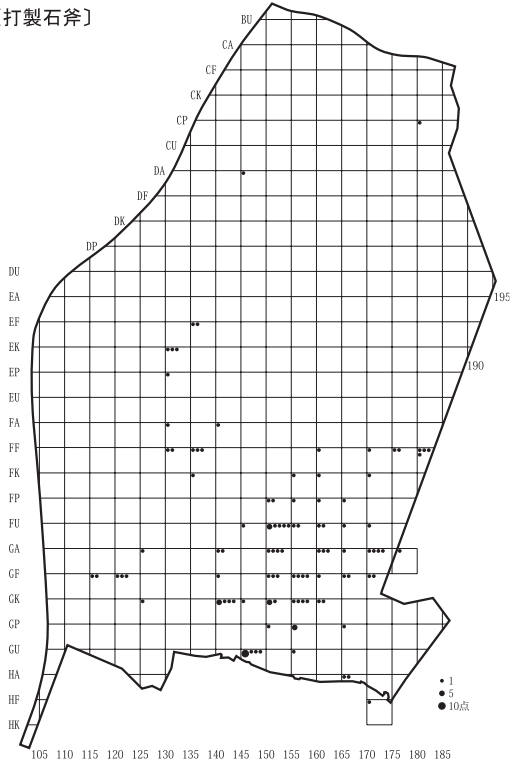
第 211 図 包含層出土土器のグリッド別分布 (5)

II 今井三騎堂遺跡の調査

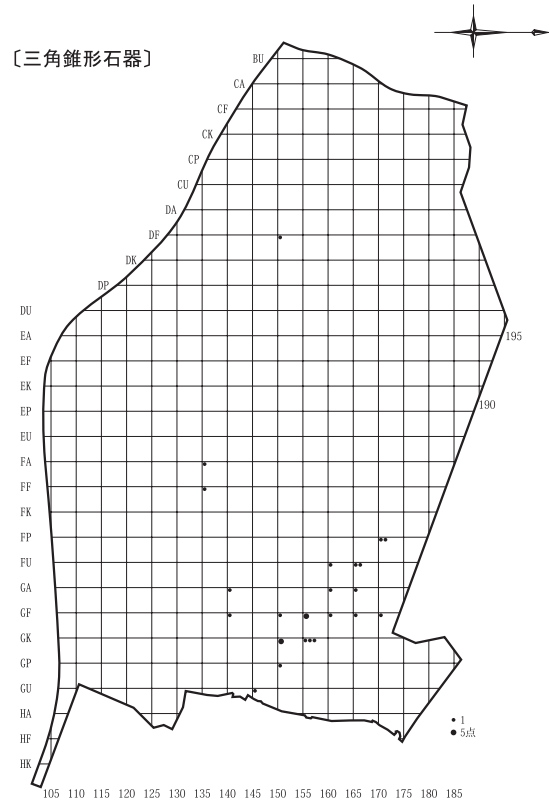


第 212 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (1)

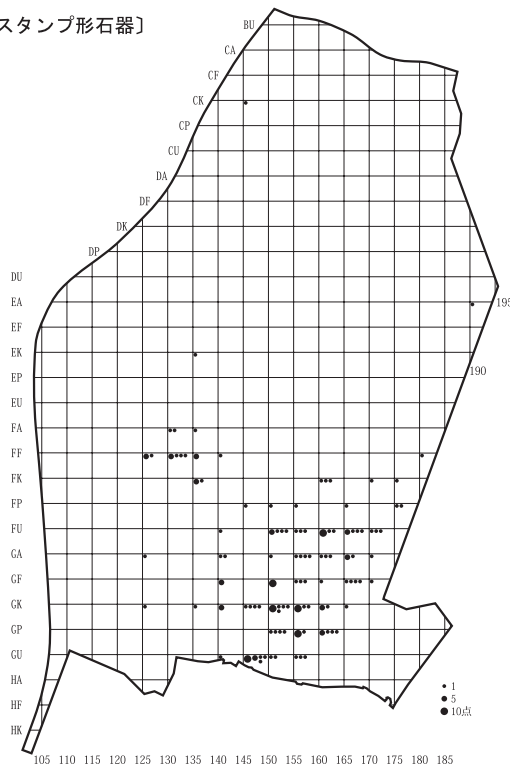
〔打製石斧〕



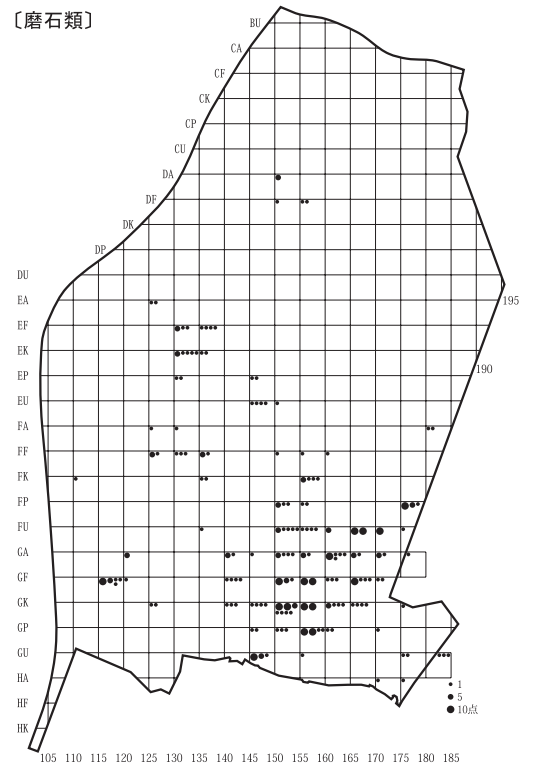
〔三角錐形石器〕



〔スタンプ形石器〕



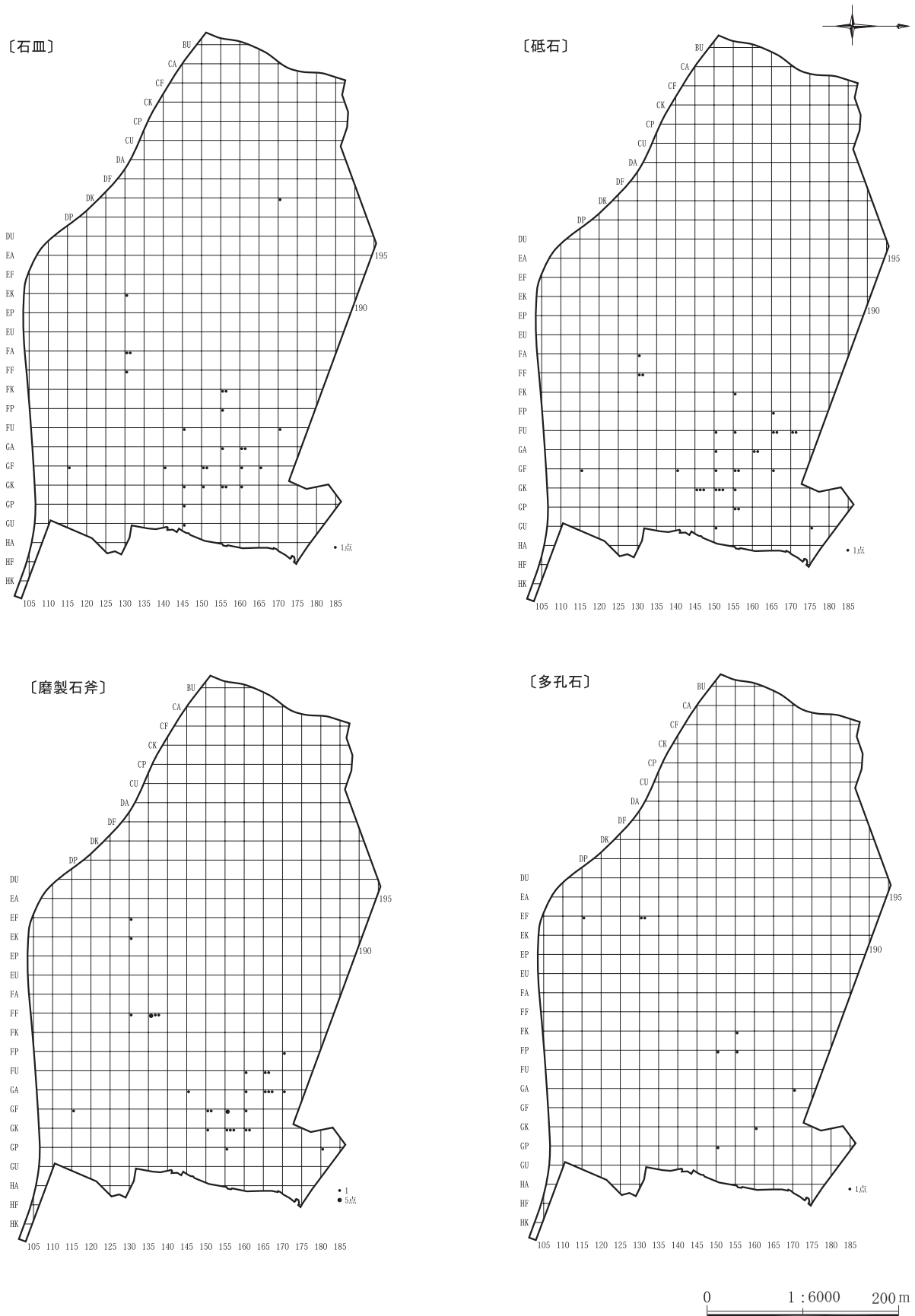
〔磨石類〕



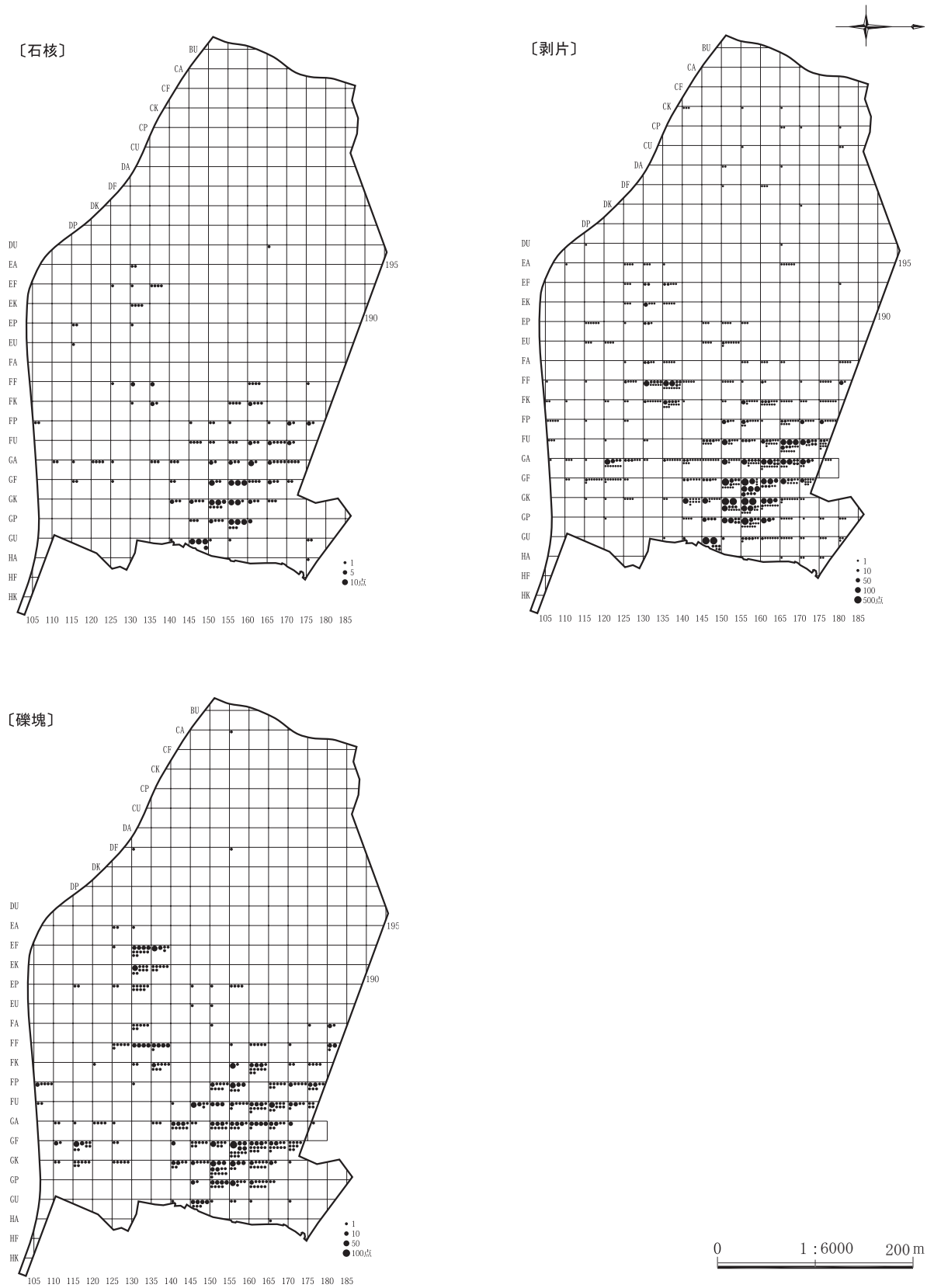
0 1 : 6000 200 m

第 213 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (2)

II 今井三騎堂遺跡の調査



第 214 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (3)



第 215 図 包含層出土石器のグリッド別分布 (4)

(2) 出土土器の内容

A. 草創期前半の土器

a. 多縄文系土器 (第 217 図 11)

1 点のみが存在する。単軸絡条体 R を半置半転気味に押圧施文する。裏面には、指頭状の圧痕を残す。胎土は A タイプ。

B. 草創期後半の土器

a. 井草式 (第 217 ~ 220 図 12 ~ 27・50・53 ~ 55・59・60・90・94 ~ 96・116・141、第 236 図 3 ~ 16)

総数 229 点を検出したが、I 式は 24 点 (第 217 ~ 219 図 12 ~ 17・26・27・53・55・60・94、第 236 図 3・4・7 ~ 16)、II 式は 18 点 (第 217 ~ 220 図 18 ~ 25・50・54・59・90・95・96・116・141、第 236 図 5・6) が存在し、他の 187 点が判別不能な体部破片である。I・II 式ともに口縁部に縄文や撚糸文を回転施文する 2 類が主体を占め、I 式では第 217 図 12 ~ 17、第 236 図 3・4 が、II 式では第 217 図 19 ~ 25、第 236 図 5・6 などがある。原体の側面圧痕を施す 1 類は、II 式に 1 点 (第 217 図 18) 認められるのみである。体部破片の 3 類は、I 式の第 217 ~ 219 図 26・27・53・55・60・94、第 236 図 7 ~ 16 と、II 式の第 218 ~ 220 図 50・54・59・90・95・96・116・141 に区分したが、相互に混在する可能性もある。

原体については、I 式では単節縄文 RL を斜位方向に回転させるものが多く、第 217 図 12 や第 236 図 3 は RL と LR の 2 種類を使用する。撚糸文は少ない。II 式では撚糸文 R が卓越し、逆に単節斜縄文 RL は少ない。器面内部には、指頭圧痕状の凹凸を残すものも見られる。胎土は、両型式ともに A タイプを主体とする。尚、第 218 図 59・60 は、同一個体である。

b. 夏島式 (第 217 ~ 221・223 図 28 ~ 32・34 ~ 44・47 ~ 49・52・66・71・72・76・78・81・91・108・111・112・118 ~ 121・123・126・127・128・132・135 ~ 138・142・143・150・222、第 236・237 図 17 ~ 20・22・24・26 ~ 28・33・50・52)

総数 599 点が存在し、古段階には口唇部文様帯を持

つ a 類 8 点 (第 217・220 図 28 ~ 32・44・118・119) が、新段階には口唇部がやや丸頭状に肥厚して縄文・撚糸文を施す b 類 20 点 (第 217・219・220 図 34 ~ 41・47・108・111・121・123・127、第 236 図 17・18・20・22) や、無文の d 類 3 点 (第 221・223 図 150・222、第 237 図 52) などがある。他の 561 点は、体部を中心とした破片であり、a・b 類のいずれとも判別しがたい。全体的には、新段階を主体としており、その中には肥厚・外反する口唇部に文様帯を持つ b1 類 (第 236 図 17・18) や、口唇部をナデ整形後に胴部にかけて縄文・撚糸文を施文する b2 類 (第 217・219・220 図 34 ~ 41・108・111・112・128、第 236 図 20・22)、それに口唇部が肥厚しない b3 類 (第 217・220 図 47・121・123・127) などがある。

原体は、単節縄文 RL が約 5 割と最も多く、撚糸文 R と同 L がこれに次ぐ。また、絡条体条痕文も約 2 割強の割合で施文されている。胎土は、井草式と同様に A タイプが多いが、花崗岩起源の砂礫を含む E タイプも僅かに存在する。尚、第 217 図 35・36・39、第 236 図 17・18 は各々同一個体である。

c. 稻荷台式 (第 217・218・220 ~ 223 図 45・46・51・56 ~ 58・61 ~ 65・67 ~ 70・73 ~ 75・77・79・80・82 ~ 89・92・93・97 ~ 107・109・110・113 ~ 115・117・122・124・125・129 ~ 131・133・134・139・140・144 ~ 149・151 ~ 186・197・206・208・216・217、第 236・237 図 21・23・25・29 ~ 32・34 ~ 46・51・53 ~ 63)

総数 5,202 点が存在し、古・新段階に二分される。古段階には、施文後に口唇部をナデ整形する a 類の 11 点 (第 217・219・220 図 45・46・109・110・122・124・125・129 ~ 131、第 236 図 21) が、また新段階には口縁部外端が肥厚する無文の d 類 53 点 (第 221 ~ 223 図 149・151 ~ 186・206・208・216・217、第 237 図 53 ~ 63) や、比較的原体施文の粗雑な c 類の 74 点 (第 218 ~ 220・222 図 51・56 ~ 58・61 ~ 65・67 ~ 70・73 ~ 75・77・79・80・82 ~ 89・92・93・97 ~ 107・113 ~ 115・117・133・134・139・140・144 ~ 148・197、第 236・237 図 23・25・29 ~ 32・

34～46・51)の大半が該当する。全体的には新段階のものを主体としているが、古・新段階の比率については、体部破片が大部分を占めるために不明である。

原体は、撚糸文Rが主体を占め、単節縄文RLや絡条体条痕文も1～2割程度認められる。胎土は、Aタイプを主体にするが、結晶片岩や花崗岩の砂礫を含むD・Eタイプも新段階を中心に僅かながら認められる。尚、第237図55・56、57・60は、各々同一個体である。

d. 稲荷原式 (第222・223図187～196・198～205・207・209～215・218～220、第237図47～49・64)

総数175点が存在し、粗大な撚糸文を施文するa類21点(第222図187～196・198～204、第237図47～49)と、無地文のb類21点(第222・223図205・207・209～215・218～220、第237図64)、それに未分類の133点がある。無地文のものは、口縁部に幅広の凹線を引く第222・223図207・215・218～220の例と、幅狭の沈線を引く第222図205のような新段階の様相を持つものもある。a・b類ともに、口縁部の無施文部分の幅が拡大している。

原体は、節の粗大な撚糸文Rを主体にして、僅かにLが存在する。胎土は、先の稲荷台式と同様に、Aタイプを主体にして、B・D・Eタイプが僅かに認められる。尚、第222図187・192、196・199・201、197・204は各々同一個体である。

C. 早期の土器

a. 東山式 (第223図221)

総数2点が存在するのみであり、第223図221の1点を掲載してある。口唇部は平頭状を呈し、その直下に明瞭な太沈線を施す。内外面ともに、篋状工具によりナゲ整形されている。胎土はAタイプである。

b. 押型文土器 (第223図231～240、第237図65・66)

総数62点があるが、ここではa類の山形文11点(第223図231～239、第237図65・66)と、b類の楕円文1点(第223図240)を掲載した。山形文は、口縁部に1～2段横位施文して以下を縦位施文する直交帯

状施文であり、相互に2～3cmの無文部を置く。楕円文は、全面を横位密接施文するものであろう。

胎土は、Aタイプを主体とするが、結晶片岩を含むDタイプも約3割程度認められる。尚、第223図235・236は同一個体である。

c. 沈線文系土器 (第223図241～255、第237図67～75)

総数202点が存在するが、ここでは沈線文土器22点(第223図241～251・254・255、第237図67～75)と、無文土器2点(第223図252・253)を掲載した。沈線文土器は、鋸歯状や横位平行状の集合沈線が多段構成されるものを主体とする。また、無文土器は横・斜位の擦痕状の整形痕を残すものであり、前者を含めて田戸下層式に比定される。

胎土は、A・Bタイプのみに限定され、結晶片岩や雲母を含むD・Eタイプは認められない。尚、第237図69・70、73～75は各々同一個体である。

d. 条痕文系土器 (第224図256～270、第237図76～80)

総数207点が存在し、茅山上層式段階のb類15点(第224図256～270)と、同式～前期初頭にかけてのc類5点(第237図76～80)を掲載した。第224図256・257は、口唇部や口縁部に絡条体圧痕を施文しており、他の土器も同様の原体を用いた条痕文であると考えられる。胎土は、いずれも繊維を含むCタイプである。

D. 前期の土器

a. 花積下層式 (第224図271～280、第237図83～85)

総数63点が存在するが、全体的には羽状縄文を施す小破片が主体を占め、口縁部に原体の側面圧痕を施すものは見当たらない。ここでは、縦位構成の鋭角な羽状縄文を施す2a類5点(第224図279・第237図82～85)、口縁部に隆帯文を施す3a類1点(第237図81)、横位の結束羽状縄文を施す3b類8点(第224図271～278)、東海系のいわゆる「おせんべ」土器に近似した無文土器の4類1点(第224図280)を掲

載した。原体は0段多条のRLやLR縄文を多用し、胎土はCタイプを基本としている。

b. 黒浜式(第224図281～300、第237図86～90)

総数504点が存在し、古段階に比定される1類が8点、新段階の2類が34点、判別不明の体部破片の3類が462点となる。古段階には、第224図285・286のように沈線文を施すものがある。新段階では、平行沈線文を持つ2a類(第224図287・288、第237図86)や、平行爪形文で米字文を構成する2b類(第224図281～284)などがある。縄文地文のみで構成される第224図289～291などは、その大半が新段階に比定されると考えられる。第224図292～300、第237図87～90などは、文様不明の縄文地文の一群である。縄文は菱形状に構成されるものが多い。

原体は単節RL・LRを主にして、附加条第1種や直前段合撚りなどが若干認められる。胎土は、ほぼCタイプに限定されている。

c. 諸磯a式(第216図1・2・第224～226図301～380、第235図1・第237～239図91～160)

総計2,513点が存在する。文様構成では、米字文の1類(第224図301～309、第235・237図1・91～99)、肋骨文の2a類(第225・226図310～342、第238図118・119)、平行波状文の2b類(第225図320～329、第238図100～109)、縦位円形竹管文の2c類(第225図330～338、第238・239図110～117・157)、爪形文や平行沈線文による区画文の2d類(第226図343～348・351・352、第238図121～129)、木葉文の3類(第226図349・350・353～358、第238図120・130～139)、全面縄文の4a類(第226図359～363、第238図140～145)などがある。総数の半分以上を、文様構成不明の縄文地文や無文(第226図364～379、第238図146～155)が占めているが、浅鉢(第216・226図1・2・380、第239図156～160)も僅かに認められる。

原体は、単節斜縄文RLが約7割を占め、附加条第1種なども僅かに存在する。胎土は、Aタイプを主体としているが、繊維や結晶片岩を含むC・Dタイプも認められる。尚、第224～226図302・304・306、

311・312、325・329、330・333～335・337、339・341、359・346、第238図101・107、105・108、112・116は各々同一個体である。

d. 諸磯b式(第227～232図381～582、第235図2・第239～241図161～272)

総数4,448点が存在する。古段階のb1式に比定される1類と、新段階のb2～b3式の2・3類に2大別される。b1式段階では、平行沈線や爪形文を用いた、変形木葉文の1a類(第227・230図381～409・494・499、第239・241図169～171・177・256・257)、横位多段の波状文の1b類(第228・229図421・422・477～479・486、第239・240図172・227・230・233)、蕨手状渦巻文の1c類(第239図173～176・178)などが認められる。b2～b3式段階では、浮線文を用いた変形木葉文の2a類(第228図410～417、第235・241図2・258)、渦巻文の2b類(第228図420・423～440、第239・240図179～201・206・209・211・212)、横位多段平行状文の2f類(第216・228・229図1・2・418・419・444～476、第240図202～205・207・208・210・213～224)などや、退化した獣面把手を貼付する2e類(第229図441～443)などが認められる。また、平行沈線文を用いた一群には、渦巻文の3a類(第230図488～498・509・510、第240図235・236・239)、鋸歯状文の3b類(第229図480～485・487、第240図225～234)、横位多段平行状文の3c類(第216・230・231図3・500～508・511～546、第240図237・238・240～255)などがある。この他に、縄文地文のみで構成される深鉢土器があり、口縁部が外傾する4a類(第231図549～554、第241図266～268)と、短く内屈する4b類(第231図547・548)がある。また、浅鉢土器は第232図573～582、第241図259～265・272のような無文が主体を占めるが、前述した爪形文や浮線文を施す第241図256～258のような例もある。第231図555～572や第241図269～271などの文様構成の不明瞭な1,000点を超える縄文地文土器については、粗製的な地文のみの深鉢土器が過半数を占めると考えられる。

原体については、諸磯 a 式と同様に単節斜縄文 RL が最も多く、全体の 6 割以上を占める。次いで、同 LR が 2 割強を占め、他に結束第 1 種や直前段反撚り、無節なども僅かに認められる。また、胎土は A タイプを主体に、B タイプや結晶片岩・雲母を含む D・E タイプも一定量を確認することができる。

尚、第 239 ～ 241 図 161・162・168、163・164、165 ～ 167、176・178、181・184・186、190・196 ～ 199、193・195、201・208、204・205、210・221・222、228・230、248・249、268・269 は、各々同一個体である。

e. 諸磯 c 式 (第 216 図 3 ～ 9・第 232・233 図 583 ～ 639、第 241・242 図 273 ～ 319)

総数 1,203 点が存在する。内容的には、口縁部や胴部に耳状・ボタン状・棒状の貼付文を施す 1 類 (第 216・232 ～ 234 図 3・5・583 ～ 589・591 ～ 693、第 241 図 273 ～ 287)、平行沈線文を主体として貼付文に乏し 3 類 (第 216・233 図 4・6 ～ 8・609 ～ 630、第 241・242 図 288 ～ 309)、結節浮線文を施す 2 類 (第 242 図 310 ～ 314)、口唇部に貼付文や刻目を持つ全面縄文施文の 4a ～ 4c 類 (第 232・233 図 590・631 ～ 639、第 242 図 315・316)、浮島式に類似した肉彫的な爪形刺突文を施す 4e 類 (第 233 図 626 ～ 630) などが認められる。3 類の一部 (第 233 図 613 ～ 615、第 241 図 292 ～ 301) には、縄文地文を施すものが見られる。数量的には、3 類が全体の 7 割強を占めているが、この中には 1 類の胴部下半破片も相当数含まれていると考えられ、正確な割合は不明である。ただし、結節浮線文の 2 類をはじめ全面縄文の 4a ～ 4c 類、爪形状刺突文の 4e 類などについては、極めて僅少と言えよう。器形については、1 類の中で口縁部に粗大な耳状貼付文を持つ一群は、口縁部や胴部上位で著しく屈曲するものが多い。他は、口縁部が外反する屈曲の少ないものが主体的である。原体は、直前段反撚りの無節 L が多く、単節斜縄文 RL がそれに次ぐ。胎土は、A タイプが他を圧倒して多数を占め、その様態は各類毎でも大きな差異は認められない。尚、第 241・242 図 282・300、295・298、310・314 は、各々同一個体

である。

f. 浮島・興津式 (第 216 図 10、第 233・234 図 640 ～ 673、第 242 図 320 ～ 336)

総数 204 点が存在する。先ず文様で分類すると、幅広い爪形状のロッキング文を施す a 類 (第 233・234 図 640 ～ 647・663・666、第 242 図 320・321)、鋸歯状のロッキング文を施す b 類 (第 234 図 662・664 ～ 673、第 242 図 323・324・326)、肉彫的な連続三角押引文や刺突文を施す c 類 (第 234 図 660、第 242 図 322)、段帯状の口縁部に爪起こし状の刻目文を施す d 類 (第 233 図 648 ～ 651・653)、平行沈線間に梯子状の貝殻腹縁文を施す e 類 (第 216 図 10、第 233・234 図 652・654 ～ 659・661)、平行沈線の菱形文や口縁部に蛇行隆帯文を施す f 類 (第 242 図 325・327 ～ 336) などがある。いずれも小破片であるために、全体的な文様構成は不明瞭であるが、a・c 類は浮島式系、e 類は興津式系、f 類は興津式系と大木 5 式系の要素を持っている。原体は、単節斜縄文 RL を主体とするが、f 類では同 LR のみが認められ、その様相を異にする。しかし、胎土においては各類毎の差異はなく、ともに A タイプを主体としている。器形については、口縁部が外反して胴部中位で膨らみ、波状口縁を持つものが目立つ。尚、328 ～ 336 の土器片は、ともに同一個体である。

g. 大木 5 式系土器 (第 234 図 674 ～ 678)

総数 12 点が存在するが、ここでは鋸歯状の沈線文を持つ同一個体 5 点を掲載した。原体は単節斜縄文 LR であり、横位施文している。胎土は A タイプである。器形は、口縁部が内傾して胴部中位に最大径をもつような樽形を呈する。

E. 中期の土器

a. 前半期 (第 234 図 679 ～ 681、第 242 図 338 ～ 340)

総数 22 点が存在するのみであり、型式の判別できるのは五領ヶ台 II 式 2 点 (第 234 図 679・680)、井戸尻式 2 点 (第 234 図 681、第 242 図 337)、大木 8a 式系 3 点 (第 242 図 338 ～ 340) にとどまる。縄文原体は、

II 今井三騎堂遺跡の調査

五領ヶ台式が単節斜縄文 LR、大木 8a 式系が無節 R と単節斜縄文 RL となる。胎土は、ともに A タイプである。

b. 後半期 (第 234 図 682 ~ 684)

総数 19 点が存在するが、ここでは加曾利 E2 ~ E4 式の各 1 点を掲載した。ともに原体は単節 LR、胎土は A タイプである。

F. 後期の土器

a. 前半期 (第 234 図 685 ~ 690、第 242 図 341 ~ 344)

総数 61 点が存在するが、称名寺式は認められない。ここでは、堀之内 1 式 1 点 (第 234 図 686)、同 2 式 5 点 (第 234 図 685・687、第 242 図 341 ~ 343)、加曾利 B 式 4 点 (第 234 図 688 ~ 690、第 242 図 344) を掲載した。ともに原体は単節 LR と同 RL が併存し、胎土は A タイプである。

G. 晩期の土器

総数 4 点が存在するが、いずれも小破片のために掲載していない。また、細別型式についても不明である。

H. 時期不明の土器

総数 7,146 点が存在する。目立った特徴を持たないために型式分類できない一群であるが、縄文を施す 1 類 75 点、無文の 2 類 1,482 点、細片の 3 類 5,589 点などがある。前述の各土器型式との関係から見れば、そのほとんどが草創期後半の撚糸文土器群や前期の諸磯式に比定される可能性が高い。

I. 土製品

a. 土製円盤 (第 234 図 692 ~ 699、第 242 図 346 ~ 365)

土器の小破片を素材として、その周縁部を研磨することにより円盤状に整形したものであり、総数 28 点が存在する。素材破片の土器型式には、草創期後半の撚糸文土器 (第 234 図 692・694 ~ 699、第 242 図 346・351)、前期の諸磯 a 式 (第 234 図 693、第 242 図 347・349・350・353・355 ~ 362・364・365)、諸

磯 b 式 (第 242 図 348・352・354・363) などが認められる。これらの土器型式が、その使用時期を表示するものと仮定すれば、集落の形成された各時期に土製円盤が製作されたことになる。各土製円盤の大きさは、第 234 図 692 のように直径 7 cm の大振りなものもあるが、その大半は直径 2 ~ 4 cm と小振りである。

b. 土偶 (第 235 図 366・367)

総数 2 点が存在する。両者ともに扁平な板状の土偶であり、頭・腕・脚部の表現は認められない。366 は体部中位に、367 は同上位に各々乳房状の貼付表現がなされ、367 は左胸側が剥落している。また、細い 2 本の棒状工具の先端部を使用した平行状の刺突文が、366 では胸部や背面をやや雑然と巡り、367 では胸部・背面だけでなく腰部にも施されている。胎土は、ともに A タイプである。

これら土偶の時期については、先の刺突文が諸磯 b 式新段階の形骸化した浮線文の施文具と類似していることや、頭・腕・脚部の体部表現に乏しいことなどから、時期的には当該期に比定することができよう。

c. 不明土製品 (第 234 図 691、第 242 図 345)

総数 2 点が存在する。691 は諸磯 b 式の土器片を用いて、その周縁部を研磨・整形したものであるが、上半部を欠損し残存長 7.4 cm、幅 6 cm を測る。その大きさ・形状から見て、先の土製円盤とは異なっている。345 も上半部を欠損し、残存長 6 cm、幅 4.5 cm を測る。表裏面は、指頭状の整形痕が認められる。胎土は、691 が B タイプ、345 が A タイプである。

出土土器の型式別一覧

	草創期前半				草創期後半				早期				前期	
型式	多縄文	井草Ⅰ	井草Ⅱ	井草	夏島	稲荷台	稲荷原	不明	東山	押型	沈線	条痕	花積下層	黒浜
合計	1	24	18	187	599	5198	174	2	2	62	202	207	63	504

	前期				中期前半					中期後半				
型式	諸磯a	諸磯b	諸磯c	浮・興	十三菩提	大木5	五領ヶ台Ⅱ	井戸尻	大木8a	不明	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4	不明
合計	2513	4448	1203	204	6	12	2	2	3	15	1	1	1	16

	後期				晩期	時期不詳	土製品	総計
型式	堀之内1	堀之内2	加曾利B	不明	不明			
合計	1	5	4	51	4	7146	51	22986

各種土器の分類別点数

多縄文系

種別	b
合計	1

井草Ⅰ式

種別	2	3
合計	8	16

井草Ⅱ式

種別	1	2	3
合計	1	9	8

稲荷原式

種別	a	b	不明
合計	21	21	133

東山式

種別	a	不明
合計	1	1

押型文系

種別	a	b	不明
合計	12	1	50

稲荷台式

種別	a		c	d	不明
	2	3			
合計	7	4	74	53	5060

夏島式

種別	a		b			c	d	不明
	1	2	1	2	3			
合計	5	3	2	19	6	23	3	539

沈線文系

種別	a	不明
合計	24	178

条痕文系

種別	b1	c	不明
合計	15	5	187

花積下層式

分類	2a類	2類	3a類	4類
合計	5	48	10	1

黒浜式

分類	1類	2a類	2c類	2類	3a類	3b類	3類
合計	8	3	4	27	3	13	457

諸磯a式

分類	1類			2類													
種別	b	c	不明	a		b			c				d				不明
				2	3	1	2	3	1	2	3	不明	1	2	3	4	
合計	6	13	98	12	4	6	13	1	3	6	8	1	5	6	1	5	516

分類	3類				4類			
種別	a		b		不明	a	b	不明
	1	2	1	2				
合計	4	2	5	8	130	38	6	1616

諸磯b式

分類	1類							2類									
種別	a		b			c	e	不明	a		b			e	f		不明
	1	2	1	2	不明				2	2	1	2	不明		1	1	
合計	22	24	2	1	4	4	1	400	9	1	3	22	21	3	9	45	920

分類	3類					4類			
種別	a		b	c	不明	a	b	c	不明
	1	2							
合計	10	5	17	63	1201	30	2	18	1611

諸磯c式

分類	1類				2類		3類					4類					
種別	a1	a2	b2	不明	b	不明	a	b	c	d	不明	a	b	c	d	e	不明
	16	1	24	208	5	7	5	15	20	4	816	3	6	5	3	5	61

浮島・興津式系

種別	a	b1	b2	c	d	e	f	不明
合計	12	9	4	2	5	9	11	152

十三菩提式

種別	不明
合計	6

大木式

種別	b	不明
合計	5	7

土製品

分類	1類	2類	3類
合計	28	2	21

II 今井三騎堂遺跡の調査

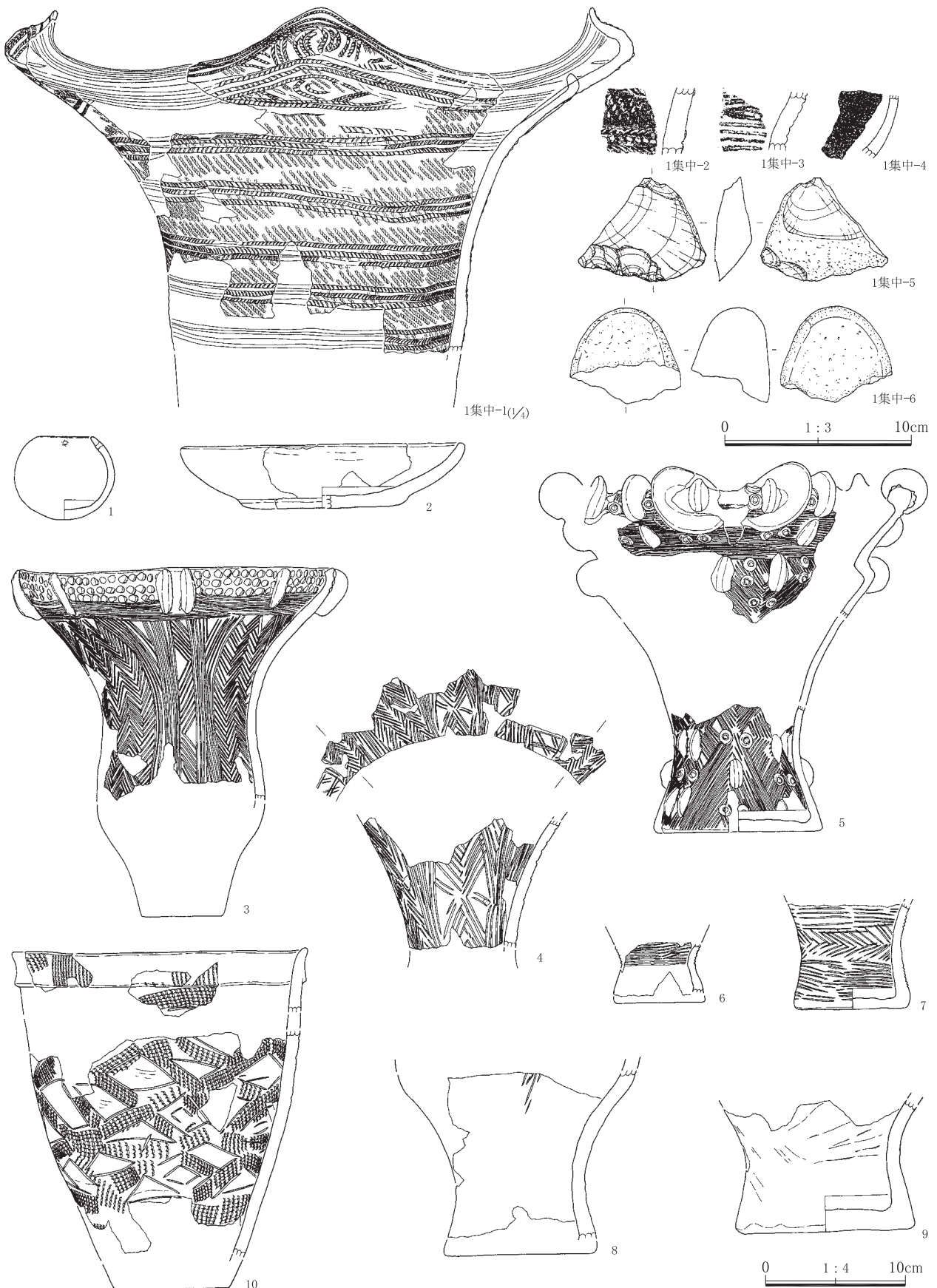
各種土器の胎土別点数

胎土	型式	多縄文	井草I	井草II	夏島	稲荷台	稲荷原	東山	押型	沈線	条痕	花積	黒浜	諸磯a	諸磯b	諸磯c
A		1	24	17	47	113	33	1	9	17	—	—	—	120	279	106
B		—	—	1	13	15	3	—	—	7	—	—	—	29	32	2
C		—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	15	25	1	—	—
D		—	—	—	—	7	4	—	3	—	—	—	—	2	4	2
E		—	—	—	1	3	2	—	—	—	—	—	—	—	11	—
F		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1

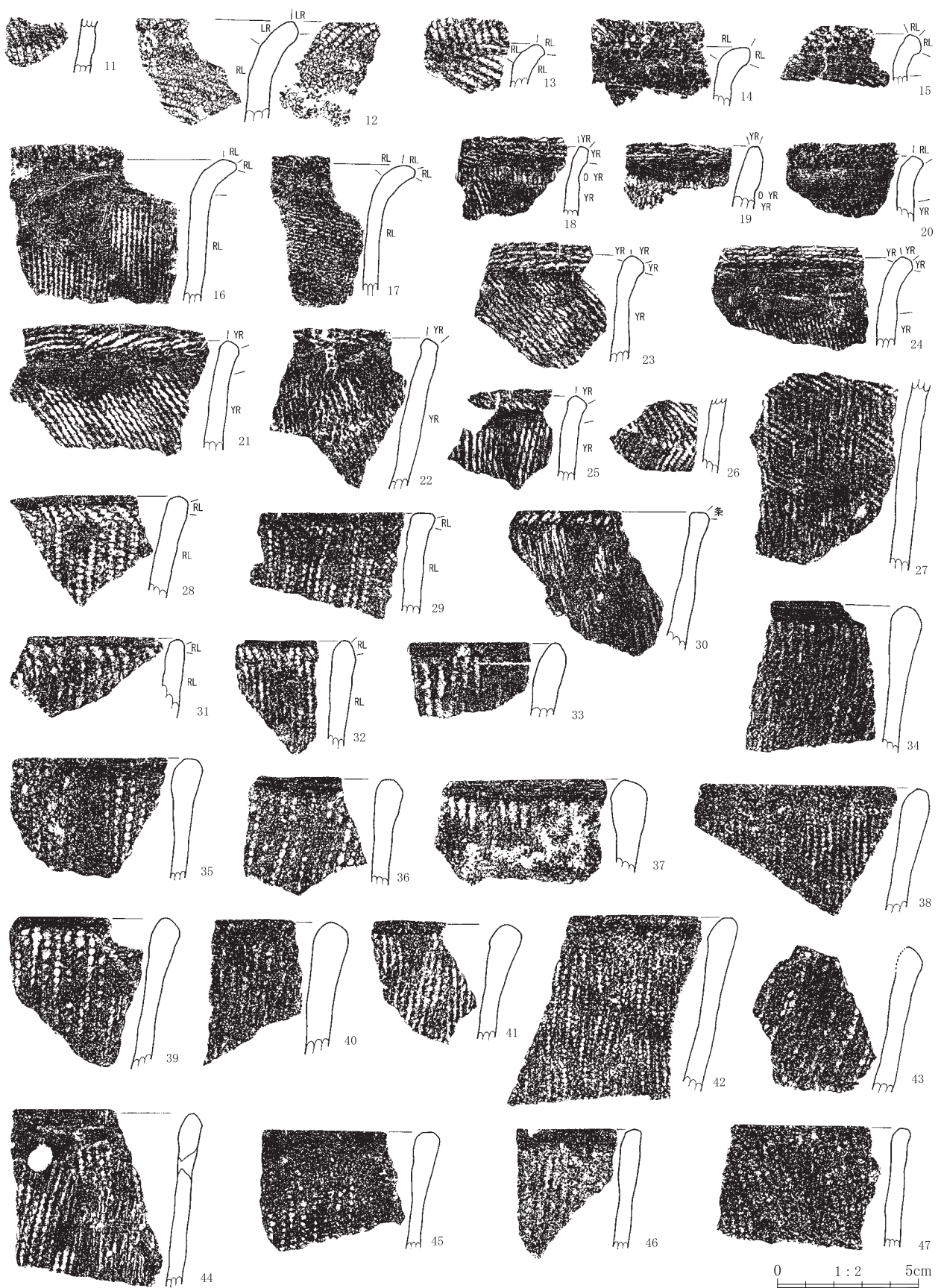
胎土	型式	浮・興	大木	五領ヶ台II	井戸尻	大木8a	加曾利E2	加曾利E3	加曾利E4	堀之内1	堀之内2	加曾利B	土製品
A		42	5	2	2	3	1	1	1	2	5	3	27
B		8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
C		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
D		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
E		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
F		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

各種土器の縄文原形別点数

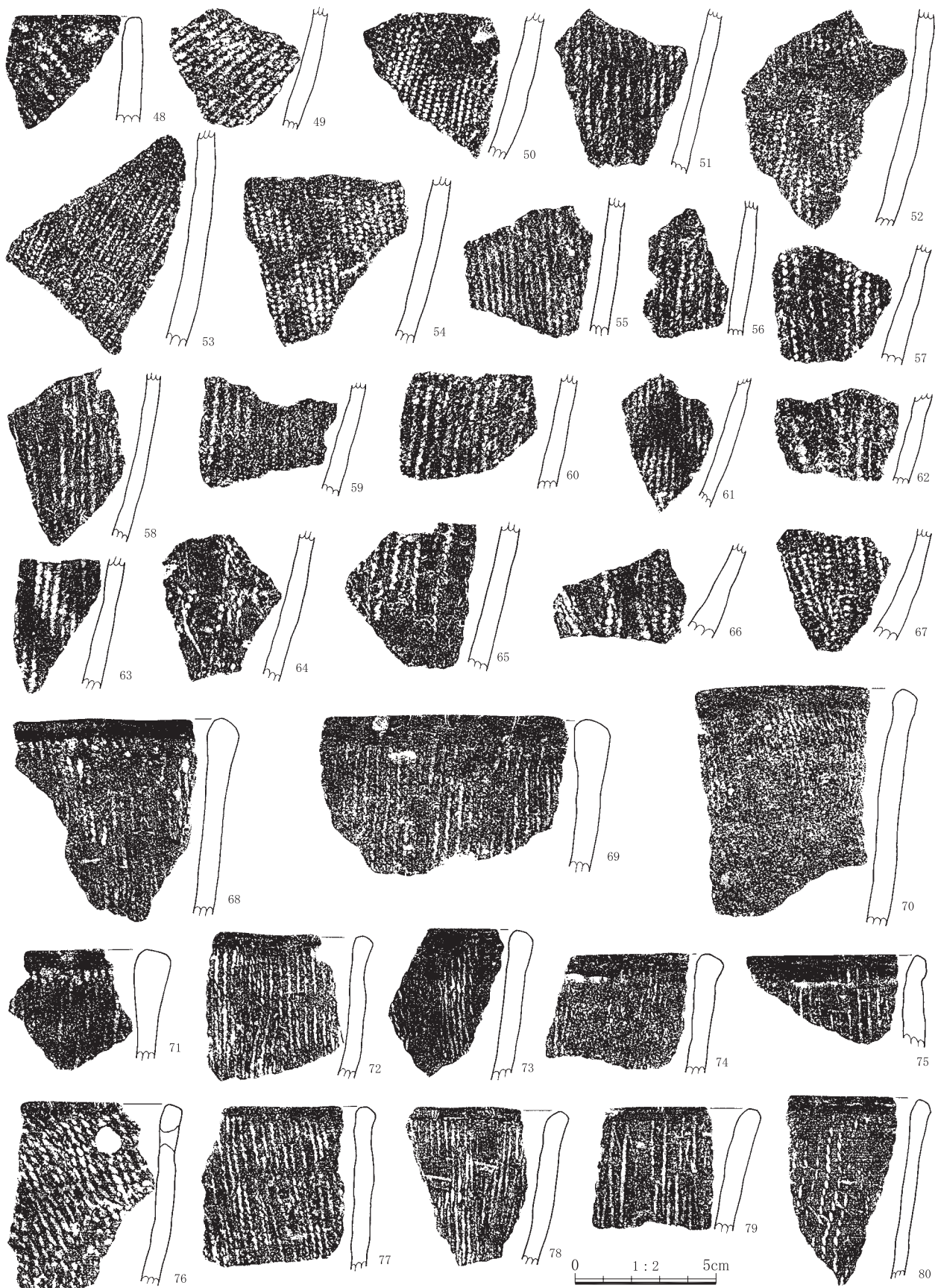
多縄文系		井草I式			井草II式			夏島式									
分類	9b	分類	2ab	2b	9b	分類	2b	9a	9b	18	19b	合計	2b	9a	9b	18	19b
合計	1	合計	2	21	1	合計	6	1	11	合計	30	4	9	3	14		
稲荷台式				稲荷原式			東山式		押型文系		沈線文系						
分類	2b	9a	9b	18	19b	分類	9a	9b	18	分類	18	分類	18				
合計	18	10	45	53	12	合計	3	18	21	合計	2	合計	12	合計	24		
条痕文系		花積下層式				黒浜式											
分類	18	分類	4a	4c	4cd	18	分類	2a	2b	7b	7f	12a	14cd	18			
合計	20	合計	1	4	9	1	合計	4	2	4	1	7	1	6			
諸磯a式								諸磯b式									
分類	2a	2ab	2b	5b	7a	7b	7c	18	分類	1a	2a	2b	6a	11a	17	18	
合計	14	2	75	1	6	3	1	51	合計	2	50	129	3	5	28	110	
諸磯c式				浮島・興津式系			大木5式		五領ヶ台II式		井戸尻式						
分類	2a	2b	6a	18	分類	2b	18	20a	分類	2a	分類	2a	分類	18			
合計	3	7	17	84	合計	10	38	4	合計	5	合計	2	合計	2			
大木8a式		加曾利E2式		加曾利E3式		加曾利E4式		堀之内1式		堀之内2式							
分類	1b	2b	分類	2a	分類	2a	分類	2a	分類	18	分類	2a	2b	18			
合計	2	1	合計	1	合計	1	合計	1	合計	2	合計	2	1	2			
加曾利B式			土製円盤					土製品									
分類	2a	2b	18	分類	2a	2b	9a	9b	17	18	分類	18					
合計	1	1	1	合計	4	12	1	5	2	4	合計	2					



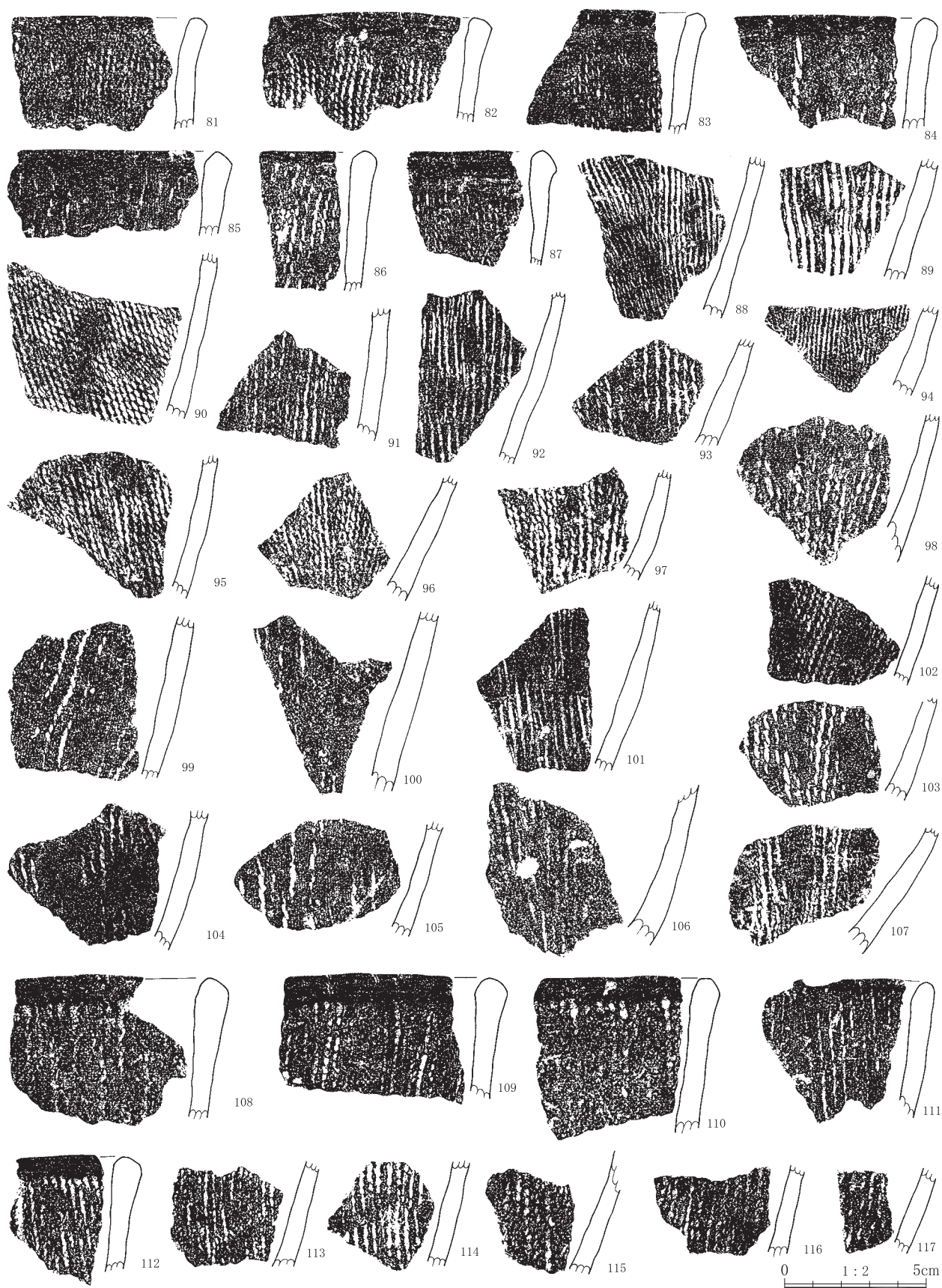
第 216 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (1)



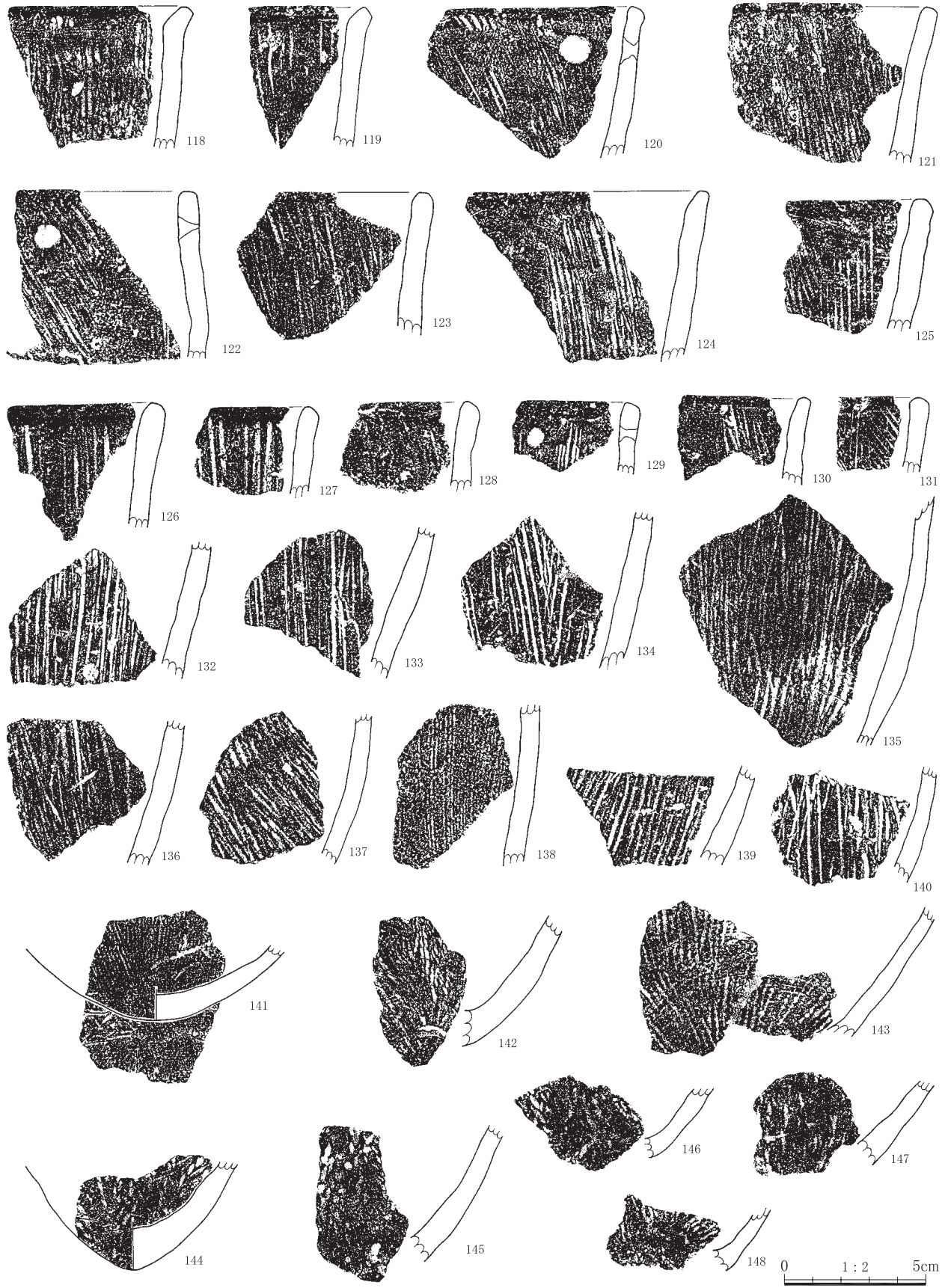
第217図 2~4区包含層出土の土器(2)



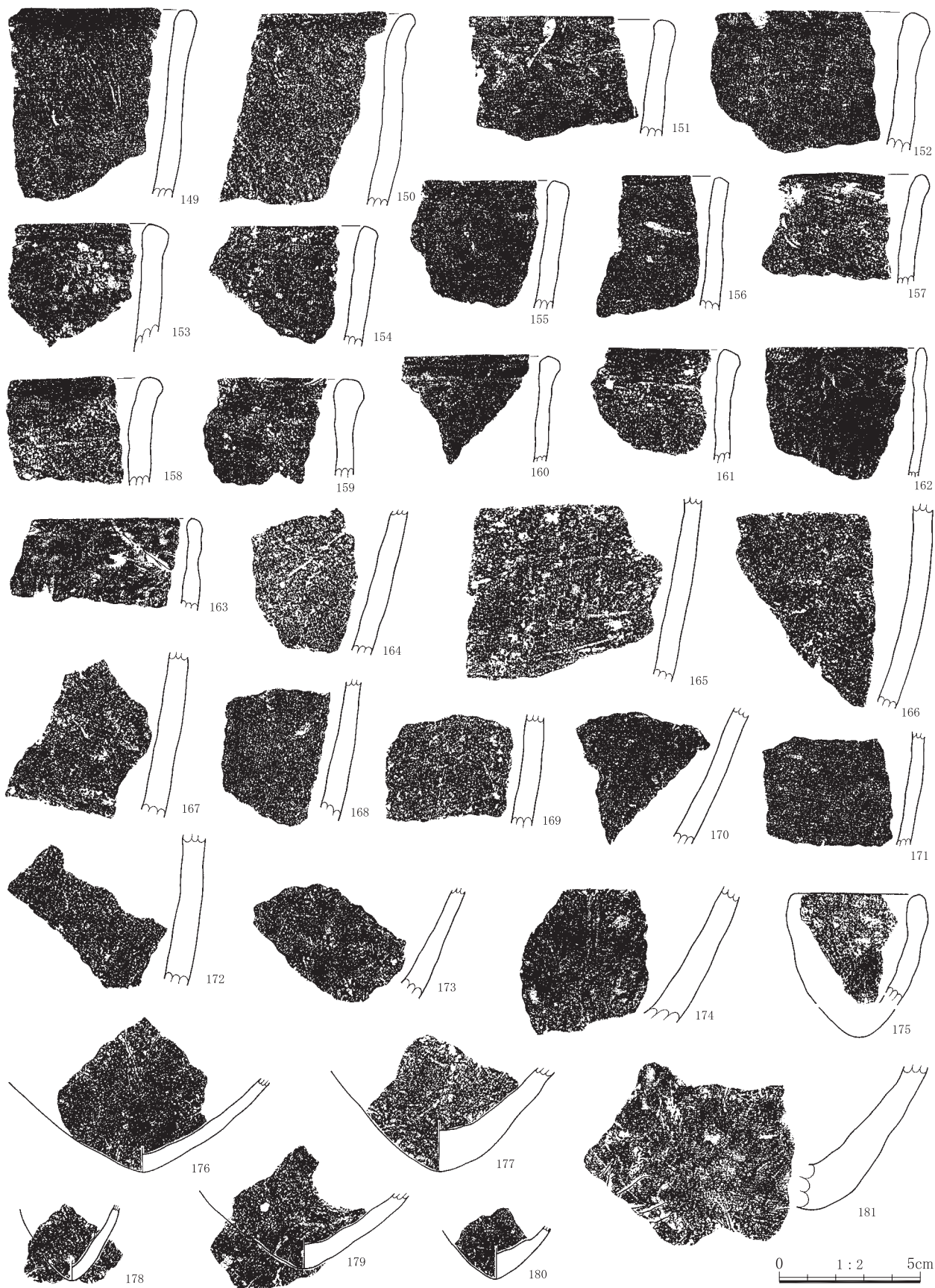
第218図 2～4区包含層出土の土器(3)



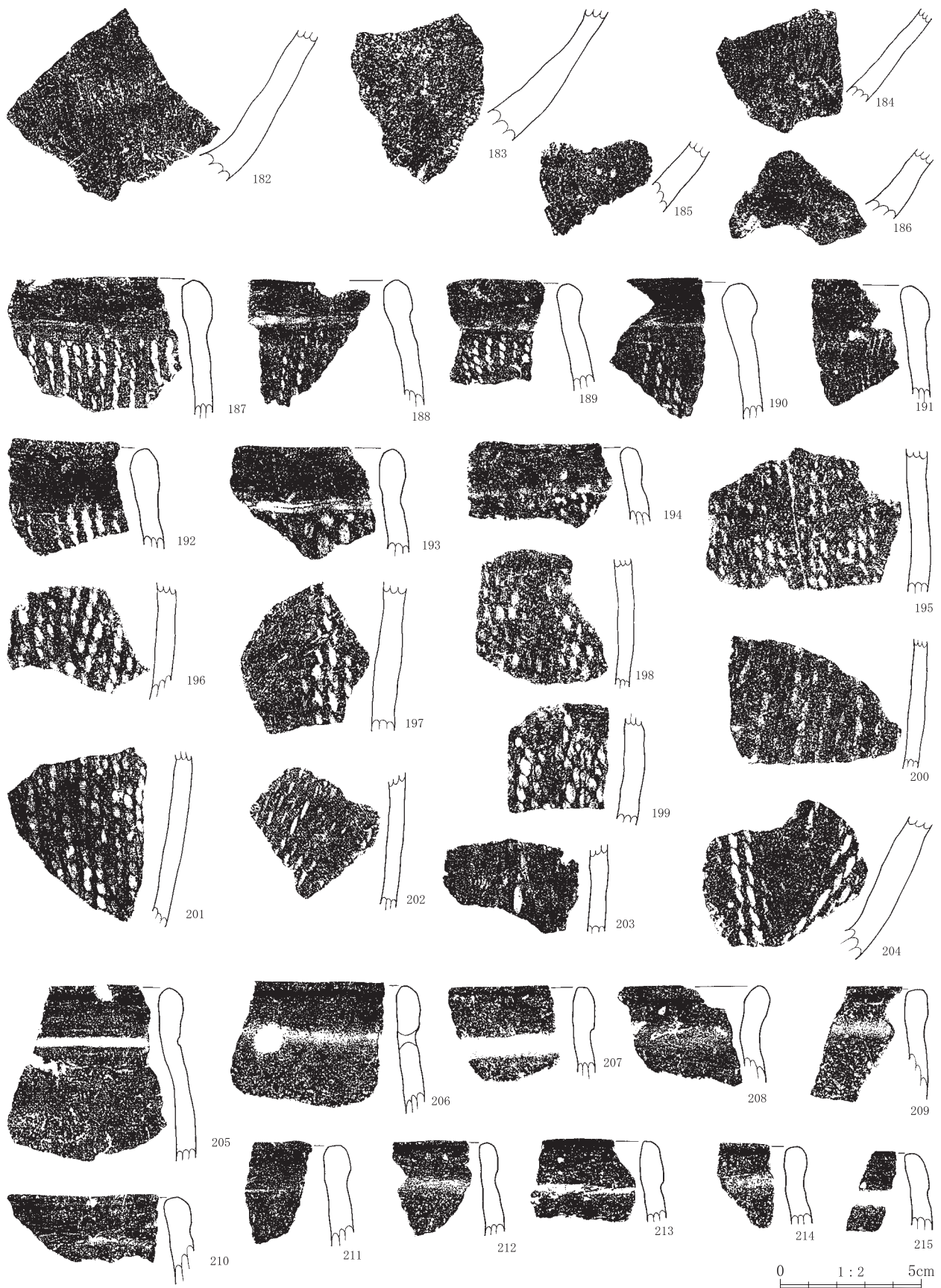
第 219 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (4)



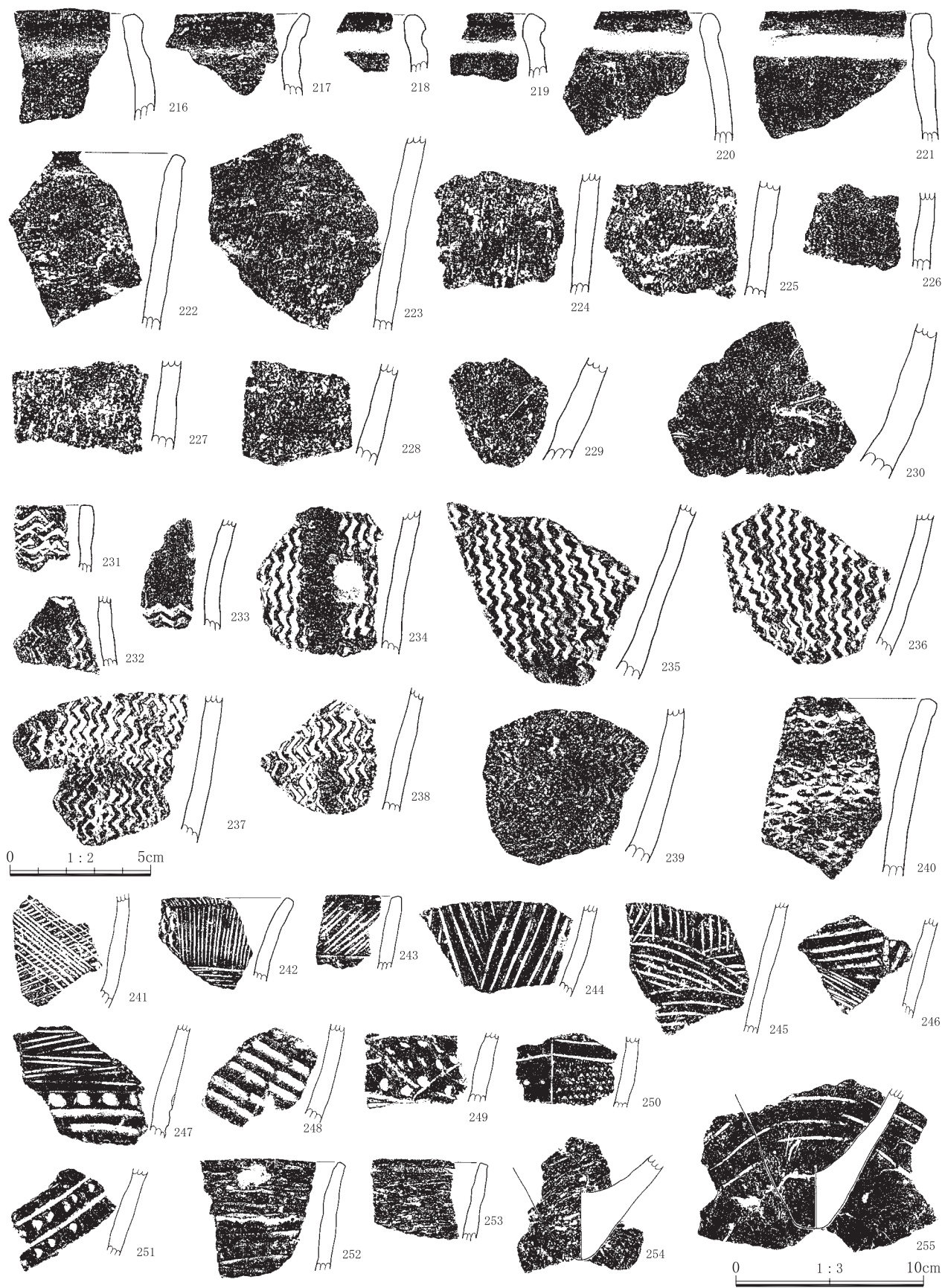
第220図 2～4区包含層出土の土器(5)



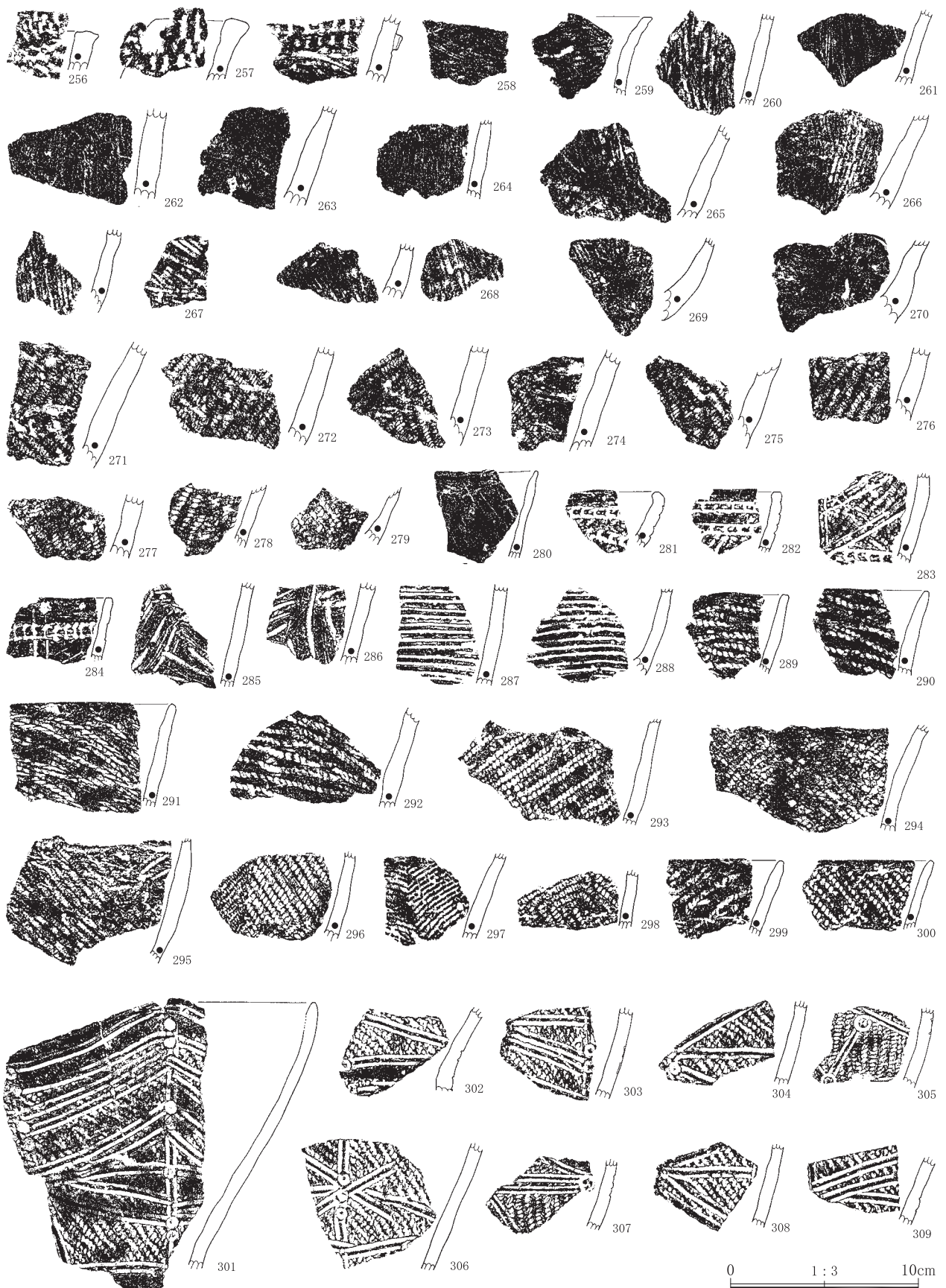
第 221 図 2～4 区包含層出土の土器 (6)



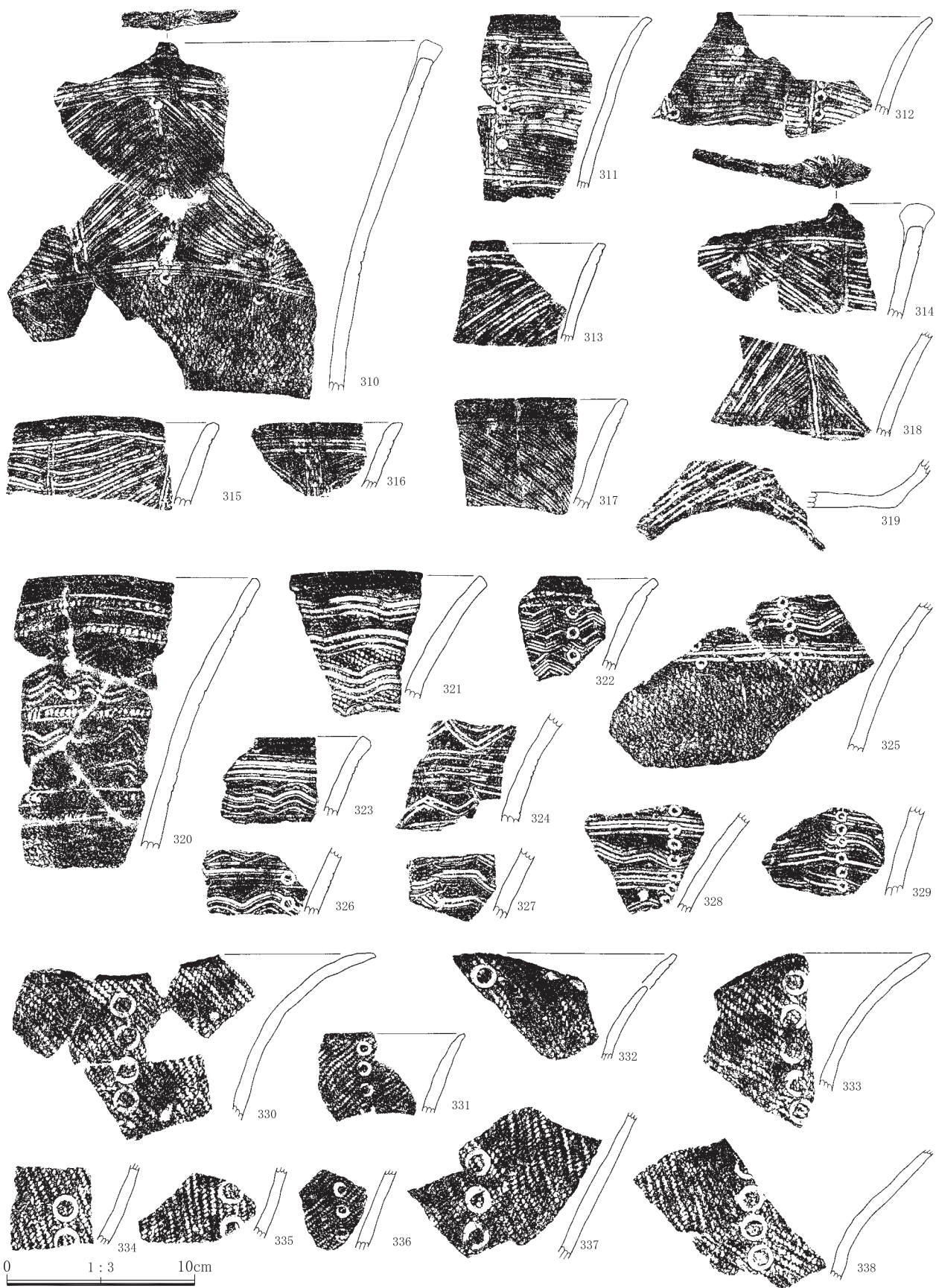
第222図 2～4区包含層出土の土器(7)



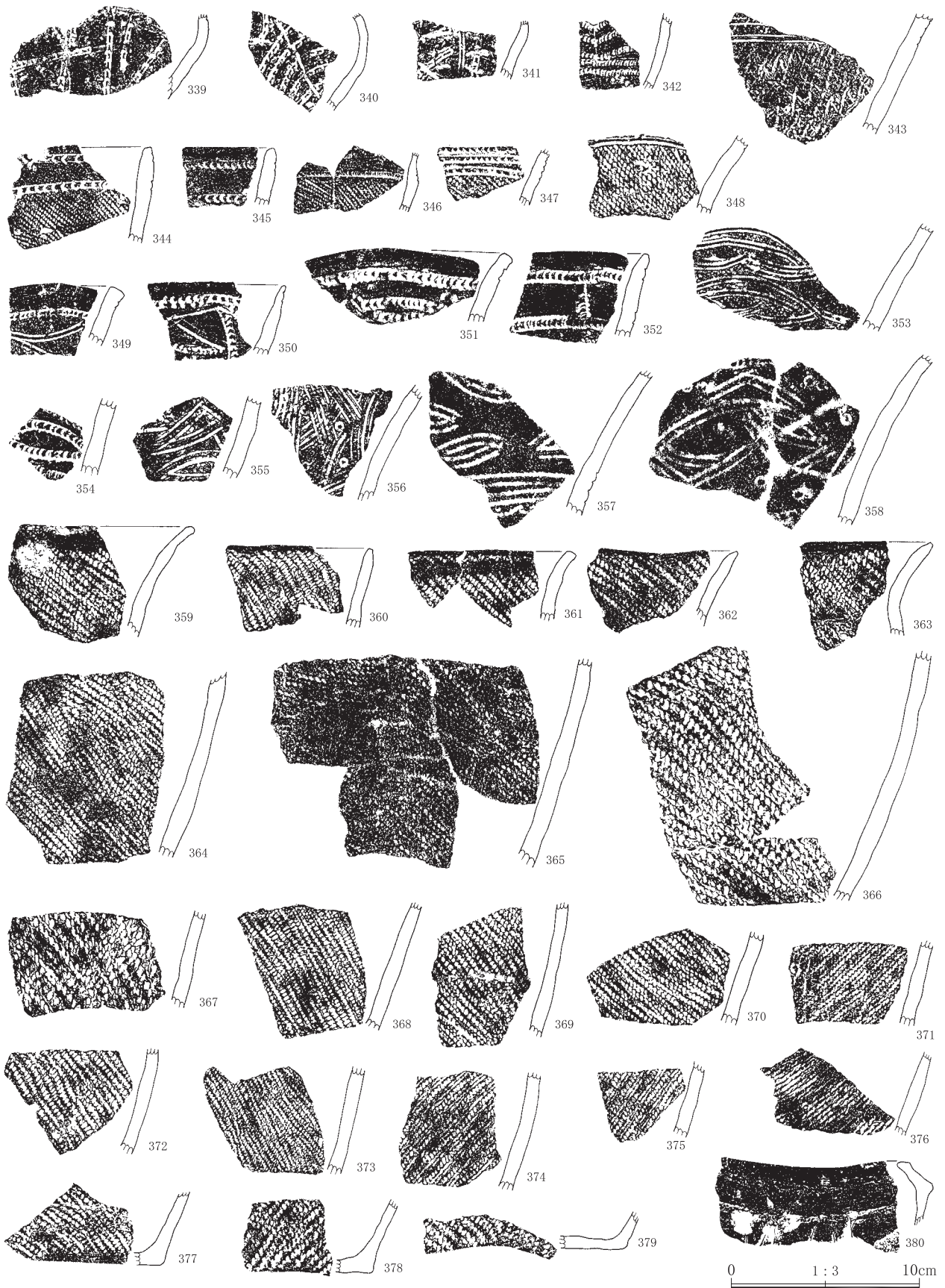
第223図 2～4区包含層出土の土器(8)



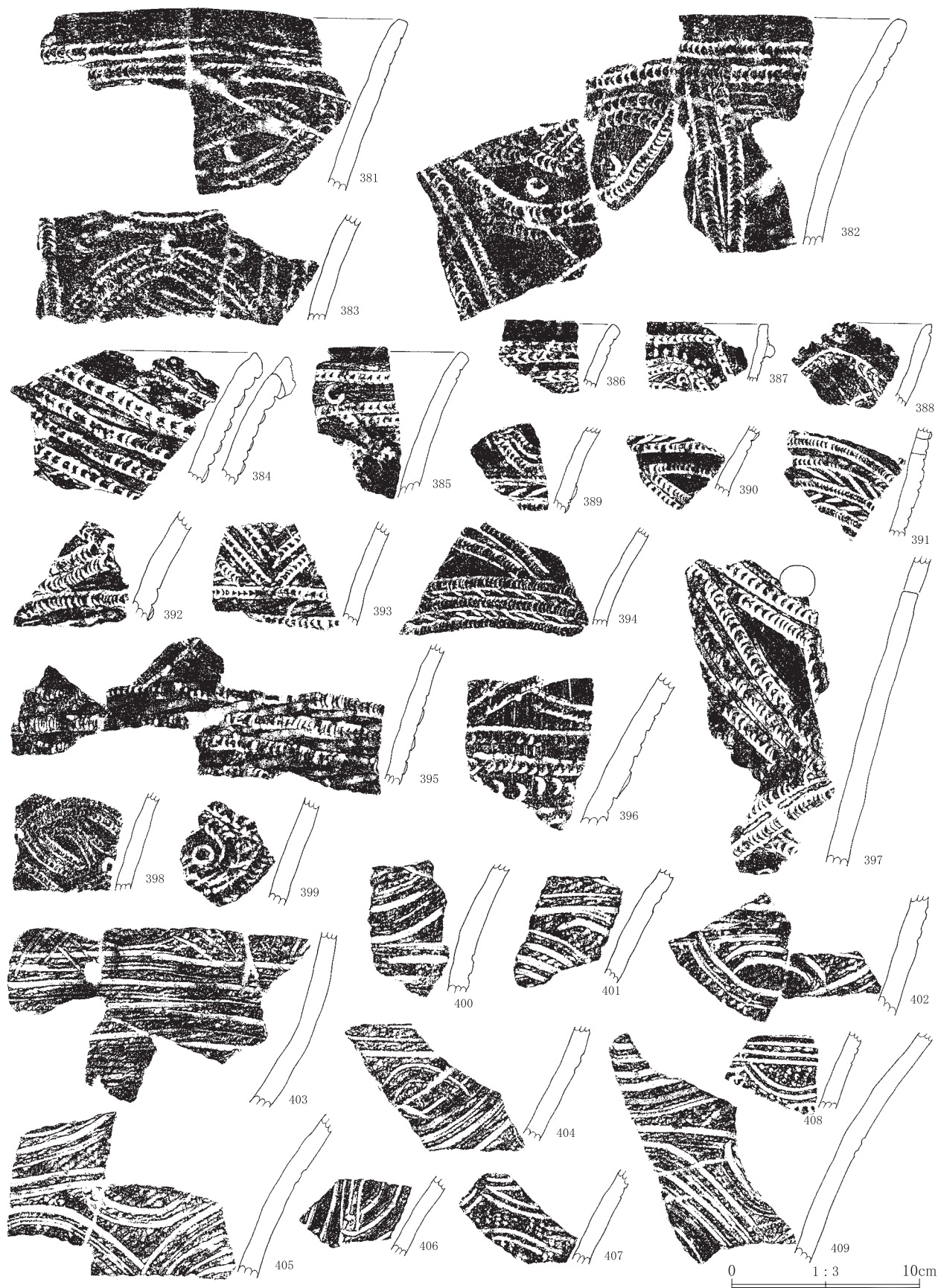
第 224 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (9)



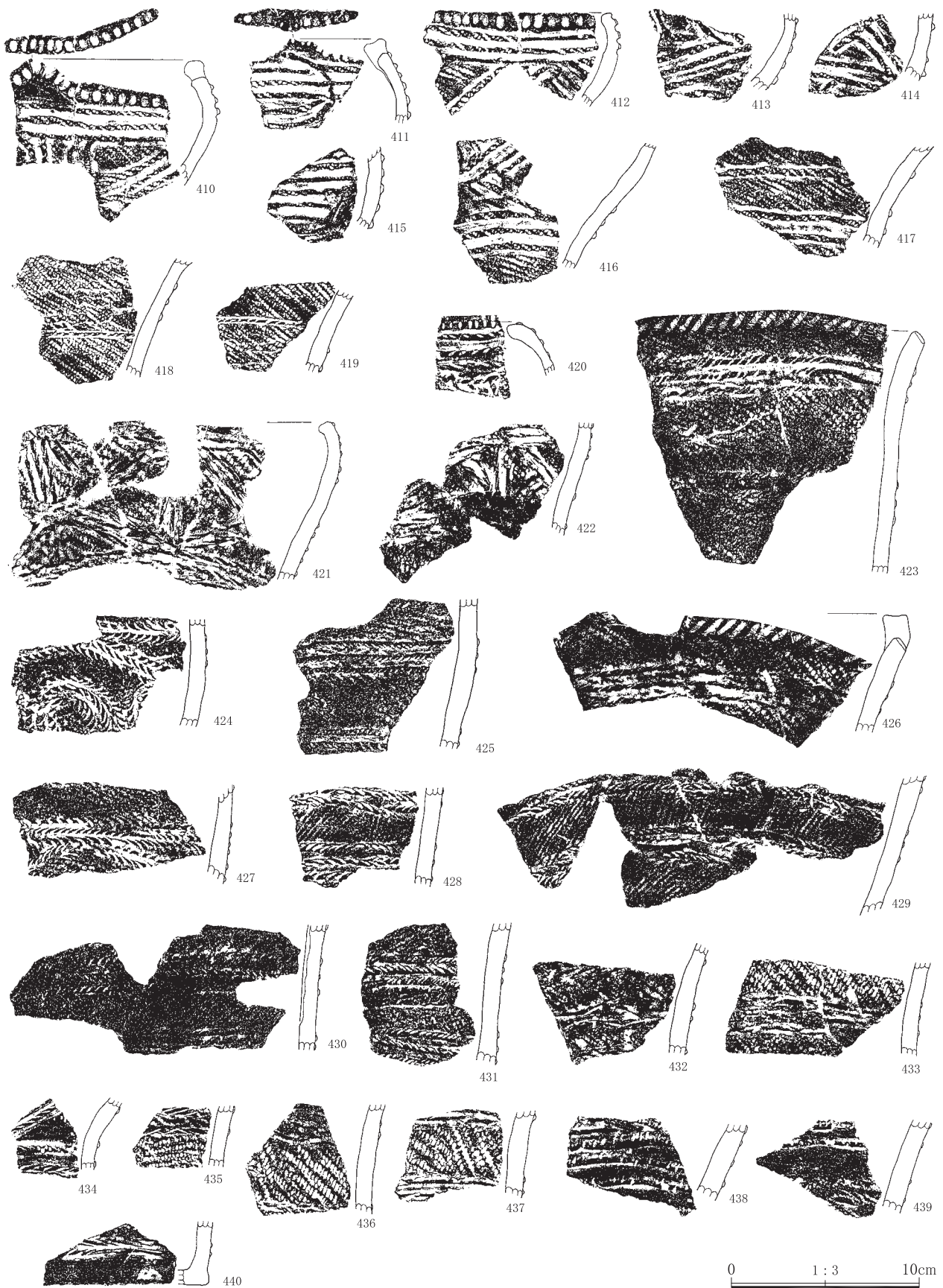
第 225 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (10)



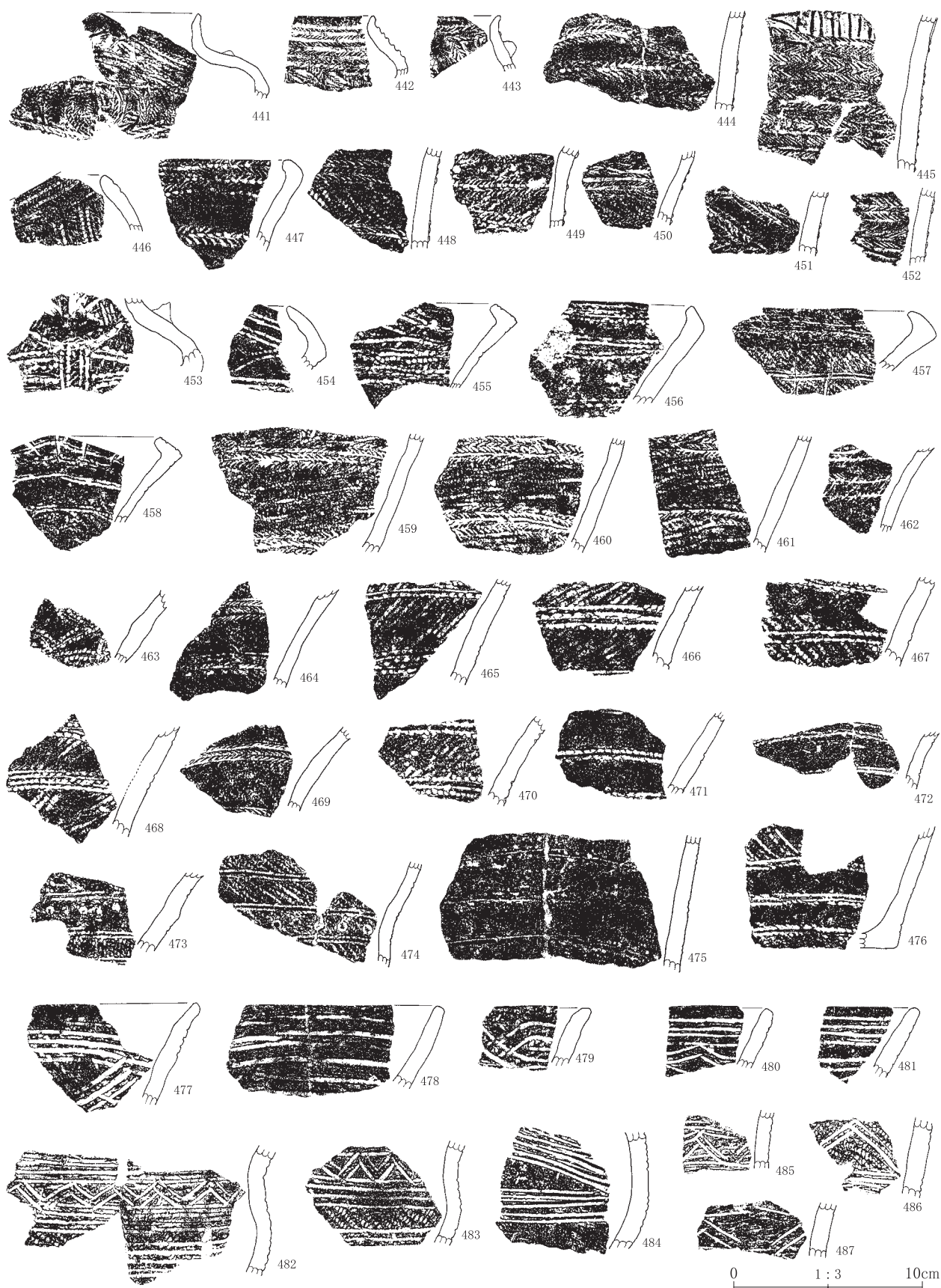
第226図 2～4区包含層出土の土器(11)



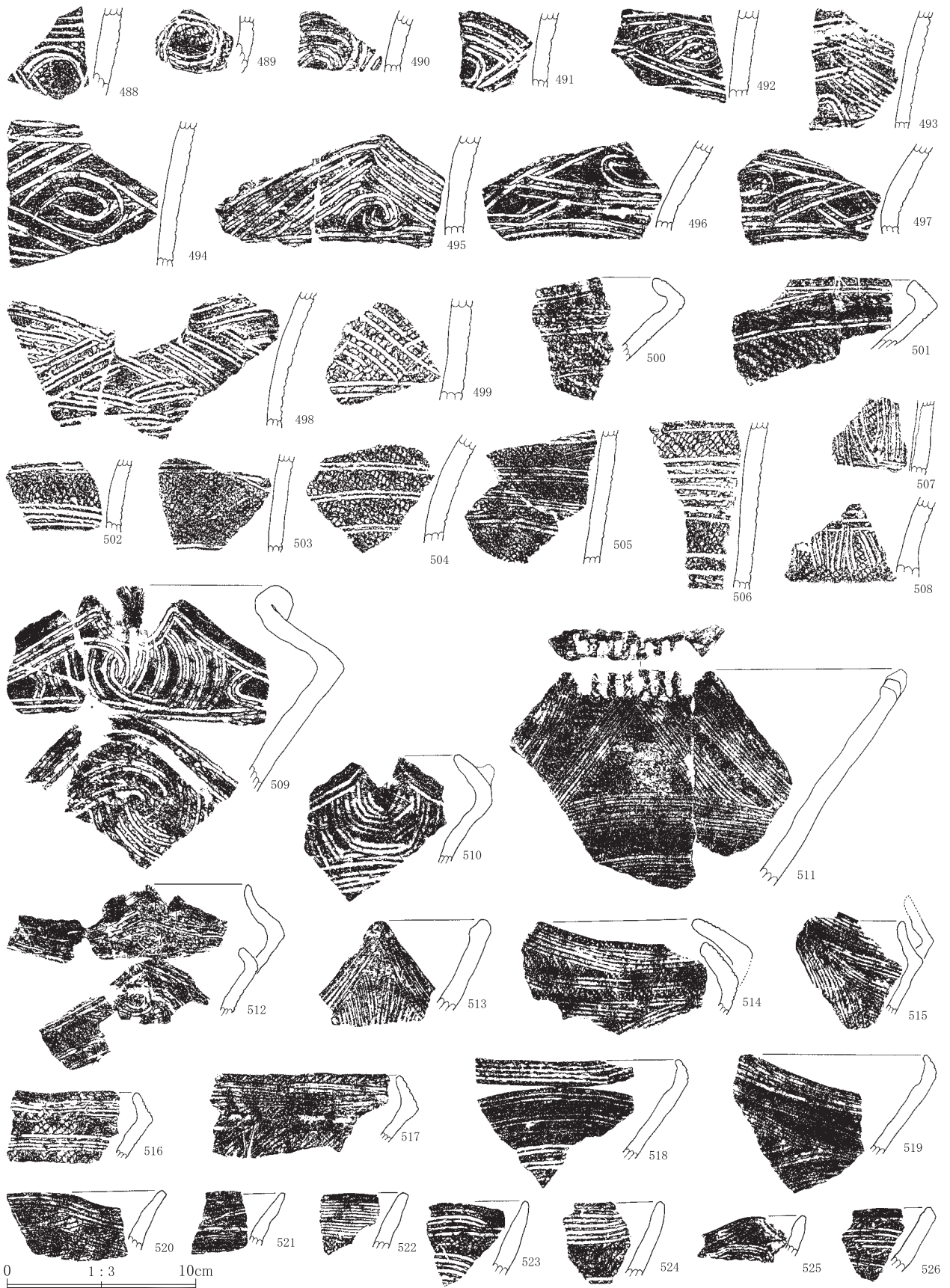
第227図 2～4区包含層出土の土器(12)



第 228 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (13)

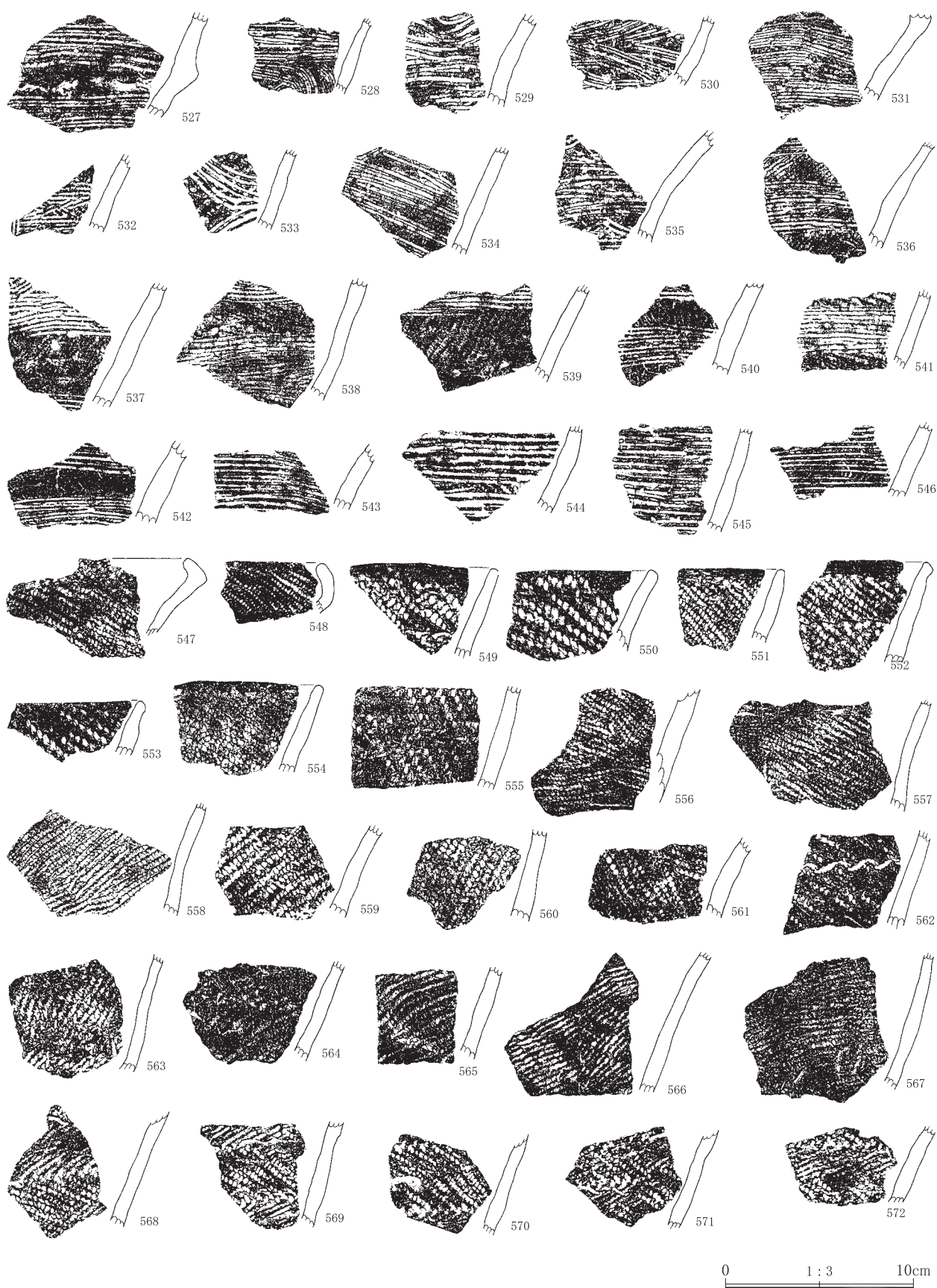


第229図 2～4区包含層出土の土器(14)

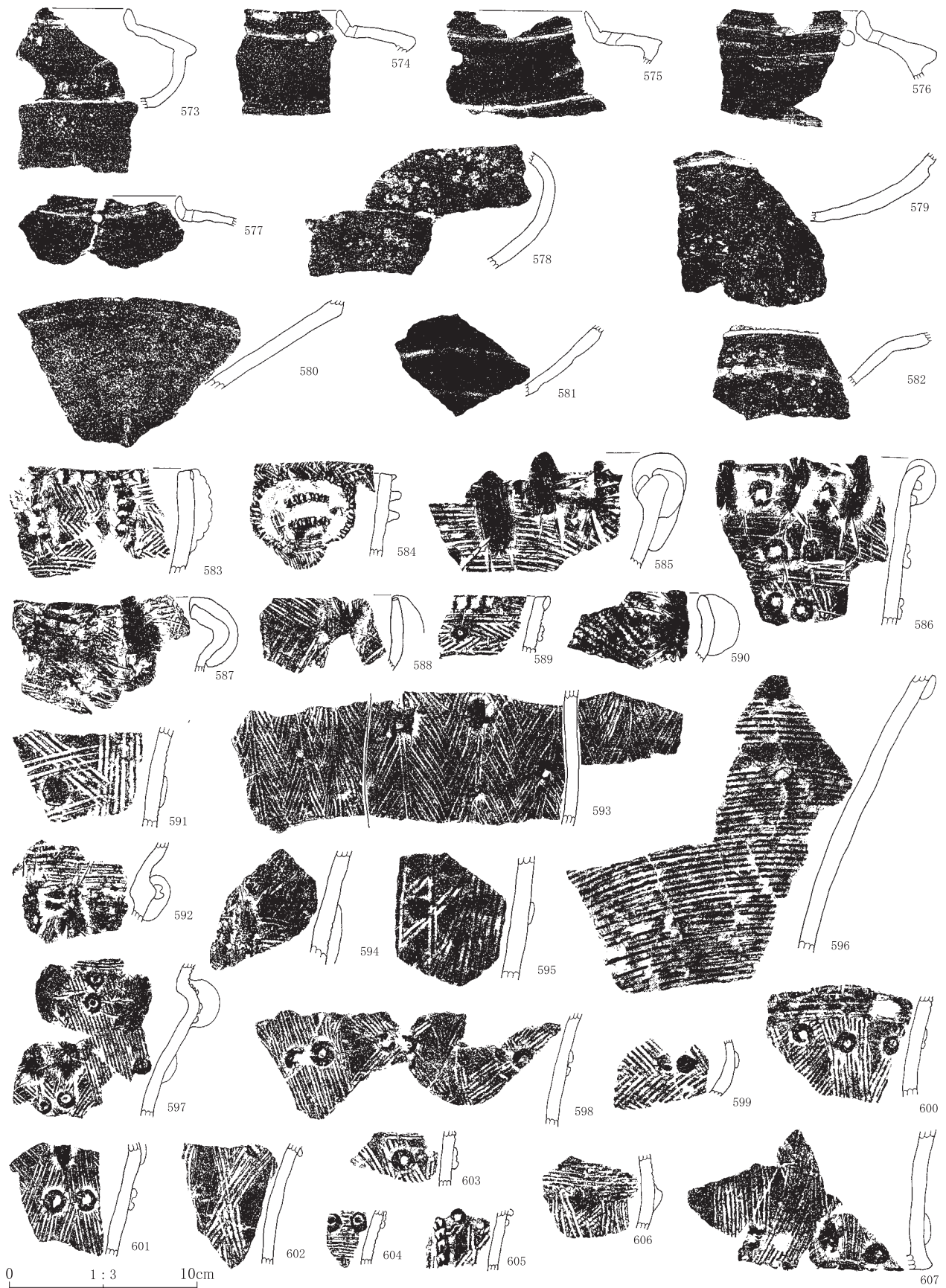


第230図 2～4区包含層出土の土器(15)

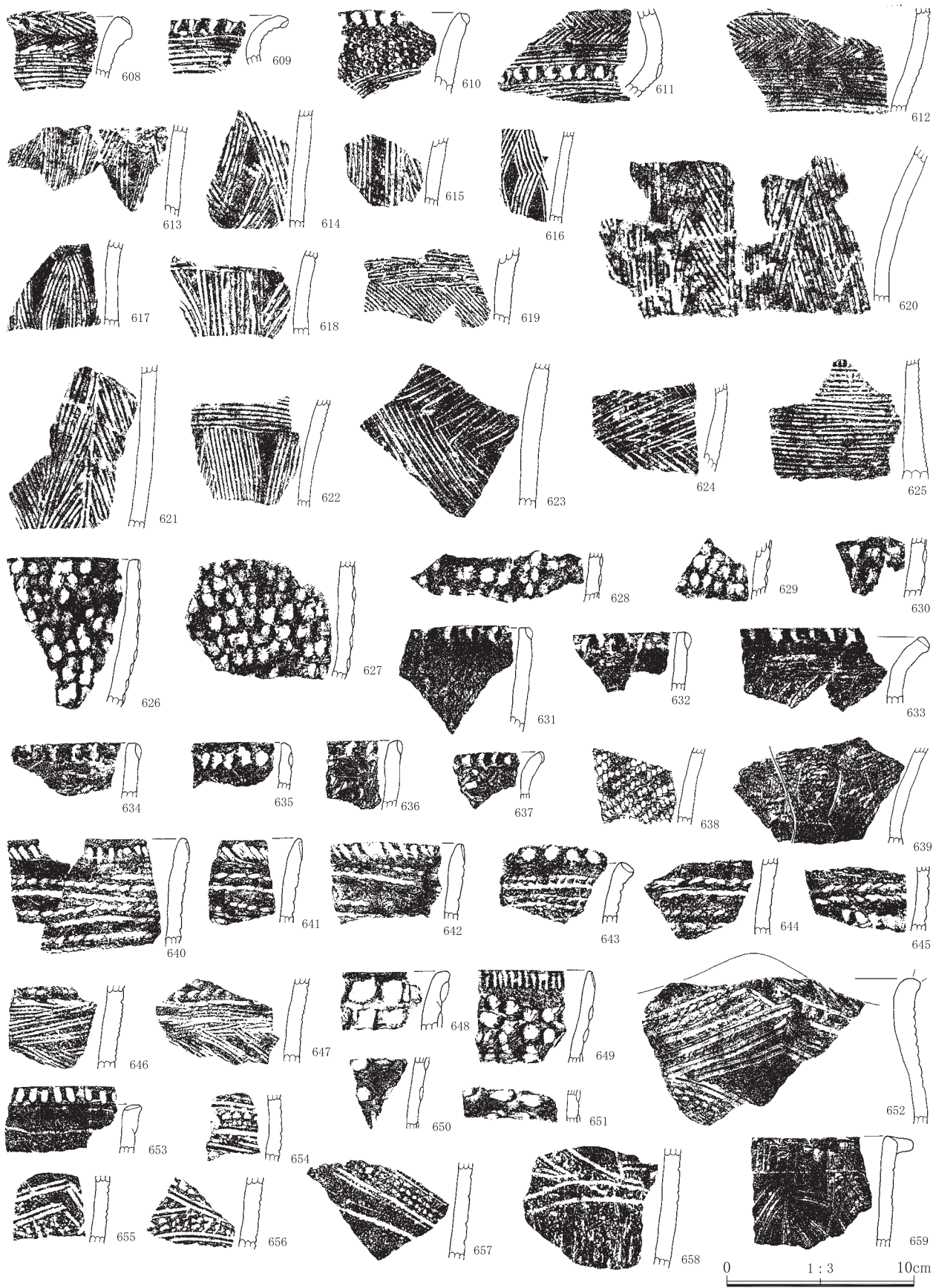
II 今井三騎堂遺跡の調査



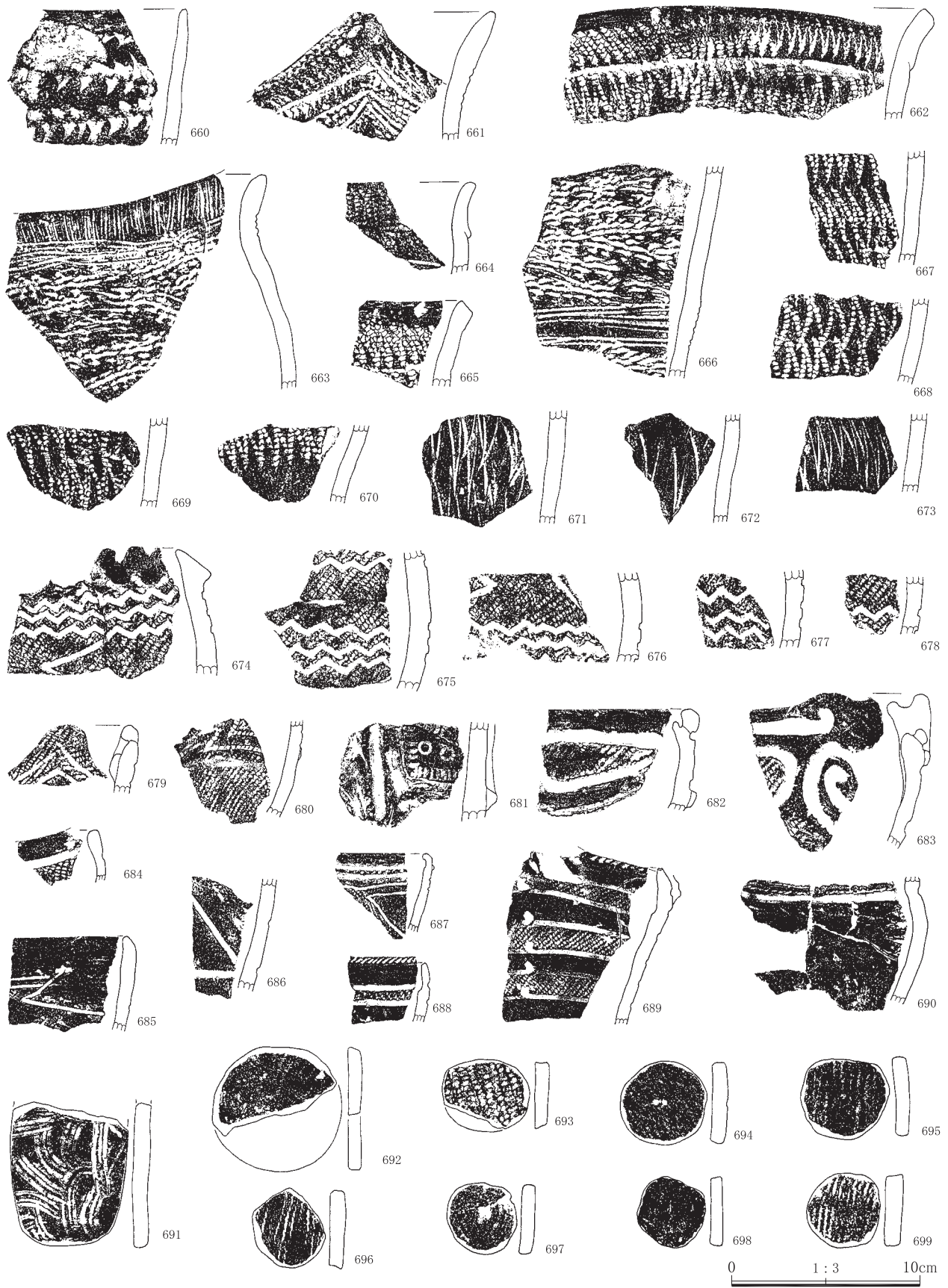
第 231 図 2～4区包含層出土の土器 (16)



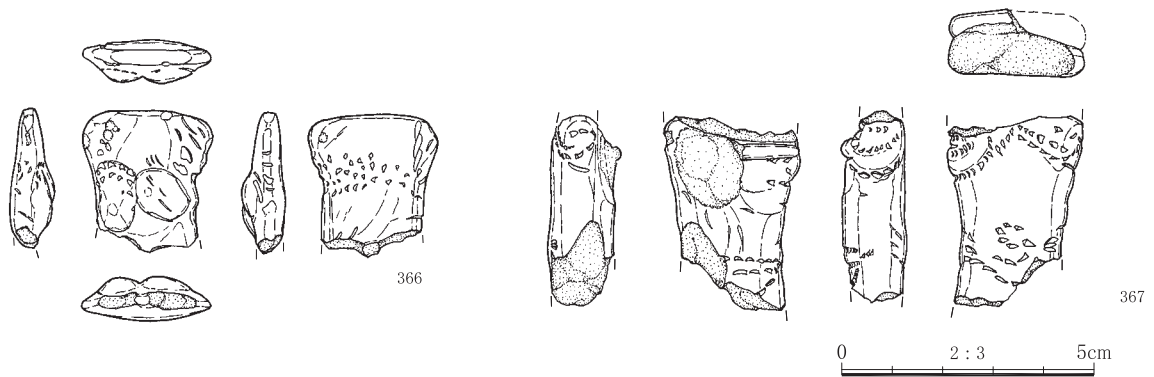
第 232 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (17)



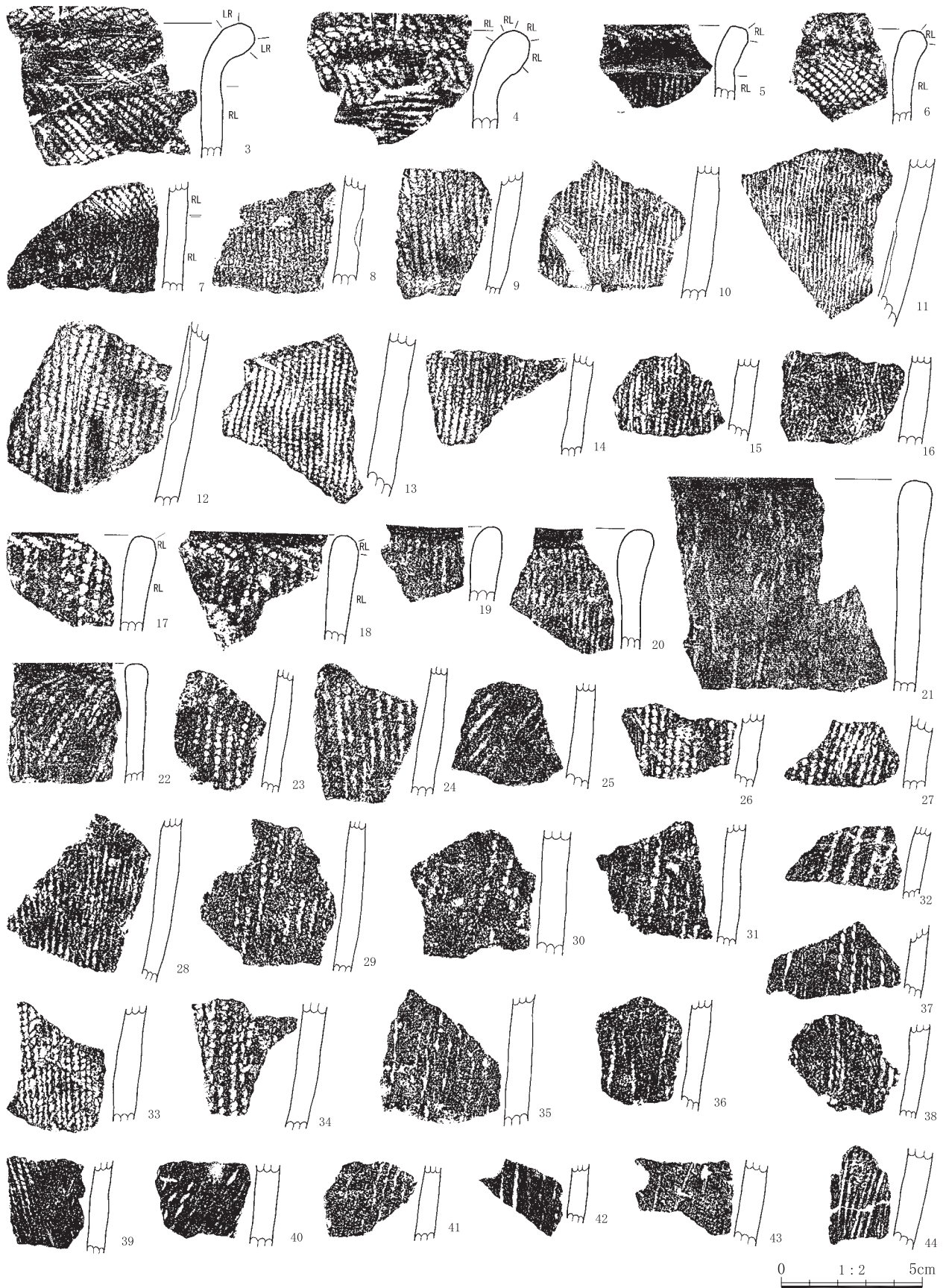
第 233 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (18)



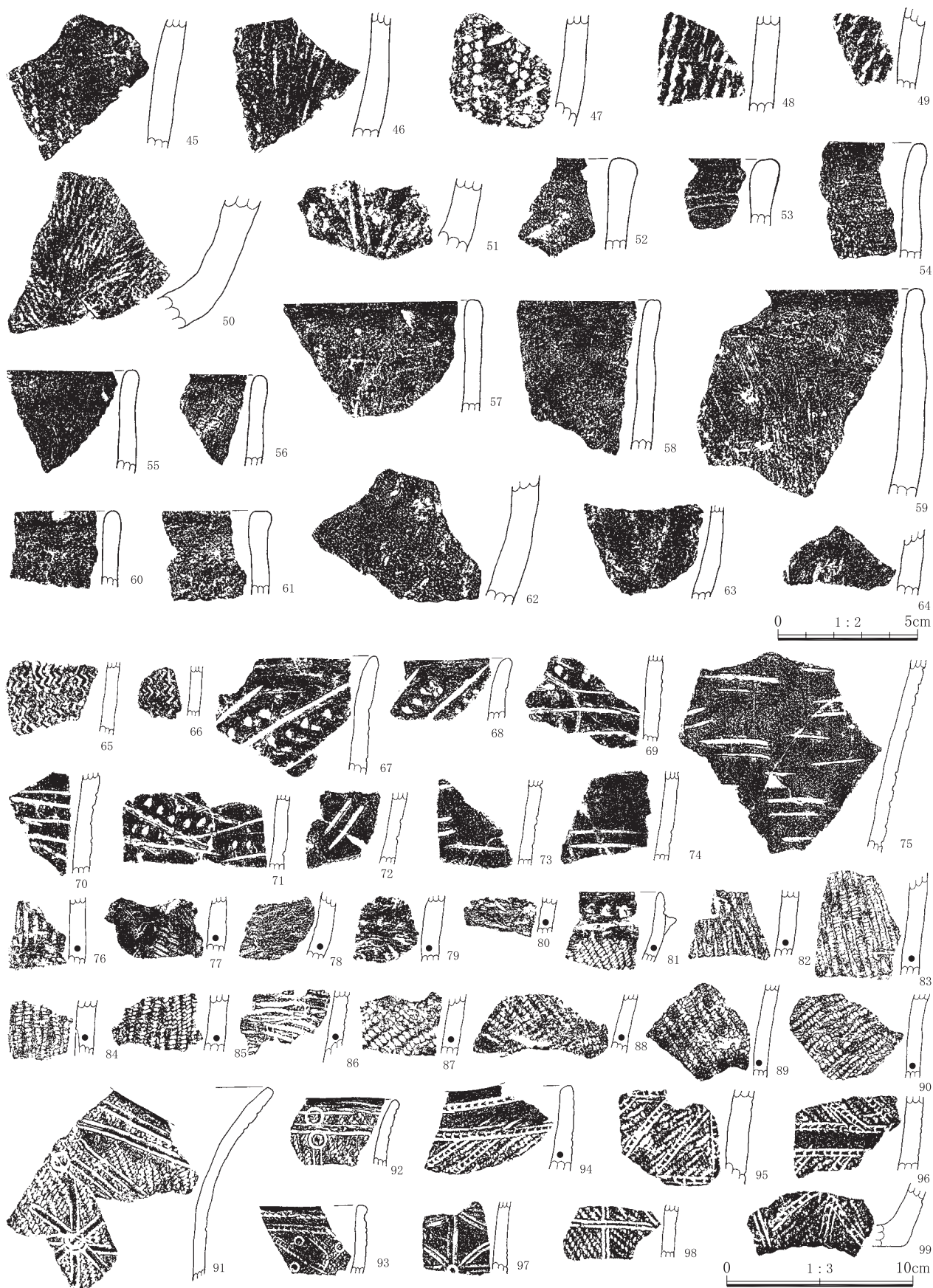
第 234 図 2 ~ 4 区包含層出土の土器 (19)



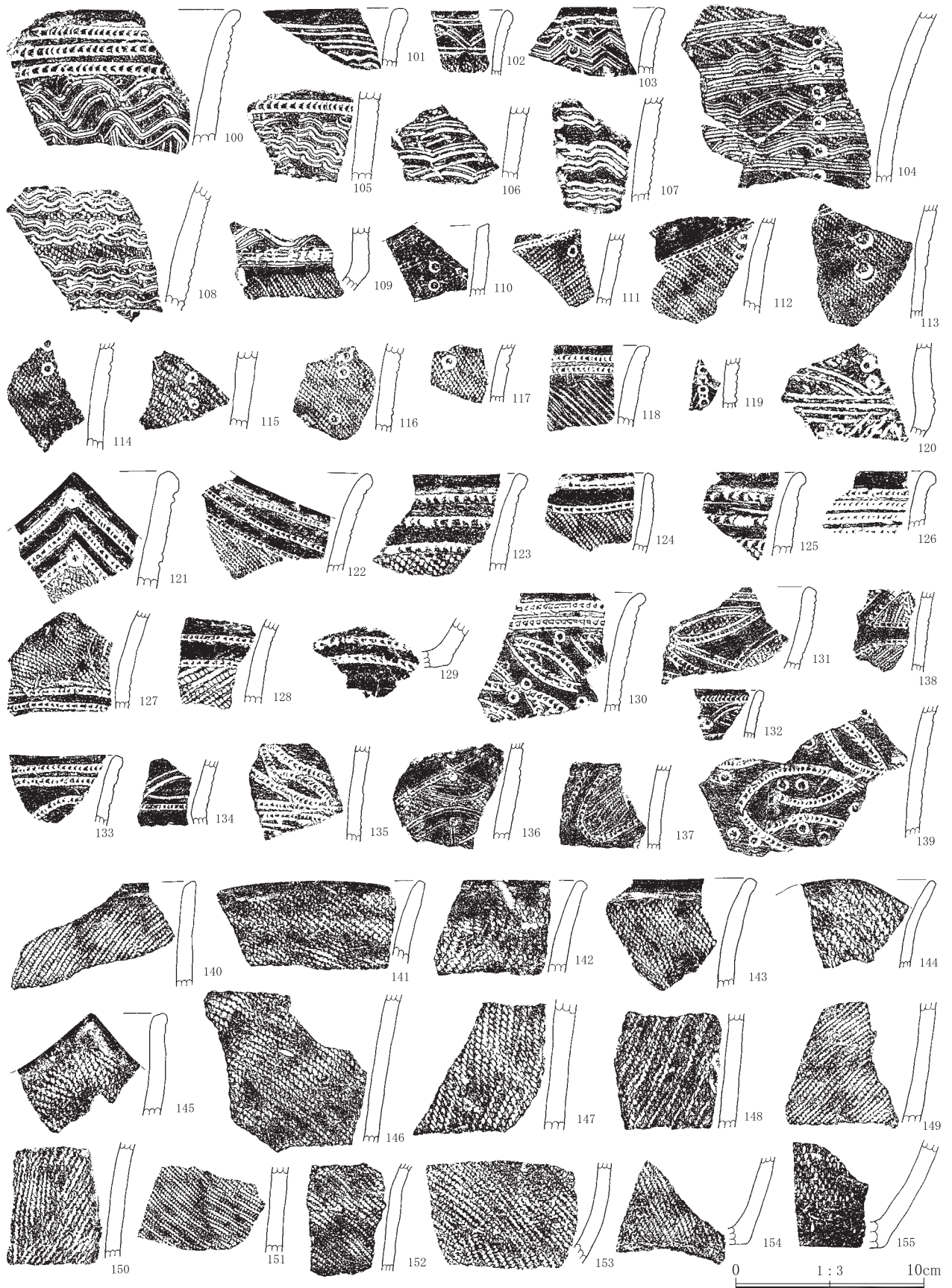
第 235 図 5～6 区包含層出土の土器 (1)



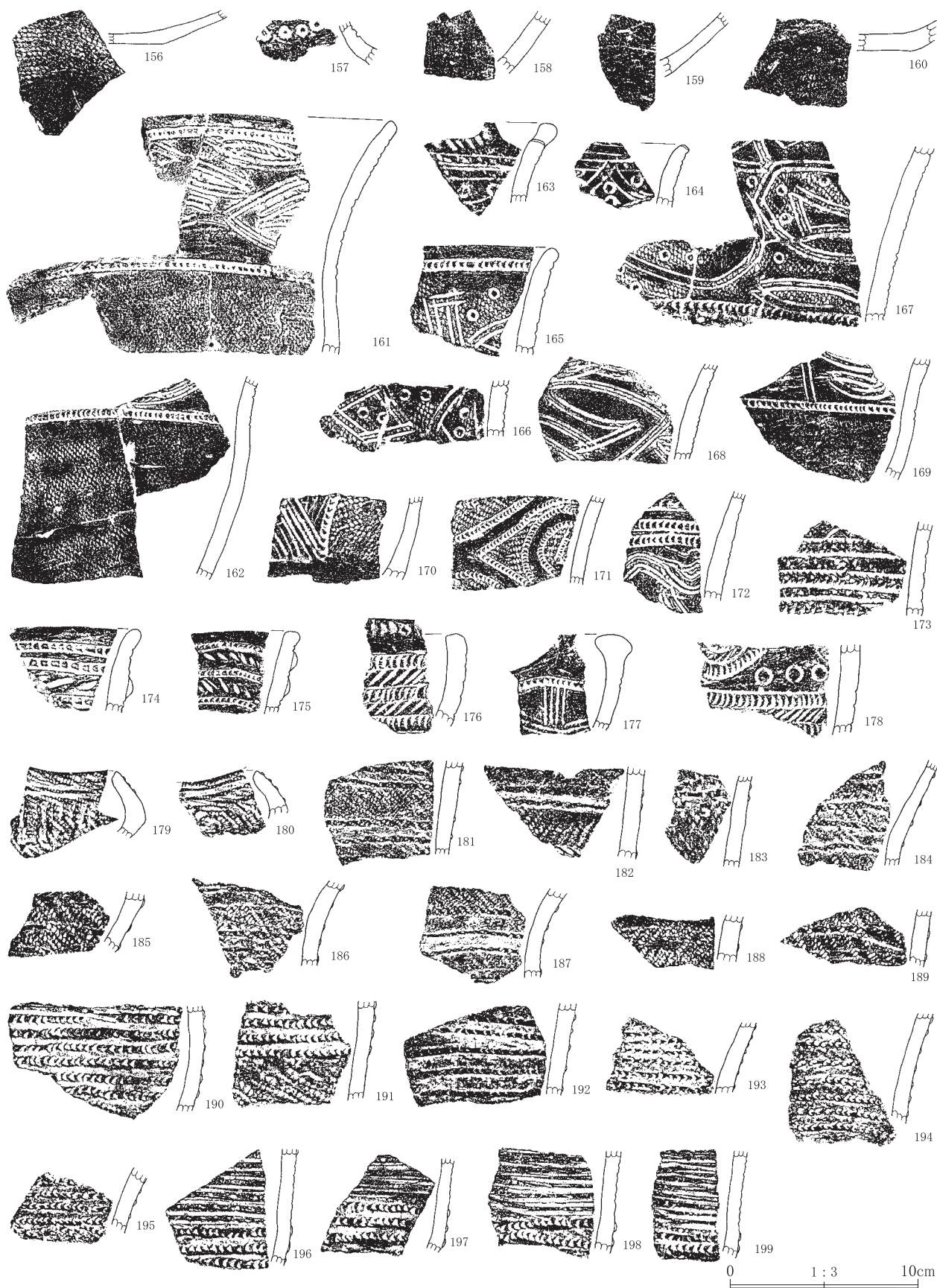
第 236 図 5 ~ 6 区包含層出土の土器 (2)



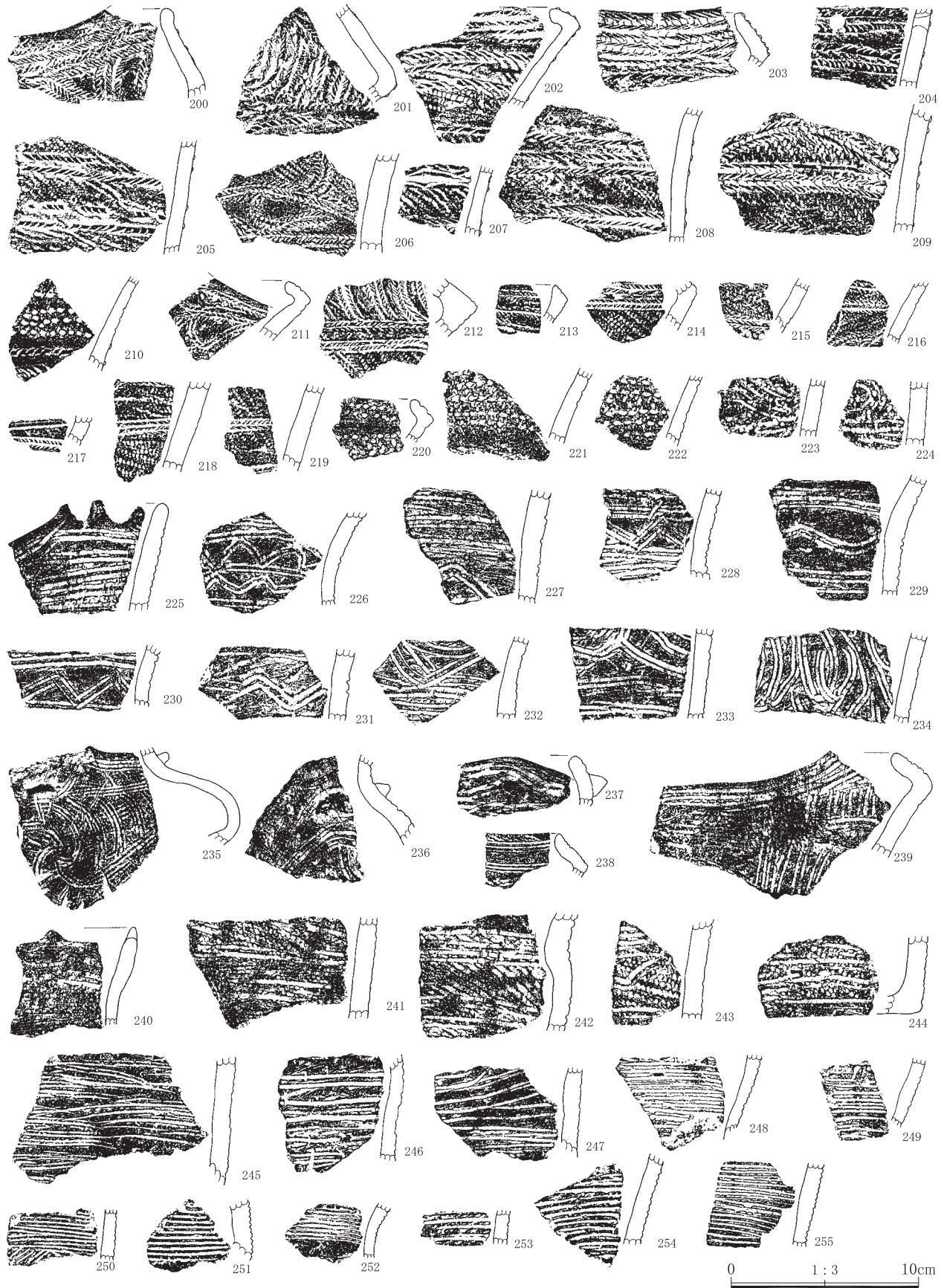
第237図 5～6区包含層出土の土器(3)



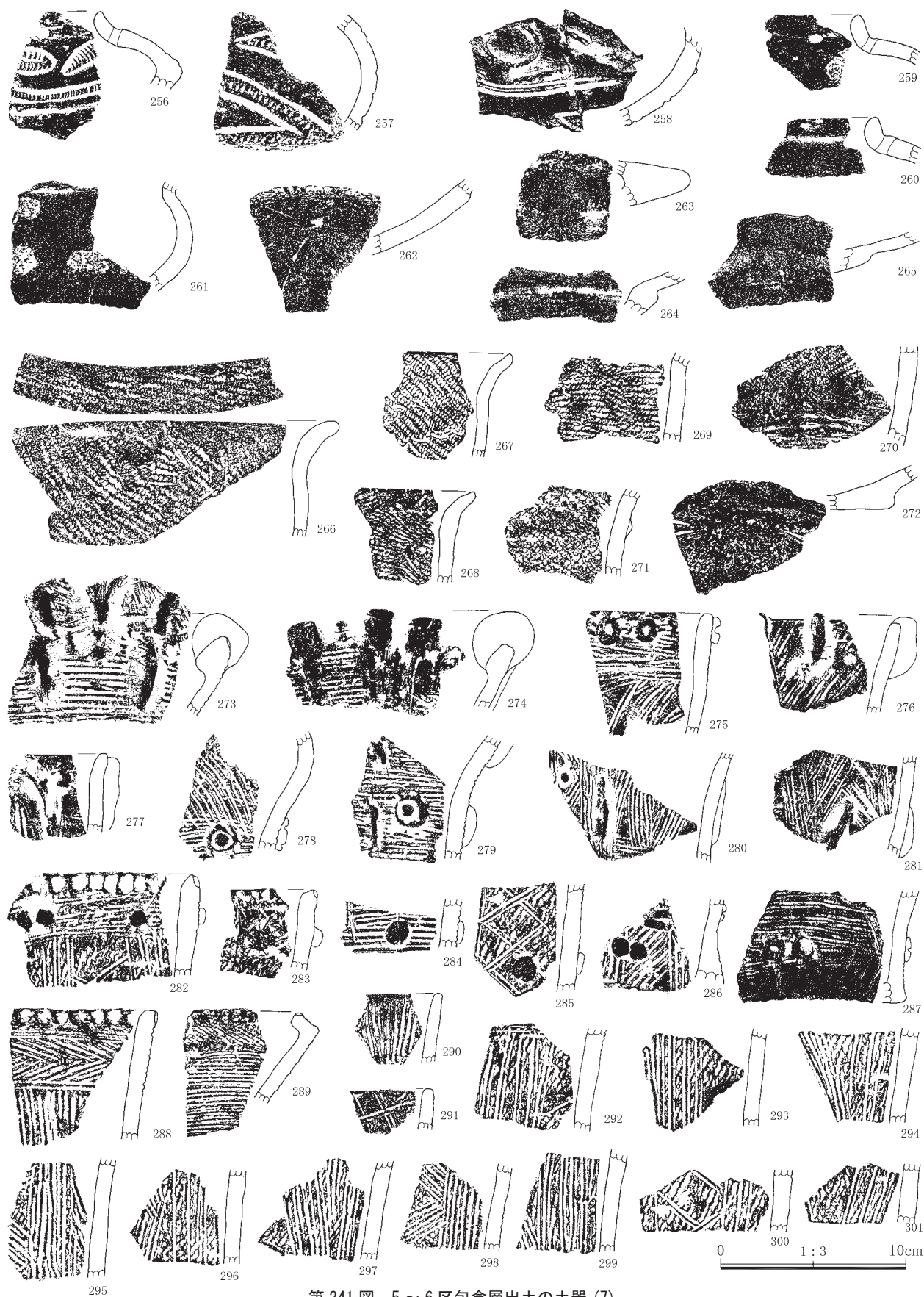
第 238 図 5 ~ 6 区包含層出土の土器 (4)



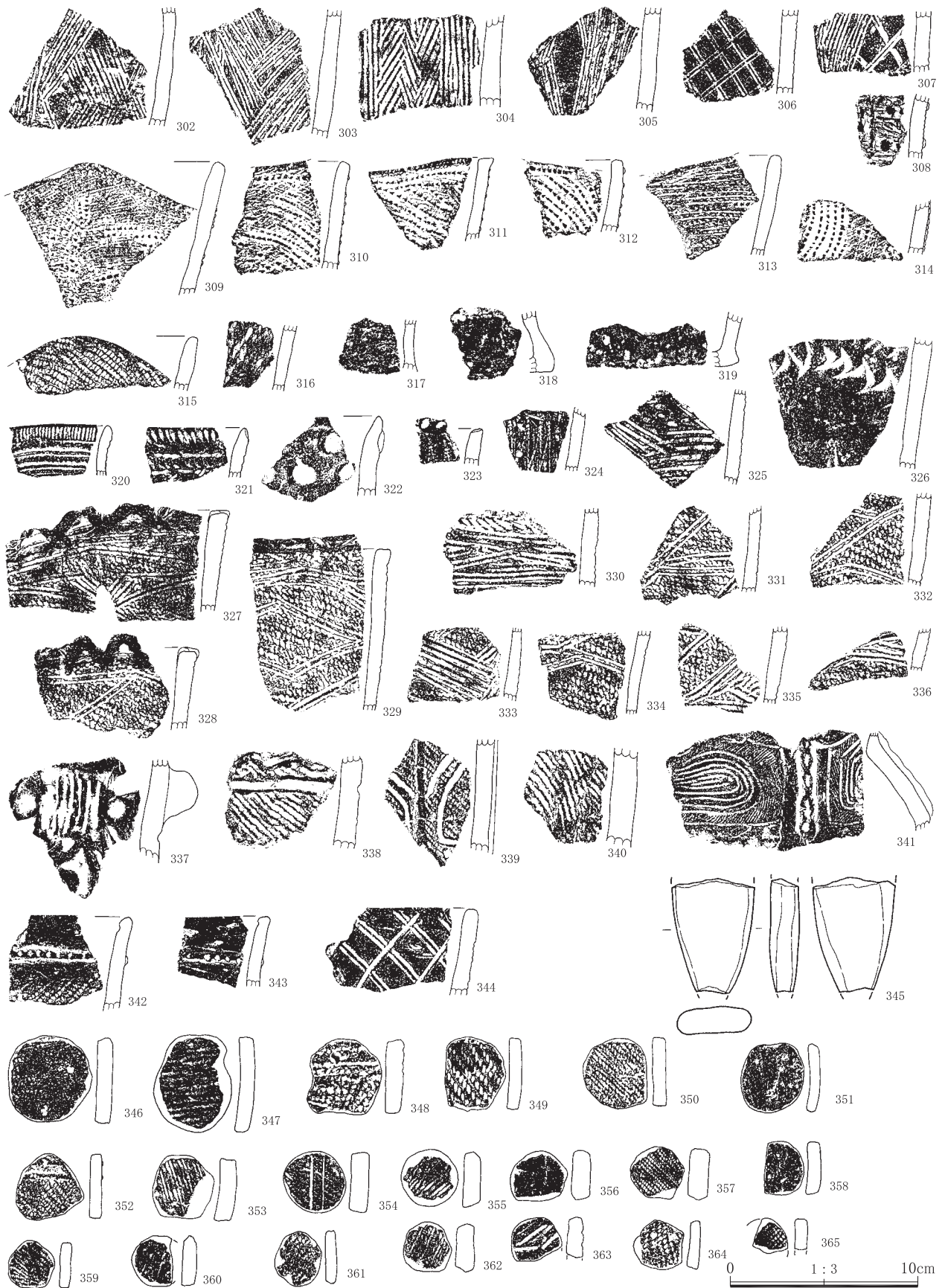
第 239 図 5 ~ 6 区包含層出土の土器 (5)



第240図 5～6区包含層出土の土器(6)



第241図 5～6区包含層出土の土器(7)



第242図 5～6区包含層出土の土器(8)

(3) 出土石器の内容

A. 打製系列

a. 尖頭器 (第 245 図 1～4、第 256 図 1・2)

総数 11 点が存在する。縦長または横長剥片を素材として、両側縁に押圧剥離を施すが、第 256 図 1 を除いて片面を中心としたやや粗雑な加工である。全点ともに、基部または尖頭部を欠損し、体部中位に最大幅を持っている。

石材には、黒色頁岩・チャート (第 245 図 1・2)・珪質頁岩 (第 256 図 2)・黒色安山岩 (第 245 図 2、第 256 図 1)・黒曜石 (第 245 図 3) などが認められる。また、3 については、X線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系 1 (東餅屋・西餅屋) という結果を得ている。

b. 有舌尖頭器 (第 245 図 5・6)

総数 4 点が存在する。5・6 ともに、表裏両面に丁寧な押圧剥離を施すが、5 は側縁部が鋸歯状となる点で特徴的である。石材は、5・6 をはじめ未掲載品についても全てチャートであり、同石材の卓越する状況が窺える。

c. 石鏃 (第 245 図 7～38、第 256 図 3～9・11)

総数 135 点が存在する。形態では、抉りの浅い凹基無茎鏃の 2 類が 54 点 (第 245 図 8～10・14～19・31～36、第 256 図 6・8・9) と最も多く、次いで平基無茎鏃の 1 類 18 点 (第 245 図 12・13・30、第 256 図 7)、V 字状に抉れる凹基無茎鏃の 4 類 17 点 (第 245 図 11・20～23・37)、U 字状に抉れる凹基無茎鏃の 3 類 16 点 (第 245 図 24～29、第 256 図 5)、未製品の 9 類 15 点 (第 245 図 38、第 256 図 11) などがある。有茎鏃の 6・7 類 (第 245 図 7、第 256 図 3) は、僅かに 4 点にとどまる。大きさについては、サンプル数の少ない 5・6 類を除いて 1～4 類の平均値を見ると、長さ 19～22 mm、基部幅 14～15 mm と相互に大差が認められないが、重量では 1～3 類が 0.8～1.0 g であるのに対して、4 類は 0.5 g と軽量である。これは、4 類が他類に比べて薄身に作られているためであろう。

石材は、チャートが全体の 6 割強を占め、黒曜石の 2 割強がこれに次ぐ。他に黒色安山岩や黒色頁岩なども見られるが、僅少である。形態と石材の間には、特定の関係を見出すことはできず、やはり先の石材比率が各形態に認められる。ただし、黒曜石製 32 点のうちの 25 点について、X線回折試験による産地同定を実施し、和田峠系 2 (星ヶ塔) 14 点 (第 245 図 17・19・21・28・30)、和田峠系 1 (東餅屋・西餅屋) 9 点 (第 245 図 9・11・22、第 256 図 7)、神津島系 2 点という結果を得たが、内容的には和田峠系 2 については 2 類が主体であり、和田峠系 1 については 3 類の鋏形鏃が存在しないなどの差異が認められる。神津島系の 2 点については掲載していないが、1・2 類に分類される。

各類の帰属時期については、押型文土器段階に特徴的な鋏形鏃の 3 類や、後期段階と推定される有茎鏃の 6・7 類を除いて、その大半が前期に比定されよう。ただし、第 245 図 30～37 などの小形品の中には、草創期後半の撚糸文土器に伴うものが含まれている可能性もある。

d. 石錐 (第 245 図 39～41)

総数 9 点が存在する。39・40 のように、横長あるいは縦長の不定形剥片を素材として、その先端に長さ 5 mm 程度の機能部を作出した摘み部を持つ 2 類と、41 のように全体的に押圧剥離を施して機能部を作出する摘み部を持たない 1 類の二種類がある。2 類は、機能部以外の調整加工をほとんど行わず、やや粗雑な感じを受ける。

石材は、チャートが 6 点 (第 245 図 39・40) と最も多く、他に黒色頁岩 2 点、黒曜石 1 点 (第 245 図 41) などが認められるのみである。黒曜石製については、X線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系 2 (星ヶ塔) という結果を得ている。

e. 石匙 (第 245 図 43・44)

総数 4 点が存在する。全て横型であり、横長の楕円形状の剥片を素材として、その形状をあまり改変することなく、やや粗い押圧剥離により刃部を作出する。摘み部は、体部中央からやや左右に偏在するようにも

見えるが、基本的に剥片作出時の打点部をそれに当てている。また大きさは、横幅6 cm前後、縦幅4 cm前後のものを主体としているが、横幅が10 cm前後のものも1点認められる。石材は、黒色頁岩が2点、チャートと黒色安山岩が各1点である。

f. 削器類 (第246図45～55、第256図13～17)

総数494点が存在する。不定形の横長剥片や縦長剥片を用材として、その縁辺部に粗雑な刃部加工を施すものと、刃こぼれ状の使用痕を有する二者があるが、基本的には両者とも類似した部位に機能部を有することから、ここでは一括して扱っている。また、僅少数が存在する先端の刃部角度が60度を超える搔器的なものについても、削器類として一括した。

各器種を通じて最も点数が多く、横長剥片を使用する1類が121点(第246図51～54)、縦長剥片の2類が371点(第245・246図5・45～50・55、第256図13～17)存在し、縦長剥片を利用する頻度が高い。こうした剥片形状と機能部位の関係については、正確な分類をなしていないが、およそ横長剥片は下縁部を、また縦長剥片は両側縁部を利用するケースが目立つ。平均的な大きさ(長さ×幅)や重量は、横長剥片系が60 mm×53 mm、重さ52 g、縦長剥片系が56 mm×42 mm、重さ43 gとなり、両者ともに類似した大きさをもつ。

石材は、黒色頁岩が72%と最多数を占め、次いでチャートが14%、ホルンフェルス6%、黒色安山岩4%、砂岩と黒曜石が各2%となる。また、正確なデータを得ているわけではないが、掲載した資料の約8割強には、片面あるいは縁辺に原礫面を残しており、表皮に近い副次的な調整剥片を用いていることを示している。ただし、黒曜石を用材とするものは、長さ34 mm、幅23 mm、重さ7.8 gの小形品を平均としており、調整剥片だけでなく石核自体の小形ぶりが窺える。

尚、図には掲載していないが、黒曜石製9点の内の5点についてX線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系2(星ヶ塔)4点、和田峠系1(東餅屋・西餅屋)1点という結果を得ている。

g. 打製石斧 (第247・248図66～85、第257・

258図26殻2)

総数163点が確認されている。形態的には、撥形の2類が68点(第247・248図66・67・70～74・78・80～83、第257図30)と最も多く、次いで短冊形の1類が25点(第247図68・69・76・77、第257図26～28)、両測縁に浅い抉りが入る分銅形の4類が12点(第248図84・85、第258図31・32)、撥形の両側面に浅い抉りが入る3類が7点(第247図79、第257図29)、尖頭状の7類が4点(第247図75)、未製品の6類が1点などがある。欠損品を除いた各類の大きさ(長さ×刃部幅)や重量の平均値は、1類が108 mm×59 mm・213 g、2類が104 mm×52 mm・136 g、3類が110 mm×65 mm・158 g、4類が115 mm×69 mm・170 g、7類が107 mm×54 mm・122 gである。各類ともに平均値的には類似しており、また機能部再生品を含めて大・小形品が存在する状況も同様である。

素材の面では、幅広の大形剥片を用いるとともに、その主剥離面が石斧の長軸に対して横位あるいは斜位になるように調整加工を施すケースが、各類ともに主体を占めている。また、原礫面の残存状況は、片面に原礫面を残す②類が112点(70%)に及び、その状態から見て大きな原礫からの素材剥片を用いていると考えられる。他に、表裏両面が剥離面で構成される①類が40点(25%)、両面に原礫面を残す③類が8点(5%)それぞれ認められる。先の形態分類との関係で見れば、②類で最多となるのは撥形の2類の45点(56%)であり、次いで短冊形の1類の20点(25%)、分銅形の4類8点(10%)、尖頭形の7類4点(5%)、撥形の3点(4%)となる。また、①類でも2類が21点(72%)と最も多いが、3類の4点(14%)がこれに次ぎ、2類と4類が各2点(7%)で、7類は皆無である。③類については、総数8点(形態不明1点を含む)と僅少で全体的な傾向把握には無理があるが、2類3点、1類・4類が各2点で、3類・7類が存在しない。

調整加工のあり方では、水平回転技法のa類、垂直打撃技法のb類、a・b類の両技法が併存するc類に分けられる。この技法と形態との関係を見ると、a類では撥形の2類が26点(65%)と最多を占め、次い

II 今井三騎堂遺跡の調査

で1類が9点(23%)、7類が3点(7%)、3類が2点(5%)で、4類は認められない。b類もa類とほぼ同様であり、2類が25点(69%)、1類が8点(22%)、3類が2点(6%)、7類が1点(3%)となる。c類は、4類が10点(36%)と最多を占め、次いで2類の9点(32%)、1類が7点(25%)、3類が2点(7%)で、7類が認められない。このように、短冊形の1類や撥形の2・3類には、水平回転技法や垂直打撃技法および両技法の併用を含めて全技法が存在するが、分銅形の4類には両技法の併用例のみが存在し、また尖頭形の7類にはその併用例が欠落するなど、技法的な偏在性が顕著である。ただし、2類の中には第247図70～74などのように、刃部加工が片面の一方向から行われるトランシェ的なものも存在し、内容的にはさらに細かい形態分類が必要であろう。

刃部形状については、円刃のA類が45%、直刃のB類が40%、偏刃が15%となる。偏刃については、欠損後に粗雑な再加工をした不整形なものが含まれており、本来の比率はさらに低くなると思われる。全体形状分類との関係では、A類には1～4・7類の全てが、またB類には1・2類のみ認められ、相互に何らかの関係性を窺わせるが、リダクション等を考慮すれば断定することは難しい。

使用による磨耗痕については、全点の状況を観察し得ていないが、短冊形や撥形の1～3類のおよそ約4割に認めらる。それらの磨耗痕は、表裏両面の刃部から体部中央にかけて縦方向に残るが、その程度はどちらかの片面が弱い。おそらく、棒柄に密着する内側面とその外側面という装着面の差異を反映したものであろう。欠損品の比率は70%に及ぶが、破断面での欠損方向は基部から刃部への長軸方向の平坦面に対して、垂直方向からの加力によって折れたものが多い。こうした磨耗痕や欠損のあり方は、上下運動やテコのような回転運動を伴う使用状況を想定させる。また残存部位の比率は、刃部のみのII 4類が29点(26%)、刃部を欠損するII 5類が20点(18%)、体部中位から刃部のII 3類が17点(15%)、基部を欠損するII 1類と体部中位のみII 8類が各12点(11%)、刃部から体部

中位のII 2と基部だけのII 6類が各7点(6%)、片側縁部のみのII 7類が6点(5%)、部位不明の小破片のII 9類が3点(2%)となる。II 1類とII 6類、II 2類とII 3類、II 4類とII 5類は、各々補完的な対応関係にあるが、相互に接合する例は極めて少ない。欠損品が完形品を凌駕することや、残存部位の顕著な偏在性が認められないことは、欠損品を集落内に持ち帰っただけでなく、その消費場所が集落内にも存在したことを示唆している。

石材は黒色頁岩が68%と主体を占め、ホルンフェルスが18%、砂岩5%、変玄武岩4%などがそれに次ぐ。これら以外に黒色安山岩や珪質頁岩など5種類の石材が用いられるが、それらすべてを合わせても5%に満たない。黒色頁岩を主体とする用材傾向は、他の「打製系列」の石器群とも共通しており、素材剥片の大きさを基準とすれば、打製石斧を中心としてその周縁に他の同系列の石器群が組み込まれている様相も窺える。

これら石斧の帰属時期については、不明確ではあるが、堅穴住居での伴出例を考慮すれば、2類の中でトランシェ様の一群は花積下層式段階に、垂直打撃技法による3類は諸磯式段階に、分銅形の4類は中期後半以降に比定される可能性が高い。

h. 三角錐形石器(第251図113～115、第259図46・47)

総数41点が存在する。欠損品の中には石核や剥片と識別し難いものもあり、相当数がそれらに分類されている可能性が高い。形態的には、三角錐状よりも四角錐状となるものが主体を占めるが、整形加工のあり方から、体部に1～2面の原礫面を残して底面が1回の打割・剥離面で構成される1類3点(第251図113)、1類と同様の部加工や底面が複数の剥離面により構成される2類37点(第251図112・114～116、第259図46・47)、それに体部に原礫面を持たない3類1点(未掲載)に分類される。これまでの研究(石坂・岩崎1988)によって、当石器の機能部が底面にあることが判明しており、フラット面を利用した磨る・敲くなどの機能と、背面との鋭角部を利用したの

搔くなどの機能が想定できる。いわば、磨り石的な機能と搔器的な機能を併せ持つと言えるが、後者の機能は背面と底面との角度が約 60 度前後のもの（第 251 図 112）に限定される。

大きさや重量は、112 のように長さ 14 cm、重さ 500 g を超える大形品がある一方で、同 113・第 259 図 46・47 のように長さ 8 cm、重さ 200～250 g 程度の小形品もある。使用過程で底面の再加工を繰り返すのが当石器の特徴の一つであり、小形品は使用状況の進行したものと考えられる。ただし、1 回の剥離面で構成された底面部を持つ 113 は、欠損品の可能性が高い。

石材は、ホルンフェルスが 1 点認められる他は、全て黒色頁岩を使用している。時期的には、草創期後半の稲荷台式を中心とした段階に伴うと考えられる。

i. 礫器

図としては掲載していないが、総数 27 点が存在する。形態的には、打製石斧に類似するものも認められるが、その多くは片側面に原礫面を残し、機能部の側縁にはかなり粗い調整加工が施されている。平均的な大きさは、長さ 7 cm、幅 6 cm、重さ 160 g 前後であり、肉厚で刃部角度が約 40～60 度を測る。石材は、黒色頁岩が約 8 割弱を占めるとともに、他にホルンフェルスや黒色安山岩が利用されるなど、「打製系列」特有のあり方を示す。

j. 楔形石器（第 256 図 12）

総数 2 点が存在するのみである。12 は、横長剥片の上下両端に対向する剥離痕が認められる。石材は、2 点ともにチャートを使用する。

k. 異形石器（第 24542 図、第 256 図 10）

総数 2 点が存在するのみである。42 は三角形状を呈し、二股の石錐に類似する。また、10 はやや不整形な平基有茎鏃の可能性もある。石材は、42 が赤碧玉、10 がチャートである。

B. 使用痕系列

a. スタンプ形石器（第 248～250 図 93～111、第 258・259 図 38～45）

総数 218 点が存在し、体部や底面部の加工状態から

1～8 類に分類される。主体を占めているのは、底面が 1 回の打割により形成されて体部側縁に整形加工を施さない 1 類であり、156 点（第 248・249 図 93～104、第 258 図 38～42）が存在する。次いで、片側の側縁部に加工を施し、1 類と同様の底面部を持つ 3 類 33 点（第 250 図 105～107、第 259 図 43・44）両側縁部を加工するが底面は 1 類と同様の 5 類 14 点（第 250 図 108～111、第 258・259 図 38～45）、両縁部の加工や底面にも複数回の整形加工を施す 4 類 4 点、小破片で分類不能な 8 類が 11 点などがある。

側縁部の整形加工の有無は、素材となる石材の大きさに規定されており、1 類が最多を占める状況から見ても、基本的には加工の不要な適度の大きさの棒状礫を意識的に選択していることが窺える。また、底面部は 1 回の打割により形成され、複数回の加工が施される例は僅少である。

底面部の使用痕については、全点での観察をなし得ていないが、掲載した 14 点（第 248～250 図 93・97～99・102～105・108・110・111、第 258 図 38～40・42）の凸面部分に磨耗痕が認められ、総体的には約 5 割に及ぶと推定される。また、体部には上端を中心に敲打痕を持つ例（第 258 図 40・42）もあるが、数量的には少ない。

平均的な大きさは、体長 11 cm、底面幅 8 cm、重量 600 g であり、先の三角錐形石器に較べて各個体間の差異が少なく、使用過程での再加工が基本的に行われていないことを示唆している。

石材は、粗粒輝石安山岩が 68 点（31%）と最も多く、石英閃緑岩 58 点（27%）、砂岩の 39 点（18%）、変質安山岩 18 点（8%）などがこれに次ぐ。他に溶結凝灰岩や細粒輝石安山岩など 9 種類の石材が認められるが、それらを合計しても 16%に過ぎない。基本的に、輝石安山岩をはじめとした粒度の粗い石材を選択しており、形態的に類似する三角錐形石器とは、整形加工とともに大きな差異が認められる。

b. 磨石類（第 245・251～254 図 6・124～143、第 260・261 図 53～68）

総数 460 点が存在する。円形や楕円形状の扁平な河

II 今井三騎堂遺跡の調査

床礫を素材として、その表面に使用による凹み穴・敲打痕や磨り面（磨耗痕）を有するものを一括した。ほぼ片手の中に収まるサイズを有し、凹み穴と磨り面は複合することがかなりの頻度で認められ、また周縁部に敲打痕を持つものも多い。凹み穴は、基本的に多数回に及ぶ微細な敲打痕の集合により形成されているが、回転動作によって形成された播り鉢状を呈するものも僅かに認められる。

素材形状による分類では、小破片のために分類不能な5類189点を除くと、楕円形の2類が123点（45%）と最多で、不定形の4類が77点（29%）、棒状の3類が38点（14%）、円形の1類が33点（12%）となる。

凹み穴・磨り面・敲打痕の形成状況は、凹み穴・磨り面・敲打痕が複合するabc類が93点（34%）、磨り面と敲打痕が複合するac類が89点（33%）、磨り面だけで構成されるa類が81点（30%）となる。他に、凹み穴・磨り面が複合するbc類4点（1%）や、敲打痕のみのc類3点（1%）などもあるが、僅少である。こうした使用痕と形態分類との間には、特記するほどではないが、片面に2個以上の凹み穴を持つ例は、楕円形の2類や不定形の4類に偏在する傾向にあり、対象物を敲打する際の重心位置との関係性が窺える。

凹み穴と磨り面・敲打痕の形成段階における時間的關係については、詳細な観察を行っていないために全体的傾向は不明だが、凹み穴の形成後に磨り面が重複する状況も多々認められる。

平均的な大きさは、1類が長径70mm×短径62mm、重さ267g、2類が長径98mm×短径74mm、重さ445g、3類が長径111mm×短径61mm、重さ411g、4類が長径105mm×短径80mm、重さ552gである。

石材は、粗粒輝石安山岩が396点（86%）と最多を占め、他に石英閃緑岩24点（5%）や砂岩20点（4%）など10種類の石材が認められるが、僅少である。

c. 敲き石（第251図122・123、第259図50～52）

総数7点が存在するのみである。先の磨石類とは異なり、長さ10cm、幅4cm、重さ100～150g前後の棒状礫を素材として、その先端部に敲打痕や衝撃による剥離痕を持つもので、ストーンリタッチャーと考え

られる。123は他に比べてやや大形品であり、50は欠損した先端部を、122は片側縁部をそれぞれ磨り面として利用している。また、体部は全体的に手ずれ状の磨耗が認められる。

石材は、黒色頁岩2点と、珪質頁岩・砂岩・緑色片岩・変質安山岩が各1点認められ、磨石類などの使用痕系列に較べて硬質の石材を選択している。

d. 砥石（第251図116～121、第259図48・49）

総数34点が存在する。その内訳は、溝状の使用痕を持つ2類が20点（第251図117～121、第259図49）、砥面が平坦で溝状の使用痕を持たない1類が14点（第251図116、第259図48）、分類不能の小破片が1点である。2類の溝状使用痕は、幅3～5mm、深度1～2mm前後の直線的な複数本の条線で構成され、ある程度の方向性を持ちつつ相互に切り合っているものが多い。118は体部中央に「矢柄研磨器」のような溝を持ち、また120も他に比べて溝の幅や深度が大きい点で異なる。

完形品に見る大きさは、長さ40～70mm・幅60mm・厚さ10～15mm・重さ35～60gの小形品（第251図118・119、第259図48）と、長さ80～110mm・幅60～90mm・厚さ20～25mm・重さ100～350gの中形品（第251図116、第259図49）が認められる。

石材は、砂岩が14点と最も多く、次いで粗粒輝石安山岩の10点、牛伏砂岩と黒色頁岩が各4点、緑色片岩と緑泥片岩が各1点である。

e. 石皿（第254・255図144～147、第262図72）

総数27点が存在する。いずれも扁平な河床礫を素材としているが、形態的には不定形な3類が5点（144～146）、縁付の4類が4点（147）、分類不能な小破片の5類が18点（72）に分類される。4類は、基本的に周縁の一部が片口状に開口し、裏面には4本の脚部が付されるものもある。また、裏面を中心にして、多孔石に類似した錐揉み状の凹み穴が付されるものも多い。

大きさは、長さ19～33cm、幅17～26cm、重さ4～12kgとかなりのばらつきが見られるが、4類のように定形的なものは比較的大形品が多い。破損品が全

体の7割弱にも達するが、使用段階での破損だけでなく、廃棄に伴う意識的な破壊も考慮される。

石材は、粗粒輝石安山岩を用いるものが18点と最も多いが、他に近隣の河川では産出しない緑泥片岩6点や、絹雲母片岩と点紋緑泥片岩が各1点など片岩系の石材が含まれている点で注目される。

各石皿の帰属時期については判然としないが、4類の縁付に関しては前期の所産と考えられる。

C. 複合技術系列

a. 磨製石斧（第246図56～65、第257図18～25）

総数47点が存在する。形態的には、定角的な2類が17点（56～59、18～20・25）と主体を占め、礫素材の局部磨製の3類が7点（62～65、23～25）、乳棒状の1類が4点（60、21・22）、分類不能の小破片の5類が18点（61）などがある。

3類は、棒状礫の片面や先端部に調整加工を施して部分的に研磨するが、原礫面を多く残す点が特徴的である。欠損品の比率が7割弱を占めているが、20の側縁部や薄身の59、体長の短い21などには、欠損後の再加工が施されている。尚、擦り切り技法による整形・加工方法の存在も想定されるが、その痕跡をとどめているものはない。

欠損部の状況は、刃部のみ残存のⅡ4類が10点と最多であり、次いで基部・刃部欠損のⅡ8類と小破片のⅡ9類が各5点、刃部欠損のⅡ5類と基部残存のⅡ6類が各3点、基部欠損のⅡ1類と上半部欠損のⅡ2類が各2点、片側縁欠損のⅡ7類が1点となる。

完形品の平均的な大きさ（長さ×幅・重量）は、2類が108mm×47mm・203g、3類が105mm×46mm・166g、4類が82mm×43mm・76gとなる。4類がやや小振りであるが、リダクションによる小形化を反映していると考えられる。

石材は、黒色頁岩が18点と最多であり、次いで変玄武岩が8点、砂岩5点、変輝緑岩4点、蛇紋岩とホルンフェルスが各3点などが主なものである。この他に細粒輝石安山岩・黒色安山岩・砂質頁岩・緑色片岩などが各1～2点存在する。黒色頁岩を用材とするも

のは、礫斧的な局部磨製の3類を主体としており、変玄武岩や蛇紋岩などを用いる乳棒状や定角状の1・2類とは、差異が見られる。特に、後者の石材については、その調整剥片や石核は皆無に近い状況であり、1・2類のほとんどの製品が遺跡外から完成品としてもたらされた可能性が高い。

b. 多孔石（第254図143、第261・262図69～71）

総数11点が存在する。全体の6割以上が欠損品であるが、基本的には不定形の亜角礫を素材として、整形加工を施さずに用いる傾向が明瞭である。各個体ともに、表裏面を中心にして多数の凹み穴が付されているが、穴の形状は錐揉み状の回転運動による逆円錐形を呈しており、集合打痕状の凹み穴は少ない。また、こうした凹み穴の他に、表面に僅かな磨り面を持つもの（70・71）も認められる。

大きさは、長径20～50cm、重さ2～7kgと多様であり、石材は全て粗粒輝石安山岩を使用している。

D. その他

a. 石核・原石（第248図86～92、第258図33～37、第262図73～75）

総計450点が存在する。原礫形状をもとに分類すれば、①径10～17cmの分割礫や扁平な原礫の平坦面を打面にして大・中形剥片を剥離するもの22点（86・87、35）、②径6～10cm未満の原礫平坦面や剥離面から小形剥片を剥離するもの153点（88・92、37）、③径6cm未満の原礫平坦面や剥離面から小形剥片を剥離するもの257点（89～91、33・34・36・73～75）などに分けられる。①からは主に小形打製石斧の素材剥片が、②からは石匙や削器などの素材剥片が作出されたと考えられ、石材も黒色頁岩が82%を占めている。③は剥離面の長さが4cm未満であることから、石鏃や石錐・小形削器などの素材剥片を作出したと考えられる。その石材は、黒色頁岩が147点（57%）と主体を占めるが、チャート46点（18%）や黒曜石30点（12%）なども認められ、前述した当該石器の石材傾向とも合致している。第243図に石材別の重量と最大長の相関図を示したが、黒色頁岩は長さ4～10cm、重さ

II 今井三騎堂遺跡の調査

5～300 gの範囲まで散在し、点数が少ないながらもホルンフェルスや黒色安山岩も同様の傾向を示す。これに対して、チャートと黒曜石は長さ1.5～5 cm、重さ5～50 g前後の範囲にほぼ収束しており、先の石材との差異が大きい。

剥片剥離の技法では、片面方向からの剥離(86～88・92、35～37)や、周縁部を打面にした求心的な剥離(89～91、33・34)が認められるが、前者は①・②の石核に、後者は③の石核に主体的である。

石材別の数量(数量比率・重量比率)については、黒色頁岩288点(64%・75%)、チャート51点(11%・4%)、ホルンフェルス32点(7%・11%)、黒色安山岩16% (3%・4%)、黒曜石28点(6%・1%)などが主なもので、他に珪質頁岩・変質安山岩・溶結凝灰岩・石英閃緑岩・石英・砂岩・粗粒輝石安山岩など7種類の石材が認められる。黒色頁岩の占める比率の高さは、「打製系列」石器における同石材の卓越性と整合的であり、原石を持ち込んでの石器製作が行われたことを示すものだろう。ただし、全長が15 cmを超えるような大形の打製石斧などの素材剥片を取るには、サイズの小さく、原石採取地点である程度加工された剥片が持ち込まれたことも考慮される。また、第262図73・75は黒曜石の原礫であるが、長径6 cm、重さ50 g前後と小振りである。他の黒曜石の石核もほぼ同様で、重さが100 gを超えるものは皆無である。このことは、当遺跡にもたらされた黒曜石が、石鏃や石錐などの小形品用に限定されていたことを物語っている。

尚、9点の黒曜石製石核についてX線回折試験による産地同定を実施したところ、和田峠系2(星ヶ塔)が8点(第262図73～75)、和田峠系1(東餅屋・西餅屋)1点という結果を得ている。

b. 剥片

図としては掲載していないが、素材・調整剥片を含めて総数11,243点(120,097 g)が検出されている。

石材別の数・重量(数量比率・重量比率)については、黒色頁岩8,277点・99,000 g(74%・82%)、チャート1,191点・3,996 g(11%・3%)、ホルンフェルス

538点・7,618 g(5%・6%)、黒色安山岩498点・4,660 g(4%・4%)、砂岩300点・2,917 g(3%・2%)、黒曜石323点・205 g(数量比率3%・重量比率0.2%)などが主なものであり、その他に12種類の石材74点・1,470 g(0.7%・重量比率1%)が認められる。黒色頁岩はじめとして、チャートやホルンフェルスを中心としたあり方は、先の「打製系列」の石器石材や石核石材の様態と軌を一にしており、そのほとんどが同系列石器の製作に付随して作出あるいは排出されたものと言えよう。逆に言えば、これらの剥片に認められない石材、例えば変玄武岩・変輝緑岩・砂質頁岩・変質安山岩・凝灰岩・蛇紋岩などを使用する「打製系列」や「複合技術系列」の石器は、当遺跡外からの搬入品である可能性が高い。

主な石材の大きさ(長さ×幅)を第244図で見ると、黒色頁岩では10～70 mm×10～60 mmのものが主体を占めるが、長さ70～100 mmサイズもかなり多数が認められ、全体的に小剥片から大・中剥片までのバラエティを持つ。また、ホルンフェルスと黒色安山岩は、15～60 mm×10～40 mmを主体としており、黒色頁岩よりも若干小振りとなるが、長さ50～80 mmサイズも一定量存在しており、黒色頁岩との近似性が認められる。一方、チャートは10～40 mm×5～30 mmサイズが、また黒曜石は5～30 mm×5～20 mmサイズが主体的である。黒曜石には、最大長50 mmを超えるものが存在しないなどの点で、チャートよりも小形サイズが顕著であるが、先の三石材に較べれば両者の差は少ない。こうした差異の背景については、調整剥片と素材剥片とが混在するために明言できないが、基本的には各石材による製作器種の差を反映したものであり、黒色頁岩は「打製系列」の全器種に対応した汎用的石材と言える。ホルンフェルス・黒色安山岩もこの黒色頁岩と同類であるが、チャートや黒曜石は小形器種に限定されていたことを示しており、前述の石核のあり方も整合的である。

c. 礫塊

総数1,904点が存在する。図としては掲載していないが、長径1～10 cm以下の河床礫や亜角礫が全体の

8. 包含層の出土遺物

92%を占め、火熱によりその表面に赤化や煤状炭化物の付着が認められるものが990点存在する。また、それらの重量は、1～100g未満が1,445点(76%)と主体を占め、100g～200g未満が192点(10%)となる。

石材は、粗粒輝石安山岩が1,614点と最も多く、他に緑泥片岩63点、溶結凝灰岩59点、砂岩57点を含む13種類の石材が認められる。火熱を受けている礫

塊のほとんどが粗粒輝石安山岩(914点)で占められているが、黒色頁岩・黒色安山岩・チャートなどの原石も含まれており、石器の素材から除外されたものが転用されていると考えられる。

こうした被熱礫の用途については、前項で触れた集石土坑などのアースオーブ的なものに利用されたと推定される。

出土石器の器種別数量一覧

系列	打製系列										使用痕系列					
	尖頭器	有舌尖頭器	石鏃	石錐	石匙	消器類	打斧	くさび形	三角錐形	礫器	変形石器	すり形	磨石類	敲石	石皿	砥石
合計	11	4	135	9	4	494	163	2	41	27	2	218	460	7	27	34

複合技術系列	その他						総計
磨斧	多孔石	剥片	石核	原石	自然石	礫塊	
47	11	11243	437	2	163	1904	15444

各種石器の分類別数量一覧(1)

石鏃											石錐		石匙		搔器・削器				
分類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	9類	10類	不明	分類	1類	2類	分類	1類	分類	1類	2類	不明
合計	18	54	16	17	1	2	2	15	9	1	合計	3	6	合計	4	合計	121	371	2

打製石斧								三角錐形石器			スタンプ形石器							
分類	1類	2類	3類	4類	6類	7類	8類	不明	分類	1類	2類	3類	分類	1類	3類	4類	5類	8類
合計	25	68	7	12	1	4	45	1	合計	3	37	1	合計	156	33	4	14	11

各種石器の分類別数量一覧(2)

磨石類																					
分類	1類				2類				3類			4類				5類					
	形態	a	abc	ac	不明	a	abc	ac	c	a	abc	ac	a	abc	ac	bc	c	a	abc	ac	b
合計	12	7	13	1	37	42	42	2	26	2	10	6	42	24	4	1	51	26	104	2	6

敲石		石皿			砥石				磨製石斧					多孔石							
分類	3類	分類	3類	4類	5類	分類	1類	2類	不明	分類	1類	2類	3類	5類	分類	4類			5類		
形態	ac	合計	5	4	18	合計	14	19	1	合計	4	17	7	18	形態	abc	b	bc	abc	b	bc
合計	6	合計	5	4	18	合計	14	19	1	合計	4	17	7	18	合計	1	2	1	1	5	1

各種石器の石材別・重量一覧(1)

尖頭器					有舌尖頭器		石鏃					石錐					
コード	1	2	5	7	12	コード	2	コード	1	2	7	9	12	コード	1	2	12
点数	2	2	2	3	3	点数	5	点数	6	84	11	1	33(32)	点数	2	6	1
重量	40.4	15.4	8	57.4	8.7	重量	15	重量	6.1	79	40.6	0.8	(28.7)	重量	4.2	11.2	1

石匙			搔器・削器										三角錐形石器			
コード	1	2	7	コード	1	2	3	6	7	9	12	19	38	コード	1	3
点数	2	1	1	点数	355(352)	67	28	2	19	12	9	1	1	点数	40(39)	1
重量	25.2	202	23	重量	(18441)	526	1643	119	1047	560	64.2	11.4	3.3	重量	(9778)	254

打製石斧										くさび形石器		礫器				
コード	1	3	4	5	7	9	10	31	34	コード	2	コード	1	3	7	45
点数	111(110)	30(29)	1	2	3	8	6	1	1	点数	2	コード	21(20)	3	3	1
重量	(11461)	(3303)	222	347	238	569	1042	21.9	102	重量	10.7	重量	(3051)	993	331	6.9

スタンプ形石器														
コード	1	3	4	5	6	7	9	15	18	19	20	26	50	不明
点数	3(1)	2	68(64)	1	6	3	39(37)	18	7	58(56)	1	4(3)	1	7(6)
重量	(1057)	1240	(29825)	367	2937	1695	(16657)	11671	3368	(25966)	459	986	567	2569

II 今井三騎堂遺跡の調査

磨石類

コード	1	3	4	7	9	18	19	26	33	34	55
点数	6	3	396(392)	3	20(19)	4	24	1	1	1	1
重量	1028	1220	(155372)	526	(3710)	1055	6109	49.6	121	20.9	315

敲石

コード	1	5	9	13	15
点数	3	1	1	1	1
重量	346	97	48.5	不明	334

石皿

コード	4	33	34	36	不明
点数	18	6	1	1	1
重量	41876	3202	436	208	11800

砥石

コード	1	4	9	13	23	31	33
点数	4	10	14	1	4	1	1
重量	213	1206	344	84.7	148	106	73

磨製石斧

コード	1	3	6	7	9	10	21	27	31	33	41
点数	18	3	2	1	5	8	4	1	1	1	3
重量	1283	347	20.4	151	395	847	787	85.3	3.6	44.6	11.5

()内は総点数の中で重量と計測したものの点数及び重量

各種石器の石材別・重量一覧(2)

剥片

コード	1	2	3	4	7	9
点数	827(8132)	1191(1180)	538(530)	33	498(489)	300(296)
重量	(99000)	(3996)	(7618)	517	4660	(2917)

12	13	18	19	24	33	34	35
323(222)	2	3	15	1	8	3	3
(205)	6.5	7.2	176	1.3	54.6	6.9	77

36	37	38	48	不明
1	1	3	4	39
522	7.3	90.2	3.7	232

多孔石

コード	4
点数	11
重量	86056

原石

コード	12
点数	2
重量	78.9

石核

コード	1	2	3	4	5	7	9
点数	293(284)	51	32	2	2	16	7
重量	(37496)	1946	5412	632	389	2033	614

12	15	18	19	38
28(26)	1	1	1	3(2)
(403)	493	142	150	(10.1)

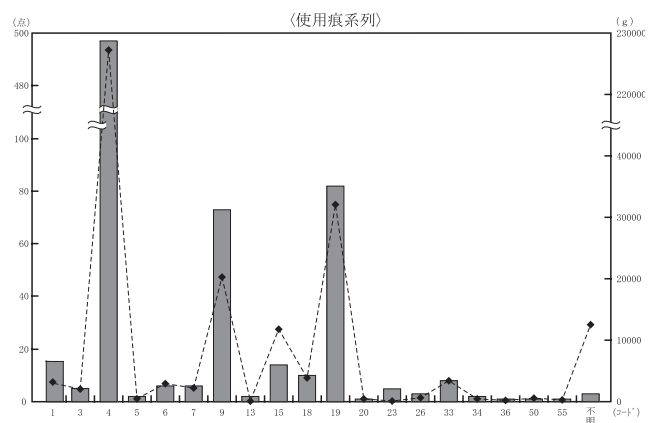
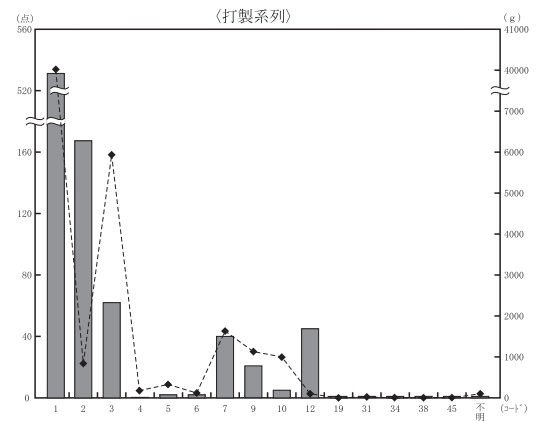
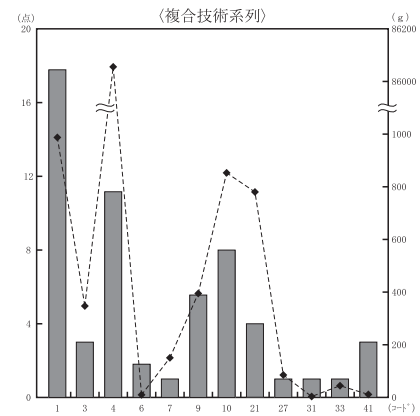
礫塊

コード	1	2	3	4	7	9	13
点数	20	8	22(21)	1614(1590)	2	57(55)	1
重量	582	654	(2078)	(208296)	7.1	(3019)	167

18	19	26	31	33	34	35	38	41
59(58)	18	1	1	63	29	5	3	1
(10017)	253	112	132	1790	992	263	528	9.4

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

各石器系列の石材別点数(折線は重量)



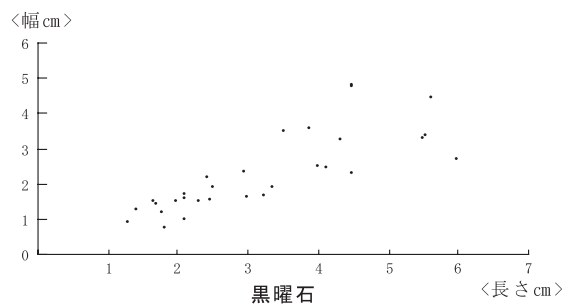
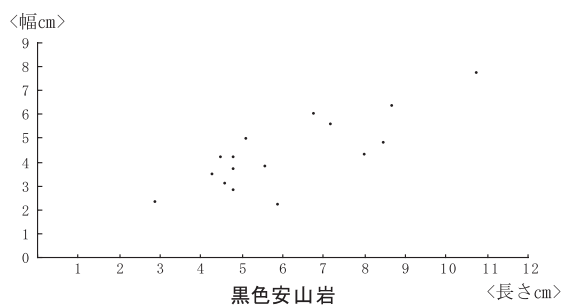
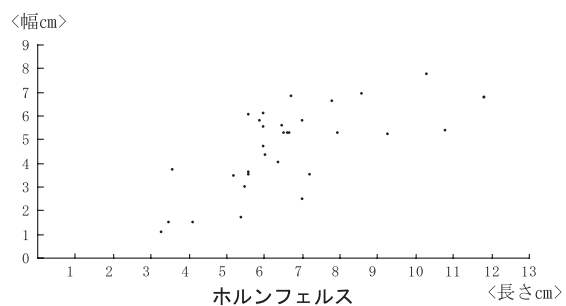
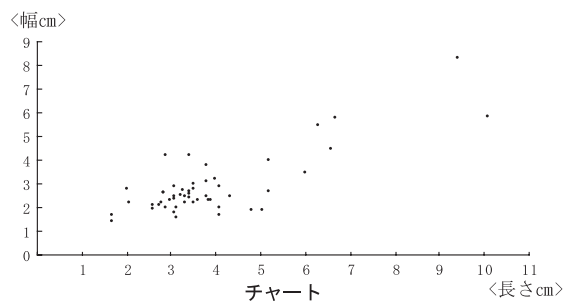
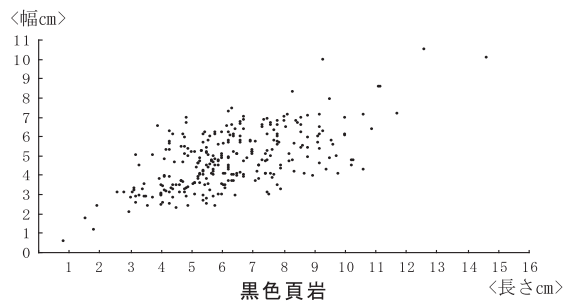
出土石器の系列・石材別重量一覧

(単位:g)

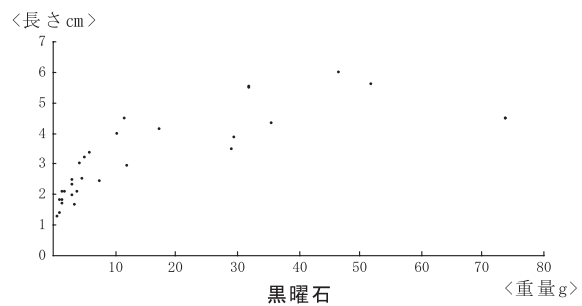
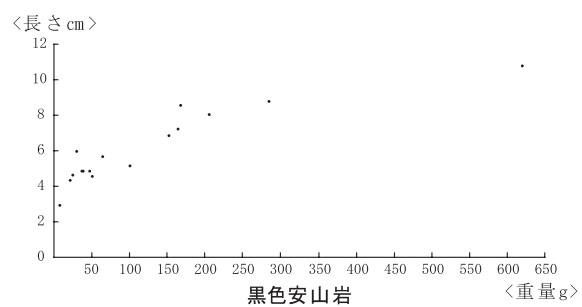
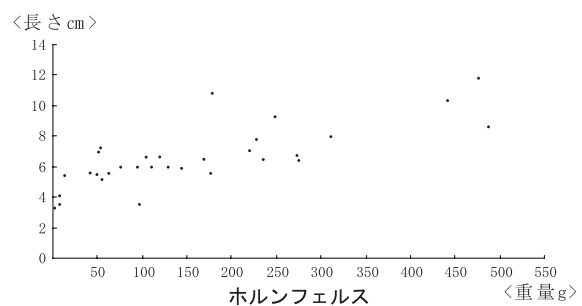
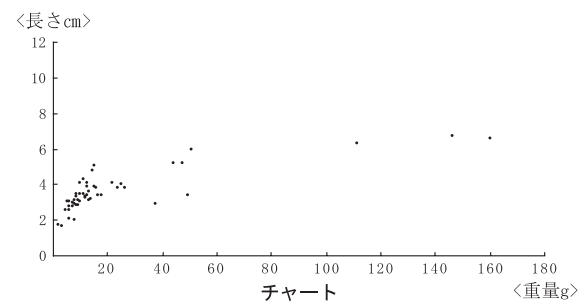
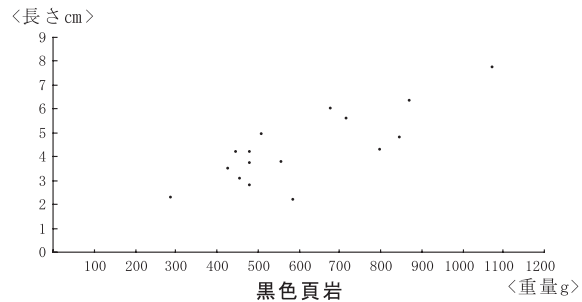
石材名	石材 コード	打製系列		使用痕系列		複合技術系列		剥片		石核	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
黒色頁岩	1	537(531)	(42939.1)	17(15)	2785.3	17	1142.2	8277(8132)	(99000.0)	293(284)	(38236.9)
チャート	2	167	859.5	0	0	0	0	1191(1180)	(3996.0)	51	1946.2
ホルンフェルス	3	62(61)	(6192.2)	5	2459.9	3	347.3	538(530)	(7617.6)	32	5411.8
粗粒輝石安山岩	4	1	222.6	491(483)	(228173.1)	13	86161.5	33	516.6	2	631.5
珪質頁岩	5	4	354.8	2	463.9	0	0	0	0	2	389.2
細粒輝石安山岩	6	2	119.2	6	2936.8	2	20.4	0	0	0	0
黒色安山岩	7	40	1736.4	6	2221.2	1	150.5	498(489)	(4660.4)	16	2033.4
黒色片岩	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
砂岩	9	21	1130.2	74(71)	(20759.2)	5	394.9	300(296)	(2916.5)	7	613.7
変玄武岩	10	6	1041.8	0	0	8	847.1	0	0	0	0
変質玄武岩	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
黒曜石	12	44(43)	(96.7)	0	0	0	0	323(222)	(205.3)	28(26)	(402.6)
緑色片岩	13	0	0	2(1)	(84.7)	0	0	2	6.5	0	0
雲母石英片岩	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
変質安山岩	15	0	0	19	12005.3	0	0	0	0	1	493.3
灰色安山岩	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石英斑岩	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
溶結凝灰岩	18	0	0	11	4422.9	0	0	3	7.2	1	141.5
石英閃緑岩	19	1	11.4	82(80)	(32075.2)	0	0	15	175.9	1	150.1
ひん岩	20	0	0	1	459.1	0	0	0	0	0	0
変輝緑岩	21	0	0	0	0	4	786.6	0	0	0	0
砂質泥岩	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
牛伏砂岩	23	0	0	4	147.9	0	0	0	0	0	0
頁岩	24	0	0	0	0	0	0	1	1.3	0	0
角閃石安山岩	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
安山石	26	0	0	5	1035.4	0	0	0	0	0	0
砂質頁岩	27	0	0	0	0	1	85.3	0	0	0	0
点紋頁岩	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
流紋凝灰岩	29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
輝緑凝灰岩	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
凝灰石	31	1	21.9	0	0	1	3.6	0	0	0	0
雲石片岩	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
緑泥片岩	33	0	0	8	3396.4	1	44.6	8	54.6	0	0
絹雲母片岩	34	1	101.5	2	457.0	0	0	3	6.9	0	0
結晶片岩	35	0	0	0	0	0	0	3	77.0	0	0
点紋緑泥片岩	36	0	0	1	208.1	0	0	1	522.2	0	0
片岩	37	0	0	0	0	0	0	1	7.3	0	0
石英	38	1	3.3	0	0	0	0	3	90.2	3(2)	(10.1)
石英脈	39	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
閃緑脈	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
蛇紋岩	41	0	0	0	0	3	11.5	0	0	0	0
変質蛇紋岩	42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
輝緑岩	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
褐色碧玉	44	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
赤碧玉	45	1	6.9	0	0	0	0	0	0	0	0
流紋岩	46	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
文象斑岩	47	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
粘板岩	48	0	0	0	0	0	0	4	3.7	0	0
礫岩	49	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
デイサイト	50	0	0	1	566.7	0	0	0	0	0	0
瑪瑙	51	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滑石	52	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
葉ろう石	53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ひん輝石質岩石	54	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
二ッ岳軽石	55	0	0	1	315.1	0	0	0	0	0	0
不明		0	0	8	14368.8	0	0	39	232.0	0	0
合計		889(881)	(54837.5)	746(730)	(329342)	59	89995.5	11243(11065)	120097.2	437(425)	50460.3

()内は総点数の中で計測したものの点数及び重量

〔長・幅〕

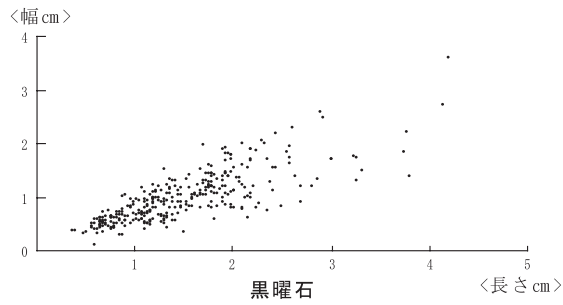
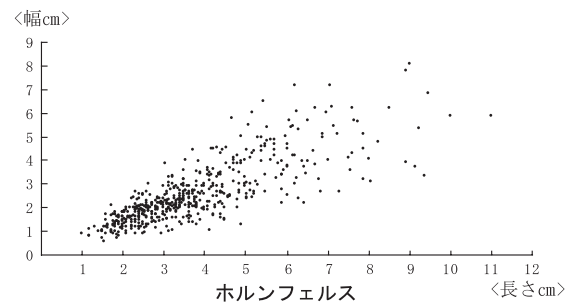
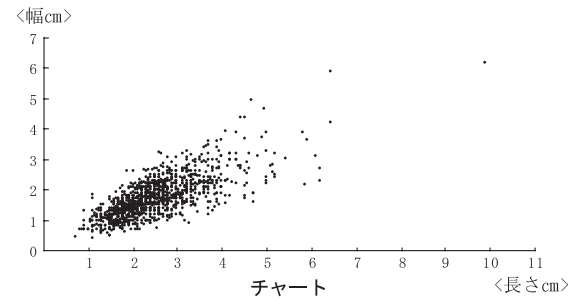
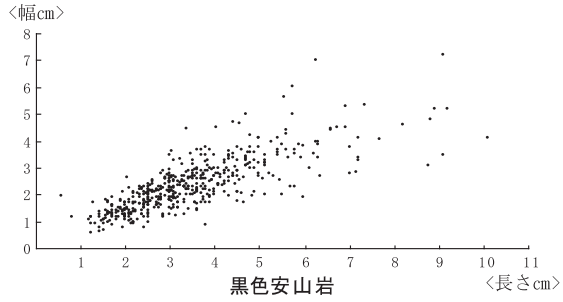
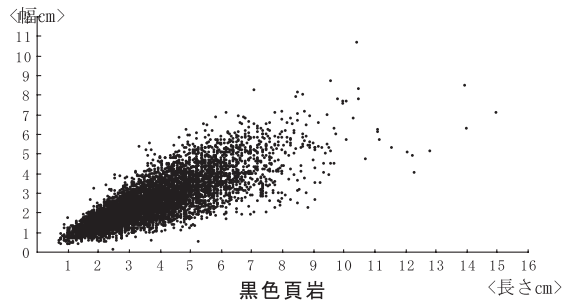


〔長・重量〕

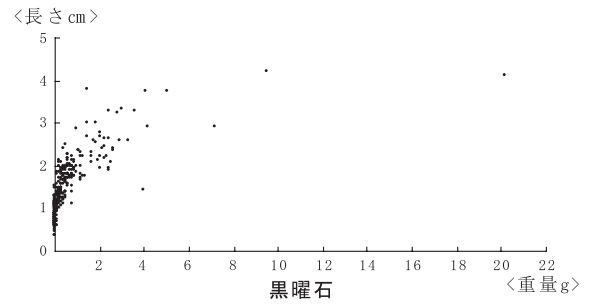
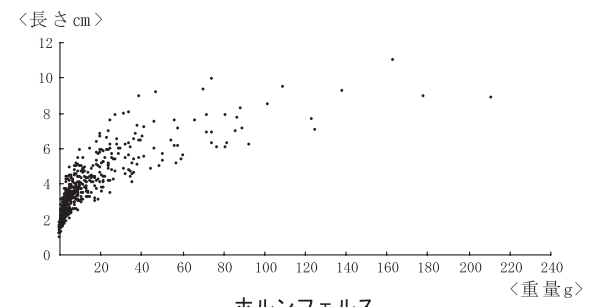
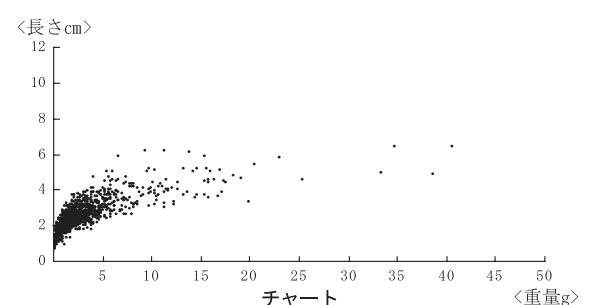
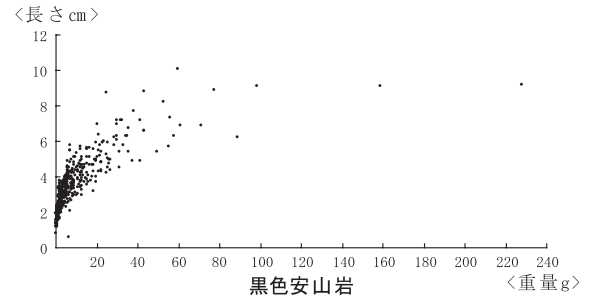
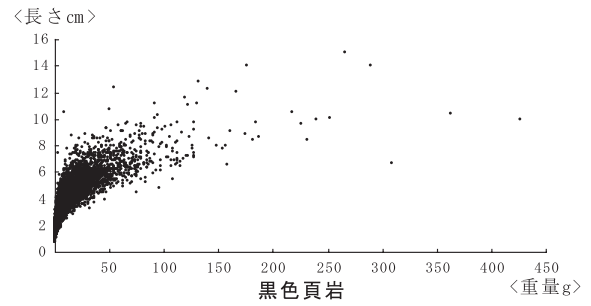


第 243 図 石核の長・幅・重量の相関図

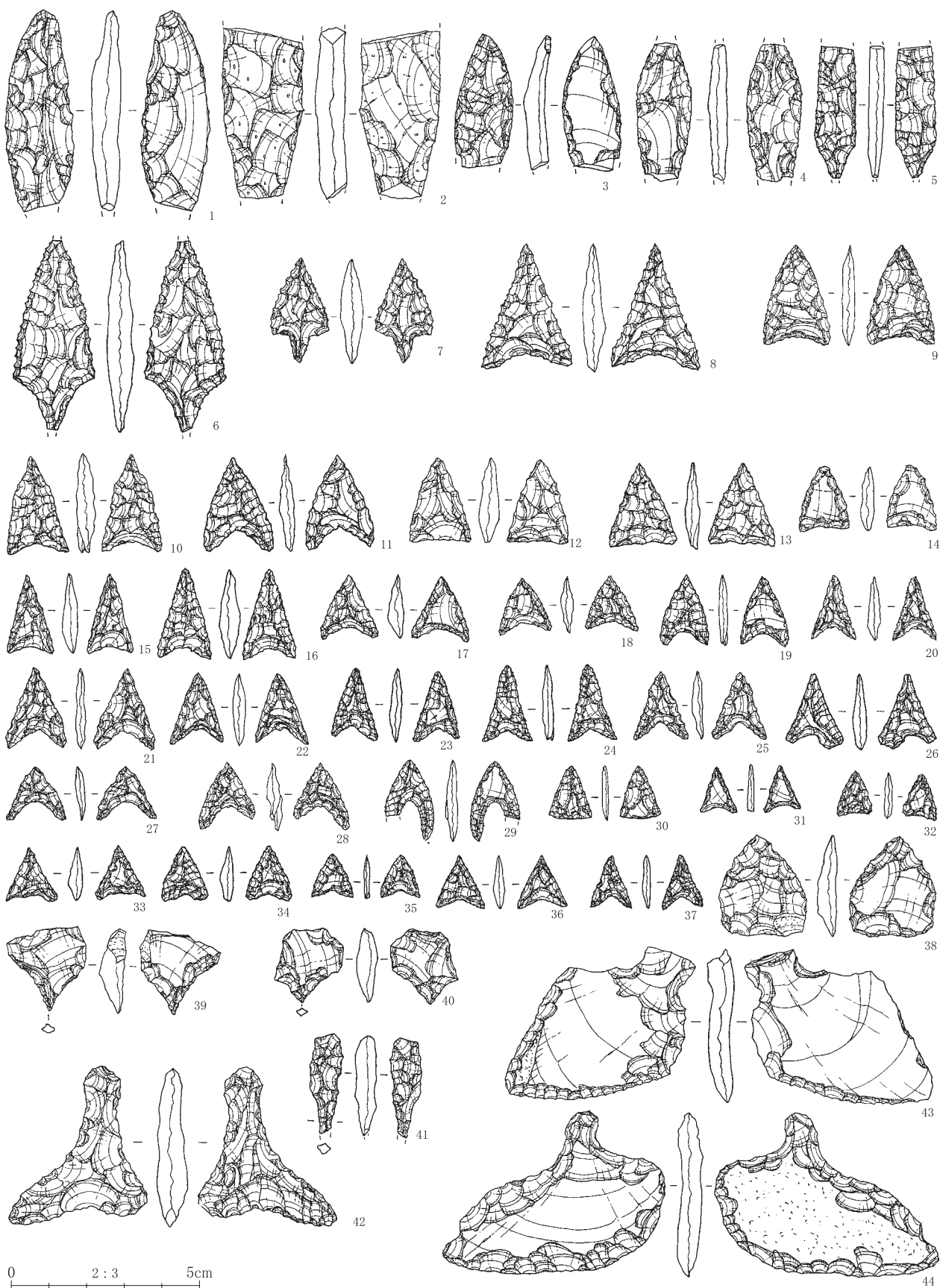
[長・幅]



[長・重量]



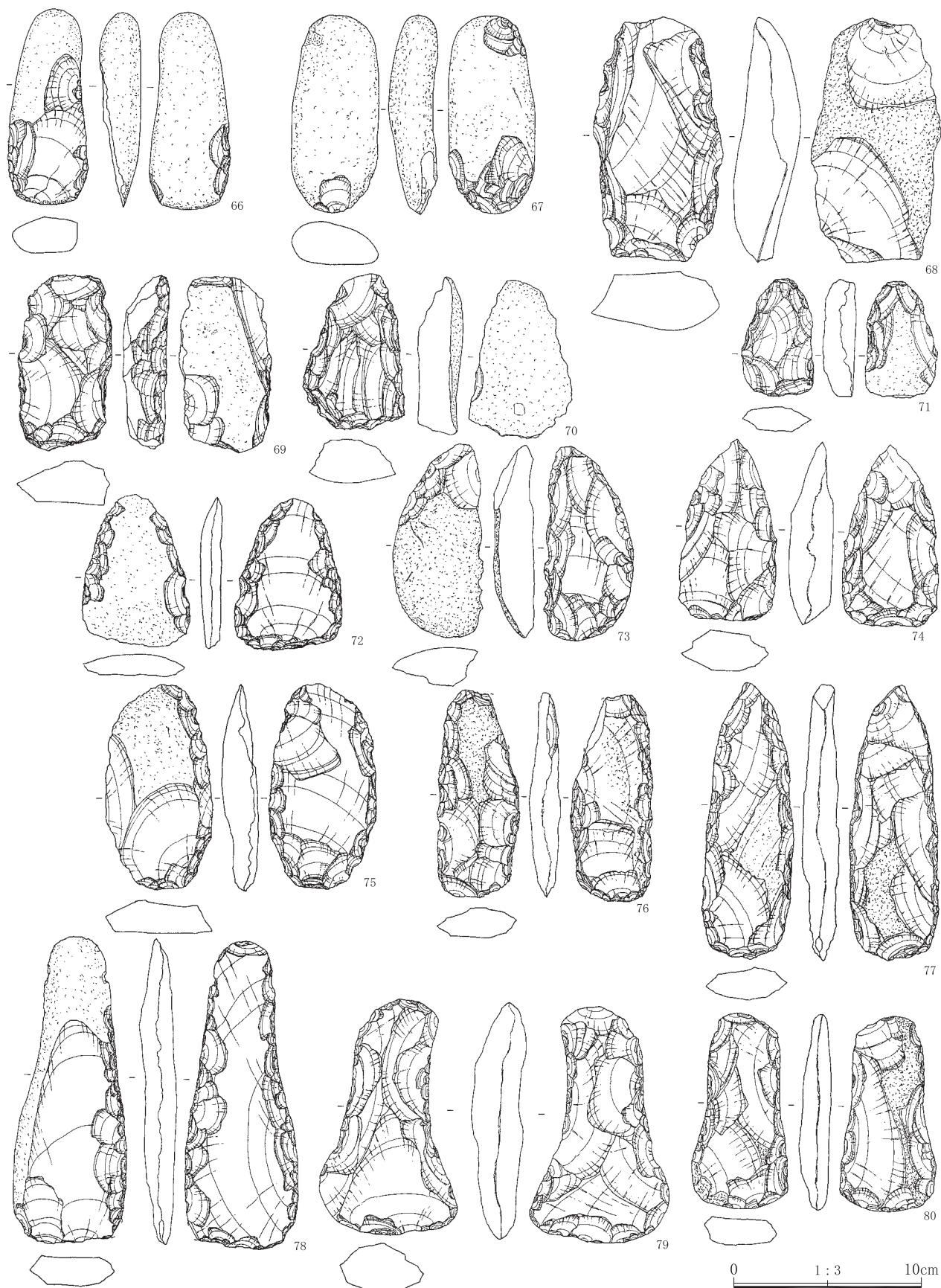
第 244 図 剥片の長・幅・重量の相関図



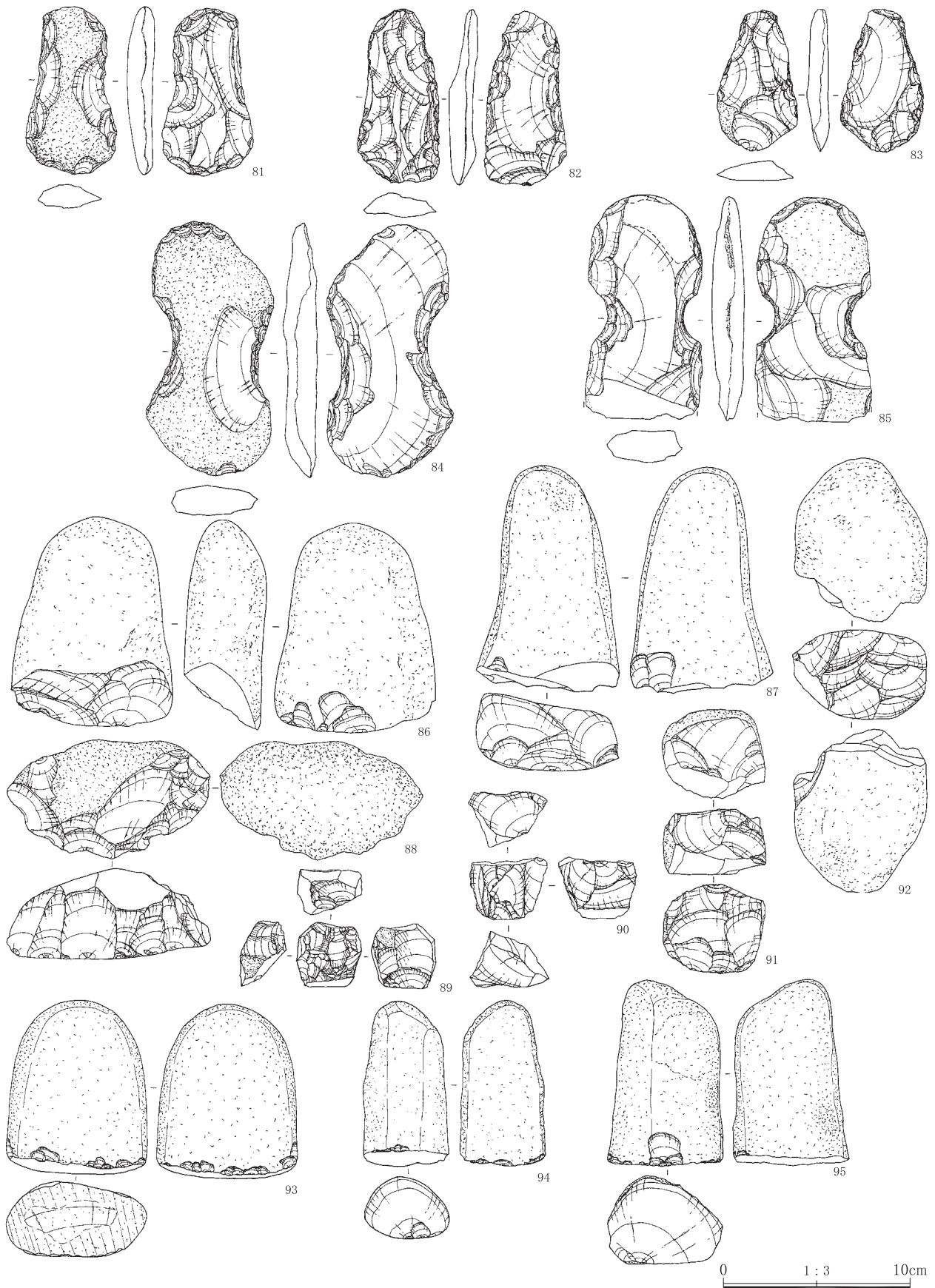
第 245 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (1)



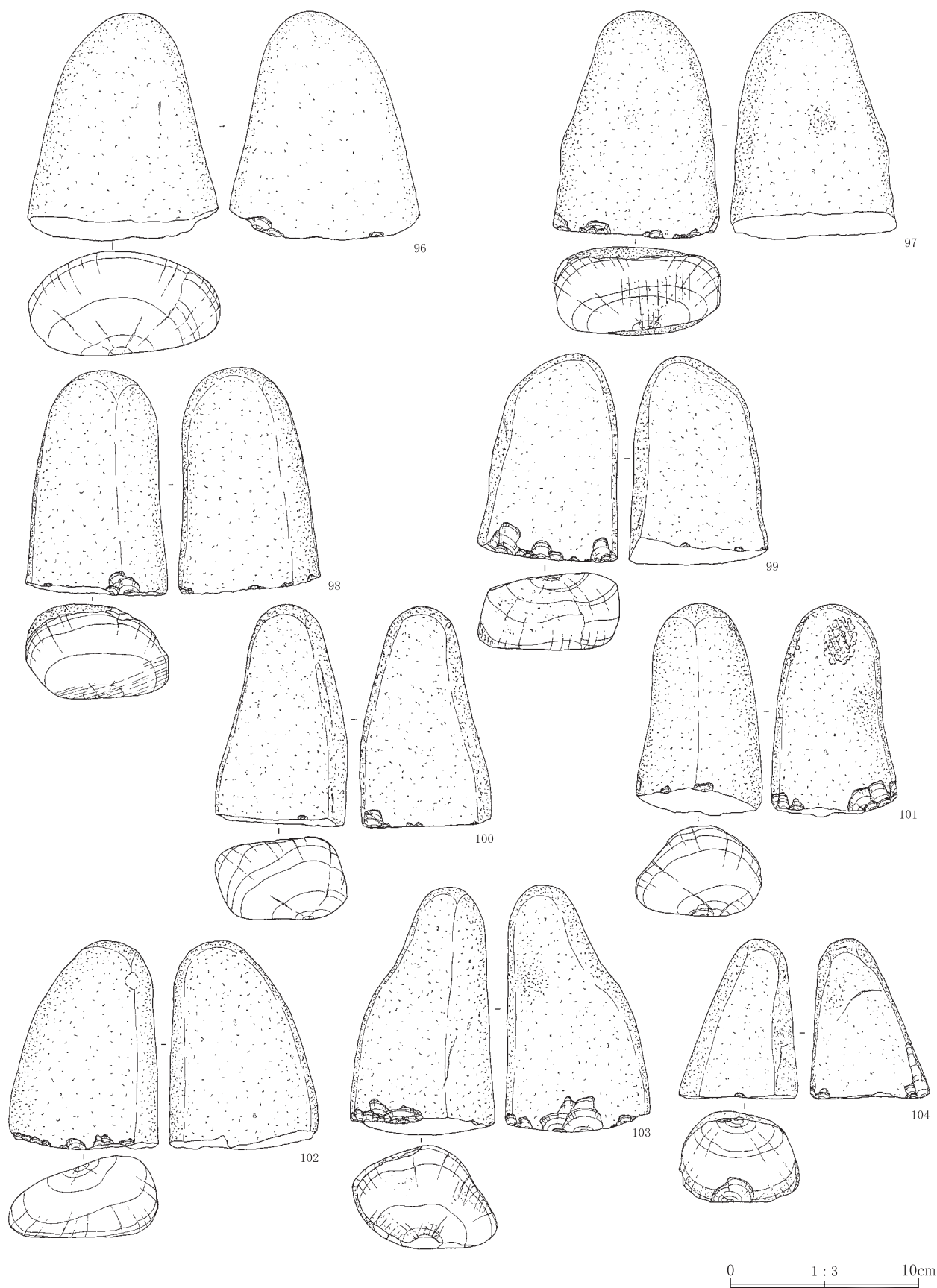
第 246 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (2)



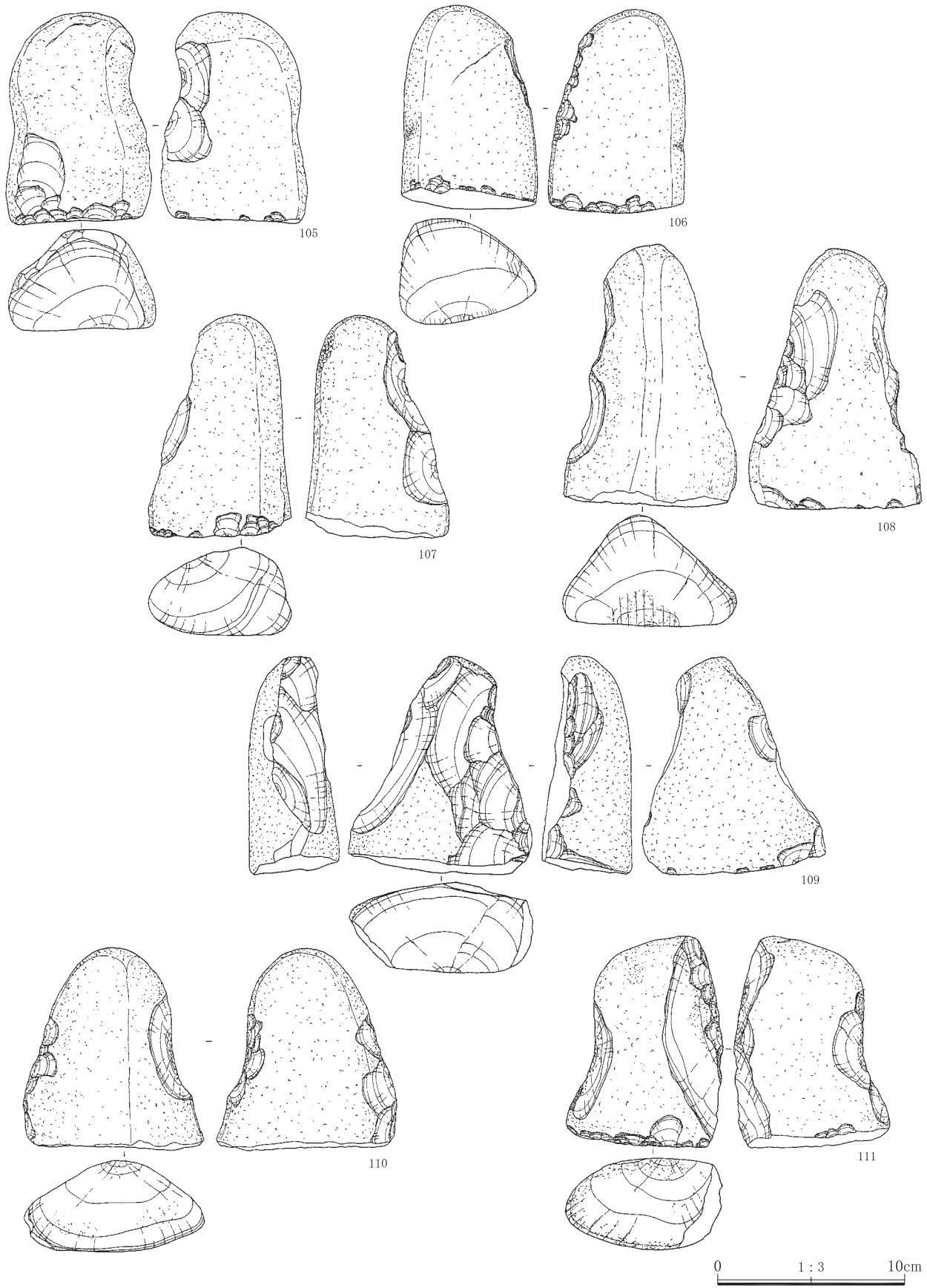
第 247 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (3)



第 248 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (4)



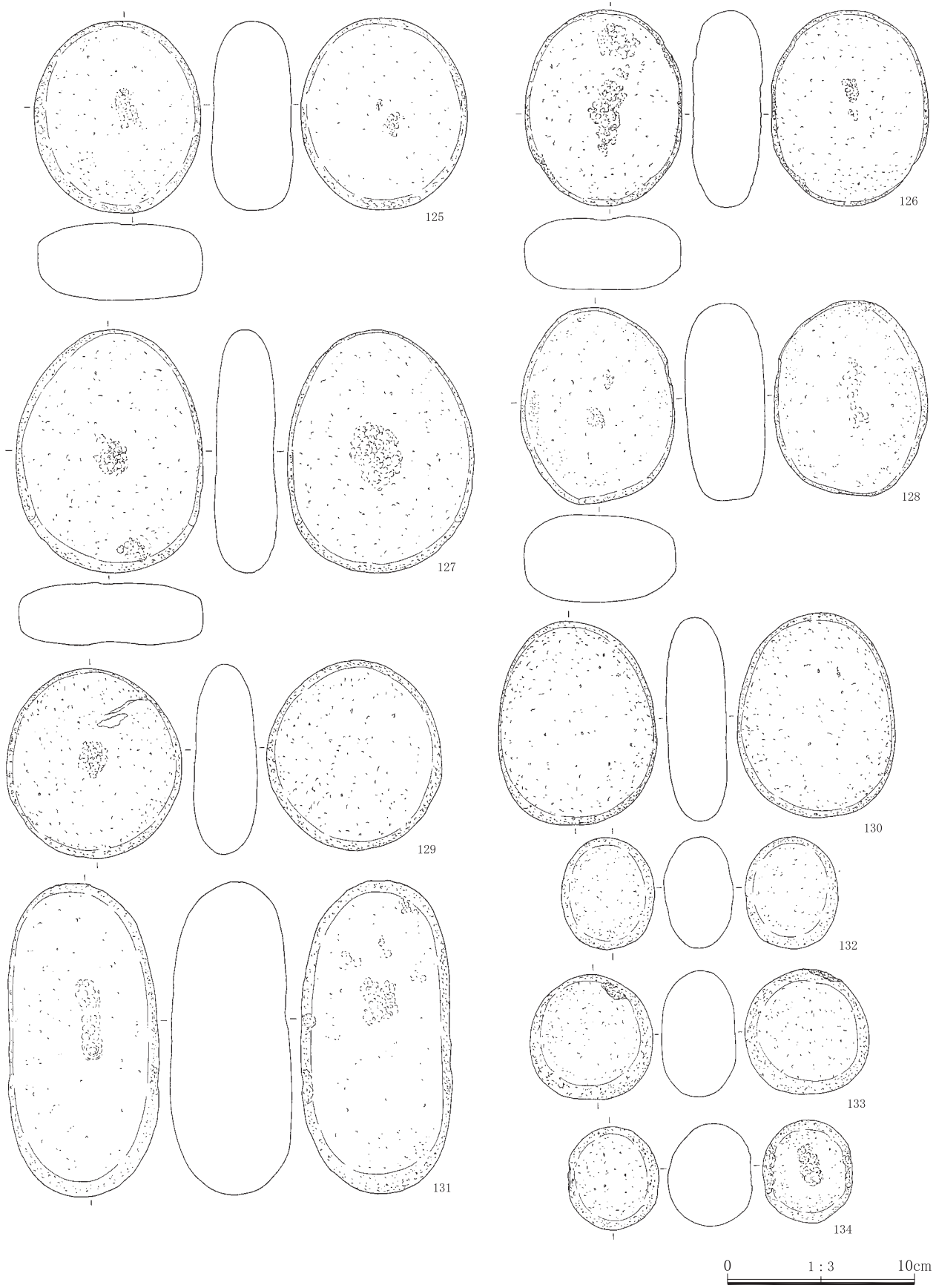
第 249 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (5)



第250図 2区～4区包含層出土の石器(6)



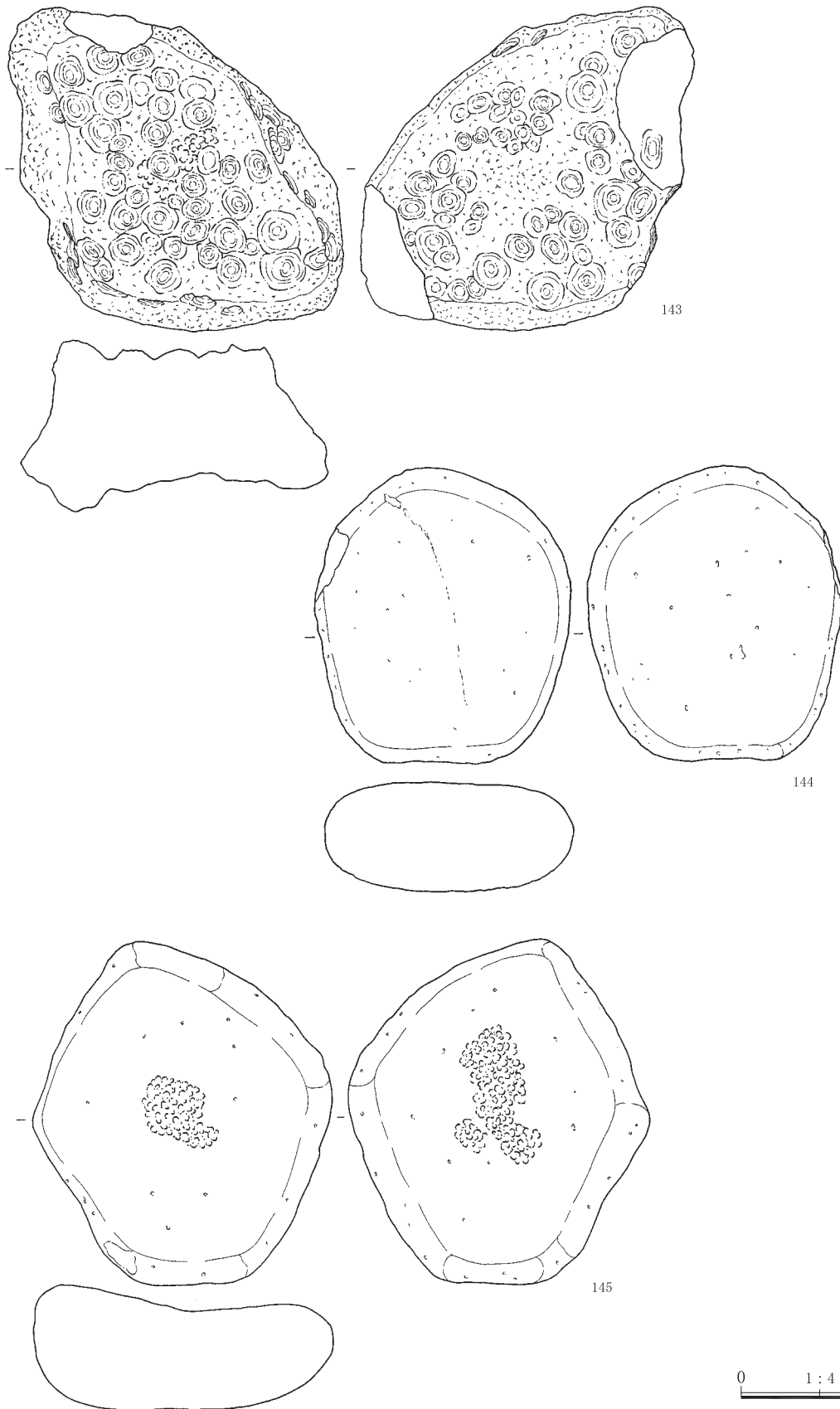
第 251 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (7)



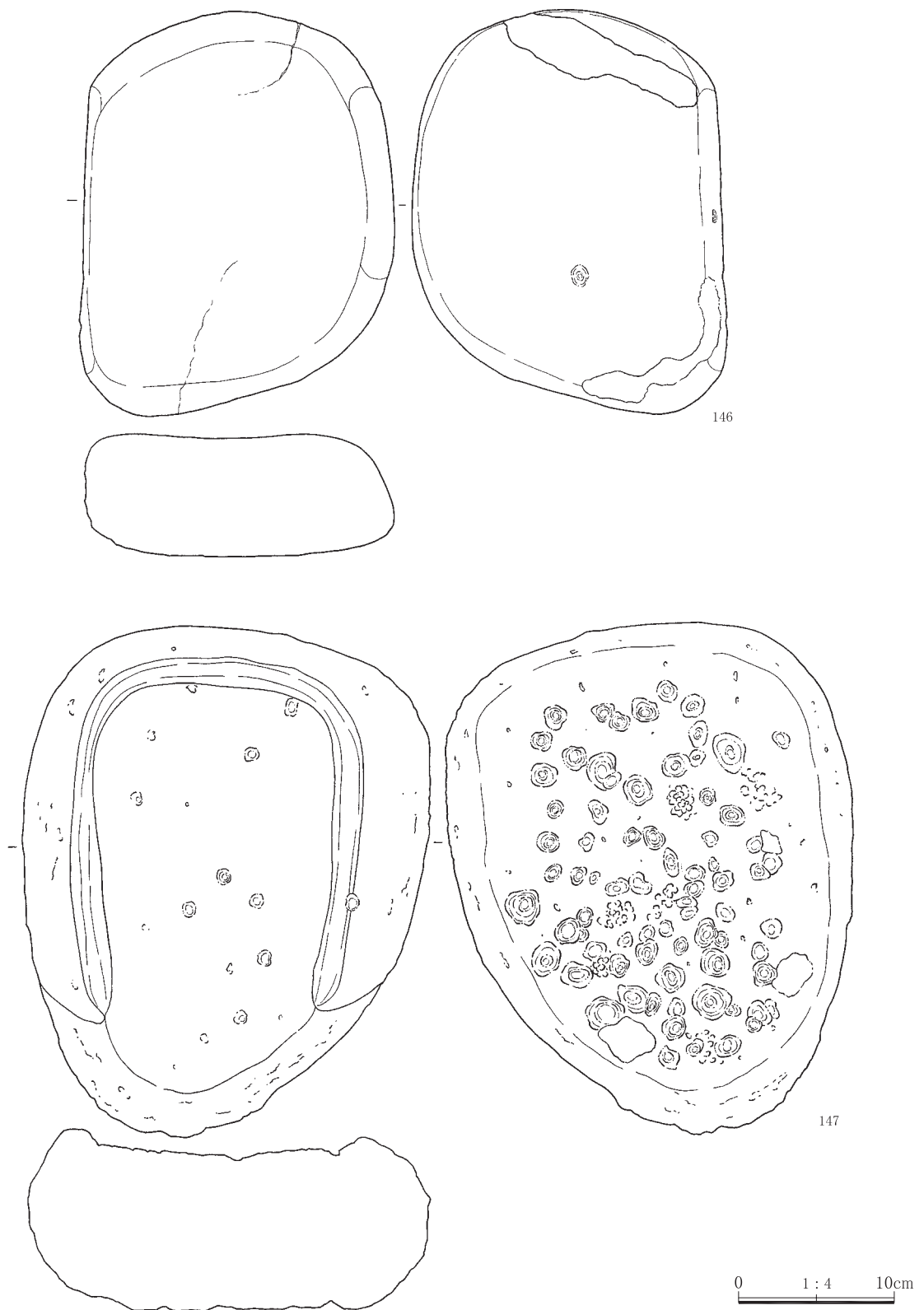
第 252 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (8)



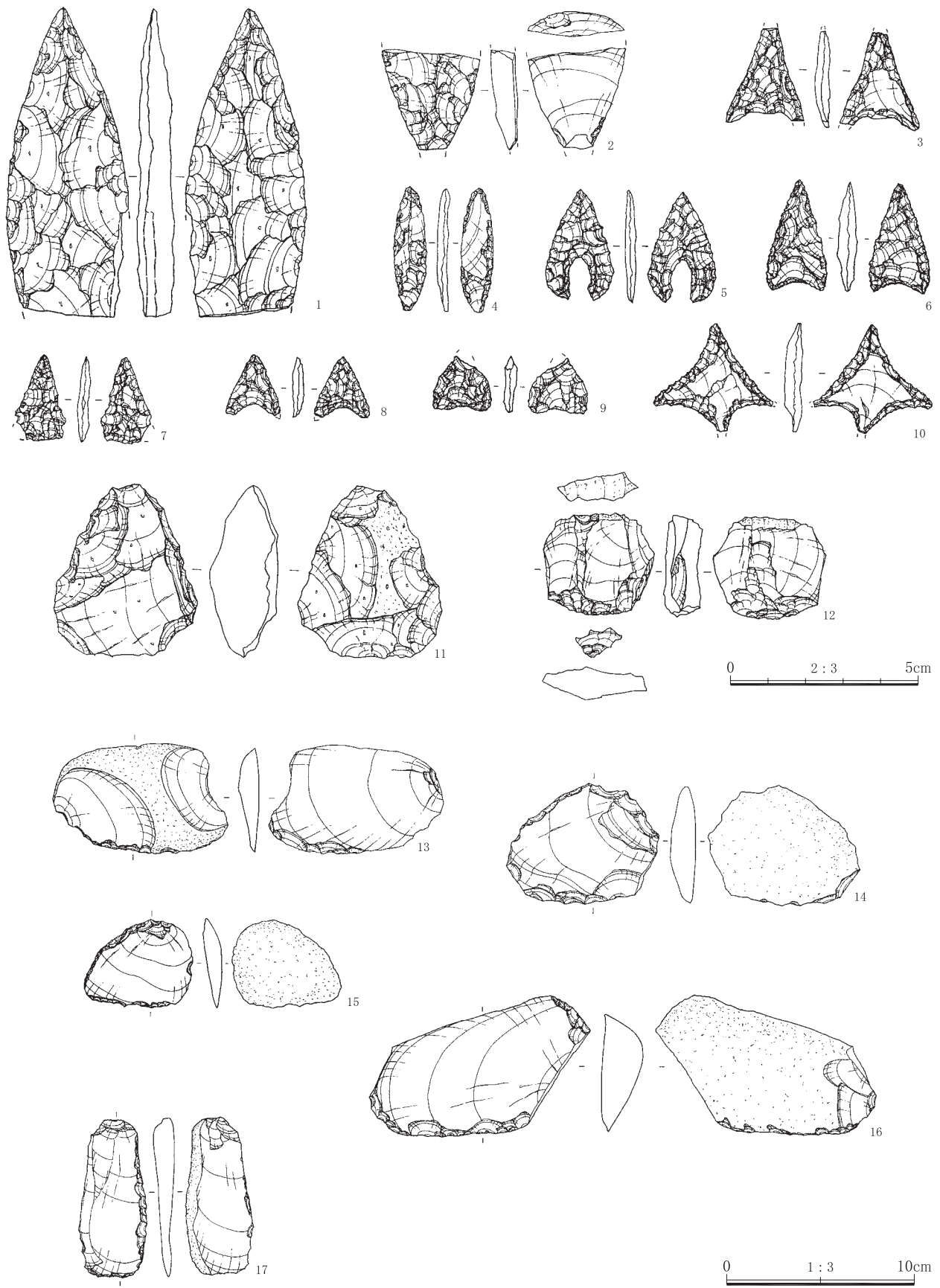
第 253 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (9)



第 254 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (10)



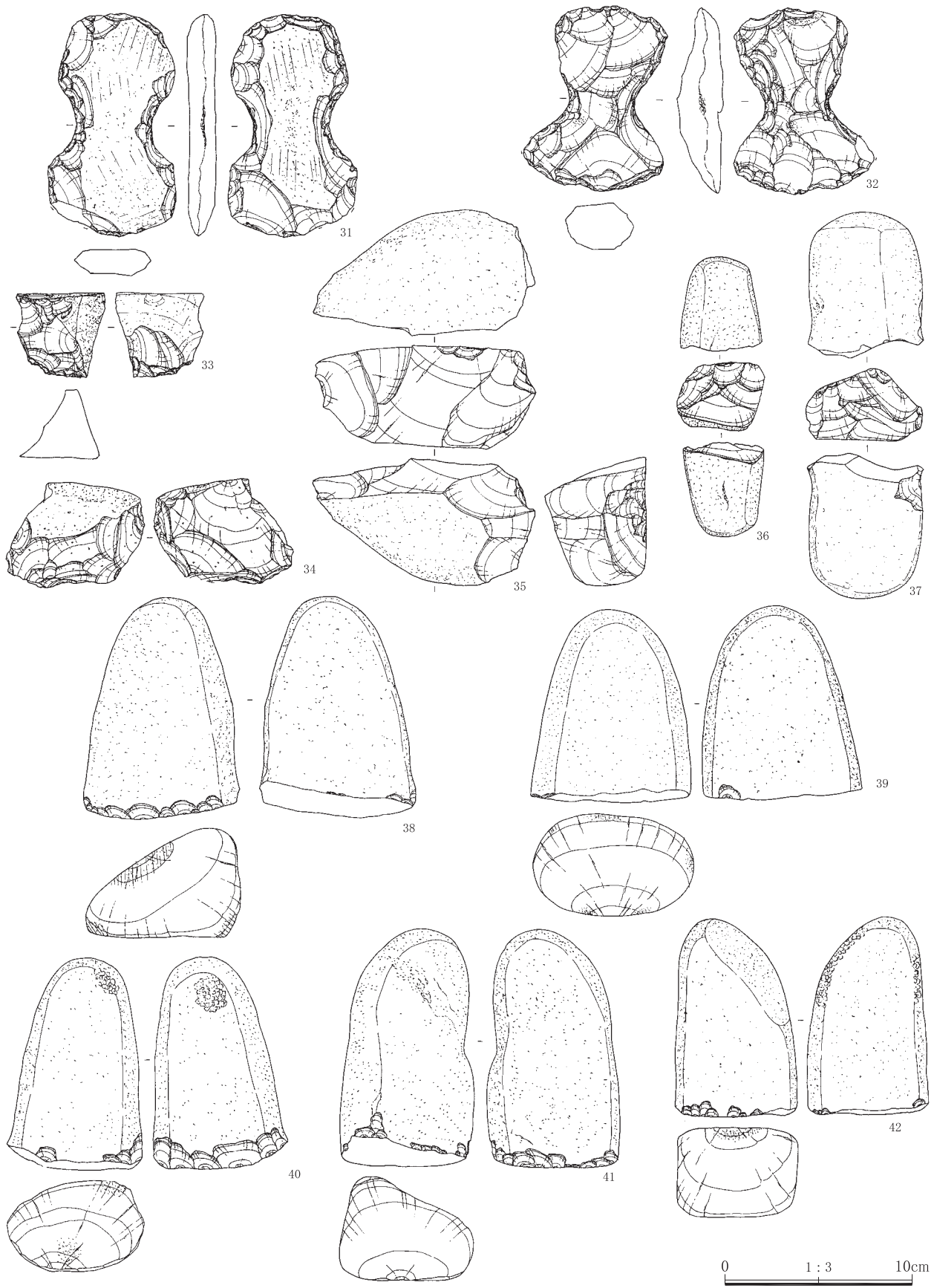
第 255 図 2 区～4 区包含層出土の石器 (11)



第 256 図 5 区・6 区包含層出土の石器 (1)



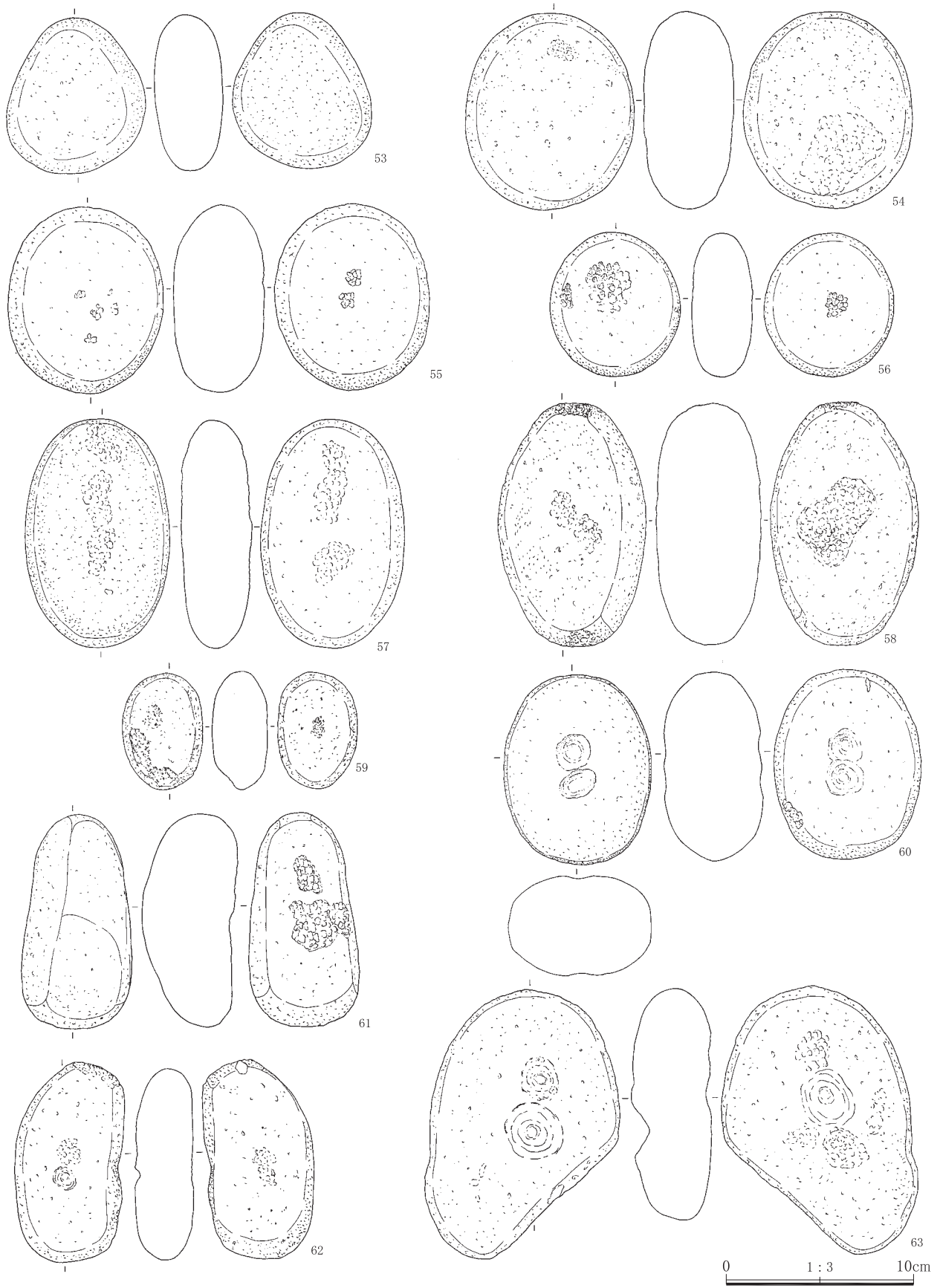
第 257 図 5 区・6 区包含層出土の石器 (2)



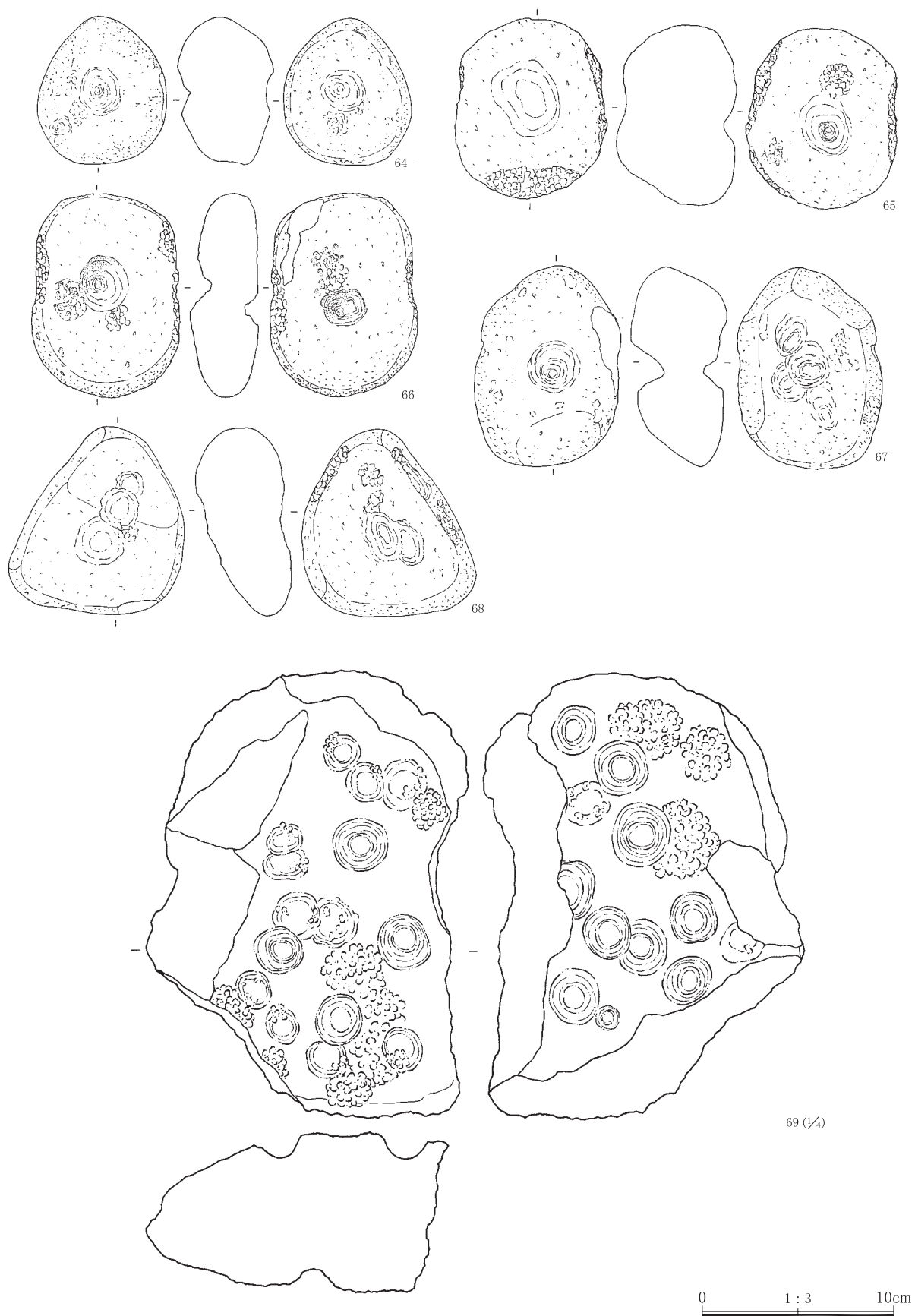
第 258 図 5 区・6 区包含層出土の石器 (3)



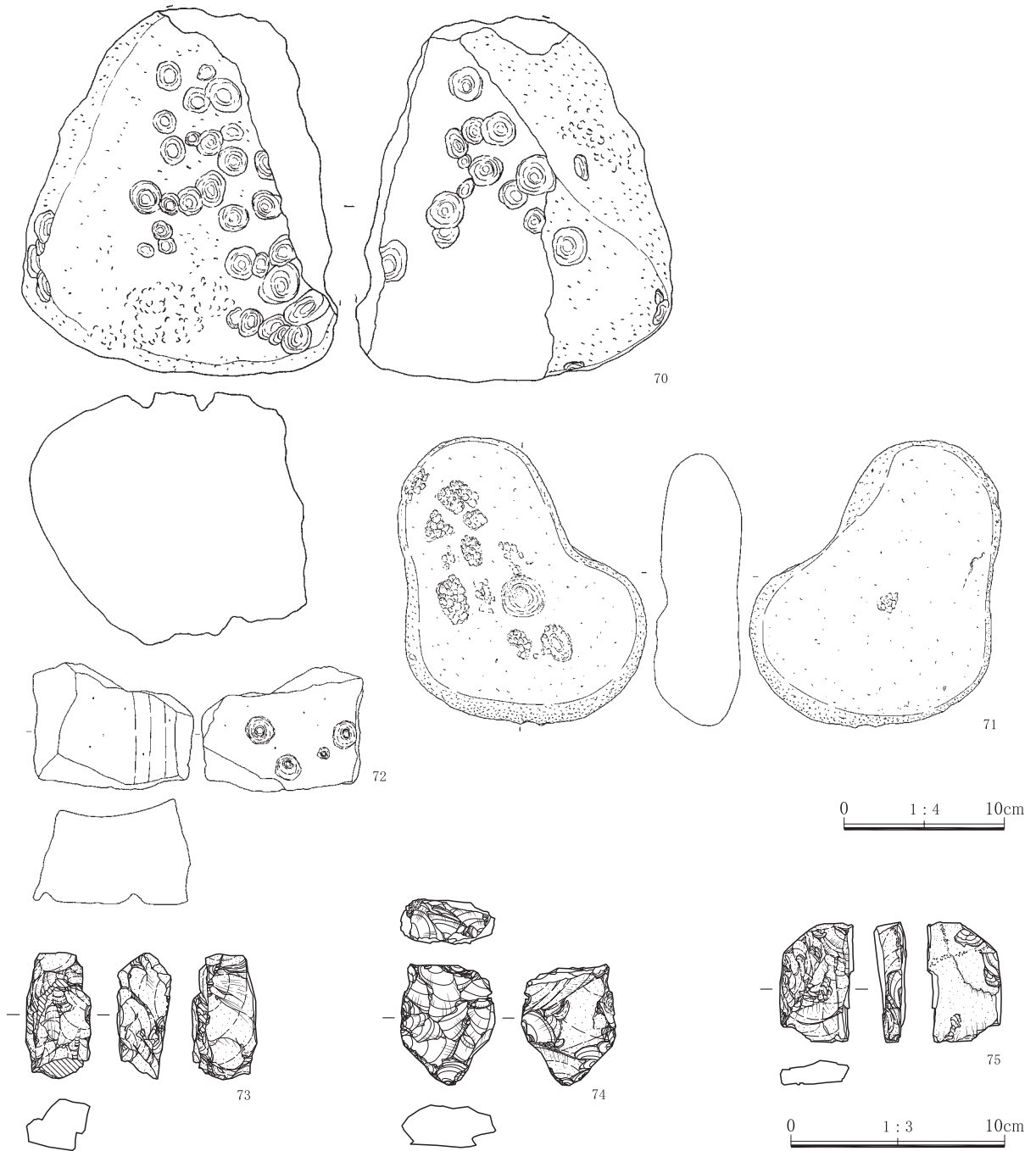
第 259 図 5 区・6 区包含層出土の石器 (4)



第260図 5区・6区包含層出土の石器(5)



第 261 図 5 区・6 区包含層出土の石器 (6)



第 262 図 5 区・6 区包含層出土の石器 (7)